THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年號

第三十一年第一號　第三百廿六號

正五年一月一日發行

全譯完成

我國飜譯界の記錄を破れる

空前の大事業完成す

泰西名著文庫

第三回

會員募集

詳細廣告は本誌中附廣告一の一より三までにあり、貴覽を請ふ

（規定及見本は御申越次第送呈）

東京市神田區小川町一番地

國民文庫刊行會

電話本局長七三二二番

振替口座東京一八五七二番

（前付の一）

代表的

名作選集

第十七編

はつ姿

小杉天外作

日本に於て最も早くゾラの自然主義と共鳴し最も早く自然主義の傾向を學んだのは小杉天外氏だ。而して此篇は其最初の作として、當時を騒がした歴史的名作である。僧となる麗しき少年と寄席藝人の群に身を投じた薄命の美少女の悲しい戀を描いたものだが、作者の主觀は飽迄も冷嚴透徹、滔々たる當時の同情文學から卓然として抽んじてゐる。

島村抱月
生田長江
相馬御風
中澤臨川
共編

■羽二重表紙
■特製極美本
■一冊参拾錢
■郵送料四錢

東京牛込矢來町
新潮社
振替東京一七四二

第十六編

別れた妻

近松秋江作

曾て「別れたる妻に送る手紙」として公にされた作。作者が半生の慘憺たる苦痛の實際經驗を如實に寫せる所の、生々しき實感味を有つ一の人間の證券である。或は纏綿の情を描き、或は悽愴の恨を描き、愛の喜び、愛の悲み、複雑なる男女愛情の眞髓を剔出してそこに赤裸々なる人間の姿を示す、最も異色ある作として當時を動かしたものである。

(既刊の分)

編	書名	著者
第一	牛肉と馬鈴薯	國木田獨歩
第二	坊ちやん	夏目漱石
第三	蒲團	田山花袋
第四	透谷選集	北村透谷
第五第六	春（上下二冊）	島崎藤村
第七	わが袖の記 たけくらべ	高山樗牛 樋口一葉
第八	爛れ	徳田秋聲
第九	平凡	二葉亭四迷
第十	高野聖	泉鏡花
十一	何處へ	正宗白鳥
十二	今戸心中	廣津柳浪
十三	耽溺	岩野泡鳴
十四	明治詩歌選	詩壇六名家
十五	戀ざめ	小栗風葉

■木版極彩色表紙■比類少き美本也■

鴨川情話

長田幹彥氏著

＝三版出來＝



竹久夢二氏裝畫

幹彥氏の濃艶にして纖麗なる作風は、最も京都を描くにふさへり。本書は新作の長篇「木屋町夜話」「竹生島」をはじめとして、最近の佳品を收むること八篇。作者が才華は今や此一卷に繚亂の極みをつくす。自然の美、人間の美、而して藝術の美、あらゆる美くしきものはこの一卷に凝れり。

定價七十五錢　送料八錢

祇園歌集

吉井　勇氏著

＝再版出來＝

「祇園」「嵐山」「島原」「宇治」「南地」の五篇に分ち、三百首を收む。概ね新作にかかる。京は詩の都、戀の都也。若く涙多き詩人が此地に於いて情熱の湧くがまゝに歌へる戀の歌のかず／＼、必ずや近時の詩壇稀有の異彩を以て稱せられん。裝畫の美しさは寔に空前也。

定價五十五錢　送料六錢

東京牛込矢來町　新潮社　振替東京一七四二

學習院教授兼陸軍大學教授

西洋

吾人は最早世界史に通せずして社會に立つこと能はず

如何なる書籍が吾人に最も切要なるかといはゞ、目下世界歷史の知識を最も平明懇切に供給する書籍ほど絶對緊要なるは無かるべし。何となれば吾人の耳目に觸るゝ大小各種の諸問題は世界歷史を基礎とするに非ざれば到底これを理解すべからざればなり。

▲最も手頃にして最も徹底せる世界歷史

本書は此最大切要なる知識を提供せん爲、瀨川博士が新たに稿を起し、拮据數年、始めて大成せられたるものにして、上下五千載、各國の興亡、民族の消長、文明の隆替其他苟も人類活動の重要事實は洩す所なく、最も手頃にして最も徹底せる最新完備の世界通史なり論述の體裁は評論よりも叙述を主

全三卷 一千五百頁四六判ポイント活字天金裝幀

極美各卷口繪三色版卷末索引及沿革圖十六葉附 ▲正價金四圓五拾錢

壹萬部限り特價提供

拂込規定 一月三十日まで随時拂込のこと

上卷金壹圓廿錢（着金即時送本）

中卷金壹圓卅錢（着金順送本）下卷壹圓卅錢

一月二十日より送金順送本 一時拂金參圓六拾錢（出來每送本）

送料各卷八錢臺樺鮮支十四錢づゝ

全部二十錢臺樺四十錢鮮支五十錢

（前付の圖）

發行所 東京神田 冨山房 振替一〇五

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

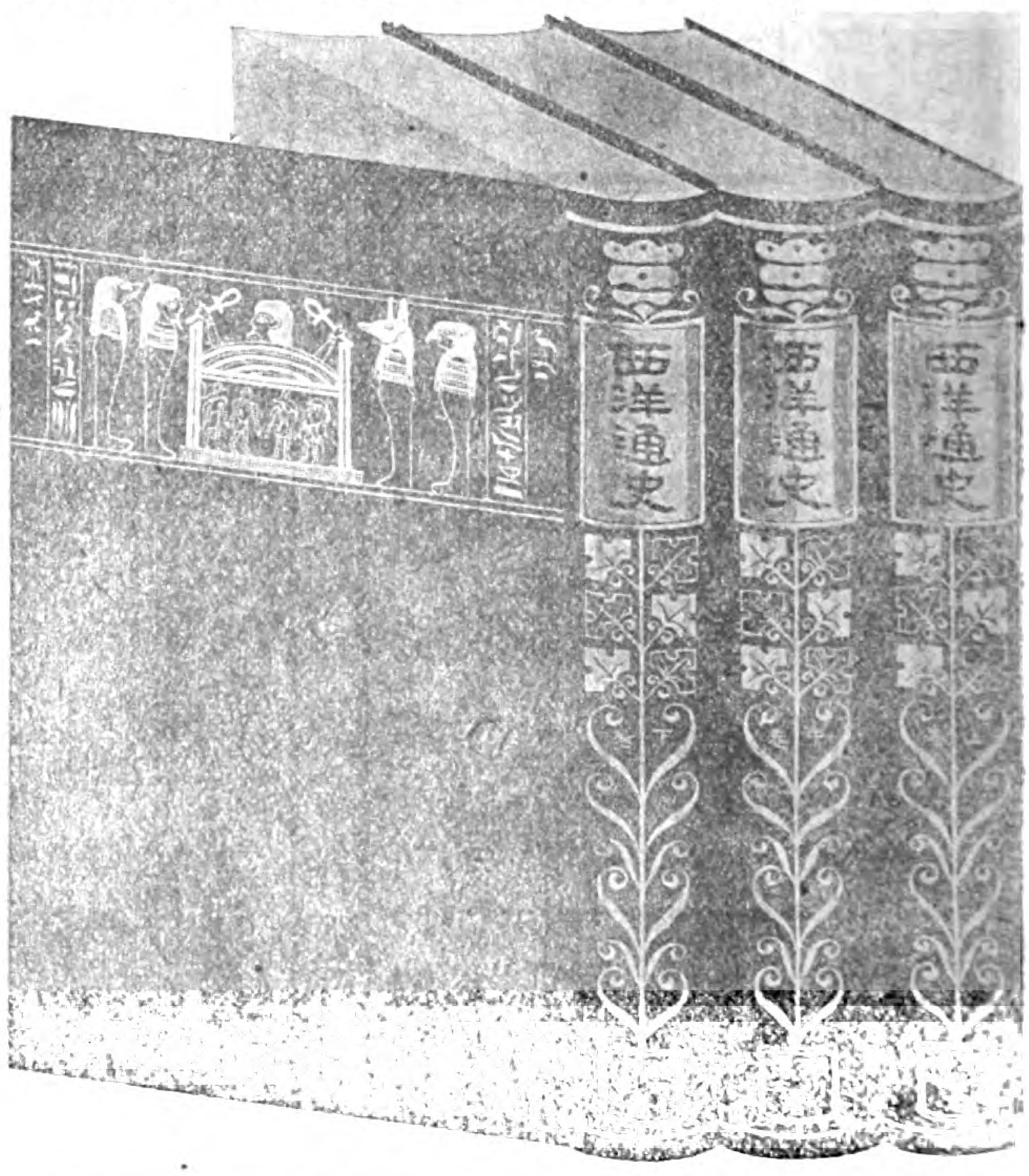
文學博士瀬川秀雄先生新著

通史

内容見本
無代進呈

とし、考證よりも說明を旨として最も多くの史實を知らしめ、極めて豊かなる趣味に飽かしめんことを期せり。上古より現代に至る因果の關係は固より、最近世界の發展及歐洲大戰亂の由來幷に其戰況に至る迄、一讀直ちに世界の大勢に通ぜしめ、西力東漸、植民政策、商工業の發達、經濟事情等に就きても、麻姑痒きを掻くが如く、最後に帝國の世界に於ける位置を論じて國民の覺醒を促したり。之を要するに博士が畢生の目的たる世界史の知識普及の爲、深奥の蘊蓄と犀利の識見とを傾注したるものなれば史實所論の正確適切にして學生の最良參考書たるは勿論、繁簡中を得て、文章平易流暢、如何なる複雜の事件も歷々掌を指すが如くなれば、繁劇なる社會に活動する一般人士の讀破には絕好無比なる讀物として推奬すべきものなるを信ず。

全部箔（總　[illegible]　横　厚）



(前付の五)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

マスター、オヴ、アーツ
早稻田大學女子大學教授　岸本能武太著

岡田式靜坐三年

本書は著者が靜坐三年にして驚異すべき心身の健康と活力とを獲得したる經驗録にして同時に靜坐法の理論書也實行者の心得べき諸項は洩さず記述しあれば靜坐法獨習書として此右に出づる者なし。

四六判五百頁
寫眞木版各十數個入
總クロース美裝全一冊
定價金壹圓
送料金八錢

新春文壇の驚異

▲狂犬は此の俗惡世界を見て何と吠えたるか??

▲白村氏の深刻なる此の奇文を通じて其の吠聲を聞け!!

添ふるに泰西名著飜譯數篇を以てす

厨川白村
處女作

狂犬

■裝幀奇拔■
■四六小形判三百餘頁■
■定價金七十五錢■
■送料金八錢■

東京京橋區銀座一丁目廿二番地　**大日本圖書株式會社**　郵便振替口座東京二一九

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

七千萬同胞悉く必讀

東京帝國大學文科大學教授 文學博士 芳賀矢一先生著

最新刊

戰爭と國民性

四六判百五十頁 定價金五十錢 郵税金六錢

世界の大戰亂は益〻紛糾して、何の日に干戈を戢むべきか。正に是國民の大に自省自覺すべき秋なり。本書は芳賀博士が博士一流の——輕快流暢の口語文を以て、戰爭に關する我が國民性を叙述し、過去現在に於ける國民的精神の發達由來を語り、更に將來の覺悟を論ぜられたるものにして、引例豐富、趣味饒多、教育家、學生の歡迎を受くべきは勿論、軍隊教育に向つては唯一無二の指南針たるべし。

芳賀博士著

第十二版

國民性十論

國民特有の性質を神話、文學、漢學、法律、美術の各方面より縱橫に論斷せるものは本書なり。着想奇警、引證的確、よく我國體の精華を發揮し、よく國民の眞相を暴露す。森嚴壯重の論あり、滑稽諧謔の談あり。何人に向つても無限の快味を與ふ。眞に是青年必讀の書疑もなく國民の必携の書なり。

四六判美本二百七十頁 定價金七十錢 郵税六錢

忽ち三版

筆のまにまに

博士が年來の雜文を集めたるもの紀行文あり議論文もあり講演もあり談話もあり。學術常識過去現代、眞面目滑稽多方面の題材の上に多方面の趣味雲の如く湧き來る。博士の面目卷中に躍動して一度之を繙かば何人も卷を措く能はず。

袖珍頗美本四百六十頁 定價金壹圓 郵税八錢

東京神田 冨山房 振替五〇一 出版圖書目錄進呈 往復葉書申込次第

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

讀者の激增せる—

日本一の時事新報

今や我が時事新報の發行部數は創刊以來のレコードを示し、此增加は尚ほ日々驚くべき比率を以て進みつゝあり

□之れ何故ぞ？

「理由は極めて簡單なり

□我國に大影響ある世界大戰の成行に就き世間は信頼すべき新聞を要する爲

□近時の頻繁なる政變は益々獨立不羈公平無私の新聞に依らざる可らざる爲

□婦人小兒にも有益に且益々面白くなり一般家庭に非常なる歡迎を受くる爲

□趣味多き讀物に美麗なる大繪附錄に常に機宜を得て天下の稱贊を博する爲

新年大繪附錄『春の光』

世界に隠れなき佛國の大家ラファエルコラン氏筆稀世の名畫

氣品ある美人の半身像

アートタイプ原色版、新聞一頁大、用紙上等、額面に最好適

時事新報二ケ月以上讀者に限り無料進呈し一部賣りは絕對謝絕

定價（前金）一ケ月五十錢 六ケ月二圓八十五錢 一ケ年五圓六十錢

郵稅（一ケ月）本邦及支那拾五錢 其他海外の郵稅は本紙を見よ

東京京橋區南鍋町 時事新報社

各地に取次店あり

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

紳士史家必ず逸す可らず

東京帝國大學文科大學教授 文學博士 市村瓚次郎先生著

最新刊

支那論集

支那は東洋のスフィンクスなり。由來支那を論ずるの書汗牛充棟も啻ならざれども將來を豫言したるものに、一も言ひ當てたるものなし。特り博士の先見に至りては一々的中して宛も鏡に懸けて見るが如し。夫の革命の起るべき事を遠き未然に於て論斷し、袁が皇帝たる野心あることを大總統登職當時に夙くも豫言なしたるは實に博士にして。其他支那に關する博士の所論凡て犀利を極めざるなし。本書はこの貴重なる論文の粹を蒐めたるものにして、苟も支那の將來に着眼し、東洋の情勢、世界の大局に留意するの士は必ず一讀せざるべからざる名著なり。

菊判美裝全一冊 紙數三百三十頁
定價金壹圓廿錢
郵稅八錢 臺、樺、鮮、支各十二錢

京都帝國大學史學研究會編纂

續史的研究

菊判四百六十頁
定價金壹圓四拾錢
郵稅各地十二錢

京都は、千有餘年の帝都山紫水明の境、椽橋、源平、足利、豐織の跡、到る處として史上の回顧を催さゞるはなし。この境に在りて斯學專一の大家、篤學者の深くして新しき最も趣味ある研究に成りたるものは本書なり。苟くも史學を眞面目に研究せんとするものは、一度本書を讀破せざるべからず。曩に史的研究を發行するや、斯學闡明の最好著として盛なる歡迎を受け、良好評天下に喧傳せり。今又續篇成る。研究愈々源窽にして論斷益々剴切なり。願はくは江湖の諸彥、幸に愛讀の榮を賜はらんことを

史的研究

▲菊判美裝紙數四百餘頁
定價金壹圓參拾錢
郵稅八錢 臺、樺、鮮、支十錢

發賣元 東京神田 富山房 振替一〇五
出版圖書目錄進呈（往復葉書申込次第）

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

謹賀新年

大正五年一月元旦

東京市神田區表神保町三番地

合資會社 東京堂書店

電話本局 一二三番 (特)二四八番 一二九三番 二五五二番 (特)五六一番

振替東京二七〇番

電信略號〇ト

出荷略號(ト)

賀正

書籍雜誌

卸賣專業

東海堂書店

東京市銀座三丁目

電話京橋 (特)三四二〇 三四二一 三七九八

振替口座東京八六七

電信略號・荷印〇カ

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨を御附記乞ふ

雄辯新年號

■人生と文學趣味……高師教授 澤田藤十

■無用な地方色の養成……帝大助教授 三潴信三

■ベルグソンの戰爭及現代文明觀……中澤臨川

■明治天皇は神の御出現なり……中將 長岡外史

■世道人心の荒廢を如何にす可き……陸軍教授 友田宜剛

■華山代りて淸水氏に答ふ……杉山如泥

中島德藏

▼英雄の觀たる英雄（百五十餘頁の長編）

▼英國議會の雄辯（五十餘頁の雄辯）

東都四大學辯士總まくり

▼源氏物語論……川島雄一郎

▼白旗城……平井晩村

▼國民の自覺……下田次郎

▼アルプスと雄辯……橘刺紅

▼御製敎育……阪谷芳郎

▼未來ある政治家……柳下魚

▼ハトリツクヘンリー……井上彰

▼酒……若山牧水

▼春怨……尾張穗草

▼雄辯術……大澤一六

▼ピラミツトの前……大内恒有

■政治家の德義……司法大臣 尾崎行雄

■海洋政策の第一步……竹越與三郎

■歐洲戰爭と社會問題……早大教授 安部磯雄

■松島の曙……早大教授 永井柳太郎

■諸君の時代……法學士 青木得三

■民族の生殖……大住嘯風

全六百廿餘頁本號に限り

定價六十五錢（郵稅四錢半）

東京本鄕駒込坂下 大日本雄辯會 振替東京三九三〇

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第卅一年一月號目次

▲公論

▲説苑

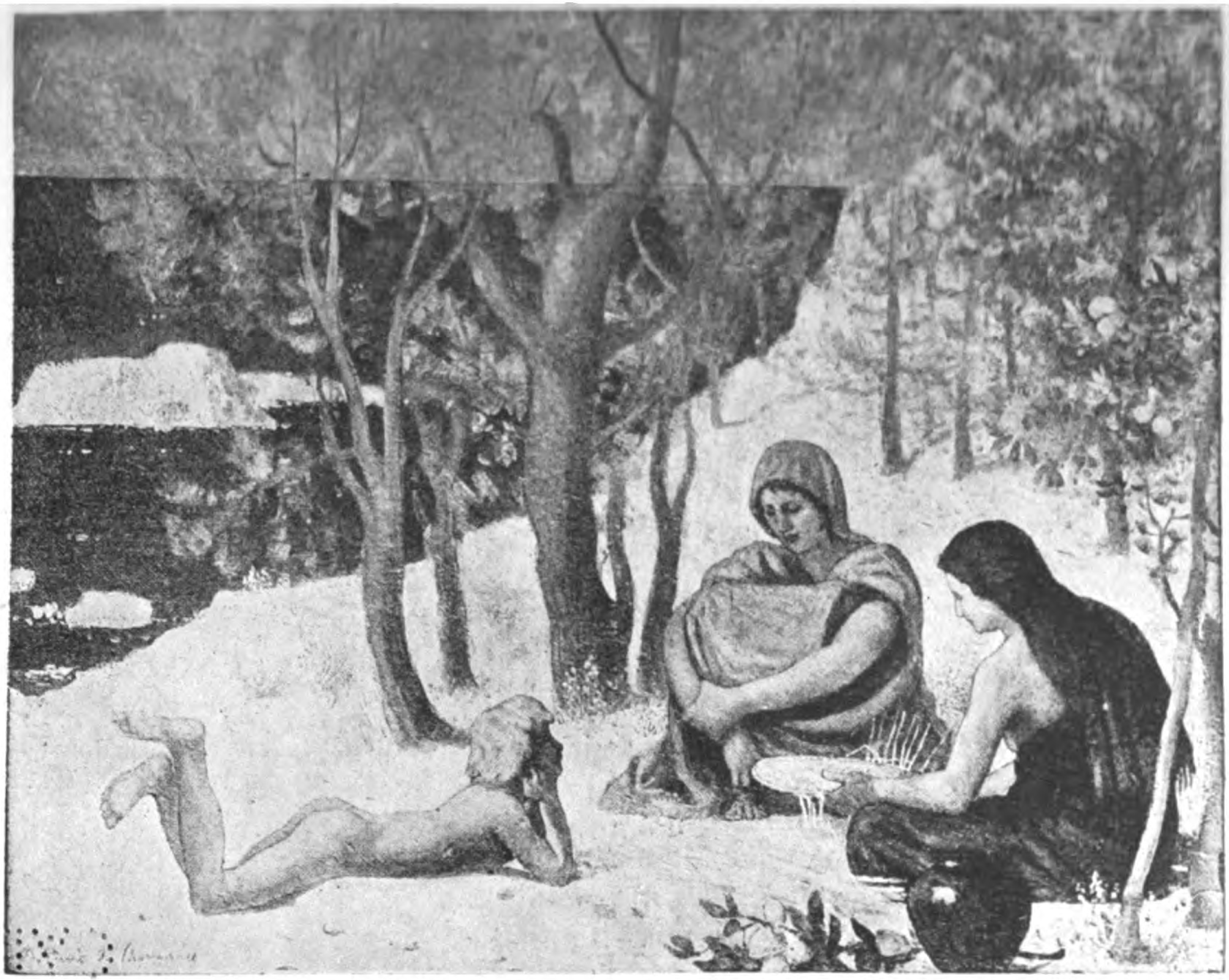
▲評論

《創作》



営業品概目
○懐中時計　各種
○掛置時計　各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帯品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話(長)新橋 二一〇三 一一〇四
振替口座 七八〇七

PIERRE PUVIS DE CHAVANNES



Marseille, Greek Colony

大正五年を迎ふ

大正の御代に入りて以來內外頗る多事、殊に第二諒闇の御不幸さへありて即位の大典を延期させられしも、遂に昨秋に至り天運人事相待ちて芽出度大禮を擧させられ、加ふるに　陛下還幸の後觀兵式の當日を以て第四皇子の御生誕あり、申すも畏けれど我　帝室の隆盛以て國家の前途をトするに足れり、而して此時更に大正第五の新年を迎ふ、吾人豈に讀者諸君と共に　聖壽の無疆、國家の隆運を大に祝せざらんや、

大凡世事の複雜なる舊年を去り新年に入りたればとて萬事悉く喜ぶべく祝ふべきには非ず、內外政務の行懸は依然として持續し、在朝者の煩勞、在野黨の不平も亦依然として存せり、大隈內閣は果たして國論の反對に打勝ち其地位を保つを得べきや或は事意の如くならず新年早々瓦解の運命に接すべきや否や、歐洲戰局の開展如何、獨墺遂に志を得て覇を中原に稱すべきや、又は聯合五國最終の勝利を得て軍國主義の破滅を見るべきや否や、殊に平和克復後の極東の形勢如何、支那帝政の前途果して無事なるべき、再び四百餘州を擧げて動亂の巷と化すべき恐なきか、誰か新年劈頭に立ち此種の問題の念頭に浮ぶを禁ずるを得んや、然れども『希望は永久に人の胸底に湧く』、吾人は我內政の紛紜も速に首尾よく落着し、本年中には歐洲の兵塵も收まり、極東亦た平和の恩惠に浴して、帝國の威名益々宇內に稱揚せられんことを祈る、此祈りと希望を懷きて吾人は大に新年を祝せんと欲するなり、

中央公論



新年號
第卅一年第一號
第三百二十六號

精神界の大正維新

（一）獨逸を引照す

ビスマークは獨逸の國家を偉大ならしめたれど其個人を縮小せりとは識者の論評なり、獨逸統一の大業成りてより玆に殆んと五十年、今や獨帝は世界の列强を相手に乾坤一擲の大戰爭に從事中たり、國家としての現在の獨逸は敵なから偏へに威服の外なしと雖も獨逸人個人としては多くは是れガイゼルの鼻息を伺ふに汲々たる利名に狂奔するの徒のみ、其學者中復たゴエーテなく、シルレルなく、フイフテなく、其政治家中スタインなく、シャーンホルストなく、ハルデンブルクなし、其學者と稱するもの多くはカイゼルの命を奉し國家の爲めに其研究の結果を呈供せんとするに過ぎざるもの、其政治家なるものは

即ち是れカイゼルの秘書役たるに外ならず、獨逸人民は宛も一大軍隊の如く、唯だカイゼルの命の儘に其世界政策を奉行すれば能事了すとせば今日の獨逸の國情は殆んど理想に近しと謂ふべきに似たり、眞理の研究に專心し世間の木鐸たるべき學者にして多く曲學阿世を以て終らんとする如き決して國家の慶事に非ず、又た堂々たる帝國大宰相の身を以て國際の時變に順應すべき機會を捉ふること能はず慢然强大の兵力を擁して列强を威嚇せんとし、終に今次の大戰亂を誘致するに至れるが如き決して其責任を解するものと謂ふ可らず、其他實業界に於ては造兵業に於けるクルップの如き英才を出だし、總じて工藝の發達は世界其比を見ずとするも、獨逸の人心は漸く唯物化し來りて殆んど崇高偉大の傾仰すべきもの地を掃はんとするに似たり、假令今次大戰の結果獨逸の敗屈に終らず寧ろ勝敗未決を以て互角引分けに歸するとするも其結果は決して獨逸の爲めに慶賀すべきことに非ず、況んや其敗辱に終るが如きに於てをや、其罪の歸する處獨逸に一人の人物なく、カイゼルを諫めて今日の慘禍に至る途より救ふ能はざりしに在り、蓋し近代五六十年間獨逸人民は頻りに國家的成功に醉ひ、皇帝を以て神に代へ、名利を以て正義に換へ、上下交々利名を征して其國危からんとするものに非ずや、最近の學者中に在りてもオイケン、ハルナックの徒の如き好學の士と謂ふ可らざるに非ずと雖も彼等が軍國主義の獨逸を以て世界文明の先達者と做し之に刃向ふものを呼びて文明の賊と做すに至りては其愚實に笑ふに堪へたり、獨佛戰爭の前後の獨逸は士氣剛健、之を四隣の國風に比較するに同日に論ず可らざるものあり、殊に佛國がナポレオン三世の權謀に籠蓋せられ人情日に淫靡浮薄を極めたると對照せば、此公をして「我等獨逸人は神

を恐る、其他何ものをも恐れず」と云はしめしも誇張の言と云ふ可らず、實に五十年前の獨佛戰爭に際しては正義獨逸に在りき、然れども今日の獨逸人はカイゼルを畏る他に何物も此世に恐るものなしと云ふが如きの人情の下にあり、强大世界第一の陸軍を後援とするカイゼルの一命下ると共に擧國一致して軍務に服するの一事は頗る感心すべきに似たれども、蒙古人種が成吉汗の一令の下に水火を辭せず世界を横行せしと果して何の擇ぶ處かあらん、其弊の及ぶ所、獨逸に人物なく、カイゼルをして獨り社稷を憂へしむるに至るの狀察す可らずや、更に戰陣の事情に關し現在の獨逸軍を以て七十年戰役のそれに比較せんに、兵數に於て今日は前日に十倍し且つ軍器の精鋭、軍隊組織の整頓等亦た遙に前日に優るものありと雖も軍人間士氣の一點に至りては遙かに前日に及ばざるものあるに似たり、輓近の獨逸軍隊が著るしく軍紀の弛廢せるものゝ如く、昨秋開戰以來各方面に於ける奪掠其他犯罪の頻繁なる殊にヴェルツーン附近に於ける皇太子の內命を帶べりと稱せらるゝ奪掠行爲の如き頗る世界の識者を顰縮せしむるものあり、之に反して前年の獨佛役に際しては獨人の節制比較的に稱するに足るものあり、當時ヴェルサイユの舊王宮に滯在せる比公の如き其飲料の葡萄酒類を悉く本國より取寄せて敵の分捕品を消費せざるを誇りしことあり、又た直接士氣の一斑として云ふには非ざるも、前回の役には遂に白耳義の中立を犯すに至らず能く中立國の權義を認めて國際條約の神聖を尊重したるも、今次の戰爭に於ては其開戰第一の行爲は即ち白耳義の中立を侵犯するに在りしことを記せざる可らず、世間一部の論者は英國が開戰を宣するに際し白耳義中立問題を以て宛も試驗的事件と做し、獨逸が其中立尊重を保證せざるを以て宣戰

の主因となせしを怪しむ、寧ろ是れ一種の辭柄を構ふるに過ぎずと云ふものなきに非ざれども、國際條約の神聖は即ち國内に於て法律の神聖なるが如し、殊に列强に保證されたる小國の權利に至りて最も之を尊重せざる可らず、若しも之を尊重せず强國の必要の前には條約なく中立の權義なしと云ふに於ては是れ根本に文明立國の基礎を破壞するものに非ずして何ぞや、吾人は茲に至りて益々比公の深謀遠慮を稱し現皇帝の驕氣侮慢遂に公法の根本を犯して今日の慘禍を招くに至れるを歎ぜずんばあらず、是れ即ち多年の成功に醉ひ氣隨氣儘を世界に立通ほさんとする心意の荒廢を示すものに非ずや、此等の數例を以てするも獨逸魂の墮落歷々蔽ふ可らずと謂ふべし。

(二) 我國情獨逸に髣髴たり

吾人が前段獨逸を論ずるは他なし其興廢隆替の跡に就き最も例證に富めるを見ればなり、抑も獨逸統一の大業成りしは宛も我が王政維新と相前後し其雲蒸龍變人材堀起の狀亦た頗る相似たるものあり、而して我邦維新前後の人材を以て今日の所謂人物に比較するに其懸隔の遠きに獨逸に於ける前後人材の對照よりも更に甚だしきものあり、獨逸最近開戰當時の參謀總長モルトケ將軍を以て七十年役の老モルトケ大將に比較し宰相ベートマン・ホルウエッヒを以て比公に比較し巧慧多能の現皇帝を以て重厚圓熟の維廉一世と比較すれば時代の推移自ら明なり、然れども我邦現在の所謂政治家を以て吉田松陰、坂本龍馬、木戶、大久保、西鄕に比較せば如何、世界的知識を有するの一事に於ては今代の人物素より維新前後の人物に優るものあるべしと雖も、此一事を除きて外は、其膽氣に於て其愛國の至誠に於て到底比較

の限に非ず、過日尾崎行雄氏は木戸松菊の韻に和して述懷の詩を詠し之を知友に示せりと聞けり、恐らく其詩の劣作なりしは其人物の木戸と比して甚だ劣作なると毫も擇ふ所なけん、若しも現在の人情時勢の間に橋本左內、高杉晋作の輩を投ぜしめば彼等果して多數黨の首領たるを得べきや、恐らくは世間は彼等を狂人視して殆んど眞面目に之を相手にするものなからん、近時維新志士の碑を立て其祭祀を行ふの風潮あるは頗る同情すべきことなり、乃木將軍に對する崇敬の如き亦た世道を裨益すること少なからざるを思はずんばあらず、然れども先輩の祭祀を行ひ其紀念に忠なるは必ずしも先輩の志を繼ぐ所以に非ざるを記憶せざる可からず、士氣頽敗せる末世に於ては却て先輩の偉業を紀念して誇らんとするの風あり、和蘭領なる南洋ジャワ島の首府バッテンブルクに於ては一のワートルルー紀念碑あり其碑銘に依れば是れ和蘭の軍隊にして英軍を援けてナポレオンに最後の打撃を與へしものの爲めに建てらるとあれど、實際ワートルルーにては和蘭兵は開戰前夜にブルッセル府に引揚げ、當日は一兵だも該歷史的戰場に形を露はさざりしと云へり、即ち或る場合には人は祖先の無實の勳蹟にも誇らんとするものなり、況んや有實の勳蹟に於てをや、然れども是れ眞に祖先の精神に同情せるか故にはあらで寧ろ一種の虛榮心に驅られて遠きを追ふの形式を踏むに過ぎざる耳、又た或る一部に於ては偉人を視ること偶像を視る如く之を崇拜すれば恰も不可思議の神助にても與かるが如く思惟するものあり、而して彼等の精神は偉人の心と全然沒交涉なり、若しも然らずして眞に精神より偉人を崇拜するものとせば世間の風潮も現在の如くに唯物的に落ち且つ輕佻浮薄ならず尙ほ幾分當年の元氣を殘存すべき筈ならずや。

[illegible]運の統一が國家を偉大ならしめて個人を縮小せしむる如く、我邦に於ける[illegible]な樣の政策着々實行せらるゝに從ひ青年學生の志氣漸く變へ其規模は漸く擴大せられたり、開國時代の我邦の志氣は頗る豪邁なるものにして、幾多敢行冒險の氣分を含蓄し、殆んどエリザベス朝の英國を聯想せしむるものあり、當時幾多有爲の青年は國禁を犯かし且つ僅かに風帆船の便を求め水夫の雜役に服し洋行を企て、印度洋を渡り喜望峰を迂回し七八月の久しきを經て倫敦又は紐育に達したりき、當時一詩あり何人の作なりしか知らざるも汎く青年間に膾炙せらる、其詩に曰く

　海城寒柝月生潮、波際連檣影動搖、從是二千三百里、北辰直下立銅標、

此詩の文義に拘泥して觀れば宛も北極探險を詠ずるかの如く思はるれど、作者の眞意は恐らく單に冒險遠征の情思を言はんと欲するに在るべく、以て開國當時に於ける青年有志輩の意氣の壯大を察するに足れり、降りて明治七、八年に至れば征韓論の勃發するありて國內の志士は血湧き肉躍るの感に堪へざりしが、臺灣征討の擧あり續いて西南の役あり僅かに欝勃たる霸氣の一部分を發散するを得たるも、人心の動搖は容易に沈靜せず國家變を思ふの情は自由民權の主張となりて發し國會請願の大運動となりて現はれ來れり、此不安の國情を鎭撫するは只た國會を開設して一種の安全辨を設くるの外に策ある可らず玆に於て明治十四年の詔勅により二十三年を以て國會の開設あるべきを宣せられたり、是より時の政府にては鋭意法治國の基礎を置くに努むると同時に憲法制定の爲めに全力を注ぎ、明治十八年には始めて內閣制の創立ありて帝國の政治組織を一新し、此と前後して華族の五爵を置き位階勳等の規定を立て又

た恩給の法を定めて官職を奉ずる者の名譽利祿を保證せり、是れ實に自由民權を唱說して動もすれば常規より離脫せんとする人情を調整して國家人心の統一を計るの方法として頗る効果ありしも、又た進んでは今日の理想なき唯物的征利的小成的風潮を促せる一大原因ともなれり、試みに思へ衆議院議員の如き固より人民の代表者にして行政府司法府に對しては常に監督者の位置に立つものなり、故に其身自ら官吏たるものとは職責の趣を異にするものありて、位階服を着し勳章を佩び得々たる官吏とは其撰を同ふせざるものなり、然るに代議士にして位階勳章を羨み中流官吏の對遇を得れば以て頗る滿足の色あるが如きは不見識も亦た極まらずや、日露戰爭の終りて後ち貴衆議院議員中叙勳を希望して頗る運動に努むる處ありしと聞きしが當時は軍國の政に參畫したる稜に由り一般に勳四等を賜はりき、今次の大典に際し何の勳功と稱すべきものもなきに係はらず又た叙勳の運動を爲すものありしと云ふが如き誠に沙汰の限にして、議院の世間より尊重せられざる誠に故なしとせざるなり。

（三）　國家主義教育の弊

然れども人心を鎭靜して自由放慢の弊より救はんとする明治政府の政策上より觀れば故森有禮子に由り行はれたる學制改革は最も著るしき効果を齎せり、森子は明治十八年の伊藤內閣に入り文部大臣として最も特色を發揮したる人なり、其主張は國家主義の下に教育制度の一統を謀るに在りて、彼は全國に向つて劃一なる學制を施行し、當時異分子視せられし宗教學校を排斥せり、而して各學校の教授法なるものは主として口授に由り新智識を子第の腦髓に注入せんとするに在り、想ふに注入法の教育は必ず

しも孟子により始めて主張せられたるに非ず、從來の儒敎々育其物已に極端に注入的にして文字を記憶するに過當の重きを置けり、即ち注入教育法は我邦傳來の敎育法にして、偶々西洋の敎育制度を輸入するに當りても遂に舊弊を一掃して啓發的教授法を採用するの必要に着眼する能はざりしものなり、例せば小學より中學、高等學校を經て大學に至るまで十七、八年間に亙りて我青年子弟は偏に注入教育に由りて記憶力を浪費し且試驗の關門多きが爲めに精神を疲弊し、其終に業を了へて大學を出る頃には多くは其腦髓彈力を失し其元氣消耗するを常とす、多くは是れ注入敎育の罪に歸すべきなり、更に注入敎育の弊は先例に拘み指導に服し、在學中は素より卒業後と雖も永久に柔順なる弟子たるを脱する能はざるに至る、自ら工夫發明し、先例をも破り師説をも飜へし以て學界の開拓者と爲るが如きは到底注入敎育の結果に待つべからざるなり。

然れども我邦敎育の弊は單に注入敎育に止まらず所謂國家主義の下に行ひ來れる劃一敎育の弊亦た頗る甚だしきものあり、從來我文部省の目的は青年子弟の思想感情を一定の鑄型より打出さんとするに在りて各人に付き其自然獨特の賦性傾向を參考とせず、其獨創の見地を開招せしめて自然の發達を爲さしめず、却て其感ずべきことを示し其思ふべきことを敎へ未來永劫師説の範圍を脱せしめざらんとするに在るか故に、何かの方法に由り其の元氣を虚脱せしめて卒業後に於て自由に思索して進步發展すること無からしめんことを要す、即ち注入敎育、試驗敎育、利祿名譽の拘束、忠君愛國の服從要求等は遂に文部省の目的を達するに頗る効果ありしものゝ如し、更に消極的方面に就て之を觀るに政治と宗教を學校

一內に禁制したるは文部省型の教育をして一層活氣なく、一層自發力なきものたらしめたり、抑も政治と宗教は明治十年の前後より殆んど併行して我邦に其勢力を增大し來りて、十八年の學制改革の頃に在りては當局の眼には最も危險なる異分子として映せしなる可し、全國各地に開設せられて頗る繁昌せる宣教師學校が一面自由思想の養成所と認められし如く、天下到る處に開催せられし政談演說會は謀反人の教唆所なりと思惟せられたり、故に政談聞く可らず、宗教は學校の門內に入るを許さずとは文部當局內規の方針なりしなり、如何にも學生として極端に政治に狂奔することの甚だ可ならざるが如く宗教に凝結して學業を忘却するも亦好ましきことに非ず、然れども宗教が人の性情を開發するに最も有效なるが如く、政治の修養は能く人をして其國家的社會的職分を理解せしむ、故に政談宗教を禁制したるは一應の理由なきに非ずして當時の狀況に照らし當局の處置に對し其心事を諒とするに足れりとするも、同時に我各學校を卒業する青年をして世事に疎く時勢を解し得ざる偏頗者ならしめたるの責なき能はざるなり、

之を要するに我邦の教育は、其長所を言はんと欲せば一朝一夕の能く盡すべき限に非ずと雖も、其弊や人心を萎縮し元氣を消耗し、一切の雄渾偉大の氣象を發生するの餘地なからしめんとするに在り、若しも明治十八年に於ける森文相の教育政策を觀て之を迂濶となし効果を見るの日を待つに懶しとせし人あらば、彼等は必ずや未だ二十年を出でざるに各々其効果の現はれたるに驚きしなるべし、當年の活氣横溢して動もすれば放慢に流れ易かりし青年子弟は日露戰役前後に至りて其氣風遂に一變し、最も柔順

なる官吏候補者となり又は會社員志願者と爲れり、若しも孟子自身をして其學説の[illegible]に茲に[illegible]を[illegible]せしめば恐らくは早く已に矯正の法を講ぜしなるべし、不幸子は其説發布の當日を以て門外に係りて退き、その後に文相たりしもの多くは凡庸の器にして劃一政策の弊を認むること頗る遲きに失するの恐あり、近來に至り稍弊の甚だしきを曉れるが如きも今や病膏肓に入りて一大英材の出づるを待たざれば容易に改むること能はざらんとす、亦た歎息す可らずや。

〈四〉 現代の精神的墮落

之を要するに我國家は維新以來長足の進歩をなし我國勢は年と共に開展し、日清日露の兩戰を經て既に韓滿を奄有し、更に今次の世界爭亂に際會するや一躍東洋の覇權を把握するに至れるも、内に國民の精神狀態を顧みれば其志漸く荒廢し苟安小成を希ひ、國家の偉大國民の縮小とは正に反比例を爲すものの如し、現代の國民は國家をして今日の偉大を爲さしめん爲め維新の先輩が如何の苦辛を嘗め如何の犧牲を拂ひしかを忘却するものゝ如し、表面には頻りに其功勳を賞し崇仰の形を示すも其精神は日々益之に遠ざからんとするに似たり、勳章、年金、爵位、恩賜を目標として活動する處の現代人士が到底當時の誠忠にして犧牲的なる高崇雄大の精神を理解し得べきよう無ければなり、而して犧牲獻身の氣魂なく高崇雄大の精神なき今日の縮小せる國民にして果して無難に先輩の遺業を繼承し行くことを得べきや否や、是れ實に現代の有司、軍人、政客、學者、教育家、宗教家輩の正に自反再思して深く憂慮すべき處に非ずや、試みに一例を以て之を云はんに茲に徒手一代にして數百萬の身代を作れる人ありと假定せよ、

彼若しその貧賤に生立ちしを恥じ其子女をして華奢の生活に慣れしめば一朝不諱の事あらんには果して其不肖兒の代に至り其家依然として繁昌するを得べきか、今代の我邦人は之を維新前後の日本人に比較して果して不肖兒に非ずと云ふことを得べきや否や、而して今に於て速に自反覺醒することゝなしとせば遂に能く維新の大業を繼承進展し得べきや否や深く關心憂懼せざるを得ざるなり、

今や我文部當局は學制問題の解決に沒頭するもの丶如く吾人は其勞を多しとせざるに非ずと雖も、學制の改革は必ずしも今の教育界を刷新すべき根本的手段に非ず、學制の改革素より必要なり、然れども教育方針の改革、學風の一新は寧ろ學制問題以上に重要なりと云はざる可らず、從來の注入教育に代ゆるに啓發教育を以てし、良民教育に代ゆるに偉大國民教育を以てし、自由雄渾の思想を鼓吹して以て下劣俗惡なる利己的感念により糜爛せる我國民の心腸を一洗するは實に今日焦眉の急ならずや、然れども凡庸なる當局に對して吾人は望を囑するの愚を演ぜざる可し、天もし我邦に幸せば必ず近き將來に於て第二の森子を出だし巨人の手腕を借りて我學界の宿弊を一掃せしむることあらん。

轉じて我宗教界を觀るに名僧名識と稱せらるゝもの少なからずと雖も教界の寂寞未だ曾て今日の如きはあらず、今の俗化し腐敗せる人心に向ひ一人の新鮮なる福音惠報を傳ふるを聞かざるは何故ぞ、我邦幾萬の教師僧侶中豈に一人自己の使命を自覺するものなきか、前古未曾有なる世界の大亂は彼等の道念に何等の刺激を與ふることなきか、我國民の危機は未だ彼等の魘醉せる眼瞼を開かしむるに足らざるか、近頃宗教的有志の會合なる歸一會に於て目下の我國民の精神狀態に對し之を指導すべき宣言を發するの議ありと聞けるは聊か空谷の跫音たるの感あり、歸一會員諸氏は流石に今の時勢を以て太平無事憂慮を要せずとは思惟せざるものに似たり、然れども果して幾許の徹底したる考を以て世間を觀察し居れるや

がは吾人夫の宣言に接して之を推測せんとする興味ある問題なり、但だし天下の革新は委員會の決議を以て成遂げ得べきものに非ずとはカーデナル、ニウマンの名言として世に傳へらるゝ處、歸一會の宣言可ならざるに非ずと雖も之に多くを依賴せば恐らく失望に終らん、大凡革新運動は徹底せる見識に基づき確實なる一大人物の心腸より湧出する唱說に由ることを要す、我邦に於ても法然あり親鸞ありて眞宗の運動起り、日蓮出でゝ法華の宣傳となり、仁齋東涯ありて儒敎の德育起り、又た海外に於てもルウテル、カンウインありて新敎的革新は開始せられ、朱晦庵王陽明ありて死せる儒敎に兩派の新生面を開きしが如し、吾人は歸一會の宣言以上精神界の刷新運動を期待するの情に堪へず、想ふに天下蒼生亦た大旱の雲霓を望むが如きものあらん。

我政治界に對する大正維新の運動、即ち憲政擁護運動は、吾人が曾て屢々論じたるが如く全然失敗に歸したり、而して政界は全く中心力を失ひ混沌として其紛擾日に益々甚しからんとす、故に政界の刷新は有識者の最も心を勞すべき問題たるは論を待たずして、吾人亦た機に觸れ折に接して論說を怠らざるべし、然れども政界根本の刷新は國民の精神狀態を一新するより起らざる可らずして、一種新淸にして偉大なる理想の發現して我精神界を刷新するに至らば政界の事蓋し亦た見るに足るものあるに至らん、殊に多年獨逸流の國家主義を實施したる結果、國民を軍隊視するの傾ありて、個人の自然的發育を害する少なからず、想ふに或る意味に於て獨逸流の應用は富國强兵の政策を行ふに頗る便利なることあるは否定す可らず、現に獨逸の今日ある又我邦が近年長足の進步を成せる組織的國家主義に負ふ所甚だ多きは睹易き道理なり、然れども現在の國難に際し英佛兩國民が能く發憤興起し克く其智力を盡して倦まざる狀態を見れば個人主義亦た實に侮る可らざるを知らん、而して戰後の國情を豫想せば吾人は勝敗の如

何に關はらず英佛の狀態が必ず大に獨逸に優るものあるべきを信じ疑はず、眞の偉大なる國家は個人の上に於ても亦た偉大なる國民たらざる可らず、是れ吾人が國家として偉大にして國民として縮小せる我國の現狀に對し一大革新の必要を唱說する所以なり。

現政戰の前途如何

歐洲には大戰爭あり獨墺の同盟軍は英佛露伊の聯合軍に包圍されつゝ、屢々包圍線を突破せんとして多大の成功を收むるも、聯合諸國の團結亦た益々鞏固ならんとす、而して最後の勝利は勿論聯合側に在りと觀測するを至當とす可きも、其苦辛慘憺亦た察するに餘あり、同時に我邦には政戰あり歐洲の大舞臺と比較して事甚だ小なりと雖も兩者の間多少類似の趣ある亦た一奇たらずとせず、即ち大隈内閣及與黨三派は以て之を獨墺土勃に擬すべく、之に反對する各種の勢力は以て之を聯合軍に擬すべきか、獨墺の同盟頗る團結堅固にして、努力奮鬪眞に侮る可らざるものあるが如く、隈伯及其同僚與黨の努力奮鬪亦實に敬服に値するものなくんばあらず、而も之に反對する各種の勢力亦た日に月に優勢ならんとするあり、獨り政友國民純無屬と云ず、樞密院に貴族院に將た元老閥族の間に、又は輿論を代表すべき新聞紙の間に漸く將に隈閣反抗の大潮勢を促し來らんとす、此上更に一歩を加へんか、内閣の瓦解蓋し遠きに非ざるや知るべきなり、殊に新聞紙の論調に至りては現閣成立以來多く之に同情し、他の内閣ならば疾く世論の攻擊に堪へずして瓦解すべかりし場合にも現内閣は幾度びか難なく支持せられ以て今日に至れるに關はらず、近來往々戈を倒にするの奇觀なきに非ざるは現閣も漸く末期に入れるものと謂ふべし。

今や議院に於ける論戰漸く將に酣ならんとして、反對派は往々に揚足を取るを能事了せりと爲し、政府當局は多く白らを切り詭辯を弄し堅白異同を事とするあり、吾人は其孰れに與みするをも快とせずと雖も、近來政府者の旗色頗る揚らず民軍の論鋒次第に鋭ならんとするは爭ふ可らず、今二三爭論の點を擧示せんに

一、日獨開戰より、日支交渉を經て、最近の帝政忠告に至るまで外交を內政の具に供せるの嫌ありて着々機宜を失し帝國の危險言ふに忍びざるものあり、當局は近來頻りに外交問題を政爭の具に供するの非なるを云ふ、是れ誠に然り、而かも內政の必要に從ひ外交を犧牲に供せしもの現內閣ほど甚だしきものは多くあらず、自家の非をば高閣に束ね去りて獨り他人を責めんとす、其效なき亦宜ならずや。

二、大隈首相が大浦事件に對し董督不行屆の稜を以て辭表を提出せしに關はらず　聖旨を楯に留任に決せしは如何に辯明せんとするとも不誠意非立憲の譏を免る可らず、大浦氏の罪惡は其責單獨にし、他の閣僚に及ばずとせば何故に加藤、八代、若槻諸氏は辭職せしや、彼等の辭職に理由ありとせば大隈伯の留任は不條理ならざる可らず、而かも辭職せる加藤氏が留任の大隈首相を援助するに至りて不條理をして一層不條理ならしむ、其間の消息蓋し到底常識を以て解す可らず、現閣が寧ろ不臣の罪を犯すも一に　聖旨に藉口して責を免れんとする其窮狀亦た憫むに堪たり。

三、現閣に矛盾不徹底の事多しと雖も大浦氏不起訴ばかり矛盾不徹底なるはあらず、尾崎法相の言に因れば大浦氏は已に罪を悔ひ、社交界を去り政界を離れ、再び前罪を犯すの危險なきが故に不起訴に決したりと云ふ、然らば林田前翰長は何故に起訴されしぞ、是亦た不起訴と爲すべきに非ずや、世人稍々もすれば大浦氏は身華族にして前大臣なれば殊に罪を問はざるものとし即ち身分の如何に由り法の適用

を異にするかを疑ひ又た甚だしきに至りては嚴正に糾問すれは非丕關係に及ぶの恐れあるが爲めなりと云ふに至る尾崎法相殆んど辯解の辭なからんとす、

四、其他選界干涉なり、乃木事件なり、米價調節生絲救濟の失敗なり、之を數へ來れば失敗の跡歷々蔽ふ可らず、現內閣の前途に向ひ望を囑すべきの理由毫も之を見る可らず、殊に歐洲及び極東の形勢は是れより益々危急を告げんとするに、斯の如き爲體なる大隈內閣を此上尙ほ存續せしめんことは到底堪へ忍ぶべき限に非ず。

世間往々大隈伯の大膽にして强情なるを見て之を偉大なりとし譯もなく感心するものあり、如何にも頽齡八十に垂んとし且つ近來頗る足痛に惱めるも尙ほ劇務に鞅掌せんとするの意地强情に至りては實に及ぶ可らざるものありと謂はざる可らず、然れども是れ國事を私事と混同する匹夫の勇のみ、未だ以て政治家として、大臣宰相として其出處を解するものと謂ふ可らず、想ふに大隈伯は今後益々其意地强情を通さんとして政府に沒頭すべく、其反對者は四方八方より蝟集して彼を政府より放逐するに努むべく、穩に治まるべき大正五年の政界も爲めに紛擾又た紛擾を加へ、獨り至尊をして天下を憂へしむるに至らんことを恐るゝのみ、然れども世には意外の變あり、今日衆議院に絕對過半數を擁すればとて現閣は必ずしも金城湯地に居るに非ず、貴族院の態度如何、輿論の趣向如何、元老樞密院等果して永久傍觀に甘ぜんとすべきや、政變は往々にして意外の邊より生ず、歳末に至り政界極端に切迫すべき新年休暇の終る頃にも至らば稍々政機開通の氣運に接するなからんや、獨墺は聯合諸國に對し尙ほ當分對抗戰を持續すべし、大隈內閣に至りては吾人は其今後尙ほ引續き國政を料理すべき運命あるものとは如何にしても信ずること能はず。

（十二月十五日稿）

◉新興國民の精神的餌食として擇ばれたる代表的叢書

◉模範的飜譯として渇仰せらるゝ讀書界の權威

全譯完成

泰西名著文庫

第三版

會員募集

苟も書を讀まば世界第一流の書を讀め、濫讀は、濫費と同じく心神の浪費也、損失也。本文庫は古今に亘る世界有數の雄篇傑作を選みて、現文壇斯道の巨匠が刻苦多年飜譯の業を進め來り這般漸く完成せるもの、坊間類似の叢書と撰を異にせることは既に天下の定評あり。讀書子の書齋に必ず一部を缺くべからざる也。

泰西に於て代表的傑作と稱せらるゝ名著は、多くは量に於ても亦堂々たる大作なり。近時流行の片々たる飜譯書のみに依りて泰西の文藝を窺はんとするは、猶ほ湖沼に鮫鯨を獲んとするの愚にも比すべきか。

本文庫は是れ當代一流の老手によりて選まれ譯されたる古今に亘る世界的不朽の名作集なれば、是れ實に世界文藝の一大パノラマと言ふべき也。

泰西名著文庫廣告の一

泰西名著文庫廣告の二

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◉イリアード　一冊

ホオマア作　馬場孤蝶譯

古神話、古史詩の價値は、此處に古代人の一切の生活が具象的に織り込まれて居る點にある。就中、本書に收むる此の大史詩の如きは、諸種の點から見て歐洲一切の藝術の父母である。歐洲の藝術を味はんとする人々は、必讀書として先づ第一に此の世界最古の一大史詩に指を屈せずばなるまい。――（希臘）

◉プルターク英雄傳　四冊

プルターク著　高橋五郎譯

『手に任せて何處を開くも、英雄豪傑雲の如く、才媛淑女霞の如く、宛然オリムピアの饗宴に臨むがごとし』とは、エマーソンが此書を評した言葉である。眞に萬世不朽の寶典にして、古今の成敗、榮辱、利鈍の數、羣鏡をかけて照すが如く、活世界の活舞臺とは寔に本書の謂である。――（羅馬）

◉デカメロン十日物語　一冊

ボッカッチョ著　戸川秋骨譯

凡そ人間に文あつて以來、ボッカチヨのデカメロン位奇拔で面白い書物はまたとあるまい。人間の媚態、痴態、變態、笑ふべきもの、怒るべきもの、輕蔑すべきもの、感嘆すべきもの、凡そ人情の千態萬狀を高い所から見て、人を馬鹿にしたやうな顏をして書いてゐる處、何とも云ひやうの無い天下の奇書である。――（伊國）

◉哀史　三冊

ユウゴオ著　戸川秋骨譯

文豪トルストイ翁をして十九世紀の最大傑作と叫ばしめたる本書の主人公ジヤン・ヴァルジヤンの名は、今は我國でも知らぬ人は鮮ない。話の筋は無類に面白く、又之を一貫する磅礴たる大理想は世界文藝上の偉觀である。從來一寸した抄譯が行はれて來たが、始めて其全譯が出たわけである。――（佛國）

◉虚榮の市　二冊

サッカレ著　平田禿木譯

文豪サッカレが冷たい皮肉のうちに熱い涙をこめた輕妙鋭利の靈筆もて、所謂彼のスノッブスの醜が百鬼夜行の體たらくを赤裸々に描き出して、走馬燈のやうな忙しい人の世の推移が手に取るやうに見られる英文學で名高い『ヴァニチイ・フェア』の完譯が、この『虚榮の市』上下二冊である。――（英國）

◉惡靈　一冊

ドストイエフスキイ著　森田草平譯

トルストイを現在の覇王とすれば、未來を支配するものはドストイエフスキイであるとまでメレジユコーフスキイは斷言して居る。その思想の幽玄にして奇峭なる、彼は實に神秘其物である。人間の心理狀態を到底想像も及ばぬ精細と確實とを以て描寫して居る處、眞に人間業ではない。本書の價値亦多言するまでも無からう。――（露國）

◉戰爭と平和　四冊

トルストイ著　馬場孤蝶譯

北歐の偉人として全世界の崇敬を一身に集めた伯爵レオ・トルストイの、人としても藝術家としても、元氣最も旺盛なる時代に成つた大大的大作である。行くとして可ならざる無き著者が緒到、遒勁なる神筆は、彼が豐富なる人生智識及奔放なる想像力と相俟つて、此大作をして益々世界的不朽の雄篇たらしめた所以である。――（露國）

◉先覺　一冊

メレジユコーフスキイ著　戸川秋骨譯

文明批評家として現代世界第一人者と云はるる文豪メ氏が代表作たる三部小說中第一の稱

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

泰西名著文庫廣告の三

ある近代の傑作で、全く無類の情趣と感興とに満ち、形は近代人の先驅として所謂文明復興期の一切を代表せる一世の鬼才ウヰンチの一生を叙せる傳記小説といふと雖も、實は徹頭徹尾暗示的に又啓發的なる評論にして傳記、傳記にして西歐全体の藝術論である。——(露國)

●英國近代傑作集 上巻 戸川秋骨譯

批評家、詩人、乃至小説家として近代英國に第一流の位置を占むるアッツ・ダントンのエイルヰン一册を收む。エイルヰンは又の名を『驚異の再臨』と云つて、人間が天地の神秘に接して感觸するその驚きを書いたものである、話の筋は神秘な戀物語で、實に近代英文學中の逸品である。否世界文學中一頭地を拔いた逸品である。

●英國近代傑作集 下巻 平田禿木譯

近代英文壇の巨匠、メレディス。ハーディ。ジェームス三家の短篇集である。若し夫れ『泰西名著文庫』の大部分が、堂堂たる寺院殿堂の壯麗の如きものとすれば、これは寧ろ草堂別墅を飾るべき、心にくき小幀にも比すべきであらう。譯者禿木氏また趣味の上から、詩人の創作にも劣らざる苦吟努力をもて生命ある譯文に寫し終へたものである。

●諸國物語 一册 森鷗外譯

森鷗外先生は翻譯界の權威である。本書は、獨逸、墺太利、スカンデナヴィア、オオストリア、佛蘭西、露西亞、亞米利加の諸文豪の傑作三十餘篇を集めたものである。清新なるもの、深刻なるもの、蜜の如く甘きもの、皮肉の骨を刺す如きもの、百花爛漫として、現代文學の精粋は收めて此一卷にありと云ふも敢て過言ではあるまい。——(計七ヶ國)

◉計二十册

津田青楓氏装釘意匠、菊判總クロース天金、一册平均約八百頁

◉入會申込一月末日限（非賣品）

◉詳細見本及規定は端書又は電話にて御申込次第送呈す

略規

●來三月より毎月一册宛配本し二十ヶ月を以て完結す。●會費は一ヶ月金貳圓貳拾錢とす、但外に送本料を要す。●申込金貳圓を要す、但此申込金は最終の會費中に補充す。

東京市神田區小川町一番地

國民文庫刊行會

電話四本局七三二番　振替東京一八五七二番

公論

憲政の本義を說いて其有終の美を濟すの途を論ず

法學博士　吉野作造

去年十二月一日より東京に開かれたる全國中學校長會議に於て、高田新文相が特に訓示を與へて立憲思想養成の急務を說きたる事と、水戶中學校長菊池謙二郎氏が起つて大隈內閣の居据りと立憲思想との關係の說明を求めて文相に肉薄した事とは、著しく世間の耳目を惹いた。訓示の一節に曰く。

（上略）中等教育ニハ種々ノ方針アルベキモ、余ノ見解ヲ以テスレバ、立憲思想ノ養成ヲ刻下ノ急務ナリト信ズ。我國ニ於テハ、憲法施行以來日尚淺ク、國民ノ憲政ニ通セサルコトハ過般ノ總選擧ニ於テ見ルニ明ナリ。立憲政治ノ運用ヲ誤マラサルト否トハ、國家ノ重大問題ナレバ、特ニ中等教育ノ任ニ當ルモノハ充分其點ニ關シ留意セラレンコトヲ希望ス（下略）。

從來歷代の文部當局者も中學校長會議に同樣の訓示を發せし事之れまであつたか如何かは、予の明知せざる所なれども、多年野に在りて立憲思想鼓吹の必要を唱へ來りし高田氏の事なれば、今度

特に此點を力說高調して中學校長諸氏の注意を喚起したのは怪むに足らない。

之れ迄同じ樣な機會に同じ樣な訓示を發した事は假りに無いとしても、民間に於ける立憲思想の養成を必要とするの說は、決して新しきものではない。而して敎育機關の協戮に依りて此思想を民間に普及する事が最も手短にして且最も有效なる方法なりといふ事も、實は餘程早くから認められて居つた。中學校敎科課程の中に法制の一科を加へたのも此趣旨に基くのである。併し乍ら、之等の施設は果して其目的を達したであらうか。我國の憲政は其創設以來既に四半世紀の星霜を閲して居る。而かも其間憲政に對する國民の思想は何れだけ進步したであらうか。今日此際文相の口より改まつて立憲思想養成の必要を聞くのは、偶ま民論開拓の過去の努力の不成功を證明するものではあるまいか。

何れにしても立憲思想の養成は今日仍ほ所謂「刻下の急務」である。此點に於て予輩は全然高田文相と同感である。併し乍ら、口に言ふは甚だ易い。只問題は、如何にして立憲思想養成の目的を達すべきやである。幾度繰り返して其必要を絶叫しても、如何にせば果して能く此目的を達するかの具體的方法を示さずしては、折角訓令の主意を尤もと感じた敎育家諸君も、イザとなつて手の着け樣があるまい。然らば文部當局者は果して敎育家の實地指南たるべき細目の成案を有つて居るのであらうか。

立憲思想養成の具體的方法の攻究は、立憲政治其物の正確なる理解を以て始まらねばならぬ。不正確なる理解を基礎としては、決して適當なる方法の組み立てられやう筈はない。而して予は平素我國の所謂識者階級間に、立憲思想に關する理解の極めて不明瞭・不徹底なることを遺憾とする者である。高田文相は從來立憲思想の鼓吹と普及とには少からず盡力した人だと聞へて居つたが、菊

池水戸中學校長の直截なる質問に對しては、決して單純明快な答辯を與へられなかつた。予は之等高級の教養ある方々に向つてすら、今日仍ほ先づ憲政の本義そのものを說くの必要ありとの感を深うしたのである。

「國民ノ憲政ニ通セサル事ハ過般ノ總選擧ニ於テ見ル」も明であるが、然し憲政の何たるやに通ぜざるは、獨り一般下級の國民ばかりではない。上級の所謂識者階級亦然りである。立憲思想と全然相容れざる專制的議論は、今日屢々公然として在朝在野の政客の口に上るを見るではないか。一國文化の指導者たるべき識者にして猶且憲政に對する不正確なる理解に甘んずとせば、如何に一般國民の思想を鞭韃しても憲政有終の美を濟すことは出來ぬ。斯くて今日は、上下一般に向つて最も率直に、最も大膽に、最も徹底的に立憲政治の眞義を說くべき時ではあるまいか。

是れ予が自ら揣らず、敢て玆に憲政の本義に關する愚見を披瀝して大方の叱正を乞はんとする所以である。

序言

憲政のよく行はるゝと否とは、一つには制度並びに其運用の問題であるが、一つには又實に國民一般の智德の問題である。蓋し憲政は國民の智德が相當に成育したといふ基礎の上に建設せらるべき政治組織である。若し國民の發達の程度が尙未だ低ければ、「少數の賢者」即ち「英雄」に政治上の世話を賴むといふ所謂專制政治若くは貴族政治に甘んずるの外はない。故に立憲政治を可とするや、貴族政治を可とするやの問題の如きも、素と國民の智識道德の程度如何によつて定まる問題で、國民の程度が相當に高いのに貴族政治を維持せんとするの不當なるが如く、國民の程度甚だ低きに拘らず强て立憲政治を行はんとするの希望も亦適當ではない。然しながら近代の諸國に於ては、二三の例外は無論あるが、槪して國民の智德は相當の高度の發

達を遂げて居ること云ふを俟たない。中にはそれ程でないものもあるけれども、少くとも其中の少からざる一部分に高度の發達を遂げたものが必ず存在するが故に、之等の人々を通じて、所謂民權思想といふものは何れの國に於ても頗る發達を遂げて居る。隨つて今日は高度の文明を有つて居る國に於ては勿論の事、それ程でない國に於ても、專制的貴族政治は到底引續き行はるゝことを得ないといふ狀況に定まつた。國民一般の發達の程度未だ立憲政治に適すべくも見えないやうな國に於ても、世界の大勢に押されて貴族政治は最早其命脈を保ち得ざる有樣である。して見ると、此等の國に於ては、立憲政治を行ふに時機尚やゝ早きの嫌ありとしても、今日之を行はねばならぬといふ勢に迫られて居る。而して是れ實に世界の大勢にして今更反抗し得べからずとすれば、世の先覺者たる者は、須らく一方には憲政の創設確立に盡力すると共に、他方には進んで國民教導の任に當つて、一日も早く一般國民をして憲政の運用に堪ふるものたらしめんことを努むべきである。之を努めずんば、假令一方に於て立憲政體の形式極めて完備すと雖も、他方其運用は決して圓滿完全なるを得ない。故に憲政有終の美を濟すの根本の要件は、殊に政治上の後進國に於ては、國民一般に對する智德の教養を第一とする。而してこの國民智德の教養といふことは、實は一朝一夕の事業ではない。顧みて我國の狀態を思ふに、吾人は國民の準備未だ整はざるに早く憲政を施行したるが故に、今や破綻百出、經世の志ある者をして日暮れ途遠しの感を抱かしむるのである。が、然しながら、今更針路を逆轉して昔の專制時代に復へることも出來ない。然らば吾々は益々奮つて改善進歩の途を講ずるより外致方が無い。而して之が爲めには、啻に政治家ばかりではない、實に又教育家・宗教家其他社會各方面の識者の共同的努力に俟つこと極めて大なるものがあるのである。

同じく立憲政治の稍々完全なる形式を備へながら、國民智德の高いと低いとの差に依つて、憲政の運用上兩極端の現象を呈して居るものは、北米合衆國と墨西

哥とである。此兩國は新大陸に於て南北相隣して居る丈け、其對象の色彩が極めて著しい。北米合衆國は、云ふまでもなく憲政の運用に最もよく成功し、物質的方面に於ても精神的方面に於ても、今日國運の興隆頗る目覺ましいものがある。一部の人は亞米利加の最近の政治は、國民中の多數を占むる勞働者其他の下層階級の專恣に媚び段々に政治の質が下落したといふ。けれども之は全然誤りである。政治家が勞働者の意思に迎合するの傾向あるは事實に相違ない。全く勞働者の意を迎へずしては、政治家として到底其志を伸ぶることは出來ないやうである。併し乍ら亞米利加の政治家は徒らに勞働者に迎合するもののみではない。彼等は勞働者の投票によつて志を伸べんとするものであるけれども、他の一方に於ては又勞働者の友となり勞働者の先覺者となつて、其精神的指導者たらんとするの抱負を有するものである。亞米利加の政治家は、形式的には勞働者の僕なれども、實質的に於ては勞働者の指導的精神である。勞働者も亦、形式的には政治家を役して我が用をなさしむるけれども、精神的には政治家の人格言論を理解し判斷し、其最良なる者に聽從して自家の立脚地を定むる丈けの見識を有つて居る。さればこそ勞働者の勢力を占めて居る國でありながら、ルーズヴェルトの如き又ウイルソンの如き曠世の英雄が國家最高の地位に擧げらるゝのである。我々は、亞米利加の最近の政治に於て決して憲政の失敗を認むることは出來ないのである。之に反して墨西哥の方は如何といふに、近年新聞紙上にあらはるゝ電報に依つても明白なるが如く、年が年中紛亂を重ね、國民は爲めに非常な塗炭の苦みを嘗めて居る。顧れば墨西哥は建國以來殆ど變亂の絕えたことはない。此國が西班牙から獨立したのは今より約百年の昔であるが、其以來今日まで大統領の地位は常に血を以て爭はれ、歷代の大統領中無事に天命を全うし得た者は極めて少い。多くは暗殺の厄に罹り、さらでも海外に放逐せられて悲慘なる最後を遂げたのである。最近ポルフィリオ・デアスは三十餘年の永きに亘つて大統領の地位を專占し、其間墨

西哥の平和的産業の發達を計つたといふけれども、此三十年間の繼續的平和も、畢竟は反對黨の買收、投獄、放逐、暗殺等によつて購つたもので、決して健全なる平和ではなかつた。一九一一年、多年時めいたデアスもマデロの逐ふところとなつてより、紛亂は再び始まつた。マデロは又一昨年の二月幕將ウエルタの殺すところとなり、ウエルタに對する憲政軍の反抗となり、一轉して又憲政軍の頭目カランザとヴイアとの反目抗爭となり、一昨年の五月ウエルタの外國に亡命してから昨年の六七月頃までの間に、首府墨西哥の主人を代ふること前後八回の多きに及んだ。去年の秋米大陸諸國が協議の上カランザを承認し之を助けるといふ事にしたから、之より段々收まりがつくかも知れないが、然し隣邦合衆國の如き幸福な政治を見るに至る見込の極めて遠きことは、固より言ふを俟たず、否多少の紛亂は今後暫らくは續くであらうと思ふ。斯の如くにして國民は今や戰亂の蹂躙するところとなつて實に名狀すべからざる慘況にある。斯くの如く、相隣して居りながら一方は隆々たる勢を以て榮え、一方は紛亂に紛亂を重ねて居るものは、抑々何の理由によりて然るか。憲法上の制度は、墨西哥の方は全然合衆國を眞似たのであるから、形式的設備の點よりいへば兩者全然同一である。而かも斯くの如き兩極端の差を生ずる所以のものは、是れ畢竟兩國民の智德の程度に大なる高低の別があるからである。

然らば何故相隣して居る國なるに拘らず、此兩國民は斯くも大なる差を生ずるに至つたかといふに、之には深い歷史上の原因がある。第一には、此等の兩國は申す迄もなく歐羅巴人の移民に依つて建つた國であるが、夫等移民の本國が各兩國に於て同一でない。亞米利加大陸は、恰度合衆國と墨西哥との國境線を堺とし、北部は初めより主として英國の所謂アングロ・サクソン族の移住し來つた所であり、南部は總て――ブラジルが葡萄牙人の移民より成るの唯一の例外を除き――專ら西班牙よりの移住民である。此點より言へば、墨西哥と合衆國との差は恰度西班牙と英國との差と同

じ事である。今日歐羅巴に於て、英國人と西班牙人とは其政治的能力に於て大なる逕庭ありとせられて居るが、此差異が新大陸にも反映して居るのである。第二に、此等兩國よりの移住民は元來本國に於て如何なる階級に屬して居つたかといふに、合衆國に移住した英國人は、本國に於て概して最も優等なる階級に屬して居つたものである。彼等は官位財寶に於てこそは、何等優るところあつたものではないが、智識道德の點に於ては全英國民中最も卓拔せる階級に屬するものであつた。即ち彼等はピユーリタン(清敎徒)である。抑も米國建設の初めを爲す者は、本國に於ける宗敎的壓迫の苦痛を脫せんが爲めに一六二〇年九月メー・フラワー號(「五月の花號」)に搭乘して英國の港プリマウスを出帆したる、夫の七十四人の男子及び廿八人の婦人より成る所謂プリグリム・ファーザースの一團である。彼等が清敎徒として基督敎徒中最も嚴格なる生活を營み、最も熱烈なる信仰を有するものなることは已に我々の知るところ。而して彼等は實に北米の地に一新自由境を開拓して神意の完全なる實現を期せんとの、大抱負を以て移住して來たのである。之が今日仍ほ合衆國民の中堅を爲すものである。固より其後各國の種々樣々の移住民が這入つて來た。之によつて合衆國民の品位は多少下落しつゝあり又は少くとも其憂ありと言はれては居るけれども、今日尙此清敎徒の理想と抱負とは、他の移住民をも同化せずんば止まざらんとするの勢を有つて居る。之に反して墨西哥の移民は如何と云ふに、此方は本國に於ける無賴の徒にあらざれば、勞働者或は兵卒等皆下層階級の者が主となつて居る。元來移住民といふものは下層社會から出るのが常で、合衆國の如きは寧ろ稀れなる一變例である。墨西哥のは普通の場合と同樣で、さらでも英國人よりは劣る西班牙人中の、其中の殊に劣等なる階級から出て來たのであるから、此兩者の間に大いなる差異のあるのは止むを得ないのである。終りに第三に、此等兩國移住民の移住後に於ける家族關係の點も亦參酌する價値がある。英國より渡來し來つた者は、本國に於ける宗敎上

の壓迫を脫れ自由の新天地を拓かんとして渡來した者なるが故に、概してみんな家族を率ゐて移住して來た。然らざるも守操堅固なる清教徒の事なれば、移住後も土人と結婚するといふが如き者は一人もなかつた。然るに墨西哥に移住した者は、勞働者兵士等、皆妻子を有つて居る者ではない。のみならず道德上何等守るところあるものではなかつたから、忽ち土人と雜婚し、爲めに多くの混血兒を生じた。今日所謂墨西哥人といふのは、此等混血兒の事である。而して此等の混血兒は、只兩親の弱點のみを傳へて、道德的品性に於ては最も劣つて居るものである。之を彼のピユーリタンの孫が、人種の純潔を保ちつゝ其高尚なる理想を子孫に傳へたのに比すれば、固より同日の談ではない。

◎如斯米と墨とは國民の價打に於て已に大いなる逕庭がある。從つて墨西哥に於て憲政の運用に多少たりとも成功せんとせば、殊更ら國民の教養に盡力するといふ必要があるのに、建國以來同國の先覺者は此大責任を切實に感じなかつた。亞米利加の建國には、ジョーヂ・ワシントンの如き高潔なる人物があるのに、墨西哥の建國はイツルビーデといふ、自ら新大陸の那翁と稱し、野心と虛榮と俗望とを包むに惡辣なる手腕を以てした一奸雄を以て始つて居る。是れ墨西哥が紛亂に紛亂を重ねて、到底近き將來に於て憲政の運用に成功する見込なしとせらるゝ所以である。

之れと同じやうな事は、今日までのまゝで進めば、支那に就いても言へると思ふ。要之殷鑑遠からず、我等の近くに在り。我々は之等の例に徵して、切に憲政の成功には如何に國民の教養が先決問題として肝要であるかを知らねばならぬ。

立憲政治成功の第一要件は、國民の教養にある事前述の通りである。而して之は各方面の識者の共同努力に依つて初めて成就せらるべき問題である。故に此點は、極めて重要にして且つ根本的な問題であるけれども、一政論家をしての予輩が特に說かんとする方面ではない。國民的教養といふ事は、吾人も亦國民の一として、其一部分を分擔して共に大いに盡力せんと欲す

るゝのではあるが、然し茲に特に說かんとするのは、主として直接に政治に關係する方面である。即ち國民文化の發達の程度が相當の域に達し、又は國民的教養の事業が現に多くの識者によつて熱心に努力せられて居るといふ前提の下に、更に憲政の圓滿なる成功を見る爲めには、憲政に伴ふ諸制度に如何なる改善を加ふる事を要し、又其運用の任に當る政治家は如何なる心掛を持つべきかといふ方面を、特に說かんとするのである。只此方面を細論するに精しき結果、國民的教養の先決問題たる所以を看過せらるゝは予輩の本旨にあらざるが故に、こゝに本論に入る前に、先つ以て管々しく國民的教養の必要を說いた所以である。

憲政とは何ぞや

憲政、即ち立憲政治又は憲法政治と云ふのは、文字の示す通り「憲法を以てする政治」、「憲法に遵據して行ふ所の政治」といふ意味である。そこで憲政と云ふ時は、こゝに必ず憲法の存在を豫想する。此の所謂「憲法」なるものの存在すると否とが、實に立憲政治と他の政治とを分つ標準である。然らばこゝに謂ふ所の「憲法」とは如何なるものか。此憲法といふものゝ意味を明かにせざれば憲政といふ意味も亦明瞭にならない。「憲法」と云ふ言葉を單に字義の上から解釋すれば、「國家統治の根本法則」といふことになる。然し憲政といふ場合に於ける「憲法」は單にこれ丈けの意味ではない。何となれば、此意義に於ける憲法は、苟くも國家の在る所には必ず存在するものであつて、時の古今、國の東西を分たないからである。總ての政治を豫め定めた法律に遵據して行ふといふ所謂「法治國」の思想は、比較的に新らしいものであるが、此の法治國思想の起らない前と雖も、國家統治の根本の原則と云ふものは大抵の國に於ては存在するを常として居つた。故に憲法の意味を單純に文字通りに解釋しては、近代に於ける特別の現象たる立憲政治の意味をば明白にすることは出來ない。勿論「憲法」と云へば必ず國家の根本法則でなければならぬ事は論ずるまでもない。但だ近

代の政治上の言葉として「憲法」といふ時は、猶この外に他の要素をも加味して居るものでなければならぬのである。委しく云へば、國家の根本法則たる性質を有し、而かも更に他の特別の要件を具備するものを「憲法」といふのであると見なければならぬ。斯う云ふ意味の「憲法」を有する國を我々は立憲國と云ひ、又この憲法に依つて行ふ政治を立憲政治といふのである。我々が立憲國と云ひ又立憲政治と云つてこゝに一種の特色を認むる所以のものは、即ち其標準となる所の「憲法」其物が一種特別の要件を有して居るからである。然らば問ふ、我々の所謂「憲法」とは如何なる要件を備ふる國家の根本法則を指稱するのか。此問題に對し、予輩は次の二種類の要件を以て所謂憲法の特色なりと答ふる。

第一、所謂憲法は普通の法律に比して一段高い効力を附與せらるゝを常とする。憲法の効力が法律よりも强いとか、高いとか云ふ事は、普通の立法手續では憲法の變更は許され無いといふ事を意味するのである。法律は同じく法律を以て廢止變更する事は出來るが、獨り憲法は普通の法律を以て之を改廢する事は出來ぬ。例へば我日本の制度に於ては、普通の立法手續は先づ兩院に於て各々出席議員の過半數を以て議決し、次に、天皇の裁可を得て完成するのであるが、憲法の改廢に就ては特に其手續を鄭重にし、兩議院各々其總員の三分の二以上出席し――普通の場合に於ては總議員の三分の一以上の出席を以て足るが――且其出席議員の三分の二以上の多數を得るにあらざれば議決をする事が出來ぬとなつて居る。其外憲法の改正に就ては、發案權は兩院に與へて居ないとか其他いろ〳〵の特別の制限があるが、之と同じ様な特別手段の規定は他の各國にもある。尤も所謂不成典主義の國に於ては、固より斯くの如き特例は無い。不成典主義と云ふのは、我國の憲法の如く憲法的規定即ち國家統治の根本的諸規定の全體若しくは大部分を一個の法典に纏めて居ない場合を云ふ。斯くの如き主義の下に於ては、所謂憲法的規定は普通の法律や裁判の判決や政治的慣行等の

雜然たる集合の中に存在して居るのであるから、固より普通の法律で從來の憲法的原則を動かし或は新に重大なる憲法的原則を極める事も出來る。然し之は例外に屬し、普通の常例ではない。現今不成典主義を採つて居る國は、文明國中では英吉利と洪牙利との二者に限り、他は悉く成典主義を採つて居る。此成典主義を採つて居る國に於ては、殆んど例外なく皆憲法に普通の法律よりも强い効力を附與して居る。

何故に憲法の効力を普通の法律よりも强いものにして居るか。一つの理由は憲法が國家に於て最重要の根本法則であるからである。國家の根本法則は極めて大事なものなる故に、之を普通の法律から區別する方が可いといふ考は、實は昔からあつた。然し近代の國家が特に憲法を重しとする所以は、右の理由の外にもある。即ち折角憲法に由つて定まつた權利の畛域を、後から輕々しく蹂躪せられまいとする考即ち之れである。近代の憲法は、表向きは何と云つても、實際の所は從來政權を壟斷して居つたいはゞ特權階級とでも云ふべきものに對する、民權思想の多年の奮鬪の結果として現はれたものたる事は疑はない。尤も見樣によつては、憲法の發達には三樣の別があるといふことも出來る。一は英國の如く永き漸進的の爭鬪の結果徐々に進化したもので、二は亞米利加に於けるが如く本國の羈絆を脫して逃れ來れる自由民によつて新たに創設せられたるもの、三は佛蘭西を筆頭とする歐羅巴大陸の如く、革命の直接又は間接の結果として急激に勃興發達したものである。右の中、亞米利加に於ける憲法は、自由民が全く新しき天地に始めて創設したもので、何も在來の特權階級と之を爭ふたといふのではない。之に反して外の多くの諸國の憲法は、英國の夫れの如き漸進的なるものと佛蘭西の夫れの如き急激的なるものとの差はあるけれども、上下兩階級の爭鬪の結果であるといふ共通の特色を有つて居る。更に露骨に云へば此等の國に於ける憲法は、いはゞ古い上の階級と、新らしい下の階級との爭のその妥協の成果であると見ることが出來る。而して其妥協たるや、當時の相爭ふ兩

階級の勢力の關係で必しも其趣を一にしない。即ち或は古い階級の方が他日此上權利を縮められはしないかと恐れる場合あり、又或は新らしい階級が折角これまで押通して來たのに他日再び押戻さるゝやうな事があるまいかと心配する場合もある。其心配するものが何れの一方であつても、兎に角他日此上にも不利益な境遇に陷れらるる事を避けんが爲めに、出來る丈け現狀の變更を六つかしくして置かうと云ふ考になつた。然し大體に於ては、古い階級は防禦者であり、新らしい階級は攻撃者であるを常とする。從つて此爭鬪に於て新しい階級は、常に新進氣鋭の元氣を有するに拘はらず、古い階級の如く歴史的、社會的の便益に乏しきの結果として、兎に角捗々しき勝利を得にくいものである。時勢の後援によつてヤット一歩進んでも、何時其領分を奪還せらるゝかも分らない。而して此新らしき階級に向つて、其一旦占めた領地を安全に保護して遣るものは即ち憲法である。斯くして憲法變更の手續といふものは、自ら普通の法律よりも六つかしく定めらるゝと云ふ事に成つたのである。故に憲法の効力が普通の法律よりも高いと云ふ事になつた政治上の理由は、俗用の言葉を藉りて云へば、民權の保護に在るといへる。憲法の此形式的効力は、政治上に於て此意味に運用せられねばならぬものである。

第二には、憲法は其内容の主なるものとして(イ)人民權利の保障、(ロ)三權分立主義、(ハ)民選議院制度の三種の規定を含むものでなければならぬ。假令憲法の名の下に、普通の法律よりも强い効力を附與せらるゝ國家統治の根本規則を集めても、以上の三事項の規定を缺く時は、今日之を憲法とはいはぬやうになつて居る。從つて憲政といふ時は、我々は直ちに人民の權利とか、獨立の裁判權とか、民選議院とか云ふやうな事を聯想するのである。つまり此等の手段によつて我々の權利自由が保護せらるゝ政治を立憲政治といふのである。今之を一つ／＼簡單に説明することにしよう。

(イ)人民權利の保障　日本の憲法にあつては特に第二章に臣民の權利義務と題して十五ヶ條の規定が集めら

れてある。題目の示す通り、其中には義務の規定も含まれてあるが、大部分は居住移轉の自由とか、信仰の自由とか、言論、著作、印行及び集會、結社の自由とか、所有權とか、信書の秘密を侵かされざるの權利とか、凡て國民の物質的並に精神的の幸福進步を計るに缺くべからざる權利自由を列擧し、此等のものは政府に於て恣に之を制限しない、制限せんとせば必ず法律の形を以て之を定むるといふ事に明定して居る。斯くの如き種類の規定、即ち右列擧するが如き重大な權利自由は政府が議會に相談することなしに勝手に定めることはせぬ、必ず法律で定めると云ふ樣な規定は、各國の憲法に於て其最も重要なる部分として普ねく揭げられて居る所のものである。法律で定めるといふは卽ち議會が參與するといふことである。議會が此事に與かるのは、取りも直さず、議會に代表者を送る所の人民が間接に此重要なる問題の議定に容喙するを得るので、從つて人民は間接ながら自家の權利自由を自ら保護する事が出來る理窟になる。斯う云ふ趣意で此種の規定は今日各國の憲法に通有の特徵となつて居るのであらう。尤も特別の沿革的理由によつて之を缺くもの、例へば佛蘭西の憲法の如きものもあるけれども、大體に於ては此種の規定は近代の憲法には缺く事の出來ないものとなつて居る。因に言ふ。佛蘭西では一千八百七十年第貳帝政廢止の後、王政を恢復すべきや、共和制を採るべきやの憲法的問題で非常に議論が長びき、從つて憲法制定の爲めにも五ヶ年の長い年月を要した。そこで議論の紛々たる部分は其儘とし、差當り缺く事の出來ぬ重要なる原則のみを三つの法律に收めて以て憲法の體裁を作つて居る。一つは公權の組織に關する基本法と稱し、立法權行政權の分解及び其運用の大綱を定め、第二は元老院の組織に關する基本法と題して主として元老院の事が定めてあり、第三は各種の公權の關係に關する基本法と題して上下兩院及び大統領の相互間の關係が定められてある。此三つの法律は皆集つても所謂憲法としての完全な體裁は之を備へてゐないのである。けれども佛蘭西は憲法制定に於て

は決して新らしい國ではない。否歐羅巴に於て成文憲法を始めて設けた（一七九一年五月三日）のは佛國である。且此第一憲法に先つて既に有名なる所謂人權宣言の發布をすら見て居る（一七八九年八月廿六日）。其後憲法を變へる事凡そ十一回。故に大體憲法は如何なる内容を持つべきかといふ事は、佛國人の頭には明白に解つて居る。故に形式に於て整はざる憲法でも、佛人は之を適當に運用する丈けの經驗は略ぼ積んで居つたのである。

(ロ)三權分立主義　三權分立の觀念は、理論的に定義すると隨分矢釜しい問題になるが、大體を云へば、行政と司法と立法との三つの作用は別々の機關に於て之を行ふといふ事である。昔の、例へば封建時代に於けるが如く、法を作るものも、之を實際に施行するものも、又は之を個々の場合に當て嵌めて裁判をするものも、皆同一の人であつては可けないといふのである。然し行政は政府で司り、立法は議會其任に當り、司法は裁判所で之を取扱ふといふ事は、今日では殆んど問題にならぬ程自明の理と認められて居り、今更ら之を立憲國の特色だなどゝ取立てゝ云ふのは、寧ろ野暮臭き感がある。そこで今日憲法の特色として此方面で主として着眼せられるのは裁判權の獨立といふ方面である。何故なれば、行政の政府に屬し、立法の議會に屬するは極めて明白にして各自獨立相對峙するの勢力たるも、司法權の獨立丈けは動もすれば屢々行政權の直接の壓迫を受け、三權分立の趣意が動もすれば蔑にせらるるの恐があるからである。蓋し司法機關は立法機關と異り、政府に對して相對峙する關係に立たない。裁判官は一面官吏として政府の系統の中に屬する。從つて動もすれば其の左右する所となるの憂がある。斯くては三權分立の主義が十分に貫徹されない。是に於て近代の憲法は裁判機關をば專ら上官の訓令の下に動く行政機關とは全然別種の機關となして獨立の判斷をなさしむると共に、又裁判官の地位を保障して以て行政官に對する司法權の獨立を全うすべく、いろ／＼周到なる用意を用ひて居る。是れ亦今日の立憲國の一特

として擧げられる所のものである。猶、序に述べるが、三權分立の趣意が司法權の獨立といふ方面に最もよく表はれて居る事は、總ての國に通じて變らないが、只行政機關と立法機關との關係については、今日國によつて餘程趣が異にして居る。行政機關と立法機關と獨立對峙すべきは固より云ふを俟たないが、然し二者の關係が全然相交渉する所なしとしては、立憲政治の圓滿なる進行は期せられない。そこで議會に對する政府の責任といふ問題が起る。而して此問題は議會の反對に逢へば常に必ず政府が辭職するといふ慣例の出來た國に於ては、やがて政黨内閣の慣行を生じ、然らざる國に於ても彈劾の制度を見るといふ風に、立法機關の意思をして結局行政機關を拘束せしむることに依つて解決せられて居る。此事は後に尙詳しく述べる。然るに北米合衆國の憲法及び之に倣つて作られた中南米諸國の憲法に於ては、三權分立の主義を極端に主張し、三つの機關は全然相關係する所なく對立せしめられて居る。亞米利加に於ては政府と議會との極端なる分離の結果、政府の役人は全然議員を兼ねることを得ず、否、彼等は大統領が教書を以てする場合の外に全然議會に出て其意見を陳べる事すら許されて無い。之が爲めに非常な不便を蒙つて居る事は人の知る所である。獨り政府と議會との關係ばかりではない。裁判所の此二者に對する亦全然獨立である。されば議會の正當に作つた法律でも、高等法院が之を憲法違反なりと宣言すれば、一方には完全なる法律として其効力を有して居りながら、一方には裁判所は之を無効の法律として其適用を拒むと云ふ奇觀を呈する事も亦人の知る所である。何れにしても、餘りに極端に奔つて國政の圓滿なる進行を妨げて居るが、然し三權分立の趣意を徹底的に貫かうとすれば、實は此處まで行かなければならないのである。斯程の嚴格なる意味に於ては此主義は今代憲法の特色ではない。近代憲法の特色としては、主として司法權の獨立に着眼すべく、全體としての三權分立主義は之を大體の觀察に止むべきである。

(ハ)民選議院制度　民選議院制度が近代憲法上の特徵

色として認めらるゝに到つた所以は、一面に於ては三權分立主義を執れる結果である。即ち三權分立主義は、立法權の行使は之を政府・裁判所以外の他の特別機關に委すべき事を主張するからである。然しながら、茲に特に民選議院制度を憲法の特色として掲ぐる所以は、單に立法權を行ふ爲めに政府や裁判所とは全然獨立の機關として設けられたといふ點よりも、寧ろ主として此立法權の行使が人民の公選によつて擧げられたる議員の團體に任せられて居るといふ點に存する。故に我々は此點をば一種別個の特色として掲ぐるのである。加之、實は世間でも此點をば他のすべての點に優つて憲法の最も主なる特色として認めて居るやうである。否往々之を以て憲法の唯一の特色なりとすら考ふるものも尠くはない。それほどに之が大事な特色なのである。されば歴史上から云つても、憲法の要求又は憲法政治創設の要求は、屢々「我に民選議院を與へよ」といふ叫びによりて主張せられて居つた。現に我國に於ても、憲法要求の第一聲たる明治七年一月十八日の建議は、板垣退助、後藤象二郎、副島種臣、江藤新平、小室信夫、古澤迂郎、由利公正、岡本健三郎八氏の署名を以て「民選議院設立建白書」といふ形で提出された。又明治十三年四月十七日、片岡健吉、河野廣中兩氏の連名にて太政官に執奏を願出でゝ拒けられた第二の建議も、國會開設願望書と云ふのであつた。是れ蓋し當時の人々が民選議院の制度を以て立憲政治の全部又は少くとも其大部分と考へて居た爲めであらう。此種の考は無論西洋にもあつた。而して斯かる誤解の生じたのも、畢竟此制度が立憲政治の數ある特色の中、特に擢んでゝ最重最要のものであつたからである。然らば何が故に之が最重最要であるかと云ふに、此機關のみが其の組織に人民の直接に干與し得るものであるからである。他の機關は、政府にしても、裁判所にしても、之を組織するものは政府の任命にかゝる專門の官吏である。此等官吏の任命に關して人民は殆んど何等直接の交渉を持たない。然るに議會は全く之と異り、之を組織する議員は人民の直接に選擧する所である。從つ

て人民は自由に之を左右し以て十分に民意を發表せしむることが出來る道理である。若し立憲政治と云ふものが、後にも說くが如く、人民の幸福利益を、人民自らをして主張せしむる爲めに出來たものであるとするならば、民選議院の如きは最もよく其本旨に協ふものと云はなければならぬ。斯う云ふ理由からして、此制度は近代の憲法には到底之を缺く可からざるものとして尊重せられて居る。此制度を缺く時は、如何に他の制度に關して完備せる規定を設けて居つても、之を近代的意義に於ける憲法とはいふことが出來ない。

以上を以て所謂近代の憲法なるものゝ缺く可からざる要件を盡くした。斯くの如き要件を具備すれば、ここに憲法が存在するのである。斯くの如き憲法を有して之を政治の遵則とするものを、我々は立憲政治といふのである。

憲政有終の美を濟すとは何の謂ぞ

以上予は所謂憲法なるものゝ意義を說き、此憲法に遵據して行ふ所の政治が所謂立憲政治であるといふ事を明にした。然し茲に更に考へねばならぬ事は、所謂「憲法に遵據する」といふは一體何を意味するかといふ事である。抑も憲法に遵據するといふ事は、先きにも述べたるが如く、たゞ憲法々典を制定し、之に基いて種々の政治機關を組織するといふ事丈けではない。即ち或は議會を作り、或は裁判所を設け、以て憲法法典中に夫れ〳〵規定する所を形式的に充たすといふ丈けではないのである。固より憲法は千載不磨の大典である。其條項は濫りに之を紛更するを許さない。又勝手に曲解してもならぬ。其規定するところの條文には最も忠實に從はねばならぬこと勿論である。が、然し、只其條項に形式的に忠實ならんとするのみが憲政の全部と思ふならば、是れ大なる誤りである。然るに憲法創設の當時は、多くの人は皆此誤解に陷つた。憲法といふ法典さへ發布になれば、我々は一轉して黃金世界に入る事が出來る。議會さへ開くれば我々は一躍

して十二分の幸福を享くることが出來ると考へた。憲法の發布、國會の開設といふもの其事に、不當に過大なる期待をかけたといふことは、我國でもさうであつたが西洋でも亦同一、所謂東西其軌を一にして居つたのである。西洋の或る國では愈々憲法が發布になつたといふので、之を人民に知らすところの新聞號外は、翌日(あした)からパンの値段が半分に下がるとか、牛乳が只で飮めるとか書いてあつたさうだ。約(つま)り非常に生活を樂にする所の一種天來の福音として憲法を迎へたのであつた。之と同じやうな話が、明治廿二三年頃の我國にもあつたことは人の知る所である。然しながら單純なる憲法の發布、單純なる議會の開設は、それ丈けで以て直ちに人民の權利自由を完全に保障し、我らの生活を十二分に幸福に爲し得るものではない。制度其物は其れだけでは決して吾々に實質的の利益を提供するものではないのである。是れ固より明白なる道理である。果せる哉爾後の經驗は明らさまに此道理を吾人に示した。けれども初め人々は之に多大の期待を繫けたので、其期待の空に歸するを見るや、彼等は大に失望した。而して期待の大なりしだけ、また落膽は實に非常なるものであつた。西洋では失望が轉じて呪咀となり、呪咀は再轉して憤激となり、爲めに第二の革命を起したやうな例もある。要するに憲法施行後の暫らくの經驗は、吾人に教ふるに之によつて多大の幸福を齎らし得べしとする當初の信念の妄なることを以てした。斯くして我らは憲法施行後の經驗によつて、制度の確立其物は、未だ以て十分に人民の權利自由を保障し其幸福を進むるものでないといふ事を悟つた。少くとも在來の制度は決して滿足なるものでないといふことをつくづく感ずるに至つたのである。

憲法の制定・議會の開設其ものが我々の期待に背き、我々に失望を與へたといふことから來る所の我々の不滿に、細かく見ると自ら二つの種類がある。第一は、所謂從來の憲法的制度といふものは本來、我々の權利を保障し、我々に幸福を來たすものではない、之によつて自由幸福を贏ち得べしと考へたのが抑々の誤りであ

るといふ說であつて、即ち全然憲法制度の効用を否認するものである。予は之を名けて絕對的悲觀說といはう。尤も斯くの如き極端な說は、歐米に於ても所謂識者といふ階級からはあまり唱へられて居ないやうだ。たゞ不幸にして我國に於ては今日なほ此種の信者を少からず見るのであるが、然し此說の謬なる事は深く論ずるの必要はなからう。假りに此說に多少の眞理ありとしても、今更ら憲法をやめて昔の專制政治に復へるといふ事は事實不可能であるから、我々は、憲法政治は最早や之を廢止するを得ずといふ前提の上に立つて、國家の繁榮と人民の幸福との爲めに徐ろに最善の努力を加ふべきでないか。第二の不滿は、現在の憲法的制度を以て必ずしも第一說の如く其本來の目的を遂するに適せざるものと視るのではないが、只其制度に缺點あり、又其運用の方法に適當ならざるところありしが爲めに豫期の如き成績を擧げないのであると觀るの說である。前者の絕對的に對して予は之を相對的悲觀說と名けたい。之は元より一種の悲觀說ではあるけれども、現在の制度に幾多の改善を加へ、且つ其運用を適當に指導するときは、自由の保障、幸福の增進といふ本來の理想を實現すること必しも不可能に非ずと信ずるものであるから、一面に於てまた一種の樂觀說であるとも云へる。此說は今日多數の人に依つて唱へらるゝ通說である。而してわが所謂憲政有終の美を濟すの論は實に此說に根據して起るものである。何となれば此說は多少の努力を條件として結局の成功を信ずるの立場に在るからである。

所謂憲政は憲法の制定を以て初まる、けれども其有終の美を濟すには實に國民の多大の努力奮鬪を要すること前述の通りである。一擧にして有終の美を濟し得ざるところに、謂はば憲政の有難味があるとも言へるのであらう。要するに我々は立憲治下の國民として、其有終の美を濟す爲めに尙一層努力せねばならぬ。然しながら其努力は盲目的ではいけない。一定の主義方針に基く奮鬪努力たるを要する。然らば其一定の主義方針とは何であるかといふに、之は言ふまでもなく、

元と／＼憲法の制定を見るに至らしめた根本の思想でなければならぬ。所謂憲法の奥の奥に潜んで居るところの根本精神でなければならぬ。此根本の精神に從つて、我々は制度の足らざる所に改善を加へ、且つ其運用を適當に指導する事に全力を注がなければならない。一言にして之を云へば、所謂立憲政治は憲法の條文に據つて行ふところの政治なると共に、又其精神に據つて行ふところの政治でなければならぬ。我々は憲政の運用に當つて、憲法法典細かに定むるところの規定と相背いてはいけないが、更に進んで其規定の裏面に潜む精神に副うて居るかをも深く省察せねばならぬ。憲法々典の條項は法律學者に取つては成程唯一の大事な典據であらう。然し憲法政治の成果其物を大事とする我々國民に取つては、條項よりも寧ろ其精神が大事なのである。固より條項を離れて精神がないとも言へる。然し條項の活用も亦其精神をよく酌み取るにあらずんば、決して正しきを得ることは出來ない。之れ今日歐米各國に於て、相當に完備せる憲法法典を有するに拘らず、其運用の得失に就いて絶えず問題の起る所以である。憲法の未だ布かれざりし古にあつては、憲法を與へよと云うて天下の人は爭つた。憲法の已に與へられた今日に於ては、更に其精神に遵據して之を運用せよと云ふて、天下の物論は依然として囂々たりである。憲政の前途も亦多事なりといはねばならぬ。

然らば憲法の精神とは何か。之は一概に論ずる事は出來ぬ。國によつて必ずしも同一ではない。詳細の事は個々の憲法につき其條項を詳かに研究し、又其制定の來歷をも明かにして、初めて之を知るべき問題である。然しながら總ての憲法に通ずる所謂立憲政治一般の根據を成すところの精神といふものは、大體に於てまた之を知る事が出來ぬでもない。蓋し近代の憲法政治は疑もなく所謂近代の精神的文明の潮流と離るべからざるの關係にある。近代文明の大潮流が滔々として各國に瀰漫し、其醗酵するところとなつて憲法政は政現出たものである。然れば近代諸國の立憲政治には、

共通の一つの精神的根柢の存する事は爭はれない。尤も舊時代の遺物たる特權階級の今日尙勢力を振ふ國に於ては、世界の大勢に促されて憲法を發布したるに拘らず、依然之を舊式政治の思想を傷けざるやうに運用せんと欲して、自國憲法の精神が、何等他國の憲法と共通なる基礎を有せず、寧ろ自國特有の色彩を有する旨を誇示高調するものも少くはない。我國に於て往々見るが如き、純然たる國民道德の基本觀念たるべき國體觀念を憲法學へ援引して、西洋流の立憲思想に依る憲法の解釋を阻まんとする風潮の如きは即ち是れである。露國なども亦之と同樣で、殊更らに西歐憲法に通有なる諸原則の適用を阻まんが爲めに、わざ／＼共通の稱呼を捨てゝ、古風な文字を憲法條文中に使つて居る。斯くの如く、人によつては、各國立憲政治の共通なる精神的根柢の上に築かれたといふ性質を承認しないものがある。が、然し少しく近代の文明史に通ずるものは、諸國の憲法一として近代文明の必然的産物たらざるなきことを認めざるを得ない。之れ亦史實の明白に我々に示すところでもある。固より各國夫れ／＼の憲法は、一面共通なる精神を基礎とすると共に、他面各々其國特有の色彩を帶びて居る事は論を俟たない。此等各國特有の色彩は、之を概括する事は固より困難だが、其共通なる精神的根柢に至つては、近來世界の文明史上より推斷して之を知る事が出來る。是れ實に近代の憲法を理解し、其運用を指導する上に極めて必要なる準備智識である。所謂憲政有終の美を濟すの途は、實に此共通の精神を理解する事を以て始まらねばならぬ。而して予は此各國憲法に通有する精神的根柢を以て、民本主義なりと認むるものである。

憲政の精神的根柢――民本主義

民本主義といふ文字は、日本語としては極めて新らしい用例である。從來は民主々義といふ語を以て普通に唱へられて居つたやうだ。時としては又民衆主義とか、平民主義とか呼ばれたこともある。然し民主々義といへば、社會民主黨などゝいふ場合に於けるが如く、

「國家の主權は人民にあり」といふ危險なる學說と混同され易い。又平民主義といへば、平民と貴族とを對立せしめ、貴族を敵にして平民に味方するの意味に誤解せらるゝの恐れがある。獨り民衆主義の文字丈けは、以上の如き缺點はないけれども、民衆を「重んずる」といふ意味があらはれない嫌がある。我々が視て以て憲政の根柢と爲すところのものは、政治上一般民衆を重んじ、其間に貴賤上下の別を立てず、而かも國體の君主制たると共和制たるとを問はず、普く通用する所の主義たるが故に、民本主義といふ比較的新しい用語が一番適當であるかと思ふ。

民本主義といふ言葉は、實は西洋語の飜譯である。此觀念の初めて起つたのが西洋であるので、我々は觀念其物と共に名稱をも西洋から借りて來た。西洋では此觀念を表はすに、デモクラシーの文字を以てして居る。民本主義は即ち此語の飜譯である。西洋でデモクラシーといふ言葉は、聞くところによれば希臘語から起つて居るさうだ。希臘語でデーモスといふのが人民で、クラテオといふのが支配の意味。此二つから成つたのであるから、デモクラシーとは、要するに「人民の政治」の意味である。今更ら事新らしく說くまでもないが、古代希臘の國家は、今日歐米諸國に見るが如き漠大な地域を有するものではなかつた。周圍に多少の屬領地を有するさゝやかな都會其物が即ち獨立の國家であつた。從つて都會の市民が概して言へば國民の全部であつた。而して地域も狹く、人數も左程多くないから、此等の市民は總て直接に市政即ち國政に參與することが出來たのである。當時希臘以外の他の多くの國家に於ては、一人若くは數人の英雄が、君主又は貴族の名に於て國家を支配し、人民は只之に盲從するのみであつたのに、獨り希臘の諸國家に於ては、人民自ら政治するといふ特色を持つて居つた。此特色ある政體を指稱するが爲めにデモクラシーといふ言葉が生れたのである。尤も近代の國家と古代希臘の國家とは、今日色々の點に於て非常な差異があるから、古代の國家に通用する觀念を、直ちに今日の國家に當箝めるこ

とは出來ない。けれども人民一般を政治上の主動者とするといふ點丈けは、昔の希臘も今日の歐米諸國も同一である。そこで我々は今日の國家の政治上の特色を言ひ表はすに、昔の希臘に起つた文字を其儘借用するのである。

然るに洋語のデモクラシーといふ言葉は、今日實はいろ〳〵の異つた意味に用ひらるる。予輩の所謂民本主義は、勿論此言葉の譯語であるけれども、此原語を何時でも民本主義と譯するのは精確でない。デモクラシーなる言葉は、所謂民本主義といふ言義の外に更に他の意味にも用ひらるゝことがある。予輩の考ふるところに依れば、此言葉は今日の政治法律等の學問上に於ては、少くとも二つの異つた意味に用ひられて居るやうに思ふ。一つは「國家の主權は法理上人民に在り」といふ意味に、又モ一つは「國家の主權の活動の基本的の目標は政治上人民に在るべし」といふ意味に用ひらるゝ。この第二の意味に用ひらるゝ時に、我々は之を民本主義と譯するのである。第一の意義は全然別個の觀念なるが故に、又全然別個の譯語を當て嵌めるのが適當だ。而して從來通用の民主々義といふ譯語は、此第一の意味を表はすに恰かも適當であると考へる。從來我國では、西洋で此間の區別を顧みず、只一概にデモクラシーと稱へたと同樣に、第一の意味に用ひられた場合も第二の意味に用ひたる場合も、等しく之を民主々義と譯したのであつた。斯く一つの呼び方のみを以てしては、明白に異つた二つの觀念を錯亂混同するの弊害あるのみならず、又民主といふ名目の爲めに、民本主義の眞意の蔽はるゝ恐れもある。故に予は等しくデモクラシーといふ洋語で表はさるゝものでも、其意義の異なるに從つて、或は民主々義或は民本主義と、それ〳〵場合を分つて適當な譯字を用ふることにしたいと思ふのである。

民本主義と民主々義とは、明白に別個の觀念ではあるが、西洋で同一の言葉を以て言ひ表はされた丈け、其間の關係が又極めて近いものがある。從つて民本主義の何たるやを解するには、一通り民主々義の何たる

やを明かにする事が必要であり且つ便利でもある。況んや我國に於ては、民主の名に妨げられて、民本主義の適當なる理解を有せざるものが少く無い。爲めに民本主義の發達は幾分阻礙せられて居るの嫌なきを得ない。故に國民をして、民本主義の正當なる理解の上に憲政の發達の爲めに盡力せしむるといふ見地から見ても、此二者の區別を明かにすることは極めて必要であると信ずる。

民本主義と民主主義との區別

民主主義とは、文字の示すが如く「國家の主權は人民に在り」との理論上の主張である。されば我國の如き一天萬乘の陛下を國權の總攬者として戴く國家に於ては、全然通用せぬ考である。然し斯く云へばとて、民主主義を云々することが、直ちに君主制の國家に在つては危險なる、排斥せねばならぬ主張であると、一概に云ふことも出來ない。何故なれば、此主義にも細かく觀れば二つの種類があつて、其一方は成程國體擁護の立場から之を排斥せねばならぬものであるけれども、他の一方は必ずしも之を危險視するの必要はないものであるからである。然らば民主々義の二つの種類とは如何なるものを云ふか。

第一に民主々義は、凡そ國家といふ團體にあつては、其主權の本來當然の持主は人民一般ならざる可からずといふ形に於て唱へられることがある。之を予は絶對的又は哲學的民主々義と名づけたい。之は抽象的に國家の本質を考へ、其權力の所在は理論上必ず人民でなければならぬと説くのだから、此立場から云へば、共和國が唯一の正當なる國家であつて、君主國の如きは不合理なる虛僞の國家である。君主は人民より不當に權力を奪つたものであるといふ結論に達せざるを得ない。斯る意味で唱へらるる民主主義こそは、我國などで容れることの出來ない危險思想である。尤も此考は、佛國大革命の前後一時盛んに唱へられ、革命の原因は實に此説に胚胎して居るのであるが、今日では最早、此説の理論上の缺點は十分に認識せられ、君主國に於

ては勿論、民主國に於ても此說を其儘信奉するものは至つて尠なくなつた。只一部の極端なる社會主義者の間に此思想が今日仍ほ幾分殘つて居る位のものである。社會主義其ものは本來現在の社會組織の維持には反對するけれども、國權の所在を動かすことまでも主張するものではない。只現在の社會組織を維持せんとするものは、一般に國權の掌握者の保護の下に社會主義の要求を斥くるを常とするが故に、社會主義は一轉して民主主義となるの傾はある。現に西洋諸國の社會黨は、多くは社會主義の外に民主共和の理想を掲げて、之を二大根本主張として居る。獨逸の社會民主黨の如きは其最も明白なる例である。此點に於て我々は、我國の當局者が何も危險のない社會主義の學問的研究などを無暗に干渉するのを些か遺憾に思ふものであるけれども、社會主義者の實際的運動に對しては、相當に嚴しき制束を加ふるのを視て、多少之を諒とせざるを得ないと考ふるものである。何となれば、社會主義者の運動は多くの場合に於て、民主共和の危險思想を伴ふこと、從來諸國の例に明白であるからである。現に我國でも幸德一派の大逆罪は、社會主義者の間から輩出したではないか。社會主義を眞面目に研究せんと欲するものは、深く此點に注意するを要する。要するに國家の本質を哲學的に考察し、國權は絕對的に無條件的に人民にあらざる可からずと抽象的に斷定する時、民主々義は我國の如きに於て危險視され又排斥せられても仕方がないのである。

第二に民主主義は、或る特定の國家に於て其國の憲法の解釋上主權の所在は人民に在りと論斷するの形に於て唱へらるゝ事がある。之を予は相對的又は解釋的民主々義と名付けたい。之は總ての國家に通じて主權は常に人民に在らざる可らずと主張するのではない。即ち君主國の合理的所在を否認するものではない。君主國も亦民主國と同じく立派に存在する事を得るが、只憲法の解釋上疑が起つた場合に、其國の主權は憲法の解釋の上より見て、人民に在りと解さなければならぬと主張する時、此第二の意義の民主々義が成り立つ

のである。尤も大多數の場合に於ては、主權の所在といふ問題は憲法上初めから極めて明白なるを常とする。例へば我國に於ては帝國憲法第一條に、「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」とあり、又第四條には「天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行フ」とありて、憲法の解釋上毫も民主主義を容るべき餘地がない。又佛蘭西や北米合衆國に至つては、之に反して主權在民の意義極めて明白。是れ亦民主主義を認むべきや否やを爭ふの餘地は全然ない。されば憲法解釋上の議論としては、改まつて民主主義の主張が鹿爪らしく唱へらるゝ場合は極めて尠いといはねばならぬ。然しながら此問題は稀に實際上に全く起らぬでもない。例へば白耳義の憲法に於ては、第六十條に於て立派に世襲君主を認めて居りながら、第二十五條に於ては明白に「總テノ權力ハ國民ヨリ出ヅ」といふことを規定して居る。更に第二十九條には「國王ハ憲法ノ定ムル範圍內ニ於テ行政權ヲ有ス」とある。故に白耳義に付ては一體之を君主國と見るべきや民主國と見るべきやが甚だ明白でない。少くとも憲法解釋上の一疑問として論究せらるゝの價値はある。又英國に於ては、成文の憲法はないけれども、最近時々國家の權力は國王と貴族院と衆議院とより成るパアリアメントに在りと云ふことが云はるゝ。之は現に一九一三年四月十五日、愛爾蘭自治法案に關する首相アスキスの演說の中にも現はれて居つた。して見ると英國に於ては、國王は唯一の主權者ではないやうに見える。於是英吉利に於ても亦民主・君主の爭は憲法解釋上の一疑問たるを失はない。此等の場合に英吉利や白耳義の憲法を精細に研究し、其國體を民主なりと論ずるの說がありとすれば、我々は之に民主主義の名稱を與ふるに躊躇しない。此種の說が日本憲法の解釋として起ると假定すれば、これ亦一危險思想である。然し日本憲法を如何に牽强附會しても、こんな說の起りやう筈はない。然れば日本で此種の民主主義を云々する場合は、必ずそは專ら外國憲法の研究に就いてゞある。それならば何も危險として警戒す可き譯

のものでは無いのである。」

解釋上の民主主義の唱へらるゝ面白い例は獨逸帝國にある。獨逸は二十五の獨立國家より成る聯邦であるが、總つては名稱の示す如く帝國である。聯邦の首長は普魯西國王之に當り、子孫相繼いて皇帝(カイゼル)と稱することになつて居る。して見れば君主國たるに一點の疑ないやうであるが、獨逸の社會民主黨は獨り一種違つた解釋を之に下して居る。社會民主黨が其根本主張の一として共和主義を揭げて居ることは前に述べた。彼等の主張は凡て國家は元來共和國たらざる可からずと云ふに在るのか、或は國家としての價値は君主國體よりも共和國體の方が優つて居る、從つて共和制を理想とすると云ふに在るのか、此點は些か明瞭を缺くやうであるけれども、何れにしても共和主義を旗印の一つとして居ることは疑はない。然るに猶其上に彼等は獨逸憲法上の解釋として「獨逸は共和國なり」と主張せんとするのである。彼等は曰く、獨逸は名は帝國といふけれども、其法律上の性質は君主國ではない。成程之を組織する各聯邦の大部分は明白に君主國である。獨逸を組織する二十五の聯邦中には、王國が四つ、大公國が六つ、公國が五つ、侯國が七つ。他の三つは所謂自由市と稱する共和國である。故に少くとも二十二の獨立君主國を含んで居る。然し此等の二十二の君主國と三つの共和國とより成る所の全體は君主國ではなく一種の共和國である。只普通の共和國と違ふ所は、彼にあつては之を組織する單位が個々の人民であるに反し、此に在りては各獨立國家其物が單位である。然れば獨逸皇帝は世襲でこそあれ、又名をカイゼルとこそ稱すれ、其法律上の性質は、共和國の大統領と何等異なる所はない。プロシア國王として彼は君主の待遇尊稱を受け得ること、固より言を俟たぬ。然し獨逸皇帝としては彼はハンブルグやブレーメンなどの自由市の市長と何等其資格を異にするものではないと。斯ういふ見解を立てゝ獨逸の社會民主黨は獨逸の憲法を解して、一種の民主共和の原則に基くものと主張して居る。此說の固より牽强附會たることは論を俟たず、又此說

を取つては帝國議會の構成等の説明がつかないのであるが、併し彼等は獨逸は共和國なりと前提して實際上いろ／＼の面白い言動をなして居る。例へば彼等が、黨議を以て、皇帝萬歳、並びに宮廷伺候を禁ずるが如き即ちそれである。日本でも西洋でも、普通友人の間でも萬歳といふ言葉を唱ふるのであるが、然し本來の言葉の起りはたゞ國君に對してのみ唱ふべきものであるさうだ。そこで此意味に於ける萬歳は國君のみ獨り受くべきものであるから、大統領の資格を有するに過ぎざる獨逸皇帝には之を與ふべきものではないと、斯ういふ理由から、社會黨員は如何なる場合でも皇帝萬歳を合唱しない。議會の開院式閉院式などで議長の發聲で萬歳を唱ふる場合には、社會黨員は默つて退席するを例とする。尤も之は獨逸に於けるのみの例ではない。墺太利でも伊太利でも露西亞でも同樣である。又宮廷伺候即ち國君に對する例を以て儀式上宮廷に伺候するといふやうな事、之も社會黨は黨議を以て禁じて居る。社會黨の全盛を占めて居る自由市の市長即ち一國の大統領に當るべき市長は、天長節其他宮廷の重大なる祝賀に際して、臣禮を以て宮廷に伺候せざるは勿論、祝電をすら發しない。發すれば必ず自分と同格の他の自由市の市長に發する場合と同じやうな形式を取る。曾て皇帝が事があつてハンブルグに行幸された時、市長が皇帝の爲めに盛宴を張り、其歡迎の辭を述ぶるに當つて、「我が同役(マイン、コレーゲ)よ」と呼び掛けて、座にある人を驚かしたといふ話がある。此外社會黨は獨逸帝國刑法の中から不敬罪に關する項目を除くべしと云ふことを政綱の一として揭げて居る。不敬罪は君主的榮譽の反映である。共和國に不敬罪といふものはあり得ないといふ理窟に基く。甚だしきは帝國議會に於ける豫算討議の際、皇室費に關して皇帝の「賃銀(アルバイツ・ローン)」が高いとか安いとかいふ言葉を使ふものすらある。此等は無論甚だ不謹愼な言動であると思ふのであるが、社會黨の立場から言へば、皇帝を以て謂はば共和國大統領視して居るのだから、何も不都合はないと解して居るのだらう。獨逸皇帝が社會黨を見ること蛇蝎の如くな

るは亦怪むを用ひぬ。

以上の如く民主主義は、或は國權の所在に關する絕對的理論として唱へらるゝことがあり、或は特定國家の憲法解釋上の判斷として主張せらるゝことあるがが、何れにしても、國權の法律上の所在は何處に在るかといふ問題に關して居る。從つて此主義が初めから君主國體たることとの明白なる我國の如きに通用のないのは、固より一點の疑を容れぬ。されば予が近代各國の憲法——民主國體たると君主國體たるとに論なく——の共通の基礎的精神となすところの民本主義とは其名甚だ似て其實頗る異なることは、極めて明白であると信ずる。

民本主義に對する誤解

所謂民本主義とは、法律の理論上主權の何人に在りやと云ふことは措いて之を問はず、只其主權を行用するに當つて、主權者は須らく一般民衆の利福並に意嚮を重ずるを方針とす可しといふ主義である。即ち國權の運用に關して其指導的標準となるべき政治主義であつて、主權の君主に在りや人民に在りやは之を問ふ所でない。勿論此主義が、ヨリ能く且ヨリ適切に民主國に行はれ得るは言ふを俟たない。然しながら君主國に在つても此主義が、君主制と毫末も矛盾せずに行はれ得ること亦疑ひない。何となれば、主權が法律上君主御一人の掌握に歸して居ると云ふことと、君主が其主權を行用するに當つて專ら人民の利福及び意嚮を重んずると云ふこととは完全に兩立し得るからである。然るに世間には、民本主義と君主制とを如何にも兩立せざるものなるかの如く考へて居る人が少く無い。之は大なる誤解と云はなければならぬ。

民本主義に對する誤解の大部分は、理論上の根柢なき感情論に出づる場合が多い。殊に從來特權を有して獨り政權に參與し來つた少數の階級は、其特別の地位を損はれんことを恐れて、感情上盛に民本主義に反抗するのであつた。蓋し民本主義は特權階級の存在に反抗するものなるが故に、彼等の喜ぶ所とならざるは固

より止むを得ない。此等の感情に基く誤解乃至反抗は、我等の茲に理論を以て論駁すべき限りではない。只此等の少數の階級は本來多くは國家の先覺者たるべき地位に居るものであるのに、時勢の變を知らず大勢の推移に眼を掩つて、徒らに舊時代の遺物たる特權の擁護に熱中するのは、予輩の甚だ遺憾とする所である。加之彼等の如斯態度は一面亦憲政の發達を阻礙すること夥しきものがある。此事は少しく特に論辨するの必要がある。

元來之等の少數特權階級の連中は憲政の進歩の上に一種特別の使命を有して居るものである。即ち彼等は從來國家の待遇殊寵を受けて居つた其地位を利用し、常に一歩民衆に先んじ社會を指導し民衆の模範たるの實力を養ふと共に、謙遜つて又民衆の友となり民意の代表者となりて、公に役するの本分を有つて居るものである。換言すれば社會組織の實質的關係に於て彼等は飽くまで民衆の指導的精神たるの抱負を有せねばならぬものである。尤も彼等は社會組織の形式的關係に於ては飽くまで民衆の僕を以て居らねばならぬ。即ち表向きは何處までも民衆の勢力といふものを先きに立てながら、內實に於て彼等は民衆の指導者となるべき天分を有して居るのである。此關係が紊れざるときに、社會は健全であり、憲政も進歩する。若し彼等にして民衆を率ゐるの實際の識と能となく而かも傲然として民衆を司配せんと欲するならば、こゝに社會は大缺陷を現出する。民衆と親まざる少數者と、指導者を欠く民衆と、兩々相對抗して徒らに紛更を重ね、憲政の進歩發達は停滯せざるを得ない。今日憲政の運用蹉跎として振はざる國は多くは此等の特權階級が徒らに舊時代の夢想に耽る所の國である。過去に於て彼等は形式的制度の上で一般人民の司配者であつた。新時代に於ては彼等は實質上の精神的司配者たるに甘んじ、又之を以て其天分と爲し、形式司配者の地位は潔く之を人民に讓らなければならない。時代の變遷に應じて、彼等の態度彼等の心事に一變遷を見ざる以上は、憲政の眞の發達は期せられない。世人動もすれば憲政の發達

今日意の如くならざるは國民の思想の進歩せざるに在りといふ。然しながら國民思想の進歩すると否とは、實は先覺者が之を適當に指導するや否やによつて定まる。少數の先覺階級が依然固陋の見解を改めずしては、如何に口に立憲思想普及の必要を唱へても、國民一般の心裡に健全なる政治思想を扶植することは出來ない。此點に於て予は、社會の上流に居る少數の賢明なる識者階級に向つて、彼等自身の立憲思想の眞の理解と又民衆に對する指導の職分の自覺とを希望せざるを得ない。況んや、國際競爭の激烈なる今日、國民の自覺自開によつて國家の內面的勢力を充實するの極めて必要なる今日に在ては、此等先覺者の指導によつて國民の自奮を促すこと實に焦眉の急に屬する。鎖國時代ならば、日本には日本の特色があるとか、支那には支那の特色があるとか云つて、世界と沒交渉に各々獨自の方向を歩んで居つてもよかつたらう。然し今日の時勢は、斷じて之を許さない。我々は今や世界と共に進歩し、世界と共に同じ途を競爭せねばならぬ運命に置かれてある。

感情論に基く誤解の外、尙ほ相當の理論的根據に基いて、或は少くとも相當の理論的根據に基くの外觀を呈して、民本主義を難んずるの議論がある。其一つは民本主義と民主々義とを混合し、少くとも其間の區別を明白に認識せずして、之を以て恰かも主權在君の大義に悖る說なるが如く考ふるものである。從來の用語例では、只一つの民主々義といふ言葉を以て二つの異れる觀念を言ひ表はして居つたのであるから、從つて此種の誤解を抱くものの在つたのも無理はない。然し此考の誤りなる事は前に述べた所でも明かであるから、玆に再び之を論辯せぬ。第二の民本主義發達の沿革に徵して、民本主義は常に必らず民主々義と提携するといふ事實に基き、此點に於て君主制と相容れないと觀る考である。此一派は更に主張して云ふ。民主主義の確立は革命と云ふ階段を經た。而して革命は民本主義の流行に基いて居る。斯くして民本主義は歷史的に見れば民主々義と明白に分化せずして共存して居つた。

曾に過去の歷史に於て然るのみならず、今日でも民本主義の要求は其激する所往々にして民主的革命的傾向を帶び易い。即ち民本主義は民主々義を伴ひ易いのである。して見れば民本主義と民主々義とは理論上明白に別個の觀念であるとしても、實際の運動として現はるゝ時は、二つのもの必ず一所になる因縁を有して居ると。此說は或る點までは眞理である。成程憲政發達の歷史を見ると、多くは革命といふ階段を經て居る。前に述べた通り、近世憲法の發達は細かく見ると三つの違つた徑路を取つて居り、其中、米國系統の憲法は何等抗爭すべき特權階級のない新天地に現はれたのであるから、此方には殆んど革命といふ階段はない。革命といふ危險な經過を取つてゐない代り、始から人民主權の原則に基いて居るので、米國流の憲法の下に於ては民本主義と民主々義とは適用上明白に區別して認識されて居ない。之に反して大陸諸國の憲法は、屢々述べた如く、特權階級に對する民權の抗爭の結果として現はれたものであるから、其程度に緩急の別はあるけれども、何れも共に革命といふ順序を經て居る。英國は比較的除々に進歩したものであるけれども、然し革命的民主思想の發現は歷史上に屢々其例を殘して居る。若し夫れ佛蘭西の憲法に至つては、古今に絶する慘憺たる革命の結果として出來たものなること敢て多言を要しない。尤も特權階級の打破といふ目的は、佛國ですら之を十分に達し得なかつたから、純粹の民主主義の極度に主張し得ざるを發見した結果、民本主義の觀念段々明白に認識せらるゝ様になつたけれども、然し其初めに於ては二者の觀念明に區別せられず、斯くて歐羅巴大陸の憲法は概ね等しく革命的民主思想の賜として現れたと云はねばならぬ。其のみならず、民本主義の觀念が稍明白になつた後でも、其要求を貫徹せんと努力するに際し、特權階級の强き反抗に逢はん乎、彼等は之を打破せんと熱中するの餘り、時々革命的民主思想を以て脅かしたと云ふ事例にも富んで居る。故に民本主義と民主々義とは宜しく之を區別して認識すべしといふことは、談甚だ容易なれども、實際

の適用にも之を嚴格に相分たんとするは、頗る困難と云はねばならぬ。此點に於て一部の識者が民本主義の流行を憂ふるのは、一應の理由はあると思ふ。然しながら、其起源に於て革命的民主思想に出でたからと云つて、何時でも危險なものであると斷定するの誤なるは、例へば人間が猿より出でたるが故に常に猿の如き劣性を有するものなりとする論法と同一であつて固より取るに足らぬ。のみならず多少の危險を伴ふ恐れあるが故に之を禁ずべしといふのは、恰かも多少突飛な人間の輩出するの恐あるからと言つて、女子に高等の敎育を授くべからずといふが如きものにして、社會國家の進歩發展を念とするものゝ、固より採らざるところである。多少の弊害の出現に逡巡しては進歩發達の事業は何一つ手が出せない。國家社會の發達に必要なりとすれば、ドン〳〵其目的に協ふ方法を探るべきである。而して之によつて生ずるの恐ある多少の弊害は、我々之を防止するが爲めに大いに奮闘せねばならぬ。我々は徒に安逸を貪つて從來の因襲に籠城すべきではない。發展は奮闘を要する。我々は立憲國民として先づ快よく世界の大勢に門戶を開放し、積極的に國家社會の大進歩大發展を計らねばならぬ。而して又退いて之に伴ふあらゆる災害と大に戰ふの覺悟をきめねばならぬ。是れ實に立憲國の先覺者を以て任ずる者の光榮なる責任である。此責任を辭せざるの覺悟ある以上、我々は民本主義を採用しても、何等國家の將來に憂懼すべき必要はないと信ずるものである。

民本主義の內容(一)——政治の目的

予は前段に於て、民本主義を定義して『一般民衆の利益幸福並びに其意嚮に重きを置くといふ政權運用上の方針である』と言うた。此定義は自ら二つの內容を我々に示す。一つは政權運用の目的即ち「政治の目的」が一般民衆の利福に在るといふことで、他は政權運用の方針の決定即ち「政策の決定」が一般民衆の意嚮に據るといふことである。換言すれば、一は政治は一般民衆の爲めに行はれねばならぬといふことで、二は政

治は一般民衆の意嚮によつて行はれねばならぬといふことである。之れ實に民本主義の要求する二大綱領である。

民本主義は第一に政權運用の終局の目的は「一般民衆の爲め」といふことにあるべきを要求する　凡そ物には皆夫れ〳〵の目的がある。然らば政治は結局に於て何物を獲んが爲めになさるゝのか、又なさるべきものか。即ち政治の終局の目的如何といふに、此點は時代によつて必ずしも一樣ではない。ずつと昔の時代にあつては、少數の强者の生存繁榮が確かに政治の目的であつた。此時代に於ては一般人民は此目的を助くる爲めの道具に過ぎず、謂はば牛馬の如き役目を勤むるものに外ならなかつた。我國の歴史を見ても、古代には皇室と其周圍にある少數の貴族が政權の運用を決定する中心的勢力であり、彼等の利害休戚が即ち全體としての政治の目的と目指すところのものであつた。一般民衆の利害休戚の如きは、少くとも意識的には當時の政治家の顧るところではなかつた。最もよく平民的政治の行はれたと稱せらるゝ古代希臘の都市的國家に於てすら、市部以外に在住する民衆は、奴隷として市民の爲めに牛馬の用をなしたに過ぎなかつたと言ふではないか。されば古代に於ては政治の目的は少數强者の生存繁榮又は其權力の保持に存し、決して人民一般の利福ではなかつた。降つて中世以後の封建時代に至れば、人民一般の利害休戚は餘程尊重せらるゝやうにはなつた。けれども此時代と雖も、人民の利福が政治上の根本終局の目的となつたのではない。何となれば、此時代に於ける政治の中心的勢力は、封建諸王侯並びに其周圍になる武士の階級である。而して武士階級は即ち封建諸王侯の一族郎黨に外ならぬ。故に此時代に於ては、王室の利害安危其物が實に唯一の天下の大事であつた。國土と人民との如きは、當時の觀念に於ては、王室の私有財産に外ならない。只此時代に於ては、國土と人民とが王室の依て以て立つ處の基礎であるといふ關係が餘程明かになつたから、此根據を培ふと云ふ意味に於て民衆が段々尊重せられたのであ

る。是れ一つには群雄割據して互に爭ふといふ時勢の影響でもあらう。凡て國際的競爭は政治階級をして益々民衆に頼るの念慮を深からしむるものである。故に王室の利害休戚其物が當時實に唯一の國家問題ではあつたけれども、然し「お家」を大事にする爲めには其據るところの基礎たる國土臣民をも愛護し、撫育するといふ必要を感じて、そこで當時の政治は頗る人民を勞はると云ふ事になつたのである。故に例へば新井白石の如き、或は熊澤蕃山の如き、當時の政治學者の所謂政治の要訣を論ずるものを見るに、一つとして人民を愛護するの必要を説かざるものはない。然しながら何の爲めに人民を愛護するのか、と問へば、「お家」の安泰の爲めに必要なればなりといふに歸する。恰度我々が下女下男を使ふに方つて、出來る丈け手當を薄くして給與を節約するよりも、而倒を見てやつて親切に厚遇した方が、結局家の爲めになるといふ慈善論と同一の算法である。封建時代に於ける所謂仁政といふものは、畢竟其根本思想は如斯ものである。故に封建時代に於ては、賢明なる君侯の下に於ては、人民は相當に幸福なる生活を營むを得たものである。而して之等の人民は君侯の仁德を仰いで敬慕措かざるものあり、其間一點の不平がなかつたのである。けれども今日の我々から見れば、彼等は畢竟慈悲深い主人の下に於ける幸福な下女の如きもので、權利として自家の利福を主張することを許されたのではない。故に一旦お家の大事となれば、人民の利福は蹂躙せられても彼等に文句はなかつた。之を例ふれば、一旦主人が破産でもすれば、下女は約束の給料を貰ふことの出來ぬは勿論、着て居るものも脱いで、何も彼も主人の家の爲めに取上げられても仕方がないといふのが、封建時代の有樣であつた。只多年仁政を布いて居つたが爲めに人民に不平はなかつたまでの事である。されば平素仁政を布いて居なかつた處では、斯う云ふ場合には屹度百姓一揆などが起つたものだ。我が民本主義は、以上の如き地位に民衆を置く事に反對するものである。即ち政治の終局の目的が一轉して「人民一般の爲め」でなければ

ならぬといふことを要求するものである。單純なる民衆の利益幸福を要求するに止まるものではない。なぜなれば、人民の利益幸福は、封建的思想の下に於ても、明君賢相の下に於ては之を期待することが出來るからである。然し名君賢相が何時でも其位に居るといふ事は豫め期することが出來ない。故に制度としては、封建的組織の下に於て人民の利福は永久に安全なるを得ないといはねばならぬ。是に於て民本主義は、人民一般の利福を以て「政治の終局の目的」とすべく、斷じて或る他の目的の手段となすべからざる事を要求するに至つた。一部少數のものゝ利害の爲めに一般の利福を犧牲にするは、現代の政治に於て斷じて許すことは出來ない。貴族とか、富豪とか、其他種々の少數者階級の便益の爲めに、民衆一般の利福を蹂躙するが如きは、民本主義の最先に排斥するところのものである。

尤も斯くいふと、人或は民本主義を以て我國建國の精神たる忠君の思想に背くと難ずるものあるかも知れぬ。民本主義は封建時代の『お家の爲め』といふ思想に反對する。『お家の爲め』といふ事を大きく見れば、皇室のお爲めといふことになる。然らば民本主義は、皇室のお爲めに人民の利福を無視する場合にも反對するのかと問ふ人があるであらう。此批難に就いては次の二つの點を以て答へる。第一に『皇室のお爲め』といふことと、人民の利福の上に立つところの國家の爲めといふこととは、今日斷じて相矛盾することはない。封建時代に於けるが如く、國家内に幾多の小國家が併立する場合には、多くの人の中には小國家あるを知つて大國家あるを知らないものが少くない。現に我國でも昔藩と藩と相敵視して國家を忘れた事例に富むではないか。赤穗義士の如きも、藩的見地から見れば其擧眞に讃嘆に値すべきも、國家的見地から見れば、寧ろ一種の罪惡である。我々は只彼等の動機に偉大なる或物を認むるが故に、今日尚之を賞讃して措かざるのである。又維新の當時長州藩が英國軍艦の砲撃を受けた際には、對岸の小倉藩邊の人間は小高い山などに上つて高見の見物をして居つた。文字通りに對岸の火災視し

て居つたとのことである。是れ皆國家的觀念の乏しかつた爲めである。從つて小國家に執着する考が國家全體の利害と衝突することは決して珍らしくはない。此點から見れば、封建時代に於ける「お家の爲め」は、必ずしも國家の爲めにはならない。然しながら今日は、皇室は國家の唯一の宗であるから、皇室の爲めに國家民人の利害を無視せねばならぬといふやうな場合に立ち到る事は到底考へられない。從つて「皇室の爲め」と「人民の爲め」と、相逆ふことは絶對にないと信ずる。第二に假りに一歩を讓つて二者相逆ふ事がありとしても、民本主義は即ち主權者の主權行用上の方針を示すものなるの立場からして、君主は漫りに人民の利福を無視すべきものではないといふ原則を立つるに何等差支はない。只假りに、皇室のお爲めに人民の利福が無視された場合ありとして、此際人民は如何なる態度を取るべきかといふ問題になれば、之れは例へば主人の破產の場合に下女などが、着て居るものまでも脱いで主家を助くべきや否やといふ類の問題と同一で、本來上下兩者の道德的關係に一任すべき事柄であつて、制度として法律上之を何れかに强制することは却つて面白くないと思ふ。封建時代にあつては、謂はゞ平素小恩を售つて、いざといふ場合には、其全人格を擧げて奴隸的奉仕をせよと迫るのであるが、平常如何に面倒を見てやつたとて、萬一の場合には月給を渡さなくてもよい、着て居る物も脱げといふことを今日規則として定めて居たとしたら、使はるゝ者は之れ程不都合な規則はないと思ふであらう。主人が不時の窮迫に陷つた時、下女が之を助くると否とは之を德義問題として、全然兩者の自由意思に任かしたい。制度として强制するのは、却つて兩者の圓滿なる關係を水臭くする所以ではあるまいか。況んや君臣の實質的關係の如きは、もと永き歷史の所產であり、法律的制度を以ては一點一劃の微も新に之を增減することは出來ないものである。何となれば之は多年の歷史に薰陶されたる國民の精神に根柢を有して居るからである。陛下の御爲めには水火も之を厭はずといふのは、日本國民の覺悟で

ある。然しながら此覺悟あるが故に、國家は時に人民の利福を無視しても可なり、人民は之に甘んぜざるべからずと制度の上に定めたならば、是れ却つて忠良なる國民の精神に一種不快の念を抱かしむる基となるものではあるまいか。故に予は、事實國家が國民に多少の度を超えたる犧牲を要求する場合に、之に應ずべきや否やは、國民の道德的判斷に一任することにしたい。制度としては、何處までも漫りに人民の利福を無視することはせぬといふ事に極めて置きたいと思ふ。斯く極めても、我が忠良なる國民は、決して一身の安全を計つて君國の爲めに計るに躊躇逡巡するものではない。蓋し忠君の思想は建國の精神にして且つ國體の精華である。之を制度の上にわざ〳〵駄目を押すが如きは、百害あつて一益なきを信ずるものである。

斯く考へて見れば、民本主義が制度として十分に人民利福の尊重を力說するのは、我國に於て毫も不都合を見ない。人民が各々其自由の判斷を以て己れを空うして人の爲めに盡すのは、固より民本主義の尤むるところではない。只此本來道德的なるべき行爲を制度の上にあらはし、以て人民利福の蹂躙に是認の口實を與ふるが如きことは、民本主義の極力反對する所なのである。

之を要するに、民本主義を基礎とする現代の政治は、「人民の爲め」といふことを終局の目的とする。何物の爲めにも人民全體の利福は之を犧牲とするを許さぬ。然るに此點は今日各國に於て十分に貫徹せられて居るかといふに、必ずしもさうではない。其理由の一つは、矢張り封建時代に多年養はれたる思想と因襲とが、民本主義の明白に承認せられたる今日、尙種々の形に於て制度の上に殘存し、「人民の爲め」と云ふ趣意の十分なる貫徹を妨げて居るからである。此傾向は西洋でも、立憲政治が上下兩階級の衝突並びに其妥協の結果として發達した國に多い。而して此民本主義の徹底的發現を妨げて居る最も主なる原因は、舊時代の遺物たる所謂特權階級の存在である。特權階級が法律上與へられたる特權を、適當に利用するに止まるならば、大した

弊害もないといへるけれども、彼等は兎角此特權を楯として、漫りに民權の發達に反抗する。彼等は過去に於ては法律上特權を有つて居つたが爲めに、更に政治上にも特種の地位を得、從つて獨り政權に參與するの特典を有して居つた。而して彼等は此等の特別なる地位を永久に壟斷せんが爲めに、動もすると人民一般の利福と衝突し、「人民の爲め」の政治に逆ふの傾向を示す。元來特權階級の存在其物は、國家に取つて決して無用の現象ではない。國家に勤勞ある者を優遇し、且つ之に特權を與へて、子孫相繼いで國民の指導的精神たらしむるといふことは元來結構なることである。此意味に於て、國家が貴族といふものを設定し、且つ存置して置くのは、極めて有益なことであると信ずる。然し實際上多くの場合に於ては、彼等は其特種の地位に狃れ、以て國家優遇の恩に背くこと甚だ少くはない。甚だしきは、其特權を濫用して、一般の利福を蔑ろにするものすらある。故に、近來の政治上に於ては此特權階級は盛に民本主義の反抗を買ふに至つて居るやうである。

特權階級に對する民本主義の抗爭は、十九世紀の初め、歐羅巴に於ては相當に激しかつた。殊に特權階級が其特權に戀々として民本主義の要求を淡泊に承諾しなかつた國に於ては、此爭は相當に永く續いた。然し今日となつては、此等の問題は大抵一通りは解決がついたやうである。若し今日尙此種の問題の殘つて居る處ありとせば、歐羅巴に於ては露西亞位のものであらう。英吉利では上の階級が十分に一般階級の要求を了解せる事により、獨逸に於ては兩者の疏通未だ完きを得ざれども、上の少數者が常に道德智識に於て遙かに平民を凌駕し、其實力を以て民衆を服する點に於て、兩國共に上下兩階級の爭は之を略々解決して仕舞つたと云つてよい。翻つて我國は如何といふに、不幸にして、一方には民衆の智見未だ此問題を了解し且之を主張するまでに發達して居ない。只他方に於て特權階級は、大體に於て漸次民衆の要求を理解し、從つて之に處する所以の道を悟りつゝありと認めらるゝのである

が、只一部のもの丶間には、或は自ら高く標置して民に謙遜るの雅量なきものあり、或は貴族の特權に氣驕りて、奮勵以て實力を養はんとせざるものあり、爲めに貴族に關する反感侮蔑の念を知らず識らず民間に挑發しつ丶ある者あるは、誠に憂ふべきことであると思ふ。蓋し民本主義の要求は、兎も角も世界の大勢である。民本主義と特權階級との關係は、兎も角も如何様にか解決せられねばならない。此兩者の關係が平穩の間に解決せられ、以て社會の健全なる發達の素地を作らんとするには、我々は一方に於て民衆の智見の發達を計ると共に、尚他方に於て大いに上流社會の反省を希望するの要求がある。

尚之に關聯して注意すべきは、近頃我國などに於て、右の歴史的特權階級の外に、新たにいろ/\の特權階級が發生するの傾向があることである。中にも最も著しいのは金權階級である。俗用の語で所謂資本家なるものである。而して此階級に對しては從來社會主義の反抗があつた。此兩者の關係は恰かも民本主義の歴史的特權階級に對する關係と似て居る。抑も社會主義が資本家に對して抗爭する所以の根本動機は、是れ亦社會的利福を一般民衆の間に普ねく分配せんとするの精神に基づく。此點に於て社會主義は又民本主義と多少相通ずるところないでもない。只社會主義は現在の社會組織に革命的變動を與へんとするが故に、恰かも民主主義が君主國に於て危險視されるが如く、多くの國に於て同じやうに危險視される傾があつた。然しながら、經濟上に優者劣者の階級を生じ、爲めに經濟的利益が一部階級の壟斷に歸せんとするの趨向は、是れ亦民本主義の趣意に反するものなるが故に、近來の政治は、社會組織を根本的に改造すべきや否やの根本問題まで遡らずして、差當り此等の經濟的特權階級に對しても亦相當の方法を講ずるを必要として居る。所謂各種の社會的立法施設は即ち之れである。此意味に於て、民本主義が經濟的特權階級とも爭ふといふことは、近代各國に通有の現象である。今我國の狀態を見るに、近時所謂資本家なるものが頭をもたげ來り、其廣大な

金權と政權

る金力を擁して漸く不當に社會公共の私益を蹂躪せんとして居る。尤も這般の傾向は亞米利加ほど激しくはないが、然し最近資本家の勢力といふものは著しく加はつて來た。殊に日清・日露の兩戰役後は著しく彼等の勢力を增した。金權は、何れの世に於ても一種の勢力たる事を失はないが、然し日清戰爭以前に於ては、實は金權は遙かに政權の下に屈して居つた。更に遡つて明治の初年に至れば、金權は即ち節を政權の門に屈し、其庇護の下に漸く財力の增殖を計つて居つた。例へば三菱の大隈伯に於けるが如き、三井藤田の井上侯に於けるが如き、皆それである。然るに日清戰爭は初めて政權をして金權の前に助力を乞はざるを得ざらしめた。斯くて金權は初めて政權と對當の地位に立つ樣になつたのである。若し夫れ日露戰爭に至ては、桂公の政府は徹頭徹尾資本家の前に叩頭して其財政的助力を求めたのである。是に於て金權は一躍して時に臨んで政權を左右し得るの大勢力となつた。富豪が爵位を貰つたのも、皆此時以後の出來事である。中には男爵を授けらるゝことを條件として、多額の軍事公債に應ずる事を承諾したものもあると言はれて居る程である。斯くして金權は政權に迫り、自家階級の利益の爲めに種々の不當なる法律の制定を要求したのである。資本家階級の獨り之を便とし、一般民衆の爲めには最も不都合なる各種の財政的立法の、今日に嚴存するのは皆此結果である。斯くして我國に於ては最近新たに、法律に依つて不當に其利益を保護せらるゝ一新特權階級を生じたのである。此種の特權階級は、將來民本主義の要求と接觸して、如何に其間の調和を見るかは、我々の最も憂慮し且注目するところである。金權階級は事物質上の利害に關するが故に、容易に一般民間の聲を聞かうとしない。故に我國に於て他日若し此方面の問題に關して、頗る解決に困むものありとすれば、恐らくそは此財政的特權階級の問題ではあるまいか。若し夫れ此財政的特權階級が、歷史的特權階級と結托して、傲然民本主義に臨むことあらん乎、國家の不祥之より大なるはない。予は此點に關して切に識者の注

意を惹起し、且つ國家の至寵を恣にする貴族富豪の反省を乞はざるを得ない。

之を要するに、政治の終局の目的が人民の利福にあるべしといふ事、是れ民本主義の第一の要求である。一見民衆一般の全體の利益と係はりないやうに見えても、詮じ詰むれば、全般の利益幸福となるといふものならば、そは民本主義に悖らない。終局に於て民衆一般の爲めになるかならぬかゞ標準である。假令民衆一般の爲めになる外觀を呈するものでも、之が他の目的の副産物として來るものであつては、是れ固より民本主義の滿足を買ふことは出來ないものである。

民本主義の內容(二)――政策の決定

第二に民本主義は政權運用の終局の決定を一般民衆の意嚮に置くべき事を要求する　民本主義は、政治の目的を一般人民の利福に置くのみならず、政策の決定についても、一般人民の意嚮を終局に於て重要視することを要求するのである。終局に於て人民の意嚮を重く見ると云ふことは、必ずしも個々の問題について一々人民一般の意見を聽くといふ意味ではない。人民の意嚮に反しては何事もしない、すべての政治的活動は明示又は暗默の人民一般の承認なしには行はれねといふ大體の主義を云ふのである。

政策の終局的決定を人民の意嚮に據らしむべしとする主張の理論上の根據は、恐らく何が人民一般の利福なるかは人民彼自身が最もよく之を判斷し得ると云ふことにあるのであらう。政治にして人民一般の利福を目的とする以上、其運用は須らく何が所謂人民一般の利福なりやを最もよく知れるものが之に當るを必要とする。而して自家の利福の何たるかは其本人が一番よく之を知つて居るものであるから、近代の政治は、人民一般をして終局的に其方針を決定せしむることが最も能く其目的に適合すると認めたのであらう。啻に之ばかりではなく、更に此主張には實際上の理由もある。そは少數者の政治は啻に適當に多數の要求を按配することが出來ないのみならず、往々にして自家階級の利益

の擁護に急なるの餘り、其地位を濫用して不當なる政治をなすの弊があるからである。此點に於て人民一般の意嚮を重んずるの主義は、政治を適當ならしめ、公平ならしめ又清潔ならしむるの効用がある。

然るに民本主義の此第二の要求に對しては、世上之を難ずるの議論が相當に强い。今此等の批難を細かく觀察して見ると、大體三つの種類があるやうに思はれる。

第一の批難は、民本主義は憲法上君主大權の義に反するとする説である。卽ち人民の意嚮を終局に重んず可しと云ふは、君主々義の憲法の精神に背くと云ふのである。此批難にも細かく分つと更に二つの細別がある。一つは、先に民本主義全體に對する誤解として擧げたものと同樣であるが、予の所謂民本主義を民主々義と混合し、政權運用の終局の決定を人民に移すべしといふは、則ち主權を君主の手より奪つて人民に歸するものなりと爲し、以て我國の如き君主國に在つては許すべからざる僻論なりと論ずるのである。此説の謬りなる事は已に述べた。繰り返すまでもなく、民本主義は政治上の主義であつて法律上の説明ではない。法律上主權は君主に在りとして、其主權者が主權を行用するに當り、如何なる主義方針に據るべきかといふ時に、民本主義は現はれ來るのである。何等君主々義と相矛盾するものではない。君主國體の擁護の爲めに危險なる民主々義を排斥せんとするは、吾人も固より同意同感であるけれども、只之が爲めに、名似て實異なる民本主義の政治的發達までも阻礙するやうな事があつては、憲政の前途の上に容易ならざる大事であると思ふのである。もう一つの批難は、假令政治上の主義にもせよ、君主は其權力を行使するに當つて常に必らず人民一般の意嚮を參照せねばならぬと慣行が極つては、夫れ丈け君主の大權が制限せられ、從つて君主大權の自由行動を妨ぐる結果となると云ふ説である。併し此種の論者は、君主の大權なるものは、立憲國に於ては初めから各種の制限を受けて居るものであるといふ事を心付かざる人々である。制限と云ふ言葉を使へ

ばこそ世人は兎角之を氣にするのであるけれども、之に代ふるに「道」といふ文字を使つたならば何うか。即ち立憲政治は我儘勝手なる政治にあらず、「道」を以て國家を治むるの政治であるとすれば、「道」は即ち主權の自由行動に對する一種の制限ではないか。而して此所謂「道」は法律上にも政治上にも現はれ、換言すれば君主の大權は法律上並びに政治上共に各種の制限を受くるのが立憲諸國の通例である。尤も憲法學者中には憲法による君主大權の制限は自ら自己の行動に加ふる制限なるが故に、之を法律上嚴格に制限と稱すべきものではないと論ずるものもあるから、暫らく此種の理論に讓歩して法律上君主の大權は絶對無制限であるとして置かう。然し一轉して政治上に於ては如何といふに、此方面に於ては各般の制限を受けて居ることは疑はない。君主の大權が此種の制限を受けて居ると否とが實に立憲專制の別るゝ所であつて、所謂憲法的諸制度なるものは實に君主大權の制限を目的とする政治的設備に外ならないのである。但だ此等の制限は、客觀的に觀れば制限に相違ないが、主觀的に觀れば主權者の取るべき「道」であると言へる。此點に於て國體觀念の上に於て君主が絶對最高の主宰者たるの實は少しも傷けらるゝことはないのである。只此絶對最高の主體者が如何なる場合にも全然無制限に行動することは、幾多の弊害を生ずるの恐あるが故に、近代の政治は玆に種々の制限を認めたのである。此制限を厭ふならば、初めから立憲政治を採用せぬがよい。苟くも世界の趨勢に從つて立憲政治を採用した以上は、君主の大權が諸般の制限を受くるは之を當然と見なければならない。且又君主が各種の制限を受くるといふ事は、政治上實は極めて有益なことである。人或は純粹なる君主國に於ては、啻に君主が法律上國權の唯一の掌握者たるのみならず、又實際に於て君主獨り自ら自由に之を擅行するものでなければならぬと主張するものもある。けれども君主は事實上に於て決して萬能の御方ではあらせられぬ。其御一人の單獨の意思を以て、何人にも御相談なく、天下の事を專斷決行さるゝと云ふ事

は決して無い。のみならず斯くする事の極めて危險なる制度たるは申すまでもない。されば實際上に照して見ても今日百般の政務を君主が單獨に決裁し賜ふといふことは事實何れの國にも之を見ない。獨逸皇帝ウィルヘルム二世陛下の如き近代稀に觀る多才多能の御方でも、複雜なる政務の裁決には幾多大臣の智慧を藉りるの必要に迫られて居るではないか。されば絕對的の無制限の自由行動といふ事は、事實上之を望み得ない。よし之を望み得ても、斯くの如きは常に偉大絕倫なる且多才多能なる名君の相繼いで輩出するといふ條件の許に、初めて弊害なく行はるゝを得るものである。斯く觀れば、君主の行動が相當の制限の下に爲さるゝと云ふことは、事實必要でもあり又望ましいことでもある。斯くの如く立憲政治に於ては君主の大權は初めから制限を受くるものである。制限を受くるを可とするや否やは最早問題ではない。若し問題となるものありとすれば、君主の大權が如何なる種類の制限を受くべきやといふ點にあらねばならぬ。即ち人民一般の意嚮に聽くといふ制限を受くべきや、又は君側二三者の意見に諮ると云ふ制限を受くべきやといふ樣な問題に歸する。然るに一部の論者は、廣く人民の意嚮に聽くは君主の大權に對する制限と觀るに拘らず、然らざる場合には丸で君主大權の制限を說かないのは、甚だ片手落な議論であると思ふ。例を以て之を說くに、今茲に內閣更迭と云ふ事件が起つたとする。此場合に後繼內閣組織の大任は須らく議會に於て多數を占むる政黨の首領に之を托せねばならぬと云ふ慣例があるとする。此場合に此慣行は君主の大權を制限するというて批難するのである。何故なれば君主は最早自由の意志を以て大臣の任命を專行するを得ないからである。然しながら君主大權の制限なるが故に惡いと云ふならば、即ち君主の自由行動と云ふ趣意を此際文字通りに嚴格に貫かうとするならば、君主は事實上何人にも御相談にならず、全然御一人のお考のみを以て、總理大臣は誰、內務大臣は誰、陸軍大臣は誰と云ふ事をお極めになると云ふ事にならなければならぬ。けれども斯くの如き

は事實上果してあり得るや否や。實際の事例としては君主は此際必ず君側の二三老功の臣に御相談になるが普通である。之が二度三度と繰返さるゝと、結局大臣の任命については必ず元老に御下問になり、其意見に依つて之をお極めになるといふ事になる。斯く極まれば之れ亦君主の大權に對する明白なる一制限ではないか。予の觀る所によれば、大臣の任命に付き議會の多數黨に人を採るのも、元老の御下問によつて極めるのも、共に君主の大權に對する事實上の制限たる事は同一であると思ふ。只其制限の種類が同じくない。一つは多數に相談して極めるといふ形に在り、他は少數に相談して極めると云ふ形にある。然らば玆に君主は果して其何れの制限を採るべきものであるかの問題が起る。少數の人のみに相談すべきであるか。多數の人に普く相談すべきであるか。斯く論ずれば、君主大權の制限なるが故に非なりといふ理由で、民本主義を排斥するのは正當でない。若し民本主義を有効に排斥せんと欲するならば、更に一歩を進めて、多數の人に諮るのが常に惡く、少數の人に諮るのが必ず善いといふ趣旨を明白に證明するの必要がある。然るに我國に於ては、明治初年以來多數の人に諮るを以て立國の國是なりとして居る。明治天皇陛下は維新の初め現に廣く會議を起し萬機公論に決すべしと勅せられて居る。即ち多數の人に相談して公平にして且つ正當な政治を行ふと云ふ民本主義の精神は、明治初年以來我國の國是であつた。今頃之を否認して少數諮詢主義を唱ふるのは、政界進化の大勢に逆行するものである。

第二の批難は、凡そ人民一般は本來愚なものであつて自ら自家の利福の何たるを知らぬ、之を熟知する者は寧ろ少數の賢者である。從つて多數政治は實際の利害得失を比較すると少數政治に比して却つて劣れりといふのである。此説は近代立憲政治の趨勢に逆行して、貴族政治の古に復らんと欲する一部人士の熱心に唱道する所であるが、一部分は成程眞理であると思はるる。如何に開明の國に於ても、一般の人民は大體に於て直接的確に國民全體の利福の何であるかは明白に之

を知らぬ。而かも少數の賢者の中には、眞個國を憂ふるの士あつて、自己の利福を犧牲に供し、專ら社會公共の爲めに力を効さんとして居るもの﹅少からざることは明白なる事實である。然しながら我々は、最もよく人民一般の利福の何たるを知り又如何に奉公の念に富む所の人でも、彼等の最も多く考ふるものは槪して自家の利益であると云ふ普通の事實を看過してはならぬ。況んや賢明なる人と雖も、少數相比周して萬人環視の外に政權の運用を司ることとなつては、動もすれば其間に弊害を生ずることは免かれない。斯くて、少數に政治を托して多數人民が心を安んじて居ると、何時の間にやらいろ／＼の弊害が行はれ、又誠に不公平な制度などが何時の間にか立てられてゐるやうな事になる。凡そ政治上の事は、一旦制度の上でかうと極めて了へば、如何に其弊が後に明かになつても、容易に之を改めることは出來ないものである。制度の改め難きは恰かも女房の輕々しく取り換へ難いと同樣であるのみならず、又立派な人ほどオイそれと女房を換へないやうに健全な國ほど制度は容易に改め難いものであるから、現在の制度に依つて不便不利を蒙つて居るものは、何時も泣寢入らねばならぬことになる。之を我國の例に譬へても、鹽の專賣は惡制なりといふ。石油消費稅、織物稅は惡稅なりといふ。此點は政府亦各黨各派と共に一樣に認むる所であるけれども、之を廢せば爲めに生ずる缺陷を何の財源に求むべきやの問題に窮して、何時でも之が廢止を見合はすことになる。斯う云ふ譯であるから、政治は須らく其初めを愼むべきものである。即ち初めから注意して少數政治に成らぬやうにするの必要がある。且又、今日は人民一般の程度も大いに進歩して來た。昔のやうに人民が公の事に無智で且つ冷淡であつた時代ならば、政治の事を少數の賢者に一任するのも已むを得なかつたであらうが、今日は教育の進歩につれて人民の智見も大に開けた。公事に關する興味も著しく民間に強くなつた。非常に野蠻な國でない限り、民智の不十分を理由として之を政治圏外に打捨ておくと云ふ事は、今日は最早時勢の許さ﹅

る所であると信ずる。

凡今日の民本主義は、人民智見の相當の發達を前提とすといふも、然し其所謂相當の發達なるものは、各種の政治問題について積極的の意見を立て得る程の高い發達を意味するものではない。例へば茲に海軍擴張問題とか減債基金問題とかがある。海軍擴張の可否並に程度如何とか、八四艦隊の利害得失如何とか、又減債基金を五千萬圓に復舊するの利害得失如何とか、二千萬圓の鐵道資金は之を如何にして得べきか等の細い點は、專門の政客と雖も精密に之を了解して居るとは思はれない。今日の代議士中、此問題の意味をすら理解して居らぬものは少からずあるだらうと思ふ。況んや一般人民に向つては、此等の問題の精密なる了解は餘程進んだ國に於ても之を求め難いと思ふ。民本主義の行はるゝ事は、それ程高い智見を民衆に求むるといふ必要はない。民衆の智見の高いのは何處までも之を希望すべきものなる事はいふを俟たぬ。然しそれ程高くなくとも民本主義は之を行ふに差支はないのである。其理由は後にも説くが如く、今日の政治は所謂代議政治といふ形に於て行はれて居るのであるが、其結果今日では我こそ人民の利福意嚮を代表して直接國事に參與せんと欲する輩は、自然進んで自家の政見を人民に訴へ、以て其賛同を求むるといふ事になる。そこで人民は此際冷靜に敵味方の各種の意見を聽き、即ち受動的に何れの政見が眞理に合して居るやを判斷し得ればよい。更に双方の人物經歷聲望等を公平に比較し、何れが最もよく奉公の任を果たすに適するや、何れが最もよく大事を托するに足るの人物なりやを間違なく判斷し得るならば、それで十分である。此位の判斷は相當の教育を受け、普通の常識を備ふるものには誰にも出來る。必ずしも個々の問題について自家獨自の積極的政見を有する事を必要としない。此點に於て今日の開明諸國の人民は、概して民本主義の政治を行ふに妨げなき程度には發達して居るものと斷言して差支ない。然るに世の立憲政治の運用の思はしからざるを歎ずるものは、動もすれば其原因を國民の思想の足らざ

るに歸する。前記高田文相の訓示の如き亦其傾がある。けれども我々の見る所によれば、勿論國民に今少し憲政思想を知らして置くのは必要と思ふが、然し今日の我國民は、決して憲政の運用に適せざる程に低い程度のものではないと信ずる。而かも尙憲政の運用意の如くならざるものあるは、寧ろ其責任を世の先覺者の頑迷固陋なる思想と態度とに歸せざるを得ないと思ふものである。今日の元老・大臣以下幾多の政客の腦中に、果して憲政の根柢たる民本主義を徹底的に了解して居るもの幾人ありや。更に進んで民本主義の忠實なる僕たる事を以て名譽とするもの果して幾人ありや。社會の上流に在るものが、眞に憲政の本義を體得するにあらざるよりは、憲政の完成は容易に期し難い。今日の人民が、文相の指摘して居るが如く、總選擧の場合などに時々醜穢な手段に惑はされて不都合な所爲に出づる事は、予も亦之を認むるけれども、然し之なども實は人民其者の罪といふよりは、寧ろ大部分は制度の罪であると思ふ。賄賂を取り得べき地位に置かれて而かも潔白を維持するの困難なるは、下層の人民も宮內大臣も海軍大臣も同一である。制度の上で醜穢な手段の出來ないやうにして置けば、最も正直に賄賂などに手を出さないものは恐らく人民であらうと思ふ。

尙予は更に所謂少數賢者の政治なるものは、其名美にして其實弊害の頗る大なるものある事を指摘するの必要を感ずる。世人は動もすれば賢者は常に少數である。故に最良の政治は少數者の政治であらねばならぬ。之に反して多數者の政治は所謂衆愚政治に陷るといふ。之も一應は眞理である。けれども少數政治は常に暗室の政治であるといふことを忘れてはならぬ。如何に立派な人物でも、他人の見てゐない所では兎角過を犯し易い。閑居して不善を爲すは獨り小人の事ではない。君子と雖も其獨りを愼む事を以て昔から最も困難なる修養として居つたではないか。況んや少數者の政治といつても、何時でも聖賢の如き君子人のみ其局に當ると限らないに於てをや。制度としては、どんな人物が其局に當つても惡い事の出來ないやうにして置

かなければならぬ。即ち惡るい事の爲し得る機會を作らないのが制度の眼目である。金を貪る機會が與へらるれば、神聖なる宮内大臣でさへも賄賂を取つたではないか。凡そ政治上の事は、萬人環視の中で最も公明正大に行はるゝやうにしなければならぬ。我國に於ては所謂瀆職問題といふ事が毎度矢釜しい。之れ皆政治を秘密の中に弄ぶ所より來る弊害である。多數政治の形式を取りてさへ、其運用に最も鋭敏なる注意を拂はざれば、動もすれば蟲がつき易い。況して少數政治の如きは、制度としては何よりも先に排斥せねばならぬものである。世間の人は、議會の不體裁とか、議員の不體裁とかを擧げて、動もすれば多數政治の醜穢を云々する。無論多數政治にも訓練を加へざれば幾多の弊害を生ずるは免れない。殊に多數政治は徹底的に之を行はざれば往々にして其弊却つて少數政治よりも大なる事がある。然しながら大體から云へば、少數政治は密室の政治なるが故に其弊害は多くは天下の耳目に觸れずして濟み、多數政治は明けッ放しの政治なるが故に微細の缺點を誇張して數へらるゝの傾がある。故に最も公平に、最も精密に、其弊害の性質。分量を比較したならば、少數の政治の方或は遙かに多數政治を凌駕して弊竇の著るしきものがあるだらうと思ふ。

斯く云へば、民本主義の政治に於ては少數賢者の階級は全く用のないものかの如くに誤解するものもあらうが、之は決してさうではない。少數の賢者が獨立の一階級をなし、多數と沒交渉に政權の運用を專行する時には勿論弊害がある。けれども彼等が自ら謙遜つて多數の中に沒頭し、陽に多數者の意嚮に隨從しつゝ、陰に多數者の精神的指導者として公事に盡す時、彼等は眞の賢者としての役目を最も適當に盡すことを得るものである。抑も多數少數の兩階級の關係は、形式實質の兩面に分つて觀察するを必要とする。近代の政治は、其政治組織の形式的方面に於ては、多數の意嚮を第一とする。然しながら社會構成の實質的理想の方面に於ては、固より多數專制を容認するものではない。多數政治と言つても、文字通りの衆愚の盲動が政界を

支配するやうでは、國家の健全なる發達は期せられない。多數者は形式的關係に於ては何處までも政權活動の基礎、政界の支配者でなければならぬ。然しながら彼は內面に於て實に精神的指導者を要する。即ち賢明なる少數の識見能力の示教を仰がねばならぬのである。斯くて多數が立派な精神の指導を受くる時は、其國家は本當にエライものである。少數の賢者は近代の國家に於て實に此役目を勤むべきものである。若し彼等が其賢に誇つて自ら高しとし、超然として世外に遊び、降つて多數者の中に入りて之を指導する事を敢てせざる時は、彼等は啻に其志を遂げ得ざるのみならず、國家の進步にも亦何等貢獻すること能はずして了るの外は無い。彼等にして若し眞に國家社會の爲めに盡さんとせば其賢を以て精神的に多數を指導すると共に、又自ら多數者の役するところとなつて、彼等の勢力を通して公に奉ずるの覺悟がなければならぬ。斯くの如く多數と少數との相倚り相待つ事の密接なる國が、最も健全に發達するのである。少數の政治は弊害もあり、又勢としても之を今日回復する事は出來ない。さればと言つて多數の政治は少數賢者の指導なしにはもと健全なる發達を見る能はざるものである。二者相待つて初めて憲政は完全なる發達を見る事が出來るのである。此關係を政治的に見れば、多數の意嚮が國家を支配するのであるけれども、之を精神的に見れば、少數の賢者が國を指導するのである。故に民本主義であると共に、又貴族主義であるとも言へる。平民政治であると共に、一面又英雄政治であるとも言へる。即ち政治的民本主義は精神的英雄主義と渾然相融和するところに憲政の花は見事に咲き誇るのである。若し此二者の關係が彼此相疎隔せんか、其國は決して圓滿なる發達を見ることを得ない。二者の疎隔によつて苦んだ國は古來其例に乏しくない。或は指導者なき平民の盲動は革命的暴虐となつて國家を塗炭の苦みに陷れた事、革命當時の佛國の如きあり、或は節操なき衆愚が少數奸雄の操縱利用するところとなつて、國民全體の利益を蹂躙して顧みざる事、現代の墨西哥の如きがあ

る。憲政をして其有終の美を濟さしめんとせば、政策決定の形式上の權力は、思ひ切つて之を民衆一般に歸し、而かも少數の賢者は常に自ら民衆の中に居つて其指導的精神たる事を忘つてはならぬ。此點に於て予は、我國の元老を初め、其他所謂官僚政治家等の態度に甚だ嫌焉たるものがある。何となれば、彼等は皇室の殊寵と、國家の優遇とを忝うしながら、其最高の地位を利用して時に無責任なる干渉を政界に加ふるの外、敢て自ら高處して民衆に接せず、却つて民衆的勢力を敵視するが如き態度を取つて居るからである。彼等が斯く近代政治の本義を了解せざるは我等の頗る遺憾とするところであるが、殊に彼等が少數賢者としての社會的職分を怠りて敢て民衆指導の任に當らざるは、國家の爲めに非常な不幸と言はなければならない。一般の民衆は、何と言つても實際に於ては案外に、社會的歷史的の榮譽稱號といふものに過分の尊敬を拂ふものである。歷史的社會的の權威を自らに固有する貴族などが、同時に實力に於て高等の人才であり、而して彼等が集つて民衆を指導するの任に當る時に、民衆は喜んで其指導に服するものである。獨逸が彼が如く制度の上に於て民本主義の徹底的實現を妨げて居りながら、而かもよく國運の隆々たるは、上は皇族より貴族富豪の末に至るまで、彼等が悉く社會的に歷史的に優等階級たるのみならず、其實力に於て又優等階級として平民の敬意を集めて居るが故である。憾むらくは我國に於ては、社會的歷史的の優等階級は必ずしも實力の優等階級ではない。之れ已に社會の一缺陷である。而かも實力の優等階級も亦多くは謙遜つて民衆の友、民衆の僕たることを甘んぜない。それ更に大いなる社會の缺陷である。予は憲政の健全なる進歩の爲め、否な社會國家の興隆の爲めに、深く少數賢者の反省を求めたい。殊に貴族富豪の大に反省して自ら治むるのみならず、又其子弟の敎育に眞面目に注意する所あり、以て國家の優遇に應ふるところあらん事を望まざるを得ない。

第三に更に一歩を進めて斯う云ふ批難をする人もあ

「人格者」 X

る。曰く民本主義は一般人民の意嚮を重んずると云ふけれども、然し一般人民の意嚮、即ち所謂「民意」なるものは本來實在するものではない。少くとも衆愚は被動的に少數野心家の煽動に乘つて彼方此方に盲動することはあるけれども、能動的に或る一定の目標に向つて意識的の活動をなすものではない。故に民意を取つて政策決定の標準と爲すと云ふが如きは畢竟空論であると。此の論は民本主義の理論上の基礎たる「民意」の實在に對する疑である。抑も民意なるものゝ果して實在するや否やは哲學上社會學上大なる問題であらう。勿論民意と云ふ大いなる意思を有つて居る人格者が眼に見えて存在して居る譯ではない。故に目に見ゆる個々の具象のみに執着する所謂懷疑派に屬する學者が、多數人民の雜然たる集團に意思の主體たるの資格を認めざらんとするのは固より怪むに足らぬ。然れども社會萬般の事象を洞察達觀するものに取つては、此見えざる意思の主體を認識することは決して困難ではない。最も我々の社會に於ては、同一の問題に就ても各種の意見が色々行はれて居るもので、何が多數の輿論なりやは容易に之を決することは出來ないものである。けれども此等の雜然たる社會の議論は恰も時計の振子の左右に動搖して止まざるが如く殆んど安定するの日なしと雖も、然し乍ら此等の議論が自ら或る一定の中心に向つて其周圍に動きつゝあるものなることは少しく物事を深く觀ずる人の見逃さゞる所である。懷疑派の人は動搖のみに着眼する。我々は動搖の陰に不動の中心あることを認識する。社會の輿論と云ふが如きものも、現に我々は我々の居る現在の社會の事はよく分らないものであるけれども、暫らく時間空間の關係に於て我々を第三者の地位に置く時は、略ぼ其社會の民衆は何を希望し、何を目的として動いて居るかが想定せられないことはない。勿論人各々觀る所を異にし、何を以て其の社會の民意なりとするやに就ても、必ずしも議論の一致を見る事が出來ない場合もある。然し乍ら、兎に角今日の學界の多數說としては所謂「民意」の實在を疑はぬ樣である。此事は尙學問上大に

論辯するを要する問題であるけれどゝ、餘りに専門的になるから茲には之を略する。唯々民本主義の主張は、一部の論者の難ずるが如く、實在せざる「民意」と云ふ假定を前提とした荒唐無稽な説で無いと云ふことを承知して貰へばそれで可いのである。

以上を以て予は民本主義に對する各種の批難を辯駁した。政權運用の終局の決定を民意に置くの不當ならざるは之を以て明白になつたと思ふ。扨て之より我々は愈々此主義を實際に適用すれば如何なるかと云ふ問題の研究に移らねばならぬ。

前述の如く、民本主義は一般民衆の意向に據つて政策を決定すべしと云ふのであるから、之を極端に徹底せしむる爲めには、人民全體が直接に政權に關與することにならねばならぬ道理であるが、是れは事實不可能なる事論を俟たぬ。人民全般の直接政治は、古代希臘の都市的國家に於ては普く行はれたと稱せられて居るが、此種地域の狹い、人口の少き此等の小國家に於ては、或は此方法は可能であつたらう。夫れでも少くとも幼少年と婦人とは政治圏内より除かれて居つたやうである。否、青年の男子と雖も、都會の住民即ち市民の外は、此公權を與へられて居なかつた。そは都市的國家は漸次其領域を都會以外の周圍に擴張したのであるが、此等新領土の住民は悉く奴隷として遇せられ何等の自由を與へられなかつたからである。されば古代の小國家に於ても、人民の直接政治といふものは文字通りには行はれなかつたのである。況んや今日の如く地域も人口も廣大なる國家に於ては、到底人民の直接政治は行はれ得るものではない。幼少年並びに婦人を除いて、直接政治に干與し得るものは之を公民權を有する男子に限ると見ても、其數は非常なものである。之を皆洩れなく直接に政治に干與せしむるのが一番よく民本主義の主張に合するやうに見えるけれども、事實上到底行はれない。そこで今日では此等の人民は間接に政治に干與し、直接には自らの代表者を擧げて之に一切の政治を掌らしむるといふ方法を取る事となつた。是れ即ち今日の代議政治なるものである。即ち人

民は、全體としては直接に政治に與るの煩に堪へないから、自分達の代表者を公選し、其選に當つた代議士をして自分達に代つて公事に盡さしめんとするのである。即ち人民より見れば一種の間接政治である。代表者が政治するといふ點より見れば代議政治である。斯くして此代議政治は今日の立憲諸國に於ては、民本主義的政治の唯一の形式となつた。

代議政治

前段に於て予は、民本主義の要求を極端に徹底せしむる爲めには人民の直接政治とならねばならぬけれども之は今日の國家に於ては事實不可能なるが故に、遂に變則の樣ではあるが代議政治といふものが今日洽く行はるゝ事になつたといふことを說いた。然らばこゝに自ら吾々の頭の中に問題となるのは、所謂代議政治なるものは、民本主義の理想には協はないものであるけれども、外に致方がないから止むを得ず之に依つて居るものと見るべきや、或は又他の方面からの證明の結果として、代議政治の方が却つて之を實際に行つて直接政治よりもよりよき結果を生じ得るものであると見るべきやの點である。代議政治はどの途今日之を止める事は出來ない。之れ丈は疑は無いが、只其價値については、前記の如く消極的意義を認むるに止るものと積極的意義を認むるものとの二樣の見解が起り得るのである。

先づ英吉利の學者政治家の間には代議政治の價値を謳歌するものが非常に多い。尤も英吉利の政治學には、理論としてはいろ／＼間違つた謬說が多い。然しながら其政治的諸制度の實際的價値の認識に於ては概して其判斷を誤らない。されば代議政治についても、それが果して理論上民本主義の要求に合致するや否やといふ樣な方面の議論は比較的疎かにされて居るけれども、實際の運用上代議政治の良好にして、人民の直接政治の方は寧ろ之に比し遙かに弊害多いといふことは、夙に深く一般の識者から認識されて居つた。彼等は實に代議政治あるが故に、一般國民は國內少數の賢者を適當

政治家（少数者）の人格.

に利用する事が出來、又國内少數の賢者も此制度あるが故に人民の監督の下に己れを節制して十分に其才能を振ふ事が出來ると信じて居つた。國内の民衆悉く積極的に起つことは事實上不可能でもあり、又强いて之を起たしむることが實際上決して得策でないといふことを、彼等はよく知つて居つた。人民一般が悉く理想的の高度の發達をなし、總ての問題に積極的の意見を立て得るやうになれば格別、然らざる以上は、實際政治の運用を少數者に托し、一方には意見人格の批判によつて何人に之を托すべきやの選擇を誤らず、他方に於て自己の擧げたる少數者を監督するといふことを以て滿足するの外はない。然らば代議政治は、今日の程度の民衆を基礎としては最良の政治にして、一足とびに直接政治に行くことは寧ろ危險であるといはねばならぬ。只代議政治は中間に代表者の這入る仕組なるが故に、之を如何に制度の上に組織するや、又之を如何に運用するやに從つて、得失利弊一ならざれども、只抽象的の議論としては、代議政治は事實止むを得ざるに出でた方法とのみ見るべきものではない。夫れ自身亦直接政治に優る美點もあるといへる。而して此說が特に英吉利に盛んに行はれて居るのは、一つには英國人が代議政治の運用を誤らず、之によつて相當の美果を收めて居るが爲めでもあらう。

代議政治の運用意の如くならざる他の國に於ては、此種の議論は英國程は盛に唱へられて居ない。然らば此等の國に於ては如何なる議論が唱へられて居るかと言ふに、曰く、民本主義の理想から言へば人民の直接政治が一番よい。然し之が不可能なるが故に止むを得ず代議政治に據つた。而して代議政治は民本主義の要求を如實に現はしたものでないから、夫れ自身固有の缺點を有するものである。只之を措いて外に我々はヨリよき制度を知らないから、止むを得ず之を採用して居るのである。されば我々は之に由つては完全に民本主義の要求を滿足する事が出來ないことは初めより之を認めざるを得ない。代議政治に伴つて種々の弊害に困むのは、此點より見て實は怪むに足らないのである

ど。此說は我國にも往々にして之を聞くが、西洋に於ては大陸諸國に於て屢々耳にする所のものである。而して此說は從來、如何にかして其弊害を減少せんとの希望からして、いろ〳〵の矯正策の硏究を促した。尤も現在の代議制度に對する改善矯正の必要は、第一種の代議制度を謳歌する者の間にも講究されて居つた。此點から見れば代議制度の改善矯正といふ問題は實は兩者共通の問題であつた。只異る所は、後者は現在の代議制度の弊害を以て代議制其物に固有なる缺點に源を發するものなりとなし、前者は代議制其物には何等の缺點あるにあらず、只之が組織並びに運用に宜しきを得ざるものあるが爲に改善の必要ありとするにあつた。即ち其短所弊害の由來本質に關する見解を異にして居つたのであるが、硏究の方面は兩者略ぼ同一であつた。或は選擧法を改正するとか、或は議院の組織を改善するとか、共に同じやうな事を着眼して居つたのである。然るに最近に至つて此第二種の考は段々極端に走つて終に或は全然代議制度を無用とするの說を生じ、或は又代議政治の基礎に重大なる動搖を來たすが如き新制度の採用を說く者を生ずるに至つた。

代議政治の無用を說く者の中に、貴族政治に復らんとする者あることは已に說いた。然し之は民本主義を否認するか、少くとも其當然の適用を枉ぐるものであるから今玆に問題とする限りではない。玆に問題となるのは、初めから民本主義を承認し、之に極端に忠實ならんとするの口實の下に代議政治の無用を說くの說である。即ち代議政治は民本主義の理想に合致しない。從來は外に仕方がないから我慢をして居つたけれども、其弊の甚だしき、最早今日は我慢が出來ぬといふ立場から、遂に代議政治は民本主義の要求に應ふるの外貌の許に、實は民本主義に敵するものなりとなし、眞に民本主義に忠ならんと欲する者は須らく代議政治を眞向に否認せざるべからずと論ずるに至つたのである。此議論の明白なる代表者は、近時佛國に起つて伊太利、英吉利、亞米利加等に段々蔓衍して居るサンジカリズムの議論である。彼等は曰く、選擧といふ段階

は、多くの場合に於て、選擧人と被選人との意思的支配關係を紛更し、民衆一般の意思の正當なる代表は議會に於て曲げらるることを常とする。故に議會制度は、民衆の意思をして政治上に於ける終局の權威者たらしめんとするの本來の理想を決して完全に實現するものではないと。斯らいふ立場から、代議政治の効用を疑ひ初めたのであるが、更に下層の勞働者は、從來の經驗に徵して、議會が到底勞働者の支配の下に來らざることを見、つく〴〵此感を深うした。元來下層民衆は、數に於ては遙かに中流上流を凌駕する。故に彼等は代議政治の下に於ては自己の代表者を以て容易に議會の多數を占領することを得べしと考へ、斯くて結束して社會黨といふものを作つたのである。然るに實際彼等によつて擧げられたる代議士は、其數に於て思ふ通り多きを得ざるのみならず、一旦當選をすると其選擧區內の多數者たる勞働者よりも寧ろ其區內の有力なる有產者の左右する所となり勝である。其外無論いろ〳〵の細かい理由もあるが、兎も角議會によつて下層民衆の目的を達せんとする當初の期待は經驗上木に緣つて魚を求むるよりも困難なる夢想に過ぎないものとなつた。是に於て彼等は代表の名に惑うて安心するの危險を絕叫し、議會によつて自家階級の目的を達せんとするの思想を斷じて排斥すべきものなりと叫び、所謂「政治反對」の旗印を飜した。「政治反對」とは實は選擧を基礎として立つ一切の政治に反對するといふことである。彼等は、國家が選擧權を勞働者に與ふるは、宛かも砂を投じて吾人の目をくらますが如きものなり、此虛僞の好餌に迷うて勞働者の敵と事を共にする勿れと稱し、此點に於ては社會主義者に對してすら激烈なる反感を示して居る。何となれば、社會主義者は選擧に於て他の階級と爭ふからである。サンジカリストは假令社會主義者の候補者に向つてゞも斷じて投票してはならぬと勸告して居る。然らば彼等は如何なる手段によつて其目的を達せんとするかといふに、即ち「直接行動」といふことを說く。選擧だの議會だのといふことは、法律其他の國家的の間接の設備を俟つのである

からそれでは駄目だ。勞働者は須らく自ら直接に且つ現實に自分の力に訴へて目的の貫徹を計らなければならぬといふ所から、思ふところを直接の行動にあらはせと說くのである。而して今日此直接行動は實に腕力の形式をとつて居る。此事について彼等は言ふ。我々は直接行動を現はすに必ずしも暴力に訴ふる積りはない。けれども今日上流の階級が我々を壓迫するのは實に此腕力の手段によつて居る。然らば我々の自己解放若くは自己防衛の運動も亦同じく腕力の手段に出づるは止むを得ないと。斯くて彼等は或は示威運動をなし、或は同盟罷工をなし、殊に彼等は罷工の範圍を鐵道、炭山、電燈等、凡そ人類の日常生活と直接密接の關係ある種類に選み、最少の勞力を以て最大の苦痛を社會に與へ、以て社會を脅して自家の要求を無理にも容れしめんと企てゝ居る。彼等は國家を無視し、現に『勞働者には祖國なし』と稱し、『愛國の美名に迷はされて上流階級の奴隷となること勿れ』と敎へて居る。從つて戰爭などに際し、一國が危急存亡の淵に臨んで居る場合でも、特に武器彈藥の製造所などを擇んで、彼等は勞働者を煽動し、以て國家に甚大の苦痛を與へんとして居る。戰爭の場合に、直接之に關係ある勞働者に總同盟罷工を實行せしめんとするのは、サンジカリズム年來の宿論にして、年々の決議にも此事は現はれて居つた。

右は極端な例であるが、そこまで極端に奔らなくとも、代議政治の缺點を認めて之に重大な補正を加へんとするものに、彼の人民投票の說がある。即ち此說は、民本主義の本來の主義から言へば人民が直接に政策の決定に與つた方がよい。けれども總ての場合に人民の意見を聞くといふことは事實不可能である。けれども、代議政治のみに任して居つては民本主義の要求は十分に貫徹するを得ない。爲めに時々民意に反する政策の決定を見る事があるから、普通日常の事務は從來通り代議政治に任すとして、國家の重大事、殊に人民の生活關係の上に直接重大の影響を及ぼす如き事項に限つては、例外として人民全體の投票を求め、以て代議政

治の缺點を補ひ、民本主義の要求を少しでも十全に貫くといふことにしたい。斯ういふ趣意で最近人民投票といふことが諸國に於てボツ〳〵唱へらるゝやうになつたのである。尤も一概に人民投票といふても細かく見ると之に二つの種類がある。第一は洋語イニシアチーヴといふもので、人民の方から進んで或る種の立法を議會に建議するのである。之は最近瑞西を始め米國の二三州に認めらるゝもので、全然新しい制度である。之に反して第二は議會で決定した事を更に人民に諮るもので、洋語レフェレンダムと稱するものである。此制が代議政治の缺陷補正の意味で憲法上に認められたのは十九世紀中葉以來の事であるけれども、制度其ものは實は近頃に初つたものではない。此制度は十五六世紀の頃から瑞西の諸國に洽く行はれたものである。近世の意義に於ける憲法の上に此制度の認められたのは、一八四八年瑞西國の一州スウイツ國が初めであり、次いで一八六九年同じく同國の一州ツユーリツヒに行はれ、それから各州に擴つたといはれて居る。一八七四年の瑞西聯邦の憲法も亦之を認めて居る。尤も此等の制度を細かく調べて見ると、或はこれ〳〵の問題は必ず人民全體の票決を得なければならないといふ所謂義務的のものあり、又は人民の一定數の要求、若くは聯邦に屬する何州以上の要求ある時は人民投票を行ふといふ選擇的なるものもある。其細目の點は區々として一に歸せないが、然し此等の制度は瑞西諸國に於て其初め特別の理由によつて永く行はれ來つたので、代議政治の缺點を補ふといふやうな新らしい考で出來たものではない。瑞西聯邦の憲法に之を認むるも、當初の主意は舊來の惰性として之を認めたに過ぎない。されは新らしい考に基いて此制度の採用された最初の憲法はといへば、一九〇一年一月一日から行はれた濠洲聯邦の憲法を數へねばなるまい。此憲法は其第百廿八條に於て、凡そ憲法の改正案は先づ議會の各院に於て絕對多數によつて通過し、夫れから、二ヶ月以上六ヶ月以下の期間内に、各州に於て下院議員の選擧權を有する人民の票決に附するを要すると定めてあ

る。此憲法の外には之を實際の制度として採用して居るものは餘りない。

何故に人民投票制は實際上餘り採用せられて居ないか。そは思ふに、理論は別として實際は極めて之を行ふに不便であるからであらう。第一人民全體の意見を聞くといふことは、問題を「然り」「否」によつて決し得るが如き最も單純な形にしなければ事實行はれない。それにしても此方法の實行は事實極めて困難で且つ不便である。尤も地域人口の狹少なる地方町村などに於ては比較的行はれ易い。それでも住民の密集して居る都合でならば幾分行はれ得るも、然らざる村落では極めて結果がよくないといふことである。地方團體に於て人民投票を行ふの例は、瑞西國に於て相當に頻繁に之を見るが、其結果は公平に言ふて非常な不都合もないが、さればと言うて代議政體の缺點を補ふといふ程の積極的の利益も亦無いとの事である。然らば徒らに面倒な手數をかけて馬鹿げた無用の事をするといふに過ぎない。斯ういふ風に觀られて居るので人民投票といふことは詰り實驗上餘り好結果を奏せないものとなつて居る。けれども理論の上からは、今日尙歐米の諸國に於ても之によつて代議政治の缺點を補ふべしとの議論が時々唱へられて居る。

斯の如く、人民投票は代議政治の缺點を補ふとは言ふけれども、實際の効用は極めて少い。のみならず之を頻繁に行ふ時は、代議制の根柢を動搖し、其圓滿なる發達を妨ぐるの恐がある。故に代議政治が比較的よく運用されて居る國に於ては、此問題は從來餘り唱へられなかつた。然るに不思議にも此問題は近年に至り、代議政治の本場とも言ふべき英吉利に於て頗る盛に唱へらるゝ事になつた。之によつて人或は英國に於てすら斯の如し。代議政治はいよ〳〵世界の信用を失ひ今や正に衰亡に近けりといふものがある。然しながら暫く皮想の觀察を止め、英國に於て此議論が如何にして、又何故に唱へられたかを、少しく詳かに考察して見るならば、吾人は容易に右の論者の說の必ずしも正當に非ることを了解するであらう。なぜなれば、英國に於

て近年レフェレンダムの說は、統一黨が自由黨の挑戰に應じ、其强襲的壓迫を押し除けんが爲めに唱へられたのであるからである。英國では、人も知る如く、下院に於ては選擧の模樣によつて或は統一黨多數なることあり或は自由黨多數なることあり、彼此相交代するけれども、獨り上院は統一黨が五分の四以上を占めて恆に變ることが無い。從つて統一黨が內閣を組織する時は、政府と上下兩院の議とは容易に纏まるけれども、自由黨が天下を取つて居る間は、政府は常に上院に於て統一黨の反對を招ぐことを免れない。そこで自由黨政府はグラットストーン以來常に此上院の反抗には困んだものだ。而して現自由黨政府ゎ先年まづロイド・ジョーヂの財政改革案に於て上院と大衝突ゞ來した。而して今度の戰爭前に在つては、夫のアイルランド自治問題について、復た上下兩院相反撥して居つたこと、人の知るところである。而して自由黨政府は、上院を今のまゝにして置いては到底自由黨政府の政策は之を實行するに由なきことを思ひ、爲めに先きに二つの案を立てゝ上院に肉薄せんとしたのであつた。一つは新たに數百の新貴族を作り、之によつて上院に於ける自由黨員の數を統一黨より多からしむるの案、他は衆議院の決定に對しては一定の條件の下に上院は必ず服從せねばならぬといふことに定むるの案である。而して第一は貴族院に根本的革命的の改革を加ふるものなるが故に、之は最後の手段として取つて置き、差し當つては先づ第二の案を以て貴族院と爭ふことに決したのであつた。委しく言へば、財政的法案に關しては、下院の決定に對して上院は異議を挾まざることとなし、其以外の一般的法案については、下院に於て三度續いて之を可決したる場合には上院の否決に係らず、國王の裁可を得て之を法律とすることが出來るといふことに定めんとした。尙此事は後に再び詳しく述ぶるが、兎に角自由黨政府は斯くの如き案を具して上院の反對黨に屈服を迫つた。若し之に應ぜずんば、已むなく政府は新自由黨貴族を澤山作つて貴族院に根本的改革を加ふべしと威嚇した。此時在野黨は、黨內に

無論いろ〳〵の異論があつたけれども、結局最後の政命的打撃を貴族院の組織の上に蒙るよりも、政府の提案を容るゝ方がまだしも得策だと云ふので恨を呑んで屈服した。が此際統一黨員中には、退つ引きならぬ政府の此强襲に對して萬一の活路を見出さんが爲めに、人民投票と云ふことを唱へ出したものがあつたのである。抑も此問題を主題として爭つた總選擧の結果は不幸にして政府派の勝利に歸した。政府黨が多數を占めて居つては屈服するの外はない。が、然し萬に一つ人民投票で此勢を飜すことが出來ぬとも限らぬ。而かも人民投票は人民を重んずると云ふ英國本來の政治主義に一見よく適合するので、扨てこそ統一派は萬一を僥倖して最後の決斷を人民の投票に求めんと主張したのである。必ずしもレフェンダムを以て本來推奬に値するといふやうな確信に基いて唱へられたものではなかつたやうだ。之と同じ理由の許に此のレフェレンダムの說は去年の春頃にも特に矢釜しく唱へられてあつた。それは即ち愛蘭自治問題の討議の際に於てゞある。

前にも述べた上院の權限を縮少せんとするの法案は、一九一一年八月、國王の裁可を得て「議會法」として發布になつたのであるが、政府は今や此法律に依つて愈々愛蘭自治問題を解決せんと決心して居る。元來此問題はグラットストーン以來自由保守兩黨の火花を散らして相爭へる歷史的難題である。之で敗けては大政黨の面目が立たない。そこで反對黨は凡ゆる手段に訴へて政府の施設に妨害を加へた。果ては愛蘭東北の一角アルスターの統一黨員を煽動して内亂を起さしめんとさへした。ロード・カーゾンの如きは、自ら此義軍の頭領たらんと豪語して愛蘭に赴いたのであつた。恰度戰爭の直ぐ前、英國政界の危機は正に其頂點に達し、獨逸は爲めに英國は最早外を顧みるの餘裕なかるべしと想像したとさへ傳へられて居る。それ程の大問題であつたから、統一黨は如何にもして愛蘭自治の實現を妨げんと欲し、其一手段としてこゝに亦レフェレンダムの說を唱へ出したのである。在野黨は曰く、斯くの如き重大なる問題は、出來る丈け鄭重の手續を盡くし、

念には念を押すを至當とする。夫れには議會の決議だけでは不充分である。この外更に人民一般の意見をも直接に徴して、眞に民意のある所を愼重に究めてから、決行すべきであると。斯の口實の許に彼等は熱心に人民投票の說を主張したのである。さて內亂の徴いよいよ明白となるや、政治家の中頗る形勢の重大を憂慮するものあり、在朝在野兩黨の間に立つて親切に斡旋の勞を取るものさへあつたが、其際にも矢張り妥協の條件としてレフェレンダムの說を擔ぎ出すものがあつた。在野黨は曰ふ、此方法でいよ〳〵敗北をすれば、其時には立派に兜を脫ぐ。然し之に由つて眞に民意のある所を明かにせざる以上は、假令議院多數の決議ありと雖も直に之に屈する事は出來ないと。斯う云ふやうな理由で英吉利に於ては最近レフェレンダムの主張を見たのである。此等の沿革を明かにする時は、英國の政治家が一般の主義としてレフェレンダムを賛し、之を目して必ずしも代議政治と相並んで其缺點を補ふに足るものと爲せるに非ざることは明白である。

以上の如く今日代議政治に對しては、此制度に固有する缺點を認むるものあり、而して其中には或は此制を絕對に非認するものあり、或は之に重大なる補正を加へんとするものもあるが、然し此等の說が實際上何れも大した勢力のある說でない事は、已に明白であると思ふ。然し乍ら代議政治の缺陷を認むる一派の說は之で盡きたのではない。中には代議制に伴ふ諸々の制度の上に種々の改善を加へて、其圓滿完全なる發展を見んとする議論も亦相當に强く唱へられて居る。此事は、我々のまた注意せねばならぬ所である。而して此種の改善論は代議政治其物に固有の缺陷を認めざるものの間にも唱へられて居る事は、已に述べた通りである。之を要するに代議政治に固有の缺陷を認むるものも、或は之を以て民本主義の要求を完全に滿足せしめ得べき性質を有する制度なりと認むるものも、共に代議制の今日の儘に放任し置くべからざるを說くのは同一である。換言すれば彼等は皆之に幾多の改善を加へざれば、代議政治は其儘にては憲政の本旨を達し得

るものに非ずと認むるに一致して居る。斯くて今日では代議制度が幾多の改善の加へらるべきものなる事一般に認められて居る。是れ則ち我々が更に大に研究努力して憲政有終の美を濟さしめざる可からずといふ所以である。然らば問ふ。今日の代議政治の許に於て、吾人は其の如何なる部分に如何なる改善を加ふるを以て當面の急務とするか。

代議政治に於ても政界の根本勢力の、人民に在らねばならぬことは言ふを俟たぬ。然るに如何なる形式の政治に於ても政權の實際的運用を司るものは常に廣義の政府である。而して此政府の行動に對して人民は直接に之を指揮監督するにあらず、代議士團と云ふ仲介者をして其任に當らしむるといふのが、代議政治の特色である。玆に於て、代議政治に於ては、此仲介者がよく民意を尊重し且つ適當に政府を監督すると云ふことが、最も肝要な事になる。斯くて我々は、代議政治に於ては最も着眼を要する二つの方面があると云ふことを認めざるを得ない。一つは人民と代議士との關係である。他は代議士と政府との關係である。此兩種の關係が民本主義の本旨に從つて最も適當に組み立てられて居る時に代議政治の運用が其宜しきを得るのである。然るに多くの立憲國に於ては、此兩種の關係が不幸にして其宜しきを得て居ないこと決して珍らしくない。爲めに所謂立憲の諸制度は徒らに形のみ備つて而かも其運用の實果擧らず、以て民本主義の本旨と背馳するもの亦極めて多い。故に我々は此兩面の關係を一々立ち入つて吟味し、如何なる點に缺陷の伏在するやを調べ、以て憲政の順當なる發達を阻礙する要素あらば速に之を取除くを心掛けねばならぬ。

人民と議員との關係

人民と議員との關係について最も大事な點は、人民が常に主位を占め議員は必ず客位を占むると云ふことである。此關係を正當に維持する事は、憲政運用の主に最も肝要とする所である。凡そ憲政の弊害は總て此の關係の逆轉から來る。獨り議員人民の關係ばかりで

はない。議會と政府との關係も亦同樣である。政府を監督すべき議會が政府の籠絡する所となる時に多大の弊害を生じ、又之と同じく議會を監督すべき人民が議員の操縱する所となる時に、憲政の運用はこゝに幾多の醜惡なる腐敗を以て滿たさるる。政府は利を以て議員を誘ひ、議員亦利を以て人民を惑はし、斯くして主客其地位を轉倒して憲政の組織はあらゆる惡德を以て滿たさるゝ事になる。故に我々は所謂政界の廓清を計りて憲政の順當なる進歩を見んとせば、先づ以て議員と人民との關係を正すことに綿密なる注意を加ふるを必要とする。而して之が爲めに採るべき方法は、差當り少くとも三つあると思ふ。

第一選擧道德を鼓吹する事　選擧道德を說くの必要なる事は、曾て拙著『現代の政治』中「議員選擧の道德的意義」の篇に詳かに說いたことがある。特志の讀者は別に之を參照せられたい。只一般讀者の爲めに簡單に其要點を申せば、元來道德には選擧道德だの商業道德だのといろいろの種類のあるべき筈のものではない。けれども我々はとかく、永い間我々の生活に關係のあつた事柄については、そこに一定の慣例因襲が出來るので、自然一種の社會的制裁の支配を受け、相當の德義を守ることとなるのであるけれども、新奇の事柄が起ると、從來の因習もないので、全で德義を省みないと云ふやうな事に成り勝である。日本人同士の商賣に道德を守つても、相手が外國人であると丸で約束をも守らないと云ふが如きは即ち此爲めである。從つて選擧と云ふが如き新らしき制度の運用に當つては、兎角我々に道德が立派に守られない嫌がある。予輩は日本人一般の道德的思想といふものを押し並べて非常に低いものとは思はない。けれども選擧については、そが新らしい經驗に屬する爲めにや、甚だしく道德が無視されて居る事を遺憾とする。こゝに於て我々は國民に向つて大いに選擧道德を鼓吹するの必要を感ずるものである。

然らば、如何なる點を篤と國民に了解して貰ふのかと云ふに、一つは我々の投ずる一票が一票としては甚

だ無力のやうに見えるけれども、然し之が實に國家の運命に關はる重大なる價値あるものであると云ふことである。僅かの金錢や脅迫等の爲めに左右せらるゝには餘りに神聖なものであると云ふ事である。二つには投票は國家の爲めにするものであつて、地方の利益の爲めにするのではないといふ事である。地方的利益のみを着眼して選擧するのは、往々にして國家全體の利益を犧牲にするの結果を生ずるの恐がある。三つには選擧は我々の特權であつて候補者から賴まれてするものではない。我々が自ら進んで適當なる候補者を國家に推薦するのであるといふことである。此三つの點を泌み〴〵と人民の頭に入れることが今日實に極めて肝要である。中にも第三の點は最も肝要であつて、此點が明白でないと、往々にして腐敗手段の跋扈を來たすことになる。即ち自分の特權と考へない結果として、或は田舍などで小作人が地主や資本家などの云ふ通りになるといふ現象を呈する。又選擧民を强いて選擧場に拉し來る爲めに投票勸誘人即ち運動人と云ふものが必要になり、又選擧民に賴まれゝば投票するといふ考があるの結果として戶別訪問と云ふ馬鹿げた事が流行することになつたりする。是れ皆權利思想の明白でない爲めである。

立憲政治の選擧競爭に、堂々たる候補者が戶別訪問をしたり又は多數の運動員を使ふといふことは、決して國家の誇りではない。而かも弊害の源は常に運動員に在ることは深く云ふを俟たぬ。若し夫れ一町一村の選擧民が二三の金持の云ふ通りになるやうでは、そこに隱密なる腐敗手段の盛に行はるべきことは問はずして明かである。故に我々は世の教育家其他の先覺者と共に、あらゆる機會に於て此選擧道德を國民に鼓吹したいと思ふ。若し當局者にして教育機關を通じて國民に立憲思想を鼓吹せんとする考があるならば、主として此方面を專ら鼓吹すべきであると思ふ。

然しながら選擧道德の本當の徹底は、實際上選擧權の擴張を伴はなければ效果が擧るものではない。選擧權を極端に制限して居つては、折角選擧權の尊ぶべき

○思想の自由—
言論の自由

○選擧權擴張

事を說いても、國民の多數は之れ我に關はりなき問題なりとして深く意に留めぬだらう。恰度徴兵制度を布いてない英國の勞働者が、自らの仲間から出征軍人を出さない爲めに、頗る戰爭に冷淡であるのと同樣である。選擧に興味を有たしめ、選擧道德に多大の注意を拂はしめんとするには、どうしても廣く選擧權を一般に與ふることが必要である。此事は後に選擧權擴張を論ずる際に更に精く說くの機會があらう。

之と牽聯して、モ一つ注意すべきことは、人民に與ふるに各種の意見を公平に聽取するの機會を以てするの必要なることである。換言すれば思想の自由、言論の自由を尊重して、人民をして妨げなく各種の意見に接し、其間に自由の選擇、自由の判斷を爲すことを得せしむることが必要である。予輩が先きに選擧道德を鼓吹するの必要を說きたるは、國民をして最も公正なる判斷をなさしめんが爲めである。利益や脅迫に動かさらんことを希望するからである。然し折角人民の心的準備が出來上つても、言論の自由が重んぜられずして、或る一種の思想、殊に民本主義の要求には餘り適合しないやうな思想のみが、人民の眼前に現はるゝやうでは、矢張り好結果を齎らすことは出來ない。立憲政治の妙趣は、人民の良心の地盤の上に、各種の思想意見をして自由競爭をなさしむる點にある。所謂優勝劣敗の理によりて高等なる思想意見が勝を制し、之が人民の良心の後援の下に實際政治の上に行はるゝ點にある。之には思想言論の自由といふ事が必要である。故に吾人は選擧道德を鼓吹すると共に、又大に思想言論の自由を尊重し又尊重せしめなければならぬ。而して玆に所謂「自由」とは、啻に法律上の自由ばかりではない、社會上の自由をも意味する。元來思想言論の自由に對する壓迫は、獨り政府よりのみ來ると思ふならば誤である。屢々又民間よりも來るものである。政府の壓迫は比較的之を指摘し之を防禦するに易いが、民間の壓迫は、往々輿論の形に於て發現するが故に、之を戒むること、時として甚だ困難である。先年夫の乃木大將自刄の際、少しでも之に疑點を挾むものを國民

が非常に罵倒し迫害し、果ては其邸内に石を投げ込むと云ふが如き擧動に出でたのであつたが、之れなどは一面に於て大將の德を懷ふといふ美德に淵源しても居るだらうけれども、他方偏に之は言論の自由に對する盲目的壓迫の明白なる一例である。新時代の國民の正に心して戒むべき事に屬する。此等の點も亦我々が識者と共に大に力を盡して其反省を國民に覓めねばならぬ點である。

以上は識者先覺者の社會的に努力するに因て達せらるべき方面であつて、最も根本的の重要なる點であるが、尙此外に之と牽聯して制度の上に改善を計るべき方面が二つある。一つは選擧取締りの事に關し、一つは選擧權擴張の事に關する。そこで、

第二に予は選擧法中、取締規則を嚴重にし且つ之を勵行することが必要であると主張する。屢々說くが如く、憲政の運用に最も憂ふべきことは主客の顚倒である。議員が人民を籠絡する時は、必ず腐敗と惡政とが跋扈する時である。之に反して人民が議員を支配する時に、初めて憲政の運用は適當の順路を取る。故に議員と人民との間に行はるゝ醜穢の手段は、特に嚴罰を以て之に臨むの必要がある。普通刑法上の類似の罪に比して、選擧法上の罪は更に嚴重なる所罰を必要とするのである。然らずんば憲政は逆轉して天下は惡政の横行する所と爲らざるを得ない。故に取締規則を嚴重にし而かも之を嚴格に勵行するといふことは、極めて必要である。此點は各國皆共に心を注いで居る點である。細目の事は各國選擧法の比較研究に讓るが、此點については我國の選擧法も實は相當に嚴しく出來て居る。只遺憾に思ふのは其勵行に於て未だ十分ならざる所あり、甚だしきは往々政府自ら自黨の運動に對して此點を寬大に取扱はんとするの傾向ある事である。予輩は最も此點について情實の行はるゝを忌む。選擧罪惡は出來るだけ嚴しく之を糺斷するに非んば、憲政の成績は擧るものではない。

尙取締規則の事についても一つ更に注意すべきは、立憲政治に於ては、例へば收賄罪の如き場合に於て、

取るものよりも寧ろ與ふるものの罪を重くせねばならぬと云ふ事である。凡そ人間はいくら立派に爲つても、誘惑を蒙り易い地位に置けば、人情として之に陷り易いものである。故に如何に選擧道德を鼓吹しても、賄賂などを使ふものがあつては、選擧界の廓淸は期せられない。現に買收の歷史を見ても、多くは選擧人より之を求めたるにあらずして、議員候補者の方より之を提供するのが常である。故に大體に於て人民には罪がない。與ふるものがあればこそ、之を受くるのである。而して賄賂の行はるゝは、選擧を不眞面目にするのみならず、後には選擧を自己の特權とするの觀念を弱め、結果が更に原因をなして、益々選擧界の腐敗を滋くする。故に選擧取締の規則に於ては、受くるものよりも與ふるものに嚴罰を加ふることにしなければならぬ。

次に、予は

第三に選擧權は出來る丈け之を擴張することが必要であると主張する　選擧權が限られて居れば、腐敗手段が無遠慮に行はれる。選擧權が極端まで擴がつて來ると、到底買收などは仕切れなくなる。のみならず、候補者は金錢其他の利益を以ては到底爭ひ切れなくなるから、そこで初めて眞面目に自分の識見人格を赤裸々に民衆に訴へて競爭するといふことになる。從つて又一面に國民は大に之に由つて政治教育を受くるの機會を得ることにもなる。今日の樣に選擧權を制限して置いては、必ずしも自分の識見人格を訴へなくとも競爭に勝てる見込があるから、政黨などですら甚だ民間の政治教育を疎略にして居る。故に選擧界の廓淸を計ると云ふことから觀ても、又は民智向上の傾向を促進すると云ふことから觀ても、選擧權の擴張は極めて必要であると信ずる（『現代の政治』五一―五六頁參照）。尤も選擧權の擴張は以上の立場からばかりでなく、選擧の本質に關する理想上の要求としても唱へられて居る。そは、一體選擧といふことは廣く國民一般の代表者を擧ぐると云ふが本來の趣意である。尤も乾燥な法律論より云へば、選擧は委託に非ず、代議士は國民の代表者に非ずといふかも知れぬ。けれども政治

上代議士が立派に國民の代表者たることは一點の疑はない。從つて代議士は一部分の階級のみの代表者であつてはならない。故に其選擧に與るものゝ範圍は、出來る丈け廣きを可とする道理である。昔は天賦人權說などを楯として、凡ての國民の參政權を享有すべきを主張するものもあつたけれども、此論の今日に通用せざるは固より論を俟たない。一部の人は又今日國民一般の普く選擧權を有せざる可からざる所以は、國民が一般に納稅と兵役との義務を負擔して居るが爲めなりといふ者もある。然し此論も亦固より誤りである。何となれば、選擧權はもと國家に對する國民義務の報償として與へらるゝものでないからである。故に此等の論據より選擧權の普及を說くは誤りである。けれども、然し選擧の目的が本來國民一般の全體の利益を代表せしむるにあると云ふ政治上の根據は、今も昔も變らない。そこで我々は此本據から選擧權は出來る丈け廣き範圍に之を與ふるのが正當であると考へるのである。尤も出來る丈け廣き範圍に之を與へよと云ふのは、必ずしも無制限に之を許せと云ふ意味ではない。選擧の目的を遂する爲めに、必要上又は便宜上或る種類の制限を附することは、之を認めなければならない。例へば幼者、狂者、犯罪人、貧民救助を受くるもの、破產の宣告を受けたるもの等は、初めから之を除外せねばならない。又一年以上同一選擧區內に住所を有するを要すといふ條件の如きも、一つには名簿調製上の便宜の爲めに、又一つには定住なき浮浪の徒を除外する爲めに必要であらう。其以外に於て更に婦人を除くべきや否やは蓋し將來の問題である。今日の所は一般に選擧權は男子の專有に歸して居る。尤も婦人に參政權を與へて居る國もないではない。例へば露國の芬蘭議會、濠洲聯邦及び其各州、ニユージーランド、北米合衆國中の數州の如き即ち之である。歐洲に於ける獨立國としては那威が已に之を與へて居る。尤も那威に於ては、初めは女子に限つて相當の制限の下に選擧權を與へて居つたのであつたが、一九一三年以來、男子同樣普通選擧制を適用する事にした。而して此等の國を外にし

て今日少くとも婦人參政權論が歐洲各國に盛であることは人の知る所である。

然し斯く理論上の要求としては出來る丈け選擧權を廣く與ふべしと云ふに拘はらず、實際上種々の制限を設けて居るもの近世各國中甚だ尠くはない。其理由にはいろ〳〵あるが、其主なるものを擧げると次の二つであると思ふ。

第一は假令青年男子のみを取るも、其中には尚多數の權利行使に適せざるものがある。即ち選擧と云ふ公權を實行する程智見の熟せざるもの尠くないといふ所から、制限制度を是認せんとするものである。然しながら此說が非常に教育の程度の低い國に於ては適用あるかも知れぬが、今日の開明國には最早適用しない論である。其上今日の立憲政治は、人民に非常に高い見識を要求するものではない。此事は已に先にも詳しく述べたのである。今假りに一步を讓つて論者の說に一應の理ありとしても、權利行使に適するものと否とを何によつて區別するか。此點が甚だ明白正確でない。

今日現に不適者淘汰の標準として採用せられて居るものは、教育上の制限と財産上の制限と二つである。教育上の制限には、或は之を絕對的の要件とするものあり、即ち一定の學校教育を受けたものに非れば選擧權を與へずとするものがある。けれども今日は學校の教育のみが人類教養の有無を分つものではない。且又今日學校教育の非常に普及した世の中に於ては此標準は大した實用が無いかも知れぬ。何れにしても教育資格を絕對の要件として擧ぐるのは時勢後れである。次に或は之を財産資格に代るを得るものとするのがある。即ち先づ財産上の制限を設け、其制限に入らざるものも一定の教育あるものには選擧權を特に與ふるとするのである。之は財産的制限の高い國には必要な制度であらう。現に洪牙利に行はれて居る。現に我國でも大隈內閣は之を採用せんとするの意嚮ありと傳へられて居る。又或は之を複數投票を與ふるの要件とするものがある。即ち國民一般は一票の投票權を一樣に有つて居るが、特に一定の教育を受けたものには二票三票を

與ふると云ふのである。現に白耳義及び獨逸のサキソニーに行はれて居るが、此方法は理論上は面白いが實際上は特權階級の擁護に惡用せらるゝの傾向ありとて、此等諸國に於ても批難せられて居る。此等三つの種類があるが、要するに教育上の制限ならば畢竟は蛇足に過ぎまいとは思ふけれども、之を設けても大した弊害はない。蓋し甚だしき高き制限に非らざる以上、教育の普及したる今日、此制限はあるも無きも同一なるべきを以てゞある。然るに納稅又は財產上の制度といふことになると、之は實に今日の時勢に適せざる極めて不當なる制限である。何となれば今日にあつては財產の有無は最早人類教養の有無を分つ有力な標準ではないからである。尤も財產若くは納稅上の制限が選擧權享有の必要條件となつた沿革については相當の理由がある。其譯は此制度の起源たる英國の國會と云ふものは、モト〳〵租稅を承諾し、豫算を討議する爲めの機關であつたからである。左れば初代の英國々會に在ては租稅を納むるものでなければ議員となるの必要がなかつたのである。而して今日の國會は最早昔とは丸で其の意味を一變して居るのだから、昔と同じ理由で以て仍然此納稅資格を法律上に認むる事は勿論出來なくなつた。若し今日に於ても尙此資格制限を維持せんとせば、或は恒產なきものは恒心なしとか、又は此制限を設けされば浮浪の徒亦政權に與るの危險ありとか云ふ類の理窟を捏ねなければならぬ。けれども浮浪の徒の政權に與るの危險は、前に述べた通り、住所の制限によりて之を防ぐことを得べく、又一定の財產を標準として機械的に恒心有るものと之れ無きものとを分つことは事實不可能であるが故に、畢竟此種の制限は今日何等の意味が無くなつたものと云はざるを得ない。故に多少の制限を選擧權の範圍の上に加ふるの必要がありとしても、財產の有無を以て其標準とするの不當なるは今日は已に餘りに明白である。只然らば之に代りて如何なる標準を採りて制限の基礎とすべきやは極めて困難なる問題である。けれども今日の多數說に從へば制限を付すると云ふ其事自身が、已に漸く合

理的の根據を失ひつゝあるのである。

第二に選擧權を制限すべしと云ふ議論には、更に斯う云ふ理由も擧ぐるものもある。曰く選擧法の目的は一つには適任者を得るに在る。何人が適任者なるかは多數の能く決し得る所ではなくして、少數者のみよく之を知つて居る。故に選擧權を制限するは即ち此目的に協ふ所以であると。けれども此說は選擧權を極度に制限して、一代議士の選擧に與るものゝ數を十人とか二十人とかに限るならば、或は正當といふ事も出來るが、現今の如く數千數萬の人が係はると云ふ場合に於ては、制限選擧も普通選擧も實は五十步百步なりと云はざるを得ない。故に特に制限選擧でなければ適才は得られないと云ふ實際上の根據あるのではない。それならば選擧人を非常に少數にすればよいかと云ふに、此場合には一見可なるが如くにして其實却つて所謂主客顚倒の形を馴致し、候補者が不正手段を以て選擧人の意思を籠絡するといふ弊を導き易い。現に選擧人の極めて少數なる例は之を間接選擧制度――人民が選擧人を選び、選擧人が更に代議士を選ぶ制度――に見るが、此制度の實際上の經驗に徵する時は、亞米利加の大統領選擧の場合に於けるが如く、人民が餘りに政治に熱心なるが爲めに選擧人は全然人民の意思に左右せられ、以て間接選擧をして有名無實に終らしめて居るのもあるけれども、普魯西の下院議員の選擧に於ては、人民頗る冷淡なるの結果、少數なる選擧人の專橫を來たし、爲めに議會に於ては特權階級の大跋扈を見て居るのである。要するに選擧人の數を制限する時は、或は專制者流の乘ずる所となり、或は腐敗手段の毒する所となり、孰れにしても良結果を社會に與ふることは無い。即ち請托、買收、脅迫等の不正手段は選擧權者の數少きに乘じて、盛に活躍するものである。斯くては選擧界の腐敗を來たし、更に議會の墮落を導くのみならず、代議士をして又公然選擧權者一般の利益に反せしむる事になる。以て憲政の進步を阻礙すること頗る夥しい。此點より見ても選擧權は出來る丈け廣さに及ばねばならぬことは明白である。

選擧權が制限せられて居れば、議會は多くの場合に於て腐敗するか、少くとも特權階級の利用する所となる。かくては折角民本主義の要求に促かされて設けられた議會も、更に民本主義の用をなさゞることになる。斯う云ふ理屈からして、各國に於ては一時盛に選擧權擴張論が唱へられたのであつた。彼等は初め憲法の制定、民選議院の設立、この二者に由つて民本主義の要求は十分に之を滿足せしめ得べしと考へた。けれども暫くして實際の經驗は彼等に教ふるに、彼等の要求は民選議院の設立其ものによつては直に滿足せしめられるにあらずして、民選議院が如何樣に構成せらるるかに由つて初めて達せらるゝべきものなることを以てした。初め彼等は民選議院の空名を得るに急にして、實質的組織の問題は深く之を問はなかつたのであるが、議院設立後の暫くの經驗の結果、再び聲を新たにして議會改造の必要を叫ばざるを得ざることとなつたのである。蓋し憲法政治創始當時に於ける民選議院は、多くの國に於て其構成は頗る平民的ではなかつた。殊に歐洲諸國に於ては、民衆の勢力に迫られて憲法の制定發布を見たのではあるけれども、歷史的特權階級の惰力も亦隱然として一大潛勢力を有し、憲法は則ち斯の二大勢力の妥協の結果として發生したのであるから、議會構成の上にも反動的勢力は多大の利便を留め、若しくは少くとも彼等は此處に民本主義の充分なる發現を妨ぐることを得た。即ち制限選擧制度の如き、一面に於て慥に特權階級の民衆的勢力に對する一防波堤である。之あるが爲めに民本主義の要求は議會に於て十分に之を貫徹することを得ないのである。選擧權に對する制限の、憲法創設當時如何に高かつたかは、佛蘭西の憲法史に明白である。革命後の第一の憲法（一七九一年）は、財産的制限としては、僅に三日間の勞働に均しき丈けの直接税を納むるものと云ふ極めて輕微なる制限に止めたけれども、一面に於ては間接選擧であつた。第二の憲法（一七九三年）は初めて普通選擧で且直接主義を認めたけれども、之は實行せられなかつたのみならず、其の普通選擧主義を採つたのも、

天賦人權の空論に基いたものであつて、社會の現實なる要求に根柢したものではなかつた。故に第三の憲法（一七九五年）では再び間接選擧で、小額の納稅資格を認むるといふ昔の制限制度に復つた。斯くて革命當初は、財産上の制限は表面割合に輕かつたけれども間接選擧制なると又年齡の制限が頗る高かつたので、畢竟實際の制限は相當に高いものであつた。然るに一八一四年の王政復古の憲法に至つては、著るしく反動的分子を加へ、選擧權享有の納稅資格は、三百法以上、被選擧權の方は千法以上と云ふ途方もない高いものとなつた。後年多少の低減を見たけれども、其の制限の高さ、有權者は僅かに千分の三を算へ、一八三〇年の七月革命の結果、更に財産的制限を二百法に下げても、尙有權者の數は人口總數の千分の六に過ぎなかつた。今日世界に於て最も制限の高き我國の現制に比して尙五十分の一である。斯う云ふ形勢であつたから、佛國の民衆は間もなく制限の徹廢を要求して大に反動的勢力と爭ふたのである。而して此の運動は一八四八年の二月革命に於て漸く其目的を達した。これより佛蘭西は普通選擧制を取り、以て今日に到つて居る。

扨て制限の徹廢に因りて、議會を改造すべしとの要求は、此と同じ理由で以て、佛國以外にも當時盛に唱へられたのである。而して今や佛國の普通選擧制の獲得に成功せるを見るに及んで、各國もだん／＼之に倣ふやうになつた。斯くして今日では此制は世界各國に普く採用せられて居る。或は少くともだん／＼採用せられんとするの傾向に進んで居る。歐洲に於て比較的重き制限を今仍ほ保有するものは洪牙利であるが、然し洪牙利が普通選擧制を布かないのは、人種關係の上から已むを得ない點もある。洪牙利の政治的中心勢力は所謂洪牙利人にある。而して洪牙利人は全人口の中に於ては半數に足りない。而かも尙議會に於て多數を占めて居るのは、制限選擧制の結果である。若し普通選擧制を布けば洪牙利人の政治的優勢は大に動搖せられるの恐がある。こゝに於て現在の政府黨は、極力普通選擧論に反對して居るのである。それでも時勢の

進運に促がされて、洪牙利も近き將來に於ては普通選擧制にならねばならぬ勢に迫られて居つたのである。洪牙利を外にしては英國と和蘭が多少の制限を附してゐる。けれども非常に輕微なる制限にして殆んど云ふに足りない。獨逸國内の諸邦の中には、今日尙制限を有するものが多いけれども、最近バーデン（一九〇四年）ウイルテンブルグ（一九〇六年）は既に普通選擧制を採り、バイエルン、ヘッセンも大いに制限を低下した。只普魯西が今尙六十餘年前の舊法を墨守して三級制度、間接主義を革めざるを最も著るしい例外とすべきである。尤も之には實は相當の理由がある。煩はしければ今は述べぬ。かくて世界の文明國は殆んど皆大體普通選擧制を採用してしまつたと見てよい。故に今日東西の文明國中、比較的重き制限を附するものとしては、僅かに露西亞と我日本とを算ふべきである。他の一般文明國に於ては、普通選擧制を採用すべきや否やは、業に過去の問題にして、今日の政論には上らない。我國に於ても近時だん／＼選擧權擴張論は盛になつて來たが、然し普通選擧論の流行を見るまでには未だ大部時が掛るやうだ。先般大隈内閣が十圓の制限を低下して五圓となすといふ姑息の案を提唱した時ですら、一部の政界に激しき反對があつた位であるから、普通選擧の實現を見るは何の日にあるか、前途遼遠の感なきを得ない。我國の多數の識者の間には實に不思議な程普通選擧制度に對する誤解と反感とが激しい。尤も此制度は初めは主として社會主義者の一派に依つて唱へられたのであつた。之が偶々誤解を招く所以となつたのであらう。上流社會が此制度を喜ばないのは無理もないとして、一般社會までが此制度を中心から歡迎しないのは極めて不思議な現象である。尤も普通選擧制度の採用の案は、明治四十四年第廿七議會に於て一度衆議院を通過した事はある。而して當時傳ふる者は曰く、衆議院では貴族院の必ずや之を否決すべきことを確信して之を通過したのであると。果して貴族院は大多數を以て之を斥けたのであつた。然れども此點の誤解を解いて、我々が中心から普通選擧制の採用

にあらずんば憲政の圓滿なる進行を見る能はざる所以を納得し、又之を深く國民一般に徹底せしむるでなければ、我國憲政の前途は實に暗澹たるものである。今日選擧權を制限して居る結果として、我國の有權者の總人口に對する割合は、僅に百分の三に過ぎない。昨年三月の總選擧の際に現在せる有權者數は、百五十四萬四千七百二十五人に過ぎなかつた。之を那威の三割三分を超え、北米合衆國の二割九分を超え、佛國の二割七分强、白耳義の二割三分、伊太利及び獨逸の二割二分、更に多少の制限を有する英吉利の一割八分、和蘭の一割三分なるに比すれば非常の逕庭である。洪牙利と雖も六分五厘を超え、我國の二倍以上である。斯ういふ風に選擧權を制限して居れば、前に述べたやうに、主客顚倒の弊に陷るの危險あるは勿論の事、選擧權は國民の公權なりといふ實が擧らない。少くとも國民の心頭に、國民の神聖なる權利として選擧を苟且にすべからざるの念慮を起さしむることが出來ない。小學校や中學校の教師に、立憲思想の發成に努めよと言つたとて、彼等自身は無論、彼等の親族故舊に選擧權を有して居る者が少なければ、親身に其權利の尊ぶべき所以を味ふ事が出來まい。聞く者も亦同樣である。自分の父兄、自分の親族やが洽く之を有つて居ればこそ、話を聞いても親しみがある。さうでなければ、選擧の話を聞いても自分とは風馬牛相關せざる閑談として受取るの外はない。

斯くの如く選擧權の擴張は、取締法の嚴重なる勵行と共に、我國に於て焦眉の急務とする所である。之を諸國の歷史に見ても、選擧界の廓淸は多く此二事によつて成し遂げられた。此二事を疎かにしては、如何に選擧道德を鼓吹して民間の良心を鞭撻しても、憲政の理想は之を實現するに由なきものである。兎に角選擧權擴張論は、我々の最も眞面目に研究すべき問題にして、又我々は今後最も熱心に之を唱道せなければならぬ。世間に誤解がある丈け、我々は一方には識者の反省を求め、又他方には政界の迷夢を開き、以て近き將來に於て之が實施を見んことに努力せねばならぬ。

選擧法問題は、今日何處の國でも、憲政改善を說く議論の中心になつて居る。けれども選擧權の擴張といふことは已に解決を見たので、西歐各國の問題は更に一歩二歩先へ進んで居るのである。露西亞とプロシアとは、今尙我國と同一程度にあるけれども、他の國は最近一九〇七年墺太利が普通選擧制を採用し、一九一二年伊太利が亦之を採用したるを最後として、大抵解決がついた。而して今は同じく選擧法問題を論爭して居るとはいへ、普通選擧制度の精神を更に能く徹底せしむる爲めの議論である。此事は直接我國の憲政論の上に關係はないやうであるけれども、我國に於ける憲政の重要問題を西洋のそれに比して如何に遅れて居るかを明かにする爲めに、簡單に之を說かう。即ち西洋では普通選擧制は已に普ねく之を採用した。更に飽くまで其精神を貫かうといふ趣意から新に二種の問題を起して居るのである。一つは純正なる普通選擧主義の要求で、他は選擧區分配改造の要求である。第一の方は假令國民全般に選擧權を與へても、財産教育等の標準によつて一部少數の階級に二票三票を與へては、名は普通選擧制でも其實制限選擧制と何等其效果を異にしないといふのである。即ち白耳義では財産教育ある者に、一定の標準により或は二票、或は三票の投票權を與へて居る。英吉利でも財産を二箇所で有つて居るものは、其兩選擧區に於て投票する事が出來る制度になつて居る。之が偶々特權階級の利益の擁護に利用さるゝから、民本主義の精神の上から見て其當を得たるものではないといふのである。複數投票主義の廢止が、多年英國自由黨の宿論であり、又白耳義の社會黨自由黨の共同の主張であることは、我々の知るところである。殊に白耳義に於ては之が爲めに保守黨の政府と衝突をして、屢々大ストライキの勃發なども見たことがある。第二は選擧區の分配を三十年も四十年も昔のまゝにして置いては時勢の變に伴ふ人口の移動に適應しなくなるといふのである。時勢の進歩は田舍の人口を減じて都會に之を集中せしむる。而して田舍は即ち保守的思想の確實に維持せらるゝ處、都會は即

ち過激なる進歩思想の横溢する處である。故に理論は兎も角として、保守黨は舊制を維持するを利益とし、進歩派は人口の移動に從つて選擧區の分配を改造する事を利益とする。斯ういふ點からして獨逸帝國に於ては、政府と在野進歩派との間に多年選擧區の分配改造に關する爭がある。獨逸今日の選擧法は一八六七年の人口調査を基礎として居る。其當時の人口は三千九百七十萬、そこで人口十萬人について代議士一人の割合として議員定數を三百九十七人とした。然るに最近の調査によれば、人口の全數は增して六千五百萬に達し、其增殖の割合は都會に多く田舍に少い。一八六七年の當時は、人口十萬以上の都會の人口は、全體の人口の一割五分六厘であつたが、現今は二割一分四厘となつて居る。現に伯林の如きは人口三百萬に達するのに、五十年前の調査を本として、僅かに六人の議員を出して居るのみである。故に進歩派から見れば、若しも選擧區の分配が適當に改むるならば、自分達の黨派の議員の數が、更に著しく增すといふ見込がある。其實益の點は暫らく措いて、斯くする事が正當であると主張して此問題を爭つて居る。只獨逸政府では、議會に於ける形勢が一變して進歩派が勝利を占むる樣では、今日の軍國主義の維持が餘程危くなるから極力此要求には反抗して居る。以上二つの問題は共に皆普通選擧制の精神を尚一層徹底的に貫かんとするに在るので、今頃遡つて普通選擧制を採用すべきや否やを論じて居る樣な國は殆んどない。之によつて見ても我國は遙に彼等に遅れて居ると見なければならない。

尚終りに序を以て一言したきは、今日歐洲に於ては選擧法問題に關し、大選擧區とすべきや否や、比例代表主義を取るべきや否やの點も盛んに論ぜられて居ることである。最近此問題の八釜しいのは佛蘭西である。比例代表主義は已に白耳義に於て頗る完全に行はれて居る。此兩者の研究は頗る興味ある問題に屬するけれども、今直接の關係がないから茲には之を說かぬ。只英吉利の如き政黨内閣の發達したる國に於ては、此等の說は殆んど問題にされて居ない。なぜなれば大選

擧區制、比例代表制の如きは、共に少數黨に代表の機會を與ふるもので、爲めに即ち二大政黨對立の傾向を紛更するからである。英國の政客は議院多數黨を以て內閣を組織するの主義を金科玉條として居る。此制度の完全なる運用には二大政黨の對立を必要條件とする。故に此大勢を妨ぐるところの制度は他に如何なる理由あるに拘らず、英國に於ては殆んど識者の省みるところとならない。殊に比例代表論の採用については、一部の政客の間に熱心に之を希望するものあり、團體を集め私財を投じて熱心に其主義の弘布に努めて居る者もあるけれども、今日までのところ更に政治上實際の勢力とはならない。

議會と政府との關係

此關係も亦前の人民と議員との關係の如く、主客順當の地位に之を置く事が肝腎である。蓋し直接に政權の運用に與るものは政府である。其政府を議會が監督する事によつて、初めて政治は公明正大なることを得る。然るに政府は實權を握つて居る者なるが故に、動もすれば其地位を利用して議員を操縱籠絡し、以て本來其監督を受くべきものをば轉じて自分の意のまゝに頤使せんとする。是に於ていろ／＼隱密の弊害が生ずる。所謂瀆職問題なるものは何時でも此間から發生するものである。而して瀆職問題は、普通政府側より千なり二千なりの金を議員に頒つといふ形に於てあらはるるものであるが、千とか二千とかの金を政府側が出したといふ其奥には、更にどれ丈けの罪惡が潜んで居るか解らない。故に議會が主で政府が從たるの關係を嚴重に維持するといふことは、憲政の健全なる運用の上に極めて必要である。

此點についても我々は、局に當る者の道德的良心をして出來る丈け鋭敏ならしむることを根本的要件と爲すものであるが、然し一般の人民とは違つて、議員並びに政府當事者の如きは、孰れも國家のエリヌキの人才にして、普通の道德上の義務責任は十分に心得て居る人々である。之に政治道德を說くは宛も釋迦に說法

の嫌なきに非ざれども、それにも拘らず實際いろ〳〵の失態を生ずるのは、畢竟制度の罪ではあるまいか。即ち制度に缺陷あり、爲に誘惑に與ふるに乘ずるの機會を以てするが爲めではあるまいか。誘惑に襲はるれば餘程の立派な人でも過に陷り易い。故に惡い事の出來ないやうな風に初めから制度を決めて置くことが實に必要である。此點より見て我々は、第一には監督者たる議員の質をよくすることを焦眉の急務とし、其爲めには前段に述べた議員と人民との關係を正當の狀態に置く事を最先の急要と認むるものである。此點に於て議會對人民の正當なる關係は、議會對政府の正當なる關係の前提條件といはねばならぬ。前者を整へずしては後者を論ずるは畢竟空論である。第二には議員と政府との間に動もすれば起り得べき政治的罪惡に對して、嚴重なる態度を取ることが必要である。不都合な議員がある時に、人民が十分之を監督し、再び之を代議士に出さないといふ事になれば、自然不心得の者もなくなる道理である。けれども、萬一穩密の手段を以て誘ふ者あり、議員亦秘密の間に不正の利益を貪つて後に暴れるの恐れもないと信ずれば、こゝに不正行爲が行はれぬとも限らない。斯くして彼れは一時良心の命令に眼を掩ひ、徒らに政府の非政を助けて國民一般の利益を犧牲に供することになるかも知れぬ。斯くの如き不祥事の發生を避くる爲めには、不正の利益を受くる者にも、又之を與ふる者にも、嚴重なる態度を以て之に臨む必要がある。茲に嚴重なる態度といふのは、啻に法律上嚴しき制裁を加ふるといふ許りの意味ではない。社會的に之を極力擯斥し、政治上に於ては再び起ち能はざる如き致命的打擊を與ふべしといふ意味である。良心に忠實にして節操を重んずることは政治家の生命である。不正の利益の爲めに意見を二三にするが如きは、政治家としては罪之より大なるはない。一體斯の如き事の我々の問題に上るのが、已に立憲國としては不思議な現象である。否寧ろ恥づべき現象である。苟も立憲政治の下に於ては、詐らない人間は初めから議員となるべきものではない。凡そ政治は本來極

政治家の人格.

めて高尙なる仕事である。從つて高き敎養ある人士のみよく之を司り得べき仕事である。然らば政治家に對して人格の吟味をするが如きは之れ政治家を侮辱するものではないか。人格に疑問を置かるるが如き者は、初めから政治家としての取扱を受けないのが、西洋諸國の通例である。故に西洋では候補者の學識政見が專ら問題となるけれども、其人の人格を見ねばならぬといふ樣な事は、先づ無いと云つてよいのである。人格の如何に依りて候補者の月旦を爲すべしといふ議論のあることが、實は決して誇るべき現象ではないのである。況んや世間一般の俗人の如く、全く候補者其人の人格をば顧みずして、只其撒き散らす金の高によつて投票すべきや否やを決すべしといふが如きは、實に淺ましき限りであるといはねばならぬ。斯ういふ狀態であるから、議員の瀆職問題といふ樣なものも頻繁に起るのである。社會の選良たるべき議員が其實萬人の儀表たるべき人格を備へず、從つて議員に屢々瀆職行爲を爲すものあるのは、恐らく我國特有の現象であらう。如斯にしては到底我國に於て憲政の進步を見る事は出來ない。之を防ぐには繰り返していふが如く、人民をして初め其選擧を誤らざらしめんことが必要であるが、又議員の其職を瀆すものに向つて最も峻嚴なる制裁を加ふることも極めて必要なのである。卽ち其職を瀆す議員に向つては、獨り法律を以て嚴しく其罪を罰するのみならず、我々はまた輿論の力を以て彼等を政界から葬つて了ふの覺悟がなければならぬ。

尙此點に關して予の更に深く世上の注意を乞はんとする點は、誘はるゝ者よりも誘ふ者の罪が一層大なりといふ點である。此事は本誌去年十一月號の內外時事評論中「收賄贈賄罪孰れか重き」といふ篇中にも大浦問題に關連して說かれてあつた。聞くところによれば、大浦子爵自身は初め自分の贈賄行爲の不正なる所以を全然悟らなかつたといふことである。彼はあの際若し勢の馳するまゝに任かして議會の解散を見るに至らば、是れ實に國家に非常な損害を及ぼすものである。而して僅々數萬の金を使ひ、數名の變節漢を作ること

によつて、議會解散の厄を避くる事を得たのは、是れ則ち此小罪惡によつて國家の大厄を救ふものなるが故に、自分は寧ろ國家の爲めに非常な貢献をなしたものと自信して疑はなかつたといふことである。果して然らば子爵の心事や誠に諒とすべきものありと雖も、其思想の頑迷固陋なる殆んど度すべからざるものがあると云はねばならぬ。彼は議會解散によつて蒙る一時の物質的不利益を以て、政界腐敗の社會風教に及ぼす現在並びに將來の精神的大損害よりも遙かに大なりとする點に於て、飽くまで物質主義に中毒して居るかの如くに見える。我々は無論大浦子爵一個人には何等の恩怨がない。然しながら我が國立憲の健全なる發達の爲めには子爵の如き頑迷なる思想の存在を呪ふものであり、更に一歩を進めて、之を受くる者よりも、之を與ふる子爵の如き考の者が、立憲政治には一番有害有毒であるとの理屈を一般に鼓吹したいと思ふ。若し夫れ大浦子爵を以て一點私腹を肥さず、不正の財を集めて其儘之を奉公の用の爲に散じたるものなりと爲し、此點を捉へて茲に多少恕すべきものありと論ずるが如きは、以ての外の僻論である。

議員と政府との關係については、前述の如く議員が政府の操縱するところとなるを妨げ得たとしても、さて議員が政府に對して正々堂々の爭をなす場合に、政府は政府の權限を楯に取つて飽くまで議員の說に屈せざるを許す時は、是れ亦十分に議員をして政治監督の實をあげしむることは出來ない。議員の政府に對する道德的獨立を全うしたる上で、更に政府の非違を飽くまで糺し、十分に議員をして其監督の任に當らしむる爲には、政府をして議會に對し政治上の責に任ぜしむることが必要である。是に於て政治上所謂責任內閣の問題が起る。即ち政治上の制度若くは慣行として、責任內閣の主義が確立するにあらざれば、議會と政府との正當なる關係は完きを得ない。從つて亦民本主義の要求も十分に貫徹せらるゝを得ないのである。

責任內閣なる制度に對してまた超然內閣といふ主義がある。之は議會の意思に超脫して內閣は全然絕對的

獨立の地位を取るべしといふ趣意である。此主義を執れば、政府は如何に議會から反對されても、時によつては不信任の決議をされても、平氣で其地位に留るといふのであるから、極端な事を言へば、どんな勝手な惡政をもどん／＼之を遂行し得る理屈になる。斯くては政策の終局的決定を人民一般の意嚮に置くといふ趣意が通らない。故に超然內閣制は斷じて立憲政治の常則ではない。尤も單純な憲法論から言へば、國務大臣は獨り君主に對して其責に任ずる者であるから、議會の反對に逢つたからと言つて必ずしも直に當然其職を辭せねばならぬ筈のものではない。從つて超然內閣でも憲法違反にはならない。即ち違憲なりといふ譯には行かない。けれども立憲政治の精神に背くものなることは前述の通り明白である。從つて超然內閣制は非立憲の譏を免るゝことは出來ない。世間往々憲法々理の議論と、憲法精神の政治論とを混同して事物の精密なる判斷を誤る者あるが、此責任內閣制などを論ずる時にも、法律上許されないといふ違憲論と、憲法運用の精神に合するや否やの非立憲說とを混同する者往々にして之れあるが、之は心して愼まねばならぬ。斯くて憲政の圓滿なる運用如何の問題を論ずる場合には、只其事が違憲ならざるや否やの點のみを見たのでは定らない。更に非立憲ならざるや否やの點をも見なければならない。違憲なるものは固より初めから問題とならない。違憲ならざるものゝ中にも更に細別すれば、立憲的なるものと非立憲的なるものとある。超然內閣制の如きは、憲法々理の範圍內に於ては許されて居ることであるとは言へ、其非立憲的性質を有するの點よりして、憲政の運用に於ては斷じて之を非認せねばならぬものである。若し夫れ國務大臣は獨り君主に對して責任を有すとの憲法法理の論より出發して、政治上の內閣制度は亦須らく超然內閣たらざるべからずと論ずるに至つては、其謬りなること餘りに明白にして深く論辨するの必要はあるまい。

斯くの如く責任內閣の制度は憲政運用上缺くべからざるものであるが、たゞ然らば如何にして議會は內閣

の責任を問ふやと云ふに、其方法は一にして足らない。最も單純な方法は彈劾の制度である。けれども段々此制度は實際に餘り行はれなくなり、今日は徒らに二三の憲法上に空名を存するに止ることとなつた。而して今日責任糺彈の爲に用ゐらるゝ普通の方法は議院內閣の制度である。從つて最近に於ては、大抵の國に於て、議會に多數を占むる政黨の領袖が政府を組織するといふ例になつて居る。此意味に於て今日の政府は概して政黨內閣である。而して內閣の椅子を占領して居る政黨は、或は一政黨なる事あり、或は數政黨の聯合なる事あるが、畢竟するに議會に過半數を制する政黨である。其政黨の領袖が政府を組織して居るのであるが、之等の領袖は時に多少の例外はあるが概していへば同時に議會の議員たることが多い。此點に於て今日の內閣はまた議院內閣であるともいへる。斯ういふ制度が一般に行はるれば、政府の責任は即ち彼が議會に依然として多數的信任を維持し得るや否やによつて糺彈さるゝ。若し多數的信任を失へば輙ち辭職して新たなる多數派に其地位を讓らねばならぬ。此議院內閣制の運用が、責任內閣の主義を頗る巧妙に徹底せしめて居るのである。昔時に在ては政府は政府、議會は議會と、全然別物であつた。政府は即ち君側の功臣主として之を組織し、政黨にも、議會にも、何等の基礎を有せざるものであつた。如斯性質の政府であつたから議會の反對などでは容易に之を動かすことは出來なかつた。不信任投票は最も明白に議會の對政府反感を示すものであるけれども、斯んな事で政府はビクともしない。尤も議會と政府と睨み合つて居る當時に在つては、議會も輕卒に不信任の投票をせぬとも限らないから、之によつて輕々しく內閣を動かすといふ譯にも行かなかつたらう。そこで彈劾といふ制度が發達したのである。彈劾は即ち下院原告となり、上院之を裁判して、其結果下院の見るところを是なりとすれば內閣は更迭せねばならぬといふ制度である。而して此場合君主は更に他の功臣を以て內閣を組織せしむるが、彼は本來議會に何等の基礎を有せざるが故に、再び彈劾せらる

るを免れんが爲めには自ら議會の意思を尊重せざるを得ない事になる。從つて議會の意嚮は間接ではあるが政府を通じて行はれ得ることになる。斯ういふ意味で彈劾の制度も憲政運用の一便法として認められて居つたのである。然るに其後段々に政黨內閣の制度が流行するやうになつてからは此制度の實用がなくなつた。どうせ議會の意思を重んぜなければならぬものであるならば、議會に多數を占むる政黨の領袖を其儘擧げて政府に入れた方が捷徑である。議會に關係なき官僚が政府を組織するのでは何日何時議會の彈劾を受くるか判らぬ。隨つて政府の恒久性を失ふの不便がある。そこで政黨內閣が段々に流行するやうになつたのである。斯うなつて見ると此方が彈劾の制よりも一層よく責任內閣の意義を徹底せしむるを得るので、今日では獨り此方法のみが流行する様になつた。

政黨內閣制は、甲內閣が倒れた時直ちに議會の新多數勢力を代表する乙後繼內閣が之に代るといふことによつて、其妙用を發揮する。然るに後繼內閣の組織は、前內閣の倒れた際に於ける議會の多數的勢力といふものが明瞭に纏つて居れば、容易に出來るが、然らずんば少くとも一時は中々手古摺るものである。即ち二大政黨對立の國に於ては、此點はうまく行はれるが、小黨分立の國に於ては、甚だうまく行かないのである。小黨分立の國に於ては、一つの政黨で議會に過半數を占むるといふことは普通あり得ない。從つて議會の多數は二黨三黨の聯合によつて辛うじて纏まるを常とする。而して斯かる聯合は元と中々纏りにくきのみならず、又中途時々動搖するを避くる能はずして、爲めに內閣は動もすれば多數的基礎を失ひて屢々更迭せざるべからざるの悲運に遭遇する。而かも政變後の常として多數的勢力を作るべき新聯合は容易に纏らず、後繼內閣の組織出來上るまでには每時も幾多の波瀾曲折を經るの例にして、立憲政治の運用は爲めに大に停滯せしめらるる事になる。故に今日政黨內閣の制度は、責任內閣の主義を最もよく貫くものであるとはいへ、小黨分立の國に於ては實は十分に其妙用を發揮すること

を得ないのである。然り而して一國の政黨が二大黨派に岐るゝや否やは、國によつて同じからざるのみならず、もと之は勢の自ら決するところであつて一片の理論を以て人爲的に作り能はざるものである。今歐米諸國の實況を見るに、英米系統の國は大體二大黨派對立の形勢を呈して居る。尤も細かく言へば、英吉利に於ては自由黨・統一黨の歷史的二大黨派の外、アイルランド國民黨及び勞働黨がある。又合衆國に於ては、共和黨民主黨の外に、一九一二年ルーズヴエルトの創設せる進步黨がある。けれども亞米利加に於ては從來第三黨は屢々企てられて其度毎に不成功に終つた歷史があり、現にルーズヴエルトの此黨も今日は已に孤城落日の悲況にあるといふことだ。其外に社會黨もあるけれども之は殆んど無勢力と言つてよい。英吉利の愛蘭國民黨は、愛蘭の自治を目的とする特別の黨派にして、愛蘭の自治問題の決定と共に消滅すべき運命を有つて居るものである。勞働黨は四十有餘名の黨員を有して自ら一勢力たるを失はざるも、今日自由黨と結ぶ事なくしては獨立に何事もなし得ない。黨員中、自由黨の腰巾着たるに憤慨し、幹部に迫つて勞働黨としての獨立の面目を發揮すべき事を訴ふるものもあるけれども、然し大勢は自由黨と深き同盟關係を持續することに滿足して居る。故に英米の兩國は大勢に於て二大政黨對立の形勢に在りと言つて不都合は無い。英國各殖民地も亦同樣である。從つて此等の國に於ては政黨內閣主義は極めて圓滿に行はれて居る。然るに他の歐羅巴諸國に在つては一として小黨分立の國ならざるものはない。之れ何によつて然るやと云ふに、或は人種の複雜、或は建國當初以來各地方〳〵の反目、其他種々雜多の特別の歷史的沿革に基くのである。比較的此等の原因の少き佛蘭西と伊太利ですら政黨の數は八つ九つある。獨逸に至つては十四五を數へ、西班牙は稍少なく十餘りを數ふるも、墺太利に至つては大小無慮五十を超える。此等の國に於ては、啻に政黨內閣が旨く行はれざるのみならず、時としては超然內閣の行はるるを許さねばならぬ場合すらあり、少くとも小黨分立

して相容れざるの結果、議會に交渉なき官僚一派の機に乘じて政權を掌握するの特例を開くこと亦決して稀でない。幸に必ず政黨を以て內閣を組織するの慣例による者と雖も、其內閣の壽命は極めて短くして而かも後繼內閣の詮衡には每時でも多大の困難を感ずるのである。獨逸の憲法學者ロエニング博士は嘗て曰つた、佛蘭西の內閣の平均の壽命は七ヶ月で、伊太利は十一ヶ月半也と。(同氏著「十九世紀に於ける代議政體」)。佛蘭西は第三共和國初つて以來今日に至るまで年を閱する事四十五年、其間內閣更迭を見たこと最近の改造までを數へて五十一回に上る、十九世紀では平均七ヶ月であつたから廿世紀に入つて幾何か長くなつたのであらうけれども、然し一千九百十三年二月現大統領ポアンカレーの就任以後のみを數ふると、ブリアン內閣は二月より三月に亘る一ヶ月。バルツー內閣は三月より十二月に至る九ヶ月餘り。ドユーメルク內閣は十二月より翌年六月に至る半ヶ年。リボー內閣は成立の翌日不信任投票によりて倒れ壽命僅かに一日。之に次いてヴィヴィアニ內閣が出來た。六月成立して間もなく戰亂となり、八月改造して擧國一致內閣を組織し、昨年の十月末に及んだ。目下はブリアン再び總理となつて居る。以上の例を以ても佛國內閣の更迭極めて頻繁なるを見るべきである。啻に更迭の頻繁な許りではない。內閣が倒れた後の始末がまた大變の骨折りだ。此場合通例大統領は即刻上下兩院議長を官邸に呼んで後繼內閣の組織を相談する。何人を總理とすれば何人と何人とを內閣に網羅する事を得て以て議會の過半數を制し得べきかにつき、苦心慘憺して協議を凝らすのである。而かも幸に之と眼差す人の承諾を得ればよし、偶ま其承諾を得ねば五日も六日も長く相談に時を費すのである。斯の如き次第であるから政黨內閣制が責任內閣の主義を貫く爲めに極めて適當なりと定つても、小黨分立では其實際の効績は半ば殺がれると見なければならぬ。換言すれば政黨內閣制の妙用を發揮するには、是非とも二大政黨對立の勢を馴致する事が必要である。而かも二大政黨は勢の決する所にして一應の議

論のよく之を左右し得る所ではない。故に果して政黨内閣制の旨く行はれるものか否かは國に依つて必ずしも同一ではないのである。是に於て問題は起る。我が日本に果して政黨政治は旨く行はれ得るや否やと此問題に就て予は同じく「現代の政治」中に特別の一篇を設けて精しく愚見を披瀝して居る（同書一八三—二一六頁）。此小論文に於て、予は第一に政黨政治の理論上善いものか惡るいものかを決定し、又理論上善いものとしても事實日本に於て可能なりや否や、即ち我國に於ける政黨關係の趨勢は二大政黨に自ら岐るゝものなりや否やを解明し、結局其可能なる所以を斷定した。尚可能なりとしても日本の國法上之を許すを得るや否やの疑問もあるので、更に進んで其問題に解決を與へ、次に政黨政治の實行は日本の現狀に照して利益ある所以を說き、且我國の政黨關係の趨勢は近き將來に於て政黨政治の圓滿なる實行を見るに至るべき見込ある所以を論じ、最後に政黨政治の行はれざるによつて蒙る不便、又其れが行はるゝによりて得べき利益を擧げて全篇を結んだ。此論點からして予は日本に於ける憲政の進步發達を計る上から、二大政黨對立の自然的傾向を助長すべく、之を妨ぐる原因あらば極力之を排除すべき所以を天下に訴へんと欲するものである。殊に一部の政客中に些々たる感情に捉へられて故らに異を樹て、所謂小異を捨てゝ大同に合するの雅量を缺く、十年苦節を守るなどゝの美名に隱れて政界の拗ね者たるに終る者の少からざるを遺憾とするものである。政客に雅量の乏しきは當今我國の一大憂患である。

以上予は憲政の圓滿なる發達の爲には責任內閣制度の徹底的に行はるゝを必要とする所以を說いた。然しながら此點は西洋では實は夙うの昔に解決が出來て、今日は殆んど問題となつては居ないのである。今日こんな事が問題となつて居る處ありとすれば、是れ偶々憲政の發達頗る後れて居るを示すものである。只例外として此種の問題は露西亞と獨逸とに於て唱へられて居るのみである。露西亞に此問題のあるのは、同國が歐羅巴に於ける最後の立憲國として、日露戰爭後民間

の要求に迫られて厭や〱ながら頒る專制的なる憲法を發布したと云ふ事情に徵して明白であらう。獨逸帝國に至つては立國の事情から行政權の絕對的獨立を主張するの必要があつて然るものである。獨逸は元來は普魯西の武力を以て起り、又現に普魯西の武力を以て統一を維持する所の國柄である。內部に於て普魯西に反感を有つて居る諸邦少なからざるのみならず、又所在に歷史的理由に依りて獨逸政府の强大を喜ばざるもの、例へばアルサス・ローレン人、波蘭人、シユレシウイツヒユ・ホルスタイン人、ハノーヴアー人の如きがある。其外少からざる勢力を占むる天主敎徒と社會主義者とは亦熱心に普魯西を中心としての獨逸國力の發展膨脹を快とせない。而して此等の本來不統一なる諸要素を纒めて强大なる一國家を作るには、行政權に餘程絕大なる權力を與ふる事が必要である、のみならず、尙行政權に永續性を持たしめねばならぬ。而して特別の理由に基き普通選擧制によつて組織する事となつた帝國議會が、前記各種各樣の意見の代表者である以上、行政當局者をして輕々しく議會の左右する所とならしめては、獨逸帝國の基礎が甚だ險呑である。從つて獨逸帝國では帝國宰相の責任については憲法第十七條の二項に於て「皇帝ノ命令及ヒ處分ハ帝國ノ名ニ於テ發セラレ、帝國宰相ノ副署ニヨッテ其効力ヲ生ス。帝國宰相ハ之ニヨッテ責任ヲ負フ。」と定むるに止り、何等其責任を糺すの細目の規定を缺いて居る。從つて帝國宰相は專ら皇帝の信任によつて進退し、全然議會の勢力の外にある。尙序に申すが、獨逸では我國などのやうな政府と云ふものはない。行政權の首腦は皇帝にして、皇帝の下に所謂帝國宰相あり、行政全般の實際の當局者として、すべての事務を法律上一身の責任を以て取扱つて居る。故に表向き我國のいはゞ國務大臣に當る如きものは獨逸では帝國宰相一人である。從つて彼は帝國宰相にして兼外務大臣と云ふ公の稱號を有つて居る。彼の下に別に外務大臣、內務大臣、陸海軍兩大臣、殖民大臣等があれども、之は帝國宰相の取扱ふ各種の事務の役所の主任と云ふ性質の者に過ぎな

い。此等のものが集つて帝國宰相を總理大臣とする內閣を組織するのではない。帝國宰相は此等の大臣と連帶して其責に任ずるのでは勿論ない。故に我々の云ふ責任內閣に當るものは、獨逸では帝國宰相の責任といふ問題になる。而して此帝國宰相は、事實上皇帝の信任にのみ依賴し、議會の勢力の外に超然として居るから、壽命も亦從つて甚だ長い。佛蘭西に比して恰も正反對である。何となれば建國以來佛蘭西と同樣四十五年の星霜の間、宰相の職はビスマルクに始まりて之をカプリヴィに傳へ、ホーヘンローヘ公よりビューロー公を經て今日のビートマン・ホールウエッグに至るまで、僅かに五代を數ふるに過ぎないからである。それでも從來は未だ議會から不信任の決議をされたと云ふ事がなかつた。實は議會でも屢々政府と衝突したのであつたが、獨逸は四面强敵に圍まれて居る國柄丈け、政客は皆徒らに內紛を事とするの不利益を知つて居るから、大抵の問題については或は讓步し或は妥協するのであつた。只一昨年に至つて初めて現宰相に對し議會は明白に不信任の投票をした。而かも一度は波蘭問題について、一度は有名なるツアーベルン事件について。即ち同一年間に前後二回不信任の投票をしたのである。獨逸の宰相はかくてもカイゼルの御信任を口實として依然其職に留まるや否や、世間は非常の興味を以て之を見たのであつたが、ビートマン・ホルウエッグは議會の不信任に屈して其職を退くやうな事は斷然しないと云ふ態度を固執して、こゝに初めて獨逸の超然主義を明白に決定された。斯くの如くして、獨逸は今日獨り例外として超然主義を執つて居る。けれども之は超然主義を可とするの理論上の確信に基いたと見るべきものではなくして、實は獨逸立國の特別なる事情に基く己むを得ざるに出でたものである。されば斯くの如き特別の事情のない諸國に於ては、今日一として超然主義を執るものはないのである。

此點について我國の狀況は如何といふに、予の見る所では大體適當なる進路を取つて居ると思ふ。責任內閣の制度が十分に貫かれて居るとは云へないにして

も、今日議會の不信任投票は必ず內閣の總辭職を結果せねばならぬと云ふ確信は凡ての人に懷かれて居るやうだ。されぱこそ不信任投票のいよ〳〵行はれんとするを見るや、政府は常に事前に議會を解散すると云ふ例になつて居る。明治十八年十二月、時の伊藤伯を首班として初めて今日の內閣制度が出來てより、內閣の更迭を見る事前後約二十回に及ぶが、大多數は皆議會との衝突の結果である。其初め超然內閣主義を主張して居つた時ですら、議會の反對に逢つては其地位を持續する事は出來なかつた。當時我國の超然內閣と云ふ意味は、議會に代表者を有する政黨より超然として居ると云ふ意味で、議會の決議より超然として居ると云ふ意味ではなかつたらしい。三十年代の半ば過ぎより桂、西園寺互に交代して政權を握るの慣例を開いてから、今日では、十分政黨內閣の主義が貫かれないまでも、而かも議會の多數的勢力と何等かの形に於て結托せずしては、何人と雖も內閣に立つ事が出來ないと云ふ形勢に立ち至つて居る。我々は益々此形勢を助長し發達せしめて、政黨政治の更に完全なる實行を見んことを期すべきである。此立場より觀察して予輩は、時々唱へらるゝ擧國一致內閣とか、又時々一部の策士によつて夢想せらるゝ人才內閣とかの如きは、假令之によつて一時好結果を奏することあるべしとしても、憲政の進歩を計る上からは斷然之を排斥せねばならぬと信ずる。故に我々は今日此方面に於て尚大に奮闘し且大に論爭せねばならぬのである。斯くして一部頑迷の見を打破撲滅するは、議會をして十分に政府を監督せしめ、以て政界の中心勢力たるの實を擧げしむる爲めに、極めて必要であると信ずるものである。

議會が政界の中心勢力たることは憲政の運用上極めて必要である。此の爲めに我々は責任內閣主義を說いたのであるが、西洋では更に一歩を進めて居る所がある。即ち一二の國では、議會殊に民選議院を政界の中心勢力たらしむる爲には、政府は最早有力な障礙物ではない。今日仍ほ多少でも民選議院の政治的優越を妨ぐるものありとすれば、それは上院である。そこで最近

この上下兩院の關係の上に、下院の優越的地位を確定せんとするの説が現はれて來た。例へば上下兩院、各々其見る所を異にし、兩々相對峙して下らない場合には、如何にして之より生ずる難關を切り拔けんとするかの問題が起るが、之は固より未決のまゝに放任して置く譯には行かぬ。而かも之を上院の勝利に歸しては民本主義の要求が貫徹しないから、茲に漸く此種の問題に付ては結局下院の勝利に解決するの外はあるまいといふ考が起つて來たのである。尤も斯くては折角上院を設けた趣意に背くやうにも見える。けれども上院をして下院の決議に對し更に文句を言はしむる所以のものは、元と下院によりて代表せらるゝ民衆の智見が未だ十分に發達して居ないと云ふ前提に基くのであつた。然るに今日は民衆の發達頗る高いものがある。從つて上院の制肘を排して下院の優越を認むるも、事實の上に亦甚しき不都合はないといへる。斯う云ふ點から、下院の優越を制度の上に認むるの案も亦、特に民衆の發達の著しい國に於ては、一面是認せらるるの理由もあるのである。但し此點を制度の上に解決した國は今日まだ極めて尠ない。其主なる者は英國と濠洲とである。他の國では事實上、上下兩院衝突して相讓らざる場合には緊急勅令とか臨時緊急の行政處分等の方法により一時を糊塗して居るが、然し常に此方法に依賴しては行政權の專横を促すの恐あるが故に、結局は議會其れ自身をして之を解決せしむる方が好いのである。從つて將來は上下兩院の優越關係の問題は諸國に於て盛に唱へらるゝ事と想はるゝ。今日の所は英國と濠洲とに之を見るのみであるけれども、近き將來に於ては多分米國が此制を採るに至るならんと考へられる。米國では一九一三年頃より此事は既に政界の具體的問題となつて居る。單に一片の理論としてならば、此説は既に久しく歐洲諸國に於ても唱へられて居つたのである。

上下兩院の衝突の解決法として英・濠兩國の採る所の方法は同一でない。濠洲の方は飽くまで上下兩院對等の原則を害はずして解決法を立てゝ居るが、英國の

方は上院の權限を制限し强いて之を下院の決定に服從せしむる事によつて、問題を解決せんとして居る。尙詳しく云へば

一、一九〇〇年七月九日の濠州聯邦憲法は其第五十七條に於て、上下兩院の衝突を疏決する爲に二つの方法を設けて居る。(甲)は兩院を同時に解散して新議會をして改めて審議せしむる方法である。詳しくいへば、「下院ノ可決シタル法案ヲ上院ガ否決シ又ハ之ヲ可決セズ、若クハ上院ガ之ヲ修正シテ通過シタルニ下院其修正ニ同意セズ、且三ケ月ノ期間ヲ經タル後下院再ビ同法案ヲ可決シ(同一會期中タルト次期會期タルトヲ問ハズ又先キニ上院ノ加ヘタル修正ヲ共ニ可決セルト否トヲ問ハズ)而シテ上院再ビ之ヲ否決シ又ハ之ヲ可決セザル場合、若クハ上院ガ更ニ之ニ修正ヲ加ヘ下院之ニ同意セザル場合」には、下院議員の任期滿了前六ケ月を除き、總督は何時にても「代議院ト元老院トヲ同時ニ解散スルヲ得」るのである(第五十七條第一項)。然し新議會に於て亦必しも兩院の議相衝突せずと限らない。於是第二の方法が設けられた。(乙)即ち兩院を合同して討議票決せしむる方法である。詳しくいへば、「前項ノ解散ノ後、下院ガ再ビ同法案ヲ可決シ(上院ノ加ヘタル修正ト共ニセルト否トニ論ナク)而シテ上院之ヲ否決シ又ハ之ヲ可決セザル場合、若クハ上院更ニ修正ヲ加ヘテ通過シ下院之ニ同意セザル場合」には、總督は上下兩院議員の合同集會を召集することが出來るのである(第五十七條第二項)。而して此場合には「各議員ハ同會議ニ於テハ下院ノ最終ノ提出案並ニ一院之ニ加ヘテ他院ノ同意セザリシ修正條項ニ就キ討議票決スルモノトス。修正條項ニシテ上下兩院議員全數ノ絕對多數ノ贊同ヲ得タル時ハ、之ヲ通過セルモノト見做ス。又提出法案(修正アルト否トヲ問ハズ)ニシテ同ジク上下兩院議員全數ノ過半數ノ贊同ヲ得タル時ハ、之ヲ以テ議會兩院ヲ適法ニ通過セルモノト見做シ」總督に提出して國王の裁可を求むべしとなつて居る(第五十七條第三項)。斯うなつて居れば上下兩院の衝突は結局に於て解決せられ、民選議院の意思は原則として

最後に圓滿なる貫徹を見ることが出來るのである。次に

二、非常な政界の大波瀾を捲き起し一九一一年八月十八日國王の裁可を得たる英國の所謂「議會法」(パーリアメント・アクト)は、一七一六年來の定則たりし下院議員の任期七年なりしを五年に改めたる外、上下兩院の衝突の解決の爲め次の如き新原則を定めた。(甲)、財政的法案に付ては、「閉會ニ先ツコト少クモ一ヶ月前ニ下院ヨリ回付ヲ受ケタル場合ニ於テ、若シ上院ガ閉會以前ニ其儘(修正ヲ加ヘズシテ)之ヲ可決セザル時ハ、該案ハ直ニ(上院ノ協賛ヲ要セズシテ)國王ノ裁可ヲ經テ」法律となる。而して財政的法案とは租税、國庫金の收入支出、及び之に附隨する事項に關する規定のみを包含する法案にして、其認定は下院議長の權限に在りとせられて居る。斯くて少くとも財政事項に付ては、上院の權限は有名無實に歸せしめられて居る。(乙)、財政以外の事項に關する法案に付ては、「下院ニ於テ各會期毎ニ之ヲ可決スルコト三度ニ及ビ、上院亦三度之ヲ否決シタル場合ニハ、第三度目ノ否決ノ後、國王ノ裁可ヲ經テ法律トナル。但シ三會期ハ必ズシモ同一國會ノ繼續期間中タルコトヲ要セズ(總選擧によりて中斷せらるゝも妨げずとの意)ト雖モ、該案ノ最初ノ第二讀會結了時ト其最終ノ第三讀會結了時トハ少クトモ滿二ケ年ニ亘ルヲ要ス」とある。是亦手續が多少複雜であるけれども、下院をして結局絕對的優勝の地位を占めしむるものたることは同一である。

以上英國の流儀と濠洲の流儀とを比較對照するに、第一に吾人は問題となる所の所謂兩院の衝突は、「下院の同意せる提案に對して上院が贊成を拒める場合」に限り、上院の提案を下院の拒める場合は始めより全然不問に附して居る點の兩者共符節を合して居る事に氣が付くのである。左れば所謂「兩院衝突の解決」とは、獨り上院の反對の爲に其遂行を阻止せられたる下院の意思に其實現の機會を與へんとするものに外ならない。下院の反對を受けたる上院の意思に至つては、永久に其實現の機會を與へられないのである。第二に吾

人は兩者取る所の解決の方法の大に異るものあるに注意しなくてはならぬ。濠洲に在つては、解散に依つて上下兩院に對し一樣に反省を求め、猶ほ議合はざる時は兩院合同集會するといふのであるから、表面上兩者を對等に取扱つて居る。尤も事實上は、合同會議に於て數量的優勝を占むる下院の意思が結局最後の勝利を制する事になるだらう。が然し稀に上院の議員が下院の反對派と結托して下院の多數黨を壓倒するといふ事も全く絕無ではない。之に反して英國に在つては、財政事項は初めより全く上院の容喙を許さず、其他の事項に付ても三會期に亙りて同一の案を討論するといふ複雜なる手續を盡し、其間に事實上反省、凝議、運動するの餘地を與ふるの外、結局に於ては下院の意思に絕對の價値を認め、全然上院の制抑を排斥して居る。上下兩院衝突の解決策として此兩主義の孰れが得策なりやは、政治上大に研究するを要する問題である。

英國主義と濠洲主義との利害得失の對比論は玆に之を精論するの遑がない。只之に關連して疑のない點は、英國に於ては、國民の政治的訓練行き屆き、且つ天下の英才俊髦は殆んど悉く下院に集つて居る實狀なるが故に、下院の決定に最終の權威を附與しても差したる不都合はないといふ點である。下院の決定を更に上院に附議するのは些か屋上屋を架するの嫌ないでもない。然し斯かる國情なるが故に英國は英國主義を行ふに差支ないので、國情を同うせざる他國の輕卒に之を模倣するは固より宜しくない。此點から云へば、實際の案としては濠洲主義の方が寧ろ無難であらうかと考へる。

以上說く所に由つて觀ても、憲政運用上西洋の諸先進國が如何に民選議院を重ずるかを知ることが出來る。是れ畢竟憲政の本義は民本主義に在り、而して民本主義の徹底的實現は、前述べた各種の改革を前提として、結局下院をして政治的中心勢力たらしむるに在るからである。斯くて諸國の識者は如何にかして下院に與ふるに、制度上又事實上、上院や政府に對する優越的地位を以てせんとして非常に苦心して居るのであ

る。今や我國に於ては、責任內閣の意義漸を以て明白となりつゝあり。之れ甚だ喜ぶべしと雖も、民衆勢力の直接の代表たる下院の威望甚だ重からざるは、頗る之を遺憾とせざるを得ない。是れ蓋し一つには下院を構成する議員其人の識見品格未だ備はらざるが故である。制度の上で如何に下院を重んず可しと云つても、事實上凡庸薄德の鈍物のみが集まるのでは、天下の威望は決して之に歸せないのである。人才之に集まらざるが故に、上院に對しても勢威を缺き、政府を組織せんとするに當つても、少くとも首相は之を外部に求めねばならぬと云ふ不體裁を演ずる。人才集まらざれば勢力歸せず、勢力歸せざれば自ら有爲の才を自家勢圏の外に逸する。斯くては因果相廻りて責任內閣の制度は十分に其妙用を發揮することが出來ないのである。今日の有樣では如何に下院が威張つても駄目である。如何に下院を重ず可しとの說を叫んでも實際の勢力は之に具るまい。此點に於て我々は一方には大に議員諸士の自重奮勵を求め、又天下の國民に向つては、選擧に其途を謬まらず且自家選出の代議士を直接間接に鞭撻して怠らざらんことを切望せざるを得ない。若し夫れ元老其他の高級政客に向つては、超然として高處し、徒らに下院を罵倒して民衆の代表的勢力を蔑視するの態度を執る事なく、彼等も亦國民として我々と同樣に、國家の爲めに下院をして重からしむる所以の途に協力せられん事を希望せざるを得ない。

頁數超過の爲め、本號に掲載するを得ざりし、京都法科大學の佐々木惣一博士の『貴族院の權限の當、不當』と題する論文は、吉野博士の本論と共に憲政の本義に關する有益なる研究なり。乞ふ次號の出づるを待て。

◎日向きむ子著

銀と藍

〔新刊〕

定價八十五錢

告白文

數奇なる運命を離れて、彼女は清く新しき生活に移れり。彼女は最早虚榮の婦人にあらず。敬虔の信仰を抱きて着實なる生活をなす謹嚴の女性となれり。銀色の月光、藍色の海洋は彼女を慰めたる色彩なり。彼女は此の自然の色に詩情を染めて詩筆を揮へり。其艶麗なる筆の跡は永久に光を放たむ。

新聞雜誌記事に對する彼女の雪冤的公開狀

既刊書目

著者	書名	體裁・定價
櫻井大尉著	◎肉彈	菊判上製 定價七十錢 送料八錢
新渡戸博士著	◎英文武士道	四六判美本 定價壹圓 送料八錢
マイアズ著 齋藤勇譯	◎聖パウロ	四六判美本 定價五十錢 送料六錢
龜高博士著	◎化學と人生	菊判上製 定價一圓八十錢 送料十二錢
故元良博士著	◎心理學概論	千二百四十六頁 定價三圓八十錢 送料十六錢
日下部重太郎著	◎國語百談	四六判上製 定價七十錢 送料八錢
櫻井鷗村著	◎リンコーン物語	菊判上製 定價一圓廿錢 送料十二錢
同	◎歐洲見物	菊判上製 定價一圓七十錢 送料十二錢

(中付二の一)

發兌 東京麴町三丁目 丁未出版社 振替東京七八四七 電話番町二八二〇

法學博士
河上肇先生著

祖國を顧みて

◀要目▶

西洋と日本：鍵の國：數字の國：加算と減算：日本民族の血と手：經濟人：人間の茶碗と犬の飯碗：國家か金貨か：野蠻人の精神的生活：露路及び音樂：戰爭と虐殺：伯林脫走記：改札の國：英國の田舎 外數十項

高邁なる識見と卓越せる思想を描くに優麗洒脱の筆を以てす。西洋文明の表裏一讀釋然!!

■著者河上博士、官命を以て西洋諸國に遊び、留まる事一歳、大正四年を以て再び祖國の土を踏む。

■歐洲今次の大戰亂は、深遠なる學殖と徹底せる觀察とを有する博士の眼に如何に映じ、西洋文明の眞相は博士の心を如何に刺戟せしか？

■本書は著者が西遊に於て得たる見聞感想の記錄なりと雖、世の所謂赤毛布的淺薄なる見聞錄とはおのづから其の撰を異にし、隨所に高邁の識卓越の見の發露を見る。

■祖國を顧みて著者が祖國人に告げんとするものは果して如何？

最新刊

四六判 總布 金文字入

定價壹圓 郵稅八錢

東京京橋南紺屋町 振替口座三二六番

實業之日本社出版部

(中付二の三)

貴族院議員
麻布中學校長 江原素六先生著

通俗講話 浮世の重荷

中判布綴
特製函入
正價 壹圓貳拾錢
小包送料金八錢

一言一語 活きた修養

著者は教育界に、宗教界に、政治界に重望を有する當代の國士也。人格の高尚にして議論の穩健なるは喋々の辯を要せずして明らか也。本書は從來先生が諸方の需に應じ止むを得ずして言に發したる修養處生の講話を網羅したるものにして、小は一身一家の日常道德より大は國家社會の修養問題に至るまで、一言一語悉く圓熟せる常識を披瀝せし醇の最も醇なる好著述なり。

內容目次

■高島平三郎先生著

再版

修養二十講

中判特製函入
正價壹圓廿錢
送料金八錢

初等中等高等教育に多大の經驗を有する心理學の權威たる著者が組織的に心身鍛錬の妙諦を說きたる者

◎ワグネー原著◎ミラー原著
◎ジョーダン原著內外出版協會譯

再版

安心立命論

目次
人生の目的□人生觀□安心論□死生觀□努力の生涯□以上

菊判洋裝
價六拾錢
送料八錢

■發行所 東京日本橋鐵砲町 振替東京壹五〇五六六 磯部甲陽堂■

（中付二の四）

題字、序文、校閲

丘淺次郎

一

日刊新聞に書物の廣告の出て居ることが、日本ほどに多い國は、世界中何所にも無いであらうが、その書物の廣告に、何某題字、何某序、何某校閲と二號活字で大きく現はし、著者の名前は、却つて五號活字で成るべく隅の方へ隱してある如きことは、他の文明國では決して見られぬ所である、之は富士の山や藝者ムスメと同じく、我國の特產かと思はれるが、斯樣な他國に無いことが、獨り我國にのみ行はれるのは何故であるか、一體書物の廣告には、著者の名前と內容の概略とが揭げてあれば澤山な譯で、尙その上に如何なる目的で如何なる人々のために著したかを明にして置けば、それで充分であるに、肝心な方のことは捨て置いて、內容とは殆んど何の關係も無い題字や序文を書いた人等の名前を特に目立つやうに列べた廣告が、每日の新聞紙上に出て來るのは何故であらうか。

書物の廣告は無論本屋が本を賣るために出す者故、高い金を拂ふて效能の無いやうな廣告を出す氣遣ひは無い、題字や序文を書いた人々の名前を列べると、それだけ書物が餘計に賣れることを經驗上よく知つて居る故、それで斯樣な廣告を出すのである、而して題字や序文は誰が書いても宜しいのではなく、必ず高位高官の者とか、厳めしい肩書のある所謂大家の連中でなければ效能が無い所から考へると、我國には著者や內容の如何よりも、題字や序文を書いた人等の肩書を見て、書物を買ふか買はぬかを決するやうな人間が相應に多數を占めて居ると見える、即ち有名な人の名前の附いて居る書物ならば、必ず內容も良い本であると思

ふて買ふのであらうが、之では全く實を知らずして名を信じ、自分を主とする所は少しも無く、たゞ他人の指揮に盲從して居るのであるから、思想上には奴隸の境遇にあると評せられても、辯駁の仕やうは無い、自由に考へ獨立に判斷する者から見れば、肩書の如きは、單に甲なる他人共が相談して、乙なる他人に附けた符號であつて、丙なる自分からは殆んど參考する程の價値も無い、各個人の眞價を見積るには、その當人の爲した事業や、示した力量に依るのが當然で、他人から如何なる符號を附けられて居るか、親から如何なる家名を受け繼いで居るかは、捨て置いても宜しい筈である、然るに常々自由に考へ、獨立に判斷することを知らず、萬事他人の判斷に盲從する癖の附いた思想上の奴隸からは、之が無上の權威の如くに見え、肩書の有る者は、總べて自分よりは遙か上に位する別階級のものの如くに思はれ、斯かる貴い方々の尊名が出て居る書物ならば、惡かるべき筈は無いと信じて、謹んで有難く購讀するのであらう、本屋は此邊の消息をよく心得て居る故、成るべく長い肩書を列べやうと苦心するが、肩書の中にはまた上の上から下の下まで樣々の階級があつて、一段でも上の人は下の人と同列に置かれることを快しとせぬから、恰も芝居の觀覧席を特等、一等、二等と分ける如くに、題字、序文、校閲等の席を設け、大臣や從三位には題字を賴み、局長や從五位には序文を書かせ、教授や從七位には校閲の名を借り、之を並べ示して、本書は此の通り汝等よりは遙か上に位する人々と特別の緣故を有する書物であるぞとの意味で廣告を出すのである、聊かたりとも自由に考へ獨立に判斷し得るとの自信を有する者ならば、斯樣な廣告を見て、その書物を買はうなどとの心を起す筈はない、されば題字や序文を並べた書物の廣告の出ることは、世間に思想上の奴隸の頗る多くある證據と見做さねばならぬ。

二

さて何故斯樣に思想上の奴隸が多くあるかと云ふに、之は一つには、維新前に長らく自由に考へること

を禁ぜられ、獨立に判斷することを許されなかつた習慣が、惰性によつて今日も尙殘つて居るためであらうが、又幼ない頃から、思想上の奴隷と成るやうに敎へ込まれたにも因るであらう、例へば、花咲爺の御伽話などにも、直に殿樣の御賞めに與つたとか、御咎めを蒙つたとか云ふことが出て來て、殿樣に賞められることを何よりの名譽と思はせ、殿樣に咎められることを何よりの恥辱と心得させる故、幼兒は自分よりは遙か上に殿樣と云ふ別階級の人間があつて、善い事ならばその人が賞め、惡い事ならばその人が罰する、その人が善いと云ふ事ならば必ず善い事で、その人が惡いと云ふ事ならば必ず惡い、自分の如き低い者は萬事萬端その人の判斷の通りに心得て居りさへすれば間違ひは無いと云ふやうな、奴隷的の思想を三つ兒の頃に養成せられ、それが後々まで働いて、何事も自分で自由獨立に判斷することをせず、總べて他人の判斷に盲從し、內容實質の如何は問はず、たゞ添へてある鑑定書のみに信賴するやうに成る、肩書なるものも、畢竟一種の鑑定書である故、思想上の奴隷の間では之が非常に重んぜられ、肩書のみによつて人の價値を定める上は、肩書の階級を嚴重に區別し、之に對する尊敬の程度をも細かく分けて御の字や樣の字も、特等の人には楷書で書き、一等の人には行書で書き、二等の人には草書で書くと云ふ程に形式が喧しく成るが、斯く成果てては、物事を自由に考へることなどは、夢にも望まれぬ、ミュンヒハウゼンの法螺物語の中に、一疋の牝犬が一疋の牝兎を追ひ掛けて居る最中に、兩方ともに急に產氣が附いて犬も兎も七疋づゝの子を生み、兒兎は生まれるや否や直に逃げ出し兒犬は生まれるや否や直に追ひ掛けて、都合八疋の犬で八疋の兎を追ひ詰めた話があるが、習が性と成ると萬事この通りで、肩書を敬ふ側の者は生れながらに肩書を敬ひ、肩書で威張る側の者は生れながらに肩書で威張る、從何位侯爵の何某は本屋に乞はれるまゝに「天地玄黃」とか「萬里同風」とかやうな何の足しにもならぬ題字を書き與へて別に怪みもせず、何學博士の何某は、本書は近來稀に見る

良書とか、著者は壯年ながら感心な男とか云ふ提灯持ちの序文を書いて、一向不思議とも思はぬ、書く當人等が不思議と思はぬ通り書いて貰ふ著者も本屋も、買ふて讀む讀者も世間も、皆之を當り前のことと考へて居る、中には跋とか稱へて、序文と同じ樣な提灯持ちの文句を書物の終に附け、恰も箱根の坂を上る列車の前後に、機關車が一臺づゝ附けてある如くに前からは序文で引き上げ、後からは跋で押し上げやうとして居るのもある、苟しくも著者に自由獨立を尊ぶ心があつたならば、自分の書いたものが貨車同樣の取扱を受けることを無念に思ひ大に憤慨しさうなのであるに、肩書を重んずる空氣の中で育つと、之を侮辱と思はぬのみか、却て非常な名譽と心得て居る、而して買ひ手の方は、何某題字何某序何某跋と立派な肩書が並んで居るのを見ると、責めては書物を通してなりとも、貴い肩書の人々と接觸する機會を得たいとの心から、その本が欲しくて堪らず、遂に之を買ふのであらう。

三

一事が萬事と云ふ諺でも知れる通り、題字や序文によつて書物を買ふやうな思想上の奴隷は、自由に考へ獨立に判斷することを知らぬから、總べての方面に他人の鑑定に盲從するの外はない、例へば嗜好の如きは、元來各自それ〳〵異なるべき性質のもので、昔から「嗜好に就ては爭ひは無益」とさへ云ふて居るが、肩書を尊ぶ習慣の附いた人間は、嗜好の方面にも奴隷の境遇を脱し得ず、繪や彫刻などを見るにも、やはり他人の鑑定に盲從し、他人の指圖に從ふて觀賞して居る、近頃の文展に、切符さへ容易に買へぬほどに人の出るのは、國民の美術心が高まつた故か否かは知らぬが、審査の結果が發表せられた翌日には、二等賞を取つた繪の前にばかり人が押し寄せて、無賞のものには顧る人も無い、自由に考へる者から見れば、繪畫の如きは、各自最も自分の氣に入つたものを眺め樂しめば宜しい譯で、自分とは嗜好の違ふ他人の賞めた繪を、義理に感服してやる必要は少しも無い、特に數名の委員が寄つて審査する場合には、嗜好も一人一人に違

ひ、結局投票か何かで決するの外は無からうから、何等賞と定まつた所で、審査員の中にも之に賛成せぬ人もあり、無論萬人を悉く納得せしむべき性質のものではない、然るに二等賞と云ふ鑑定書が附くと、急に之に感服して、その筆者の書いたものならば、玉石ともに價が騰貴する、相手が斯樣な連中であるから、書書きの方でも審査の結果を非常に氣に掛け、當選すれば赤飯を炊いて喜び、落選すれば、頭を縊らんばかりに悲観する、折角纏まりかけた縁談も、出品が選に洩れたと聞けば先方から取り消しを申し込み、今まで猶豫して呉れた八百屋の勘定も、落選と知つては遽に催促に來るから、誰も審査の結果を重大視するのは無理も無いが、同一の繪が昨日と今日とで善くなり惡くなることの無いは明白なるに拘らず、審査の前後で斯くまで待遇の變るのは、見る人にも書く人にも、一般に他人の鑑定に盲從する奴隷性がある故であらう。

最も自由に振舞ふても差支への無かるべき嗜好の方面に於てさへ、他人の嗜好に服從し、他人の鑑定通りに味ふやうでは、その他の方面のことは無論全然他人の意見に從ふの外はない、病人を醫者に見せるに當つても、子供を學校へ入れるに當つても、常に肩書や、人の話によつて撰擇を定め、某博士は名醫である、何某侯爵も何某伯爵もその診察を受けたとの噂を聞けば、直にその人に見て貰ふ氣に成る、横町の稲荷樣は御利益があるとか、隣り村の八幡樣はよく利くとか云はれて、直に御詣りに出掛ける迷信家と、精神の狀態は少しも違はぬ、醫學博士の學位は、「蛙の血液の粘凋性に及ぼすラヂユムの影響に就て」とか、「飢餓時に於ける兎の大腿骨重量の減少に就て」とか云ふやうな、診斷とも治療とも何の關係も無い論文を提出して取つたものも多く有らうに、常々肩書のみを尊重する癖の附いて居る思想上の奴隷は、斯かることには少しも構はず、たゞ博士と云ふ肩書さへあれば、治療も必ず巧であらうと思ひ込み、博士の中にも博士以外の者と同樣に、善人もあれば惡人もあり、賢者もあれば、

愚物もあり、木訥な者もあれば、奸佞な者もあり、上手もあれば下手もあるべきことなどには、丸で考へ及ばぬ、田舍の人からは、時々何方でも宜しいから、博士の方に一人御紹介を願ひたいとの依賴を受けることがあるが、之などは肩書崇拜を最も露骨に現はして居る、近來肩書のある醫者が續々殖えるに拘らず、根本的研究がその割合に進まぬのは、恐らく世間に斯様な連中が多いからであらう。

四

自由に考へ獨立に判斷することを知らず、常に他人の鑑定に盲從する癖の附いた世の中では學校敎育なども、自然內容實質の如何は捨て置き、專ら形式や稱讃を重んずるやうに成る、敎師は各々自分の仕事は何の爲にするものかを考へ、その目的に最もよく適する敎材を取り、最も有效と信ずる方法によつて敎へさへすれば宜しい筈であるが、他人の批評に氣を揉む餘り、たゞ參觀人の目に着きさうな點にのみ心を配り、何か一つ目先の變つたことをして、參觀人を感服させてやらうなどと、敎育本來の目的とは緣の無いことに骨を折る、良いと評判のあることとは、土地の事情などに構はず、隣りに後れぬやうに急いで眞似し、新しい仕組と聞くと、直に之を採り用ゐ、外形の改まつたことを進步と名づけ、內容の舊の儘なることは知らぬ顏で濟ます、先日宇都宮附近まで散步に行つた時、或る町で裏に幾らでも塵の捨てられる廣い空地の有るに拘らず、一軒每に東京のと同じ様なコールター塗りの、而も石油箱位の小さな塵箱が一個づゝ必ず備へてあるのを見たが、形式を重んずる者のすることは萬事この類である、若しも模範と見做される學校へ、年々何千人も押し寄せて來る參觀人等が、國へ歸つて、この塵箱と同じく、たゞ東京の眞似をする様であつては、何程の無駄な事が行はれるか知れぬ、役人に賞められた學校は、賞められぬ學校よりは必ず良い學校と見做され、二度賞められた敎師は、一度賞められた敎師よりも一層良い敎師と値が定まる、總べて他人の鑑定次第で相場が定まる以上は、賞められた當人が非常に喜ぶの

も、卒業生が寄つて祝賀會を催して呉れるのも不思議は無いが、斯様なことでは眞に内容實質の進歩することは、却つて遅れるを免れぬであらう。

また肩書を重んずる世の中では、學校へ入學する者も、求める所は内容實質ではなく、卒業と云ふ名である故無理な工面をしても一段高い等級の學校へ行きたがる、教へる事は同じでも、卒業生に何とか稱號を與へるやうに成ると、急に生徒が殖える位故、假に大學が特等と並等との二種類出來たとすれば、誰も彼も特等の方を選んで、並等の方へは、特等に行けぬ事情のある者の外は入學せぬであらう、女學校の如きは、入學者の目的は全く嫁入りの時に簞笥長持と一所に持ち行くべき卒業證書を得るにある故、各科に就いて云ふと、教師も生徒も何のために、その學科を修めるのか分らず、たゞ之を修めねば卒業が出來ぬ故、止むを得ず勉強して居るのである、形式を整へるために數多く並べ連ねた科目を、たゞ卒業の名を得んがために片端から暗誦して居るやうでは、女子教育の效果も頗る覺束ない、南洋諸島の土人は、身體に樣々の入墨をして裝飾とするが、肩書を尊ぶ社會では、學士とか卒業生とか云ふ名は一種の裝飾であつて、土人の入墨と同じ役に立つ、即ち各種の學校は年々何百人かの學生生徒に、學士とか、卒業生とか云ふ文字を入墨して世に出して居ることに當るが、斯樣に考へると、文部の文と文身の文とが同じ字であるのも決して偶然でない。

自由に考へ、獨立に判斷する者から見ると、大學と云ふても專門學校と云ふても、同じ程度のことを教へさへすれば位も同等な譯で、若しも教授の學力、生徒の勉强が、大學よりも優つて居たならば、名は專門學校であつても、無論この方が上である、然るに專門學校と云ふ看板を、大學と云ふ看板に掛け換へると、學校の價値が急に高まる如くに思ひ、之れを昇格と稱へ、その事が行はれさうに成つただけでも前祝をして喜ぶ人等もある、何々農學校とか何々醫學校とか云ふ名前は、別に改める必要も無い故、その儘に置いて、努めて内容實質を善くし、他の農科大學、醫科大學よ

りも眞價に於て優るものが出來たならば、肩書に構はぬと云ふ點だけでも、大に尊敬するに足るやうに感ずるが、萬事形式的の階級の高下によつて相場を定める世の中に、その樣な學校の現はれるのを望むのは、素より無理な注文であらう。

五

その他、思想上の奴隷と見ゆる者は、有らゆる方面に無數にある、先年、東北地方を旅行した際に、或る町で泊つた宿屋の廊下に、何某侯爵閣下御宿泊、何某伯爵閣下御宿泊、何某大臣閣下御宿泊、何某知事閣下御宿泊などと云ふ大きな板札が隙間なく掛け列べてあつた、而もその幅が階級によつて少しづゝ違ふて、何某内務部長殿御宿泊の邊に行くと、大分狹く成つて居たので、武州高尾山の杉苗寄附の木札などを思ひ出して可笑かつた、自由に考へ、獨立に判斷する者から見れば、惡い知事よりは善い宿屋の亭主の方が世の中の爲には餘計に役に立つ故、不法の宿料を貪らず、旅客の便利を圖りさへすれば、立派な一人前の人間として、決して他の人々より遙か下に位する如くに自らを卑しむ必要は無い、特に侯爵閣下、伯爵閣下と來ては先祖が嘗て、何等かの御役に立つたことがあると云ふだけで、當人には何の取り得も無く、裸にしたら、智惠も力も宿屋の亭主に及ばぬ者が澤山に有らう、譬へて云へば、内容の極めて貧弱な書物の卷頭に、有名な人の書いた「我子孫也」と云ふ題字が添へてあるやうなもので、題字に構はぬ人は、決して之を買ふ氣遣ひは無い、然るに長い間、士農工商中の最下等のものとして、奴隷の如き取扱ひを受け來り當人も之に慣れて、自分を卑しい者と信じ、肩書のある人々は自分よりは遙か上の貴い者であると考へる癖が附いて居る故、偶々肩書の有る人が泊り込めば、我店の相場が一段上つた如くに感じ、嬉しくて堪らず、一人でも餘計にこの事を吹聽したい故、客の通り道に尊名を並べ掲げたのである、この亭主などは法律上では自由の人民であらうが、根性の持ちやうは印度の最下級の奴隷と少しも違ふた所は無い、斯樣な連中は何々會總會にでも出席し

て、會長何某伯爵閣下夫人の顏を見ただけでも名譽と思ひ、十メートルまでより近づく機會の無かつたものは、五メートルまで近づき得た者を非常に羨み、三メートルまで近づき得た者は、身に餘る光榮として、孫の代まで自慢話にするであらう、肩書を尊重する社會では斯樣なことは極めて普通で、限りなく例のあること故他は略する。

六

さて今日はヨーロッパは大戰爭の最中である、我國は幸ひ戰場と遠く距つて居る故、暫く樂が出來るが、この戰爭が如何に終らうとも、その後には、直にまた舊に倍して劇しい民族競爭に加はらねばならぬ、政略上、甲の國と同盟するとか、乙の國と仲間に成るとか云ふことは絶えず有らうが、之は時々變更する故、民族間の競爭に於て眞に賴りとすべきは、自己の實力より外には無い、他國の速に進步する間に挾まつて、自國だけ進步が遲かつたならば、實力上、他の壓迫を受けて非常に苦しい地位に陷り、終には敗れることを免れぬ、而して實力を進步せしめるには、先づ各個人ともに實力を尊び、實力の如何によつて人を評價する風俗を造ることが必要である、戰爭後は各國ともに間諜に對する警戒も頗る嚴重になり、自然總べての外國人に對する注意も深く成つて大概の事は秘密にするであらうが、之は我國の如き、何も彼も眞似で進み來つた國には大打擊で、之からは萬事自力で我文明を進めるの外に途は無い、而して自力で文明を進めるには、他人の鑑定に盲從せず、自由に考へ、獨立に判斷する習慣を養ふことが、何よりも肝心である、特に我國は、人種の關係上、他の列强に比して、競爭の苦みは一倍多からう、先日、米國の一議員から送つて來た別刷に、世界の平和を保つには英、米、獨、佛の四國が同盟するが宜しい、斯くすれば、極東の新興國が勝手な事を爲やうとしても武力で之を抑制することが出來るとの說が述べてあつたが、之は到底出來ぬ相談であるとしても、我國の勃興を喜ぶ國は日本以外に一國も無いのは確である、米國の如きはヨーロッパ諸人種の混合であ

る故、英國を敵とせんとすれば、國内の英國種の人民が反對し、獨逸を敵とせんとすれば國内の獨逸種の人民が承知せず、フランス種でもイタリヤ種でもそれぞれ母國を敵とすることには反對するから擧國一致で敵とすることの出來る相手は日本だけである、斯樣な事情も有る故、今後の日本は、一人で三人前の實力を備へる位でなければ殆ど安心が出來ぬ、獨逸では、此頃は花園を廢して、ジヤガ芋を作つて居るとのことであるが、四方異人種で圍まれて居る我國は、全く今の獨逸と同樣に奮發し、裝飾に勵することは悉く他日に讓つて、專ら實力を增すことに努力せねばならぬ、而して、實力を增すには先づ空名を崇拜する如き奴隸根性を一掃する必要がある。

誤解を避けるために云ふて置くが、如何に自由に考へ、獨立に判斷するが宜しいと云ふても、決して他人の意見を全然無視せよと云ふ譯ではない、各個人の經驗は狹い範圍を出でず、思考の力にも不充分な點があるを免れぬ故、何問題を論ずるに當つても、他人の意見を參考することは素より必要である、學術上の研究を始めるに當つても、先づ當面の問題に關し、之まで他の學者が如何なる研究をしたかを廣く調べる必要がある通り、他人の判斷や鑑定も成るべく多く聞いて見るが宜しい、併し、之は何所までも參考の材料であつて、結局の判斷は當然自分の力で爲すべき筈である、また肩書を重んずるなど言ふても、決して人間を悉く平等と見做して、その間の差別を無視せよと云ふ譯ではない、人間には生來の賢愚により、教育の多少により、實力に著しい相違のあるは目前の事實で、强いて之を平等と見做すのは素より理に合はぬ、實力も違ひ、專門も異なる人間が、多數に集まつて社會を造つて居る以上は、設計する者、實行する者、教へるもの、習ふ者、指圖する者、從ふ者、乘る者、擔ぐ者などそれ〳〵役目の異なるべきは當然で、役目が違へば各々肩書を定めて置くのが便利である、職務上、命令を下すべき者が命令を下し、服從すべき者が服從するのは無論必要なことで之が亂れては國は治まらぬ、自

分等が選んだ世話人の云ふことならば、多少自分の意見とは違ふても我慢の出來る限りは之れに從ふが宜しい、併し、職務を離れ自分一個として物を考へる際には、何所までも、獨力で自由に判斷し、如何に嚴めしい肩書のある者の云ふた事でも、自分で成る程と思はねば、決して之に盲從するに及ばぬ、題字や序文を書いた人の肩書を見て、書物を買ふやうな思想上の奴隷が大勢あつては、到底國全體の内容實質が速に進歩する見込みは無い。

以上は、題字、序文、校閲と肩書を並べた書物の廣告を見て、胸に浮んだ考への一端を述べたのである。

新道德側面觀

金子筑水

曾ては大なる權威を持つたもので、道德といふものほど威嚴を失したものは無い。或意味で言へば道德といふ事は、今日むしろ冷笑侮蔑の的となつてゐる。道德家といへば、何となく窮屈な偏屈な變通自由のきかない頑迷家が聯想され、道德的といへば、どことなく峻嚴一方の干枯らびたミイラのやうなものが聯想される。就中潑剌たる生氣に富んだ青年に取つては、道德といふものほど窮屈に感ぜられるものは無く、道德的に化せられるといふことは、甚しい侮辱でも被むらされたかのやうに感ぜられる。今の青年のうちそれも極めて生な者でないかぎり、道德的にいそしむといふことを、生眞面目に考へてゐる者が果たして幾人あるであらう。極端に言へば、峻嚴な道德は、今日もはや人心以外に驅逐されてしまつた觀さへ有る。

人間は神ではない。一方に於て自由なのびやかな進歩を要求すると同時に、他方に於ては一定の訓錬のもとに絶えず全精神を緊張させて行く必要がある。緊張と弛緩とは精神活動に必然なリヅムで、弛緩のみに任せて全く緊張を缺けば、精神活動は忽ちだらしないふやけたものに成つてしまふ。道德といふ緊張力が廢れた結果、社會の各方面には、現に恐るべき弛緩廢頽の空氣がたゞよつてゐる。

道德が斯ほどまでに權威を失墜したには、勿論そこに深い原因が有るわけであるが、こゝでは主として道德の概念に關しての世間普通の誤解だけを指摘して見たい。

倫理學者の見地や理論上の立場からは、どうしても斯やうな誤解が起こるべき謂はれがなくして、而も實際上世間普通に行はれてゐる道德上の一事實は、道德といへば直に束縛が聯想され、一定の形式の中に人間の自由を束縛するが道德と考へられてゐる事實である。道德が本來斯くの如く窮屈に考へらるべきものであるや否やは別として、兎もかく道德が實際一種窮屈なもの頑迷なものに考へられてゐることだけは事實である。即ち人間の自由や本然やを伸張させるよりは、寧ろ其の自由や本然やを抑壓し强束し禁止し絶滅するものが道德と考へられてゐる。道德の精髓が積極的な進步的なものに考へられずに、主として消極的な保守的なものに狹くるしく考へられてゐる。斯やうな窮屈なものに考へられゝばこそ、自由や本然の伸張を希ふ進步的な人間は、孰れも道德的たることを望まず、寧ろ道德家に仲間入りすることを非常な屈辱のやうに感じてゐる。近代の藝術家や文藝家――最も强く自由にあこがれた藝術家が、ひとしく道德に反抗して立ち、寧ろ不道德家を以て誇とするに至つたは旣知の事實ではないか。

道德が斯ほどまでに束縛的な消極的なものに貶せられるに至つたは、勿論傳來の道德そのものが無力で、最早今日の一層積極的な進步的な人心を繫ぐだけの權威が無くなつたに胚胎したは言ふまでもないが、然しな

から道徳といふ大事を、いつまでも斯やうな窮屈なものにばかり考へてゐるが果たして我々の名譽であらうか。我々は最早斯やうな時代は經過して、道徳といふ人間生活の大事をば、もつと眞面目にもつと積極的にもつと進歩的に考ふべき時代に到達したではないか。藝術家の所謂不道徳をば、今や眞面目に道徳と考ふべき時代に進んだではないか。我れは道徳を破壞して自由の天地に徜徉したいと言ふ者があらば、自由の天地に遊ぶことが、其の人に取つての道徳目的と呼ばるべきではないか。個性の發達が我れに取つての最大事と公言する人があらば、其人は個性の發達を公然道徳的理想として揚ぐべきではないか。傳來道徳が消極的で束縛的であつたからと言つて、道徳そのものの全體を束縛的消極的にのみ考へる必要がどこに有らう。縱令道徳の本質には束縛的な消極的な方面が纒綿してゐるにしても、其精髓は飽くまで積極的な開放的な自由の伸張を意味すると觀るが新道徳觀の根本ではないか。積極的な進歩的な方面に主力が注がれれば、束縛や禁止やはおのづから束縛でもなく禁止でもないものに變つてくる。

然しながら道徳が斯くまで權威を失したには、今日まで普通に考へられた原因の外に、それとは明らかに氣附かれなかつた更に別種の重大な原因が有る。世間普通の考によれば、道徳とは萬人に共通普遍な本道であるから、其の內容は何人にも明瞭普通なもの、否むしろ千遍一律なもの、人によつて異なるものではなくして、すべての人に平等一體なものと考へられてゐる。道徳を守つて行く人間はそれぞれ個別的なもの個性的なものであるに拘らず、道徳そのものは絶對に平等的なもの、其の間に個性的差別が存すべきでないと考へられてゐる。倫理學者や其の他の學者方面にも、不知不識間接に斯かる思想を鼓吹し普及させた形跡が著しい。道徳は古今一貫のもの、萬人に共通普遍なもの、孰れの時代にも孰れの場所にも、孰れの人間にも孰れの場合にも適用される普遍法に外ならないと主張された。然しながらこれは單に學理上の抽象論又は形式

論であつて、實際生活に於ける具體的道德が斯ほどまでに千遍一律十把一束のものだとはどうあつても考へられない。古今一貫とか萬人に共通とかいふことは、すべての個別的差別を徹廢した抽象的形式に就いていふか、然らずんば最低級若くは最少限度の道德に就いてのみ立言さるべきことで、實際生活に於ける具體的道德は、個性の差別のそれと同樣、十人十色こと〲く個別の特徴を具へてゐるものと言ふべきではないか。例へば誠實や勇氣の美德が普遍的であるからと言つても、誠實や勇氣はもと〱それ〲の個性に屬する事柄であるから、個性の異なるに從ひ又其の人の內生命の發達の程度に從ひ、抽象的な誠實や勇氣も具體的には千態萬狀であるとは誰にも明白な事實ではないか。單に同一の美德に就いて然るのみならず、個性の差別と其の發達の程度に基づいて、此の種類の人には備はつてゐても彼の種類の人には備はらない道德的內容が有り、又此の種類の人に取つては高く貴い道德と感ぜられることも、彼の種類の人に取つては寧ろ低級道德と感ぜられ、或はまた場合によつては、他の者の道德とする所が我れには寧ろ不道德と評價され、他人の不德とするところが却つて我れには尊い德と評價される場合も有らう。隨つてまた政治家の道德と學者の道德と異なる所があり、藝術家の道德は實際家の道德と違ひ、老人の道德は青年の道德と違つてくる。男子の道德を以て女子を律し、女子の道德を推して男子を律し、個人の道德を以て會社や團體を律しようとするなど、孰れも愚かしい誤つた見解ではないか。嚴格に言へば、道德は具體的にはすべて個別的であり特殊的である。

此の點から傳來道德の權威が次第に損はれてきた順序が明白である。賢明な進步的な少數者の道德的理想と、社會の多數者の道德的理想との間には著しい懸隔が有つて、其の間に殆ど調和點が見出されない。社會の多數者に千遍一律に適用される道德と言へば、勢ひ低級の又は最小極限の、初から事理明白な平凡普通の道德ならざるを得ない。直接存在を便宜にするための

功利的な常識的な事務的な機械的な道德が社會多數者の道德、否社會唯一の道德と考へられて、少數者の高い道德の如きは、ほんの一種の例外又は一種奇怪なもの位にしか考へられない。常識的な功利的な道德は、多數者といふ地盤の上にます／＼其の根柢を深め且次第に其の領域を擴げて行く。斯くして道德といへば、ひとへに常識的な最小限度の道德を指すものゝやうに考へられ、其の外には最早何等の道德も無いやうに考へられてきた。所謂普通道德が一切の道德で、普通道德以外のものはすべて不道德又は惡德とさへも考へられるやうに成つた。斯くしてまた道德は萬人に共通普遍なもの、普通道德に從はない者は、道德上の罪人とまで考へられるやうに成つた。

最小限度の普通道德がます／＼其の地盤を堅固にしてます／＼其の領域を擴げて行くことは、疑ひもなく立派な道德上の進歩で、これに就いて何等悲觀すべき理由は無いわけであるが、然かも此の最小限度の道德が社會に存在する唯一の道德と考へられるに至つては、明らかにそこに由々しい道德問題が起こつてくる。多少でも進んだ識見を抱へてゐる者の理想に、否いすから最小限度の標準とは違つてゐる所から、斯かる識者の眼から見れば、普通道德は或は餘りに消極的のものと見えたり、或は餘りに形式的のものと感ぜられたり、或は餘りに平凡淺薄なものと侮蔑されるやうに成るは、寧ろ必然の結果ではないか。低い道德を導くべきさま／＼高い道德が存すること若くは存すべきことが忘れられて、たゞ一律一體の道德のみが存すると考へられるとき、斯かる一律一體の形式道德が、一層進んだ社會から侮蔑冷笑の意を以て迎へられるは眞に已むを得ない。

然しながら道德そのものは、本來決して斯やうに一律一體のものではなく、具體的には寧ろ高低優劣上下貴賤の差別が最も甚しいものであるとすれば、道德の全體をばいつまでも偏狹なもの頑迷なもの形式的なものと冷笑して行くことが、果たして我々に取つての名譽であらうか。我々はいつまでも道德といふ大事を

ば、斯やうに偏頗に不公平に冷笑的にのみ取扱ふべきであらうか。此の場合に於ても我々は再び時代の變化を考へなければならぬ。破壞時代は過ぎ去つて、今や我々は再び建設の時代に向かつてゐる。普通道德を罵倒し破壞する時代は過ぎ去つて、今や我々は再び新らしい道德を建設すべき時代に向かつてゐる。

されば我々は今や普通道德以上に、個別に新らしい道德の建設に取掛らなければならない。最小限度の道德を唯一の道德と考へるやうな偏狹不公平な態度から脫却して、道德の進境は無限であることを强烈に意識しなければならぬ。保守的な無生氣な形式道德といふ不凡な劃一主義から抜け出して、我々はもつと大膽なもつと力あるもつと自由なもつと美しい進路を新道德の理想として掲げなければならない。平等主義又は劃一主義の牢獄から抜出でゝ、自由な快活な個別的道德の新らしい世界に向つて勇ましく進まなければならぬ。我々の祖先の時代に於て、其の當時の最小限度の道德が法律といふ形を取つて道德から分離されたやうに、今日までの普通道德は、更にそれ以上の進歩した高い道德の最小限度として、新らしい道德から區別され分離されるやうな勢ひでなければならぬ。

然かも普通道德は多數者の道德、否むしろ社會の中流階級の道德である。少數識者からは如何に冷笑され侮蔑されても、普通道德はいつまでも儼然たる存在を保つてゐる。されば新道德の主張者は常に社會の犧牲者たる運命を覺悟しなければならぬ。新らしい途を切り開いて行く人は、所詮普通人とは歩調を共にしがたい例外者である。悧巧な世渡りの上手な人、所謂當世才子は、どこまでも多數者に媚びて、當世からの抜けものと成らぬがよい。例外者は内面からの必然性に强ひられて、いつでも淋しい途をたどつて行く。

内閣諸公及び貴衆兩院議員に與へて拓殖務省再興の急務を論ず

永井柳太郎

一

一日客あり、日本の植民政策に對する余の意見を求む。余反問して曰く「日本に植民政策なる者ありや」と。客余の言を怪み「日本は植民國なり。凡そ植民地を有して植民政策を有せざる者あらんや。」と云ふ。余答ふらく「植民地を有して植民政策を有せざる者あり。日本は即ち然かり。今日本の植民地に對するを見るに、臺灣總督府は臺灣總督府の好む所に就き、朝鮮總督府は朝鮮總督府の欲する所を行ふ。中央政府ありと雖、之を統轄して大日本を組織するの目算なく、唯各總督府の要求するに從ひ、或は甲の土人討伐に同意し、或は乙の同化政策を可とするのみ。從て其施設に一貫の系統なく、特に指示して日本の植民政策なしと云ふに足る者なし」と。客亦た首肯して去れるが、凡そ我植民地の實情を調査したる人にして此言に裏書すべき事實を發見せざりし者はあらざるべしと信ずる。實に各植民地間に於ける政治的及び經濟的連絡の不完全なる事驚くべく、之が同一帝國の植民地なるかと疑はれる程である。假へば對土人政策に就て之を見るも、各植民地の方針は一定する所なく、臺灣總督府の如きは、其生蕃に對し、最近討伐主義を採り、明治四十三年以來五ケ年計畫にて、約千五百萬圓を投じ、頻りに蕃地を掃蕩しつゝあるに反し、朝鮮總督府に於ては同化主義を呼號し、苟くも朝鮮人を凌辱するに於て

は内地人と雖、之を假措せざるを方針として居る。若し夫れ支那大陸に於ける我官憲の支那人に對する態度に至ては、南滿洲に於ける者と山東省に於ける者と全然其趣を異にし、一は愛撫を以て其歸順を誘ひ、他は威壓を以て其畏服を促かす。如斯く各植民地の對土人政策は支離滅裂にして、其間に何等の連絡なきのみならず、時としては同一植民地に於てさへ其總督又は民政長官等の更迭に伴ふて其政策が一變するのである。現に臺灣の如きは樺山總督時代に於て本島人及び生蕃併せて之を化育するの方針を採りしが、兒玉總督時代に至り本島人の愛撫懷柔には大に其意を用ひたりと雖、唯り生蕃に至ては之を掃蕩するに決し、次で佐久間總督時代に及ぶや、遂に兩者共に之を酷遇する事となり、先任總督の苦心努力は悉く水泡に歸し、內地人對土人の感情は俄かに險惡となつた。如斯にして果して日本は四周の諸民族を同化し、之を統合育成して新日本民族の血液となす事が出來るか。

二

又植民地に對する移民政策に就て見るも、奬勵すべき場所に於て奬勵せず、却て奬勵すべからざる場所に於て奬勵して居る。蓋し同じく植民地と云ふも溫帶植民地と熱帶植民地とは風土の關係上決して同一視する事は出來ない。從來の經驗に依れば、如何に强健なる者も、熱帶地方に移住すること數ヶ年に及ぶときは、大抵其健康を破壞する。固より今日は衞生の進步と醫療の發達とに由り、或種の熱帶病即ちマラリア、黑尿熱、腸窒扶斯、熱帶赤痢、熱帶脾腫等の如きは、之を豫防する事必ずしも不可能にあらずと雖、然かも氣候の變化が人間の生理組織に及ぼす影響に至ては、到底今日の醫術を以て之を豫防する能はず、女子の如きは屢々その姙娠力をも失ふに至るのである。之に反し溫帶植民地に於ては氣候の激烈なる變化なく、特殊の風土病も亦尠きがため、移住者の健康は寧ろ增進するを常とし、女子の姙娠力の如きも亦著しく盛大となる。敎授エジアトンは曰く「北亞米利加に移住したる英人が其本國に劣らざる大文明國を建設し得たるは、或程

度まで、其地理的理由に基く。即ち彼等の上陸したる土地の氣候が頗る溫和にして、その彼等に與へたる諸種の刺激が、彼等の精神を鼓舞するに十分にして、然かも之を麻痺せしむる程に過度ならざりし事は、彼等の精神を非常に活潑ならしめたるなり」と。然かり、此言の如く、溫帶植民地に對する移任は、時に其健康狀態のみならず、又其精神狀態をさへ、其本國に在りし日よりも一層良好ならしむるのである。從て先進植民國は孰れも溫帶植民地に對して放資よりも寧ろ移住を奬勵し、特に小農民及び小資本なる商工業者の渡航を容易ならしむる事に努力すると共に、熱帶植民地に對しては移住よりも放資を主とし、本國は唯資本及び之が運用を監督し、又は指導すべき人物のみを供給するに止め、一般の勞働に至ては之を土人に委ぬるの方針を採る事に一致して居る。

今我植民地を見るに、臺灣は熱帶植民地に屬し、朝鮮は溫帶植民地に屬する。固より臺灣は阿弗利加の如き險惡なる氣候を有せず、絕海の孤島にして、常に海風のため其炎熱を吹拂はるゝが故、他の熱帶地方に比すれば頗る凌ぎ易しと雖、然かも其氣溫高き時は連日百度に近く、加ふるに空氣は濕潤にして發汗容易ならず、之を內地に比ぶれば、實に苦熱堪へ難きものがある。從て本島人及び內地人を通じて死亡率頗る高く、大正元年度に於ては正に千分の二十五弱を示して居るのである。之に反して朝鮮は內地と略ゞ同緯度に位し、氣溫は我北陸地方に彷彿せるのみならず、其空氣も亦頗る乾燥し、健康地としては寧ろ內地以上である。現に其死亡率の如き、內地に於ては千分の二十一弱を算するに拘らず、朝鮮に於ては僅かに千分の十五强を示すに過ぎない。故に我國は臺灣に對して移住よりも寧ろ放資を主とし、朝鮮に對しては放資よりも寧ろ移住を奬勵しなければならぬのであつた。然るに從來の狀態は如何であつたかと云ふに、熱帶植民地たる臺灣に對して移住を奬勵し、却て溫帶植民地たる朝鮮の移住を閑却したのである。即ち臺灣に於ては明治四十二年以來總督府自ら多大の經費を負擔して移民を招致せん

と努めつゝあるに反し、朝鮮に於ては總督府自ら何等の施設を營むことなく、凡て之を一私立會社に放任し、然かも同會社が移民奬勵の目的を以て給與せられたる補助金を同目的以外に流用しつゝあるに對しても、嘗て總督府は之を矯正するがため其監督權を行使した事がない。實に同會社が創立以來今日に至る迄移民事業に對する補助金として政府より受領したる金額は二百五十萬圓に垂んたるに拘らず、朝鮮に移植し得たる內地人は尙未だ三千戶に過ぎず、補助金不當消費及び移民事業怠慢は公知の事實である。宜なるかな、神代以來嘗て交通を絕たず、距離亦た一葦帶水を隔つるに過ぎざる鷄林八道に於て、在留內地人の數が、保護權設定以來既に十星霜を經過したる今日尙未だ三十萬を出でざる事や。之で果して故小村侯の滿韓移民集中に關する聲明を實現し、帝國の亞細亞大陸に於ける地步を確立する事が出來るか。

三

又政府は明治四十二年より財政窮迫の餘、俄かに關稅統一を標榜して、臺灣の海關稅收入を本國々庫に繰入れしむる事としたるが、若し其標榜が政府の眞意であるならば、何故之を他の植民地にも及ぼさないのであるか。全體本國政府が恣に植民地の財源を橫領し、之を自己の財源に移すが如きは、植民地の發達を無視したる處置と云ふべく、其有害なるは先進植民國の實驗に徵して明白である。而して我臺灣の如きも右關稅統一のため二重の損害を被つた。第一に內地の關稅法を臺灣に擴張する事としたる結果、內地に對する貿易は俄かに增進したけれども、外國に對する貿易は自ら其發達を妨げられたのである。第二に臺灣は之がため植民地財政の財源中最も重要なる者を失ふ事となり、之を塡補する必要上自ら他方面に於ける負擔を過重ならしむるを餘儀なくせられたのである。政府は臺灣をして如斯き犧牲を忍ばしめ、强て關稅統一を斷行し、其收入を橫領する事となれるが、然かも朝鮮に對して如何と云ふに、殆んど正反對である。朝鮮に於ては合併後の今日も、尙ほ舊韓國の對外條約に基く關稅率を

踏襲し、內地とは全然異なれる低率の輸出入稅を存するのみならず、內地、臺灣、樺太より朝鮮に輸入し、又朝鮮より此等の土地に輸出する貨物は、凡て外國の輸出入品と同率に課稅らるゝ規定である。加ふるに將來關稅率を改正するに際しても、其改正權は全然總督に委任せられ居るのみならず、其收入は全部之を朝鮮總督府の收入となし得るのである。此等の事實に依て見れば、政府の植民地關稅に對する方針は統一主義なるが如く、又統一主義にあらざるが如く、其眞意を捕捉するに苦むのであるが、其他の財政問題に就ても亦之に類似の事實が尠くない。

現に政府の南滿洲鐵道會社に對する態度の如きも亦矛盾の甚しき者である。南滿洲鐵道會社は明治三十九年六月七日勅令第百四十二號に基き成立したのであるが、其目的は南滿洲開拓の中樞機關として、日支兩國の經濟的及び社會的關係を密接ならしむるに存したるは明白である。從て同會社の事業は頗る廣く、唯に鐵道業、水運業、鑛山業、電氣業、倉庫業、旅館業、鐵道附屬地に於ける土地及び家屋の經營等のみならず、又鐵道及び附帶事業の用地內に於ける土木、教育、衞生等に及んで居る。然かし此等の事業は、凡て多大の經費を要するのであるから、僅少の資本を以ては、其目的を達すること不可能である。爰に於てか政府は同會社の總資本額二億圓の中、自ら一億圓を負擔したるのみならず、尙ほ同會社に對し、(イ)鐵道及び附帶事業の用地內に於ける居住民に對して手數料を徵收し又必要なる費用の分賦を爲す事、(ロ)設立登記の日より起算し十五年間を限り一般株主の拂込金に對して年六分の利子保證を與ふる事、(ハ)政府は會社が鐵道又は附帶事業のために發行する社債に對して元利支拂の保證をなすべき事、(ニ)政府は會社が前條の趣旨に由り發行する社債に對し其利子に相當する金額を補給すべき事等の特典を賦與したのである。故に其後の政府當局者も、南滿洲鐵道會社に對しては、常に此精神を以て其發展を助くべく、若し同會社の經營にして多少の收益を剩し得るに至るも、猥りに之を本國々庫に吸收

せず、其儘之を同會社の使用に委ねて、其永遠の計畫の遂行に資すべきは勿論である。然るに政府は明治四十二年の財政窮迫に際し、政府持株に對する利益配當を名として、同會社より二百五十萬圓を本國々庫に吸收し、爾來毎年之を繰返して居るのである。即ち明治四十三年度に於て百五十萬圓、明治四十四年度に於て百八十萬圓、大正元年度に於て二百萬圓、大正二年度及び三年度に於て各々二百五十萬圓、合計約千三百萬圓の巨額に及んで居る。之れ實に南滿洲鐵道會社設立の目的を忘却し、政府が同會社に種々の財政的援助を與へつゝある精神に矛盾する者ではあるまいか。千三百萬圓の金額は、之を其儘事業の資金とするも、南滿洲の開拓を容易ならしむる點に於て、尠からざる効果があるに相違ない。況んや此金額を社債の利子に轉用し、數千萬圓の低利なる資金を融通するに於てをや。然るに政府は此等の金額を悉く本國々庫に奪ひ、南滿洲鐵道會社の發展を困難ならしめたるのみならず、其會社より奪ひたるに略々等しき金額を同じ南滿洲の土地に在りて、而かも拓殖的能力の遙かに劣等なる、有害無益の關東都督府に年々給與して居る。如斯く支離滅裂にして、矛盾撞着多き財政々策に依り、果して植民地の經濟的及び社會的發達を促かす事が出來るか。

四

南滿洲に於ける三頭政治の弊害は夙に之を耳にしたるが、余は昨夏親しく南滿洲の地を踏みて、其實際の風評よりも更に顯著なるを目撃した。南滿洲に於ける我行政機關は(イ)領事館、(ロ)關東都督府、(ハ)南滿洲鐵道會社の三であるが、此三機關は其權限に於て頗る曖昧なる者あるのみならず、其政策に於ても亦屢々相容れぬのである。加ふるに此三機關は各々所屬系統を異にし、領事は外務大臣の指揮監督を受くるのみなれども、關東都督は一般政務に就ては內閣總理大臣、外交に就ては外務大臣、軍政及び陸軍々人軍屬の人事に就ては陸軍大臣、作戰及び動員計畫に就ては參謀總長、軍隊教育に就ては教育總監の指揮監督を受くるのである。南滿洲鐵道會社に至ては直接に其業務を監督

するのは關東都督であるけれども、究極の管理權は內閣總理大臣に屬して居る。爰に於てか三機關は同じ南滿洲の土地に於て各々任意の行動を採り、領事館の爲す所は關東都督府の意思に反し、關東都督府の施設は南滿洲鐵道會社の方針に悖り、彼此互に相背き、相妨ぐる結果を生じて居る。

前關東都督大島大將は領事館と關東都督府との調和を計るに苦心し、在滿洲の各領事をして都督府事務官を兼ねしめ、之を統轄する事としたるが、領事等は關東都督府を見る事外務省の如くならず、關東都督の命令にして自家の意見に一致せざるものあれば、直ちに之を外務省に訴へ、外務省も亦關東都督府が陸軍に關係深きを以て之を視る事繼子の如く、兩者は依然として相合はない。嘗て之を聞く、領事館警部にして都督府官吏を兼ねたる某地警務署長は、或報告を都督府に致さんとするに當り、俄かに領事より之を見合すべき內命を受け、暫く其提出を差控へたるに、此事のため種々の不都合を生じ、同署長は遂に辭職せざるを得ざるに至つたので、其他の官民合同して送別會を催したる所、其席に列した領事は公然同署長の行爲を是認するの演說を試みたるのみならず、其後此事件に關係したる都督府官吏某は外務省より警告を受けたりと。其他司法上に於ても領事は初審裁判を掌り、終審は之を都督府の高等法院に移す規定なるが、最近數年間の事實に徵するに、高等法院に移されたる領事裁判の判決にして破棄せられざる者は半數以下である。如斯きは領事が法律の智識に暗く、民刑法、民刑事訴訟法等の複雜なる條文の適用を誤るに由る所大なるは勿論なりと雖、又た兩者の間に存する感情の齟齬も、尠からざる原因をなして居るのである。

領事館と南滿洲鐵道會社との關係も亦決して調和せりとは云へない。南滿洲鐵道の沿線に於ける主要なる都市には同會社の經理主任なる者が駐在して、會社附屬地に對する或程度の行政權を掌握して居る。固より外交事務、警察事務、徵税事務、郵便事務等の如きは關東都督の權限なれども、其他の行政事務即ち教育、

衛生、土木、產業等に關する者は凡て經理主任の權限に屬し、經理主任は此等の行政費を支辨する目的を以て或程度の公費を徵收するのである。而して領事館に至ては會社附屬地に對し、或程度の司法權の外、他に何等の管轄權をも有しない。此結果として同じ南滿洲の土地に居住せる內地人が其會社附屬地に在ると領事館管轄區域に在るとに依り、負擔の輕重を異にし、又諸種の取締規則を異にするが如き奇觀を呈するのみならず、右兩地域に跨がる事業を起さんとするに當りては、會社及び領事館の双方より許可を受くる必要を生ずる。從て其手數は容易ならざるのみならず、時には一方が許可するも、他方が許可せざるため、有利なる事業を起さずして止む事も尠くない。如斯き狀態で南滿洲に於ける內地人の活動は頗る不便に出來て居るのであるが、然かし領事館と會社との關係よりも更に不調和なのは、關東都督府と會社との關係である。

全體關東都督府は無用の機關である。關東都督官制を見るに、同都督府の仕事は(イ)關東州の管轄、(ロ)南滿洲に於ける鐵道線路の保護及び取締、(ハ)南滿洲鐵道會社の業務の監督に過ぎない。然るに同都督府の組織は頗る贅澤にして、全府を都督官房、民政部、陸軍部の三部に分ち、親任官たる都督の下に六七人の勅任官が居て、其事務に號令する。之がため年々の經費は三百四五十萬圓に及び、本國々庫より二百萬以上の補助金を仰ぎて、辛ふじて其財政を維持して居る。それ關東州とは如何なる土地であるか。其面積は約二百方里にして、其大は我が滋賀縣に伯仲する。如斯き小地域は、獨立の官廳を置きて之を支配するよりも、寧ろ其管轄權を南滿洲鐵道會社に委任し、同會社をして南滿洲に於ける他の地域と共通なる政策に基きて支配せしむべきである。假りに都督府民政部の事務を南滿洲鐵道會社に移し、同會社をして露國東淸鐵道會社の如く會社附屬地並びに關東州に於ける一般民政に任ぜしめ、同時に內地より高級裁判官を派遣して都督府高等法院の事務を鐵道沿線の主要なる領事館に收め、更に陸軍部の事務を朝鮮總督府に統轄せしめよ。關東

都督の存在は全然無用となり、本國々庫は年々二百萬圓以上の補助金を給與するの責任を免がれ得べきのみならず、民政及び軍政共に其統一すべき所に統一せられ、南滿洲の經營は今日に於けるよりも遙かに容易であるであらう。加ふるに之を既往の成積に依て判斷するに、同都督府の存在は南滿洲の經營上唯に無用であるのみならず、寧ろ幾多の點に於て有害であつた。假へば土地調査事業の如き、南滿洲鐵道會社は夙に其必要を認め唯に會社附屬地のみならず、苟くも重要なりと認むべき土地に對しては、之と勵行するを怠らざりしに拘らず、都督府に至ては關東州の小地域に於てすら嘗て土地調査を試みたる事なく、漫然として露人が一時的に規定したる地租率を踏襲し、空しく十年の歲月を消費したのである。從て地租の收入は一年尙未だ十數萬圓に過ぎず、土人の官地を盜耕し、若くは申告を詐りて納税を肯んざる者多く、近年初めて土地臺帳の必要を悟り、其の調査に着手したと云ふ有樣である。其他奉天の地を卜して日本赤十字病院を建設せしめたるが如きも、又都督府の不見識を暴露して餘あると思ふ。奉天に於ては明治四十年既に南滿洲鐵道會社所屬の大連病院奉天出張所が置かれ、次で之が擴張せられて大連醫院奉天分院となり、其規模に於ても、又其設備に於ても、內地の大病院に比して遜色なき者となつたのである。故に都督府は、若し日本赤十字社が奉天に病院を設立せん事を要求するも、之を諭して或は長春、或は吉林等の如き、尙未だ大病院の設備なき地點を擇ばしめ、以て國勢の發展を計るべきである。然るに都督府は明治四十二年奉天城內に日本赤十字病院を新設するを許可し、事實に於て、患者を滿鐵醫院と赤十字病院との双方に割き、兩者をして經費の支辨に困難ならしめて居る。如斯く三頭政治の弊害は南滿洲の地到る處に於て之を發見するのであるが、之れで果して日本の勢力を南滿洲に扶殖し、列强の侵略に對抗する事が出來るか。

五

南滿洲に於ける三頭政治の弊害と共に一日も早く改

良を要するは南滿洲鐵道會社と朝鮮總督府との連絡である。歴史的に之を觀察すれば南滿洲と朝鮮とは幾度か同一の民族に征服せられ、同一の主權者に隷屬し、同一の政治組織に依て統治せられたのであるが、今日は兩者各々其國籍を異にし、朝鮮は純然たる我領土なれども、南滿洲は中華民國に屬し、我勢力範圍たるに過ぎない。從て之を同一政治組織の下に統轄する事は不可能であるけれども、經濟的には出來得る限り其連絡を計り、以て亞細亞大陸に於ける帝國的基礎を確立しなくてはならぬ。然るに此重大なる使命を有する南滿洲鐵道會社と朝鮮總督府とが互に反目し、兩者の經濟的連絡のため最も大切なる鐵道に關してさへ尙未だ何等の共通的施設を有せざるは遺憾である。今日の南滿洲鐵道と朝鮮鐵道とは恰かも外國の鐵道の如く、南滿洲鐵道會社の車輛は、其客車たると貨車たるとを問はず、僅かに一週二三回西比利亞急行列車に接續して釜山に直行する場合の外、凡て鴨綠江を渡る能はず、安東驛に到着すれば、晝夜の別なく、旅客も又貨物も、共に朝鮮鐵道の車輛に積み換へらるゝのである。朝鮮鐵道の車輛も亦之と同じく、西比利亞急行列車に接續する目的を以て釜山より直行する者の外、凡て鴨綠江以北に及ばず、安東驛を限りとして停止するのである。加ふるに小包郵便物の如きも、鴨綠江以南の宿驛より內地に向けて發送したる者は、直に釜山に急行し、關釜連絡船に依て內地に配達せらると雖も、鴨綠江以北の宿驛より內地に發送する者は、僅かに鴨綠江の鐵橋一ツを隔てたる安東驛よりする者と雖も、朝鮮鐵道に依るを許さず、凡て之を安奉線に依りて奉天、大連に迂回せしめ、大連より船に依りて內地に輸送する事となつて居る。之が爲め時日を要する事夥しく、朝鮮鐵道に依るを便とする者は孰れも先づ其郵便物を朝鮮に運搬し朝鮮より改めて之を發送するの手續を採るのである。

惟ふに如斯き不調和は、南滿洲鐵道と朝鮮鐵道とが各々別個の經營機關に屬し、兩者互に其經營方針を異にせる限り、之を矯正するは容易であるまい。全體南滿洲鐵道會社の經營方針は滿洲の貨物を出來得る限り

南滿洲鐵道に吸收し、大連をして日滿貿易の中心點たらしむるに存すと雖も、朝鮮總督府は滿洲の貿易を安奉線及び朝鮮鐵道に吸引し、之を釜山に集中するを經營方針として居る。從て兩者が競爭し、又反目するは物の自然と云ふべく、嘗て朝鮮總督府が鐵道院に交渉し、對滿洲輸出奬勵を名として大正三年五月一日より安奉線直通の朝鮮鐵道列車運賃を大連奉天間の運賃と同一率に低減せしむる事としたる時の如き、南滿洲鐵道會社は之を以て從來採り來れる大連集中主義に一大打擊を與ふる者として鐵道院に種々の苦情を申出で、遂に同年七月一日より內地發滿洲直通貨物に對してのみ安奉線同樣に運賃三割減を實施し、一旦大連若しくは營口に陸揚げ後更に仲繼者の手を經て滿洲內地に向ふべき貨物に對しては減賃をなさゞる事に決定して、漸く事件が落着したのである。蓋し南滿洲鐵道の全線は六百九十五哩にして、之に朝鮮鐵道一千哩を加ふるも、尙ほ一千七百哩を出でぬ。如斯き短距離の鐵道を二ッの機關に分掌して、其盛衰を爭ふ事、實に不見識の極致と云ふべく、誰か君國のため之を痛歎せざる者ぞ。若し南滿洲鐵道及び朝鮮鐵道の全線が同一機關の經營に屬するか、又假ひ同一機關の經營に屬せざる迄も、眞に和衷協同の精神を有せる二ッの機關に屬するに於ては、車輛の如きも必要に應じて有無相通ずるを得べく、貨物の如きも眞に帝國の將來に有利なる地點に集中せらるゝ事となるであらう。軍事的必要に應じて南滿洲鐵道の車輛を朝鮮に利用すると同時に、冬期滿洲の大豆其他の穀物が大連に集中せんとするに當り朝鮮鐵道の車輛を移して南滿洲鐵道の車輛の不足を補ふを得ば、如何に便宜なるべきぞ。今日の如く亞細亞大陸の關門に位する二ッの機關が互に其盛衰を爭ふやうな狀態で、果して帝國の大陸政策を確立し、滿蒙に關する日支交渉の成果を確實に收むる事が出來るか。

六

最後に一言すべきは滿蒙金融機關の事である。臺灣及び朝鮮に於ては、幸に早くより農工業開發を目的としたる特殊銀行の設立を見た。即ち臺灣に於ては明治

三十年以來臺灣銀行の起るありて中央銀行及び貿易銀行たる使命を果し、別に明治三十六年兒玉總督時代に至り農工業開發のため低利長期の資金を融通する目的を以て日本勸業銀行法に改正を加へ、其代理店を臺灣に置く事とした。朝鮮に於ても明治三十九年以來既に農工業開發を主眼としたる農工銀行の設立せらるゝあり、政府は或は其株式を引受け、或は無利子貸下金を給與して之を助成し、又明治四十年以來農民の金融を緩和する目的を以て各地方に金融組合を設置せしめて、各組合に一萬圓宛の保證金を下附し、更に朝鮮銀行をして公共團體に對する無擔保貸付に任ぜしめて居る。而して此等の金融機關が臺灣及び朝鮮の經濟的發達に貢献せる事の莫大なるは何人も認むる所であるが、唯り滿洲方面に於ては、內地人の經濟的活動を必要とする事最も緊急とする者あるに拘らず、今日に至る迄此大切なる機關が缺けて居た。滿洲に於ける內地人の金融機關中最も著名なるは正金銀行、正隆銀行、朝鮮銀行等であるが、此等は孰れも支店又は出張所に過ぎずして、滿洲に巨額の低利資金を融通すべき能力を有せず、加ふるに正金銀行の如きは其主要なる目的は貿易銀行たるに在り、直接內地人の滿洲內地に於ける企業を援助するにあらざるが故、之を以て內地人の特殊金融機關とする事は出來なかつた。固より政府は嘗て正金銀行をして特殊金融機關の業務を兼ねしめんと欲し、明治四十三年七月以後低利資金三百萬圓を融通して、所謂特別貸付なる者を開始せしめた。特別貸付の目的は唯り農工業のみならず、廣く滿洲に於ける內地人の事業を援助するに存したのであるが、然かし其內五十萬圓は、或事情のため、天津方面に融通せらるゝ事となり、殘額二百五十萬圓も亦、燒石に水の如く、直ちに貸出濟となつたので、豫期したる如き効果を收むる事は出來なかつたのである。而して特殊金融機關の必要は依然として叫ばれて居るのであるが、此叫びは日支新交渉に基く蒙古開發權の獲得と共に一層其切實を加へたと思ふ。蓋し政府が日露戰爭後十年の今日に至る迄滿洲に特殊金融機關を設置するの急務を

悟らず、僅かに正金銀行の特別貸付に依て其一時を彌縫せんとしたるが如きは、不見識も亦甚しと云ふべく、之れ單へに中央の政治家が植民事業に冷淡にして、常に植民地の發達に注意し、如何に之を促進すべきかを研究せざりしの致す所である。如斯にして果して滿洲に於ける內地人の生產力を助長し、日支提携の經濟的基礎を確立する事が出來るか。

七

爰に於てか余は植民行政に對する中央機關の必要を認めざるを得ぬ。我植民地の施設に一貫の方針なく、政治的及び經濟的活動の支離滅裂なるは、植民地に駐在せる官吏の植民事業に關する智識の缺乏に基く所大なるは勿論なりと雖、然かも其主要なる原因は中央に在て全植民地に渉る帝國政策を確立し、之を提げて閣議に臨み、之を提げて帝國議會に訴へ、之を提げて國民の輿論を動かすが如き主務大臣の缺乏に存すと信ずる。現行官制に依れば、我植民行政は全く自由放任主義であつて、中央に於ける植民行政上の事務は、唯內務省地方局の一課なる拓殖課に於て四五名の吏員が之に任ずるに過ぎないのである。固より各總督府官制には、內閣總理大臣が其監督に任ずるが如き規定が見ゆる。即ち朝鮮總督府官制第三條に「總督ハ天皇ニ直隸シ、委任ノ範圍內ニ於テ諸般ノ政務ヲ統轄シ 內閣總理大臣ヲ經テ上奏ヲ爲シ又裁可ヲ受ク」とあり、臺灣總督府官制第三條にも亦「總督ハ內閣總理大臣ノ監督ヲ受ケ諸般ノ政務ヲ統理ス」と規定して居る。關東都督の如きも亦同じく其官制第四條に依り「內閣總理大臣ノ監督ヲ受ケ諸般ノ政務ヲ統理ス」べき者となつて居るが、然かし內閣總理大臣は國政の全般に渉りて之を統轄すべき重任を有するに付、一省の主務大臣が其所管事務を處理する如く、常に植民行政のため其精神を專らにし、時に親しく植民地を遊歷して其實情を視察するが如き餘裕を有せざるのみならず、朝鮮總督の如きは天皇に直隸し、唯上奏及び御裁可に際して內閣總理大臣を經過するに過ぎざるが故、之を指揮監督する事は事實に於て、不可能である。爰に於てか事實上

の監督は、內務省に移るのであるけれども、內務大臣は官制上植民地總督に號令すべき職權を有するに非ざるのみならず、拓殖課其者の植民的智識も、又以て植民行政の統轄に資するに足らぬのである。如斯く混沌たる狀態であるから、之を獨立の主務省に一括し、中央政府より植民政策の大綱を統ぶるにあらずんば、各植民地に於ける政治的及び經濟的活動の衝突矛盾は永久に免がれざるべく、日本は遂にビーコンスフキルド卿が所謂「挽臼を首に掛けたる如き苦痛」を感ずるに至る事であらう。人或は我植民地總督が陸海軍人にして、其勳爵時に國務大臣を凌ぐ者あるを指摘し、中央より之に號令するの困難なるを論ずと雖も、然かも如斯きは國務大臣が輔弼の重臣なるを忘却したる言である。現に英國の印度總督の如き、稱するに副王(ヴイセローイ)を以てせられ、英領印度に於ける軍務及び政務の最高指揮權を有し、其勳爵時に本國政府の印度大臣を凌ぐに拘らず、尙ほ印度大臣より發する一切の命令に服從すべき義務を有するではないか。

八

今之を先進植民國の實例に徵するに、英國は世界の大植民國たるのみならず、其植民地も亦多種多樣なる結果、自ら其行政組織も複雜し、(イ)植民省、(ロ)印度省、(ハ)外務省の三大官廳を以て中央機關とすと雖も、然かも印度及び保護國の外、凡ての屬領地は之を植民省に於て統轄して居る。固より英國に於ても植民行政のため獨立の主務省を有せず、或は樞密院に委ね、或は商務院の兼務としたる如き時代はあつたけれども、其後植民行政の重大なる國務たる事を認識するに至り、千八百五十四年植民省を置き、之が統轄に任ぜしめたのである。固より加奈陀、濠洲聯邦、南阿聯邦、ニユージーランド、ニユーフアンドランド等の如き自治植民地は其內政に於て全然獨立し、本國政府は之に干涉せざるを憲法的習慣とすと雖も、然かも尙且つ其對本國及び對外國の關係に於ては植民省の指揮監督を免がれぬのである。印度が植民省の管轄に屬せず、特に獨立の主務省を有するは奇怪なる如きも、之

れ印度が永く東印度會社に屬し、他の植民地とは全然異なれる歴史を有するのみならず、現在に於ても英國々王は印度に臨むに印度皇帝の名を以てし、國法上之を見ること獨立國の如くなるがためである。外務省に至ては唯埃及、アフガニスタン、北ボルネオ、サラワク等の如き外交關係の重大なる保護國を管轄するのみであるが、外務省は獨立諸國との外交事務に忙しく、保護國の内部的生活に對して諸種の施設を試むべき餘裕に乏しきがため、動もすれば經營の方針を過ち易く、植民行政の中央機關としては頗る不適當である。

佛蘭西に於ては植民地のみならず、かの安南、東京、東埔塞等の如き保護國をも、凡て之を植民省の管轄として居る。唯例外とすべきは同化政策時代に於て佛蘭西の本土に編入せられたるアルゼリアと特殊の外交關係を有するチュニスとあるのみ。佛蘭西も最初は植民行政の主務官廳を置かず、或時は海軍省の所管となし、或時は農商務省の事務に移し、ガムベッタ時代に於ては農商務省中に植民次官なる者を設け、植民行政の監督に任ぜしめたのであるが、十九世紀後半に及び、佛領植民地の急激なる膨脹と植民政策に關する智識の發達とに促がされて、千八百九十四年遂に獨立の主務省を有するに至つたのである。

獨逸が植民行政のため主務省を設けたのは千九百〇七年の事である。之より先き獨逸は南西阿弗利加、東阿弗利加、ニユーギニア島等に於ける特許會社を監督するため植民地法を制定し、大宰相をして植民行政に對し政治的責任を有する最高監督者たらしめたのであるが、然かし當時は尚未だ植民行政に關する特殊の官廳を有しなかつた。千八百九十年初めて外務省內に植民局なる者を置き、特に植民地に關する行政事務をのみ擔任せしむる事となれるが、其局長は他の局長に比し多少獨立的の權能を有したるに拘らず、尚植民地の對外政策及び一般政策に就ては外務大臣の指揮に從ひ、其他の行政事務に就ては大宰相の同意を求むる義務を負ふたのである。然かし如斯き制度は植民行政に對する責任の所在を不分明ならしめ、植民地總督をし

て其去就に迷はしむる事勘からざりしのみならず、植民行政は、其本質に於て、對外的事務にあらず、寧ろ對內的事務なる事明白なるに至りしが故、爰に獨立の主務省を置くに決したのである。此結果として植民行政の責任は主として植民大臣に歸するに至り、今や植民大臣は皇帝を輔佐して各植民地總督を監督するのであるが、唯膠洲灣租借地のみは、其經營の目的とする所經濟上よりも寧ろ軍事上に存したるが故、特に之を海軍省の所管とした。

其他和蘭の如きも千八百四十八年に植民省を設け、從來は國王の直轄なりし事務を植民大臣の管理に移し、白耳義及び伊太利も亦近く同樣の主務省を置た。葡萄牙に於ては純然たる植民省なしと雖も、歷史的關係に由り植民行政と海軍行政とを密接離るべからざる者となす結果、合併して之を同一官廳に管掌せしめ、稱して海軍植民省と云ふ。唯北米合衆國のみは、政治組織が他國と其趣を異にせるに由り、特に獨立の主務省を置かず、元老院が直接植民行政の監督に當つて居る。

九

此等の事實に依れば、かの北米合衆國を除き、其他の先進植民國は、孰れも其初め獨立の植民省を置かず、軍務省、外務省又は商務省の如きをして植民行政の監督機關を兼ねしめたるに拘らず、遂に其不都合を發見し、之を獨立の主務省に統轄せしむる事としたるに於て一致して居る。蓋し植民事業が單純なる軍事的若くは商業的目的のために行はるべき時代は既に過ぎた。今や各國民共に植民地の軍事的、政治的、經濟的、社會的價值を認識するに至り、之に依て民族的勢力を扶殖し、之に依て文化的使命を全ふせん事に苦心して居る。如斯き時代に於て此等の植民國民が各々獨立の主務省を設けて植民行政に任ぜしめ、以て植民政策の確立を期せんとするは當然の勢なりと云ふべく、我國の如きも亦既に一大植民國を以て任ずる以上、獨立の主務省を必要とするは勿論である。

我國にも明治二十九年一度拓殖務省を置た。然かし

當時の我植民地は臺灣に過ぎず、北海道を併せ管轄するも、其面積は七千四百方里を出でざりし事故、國家の經費多端なる折柄、如斯き狹少なる地域のため獨立の一省を設置するは贅澤なりとて、直に之を廢止した。けれども最早や當時の事情を以て今日を律する事は出來ない。今や我植民地は純然たる新領土のみを以ても約一萬八千八百餘方里を管し、之に關東州租借地、南滿洲鐵道附屬地及び新占領地を合算する時は、假ひ滿蒙地方に於ける我勢力範圍を除外するも、尚ほ二萬方里に近く、當に北海道を除きたる殘餘の日本に伯仲する。況んや此等の植民地は、明治二十九年代に於ける者と異なり、北は露領西比利亞に界し、西は支那に交り、南は英米蘭佛の各植民地に連り、我植民行政にして一度蹉跌すれば、直ちに列強の政治的又は經濟的侵略を被るべき危險は歷然たるをや。故に此際拓殖務省を再興し、植民行政のため獨立の主務省を置かんとするに對しては、嘗て之を廢止する事に贊成したる人々と雖も、決して異存なかるべく、余は今參考のため左に當時の拓殖務省官制を揭ぐ。

第一條　拓殖務大臣ハ左ノ事務ヲ管理ス
一　臺灣ニ關スル諸般ノ政務
二　北海道ニ關スル諸般ノ政務ニシテ從來內務省ノ主管ニ屬シタル事項
第二條　拓殖務大臣ハ臺灣總督及北海道長官ヲ監督ス
第三條　拓殖務省ニ專任參事官四人及專任書記官四人ヲ置ク
第四條　拓殖務省ニ左ノ二局ヲ置ク
南部局
北部局
第五條　南部局長及北部局長ハ勅任トス
第六條　南部局ニ於テハ臺灣ニ關スル事務ヲ掌ル
第七條　北部局ニ於テハ北海道ニ關スル事務ヲ掌ル
第八條　拓殖務省ニ技師五人技手二十人ヲ置ク
第九條　拓殖務省屬ハ百人ヲ以テ定員トス
第十條　本令ニ規定スルモノノ外凡テ各省官制通則ニ依ル
附則
第十一條　本令ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス
——明治二十九年勅令第八十七號——

固より余は此官制の全條文を復活せしめんと欲する

者でない。假へば省内に於ける部局の分類にしても、之と同じく南部局及び北部局を置き、南部局に委ぬるに臺灣及び南洋諸島を以てし、北部局に托するに朝鮮、滿洲、樺太等を以てすべきか、將た又嘗て拓殖局の試みたるに倣ひ第一部、第二部、第三部と云ふが如き者を設け、第一部に臺灣及び南洋諸島、第二部に朝鮮及び滿洲、第三部に樺太を管掌せしむる事とすべきか、此等に就ては大に研究の餘地あるべしと雖も、兎に角其根本精神なる拓殖務大臣をして各植民地總督を指揮監督せしむる一事のみは、此儘に復活せしめなくてはならぬと信ずるのである。嘗て明治四十三年勅令第二百七十九號に依り拓殖局なる者を創設し臺灣、樺太、朝鮮、關東州に對する植民行政の統理を計らんとした事があるが、當時拓殖局總裁を天皇に直隸すべき國務大臣とせず、僅かに內閣總理大臣に附屬する一官吏とした結果、植民地總督に號令するを得ず、遂に統理の目的を達する能はずして廢官となつた。此失敗に鑑るも、中央に於ける植民行政の統轄者は、其名稱の如何に關せず、國務大臣ならざるべからざる事明白である。人或は當今の財政困難にして、獨立の一省を新設するの經費に堪へずと云ふ。然かし政府にして一關東都督府の廢止を斷行する勇あらば、現在の歲出に一錢を加ふる事なく、拓殖務省を再興し得るのである。縱し關東都督府を廢止する能はず、之がため新經費を必要とするも、告ぐるに實情を以てせば、忠良の國民たる者豈敢て負擔の增加を厭はんや。

當世男に向つて神風主義を宣傳す

福本日南

明治の初から大正の今日に至る約半世紀の間には、國人の手に由つて爲されたる偉業も亦尠少ではない。が、中に就いて、信仰の力の如何に偉大なるかを感ぜしむるものは、我國内にも一あつて二なき日本的淸敎主義の熊本神風連が明治九年十月二十四日の夜に於て試みた鎭臺襲擊の一擧であつた。

是れ此敎義は言ふまでも無く我古神道の惟神主義に淵源し、之より發出して、一新敎義を形成したものである。今彼神風連の一擧を觀んと欲すれば、是に先だつて、此敎義の發生から大成、竝に敎義の大要如何に論及せねばならぬ。

全體封建時代の敎育は儒敎主義の敎育であつた。尙ほ精しく之を言へば、等しく儒敎中の一派には相違なきも、義務のみを責めて、權利を認めぬ、宋學即ち朱子學主義の敎育であつた。それで何れの藩にても、藩學といへば、概ね朱子學でない者はなかつた。が、熊本は特に其の七里法華とも謂ふ可き宋學熱衷の藩であつた。從つて斯學の大家は前後に續出した。なれど是等は大全・語類を金科・玉條と心得、居敬・窮理・實踐・躬行で一藩を導いたから、藩士の大分は小禮・曲謹の人となり、歸する所は、堂々たる五十餘萬石の一大雄藩をして因循・姑息な佐幕黨に化せしめた。

然るに豪傑の士は壅塞・痼滯の中からでも蹶起する。寬政年間に、高本紫溟といふ一篤學があり、居然たる宋學の碩儒でありながら、早く我古典學に沈潛し、盛んに國體の神聖・皇室の尊嚴を唱へ出した。後年、幕府の末造に、熊本から幾多勤王の志士を輩出したのは彼の遺敎が主として其始を爲したのである。

それだけあつて、彼は我古神道の惟神主義に篤き信仰を捧げたのである。其一斑を概見す可きは、彼の辭世に在る。文化十年十二月二十六日、彼は七十六歲を以て斯世を辭したが、其の終焉に臨み、

千首の消行けばこそ一日にも
千百首は産みたまふらめ。

との一首を遺し、笑を含んで、地に入つた。是は神典

に見える伊邪那岐命と伊邪那美命と黄泉比良坂の御誓に由り、『一日に必らず千人死に、一日に必らず千五百人生る』といふに基づいた彼の人生觀であつた。顧ふに古今達人の辭世も亦尠からぬ。が、其百中の九十七・八までは、主觀的詩賦でないものはない。然るに彼は自家の死に逝く所以のものは、即ち生民の益々增加する所以なるを念ひ、玆に最後の客觀に入り、人世の未來を樂觀したのである。唯此一事で、彼が如何に古神道から堅確なる安心の境地に達してゐたかゞ追想される。

併し、彼は未だ其所信に教義の形式までを具へずして去つた。が、之に次いで、其流を酌み、其源に溯り終に我國に一あつて二なき日本的清教義の精神・形式を具備し來たのは、吾人の世代明治三年まで存在し、此年十一月、七十三を以て幽冥に入つた林櫻園であつた。

二

櫻園は同じく熊本に生れ、其の人となり、卓犖奇異謂ふ所の神人的人物であつた。其挾持する所の學問は東西・古今・諸子・百家に渉つたが、大宗とする所は、古典學に據つて、我古神道を明かにし、之に遵つて、自ら率ゐ、人を導き、斯人世を清が〳〵しき神世に復し、斯くして以て神意を和め、神祐を待つに在つた。それで彼は夙に其精力を古典學に聚注し、前の高本紫溟の學統を承け、兼ねては賀茂眞淵・本居宣長等諸先輩の說をも祖述したれど、彼は是等の諸先輩が專ら古言を考證し、古典を講明せるのみに滿足せず、進んで斯古道を實行し、之を現代に再現せんと欲したのである。從つて彼の斯帝國に希待した所は、啻に皇政復古ぐらゐに止まらず、實に神世復古に在つた。是に於て乎、彼の學說は古典學から超出して、一の神道教義即ち清淨教義となつた。自分が名けて櫻園の清淨教義、約して清教義といふものは、此に在る。

彼は唯一なる特天神を信ずると倶に、亦八百萬の神をも信じた。我古典に從へば、此八百萬の神の中には其威力最も廣大なる大直日神と大禍津日神との二柱の

神があつて、世の治亂・興亡から、人の吉凶・禍福までを司配される。彼櫻園は此理を深信しつゝ、其論更に一歩を進めた。

『寰宇の間には、現世と幽世即ち現界と幽界とがあり。直日神と禍日神とは目に睹る可からざる幽世から、交る〳〵此現世を導かれる。世に治亂あり、國に興亡のあるのは、皆是に職由する。さりながら、現世の人力も亦時あつて、神の力を動かすものがある。世に正人・吉士がゐて、力を神事・人事に盡し、其力強く盛んなれば、直日神も亦力を得たまひ、禍日神の荒びを制して、吉祥を下されるから、邪道を屈して、正道は伸び、國家は治まり、天下は泰平となる。之に反して、卑夫・小人志を得れば、禍日の威力頓に強盛を加へ、直日神も暫し其の手を收められる。禍亂は實に此間に來る。神・人相互の感應は斯くの通である。是故に、人は須く正道を蹈んで邁進すると倶に、丹誠をこめて、正しき神の冥祐を精禱すべし』

といふものは、其一つである。

『我國の上古には、一の異教も無く、神道を以て天下を治めさせられた。神道は畢竟神に事へ奉る神聖な儀式である。上古は此儀式盛んに行はれたから、國も豊かに、民も安らかであつた。然るに中世以降斯道が陵夷した爲に、災殃竝び起り、文臣・武臣相次いで大權を竊むに至つたのである。是故に、皇政の隆興を希はゞ、先づ斯道から復さねばならぬ。余體現世を知召す天皇は顯御神に在しませば、此現世の顯御神に事へ奉ると、幽世の遠御神に事へ奉るのとは、其理全く同一である。此意を推擴めて、世も治まり、民も安んずる。それを如何といへば、上世に於ては、世々の天皇は大御躬已に顯御神にまし〳〵て、其下に發したまふ御政令は、皆神命を承けて布かせられたが故に、皇命は即ち神命であることを、人民は一般に佩體した。それで政令善く行はれ、天下は又安であつたのである』

といふものは、亦其一つである。是に於て、彼は古先

聖皇の神命を承けさせられた幽理に溯り、彼は終に、「宇氣比」の篤信に到達した。彼は所爲へらく、

『宇氣比は今の語を以てすれば、誓約・祈禱である。が、中世以降、漢學入來つて、人心何時か漢樣に傾き、修身・齊家・治國・平天下の敎より外に、世を治むるの道なきやに思ひ誤り、神世より承繼いだ最も貴重・靈異なる宇氣比の傳を失ふに至つた。さりながら、直く・正しく・淸がしき心を以て、赤誠を神・祇に致せば、神・人感應して、神緣を得宇氣比の神効古に復す可し』

と。從つて人の之を疑ふ者あれば、『今の世に治者となり、被治者となつて、上下に分れて相對するも、神の御目から御覽すれば、等しく相似た凡人に過ぎぬ。其凡人の分際を以て、己れ偶々治者となつたればとて、有るか無しかの才力を賴み、被治者の衆民を濟はんなどゝは、單身・赤手で衆の溺れるのを救はんとするに異ならぬ。其愚寧ろ憫む可きのみ。宇氣比は溺者に對する舟筏である。此深遠なる神理は、淺近な實在敎理に捕はれた徒輩などには分るまい』と笑つてゐる。

彼は此信念から、神命を承はる三箇の方式を感得した。

其一は　審神者に賴りて、神命を承ける事。
其二は　占卜に賴りて、神命を承ける事。
其三は　誓ひ禱りて、神命を承ける事。

尙ほ之に關して、彼は曰く、

『以上の三事は、古先聖皇の之に賴りて、國を治め、民を安んじたまひし所である。今日と雖も、現世の事は亦之に賴つて決定せねばならぬ』と。

是れ實に彼が主張の根本であつた。

三

彼の主張は彼の人格と相待つて、尠からず肥役の人心を動かした。それだけ彼に從つて敎を受けた者は、數百人の多きに達し、是等は何れも熱心なる敎義の信奉者となり、玆に我謂ふ所の日本淸敎徒は出で來つたのである。

從つて是等の淸敎徒は何れも誠意・誠心なる敬神・尊

王・愛國の士ならぬは無く、各其身家を忘れ、心力を傾注して、皇政復古の洪業を扶翼し來た。併ながら、彼等の教義から理想した皇政復古は即ち神世復古である。之を詳言すれば、其復古は啻に大權を皇室に復歸し奉るのみならず、外は夷狄を攘ひ、内は異教を排し、祭と政とを一途に出でしめ、清淨・簡樸、神世の昔に立返るに非ざれば、皇政復古ではないと篤信したのである。尙ほ之に非ざれば、畏こき神意に反し、萬世一系の皇基を奉護し、天壤無窮の國體を維持す可からずと深信したのである。

然るに世事は悉く彼等の期待に反し、當初は彼等と齊しく尊攘の義を唱へ、幕府を倒した同志の士にてありながら、一たび幕府を倒して、復古の朝廷に立ち、政權を手にするに及べば、啻に攘夷を忘れたのみならず、昨日までも今日までも夷狄と目し來た列强と相親み、加之、言を開國進取に假りて、範を歐米に採り、一にも歐洲、二にも米國に倣ひ、政法・軍備・教育・宗教・百般の制度を彼に摸擬し、我古先聖皇の建遺したまひし文物・典章を破壞し盡すに非ざれば、已まざらんとする情勢を示し來た。

是に於て、彼等は實に悲痛・惻怛を極めた。自分が衷心から彼等に同情を寄與する所は、此に在る。新政に對する普通の不平黨か若くは野心黨ならば、此際起つて叛旗を飜へし、政府の前に抗立し來る處である。が、彼等は一點の野心も無き忠君・愛國の徒であるから、夢にも朝廷に弓を挽く心を持たぬ。彼等は國風の然く日に移りゆくを睹て、其信奉する教義に照し、『是れ全く禍津日神の志を得て、荒びに荒ぶる結果である。斯かる上は、大直日神の御靈のふゆを請ひのみ申し、其大直びの日を待つの外は無い』と斷信した。それで其れ以來といふものは、彼等一黨中の重なる徒輩は精を勵まして、神祇に祈請を凝らして來た。殊に彼等の視て以て棄て置かれぬ。忌々しき國家の大事件、不祥事とするものに會すれば、己の身を清淨な上にも清淨にし、教義の所謂直く・正しく・清が〱しき心と行とを以て、之に對する神祐を降さんことを冀ひ、或は

百日の火の物斷ちを爲し、或は七日・或は十日の辟穀・斷食を爲して、丹精を祈請に抽んでた。是れ一箇處、二箇處の事で無く、彼等の尊信する縣下大小の神社に於て、到る處に此痛切なる至誠の祈を捧げたのである。

斯くの如くなること實に十年、彼等の堅忍も亦絶倫であるが、是れ皆無形の信仰から來たのである。それだけあつて、其精誠は何時と無く愚夫・愚婦の心魂にまで信孚し、大いに縣下一般の敬神思想を喚び起し、由來の偎薄な惡俗を一變して、掬す可き醇厚な美風に向はしめるに至つた。

然るに中央政府の政針は愈々益々彼等か所信と反對の方向へ方向へと赴き、日本固有の百の制度は、悉く舊弊の名の下に破壞され、明治九年の三月に至り、全國一般の士族に對し、廢刀令の施行にまで及んだ。是に於て乎、さばかり堅忍な彼清敬徒の一黨をして終に其堪忍袋の緒を切らしめるに至つたのである。

彼等は以爲へらく、

『劍は畏くも皇祖の親しく皇孫に授けられ天日嗣の璽符の一つとして、御世〱御繼承あらせられたる所。上にしては、天皇之を御奉持あつて、皇威を八紘に耀かしたまひ、下にしては、武臣之を把つて世々君國を守護しまゐらせ來たのである。神州尙武の國體は此に在る。然るを今や一朝にして、武士の佩刀を禁止するとは何事ぞ。是れ之を內にしては、亂賊の姦心を長じ、之を外にしては、列强の覬覦を開くのである。今にして之を正さずば、皇室の御安危、邦家の存亡未だ知る可からず。我等生を皇國に享けながら、手を空うして、之を坐視するに忍びんや。是れ陰忍して直日神の御直びをのみ禱請しゐ可き秋に非ず。宜く起つて矯正の手を下すべし』と。

猛然として起つたのである。而うして之が先頭に立つて、一黨を統率したのは、櫻園門下の顏淵と稱せられ、先師の衣鉢を繼いだ太田黑伴雄であつた。

四

但だ其矯正の手を下すに就いても、彼等は之を苟く

もせぬ。乃て首領の太田黒は重なる同志を自家の奉事する神前に聚へて、之、手段を審議した。が、彼等の穏健なる、先づ第一に擇取せんと欲したのは、尙ほ平和的手段であつた。それは

由來の秕政を歷陳した一大建白を政府に呈出し、死を以て之が採用を懇請す可し。

といふに在つた。そこで一派の教式に由つて、之に對する神意を伺ふと、宇氣比の占に「神慮に協はず」と見はれた。扨は是式の穏和手段では最早頽勢は回されぬ事を示させたまふものと見える。さらば第二の手段として、

一黨中から刺客を上京させ、當路の姦物を闇殺す可し。

と議決し、宇氣比を立てゝ伺ふと、是も「神慮に協はぬ」と示される。諸士は瞽て咨嗟・嘆息した。是も無効とある上は、最早最後の手段に出づるの外は無いと

義兵を擧げて、君側の姦を一掃す可し。

との議を決し、更に神意を奉伺すると、不思議にも、「嘉納」の占を得たのである。すれば「君國今日の危急を救ひ奉るは、唯擧兵の一あるのみ、何をか狐疑し、何をか躊躇す可き」と、直ちに之を一黨に議れば、一百七十餘名の教徒は老いたるも、若きも、翕然として之に一致し、神命是れ從はんと、各々奮躍して一死を賭した。

が、之が實行は難中の難である。一黨を擧つて、東京まで押上らんとすれば、先づ其眼前に熊本鎭臺が横はる。當時、城內に駐在する兵數は未だ今日の如く多數ならずとはいへ、歩兵一聯隊・砲兵一大隊・豫備砲兵二中隊・工兵六小隊・總司令部も此に在り。將校・下士・卒を合算すれば、其數二千三百餘名に上る。加之、縣廳が備へる所の士族を以て新制した警部・巡査の警察隊も亦侮る可からざる一勢力である。而うして身方は如何と顧みれば、一たび當面の此敵に打克ち、熊本城を拔取つて、檄を四方に傳へるに至らば、近くは縣下の諸郷黨から、遠くは秋月・佐賀・島原・久留米・竹田・鶴崎・豐津・山口・高知・長岡等の響應・競起す可き望み

あれ、現在賴所は唯僅に百七十名、敵軍十分の一にも足らぬ。

されど一黨は微憚ともせね。『神命を奉じて、神軍を發するに、二千・三千の敵何かあらん』と、其意氣早くも一鎮臺を壓した。『それにしても敵は多勢、お負に銃砲の利器を挾めば、身方にも銃戰の準備爲をして、向はうぢやないか』と發議する老功者もあつたが、多數の壯年は一議にも上せず、『吾等の神軍に穢らはしい夷狄傳來の銃・砲などが何で要らう。我に短兵刀・鎗の在るありぢや。太刀の目釘の續かん限り、鎗の穗尖の摧けぬ限り、突き且つ斫つて斫捲くらば、敵を取るのは手の中に在る』と直ちに前議を排斥した。それで彼等が戰鬪の要具はといへば、家世傳來の唯白兵あるのみであつた。

最後に一黨は軍議に入つた。『我黨斯く打揃うて、敵と戰鬪を開始する上は、作戰の計畫から一黨の進退に亙り、將帥が無くては相協はぬ。是は一つ太田黑先輩を煩はして、其任に當つて貰はうぢやないか』と、擧黨一致して勸進した。すると太田黑は微笑しながら、『お互の一擧は、都べて是れ神慮に從つて發するもの、神・祇は自ら我將帥ではおはしまさぬ乎。人間の將帥など、何の必要がござらうや。それとも强ひて求められるならば、お互の中で最も、奮戰し、當夜第一の殊勳を立てた者を推して、それに充てたらば宜しからう』といつた。謙遜ではあるが、亦篤論。一黨は之に勵まされ、人々自ら功を立てんと奮揚すると俱に、强がちそれと名けないでも、事實に彼は首將であるから、一切の節度を擧げて、彼太田黑と今一人は一黨の副首領前稱榮太の加屋霽堅とに推委した。而うして二首領の顧問には黨中の長老上野堅吾・齋藤求三郎、其副としては愛敬正元、それから一黨の參謀なり、部隊長なりには、富永守國・阿部景記・緒方小太郎・石原運四郎・高津運記・古田十郎・小林恒太郎等主として之に當つたのである。

五

時は明治九年十月二十四日の夜半、一黨百七十餘名

は約を違へず、熊本城外の藤崎臺に聚合した。此處は國史に有名な藤崎八幡宮の奉祀される處である。一黨は其神前に羅拜し、最後の禱を捧げた後、一黨の大分百四十名を二分して、各七十名の兩隊と爲し、其中の一隊を幹部隊として、太田黒伴雄自ら之を指揮し、又其一隊は富永守國に率ゐさせ、「天照皇大神」・「御神勅」・「一動」・「一靜」四旒の旗を分つて押建て、軍中にまで奉持し來た軍神の御靈代は、太田黒背に之を負ひ、太田黒は砲兵營へ、富永は歩兵營へと驀々地に突入した。之と同時に、殘る三十名を五支小隊に分ち、第一支隊は第六管郎ち熊本鎭臺司令官少將種田政明が邸へ、第二支隊は第十三聯隊長中佐與倉知實が邸へ、第三支隊は參謀長中佐高島茂德が邸へ、第四支隊は縣令安岡良亮が邸へ、第五支隊は時勢黨の首領民會議長太田黒惟信が邸へと向はせた。

夜は方に十一時過ぎ、城内の兵營でも、城下の諸邸でも、今か何れも枕に就き、夢の浮世に入たる寢ばな、各處殆んど同時刻に、鬨を作つて闖入されたから、周章狼狽は譬へんに物なく、中にも種田少將は大西郷門下の四天王の一人とも稱す可く、明治四年に、大西郷が今日の近衞の土臺となつた歩・砲五大隊を引率して東上し、皇上守護の任務に就いた時、桐野利秋・篠原國幹・村田新八等と同じく、大隊長の一人として等しく東上したのが、此種田であつた。それだけあつて、豪强不屈暴徒の亂入に目を覺まし、枕刀を押取つて、必死となつて防戰したが、此に向つた第一支隊長高津運記は、『汝、神軍に手向ふ歟』と大喝しながら、一刀を脇腹から貫けば、痛手に堪まらず、「殘念」と叫んで仆れる處を、隊中の一人櫻井直成疊みかけて、其首級を揚げた。

此には諸隊血戰の大要を述べるに忙はしければ、細事に及ぶ暇が無い。が、當世男のお慰みに、一寸一息つきながら述べやう。種田は天性磊落な上に、時代の放縱な流風を承け、其の東京に在る間、盛んに豪遊を極めたので、彼の通稱を其儘に楊州の瘦馬どもから「花の左門様」と取囃された。それだけあつて、柳橋の一

此物小勝といふを根引きして、此熊本下んだりまで相携へ、今夜も枕席に侍んべらせたのである。處に神風連は跳りこみ、意中の少將は眼前に討たれたから、小勝は看るより氣も顚倒、『助けて下さい！』と悲鳴を揚げ、一黨甲乙の見さかひも無く取縋る。壯士の一人、『エー穢らはしい』と、輕く一刀を加へたので、バッタリ其場に仆れたが、其黨の立去つた後、彼女は正氣づき辛ひ傷も深からねば、帶引締めて、最寄の電信局へと驅著け、東京日本橋區に住する親許に宛て、

『ダンナハイケナイ、ワタシハテキズ』

と打電した。それが翌日の新聞に見はれる。斯道にかけての三面記者、爭で其儘に看過す可き。

『ソシテオマヘハドウシタカ』

と附けたので、一時都鄙の話柄となつた。閑話休題とは是等の事であらう。

次に高島參謀長が邸は種田邸に接近しゐたので、濟數軍の第一支隊は凱歌ヶ揚げて、第三支隊と相合し、高島邸に亂入し、當該支隊の一北淡水間貞雄早くも一刀を參謀長に浴せ、續いて衆刀亂斫して亦其首級を切取つた。此高島茂徳は有名な高島秋帆の一子にして、陸軍中の一雋才と稱せられたが、哀れ不幸の運命に終つた。

次に敎徒の第二支隊が向つた與倉聯隊長（後の中將）が邸には聯隊旗を預かつてゐるので、下士・卒數名は其邸に詰切り、歩哨を門前に張つて、嚴重に構へたれど、決死の敎徒は事ともせず、詰居る下士・卒を追捲くり、ドッと叫んで斫入つた。機敏の聯隊長は早くもそれと推察し、馬丁部屋に飛込んで、其處に脱棄てた半被をはをり、表の方へ遁れ出るを、隊中の一人堀田四郎、『何者ぞ』といひながら、背後に一刀を浴びせたが、與倉は撓まず、『別當です。お赦し下さい』と言棄てゝ、走り抜けたので、それとも氣づかず、此人だけは討漏らした。代りに聯隊旗を捕取り、一邸に火をかけて燒燼した。

次に神軍の第四支隊は、一隊僅に五名を數へ、其擔任は文官の安田縣令が邸といふので、隊長の吉村義節

が獨り三十一歳の壯齢に達するのみ。其他は二十歳から十七歳の青年ばかりであつた。然るに縣廳では此日の夕暮に一黨暴發の計畫あることを、薄々探知したので、縣令の邸には、參事小關敬直・一等警部仁尾惟茂・六等警部村上新九郎以下・巡査數名聚合し、鎭壓の方法を講ずる處に、それとも知らず一隊は討入つたから、奇襲隊中で此手が一番苦戰に陷つた。されど一隊は奮鬪して吉村及伊藤健は安岡縣令に斫著け、十七歳の少年角田新太郎は小關參事を斫倒し、同じく十七歳の愛敬元吉は仁尾警部に斫著ける。沼澤廣太は村上警部以下巡査書生數名を殺傷した。闇中摸索の戰の爲に、其場に於ては、目指す安岡以下を取逃がしたれど、概ね重傷の爲に安岡・小關・村上は相次いで仆れた。一隊は此にも火をかけて立去つた。

次に第五支隊の太田黑惟信が邸襲擊は、惟信に早く逃げられたので、只一邸を火にし引揚げた。代りに途上で、地方屈指の縣官青木保弘を斫つて棄てた。

其他以上の五支隊は、城中の火光・砲聲に驚き、或は騎馬・或は徒歩にて營所を指して驅著ける鎭臺將校を途上に要擊して、殺傷したるもの、其數を知らず。斯くて各隊は前後に皆城中襲擊の本隊へと合した。

六

扨又一黨の首領、當夜の總統太田黑伴雄は、七十名の幹部隊を自ら指擊し、十年欝積した悲憤を只此一夜、精しく言へば、半夜に聚めて、砲兵營に殺到した。柵門の柵遮物は大槌を揮つて破壞させ、營中の二大兵舍は燒彈を投じて燒打たせ、驚き惑ふ營兵の中に、面もふらず斫入つた、其勢の猛烈さは、疾雷の耳を掩ふに遑あらざるばかり。數百の砲兵は爲に散々斫捲くられ雪崩を打つて逃げ走るを、此處に突伏せ、彼處に斫倒し、二時間許りに見事全營を占領し、山砲四門まで分捕りして其砲を曳出し、更に歩兵營の攻擊隊に應援した。

之と同時に、富永守國が率ゐる同じく七十名の一隊は二千に幾き第十三聯隊の歩兵營へと突入し、是れ亦同じく大槌を以て門戸牆壁を打壞し、手に〳〵燒彈を

把つて、投掛け〳〵、見る間に營内の三大兵舍を燒立て、炎烟の下から、鋭々聲して斫入つた。二千の營兵は餘りの急襲に隊伍を合する暇なく、お負に當時の制として平時に銃彈を渡されてゐないので、其の出でゝ防ぐ者も銃鎗を揮ひ、清教徒の刀・鎗に對するのみ。然るに此方は白兵戰なら得意の壺、恰も快刀の亂麻を斷つが如く、當るに委せて斫靡けたので、一時は幾んど此全營をも其手に收む可く克進んだ。

凡そ今夜の戰に、如何に一黨が精力を罄つた歟は、其中の一戰士古田孫市、馳突の間に、戰友の元永角太郎に邂逅ひ、『君は今までに幾人斫つた歟』と問掛ければ、元永は之に對し、『五六人は遣りつけた』と答へながら、更に『君は如何』と反問した。古田は笑つて、『オー自分歟。自分が確かに斫倒したと覺へるのは、まだ僅に八人だけなや』と答へながら、更に血刀を揮つて突進した。又此孫市が兄の古田十郎は、接戰の初め、携へ來た二振の太刀を皆打折り、更に藤崎の本營へと走りつけ、豫備の一刀を取出し來り、其刀の刃も亦鋸の如くなるまで鬪うた。それから黨中長老の一人愛敬正元は日頃から敬神の意をこめて製させた直榊柄の鎗を揮ひ、十餘人を突伏せたので、穗尖は全く血に煮えて鋸の如く鈍り來た、

斯かる個々の單獨戰であつたから、清教軍に在つては、主將と雖も、自ら手を下して突擊した。戰鬪は方に酣はの頃、鎮臺司令部の參謀中佐大島邦彥は、司令部指して馳來るを、前に擧げた敬軍の一豪古田十郎・續いて松田榮藏・青木曆太・切尖揃へて競ひかゝるを、大島もさる者、事ともせず、死力を出だして渡合ひ、鎬を削つて鬪ふ中、さしもの古田も誤つて、其指を斫られ、松田・青木も良受太刀になつて來た。此體を看て、大音に『斫れ！ 斫れ！』と呼ばつて、馳著けたのは、首領の太田黑、唯一刀に大島が胸部を突貫いた其捷技、何れも『流石は太田黑先輩』と驚嘆の目を瞠つたが、之に氣を得て、前の三人は亂刀を措め、大島を其處に斫伏せた。

斯かる有樣であつたから、當夜二時間餘りの戰鬪に

僅々百數十名の淸敎軍の爲に、官軍の將校・下士・卒の死傷は、實に數百名の多きに達した。

が、一利あれば、一害の之に伴ふは、自然の理法。淸敎軍は當初に火を兩營の各兵舍に放つて燒立てたので、官兵は驚動し、由つて以て奇勝を制し得た。此處までは淸敎軍の利であつたが、官兵は寢耳に水の急襲に驚き、縣下數千の士族軍が相合して、掩ひ到つたと誤了して、一時度を失つて潰亂したものゝ、追々炎上した諸營の火光四邊(あたり)を照し來るに及んで、熟(よ)く〳〵視れば、敵は意外の少數であるのに、良(やゝ)勇氣を回復し、再たび處々に聚合し、銃鎗を攢めて、相支へんとする折柄、與倉聯隊長は負傷に屈せず馳著ける。總司令部、には參謀少佐の兒玉源太郎(後の大將)が、妓樓の遨遊中から丹前姿(たんぜんすがた)のまゝで走り著ける。其他の將校も追々驅著け手早く彈藥を各兵に配附して、此に射擊が開始する。一方に大隊長心得の步兵大尉小川又次(後の大將)が當初の一擊に漏れた一大隊を指揮して參加する。淸敎軍の二隊は終に敵の猛烈なる十字射擊・廿字射擊に擊竦(うちすく)められ、流石に一騎當千の勇士等も、手も足も出ぬ窮境に陷つた。

されども一黨は之にも辟易せず、驟雨の如く注ぎ來る飛彈の下から、尙ほも此敵を斫崩さんと、火光に照らされて、白晝の如くなる營庭に、白刄を揮つて驅込み〳〵突進したから、無慘も無慘、太田黑・加屋を始として、一黨の精銳五十餘名は、或は狙擊・或は一齊射擊の下に算を亂して死傷した。是に至つて萬事は休した。其夜の緩さ、二十五日の午前二時に至り、殘黨も退却の已む無きに至り、彼等は一旦引揚げて、更に再擧の計圖を講じたるも、一つには官兵の追擊急なると、二つには縣廳の彈壓も亦加はつたので、八十餘名各處に自双して、世にも壯絕の最後を留め、其他は相次いで逮捕の手に就き、或は刑場の露と消へ、或は配流に處せられて、哀れ悲劇の幕は蓋ゝれた。

七

顧ふに明治の世代に、內亂の數も一・二に止まらぬ。其最大なるは西鄕の亂、戰鬪は約一年の久しきに亘り、

紅血は九州の草木を染めた。それですら叛軍は名ある官軍の一將官をすら取り得なかつたのに、清教軍の一擧は設ひ奇襲の結果とはいへ、僅々百七十名即ち歩兵の一中隊にも足らざる少數の一團を以て、二千三百餘の精兵一鎭臺と戰を開き一、時は殆んど全勝を制して、熊本の堅城を拔かんとし、且つ其戰果からいふも、武官に於ては、種田司令官・高島參謀長・大島參謀を仆し、與倉歩兵聯隊長・鹽谷砲兵大隊長（後の中將方閉）を傷け、其他の將校・下士・卒を殺傷したるもの、其數を知らず、且つ一たびは聯隊旗及山砲四門までも鹵獲し、文官に於ては、安岡縣令・小關參事・青木中屬をも遣りつけた。其擧も亦實に壯とす可きである。而うして彼等をして然く豪膽に、然く勇猛に、死して悔いざらしめたるものは、何であらう。即ち其信念である。及それから來る自恃である。甚しい哉人に信念なかる可からざることや。

是に於て乎、自分は一黨中壯烈の死を遂げたる人々の年齡を一顧して、當世男に問はんと欲する。

宮本太平	六九
上野堅吾	六六
井上次賀八	六二
齋藤求三郎	五八
愛敬正元	五一
荒木同	五一
南誠哉	五〇
鶴田伍一郎	四八
太田黑伴雄	四二
加屋霽堅	四一
吉海良策	四〇
鬼丸競	三九
加々美十郎	三九
杉野繁	三八
吉田景勝	三八
阿部景記	三七
工藤精吾	三七
澁谷源吾	三七
松井正幹	三七
井上平馬	三七
福岡應彥	三六

植野常備	三六
辻橋見直	三六
富永守國	三五
石原運四郎	三五
高津運記	三五
猿渡弘仲	三五
岩越充內	三五
後藤姻彥	三四
西尾德太	三四
井村波平	三四
野口知雄	三三
立島駿太	三三
石原朋來	三三
吉村義節	三二
廣岡齋	三二
寺田栖鄕	三二
高田秀信	三二
櫻井直成	三一
安藤善藏	三一
立川運	三一
德村清敏	三一

福原秀久	三一
浦楯記	三〇
中垣景澄	三〇
宗村敬治	三〇
長東勝馬	三〇
上野繼雄	三〇
荒木敬治	三〇
大野昇雄	二九
菅八尋	二九
小篠一三	二九
松尾葦邊	二九
高田眞次	二八
今村榮太郎	二八
富永喜雄	二八
林田鐵太	二八
宗村彌門	二八
荒木保夫	二八
齋藤堅藏	二八
福島正運	二八
古田十郎	二七
小林恒太郎	二七

樹下　一雄	二七	
大野　吉太	二七	
松原　漸	二七	
深水　榮季	二六	
沼澤　廣太	二六	
田代儀太郎	二六	
千田　昌雄	二六	
平野　寅雄	二六	
永山　一雄	二六	
椋梨　武毎	二六	
加來　十郎	二五	
水間　貞雄	二五	
鹿島　甕雄	二五	
青木　將太	二五	
山田彥七郎	二五	
古田　孫市	二五	
西川　正範	二四	
米村勝太郎	二四	
兼松　群喜	二四	
荒尾　延彥	二四	
松本　三郎	二四	
野口　満雄	二三	
内尾儇太郎	二三	
横田　貫雄	二三	
荒尾　栖直	二三	
猿渡常太郎	二三	
田代儀五郎	二三	
春日　末彥	二三	
上田　倉八	二三	
大石　虎猛	二三	
飯田　和平	二二	
富永　三郎	二二	
今村健次郎	二二	
齋藤熊次郎	二二	
森下　照義	二二	
有働　數彥	二二	
小篠清四郎	二二	
栖崎　栖雄	二二	
後藤　政彥	二二	
坂本　重季	二一	
青木又太郎	二一	
伊藤　健	二一	
米良　龜雄	二一	
沼澤　春彥	二〇	
鶴田　太直	二〇	
友田　榮記	二〇	
渡邊只次郎	二〇	
高田健次郎	一九	
兼松　繁彥	一九	
矢野多門太	一九	
島田嘉太郎	一八	
小篠　源三	一八	
管　武一郎	一八	
織田　壽治	一八	
兒玉　忠次	一八	
愛敬　元吉	一七	
井上豐三郎	一七	
角田新太郎	一七	
猿渡　唯夫	一六	
太田三郎彥	一六	
計百二十三名		

以上の諸士を年齢に由つて大別すれば

六十九歳から六十二歳までの列　三名
五十八歳から五十歳までの列　四名
四十八歳から四十歳までの列　四名
三十九歳から三十歳までの列　三八名
二十九歳から二十歳までの列　六一名
十九歳から十六歳までの列　一三名

を算する。此下に如何なる教訓をか與へる。

堅確なる信念上に一たび脚根を立て來れば、古稀の老翁且つ戰ふ可く、青襟の少年尙ほ爲すに足ることを示すもの其一つ。

綜じて言へば斯くの如くなるも、人の一代に最も自ら奮ふ可きは、二十代から三十代、是れ人々の宜しく深く留心すべきを教ふるもの、其二つ。

上野堅吾六十六歳、齋藤求三郎五十八歳、倶に一黨の顧問たり。首領太田黑伴雄四十二歳、副首領加屋霽堅四十歳、顧問と首領の年齢に注意す可し。

阿部景記三十七歳、福岡應彥二十六歳、富永守國・

石原運四郎・高津運記等しく倶に三十五歳、何れも參謀の上位を占めた。年齡が自ら人の立場を說明するもの、其三つ。

然りと雖も、吉田十郎二十七歳、小林恒太郎亦同甲、倶に參謀の班に振ひ、深水榮季二十六歳、野口滿雄二十三歳、飯田和平二十二歳、齋藤熊次郎亦同年、亦入つて帷幄に參與した。大丈夫須らく自愛すべし、年齡何ぞ拘はるに足らんやと特殊の刺衝を與へるもの、其四つ。

人々之を奈何にか看る。

八

天旋・地轉四十年、今日我國の文運を把つて、當時のそれに比看すれば、山麓と頂巓との相違となつた。兎はいひながら、現時の文明が産出した當世男の振舞を視れば、末路の古希臘が其下から陽光の如くちらついてならぬ。議會の政壇から新富座・青年會館等の演壇まで、ペリクレスも跳れば、デモステニスも號嘯する。又其一方法廷のトリブンには、イゼーも登れば、リジヤスも見はれ、堅白異同の辯論を鬪はせる。其壯觀は宛然として古希臘を欺く。それから彼等の知識はと問へば、其淺深は暫く擱いて、儒教でもござれ、佛教でもござれ、神道でもござれ、耶蘇教でもござれ、概ね教義の一斑は解知する。其他今世百科の學に於て、勿論一人には兼得されど、人々概ね一技・一能を有せぬは無い。亦是れ希臘の「ソフィスト」を回想させる。神武天皇の建國以來、日本國人の物識になつた事は、未だ今日ほど盛んなる時はあるまい。而うして我目する當世男は其チャムピオンとして先頭に立ち、此社會を指導しつゝある。

併ながら彼「ソフィスト」は、賢哲を意義した希臘盛時のそれではなくて、ペリクレス時代及び其れ以後の「ソフィスト」である。僞信家・背信家・詭辯家・虚誕家を意義する「ソフィスト」に落ちた。彼等は「論語」も讀んでをれば、「バイブル」も誦してゐる。併ながら、其の讀み且つ誦した「論語」も「バイブル」も、朝夕過眼の新聞・雜誌と視て大差は無いのである。信仰は殆んど彼

等を司配せぬ。彼等の或者はクリスチャンと稱する。其内行を觀れば、モルモニストである。又其の或者は佛徒と號する。其趨行を察すれば、外道に走る。

時代は彼等をして正義を唱へしめる。併ながら、其正義は人を責めるの要具に過ぎぬ。二・三年來の政治に觀よう歟。其の謂ふ所の閥族打破や高遠の理想などは、正義の觀念に胚胎せねばならぬ。然も之を高唱しながら、閥族打破から薩閥は取除けられる。高遠の理想から官吏瀆職は閑却される。大臣責任は除外される。等しく同一の官吏瀆職である。前者の之を犯すを責めて、後者が取つて代つたまでは正義を伴へど、代つた仲間で之を新犯すれば、刑事政策の題目に隱れて、庇護强辯に全力を傾倒する。前敗者の與黨之を憤慨し、近くは亦正義を假り、彈劾・問責に餘力を遺さず。然く彼等は正義に親むかと顧れば、十有餘年の久しきに亘り、彼等はより以上の瀆職を續犯し來つて、恥かしいとも感ぜぬ徒輩に過ぎぬ。誰をか恨み、誰をか求めん。歸する所は、政治に關する彼等當世男の多數が、正義の觀念を缺如するは、是に由つても推測される。

其他の社會各方面の當世男も、大概は之が兄弟分に過ぎぬ。一國社會が斯る情態を現じた後には、果して何者が追隨する。マセドニヤ風の一颪(おろし)にヘレニズムと倶に吹飛んだ希臘の苦き古經驗を、吾々は吾々の祖國の上に再現するに忍ばねばならぬ歟。

眞成の日本人（佛蘭西人が謂ふ所のヴレ・ジヤポネー）は正義の基礎に築かれた信念と自恃との上に立たねばならぬ。是に非ざれば、個人も社會も一國も爭で大事に踏みこたへん。それで自分は尊嚴を冒瀆して、當世男に神風主義を宣傳する。

其教義ぢやない。其形式ぢやない。其並進する精神に於て。

現今の青年と人生に對する根本信念

新渡戸稲造

必ずしも現今の青年のみに限つた病狀でもあるまいが、現今に生存して居る我々の眼には、殊更ら近來に至つて我日本青年間に著るしい缺陷を生じたやうに思はるゝことがある。それは今の青年には根柢的の人生觀なき事情である。五十年以前にも、或は五百年以前にも同じ事であり、或は寧ろ現時よりも此缺陷が甚だしかつたかも知れぬ。けれども今の世に於ては、昔と違ふ狀態が一二ある。それが吾人の深く慮り、或は遠く考ふる氣風を妨ぐるものであると思ふ。それは外でもない、生存競爭が烈しくなつた爲めに、眼前の目的を得んが爲め、日夜齷齪して狂奔する事。從つて何物についても悠揚として精神を養ふ事の出來ない事情。其外に近來所謂外國思想が無限に輸入されて、或は英吉利、或は佛蘭西、スカンヂナビア、露西亞、又近來は印度、亞米利加と、殆んどあらゆる方面より新思想が入り込めるが爲めに、少しく眞面目に人生を究めんとするものは、一先づ凡ての方角に觸れるの必要を感じて、其結果は所謂亡羊の嘆に終つて、己れの確信すべき所に達し得ない。尙、之に加ふるに一貫したる思想が我敎育制度に無いが爲に、小學校で學んだ事は中學校に行つて連絡を缺き、高等の敎育を受くるに從つて中學で鍊へた事が一場の話談に過ぎなかつたの感を與ふる事が甚だ尠くない。世の中に出づれば往々學校内で訓鍊した事、青年時代に描いた理想が一の空夢であることを自覺して、人生は其日々々の飯事暮らしの如く見做されるに至る。昔であれば曲りながらも、或は狹いながらも、朱子學なり、陽明學なり、或は老莊の學なりで鍊へ上げた。廣い見地から見れば馬車馬

的の觀を呈するが、當人に取りては一貫したる思想を堅實ならしめて人格的修養に資するの利益は甚だ尠くない。又西洋に於ては聖書(バイブル)があつて、まだ宗教觀念も尠く、或は神學の議論などは更に解し得ない兒童も、殆んど無意味無意識に聖書の語を暗記をしたり、又日曜日は云ふに及ばず、日々家庭に於ても聖書の語を耳にして、之が伏在的智識となつて、初めは無意識に得たものが後日事に當るに從つて意識に上り、遂には身を支配するの力となる。即ち信念の基礎を築き上げる。

然るに我國に於ては、右のやうな次第で現今殆んど據る所がない。先輩が宗教を輕蔑し、人間は單に智識のみを以て生くる如く敎へたのが抑々日本國民の思想界の墮落の本である。智識のみにて生くるを敎へれば、其次には其智識とは何の智識、如何なる智識なるかを思はざるを得ない。されば直ちに己を利する底の智識が最も間近で、最も解し易いが爲めに、智識欲が一歩墮落して貪慾に化する。我輩は明治の初めより二十年頃に至るまで、世の思想を導いた人々の云ふた事が今日になつて質つて如何に有害であり、如何に國民の思想を下劣せしめたかを感ぜざるを得ない。

されど幸にして、遺傳的に日本人の信ずる所であつて、之れが爲め、絕對の墮落より救ひ出したいものと思はれる。又尚其外に日本人は感情的な民族である。之が辛うじて國民思想の命脈を繫いだと思はるゝ。先に云つた遺傳的云々の條について、他に適當な名も無いから、已むを得ず武士道とでも稱しよう。此言葉の如きは、今日は已に獨り日本のみならず西洋にも行はれて、誰人も日本の固有の道德觀念と認識して居る。けれども其名たるや二十年前にはなかつたのである。從來我國には武士なる言葉は無論あつた。又士道なる言葉もあつた。又弓矢の道とか大和魂と云ふ言葉は普通に使用されたけれども、武・士・道といふ三つの文字から成つた名詞は、明治三十年頃まで無かつたのである。故に古く日本に居つた西洋人は、此言葉を聽いて日本語と思はなかつた位であつた。假りに廿年前の新

闘なり、雜誌、書籍を繙いて見ても、武士道と云ふ言葉は決して見當らない。然るに今日世界に此名が擴まつたと云ふ事は、此武士道なるもの丶內容が存在して居つたからだ。名こそ新しいけれ、其實は大和民族の固有のものである。我輩は常に思ふに、實有つて名無きものが甚だ多い。動もすると西洋思想排斥の論者は、外國には忠孝なる言葉は無いと難じて、以て忠の觀念も孝の觀念も西洋人は解し得ないと云つて居る。忠の觀念に於ては或は然らん。或は獨逸人種の中には甚だ尠い。拉典民族の中には或はあるかと思はれる。又同じアングロ・ザクソン人でも、三百年前までは未だ有つたかと思はれる。然し何れにしても日本の忠君の思想とは大分違ふ。然るに孝道については、名がなくとも西洋に此觀念の深い事は或は日本人に劣りはしない、却つて吾々が恥ずる節も無きにしもあらずである。雖も日本に於てさへも忠孝の和訓のない所を思へば、支那の文化と思想が輸入される前には、日本民族は忠孝の道を更に心得なかつたかと云ふ議論になるけれども、恐らく昔より此觀念は支那人より深くあつたものであらうと信ずる。思想にして已に存在して、只之を命名する事を知らなかつた。一度一種の名が附せらるるや、直ちに何千年以來鍛へ鍛へて來た觀念が、新らしき名を得て一層明かに成つた觀をなす。武士道についても同じ事である。或外國人の如きは、日本では政略的に新らしき宗教を拵らへ、或は人工的に否不自然に人心を統一せんと計つて居る、武士道の如きは其一例であると冷笑したものもあるけれども、決して人工的製造物ではない。名のみ新らしく實は固有のものである。さればこそ日本の精神的生命が昔より續いて來たのである。

同胞は感情的民族なることは、外國人も、又我々自身も共に認むる所である。此性質あるが爲め、少からざる危險の起る事も共に認むる所である。討論討議して決すべき問題も、感情に由つて左右されて、正が邪の如く判斷をされ、邪が正と認めらるゝ奇觀を呈する事は、人間の在る所何處にもありさうな事なれども、

恐らく進歩した國で日本ほど盛んに行はれる所はあるまい。政派の爭も政綱を論ずるにあらずして、殆んど人身攻撃に終る。通常の交際も、何時も感情に初まり又感情に終る。甚だしきは商業の取引きでさへも感情が挾まると云ふが如きは決して嘉すべき事ではない。然るに此感情高きが爲めに、單に半熟の學説によりて覆がへさんとさるゝ信念は全く顚覆しないで居る。一青年が嘗て我輩に告げて云ふ事に、靈魂不滅の議論の如きは學理或は哲學に根柢なき説と思ふけれども、己れの母の墓前に臨めば矢張り靈魂は不滅なりと感ずると云つた。此深き且高き感情は到底學理で解決し得ざる問題を定める。曾てカーライルの言に『靈魂不滅、神の存在、此二つの問題は假令廿年或は二千年研究すると雖も其理を究むる事不可能にして、之は只信ずべきの問題であると』絶叫した。先に云つた青年は堅き信念の階段にまだ進まないもので、己れの母は全く死んで了つたと思はぬ、たゞ漠然と母が生きて居る如く感ずるといふので、之れ丈けでは未だ深き信念、高き信仰には至らぬとは云ひながら、將に高きに達するの初段に居ると云ふも過言であるまい。彼の感じは、一個の母に局限されて居る事、並びに母は全滅しないといふ消極的に存在を信ぜんとする心は、彼の信仰と云ふよりは寧ろ希望の如く思はるゝ。然るに此希望が一層强きをなして彼の心に明かになれば信仰に近づく。故に此信仰が只一個の母にのみ關せずして、普遍的に凡ゆる人間に及べばいよ〳〵以て深き信念となる。

信念とは必ずしも宗教の信仰箇條にのみ限らない。が、如何なる事についても宗教的の趣味を抱くを云ふ。我輩のこゝに宗教的と云ふのは、甚だ通俗なる意義に於て用ふるのであつて、現在生存を離れて時間空問に繋がれざる存在を認むる事を以て宗教と云ふのである。現在に憧憬し、名利に繋がれて心を動かす事ない如きは、廣い意味に於ける宗教的心理の作用と云ひたい。故に先に述べた現今の青年が學問すれば名利、一口に云ふパンを得る、或は名を成す、或は立身する爲めの如き、何れも現今なる時と、我國なる土地以外

に心を放つ事ないが故に非宗教的と云ひたい。故に深い深念を缺くと云ふのである。

我々は近來海外發展の問題について少しく講究して居る。而して其心理的理由は深き信念にあると思ふ。然るに見よ、現今我國に於ける殖民を論ずる人と云へば、領土擴張、平たく云へば他人の土地を貪ぼる心。或は民族發展などと響よき言葉なれども、本國に食へないものが食物を求むるに外出するの意の如き、日本民族の將來云々いへばいかにも精神的に聞ゆるものの、果たして民族が如何なる使命を天より享けて活動せざるを得ないのかと各自に訊したならば、精神的理由は殆んど存在しないであらう。尤も西洋とても移民が悉く高尚なる理想に追はれて海外に移住する譯ではない。各自パンを得んが爲めに出稼ぎするものである。けれども帝國主義或は民族發展を主張し且つ指導する人にあつては、其着眼點が高からざるを得ない。佛のセーリエールが帝國主義の心理的分解をなして、現今歐羅巴民族の海外發展はローマンチックの變形である。凡俗な事に滿足しないで、高く廣く雄飛するの從るゝ氣象より起る現象である。又已にローマンチックといへば、自ら其中に含む一種のミスチシズム、即ち神秘的の觀念の現はれであると云つたが、大いに味ふべき言と思ふ。即ち今日の世を救ふには我々日本を措いて他にない。斯く／＼する事我國の使命であると、即ち已むに已まれぬ心より活動して、其結果の果たして有利なるか不利なるかを省みない底の信念あつて初めて偉大なる事業が成就さるゝのである。

曾て我輩は或元老を訪ねた時に、氏は見渡す所五十年未滿のものにして之はと思ふ人物は見當らぬと云うた。少しく有望或は有爲と思ふものは明治以前生の者に限ると斷言された事がある。之は全く明治以後に生れたものは、明治十年乃至二十年頃の最も思想界の消極的にして唯物的教育を受けた人士である。我輩は此時に然らざるを述べた。そしてあなた方御維新の間際に國事に奔走された頃は、時の爲政者即ち御大老、御老中など云ふ方々を訪ねられたかと反問した。すると

無論そんな所へ行かないと云つた。そこで我輩は云つた。恐らく時の爲政者の眼から見たならば、人物はないといつたであらう。之れ人物のなきにあらずして、人物が其人々を尋ねなかつたのである。閣下の如きも今日の位置に達せられた爲め、却つて田舍に潛伏して居る有爲の青年と沒交涉になられたのでないか。廣く天下に人を求めたならば我國にも其人なき事もあるまいと笑話をしたのであるが、自ら此言を發しながら然らば果して何處に如何なる人ありやと顧みると密かに寒心せざるを得ない。

維新の頃には王政復古だとか、或は攘夷とか、或は討幕とか一定したる理想を懷いて、それが爲めには財產は云ふまでもなく、又語る程の財產もない青年共が生命を先出して、之が爲めに奔走した。明白な理る想があつたからこそ死生の巷を奔走して精神を鍛錬したのである。然るに今日の青年に何の理想があるか。生命に取換へる程の主義が何處にあるか。僅か三十年前までは耶蘇敎徒といへば一般社會と上流から爪彈きさる〻風があつて、一種の消極的迫害が行はれた。故に信者と自ら稱する事は容易くなかつた。之が却つて耶蘇敎界に人物を養成した所以である。近頃は信徒に普通の人より幾分かの信用を博するについて、信者たる事が一種の利益を得るの途とまでなるについては、信者の標準も年々下がるの傾向を見る。何事によらず一種の理想を達する爲めにはなか〱妨げがある。其難關を切拔けるほど人物の養成を仕上げるものがない。社會學者の所謂 pugnacity（敵抗心、奮鬪心）は偉大なる勢力である。それが自信力を養成し、これが轉じて信念となる。現今には之等の點についても品が惡い、乃ち奮鬪といへば主義の爲めならでパンの爲め、戰くば敵も武器を撰ばず、亂りに、やつ當りに過ぎない。

我輩が十餘年前巴里に遊んで居つた頃、ギゾーの後繼者としてソルボン大學に歷史の講義を受持つラヴヰス先生の下に敎を受けに行つた。此人は只歷史專門家として大家たるのみならず、慷慨家として、はた青年の指導者として佛國中に聞えた人である。一日親しく

談話するの機があつた時に、氏は曰く、「我輩の青年時代には佛蘭西に共和政治を樹立する事を以て目的とし、力なき白面の青年ではあつたが寄合さへすれば必ず談が之に及んだ。同志の青年共が少團體を作つて折々秘密の會合をして、まるで宗教的團體の如く、會を開くには祈禱を以て始め、相互に思想を交換するにも頗る眞面目の態度に加ふるに、此目的を遂行するには一身を賭する事を躊躇しない決心を相互に吐露して、心に誓ひ、口に約して決心の臍を堅むる事が屢々あつた。此信念の涵養が啻に共和政治ばかりでない、人生の凡ての方面にまで及んだ。我々は一生夫れが爲めに利益した事尠くない。然るに現今の青年には何の理想もない。徒らに個人個人の快樂を求むる位に止まつて、これでは到底强い人物は望まれぬ。」と慷慨された。今我輩この問題について一言要求さるゝに際し、ラヴキス先生の語は只共和政治に關する事を除いて、吾人の心に深く刻むべき事として聯想せざるを得ない。

"Faith is the heroism of intellect."

英國 デゼルチス著、高橋五郎先生譯

忽再版

心靈學講話

（寫眞版五頁入）
四六判總クロース
全一冊
正價金八十五錢
郵税八錢

▼初版三千部忽ち賣切れ――再版亦盡きんとす

一心靈學は「サイキック、フキロソフキー」と云つて天下の最新哲學である。所謂る「新思想派哲學」とは即ち此學の事である。

一心靈學は第一に現世と靈界との交通を研究するものである。

一心靈學は吾人と亡靈との交通を成立せしめ、幽靈や遊魂の談話及び筆記を得て、吾人死後の状態を講究する者である。

一亡靈や遊魂の如き靈怪との交通を開く術を交靈術と名けるが、本書は此交靈術を詳述し、交靈現象を研究した者である。

一本書は斯く交靈術の研究に由て、吾人が死後に於ける靈魂の不滅を證明し、併せて健全なる新倫理を確立した者で、最新進化論の泰斗ワルレス博士も極口推賞した斯界有名の新書である。

（中付三の一）

東京市本郷區西片町十番地
玄黄社
電話下谷一三一九番
振替東京七九九五番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

本紙の特長

（年中無休刊）

東京日日新聞

△言論　の東京日々新聞は最も進みたる見地に立ち不偏不黨公明正大健實たる良師友

△通信　の東京日々新聞は世界到る處に特派員を有し海外電報の機敏精確特に第一也

△學術　の東京日々新聞は最新科學に基く諸博士の通俗講話、讀書批評に重んぜらる

△文藝　の東京日々新聞は新に森鷗外先生の作品を掲げ其他小説、講談、演藝等多趣味

△實業　の東京日々新聞は一般財政經濟商況物價の記事觀察正確にして斯界の權威也

△家庭　の東京日々新聞は家庭問答其他婦人日常の案内手引として記事花あり實あり

△社會　の東京日々新聞は精巧の寫眞版を助け圍碁、將棋、學生の會合に記事最豐富也

△廣告　の東京日々新聞は創刊最も古く紙數最も多く信用天下に冠たり新聞界の王者

（三ヶ月分前金郵税共一圓二十錢）

東京丸の内　東京日日新聞社　振替口座二八〇〇番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中付三の二）

最新刊

東京帝大教授 法學博士 吉野作造先生著

現代の政治

權勢に怖ぢず

政黨政派に囚はれず

斷々乎として現代の活きたる政治を論ず。筆鋒銳利にして向ふ所直ちに眞相を捉ふ。讀むべし。

▼海の内外を問はず此一兩年間は政界多事の時にして諸種の時事問題は踵を接して起れり。然れども此間にありて我國民は果してよく政治的に教育せられたりしか▼議會は將に開かれし今日、世に大隈伯の隠退を傳ふる者あり。現内閣の將來は如何に轉化し、支那の帝政問題、日米間の交情問題は如何なる歸向を示すべきか。將に權威ある學者の說に傾聴するの秋にあらずや。

▼本書は我吉野博士が其の明晰なる頭腦と高邁なる識見とを傾倒して、其の折々の時事問題を論究し、適切深遠なる解決を之に與へたるもの、現代政治の眞相は赤裸々に解剖せられ、其の歸向は明確に斷言せらる。

▼内政外交これより益々多忙ならんとする時本書の出現は恐らく我國民に新たなる政治眼を與ふるならん。

菊判總布金文字入

定價壹圓卅錢（郵稅十二錢）

東京京橋南紺屋町十二

實業之日本社出版部

振替口座東京三二六番

（中付ヨの三）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■内村鑑三先生序
■別所梅之助先生著

最新刊
既發賣

武藏野の一角に立ちて

■四六版四五〇頁■
定價壹圓
■郵税金八錢■

苦惱の哲人にして寂寥の詩人、敬虔なる宗教家にして科學者の頭腦を備へたる先生にとつては、忘れられたる古今の稗史も、一塊の土くれも、或は草一本、花一朶に至るまでも、眞に生命の俤を思はしめ、尊き眞理の暗示である。著者は喧騷たる世俗のオーケストラを避けて、既往二十餘年の間、「武藏野の一角に立ちて」常に自己の笛を吹きつゞく。茲に飾られたる論文のすべては、實に著者獨特の吹奏樂であり、神との對答であり、自然との應答であり、また永遠に生くべき思想の結晶である。且つ文辭淸麗典雅。優しき眞珠の光を偲はしむ。

■米田庄太郎先生序
■賀川豐彦先生著

貧民心理の研究

菊判洋布製
壹圓八十錢
郵税十二錢

□エクトル・マロー傑作
□五來素川先生譯

增補縮刷

未だ見ぬ親

挿繪五葉
定價壹圓
郵税金八錢

東京京橋尾張町　警醒社書店　振替東京五五參番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

(中付三の四)



泰山に登る

澁川玄耳

此度の世界的大戰亂の開始以來、日本の世界的地位は一大變動を來した。少くとも東洋に於ける日本の地位が一段の高さと重さとを加へられたといふことは誰も疑ふまい。世界の伯父さんたる英國すら到頭重い口を切つて、澁々ながらも、「北京に於て英支兩國間に同盟締結に關する商議進行中なりとの風說あれども、英國は日本との協議の上に非れば支那と政治上の性質を帶びたる協議を爲すの意思なき旨を貴官は日本外務大臣に通報せらるべし」といふ電訓を駐日大使グリーン氏に發するの餘儀ない仕儀に立到つた。是は一種の詫び證文ともいふべきものだ、平素尊大なる英國に取つては餘程の屈辱に感じたであらう、而して此の電訓の發表が北京に及ぼした反響は怎麼かといふに、朝日新聞北京特派員は支那政府も日本の支那問題に於ける地位を悟り、日本を度外視して何事をも爲すを得ざるを覺悟せるが如しと觀察してゐる。如何にも左樣なければならない事である。

英支同盟問題と聯合加入問題は一先之で段落がついた樣だが、まだ殘つてゐる者がある。即ち帝政問題である。袁政府は五國の延期勸告を無視して之が急施に

熱中してゐる。而も其が實現された時五國が特に日本が如何なる態度に出づるかを内々心配しつゝ。

支那の態度は、譬へば贓物を運び去らんとする賊である、今恰も、大風呂敷――民望――竊取した民望を詰込んだ――を背負つて日本といふ交番の前を通り拔けようとするところである。賊は成るべく平氣な顏をして大股にサッサと歩いて行き過ぎようとして居るのである。

交番の巡査はシッカリしなくては可けない、此の巡査は組打となると弱くは無いが、其は逆捻ぢを喰つて打掛られた時で無ければ其の棄力が現はれない、横柄な高飛車な奴にはスクンで仕舞ひ、辯口の好い奴には言ひくるめられ、足の速い奴にはオイコラといふ内に逸早く逃げられてしまふ、心細い日本だ。

泥棒の手口といふものを兼て心得て居なければ、探偵の手掛りは得られない、彼等の平生の脈絡に通じて居なければ當りが付いても捕縛は出來ない、東洋平和の番人たる日本警察は一向支那の事情研究を略かにして居るのだから事件が起れば其の都度毎にマゴックのである。

予は切に我國の智識階級に向つて、各自の思ひ〳〵の方面からで好い、支那研究に興味を有つて貰ひたいと思ふ。對支那政策のヘマは支那に對する智識の缺乏が一大原因を爲して居る、而して這は獨り外交當局者にのみ責を負はすべきもので無い、斯う言つては失禮の様だが實際である。支那の現代の公的私的の社會狀態を記載した本といふものは、英人、佛人、獨逸人よりも遙かに日本人は少く持つて居る、極言すれば日本文で、支那研究の通俗的著述は無いと言つて可い。國民が平素支那に對する注意と研究とを怠つてゐる當然の罰だと言はねばならぬ。予は興味の上からでも支那に親しんで欲しいと思ふ念から最近に游歷した泰山の話を少し許り書いて見るのである。

*　*　*　*

泰山に登つて予はツク〳〵と支那の舊國であり大國であるといふことを、今更ながら感じた。

麓から絶頂まで四十里(日日の約五里)石疊みと石段とで築いた幅二間以上の大道が開かれてある、而かも其が治亂興亡定りなき支那に於て、二十幾朝數千年を經て儼然として維持されて居るといふに至つては一の奇蹟と謂はねばならぬ。

「山は泰山より大なるは莫し、史も亦泰山より古きは莫し」と謂はれてゐる。支那の古文明は今の河南省を中心とせる黃河流域である。周秦漢を經て、一は淮水に沿うて東海に、一は漢水を下つて南、揚子江域に文明は普及せられた。周代以前に於ける歷代の帝都を考ふれば其勢力範圍は略想像せらるるが、大雜把に言へば洛陽を中心とし四方へ各千里(日本の約百九十里)ぐらゐのものである。此の河洛平原は東南に開けて廣漠たる沃野で漢民族は繁殖するに從つて漸次其方面へ發展したのである。而して其東方の行手を遮るのは泰山であつた。洪水が來れば滔々として際涯なく千里の林野悉く魚龍の棲居と爲る、斯樣な低窪な廣原の地平線上に巍峨として聳えたのが即ち泰山である。日本で譬ふれば武州野州の平原から筑波山を望む樣なもので左して高いといふのではないが附近の關係からして如何にも目立つて高くも尊くも思はれるのである。



泰山絕頂——泰山の絕頂に玉皇廟あり、廟の左、坂路の上に石燈籠の如きもの即ち俗稱秦の無字碑

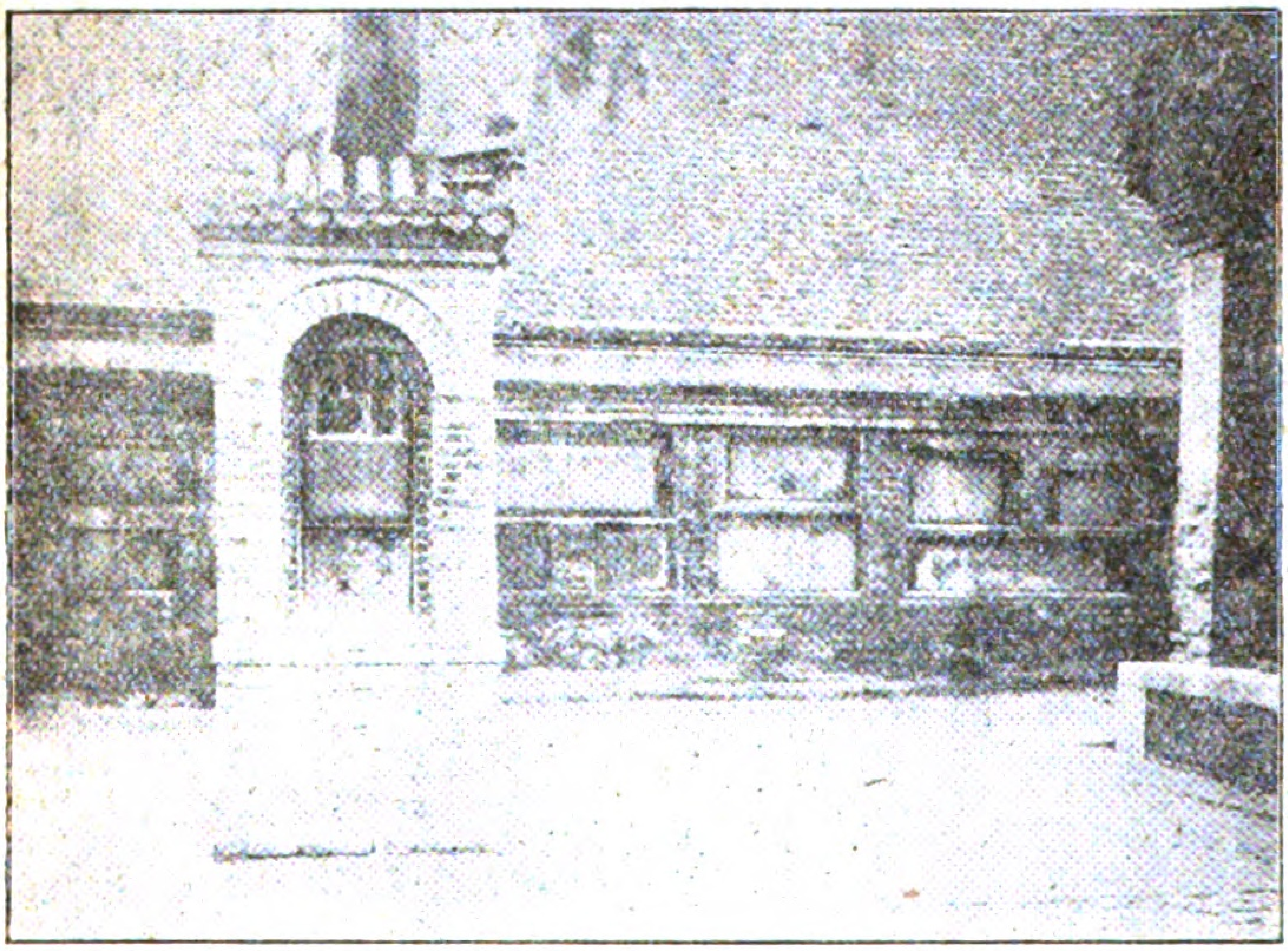
泰山の高は支那陸軍部の測量に依ると、其絕頂が一千五百八十米突になつて居る。富士山の半にも及ばぬ、纔に阿蘇霧

島などゝ似たものである。併しながら五千年來支那文明に關する數多の事蹟が此山に關聯して一代は一代より愈名高いものにしてしまつた。予は本年の夏に一度登山をして非常の興味を感じ更に種々の準備を整へて仲秋を以て再び登山し、併せて其附近の古蹟を訪ひなどして二週間餘を費したが、到底半月や一月で十分の探査は出來得られるものでは無い。

「孔子泰山に登つて天下を小なりとす」といふことが傳つてゐる、富士でも筑波でも登臨の觀は何處でも同樣で、平將門が比叡山より平安城を瞰下して非望を起したといふのも亦つまり同一の感じから來たのである。泰山の頂上の眺望は先づ東北一帶は山脈が連亙して、富士から甲信地方を見るのと略同じである、西と南は黃河及び淮河の流域たる大平原で、孔子が一生を費して獵官運動に彷徨した齊魯曹宋陳蔡の野は眼下に展開して其間に汶水、泗水、沂水及び黃河の流が帶の如く繩の如く縺れ合つて、數多の大湖小湖が鏡の如く光つて居る。處々の城邑聚落が其間に點々として居る樣を見、彼の中に權力を競ひ境界を爭ひ、智に誇り愚を罵り、怨みつ泣きつして居るかと思へば、何人と雖人世の馬鹿々々しさを感じて、一寸は仙人氣味にならざるを得ないのである。同時に又猛然として將門流の野心が勃發して來る人もあるであらう。

絕頂は俗に玉皇頂と稱せられる。玉皇の廟があるからである、百坪足らずの平地に塀を繞らせて其內に玉皇の本堂と外に四棟の小さい建物がある、二三の道士や雜役者が棲んでゐる。本堂の前に石欄で圍つた大塊石がある、是を巔石と稱し、底つ岩根に通ずる神聖なものと尊崇してゐる。併し、明時代に掘り露はしたものだといふ。本堂の傍に「古登封臺」と刻つた碑がある。封禪といふことは支那の古俗である。主權者の一種の廣告で藝人のヒロメの樣なものである。此の泰山の上に土を築き上げて壇を作り天を祭るのを封といひ、泰山の麓の小山に土をならして地を祭るのが禪といふ。此は王者でなくては出來ない祭祀の禮である。何時の代に如何なる理由で始まつたものかは解らないが、兎

も角古い習慣で周末に齊の桓公が今の山東省を根據として威を四方に張り天下の諸侯を會して覇を稱した時、此の封禪を行つて尊嚴を示さうとした、勿論泰山は齊の領分に在つた、然るに宰相の管仲は之に反對して天命を受けたる帝王でなければ封禪は出來ないと言つて古の例を擧げたのが、無懷氏、伏義、神農、炎帝、黃帝、顓頊、帝嚳、堯、舜、禹、湯、周成王の十二である。孔子が泰山に登つて姓を易へて王たるものを觀たのに、其の蹟の數へられるのが七十餘で、其外數へ得られぬのが萬以上もあつたといふ。何時の代にも廣告利用者は澤山有つたものと見える。其が今實際



秦の始皇の碑——秦始皇が天下を一統せし後泰山に秦の德を頌するの碑を立つ、此の碑の殘缺兩の片今尚ほ泰山の麓に保存せらる、此圖のアーチ手形の中に在る上部の黒き二片が其れである、背面の壁に嵌めあるは唐宋以後の碑板なり

を見ると泰山の上に封の蹟と見るべきものは何も殘つて居ない、此の絶頂の古登封臺と碑のある處も何等の特徴は無いのである。

玉皇廟の門前階段の下に秦の無字碑といふのが立つてゐる。秦の始皇が立てたといふ傳說である、幅が三尺六寸、厚さ二尺、高さ一丈五尺五寸の大きな石柱で上に蓋が載せてある、堅緻な質である、大抵な石が二三百年も風露に曝さるれば分解を起して表面はガサ〳〵になつたり苔が附いたりするものであるが、此の碑は數千年を經て尚ほスベ〳〵と滑かな肌をして居る。一字も刻つてない、刻つたのが湮滅したのでも無いことは一見明かである。古來此碑に就て臆說區々で、或は此は

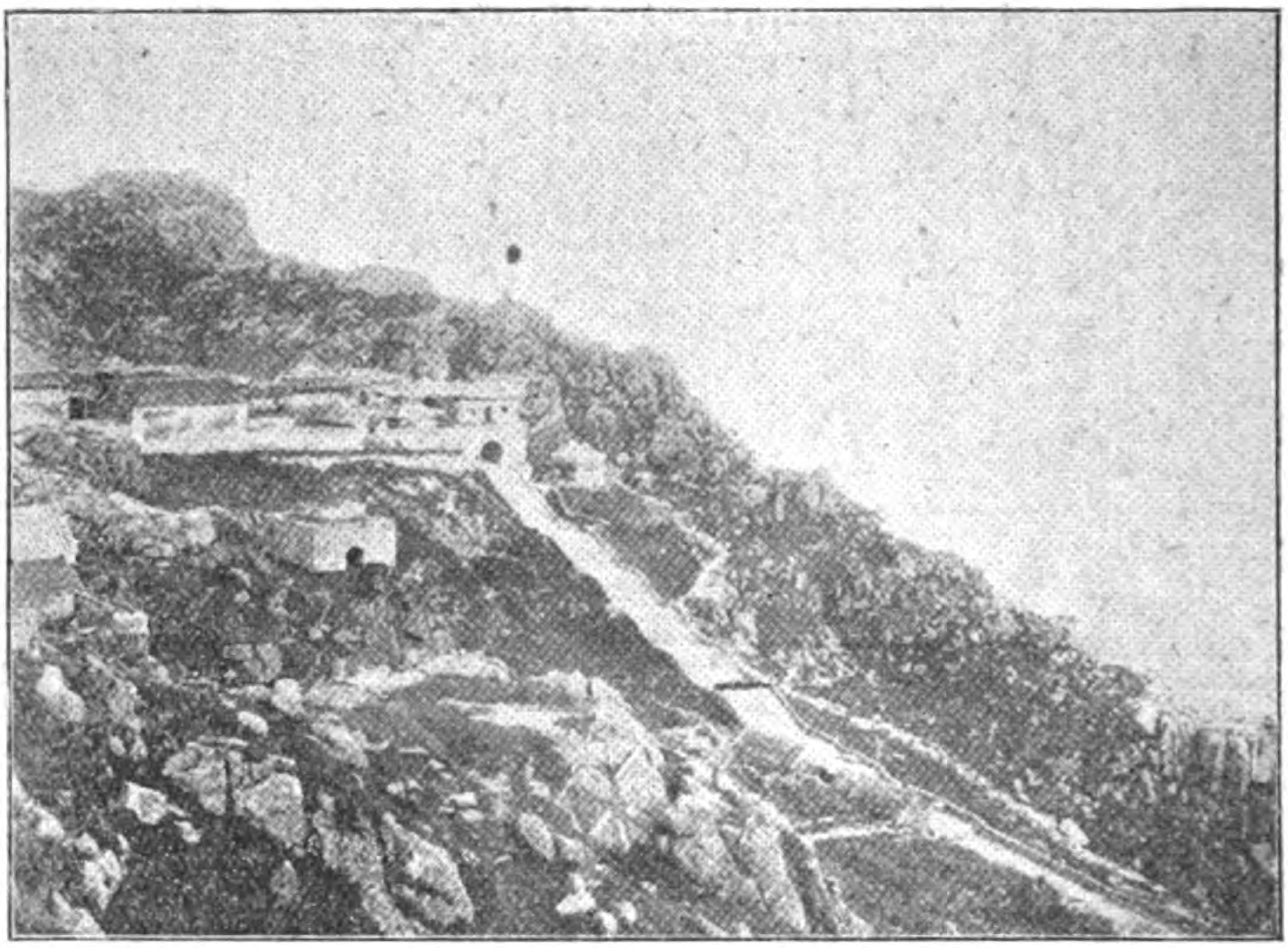
碑では無い、其の中に必ず封禪の文書か或は金玉の類を藏してあるのだといふ者もある、餘り疑を惹くので或時代の地方官が撤去を命じた處が、之を動かさうとすると驟かに風雷が起つたので怖れて止めて了つたといふ傳說もある。淸代に至つて顧炎武といふ學者は史記の文に依つて此は疑もなく漢武帝が立てたのである、最初は字を刻る積であつたのを、刻らずに無字のまゝで殘つたのだのと考證し、今は之が定說に爲つて居るが、仍ほ多少の疑ふべき點はある、兎に角泰山絕頂の一怪物である。

　秦の始皇が天下を一統した後四方に巡遊し、北は碣石から南は衡山に及んだ。秦は今の陝西省四川省を領してゐたもので、日本なら木曾山中の育ちである、海などゝいふものは見たことが無いから之に對しては大なる好奇心を有つてゐた筈である、已に天下を併呑して萬乘の尊を窮めては世上復た望むべきことも無くなつた、唯だ長生をして榮華を恣にしたいといふ人間本能的の欲求が殘る、其に乘じて出たのは山東人の神仙談であつた。東海の外に三の神山がある、蓬萊、方丈、瀛洲といふ、此處には諸仙人が住つてゐる、不死の藥があるといふ様なことを說いた、仙境の勝概は山東海岸の實景から誇張されたに違ひない、不死の藥は富貴の人の最も希ふ所である。

　岸打つ波のすさまじさ、渚の巖の神々しさ、沖の島影の點々として近きは濃く遠きは淡く、飛びかふ鳥の高く低く、島か鳥か、鳥か島か、雲か山か、水か空か、縹渺として際涯なき海上の眺望ほど、神秘的な想像を逞うせしむるものは無い、支那の神仙談が燕齊卽ち渤海、東海沿岸の人に依つて唱へ出されたのは有理な次第である。山國育ちの始皇帝が左あらぬだに好奇心を有つ海、此海に關聯して更に目下の欲望たる不死の藥の在るといふ三神山の神祕談が加つて來ては彼が心はそゝり立てられたに違ひない、古來王者の行事たる巡狩として彼が偉大心を滿足さすると同時に、此の欲望の滿足を兼ぬるべく、彼は自ら山東沿岸に航海すること數回に及び、且つ方士徐市をして童男童女數千人を發して

仙島探検に赴かしめた。彼は曾て自らを始皇帝とし後は二世三世を以て數へ千萬世に傳へしめんと言つたが、相成るべくは不死の藥を得て自ら無窮に皇帝たらんことを欲したのである。尙ほ後代に殘すべき廣告方法として、碣石(直隷省?)芝罘(山東省)の沿岸には秦德を頌するの辭を刻して碑を立てた。

秦の始皇が立た碑は六ある、右の二の外に會稽(浙江省)琅邪(山東省)嶧山(山東省)及び泰山(山東省)である、最先が嶧山で、次が泰山と史記に誌されてある。而して風雨雪露二千餘年其の今に存するものは一も無い、唯泰山の刻石が纔に其小斷片を殘してゐるのみである、書家の之を



泰山絶頂——碧霞元君廟、石階の上なるが元君廟、左端に少し見ゆるは孔子廟、中央の方形の臺は觀星臺

尊重すること一通りでない。此の泰山の秦碑は元と絶頂に立てられたのである、宋の時代に至つては原刻二百二十二字の中讀めるのが百四十六字あつた、明に至ると益漫滅して二十九字となつた、其頃の拓本が今珍重されてゐる。其が今唯十字殘つてゐる。

秦の始皇が李斯に書かせて建てた秦の頌德文が十字殘つてゐる、支那五千年の文獻中刻石文字として何人にも疑ひのないものは前記の六個である、其中の唯一個若かも泰山の刻石が十字にもせよ殘つてゐるといふのは面白い。是に就いては斯ういふ經歷がある。最初始皇が立てたのは絶頂であつたといふ、但其絶頂の何れであるかは分らない、絶頂と一

口にいふものゝ泰山の絶頂は富士山の絶頂より廣い、且つ高低ある地形だから眞の絶頂として唯一の小區域を定めることは出來ない、だから秦碑の立つて居た場所は今に於て檢定するわけに行かぬ。或る年代、秦碑は舊の位置に在つた、年數が經つて漸次に尊崇が加はつて來た、今まで草や荊に掩はれ半は土に埋まつてゐたのが、掘起されて、保護の爲めといふので絶頂より七八十米突も低い碧霞元君廟の中に移されて、容易に人に移動されぬ樣壁に嵌め込まれた、是が秦碑の難有迷惑であつた。

山頂の草の中に在つたならば、もしは野火に燒かれたとしても三分や五分間の弱い火ではビクとも爲ないたとひ字面は風雨に打たれて漫滅しても其全形を失ふ、ことは無かつたで有らう、不幸にして餘計なお世話をやかれて碧霞元君廟に移し置かれた爲めに、大なる災を受けたのである。毛利元智が伯爵になつて罵られる樣なもの、甚しい損であつた。

今より百七十五年前、淸の乾隆五年六月に碧霞元君廟に火事があつて、屋壁と共に此碑も焚け落ちて所在が判らなくなつてしまひ、爾來數十年金石家の痛惜する所となつてゐた、其後嘉慶年間に至り趙といふ老人があつて、彼が數十年前泰山の玉女池の石垣を修理した時に、或る石の缺に文字が有つた樣に思つたといふ事を話した、之が手蔓と爲つて縣令の汪といふ男が、當時泰山の麓にゐた蔣といふ學者に若しや其の石片が秦碑の殘缺ではあるまいかと語り、蔣は柴蘭皐といふ書生と共に泰山に上つて件の玉女池の中を搜索することゝなつたが遂に石片二個を獲た、其文は十字で正に舊拓の二十九字中の一部分であつた。即ち七十八年目に再び此碑が――一部分にもせよ――世間に現はれたのである。右發見後一時は絶頂の東嶽廟の壁に嵌めて置いた、其後其の壁が崩れたので更に之を取出して山麓に在る岱廟――泰山の神の本社――に保存することとなつて、今仍ほ岱廟内の環詠亭の中庭に、龕を構へて其中に嵌め込み、特別の保護をしてある。是が泰山に於ける最古の人工的遺物である。

前に言つた泰山の玉女池――此の名詞を初めて予は見た時に、中禪寺湖又は芦湖せめては猿澤池といふ様な碧潭を想望してゐたのだつたが、現に泰頂を窮めて其實地を看て一笑を催うした、といふのは玉女池は碧霞宮の壁外に在る小い井戸だつた、井戸緣は圓くて直徑が一尺八九寸、深さは三四間も有るであらう、つまらない井戸であつたのである。支那の書物を見て文字に依つて吾々が描いて居る所は屢々大きな見當違ひがあるものだ、誠に百聞は一見に若かず。處で此の井戸の中から七十八年振りに秦碑の残石が現れたといふのは餘り話が都合好過ぎるといふ氣がする。揑造附會迎合は由來支那人の最も長所である、或は汪縣令と蔣生が一夜快飲の末に、一番かついでやらうぢやないかと茶目氣を出したのかも知れない。詒くに道を以てすれば君子と雖一杯喰はされる。相當の學識あるものが周密な注意を以て贋造をやつた日には大倉喜八郎君ならずとも、コイツは乙でげす掘出し物でげすと擾まされることは有勝ちである。段々調べて見れば秦碑と彼の無字碑とは石質が類似して、刀を受けさうも無い堅緻な質だといふ、其ならば現存の十字の殘石を鑑査して無字碑と質を同うするか否かを檢するも亦、其の眞贋を定むる一方法であらう。字形の類似の如きは怎麼にでも出來ることで格別



泰山經石峪――泰山の山腹に在り、河床の大磐石に金剛經を刻す、一字各一尺餘、字は北齊時代の刻なりといふ今に一千三四百年を經たり、（玄耳氏の一行拓工を役して石摺を拓せしむる處）

の證明とは爲らない。

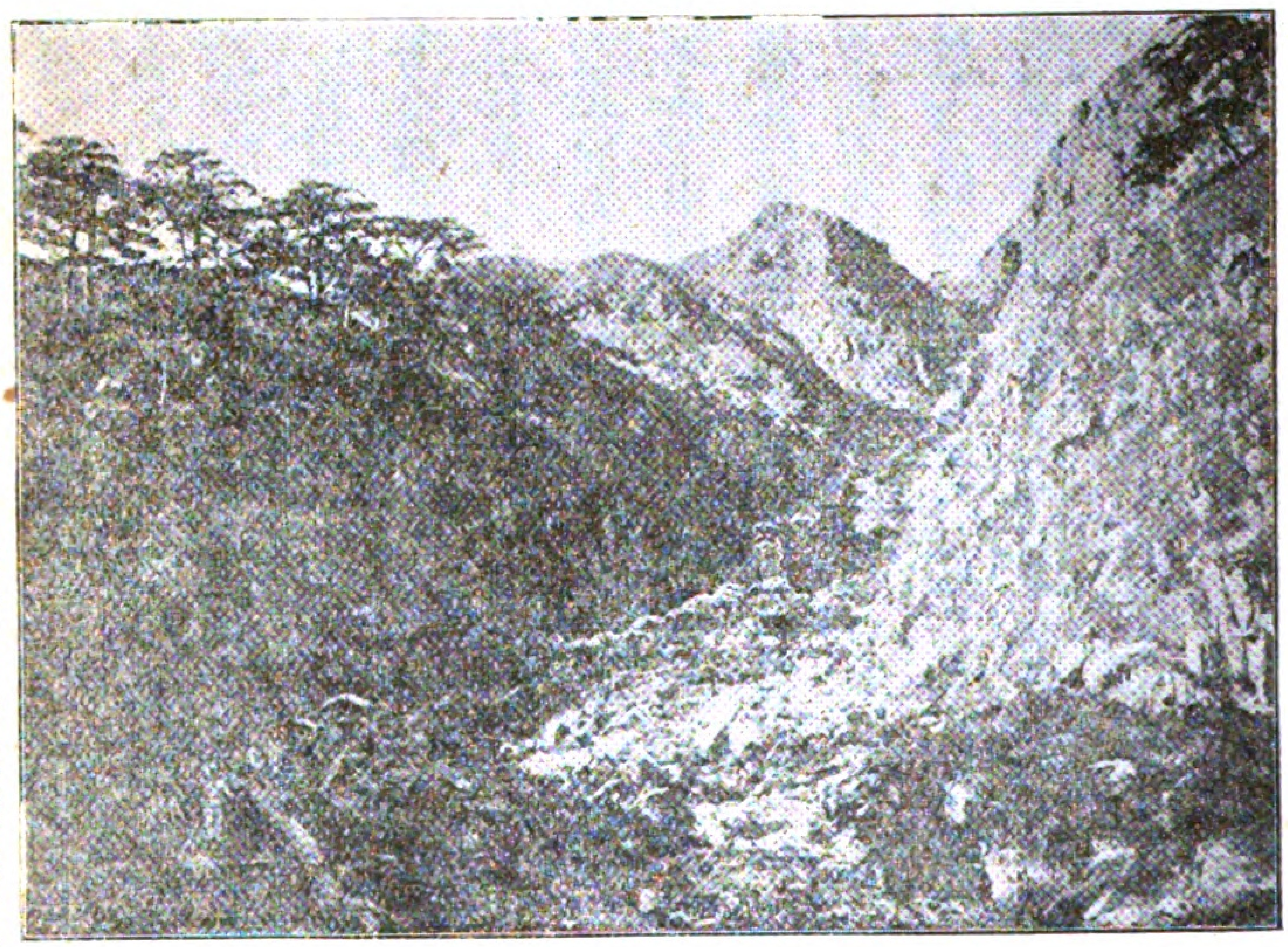
泰山の頂上に在る古蹟の中で最も完全に保存されてあるのは、唐の玄宗皇帝の紀泰山銘といふ大々的の刻字がある。秦の始皇より八百年の後である。玄宗皇帝は楊貴妃との戀愛關係を以て好く知られてゐる、虚榮心の強い、唯物的の帝王として、秦の始皇、漢の武帝羅馬のネロ乃至は今のカイゼルと共通點の多い男である。秦の碑は僅かに八九尺の小さい石を立てたのであるが、玄宗のは規模が大きい、絶頂附近の聳立せる巨巖の一面を削つて碑と爲したのである、此の式の作り付けの天然の岸壁を應用した石刻を、磨崖碑と稱するのである。紀泰山銘の碑面の高さが約三丈三尺、幅が約一丈六尺である、字數約一千字、碑額の字は方尺、本文の字が方六七寸、玄宗の親筆だといふ、極めて雄健な隷書である、下部の百字計りが明代に補刻せられたのみで、其他は儼然として唐時の原態を存し今に約千二百年を經てゐる。

此の磨崖碑の在る處は、左右に長く五六町、屏風を立てた様に列つて居る。高い處は六七丈低くても二三丈は有る、其の巖石の屏風に満遍なく文字が刻つてある、唐宋以後明清、民國の今に至るまで登山者の記念である。宋の眞宗皇帝も漢武帝、唐玄宗に劣らぬ虚榮にあこがれ、神仙を崇拜する事に於て有名である、頗る泰山を尊崇して種々の事蹟を歴史に止めて居る、此皇帝も屏風巖なる玄宗皇帝の紀泰山銘の右の方に述功徳銘といふ大きな磨崖碑を作つた、其後七百年にして清の乾隆帝が又此の巖の一部に詩を刻せしめた、是も亦大きな磨崖碑である、乾陵帝の詩碑は完全に殘つてゐるが、眞宗のは碑額だけ殘つて其の下部には明代以後の者がめちや／＼に色々な文字を刻つて了つた。其外幾多の帝王名臣鴻儒より無名の遊覽者に至るまで種々の文字を刻したのであるけれども歳月の爲めに漫滅するを俟たず、古いのは大概刪去られて後人の文字が刻せられる、其後人のも亦更に後人の爲めに刪り去られるのであらう。

其は此の處に限つたことではない、山中到る處の刻

石が皆同じ運命を免れない、或は又山中に住居する石工等が見場の好い處の故刻を削り平げて置いて新なる註文を俟つてゐるのもある。特に有名な刻字で常に拓本屋の需要があり、土地の拓工が屢々拓字に來る所のものでなければ此の禍を免るゝことは出來ない。

□泰山の麓の泰安城内に岱廟といふ大きな社がある、泰山の神を祀つた所で其規模の宏大なことは山東隨一であらう、正殿の大きさ、露臺の廣さなど曲阜の孔子廟にも優つてゐる、併し修繕が行き届かぬので今は頗る頽廢して了つた。泰山の道士は山上には案外少くて此の岱廟には多い、其道士の住んで居る道院の一部に環詠亭といふのがある、周圍の煉瓦壁に數百の石刻碑板が嵌め込んである、唐宋以後の見事なものが多い、中庭には最も貴重な秦碑の殘石二片が特別保護になつてゐることは前に記した通り、尚岱廟の境内には歷代の帝王が泰山を祀つた時の馬鹿氣て大きな碑が幾座も有る。



泰山南天門——巖山の凹みに在るは南天門なり、之を登れば絕頂也、急峻なる阪路に點々として屋根の如きもの見ゆるは青島軍司令官大谷中將の一行が轎に乘りて下山するなり

其外に奇製を以て有名なる鴛鴦碑といふ唐碑が、岱廟より十町計り泰山に登つた所の路傍、老君堂の中の芋畠に邪魔さうに立つてゐる。此他泰山に於ける碑板題記を網羅したならば優に一大冊を爲すに足る、實に泰山は古今文字の一大展覽會と謂つて可い、終に予は唯左の一大磨崖を記載するに止める。

泰山に登ること三十町にして斗母宮といふ尼寺がある。寺の後に瀑布が懸つて一寸風景の好い處だ、瀑より數町上流に經石峪といふ處がある。泰山では何谷何溪と言はず多く峪といふ、經石峪と呼ばれるのは此の谷の底を爲す數千坪の廣い平たい花崗岩質の巖に金剛經が刻つてあるからである。多分金剛經の全文三千餘字を悉く刻したものであらう、現に存して居るのが九百八十餘字ある、一字の大さが一尺餘あるのだから現存の分だけでも實に一大偉觀である。字體は八分とも隷とも楷書とも言はれる古勁質樸な一種の雅味を具へたもので、淸朝に至つてから頗る世人の賞玩する所と爲り、其一字々々を別々に拓し集めて隨意の句を作り――多くは對聯として裱裝し、客室書齋の壁などに懸けたのを見る。字の筆者は不明であるが徂徠山や其他に於ける佛名、經名又は經文などの磨崖刻に比し字體其他の點から、北齊時代(約千三百年以前)のものと推定せられてゐる。此時代には佛教が支那の各地方大流行で達磨大師が渡來したのも略ぼ此の頃である。各地に佛像を造り塔を建て佛名佛經を刻石することが盛んであつた、近き百餘年來此等の刻石が續々發見せられ、從來の碑帖文字に厭いた目に一新刺激を與へて、一時六朝書體の流行を來し、今尙ほ餘勢を保ち日本でも後ればせに一部の流行を見るに至つた。

泰山に上つて驚かれるのは刻石文字の多いとの外此の險阻な巖だらけの絶頂に意外に多く人家殿堂の多いことである。絶頂に近い處に南天門といふ宏壯な樓門がある、其下は十八盤と言つて極めて急峻な石の階級が五六町も續いてゐる、下から此の南天門を見上ぐれば、まるで直立した梯子の上に在る樣で迚も登れ相に無い、門口に遙かに空が透いて見えるのが鏡を懸けたやうである。石段の一方は谷である。石段と谷とを挾んで兩側は幾十丈の絶壁、大きな鋭い巖が今にも墜ちかゝり相である、此路を轎口に乘つて上る、危い怖ろしい、一目と下が見られるもので無い、歸りとなると更にひどい、慣れきつた轎夫が飛ぶが如くに馳せ下るのである、飛でも無い所に來たものだと後悔しながら、

據なく觀念を定めるの外は無い、其實、轎から落ちて怪我するなどといふことは千に一も無いのであるが、予は二度目もやはり始と同樣に恐ろしさは滅じなかつた。此邊の岩壁にも無論石刻がある。『山險心平』と題してあつたのが小面憎く思はれた。支那人の紀行に『自ら賁育と謂ふと雖亦復た氣を奪はる』とある。併し景色としては第一等だ、南天門から下を望めば羊腸たる盤路が遠く下界の霧に入つて消える、よくも登つて來たものだと思ふ。山の麓は路傍に柏樹が植ゑてあるが、中腹から八合目邊までは松ばかりである、（其から上は殆ど樹は無い）嵲ばかりの險阻な山に生えてゐる松だから木振枝振の面白いことと言ふまでも無い、山がまた『泰山巖々』と大古しから通りものになつてるくらゐだから、あらゆる皴法を盡した奇狀が皆玆に備つてゐる。文人畫の繪そら事と思つたことは皆寫生であるといふことが點頭される。

南天門を入れば天街といつて三十戶ばかりの人家がある、飮食店も旅店もある、博奕もやつて居た。春の頃には何十萬人といふ參詣者がある山だから、其頃の賑かな事各地方より幾十百の賣笑婦まで集つて來るといふ。

泰山に頻繁に登つたのは清朝の天子であつた、唐熙、乾隆兩帝の遺蹟は非常に多い、碑も澤山ある。明朝以前には磨崖の外に碑——他所より運んで立てた碑といふものは秦碑の外になかつた、明朝に至つて碧霞元君廟に立てたのが第二のもので、非常の勞力と費用とを要して居る、當時の記事に依ると、何しろ此の險阻な阪路だから、何百人掛りでも一日に數十步しか登れなかつたとある。然るに明末より清朝にかけて緞々と碑が立てられた、今存してゐる分でも南天門以上に十基以上あるであらう。

清碑は損じながらも殘つて居るが、清朝の行宮は一も殘つて居ない、帝王の威力のみで建てたものは案外に滅び易いが、其他信仰の繋れる建築物は次ぎ〳〵に重修されて壯嚴を保つてゐる。絕頂の玉皇廟の外に東嶽廟、靑帝宮、孔子廟、碧霞元君廟など孰も堂々たる

ものである、殊に泰山繁昌の中心たる碧霞元君廟の如きは最も美觀である、五千有餘尺の山上にして、幾個の斯る壯嚴な殿堂の聳えて居るといふことは日本ならば日光の外に比すべきものは無い、遠望に於ては支那建築の事だから日光より遥かに壯嚴である、(近づいて仔細に見れば格別の美術的價値は無い)裝飾の色彩が金碧丹朱のけばけばしいのであるから恰も仙宮を望むが如くである。

泰山に關する記述は容易な業では無い、山岳に關する事の外、支那の古い歷史——政治的、經濟的、宗敎的——文學的の各方面に密接な關係を有してゐる、之を中心として研究したならば支那の文明史の大部分を包含するものである、他の一面からは山東經營對支那政策の一楔子をも得られようと思ふ、一の游覽地としても世界に類の少い所、特に日本人には豫備智識があるから歐米人よりも深い興味を覺えることである、青島より一日半、山麓より六時間轎に安座して登ることの出來る山である、予は各方面の人士に此の登山を勸告したい。

「青島に一年近くも居つて各方面のことを觀察研究して見たが、獨逸人の研究心の盛んで、其研究の行屆いた事は實に素晴らしいもので、どの方面を見ても、日本人の新たに手を着くべき餘地は殆んど殘されてゐないやうに思はれる。只一つ、泰山の研究丈けは、日本人が獨逸人を凌ぎ得ることが出來るとの自信を得た。それで僕はこゝ一二年を期して泰山の研究を公けにして歐米人を驚かしてやる」と本文の筆者澁川玄耳氏は泰山に二回登つて來て今熱心にいろいろの材料を集めつゝある。

(一記者しるす)

妻と娘とに對する僕の態度

青柳有美

女優に三千圓の Schopenhauer

言行一致、知行合一は望ましい事だが、滅多に實現し得られるもので無い。善に於てのみならず、惡に於てすら猶且つ然りだ。人殺し、放火、强姦、高利貸—何んでも行つてのけさうな事を放言する男が、實際は口の半分ほどにも行かず、至つて品行方正で、蚤一疋殺すのにも躊躇し、野火すらも放け得ず、賣り物買ひ物の賣女に觸れてさへ顏を紅くし、無利子で貸した金錢の催促にだに逡巡する例は、世間に能くある。

シヨウペンハウエルは、解脱の道は死にあると說き、自殺を責むる者を罵つたほどの男だが、實際は至つて死ぬのを怖がつた臆病者で、夜中に地震があつて死んでは大變だからと、決して二階や三階に寢室を設けず、何時でも第一階にばかり寢たものだ。又、夜間强盜に襲はれでもして、生命に別條を生じては大變だからと、臥せる時には屹度枕の下に一挺のピストルを忍ばせて寢んだといふことだ。のみならず少しでも傳染病らしいものが流行しかけて來ると、直ぐ住所を他の土地に轉じたものである。

シヨウペンハウエルは又、年百年中女を罵るのを商賣の如くに心得、文明の墮落も政治の腐敗も總て女によつて將來せられるかの如く囃し立てたものだが、其實美しい女優に可愛いのが一人あつて、シヨウペンハウエルの、歿くなつた後に、其遺言狀を調べて驗ると日本貨幣で金三千圓に相當する額を、著述によつて貯蓄して置いた遺產のうちから、その美しい女優に贈つて吳れろと、遺書してあつたさうだ。

言行の不一致、知行の不合一は、豈に啻、一人のシ

ヨウペンハウエルのみならんやだ。總ての人が皆な爾うである。善に於てのみならず、惡に於て猶且つ然り人間は皆な矛盾の塊だ。青柳有美も亦矛盾の塊である。朝から晩まで、正月の元日から十二月の大晦日まで、女を惡鬼羅刹の如くに罵つてるが、彼は存外の女子崇拜家で、少し知慧があつたり技倆があつたりする女を見ると、忽ちにしてグニヤリと參つてしまひ、現に「女優排斥論」を高唱する一方に於て、帝劇付幹部女優中で最も評判の惡るい、最も人氣の無い宇治龍子の技藝に感歎し、目も鼻も無いまでにトロリとなり、奉るに「先生」の敬稱を以てし、一向に持ち榮のせぬ提灯を持つて廻り、得意の鼻を蠢めかして居る。自家撞着、言行不一致の甚しいものは、實に彼である。この青柳有美が家にあつて如何に其妻に對し其娘に對するか――之を僞る處なく告白さして、初春の御祝儀に、一つ大に笑つてやるのも一興だらうと、中央公論から提出せられたのが、本篇の標題である。いかさまネ!?　それも新年の御笑草として面白ろからうよ。

噓僞り無き告白を要す

帝國民法によつて重婚は明に禁止せられてあるので、僕には、一人より外に妻が無い。妻は僕よりも一歳の年上で、大正五年まさに四十五歲。容貌は醜い方で、稍々巨軀。教育は明治女學校高等選科卒業であるが智慮に乏しい方である。宮城縣涌谷在の生れ、僕と結婚したのは、今より十九年前。二男二女を擧げた。如何にも葬式の式場で讀まるゝ履歷めくが、之れも致方の無い事だ。長女は十六歲。寺田勇吉氏の校長たる精華高等女學校二年生で、近視眼の四度、容貌是又醜い方。次女は十歲で、四ツ谷第四小學校の二年生。容貌は尋常。僕が是より告白せんとする處には、少しでも噓があつてはならぬ。些少の僞り或は誇張をだも許さぬ。如何に僅ばかりの噓りたりとて其うちにあるとすれば、この一篇は、全く無意味のものになつてしまふ。僕は天地神明に誓ひ、又裁判所の法廷に於ける如く良心にも誓つて、たゞ眞實のみを申立てる事にする、眞實を告白する處に多少の意味と興味とを存するだら

うと思ふからだ。眞實を措けば、全然無價値のものになる。申さば一家の私事——讀む者に利益を與え得るでも無ければ、國運の進展に貢献し得るものとも思はれぬ。

學生時代の僕は、相當の多辯家であつたが、學生時代を終らうとする頃の僕は、寧ろ沈默の人たるに近かい者になつた。是れは、同窓中の一人に詭辯に巧みな男があつて、その男と何を言ひ爭つても、事毎に必ず言ひ敗されてしまふのに或る日深く感ずる處があつて辯舌では到底、他人を說服し得ぬものと悟つたからだ。僕は、家にあつても、家の中の人々と談話を交換するのが、厭やで〳〵ならぬ。殊に、妻と話をするのが、何よりも厭やである。家に在る僕は、殆んど絕對の沈默家である。僕が妻に言葉を懸けるよりも、更に厭やなのは、妻に言葉を懸けられる事だ。世の中に何が蒼蠅いと云つても、妻に言葉を懸けられるほど蒼蠅いものは無い。何を聞かされても「ウム……ウム」、何を問はれても「ウム……ウム」——「ウム……ウム」の持ち切りで、それ以上の言葉を、僕は滅多に妻に對して發する事が無い。僅に發する他の言葉は「煙草！」「お茶！」「衣物！」「御飯が出來たか」「湯に行く仕度をして呉れ」「カラー！」「ネクタイ！」くらゐのものだ。

僕の眼からは、夫婦が長火鉢を仲にしたり丸火鉢を圍んだりして、如何にも助平ッたらしくボソ〳〵談り合つてる樣ほど、滑稽に見えるものは無い。旣う相當の年配になつた夫婦が雙方肩を並べて、銀座通りや其の他の盛り場をブラ〳〵して居るのをも、能く見受けるが、そんなフヤけた光景を覩る每に、僕は、何が面白ろくつて良い齡をしながら恥しくもなく、男女揃つて步けるものだ！と感歎の情を禁じ得なくなる。年が年中、一緒になつて暮らす男女が、肩を、摺れ合はせ足並を揃へて外出して試たところで何が面白い？情夫情婦の間柄ででもあらば格別、夫婦が一緒になつて外出したところで、穩哲も無いことだ。僕は、什麼しても妻を同伴して外出するやうな御目出度い氣分になれぬのだ。妻以外の惚れた女とならば、同伴しても面白

ろからうと思ひはするが。

妻との同棲は本望に非ず

その昔、希臘の**ペリクレス**時代には、夫婦に同棲を許るさなかつたものだとやら。我が邦でも上古には夫婦が同棲しなかつたらしい。僕は敢て、**ペリクレス**時代や神代の昔に憧憬れるわけでも無いが、妻と同棲するのを愉快なものだとは思ひ得ぬ。たゞ便利なものだと思ふ丈けだ。いろ〳〵と身の邊の用を便じてくれるので便利なのだ。妻なる女が同じ家の内に居るといふのが愉快を與へるのでは無い。僕は、結婚してから既に十九年四人の子まであるが、此間同棲生活を營んだのは、六七年にも足るまい。一昨年の秋以來、東京で同棲生活を營むやうになつたが、今日でも斯の感じは全く拔けぬのだ。成らう事なら、事務所から家に歸つて後も妻には僕の居る室内に座つて居てもらひたく無い。机に向つて讀書したり原稿を書いたりする時に、妻に來られて横に座られては、魔術を全く破られてしまふ。一種の不愉快を感ずる。かく感じても、妻に室外に出でよと命じたことは、未だ曾て一度も無い。そのまゝに放つて置く、僕の妻に對する態度の全豹はこの一班に顯はれて居るかと思ふ。

能きるものならば、同じ室を夫婦の寢室にしたくもないのだ。別れ〳〵に寢ねたいと思ふ。影の形に副ふ如く始終妻につき纏はれるのは、僕に取つての苦痛である。頸の周圍にグル〳〵繩を卷きつけられてるやうな氣がする。たゞ用事のある時だけに姿を現はしてもらへば、それで僕は大滿足だ。成るべく妻を身邊より遠ざけ、妻と言葉を交はさずに濟まされる工夫もがな、之は僕の僞らざる心情である。食事の時など、妻が乾度給仕してくれるが、妻の顏を正視するのを僕は不愉快に感ずる。成るべく妻の顏を見ぬやうにと、下を向いて食事する。妻が如何に話しかけやうとして來ても、僕は決して之に乘らぬ。努めて之を避けやうとする。一たび妻の話に乘つて相槌でも打てば、それが先例になつて家の中の事が面倒になり、一々話に乘らねばならなくなるのを恐れるからだ。職業の事で色々

面倒が多く、骨も折れるのに、家に歸つてからまで、家事といふ事務を見ねばならぬやうでは、如何に尻の毛が女より一本半多い男でも、到底やり切れたもので無い。死せるものをして死せる者を葬らしめ、家の事は妻に任かせて一切嘴を入れぬのが、妻に對する僕の態度の一部だ、たゞ妻が氣付いて居るまいと思ふやうな事を、一ヶ月に一二度、それも頗る簡單なる三四語で、一切說明をヌキにして命令するばかりである。僕は、苟も妻として一家の主婦たる任務を負ふ女が、家の中に關する事で、良人の智慧を借らねば所理が能きぬといふやうでは、妻として三文の値打も無いものだと思ふ。

一切が秘密主義なり

昔から妻を稱して「奥樣」といふ慣しがある。誠に結構な言葉だ。妻は奥樣である。讀んで字の如く、須らく一家の奥に引つ込んで、表向きのことに干與すべきで無い、妻は家の中の事だけを仕末して、日を送つて居れば、それで可いのである。然し、表向きの事に就ての知識が發達して來れば、何んの彼のと、それに口を出したり奔走したがつたりして、之に干與するやうにもなる。妻が表向きの事に干與すれば、それで何か効果の擧るものかといふに、毫も擧らぬ。徒に事を紛糾せしめ、鳴物入にするばかりだ。さまで騷がずに濟む事までも、妻が一たび其仲に這入つたとなれば、必ず大騷ぎになる。島村抱月君と松井須磨子君との間の問題の如きも、細君が之に干與さへしなかつたら、あれほどに騷がしくならずに濟んだものだ。妻が、家の外に於ける夫の動靜に關し彼是れと口を出したり、足を動かしたりするほど物騷なことは、世の中に又とあるまい。

僕は妻に對し、家事上以外は一切を秘密にするのが主義だ。一身上に起りつゝある、若くは起らんとする變動等に就て未だ曾て語り聞かした事がない。職業上に關する事などに至つては、素より一言も之を妻の前で口に出さぬ。毎日々々朝の八時頃から家を出て、家に歸るのは夜の十二時近かくにもなるが、一日何處を如

何步るいて來たか一日何をして暮したか、芝居を見たか、友人を尋ねたか、美しい女に遇ったか、賢い女と談つたか、珍らしい見聞があつたか――そんな事を妻に物語つた例は絶對に無い。單に、僕の一身と共周圍の事情を秘密にするばかりでなく、僕以外の人に關する事も、一切之を秘密にし、妻をして知らしめぬやうにする。妻が自分の自由意志から、尋ね廻つたり探し廻つたりするのは素より自由である。敢て僕の干涉する處では無いが、若し僕が秘密にして居ることを强ひて僕に問ひでもしたら僕は言下に「そんな女房は僕に不必要だから、即刻出て行つてもらはう」と言ひ放つ丈けの覺悟を僕は常に持つて居る。妻も恐らく、僕に斯る覺悟があるのを知つてるだらう。近頃では、家の外に於ける僕一身の動靜や其他の人々の動靜に就ても、僕に尋ねるやうな事を絶對にし無くなつた。僕が斯る秘密主義を取るやうになつたのは、妻の定めし不滿足に感ずる處だらうが、僕は經驗の結果、斯く秘密主義を取るのが、夫婦の間のゴタゴタを尠くする所以だと覺つたから、この主義を嚴守するのだ。

初めよりの秘密主義に非ず

僕とても十九年前、結婚早々の頃は、何事も餘り隱さず、之を妻に語り聞かしたものだ。お座並に「夫婦の間に秘密があつてはならぬ」と考へたからである。然し、經驗を積むに隨つて、家の外に起つた事や、僕一身上の事などを妻に語り聞かせたところで、妻にも不利益、僕にも不利益――一擧兩損であるのに氣が付いたのだ。妻だからとて、如何に愚鈍でも人間の皮を被つて居る以上は、聞けば必ず之に動かされる。自分の利益や幸福に矛盾する事だと思へば、ツベコベと愚痴を並べたり、スネたり嫉妬たりするやうにもなる、併も、何の効果が擧がるでも無い。お互に氣を惡るくするばかりだ。それほどなら、初めっから何も言はず語らず、一切を秘密にして置きさへすれば、天下泰平、知らぬが佛で、妻も氣を惡るくせず、僕も厭やな思ひをせずに濟む。妻に隱くし立てをすれば、妻は能く「何んでも打ち明けてさへ下されば、私も安

心しますから、決して彼是れ申上げません」なんかと體裁の美い事を云ひたがるものだが、天下の夫たるもの決して妻の斯る甘言に釣り込まれて、一身上の事や職業上の事や他人に關する事を、其妻に打ち明ける如き輕擧に出づべからずだ。打ち明けるが最後、それは〱大變な事になる。ツベコベの連發、愚痴の連發、嫉妬の連發、スネリクネリの連發――こんな事ばかりの鎮撫に追はれてしまつて尊い男の一生を棒に振らねばならぬやうな憂き目に遇ふは必定だ。一切を秘密にせよ――是れ僕が妻に對する態度の重要なる一部である。

妻が時に賢しさうな顏をして、「かく〱せられては如何です?」などと、助言らしい事を申出でる場合もあるが、僕はその事の是非善惡を考察するまでもなく、妻の申出づる助言となれば、言下に排斥して一切之を受付けぬ事にして居る。如何にも理不盡の如くであるが、斯くせねば妻は御してゆけるもので無い。一たび、妻の助言らしい申出でを取上げる先例を作つてしまへば、妻は好い氣になつて種々勝手な寢言を持ち込み、必ず其夫を煩はすやうになるものだ。僕は之が厭やだのである。僕の爲ること爲す事に一々賢婦良妻面をして口を出されては、蒼蠅くつて兎てもやり切れたものでない。一たび取上げれば、僕の妻にも必ず斯る傾向を生ずるに至るべき事を、僕は火を睹るよりも明かに知つて居る。妻の面の中で、最も厭やな面は、フクレ面と賢婦良妻面とである。フクレ面を視るのが厭やだから、僕は家以外の事を一切秘密にして妻に知らしめず、賢婦良妻面を視るのが厭やだから、妻の申出では理があつても一切受付けず、言下に之を排斥してしまふのだ、但し、妻の申出でた事で、理ありと思つた事は、その時より當分時日を置いて妻が既う忘れた頃になつてから、恰も僕の發意なるかの如くにして、之が實行を更めて妻に命令する場合もある。

妻よりも兩親に味方す

僕には、兩親がある。父は本年七十一歳。一種の人傑で非凡な男であると僕は信ずるが、仕へるには非常に難しい人だ。頗る義理堅い處のあると共に、一切萬

事を論理責めで批判し、其上に又、到徹せる皮肉な批評眼を有し、他人の穴探しに頗る妙を得、弱點やら缺點やらを發見すれば、發見し次第遠慮會釋なく、其人の面前で之を指摘し、皮肉な言辭によつて其人を冷罵するのが癖だ殊に數年來精神の平衡を失つてるのでこの癖が病的傾向を帶びて發揮せられる。僕も明治二十七年京都の同志社を卒業する前後には、父の得意な此の鋭い罵倒を日夜間斷なく浴せかけられて、一時、氣が逆上したくらゐのものである。僕が妻を迎へたのは、僕と父との間を圓滑にする具に妻を供したいと思つたからで、この女ならば父の氣に入るだらうと今の妻を迎へたのだが、迎へて試ると什麼も氣に入らぬ。妻も隨分之には力めたらしい。然し、氣に入らぬ。追々と衝突が激しくなるばかりであつた。その結果友人が色々斡旋して、一昨年まで妻子を父母と共に郷里に殘し僕は單獨生活を名古屋に營んで居つたところを、僕の上京と共に、父母のみを郷里に殘して妻子を東京に迎へ、僕は之と同棲せねばならぬ事になつたのである。母は至つて溫良で、イロハのイの字を何う書くものか、一二三の「一」は何んなものであるかをさへ知らぬほどの無學者なるに拘らず頗る聰明の女である。決して他人と衝突する如き傾向の無い人だ。それが又什麼したものか猶且妻との間は圓滑に行かなかつた。畢竟、妻が智慮に乏しい結果だらうと思ふ。

僕は、結婚して一ヶ月ばかり妻と郷里に同棲した丈けで、單獨上京したのだが、初めのうちは、妻を獨り殘して置くのを氣の毒なやうに感じて、屢々手紙をやつたり、又、少し高い給金を取れるやうになつてからは、小使錢を妻に送つたりしたものだ。然し、暑中休暇などに歸省して樣子を見た結果、僕より妻に手紙を送つたり送金したりするのは、妻をして「己れには亭主があるぞ」とか「亭主の妻で舅姑の嫁で無い」とかいふ如き分立的精神を起さしめ、一家の平和を害する所以であるを發見したので、妻より如何に度々來信があつても妻には絕對に返信せず、又送金もせぬ事にしてしまつたのである。歸省をしたり、又職業上の都合

で一年か二年か郷里に同棲した事のあつたりした時には、妻は屢々僕をして妻の位置に同情せしめんとしてさま〴〵の泣言を僕に申出でたものだ。然し、如何に妻が泣いたりスネたりして僕を動かさうとしても、僕は未だ曾て妻に同情を表した事が無い。又、實際に於て同情し得ぬのである。僕の同情は何時でも母に向つてゐる。あの温良にして聰明なる母と調和して行けぬのは、妻に至らぬ處が多く、讀んで字の如き愚妻だからだと思ふ。父は大抵の男女が太刀打の能きぬ皮肉屋であるに相違ないが、既に七十の病人である。病人を對手にして彼是れと腹を立てるのは、猶且妻に至らぬ處がある爲めに相違ない。親と嫁とが衝突した時に妻に同情して父母を非難する如き男は、餘程鼻の下の長い男だらうと、僕は常に思つて居る。若し、父母殊に母と妻と、孰れが多く僕を愛するかと問ふ者あらば僕は今でも言下に「父母殊に母だ」と答ふるに躊躇せぬものだ。妻の愛は敵本主義だが、親の愛は無私である。僕は何時でも妻よりは親の味方をするものだ。

細君と敬稱し足下と呼ぶ

僕は、夫として妻に對し隨分、殘酷な、奥歯に何か挿つた處のあるやうな男で、妻に對する態度には、毫も打ち明けた處のない、徹頭徹尾、妻を見くびつてる措置にばかり出でる人間であるが、妻に對して用ひる言語だけは實に鄭重を極はめたものである。他人に妻の事に就て談る場合があれば、稀に「女房」と稱ばぬでもないが、概ね「細君」と稱ぶを例とする。家の内で、何か用でもあつて、妻を呼ばねばならぬ場合にも「オーイ！」とか「コラ！」とか失禮な呼び方は決して致さぬのだ。「細君……細君」と連呼するのを常とする。又、相對して言葉を交はさねばならぬ場合に臨んでも決して「オマエ」などといふ如き卑賤に視た言葉を用ひず「足下」と呼ぶことにして居る。僕は妻に對するのみならず、弟や子女たちを呼ぶにも總て斯の「足下」の語を用ひるのだ。稱呼に於てさへ斯く丁寧な禮儀を盡くすほど故、僕は結婚後既に十九年にもなるが、妻を叱咤つたといふ事が、一度たりとて無いくらゐのものだ。

僕は、幼少の頃より餘り多く父に叱咜られ續けて來て叱咜られる事の苦痛をシミ〲と實驗して居るので、他人を叱咜るといふ事が實に厭やだ。他人の叱咜られて居るのを見るのさへ厭やだ。妻に對しては、或は今日までに一二度叱咜つたらしいやうな事をしたかも知れぬが、子女等は殆んど一度も叱咜つた事がない。ただ、齡が五六歳にもならぬうちに、駄々を揑ねて餘り長く泣いてるのを見ると、その場で殺してやりたいやうな氣になる事がある。

僕が妻より受くる不快なる感じは「あゝ！馬鹿な女だな！」と僕をして思はしむるやうな措置を妻が取つた場合と、少しでも嫉妬らしい氣配を見せた時とである。僕が妻に對して要求する處は「賢くあらむ事」と「嫉妬せぬ事」との二つである。昨今では妻も內々嫉妬てるか何うかは知らぬが、口や擧動に出しては嫉妬ぬやうになつた。然し依然として賢しく成り得ず、一寸した事に際會しても、忽ち途方に暮れてウロ〱する。之が時々僕をして不快を催さしむる種になる。殊に、同じ事で同じ馬鹿サ加減を二度繰り返へされると、僕の不快は何時でも其極度に達するが、敢て罵詈するでもなければ叱咜るでも無い。澁ツ面をして益々無言になるか、欝憤を散する爲めに、器物を破壞するくらゐのものだ。妻の爲に何か買つてやつたといふ如き事は結婚後一度も無い。

之を要するに、僕が僕の妻に對する態度を一言にして曰へば、敬して遠ざけ陽に揭げて陰に仰へるにある。

娘とは如何なるものか

僕が子女に對して嚴守する一つの主義がある。それは、子女の身體には指一本でも我が身體を觸れぬといふ事だ、四人の子女の身體には、今日に至るまで、僕は一度でも觸れたことが無い。素より抱いたりした覺えは絕對に無いのである。これは、我が身體を子女の身體に觸れると、必ず僕が其子女を可愛くなつて、之が爲に時間を費さしめらるゝやうになるのを恐れるからである。又子女を可愛がるやうになれば子女が如何

しても荷物になつて來る。僕は、それが厭やだ。子女を同じ家の内に住つて暮らす友達として視て居りたいのである。隨つて、世間の親等が其子に對するのと、僕が僕の子に對するのとは、心情の根本に於て違ふ處があるだらうと思ふ。僕には、僕の娘と隣の娘との間にある差別が解らぬ。たゞ同じ家の内に住んでるので、僕は近隣の娘よりも僕の娘の事に就て多く考へる丈けの事だ。長女なぞとは、一年中のうちで、言葉を交はさぬ日の方が、交はす日よりも遙に多い。偶々言葉を交はしても「試驗か」「今日は何故休みか」ぐらゐのものである。娘に何んな衣物を着せて試たいの、這んな髮を結はして試たいのなんかといふ事は、未だ曾つて考へもしない。近視眼の四度で眼鏡の緣が度々折れるのを見たものだから、僕が偶々眼鏡を新調する序に、十四金の眼鏡を新調してやつたことのある丈けだ。素より、何を買つてやりたいなぞと思つたことは無い。

たゞ容貌が醜くつて近眼鏡四度の女では、之を將來人妻にして婚禮さしても、妻に迎へた男が非常な災難で、定めし迷惑する事だらうと思ふから、良妻賢母に仕立てあげず、高等女學校を卒業したら、女子高等師範學校にでも入學さして數學を專攻せしめ、女數學者にでもしやうかと考へてるくらゐのものである。こんな事を考へてるだけに、時偶「足下！學課のうちで何が一番難しいか」と問ふやうな事もある。その時に「地理だ」と答へるのを聞けば、「それならば數學がやれるな」と思ひ、一種の滿足を覺へるのが親心とでもいふものだらうか。次女は本年漸く十歲だ。之に對しては別に態度もヘチマもあつたものでない。「小さな女の兒が家に居るのだな」と思つてる丈けの事である。然し、容貌は尋常だから、豐竹呂昇にでも弟子入さして、女義太夫にしたら如何だらうなぞと考へることもある。

要するに、二人の娘に對する僕の態度は、男の子に對する態度と毫も異る無しだ。娘か女であることは、未だ々々充分僕に會得せられて居らぬ。恰度、月の滿ちぬ胎兒に、男女の別が無いやうに、子女も青春期に

達しでもせぬと、僕の如き變竹林な父の眼には、男女の別が認め得られぬものらしい。

徹底

法學博士 河上肇

「前代の一大法律學者、一大政治家將た一大哲學者たりしフランシス・ベーコンは、眞理は混雜より出で來るよりも遙に速に誤謬より出で來るものなりと云つた。此言には一の驚くべき眞理がある。此世に於いて正しくあることと亞いで最上の事は、明快に且的確に間違ふと云ふ事である、さうすれば吾々は何所かに出て來るからである、正邪の仲間を何方にも附かずふら〳〵と彷徨して居たのでは、何所へも出て來ぬが、之に反し絕對的に、徹底的に、一貫して間違つたならば、何時かは必ず事實にぶつかると云ふ最上の幸運を得て、それで復び正路に歸ることが出來る。」――私はハックスレーの此言をバタンの著書の扉に發見した時、こんな面白い言葉は無いと思つた。

誤解を徹底せしめた其刹那に吾々は眞理を握る。徹底した迷は即ち悟である。此意味に於いて兩極は能く一致する。

古より大奸は忠に似たりとも云ひ、過ぎたるは猶及ばざるが如しとも云ふ。是等の語矛盾に似て而かも悉く眞理である。

物がなければ價は無い、併し物多きに過ぐれば亦價なし。例へば米一升、茶一斤と云ふが故に始めて價がある。米零升、茶零斤には何の價も無い。それ故物がなければ價は無いと云ふのである。併し、その米、その茶が、若し水の如く空氣の如く此地球の表面に在り

餘ることになれば、誰も金を出して米や茶を買ふ者は無くなる。それ故物多きに過ぐれば亦價なしと云ふのである。

かの芝居を見るに、餘り遠くより之を望み見る時は聲も聞えず目鼻も見えず、誠に興乏しきことなれどもさればとて舞臺の眞下に迫りて之を仰ぎ見ては、眉墨も口紅も餘りあらはに見えて、これ亦興さむる次第である。俗に『夜目、遠目、傘の内』と云ふも亦それで女の最も美しく見ゆるは、夜目、遠目、傘の内で、これより近寄つても拙いが、遠ざかつても駄目である。

白樂天の長恨歌に『盡日君主看不足』と云ふ一句があるが、げに此歌のヒロインたる楊貴妃は『後宮佳麗三千人、三千寵愛在一身』と云はれたほどの絶世の美人であつたから、君王の盡日見て足らずとされたのも道理ではあるが、しかし其も限りあることで、若し安祿山の亂起ること無くして、十年二十年盡日盡夜に之を見られたならば、畢竟過ぎたるは猶及ばざるが如しで、遂には飽き足つて之を棄てらるゝの日があつたで有らう。

世間にいふ角の多い人と圓い人とは全く別種の人物であるが、併し考へて見ると、三角形を四角形にし、四角形を五角形にし、五角形を六角形にし、此の如くにして次第に其角の數を殖し、遂に無限に至らば、無限の角を有する多角形は即ち圓と爲る。

是れ等は眞に一場の比喩である。私は今是れ等の事例を論據とし之より推して主張すると云ふのでは萬々ないが、世間に若し吾は利己主義を採るべきか將た利他主義を採るべきかの問題に迷ひつゝある人あらば、私は其の人に徹底を勸める。試に其の利他主義なりと信ずる所を絶對的に徹底せしめたら如何で有らう、利他の徹底する所此の五尺の體軀も天下の公器となつて、貨殖養生の類所謂利己的所業も忽ち變じて利他の方便となり期せずして兩極一致の妙に驚くを得るで有らう。

如何なる方面に如何ほど迷つても、徹底する限り吾々は損をする氣遣ひは無い。吾々は箱に入れられた

鼠である。右を嚙り左を嚙りして居ては、一生浮ぶ瀬は無いが、どこの隅でも構はぬ、其隅に嚙り付いて嚙り嚙つて已まぬ時は、ぽかりと其處に穴が明く。暗黒の世界が忽ち光明の世界になる。(大正四年十一月の或夜、二三十名の大學生の集りの前にて述べたる談話)

新大關大錦卯一郎論

黒頭巾

其一

◉觀艦式の翌日　風なぎ日喧かに、絶好の小春日和なり。此の日、吾輩、誕辰に當る。小兒女を携へ、郊外に散策し、瀧の川の紅葉寺に至る。吾が心、飽くまで長閑かにして、眞紅の斜陽、夕靄に浮びて、枯葉の櫟林を照映するを望む。

◉此の日、吾輩は大錦論を草するの約ありしを思ふ。吾輩、近來ます〳〵壯剛吾輩の身長をして大錦に匹敵せしめば、體重も亦た必ずしも軒輊せざる可きを想ひ愉快に堪へず。

◉吾が健剛なる誕辰に當りて、新進の剛力士を論ずるは、吾輩の、特に欣喜に堪へざる所なり。凡そ何者、何等の方面にせよ、一世に雄たるは、男子の本懷とするところ、大錦は躍進、群を拔いて大關となる。力士といふと雖、豈、一世の雄に非ずや。

其二

◉杜詩に、毛公鄂公毛髮動、英姿颯爽來酣戰の句あり。彼が土俵に上り來る時、英姿颯爽の慨無くんばあらず、彼は尙ほ力界の第一人者に非ずとするも、彼が意氣、敵軍を壓するに足るものあるを覺ゆ。

◉力、力と相敵すれば、術を以て勝ち。術、術と相敵すれば力ある者勝つ。彼の力界に於けるは、尚ほ、力と術とに於て、勝ち易からざるの敵手、少しとせず。彼は百戰百勝を期す可らざるに似たり。唯だ彼は意氣を以て。力と術とに勝たん事を必する者たるを失はず。

◉彼が今日の榮冠は意氣を以て得たり。彼は意氣を以て。其壘を守らざるを得ず。彼より意氣を奪ひ去らば香の無き梅花。泡立たざるビールに異ならず。

◉梅花の芳香凛烈たる、雪を壓して開く時、始めて氷心鐵腸を以て許さる。意氣衰へば、何んぞ梅花あらん何んぞ大錦あらん。吾輩は、彼を以て、意氣の象徵として見んことを欲す。

其三

◉未熟の藝と雖、見るに堪へずといふものは少し。宮角力といふとも、角力は殊に面白し、ひとり義太夫の拙なる者のみは聞くに堪へず。吾輩が角力を好むこと義太夫に過ぐといふには非ず。義太夫は模倣にして、角力は眞劍勝負なればなり。

◉眞劍勝負といふところに、角力の生命は存す。眞劍勝負といふ中に、機軸あり、努力あり、箇性の發揮あり。およそ是等のものゝ表現の顯著なるほど、其の角力には感興、横溢するを見る。

◉這般の意義に於て、大錦の角力は、見るに足るものあるを思ふ。彼の機軸といふは、術として變化に乏し彼の軀幹を活用するの工夫は看取す可きものあり。彼は變化少き術を補ふに、非常の努力を以てす。變化少しと雖、意氣餘あり。彼の角力ほど箇性美の發揮の著るしきものは少し。

◉技藝、藝術の美、人心を引く所以のものは、箇性の發揮に在り。箇性の發揮は、箇性の力衰ふれば則はち美なし。彼が角力の將來は唯だ此の一義に依つて定まらん。

其四

◉谷風、雷電の昔は知らず。輓近、榮進の速なるは大錦に若く無し。而して遲かりしは太刀山を最とす。若し此の一點より見れば、彼は不出世の力士たらずんばあらず。

◉榮進の速力のみを以て、角力の聲價は定らず。梅ヶ谷も入幕以前に於ては必ずしも異數の榮進者に非ず。彼

程の角力としては寧ろ晩かりしなるべし。梅ヶ谷より後進、非力にして、彼を凌駕して入幕したるは、先代逆鉾と尼ヶ崎とあり。

◉逆鉾は大關たらざりしも名力士たるを失はず。尼ヶ崎は上手なりしも、餘りに小軀、非力にして、僅に、一たび三役に上りしに留まる。然れども尼ヶ崎は幕下に十兩に、各一場所宛にして、驀進して入幕す。常陸山は暫らく除く。大錦の前、此の如き榮進者、尼ヶ崎の外見ること無し。

◉常、梅、荒岩、太刀山、悉く異數の力士、昔の大砲も魁軀、怪力、今、尚ほ世人の眼前に在り、然れども入幕一年にして、能く大關たるを得るは、大錦の外に無し。此の點に於て、近世の大力士、一人も彼に及ぶ者あらず。此の如き成績を有する大錦は、恐らくは明石志賀之助後、第一の幸運兒たるを失はず。

◉吾輩は、大錦の榮進に對して、深く先代朝汐の不運なりしを憐む。吾輩、始めて回向院を見てより廿年、彼ほどの滋味ある好力士を見ず。世人、皆、朝汐の上手投の鮮やかなりしを稱す。然れども彼は上手投よりも、左を差し、右上手を引いて寄り進む姿勢の、言はん方なく立派なりしは、今、尚ほ恍惚として吾輩の眼中にあり。

◉これ程の朝汐も、時、利あらず、上に若き小錦を戴きし爲、大關と爲るの機を得難く、月桂冠を得し時は寧ろ實力の全盛期を過ぎたり。今の朝汐も早く好箇の大關たる可くして、頗る後れたる者なり。

◉常陸山が摩利支天の勢を以て進みし時すらも、病氣の故を以て、入幕一年半にして大關を贏ち得たり。大錦は未だ常陸山が無敵の雄姿に比するを得ず、而して榮進の速力は之に踰ゆ。

◉大錦の好成績は、新大關たるに値するを疑はず。然れども榮進の、此の如く速なるを得るは、上に好力士無ければなり。彼の如く、無病息災、而して境遇の適順なる、從前、大力士の未だ實歷せざるところに屬す彼が無類の幸運兒たる所以なり。

◉然りと雖、彼の幸運を以て、ひとり天の寵命に歸する者あらば、其は必ずしも批評の公平を得たるものに非ずして、彼の爲にも憐むべし。彼の健剛無病なるは一には、彼の努力攝生の力に俟つもの無しとせず。而して彼の競爭者たる可き三四の好力士ありて、彼ひとり群を拔いて、能く此に至るを思はざる可らず。

◉畢竟、彼の榮進は過去なり、彼の眞價は今後に於て

定まらん。彼は、早晩、横綱たる可く期待せらる。去年、彼、入幕の時、彼自から其の志を語りて。力士たるの本懷は横綱を得るに在りといへり。一言、男子の口より出づ、駟馬も追ふ可らず。彼たる者、豪氣堂々として、自から期する無くんばある可らず。

◉彼が無前の榮進は、今に於て言ふに足らず。彼が、異數の幸運に乘じて新大關たるは、他の批評よりも、寧ろ彼自からの反省に値せずんばあらざるべし。

其五

◉吾輩、始めて大錦を認めたるは、彼が三段目の時に在り。當時彼の意氣、風貌、群を拔くものあり。斯の人、定めて將來の大關たる可しと豫言したり。吾輩はかく豫言して疑はずと雖、寸前の事、實に確保す可らず。彼が月桂冠を得たるの後、吾輩も亦た言責を果すを得たるの思無くんばあらず。

◉大錦と三段目とは、吾輩と何等かの宿緣あるが如し。吾輩が、大阪の大關大錦を始めて見たるも、彼が三段目の時に在り。回首匆々十二年、當時彼が颯爽たる雄姿、鷄羣の一鶴、必らず大阪の大關たる可しと思ひしなり。

◉東西合併大角力が國技館に開催されし時、吾輩は大木戸よりも、久濶にして大錦を見ん事を期し、稍、彼に、憧憬するの情無き能はざりき、然れども吾輩は彼を見るに及んで、其の角力振りに業の立ちたるを感ぜずんばあらざりき。

◉東西の角力に共に大關大錦あること、偶然とはいへ聊か對照の興味無きに非ず。昔年、小錦の全盛時、荒岩、逆鉾、常陸山、梅ヶ谷未だ出現せず。東京の角界一時、衰頽の極に達したる時、小錦の人氣、滿都を傾倒し、小錦熱といふ一種、人氣熱、帝都に發生し、小錦織も此の際に創成せられたり。

◉熱といふも、病熱の昂騰は限あり、人氣熱の沸騰點は測り知る可らず。昔の小錦も、今の大錦も共に、まさに、人氣熱に乘じつゝあり。然れども人氣熱も亦た病熱と共に、齊しく人間の熱なれば、其の極度に昂騰するに當りては、必らずや人事不省に陷らずんばあらざるべし。

◉東京に全盛の小錦ありし時、大阪にも新進の小錦を生じたり。大阪は經濟は暫らく措く、すべて東京に模倣せざるは無し。彼の小錦の名は、此の小錦に倣ふ者にあらずや、然れども大錦に至つては、先づ大阪に在

りて、後ちに東京に在り。

其六

◉東西の大錦は同名にして異義ならずんばあらず。吾輩、未だ大阪の大錦と語りし事無し、其の何故に大錦と名くるやを知らず。或は、小錦の名、優美なれども壯大を缺くを以て、更らに大錦を以て小錦を壓倒するの意乎。或は、小錦は小男なりしを以て、大男の錦とするなる乎。また或は、單に、大阪の錦といふの意なるやも知れず。

◉大阪の大錦は大阪の人に非ず。而して東京の大錦が大阪人なる事殊に感興あり。此の大錦は、東京の花なるを以て、期するところ固より大阪の錦あらず。彼は、大阪に錦を飾るの意なりと傳ふ。

◉彼は、大阪に生れて、天王寺中學の出身なり。彼が新入幕の時に、天中の優勝旗に擬せる化粧廻しを締めて登場せるは、彼の本懷にして、また尤も光榮とするところたらずんばあらざるべし。

◉彼、大阪人にして細川を姓とし、水の都の人たるを表現す。名は卯一郎、卯の歳に生れて、卯の歳に入幕し、卯の歳に新大關の榮冠を得る。而して此の時を以て、大阪に歸りて、榮進の披露角力を興行す。彼が戶籍上の細川卯一郎、力界の大錦たる所以の意義と、果報と、遺憾無く報ひられたるなり。

其七

◉南北に伸びて狹長なる日本は、物理學的に、二箇の燒點を有す。東京と大阪となり。此の二箇の燒點は、實際に於て、別箇の意義を有すと雖、兎も角、吾が帝國に於ける二大中心たるを失はず。

◉秀吉と家康と以來、大阪に居て、天下の覇者たる者は義太夫の外に無し。巢林子逝きて淨瑠璃の大才出でず。初代團平は既に死す。攝津大掾は老ゐたり。然れども越路太夫あり、文樂座ばかりは居然として天下の檜舞臺たり。團十郎歿後、鴈次郎は雄を稱す。此の外大阪に天下の覇者無し。

◉鴈次郎ありと雖、大阪の劇東京を壓すとはいはれず。曾我廼家五郎は一面に於て覇者たるを失はざるも繩張や、廣からず。畢竟、今、西方の燒點を中心として覇業を成すものは、本願寺と新聞と文樂となり。

◉大阪角力の名、東京角力と對稱すとはいへども、横綱若島去るの後、實力、遠く東京と軒輊あり。

◉算し來る時は、檜舞臺の、人目に顯赫たるもの、西に少く、況して大阪人を以て覇者たるは晩近極めて稀なり。此の際に於て、大錦は大阪人にて東京角力の大關となる。東京角力の大關たるは一世の雄なり。此の意義に於て、吾輩は、彼を以て、大阪人の覇圖の象徴として見んと欲す。

其八

◉江戸兒に江戸魂あれば、大阪兒に贅六魂無くんばある可らず。然れども江戸人、江戸魂を誇榮するに反し大阪人、往々、贅六魂を標榜するを逡巡するの風あるを免れざるは何ぞや。

◉此の意義に於て、吾輩、故人福井彦次郎を憶ふこと切なり。福井の後半生は教育を以て終り、大阪の高商岡山の關西、上州の前橋。土佐の海南等に校長たりしも、就中、天王寺中學に校長たりしを以て、彼の生涯の、尤も順適にして精彩ありし時とすべし。大錦の天中に於けるは、福井の去後に屬すと雖、其の同窓生と共に、福井の流風、遺韻を想慕したりしを疑はず。

◉福井は教育界の一異釆たりしを失はず。吾輩、彼と逢ひ、語りし事、僅に三四回に過ぎずと雖、彼の人格風貌を忘れず。天中は新進の人物輩出の盛んなる、人目を惹くに足る、而して天中の基礎を定めたる者は福井なり。

◉福井は魂陽學人と號す。魂陽といふは生魂神社の南といふの義。生魂神社は大阪兒の精神的中心とするところ。而して天中は此の神社の南に當る。則ち魂陽の一語は、彼の抱負を象徴するものならずんばあらず。

◉魂陽學人は、自から大阪兒を誇榮し、贅六男子を標榜し、而して是を以て、大阪の新青年を鼓吹しつゝありたり。彼の期するところは飽くまで、大阪の地方粹を發揮し、大阪兒をして、堂々として江戸兒に對峙せしめんとするに在り。

◉彼の到る處、彼は青年を鼓舞し、沒後尙ほ其の崇拜するところとなるに至るは、彼に、這般の氣概ありたればなり。吾輩は、彼が、これを以て能く天中の校風を樹立したりしを信ず。大錦は則ち此の校風の中に生れ出でたる一人なり。

◉聞く大錦は大阪の島ノ內に生る。則ち彼は大阪兒の純の純なる者。江戸にていはば、神田兒、日本橋兒といふが如くなるべし。彼の素性は、此の如くして、魂陽先生の爲に鼓舞作興せらる。彼が出身の動機は關西自有ニ

男兒在一の一語に存せずんばあらざるなり。

其九

◉大都會の市井より出で、能く大關たるを得る者は古今に稀なり。江戸兒にして、東京角力に大關たるは、今の伊勢濱に始まるといふ。小常陸も鶴渡も江戸兒なれども大關とはならず。然れども彼等ほどの好力士を市井に得るも亦た容易ならず。

◉東京、大阪二大都の町より出でたる、江戸兒の伊勢濱と、大阪兒の大錦と共に大關として東西に對峙するは、一時の奇觀たるを失はず。伊勢は既に盛を過ぎ、錦の全盛は未だ來らず。

◉西系の力士には美男子多し。土州山、黑瀬川、大鳴門、浦ノ濱等、美貌、俳優を壓すといふとも、艶冶、脂粉の氣を帶び、好丈夫の意氣無し。但し土州山は衒氣あれども覇氣欝勃、艶冶とはいへども短小精悍、牛若丸の姿致あり。其の角力は、つねに面白し。男性の意氣美を發揮しつゝあるは、伊勢濱を推して好丈夫と爲すべし。

◉伊勢は力士としては寧ろ小さし。然れども其の肩腰の筋肉の發達の見事なる、脊力の壯剛を想像するに餘あり。寡默にして堅く結べる唇に、勇氣を湛へ虛勢を張ること無く、擧止、專ら沈實にして、靜かに敵手を見る。

◉伊勢は、體格の規模小なるを以て、朝汐が颯爽たるには及ばず、朝汐は體勢、風采、其の應揚として土俵に上る時、眞に、英雄美を具すといふ可し。今の東西を通じて、英雄美、朝汐に若く者あらず、從來、吾輩朝と伊勢とを推して一對の好丈夫と爲すを惜まず。

◉英雄美に於て、伊勢は、朝汐に讓ると雖、彼が江戸兒の意氣、凛然として斯界に秀出するものあり。彼は立合に當りて、登場に、最初に、唯だ一回、力水を飲むのみ、其の以後、彼の敵手は幾回の化粧立に、幾回水を飲まんとも、彼は、徐ろに力鹽を掬し來つて、少しく土俵に蒔くのみ。立合、如何に長きに渉つて、大敵に對場すとも、彼は終に、再び力水を飲むこと無し

◉力士が土俵に登るは、武士の決鬪するが如し、白刄既に鞘を脱す。唯だ決死の覺悟あるのみ。這般の覺悟を示す者、今に於て、伊勢を推稱せざるを得ず。

◉江戸兒を象徴する伊勢は此の如し。大阪兒を象徴する大錦も、今に於て必ずしも伊勢の態度に讓るものに非ず。去年の夏、此の二人者の對場、錦、新進の勢に

乘じて勝てり。然れども此の二人者の角力は、力と術との外ハ、意氣の對場なるを見る。大錦は、宜しく將來に於て、ますます其の態度を勝礪して、意氣美を以て伊勢を壓倒するに非ずんば、大阪兒の光榮ある勝とはいはれず。由來伊勢は豪放、氣を負ひて、敗るゝことゝ割合に多ければなり。

其十

◉今の强者は太刀山に象徵せらる。勝敗は逆睹す可らず。此の春の大錦は、能く健闘して彼を破るやも知れず。然れども去年夏の對場を以てすれば、此の二人者の間には、尙ほ實力の懸隔あるは爭ふ可らず。

◉何人が始めて太刀山を破る可き乎は、久しく力界の懸案たり。四海波、嘗て一脚を擡げながら、劍峯に長蛇を逸し朝汐、また得意の右差しに、煽つて寄つて、預かに畢る。此の外、輓近數年の間、太刀山の壘高くして、難攻不落の勢、牢として成り、其の頽勢の何時に現はる可きやを豫言し易からず。

◉太刀山に向つて、虎穴に虎子を探らんとする者少からず。然れども彼が虎威尙ほ衰へず。西ノ海、對抗の資質ありて勇を缺く。宇都宮荒みて振はず。九州山は若し。兩國は力足らず。今に於て、大錦、栃木山、對馬洋の三人者は、此の大敵を突破す可き使命を有す。

◉此の光榮ある候補者の三人は、力と體とに於て對馬優り、彼をして若し突張りの一手を會得せしめば、目的を達せんこと、必ずしも至難に非るべし。力と術に於て、栃木秀で、若し、彼に、軀幹稍大ならしめば、今日、既に太刀の勁敵たるを失はじ。體と氣とに於ては錦の壇場にして、彼の意氣を以て、彼の魁顒を遮らし敵壘を摩するの志勃々たるものあり。

◉錦は術に於て太刀に耻づるところ無し、彼の力、なほ一籌を輸するは、彼が未だ太刀に及ばざる所以。假りに彼が力の發達を待つとせば、力は天賦なり、寧ろ太刀の衰勢を待つといふに似たるべし。太刀は力角力なれば、力、衰へざる間は、彼、衰へず。

◉太刀の力、長く衰へざりせば、錦が勝ち得るの日は遠かる可き乎。或は、栃木對馬の後に出づ可き乎。假令、新大關の榮冠を得るとも、太刀に勝つこと栃木對馬よりも遲かりせば、彼の聲名、或は下らん。

◉力の發達は俄に期す可らず。術の精練は、努力に因つて期す可し。彼は唯だ其の氣を旺んにし、其の術を練るに於ては、太刀を製せん事、必ずしも甚だ遠きに

あらじ。「何のその、岩をも徹す桑の弓」彼は、假令、一戰、再戰、勝たずとも、氣勢、愈。敵を凌ぐを要す。彼の氣合、太刀に勝つの日、太刀、力衰へずと雖、自から敗れん。

其十一

◉吾輩、角力を論ずれば、常陸山を聯想せざる能はず。彼は、角界を象徴するものなり、彼は、明治中興の洪運を代表する一人物なり。彼は土俵に於ては既に過去の人たり。然れども角界の歷史に於ては不朽の人たる可し。

◉大錦を語れば、常陸山に叙及せざる能はず。彼は、或は常陸山第二世を以て目せらる。彼が能く常陸山第二世たるを得可きやは、懸案に屬す。彼が常陸の分身たるは論莫し。

◉大錦の聲價は尙ほ未知數なり。今に於て彼の歷史的價値を論究せんとするは早かるべし。彼の造詣は未だ測る可らず。然れども彼の天賦を論ぜんは、不當の事に非ず。而して彼が將來の聲價は、何人も、常陸山を離れて考ふるを得ざる可し。

◉谷風、雷電の昔は知らず。近世に於て常陸山の如きは、角界稀覯の大力士たるを失はず。彼の人格、谷風に下らず、其の强味といふも雷電に讓らざるべし。吾輩は敢て太刀山の聲價を割引せんとするに非ず。然れども全盛の太刀山は、草角力の雄と見ゆ、其の强味には英雄美の威儼無し。全盛の常陸山の英姿颯爽たるが如きは得難し。

◉太刀山は、つねに攻勢の雄者なり。今に於ては、彼を防勢に壓迫し得る者無きが爲なるやも知れず。然れども彼の角力には餘裕無きは爭ふ可らず。全盛の常陸山の陣容、綽々、餘裕ありて、底力の計り知る可らざるを想はしめき。此の點に於て、大錦は、未だ遠く常陸山に及ばず。餘裕の少きは太刀山に近し。

◉常陸山の餘裕といふは、其の實力と智慮とより來る。全盛の太刀山には、或は、全盛の常陸山に對當するの實力あるべし、智慮足らず、大錦は土俵に於ける智慮常陸山に類似するものあり、實力は懸隔あり。此の二人者は、各、其の一を得る。常陸は其の二を兼備す。

◉實力の必要條件たるは、體格、體質、力量なるべし。大砲は尨大に過ぎ、小錦は短小に過ぎたり。鳳凰出るに及んで、一時、理想的大關の評あり。鳳凰は常陸山よりも稍丈ヶ高かりき。其の體勢は、當時に於て眞に鷄群

の一鶴たり。然れども常陸山、次いで出現するに及んで、直ちに鳳凰を凌駕し、理想的大關、横綱の榮稱、彼に歸し、爾來、力士の好典型とす可き者、常陸山を凌ぐ者、一も出現せず。

◉常陸は、身長に於て、遠く太刀に及ばず。然れども其の及ばざるは、此の一點のみ。彼は膂力のみを以てすれば、或は近世の唯一人者には非るやも知れず。腰或は肩の發達は、駒ヶ岳、荒岩、海山を壓倒せざるやも知れず。唯だいづれの點に於ても彼は第一流を下らず。而して肩、腰、身長、軀幹、筋骨の發達、調和、其の宜しきを得て、且つ皮膚も亦た白に紅を潮し、强剛にして美、スパルタの强を包むに、アゼンスの美を以てしたるは彼なり。

◉大錦は常陸山に及ばずと雖、若し常陸に近き者を求めば、彼は其の最も近き一人たるを失はず、彼は常陸よりも少しく丈低し。然れども上幹と下肢との釣合好く、下肢長くして姿勢整へり。大蛇潟より小さけれども、體勢優さり、鳳より稍高くして筋骨逞まし。大關の典型として遜色あるを見ず。

◉太刀山は腰の發達、肩の發達に及ばず。彼が體格の强味は、骨太なるに在り。此の點に於て如何にも彼は頑丈に思はる。錦は、常陸に近くして、骨太の一點、則ち特に及ばず。

◉常陸山は如上の體力を有して、角力として十分の智慮を土俵上に現はすに足る丈けの人格、氣力を有す。彼は飽くまで健鬪の精神あり、風雲の志あり、土俵に登つては眼中、一世を空しくす。其の眼光の爛々として敵手を睥睨しつゝあるは、彼のすべてを表現する者なり。

◉常陸山と梅ヶ谷とは、吉田追風の所謂、曠世の偉器對立したる者なり。梅ヶ谷を角力上手にして、常陸は强なりと言ふ者あれども、吾輩は、常陸を角力上手なりと思ふ。角力の伎、常、或は梅に讓るやも知れず、略は遙に優れり、自己の長短處を知り、巧みに敵の短處を操縱するの機略、精緻、梅は常に及はず。畢竟、此の、二人者の妙處は團十郎と菊五郎との如し。

◉敵を壓するの氣力、敵を操縱するの機略は、錦、稍常陸山の分身たるに近し、凡そ常陸山の門下、術は栃木山に若くは無く、略は大錦秀づ。試みに、國技館の大角力に見よ。交も〳〵登場する衆力士、眼光の烱々たるは、栃木と錦との二人、目立ちて見ゆ。就中、錦を尤も凄壯なりとす。

◉常陸山を象徴するものは、其の目なりき。常陸山の目を繼承する者は、彼の分身にして、或は、常陸山第二世たるべし。大錦と栃木山との目を見よ。併せて其の將來を見よ。

其十二

◉常陸山が角界に齎らしたる使命の重大にして、また其の成業の顯著なるは、何人も推稱を辭する能はず。彼は一人の力士としては、卓絕の技と力とを示せり。而して內には東方の衰勢を挽回し、外には力士の品位を昂上せしむる可き任務を帶びたり。

◉彼は獨力健闘して、東方の將旗を捧げたるのみならず、力士は藝人に非ず、幇間に非るの志操を堅持して爲に無形の壓迫と鬪へり。彼は、假令、傲慢の評を受けたるにせよ、土俵の內外に於て、彼が力士の品格を上げ、人氣を斯界に集め得たるの功は歿す可らず。

◉彼ほど多數の好力士を養成し得たる者古來、未曾有なるべし。彼が志の大と、人格の力とは、能く此の大業を成さしめたり。先代兩國、小常陸、大野川、碇潟、近江富士、佐賀海、日本海は第一期の弟子、而して今の人氣力士、錦、栃木、對馬、兩國、宇都宮、四海波九州山、朝綠等は第二期に屬し、斯界の錚々者、多く此の中に在り。就中、錦、栃、對、兩を以て四天王とし、或は、宇都、九州を添へて五虎、或は六雄とす。而して特に錦と栃木とを推して双璧とするは、今の世評なり。

◉錦と栃木とは、則ち常陸門下の精華なり。此の二人者は、外に、敵軍に對し、內には互に切磋、競爭す可き使命を有す。錦と栃といづれが將來の大成者なりやといふは、何人か太刀山を破るといふと併せて斯界の興味ある二懸案たらずんばあらず。

◉角界の耳目は、今や此二人者の身邊に集注せられつゝあり、此の二人者の發達は、複雜なる興味を以て見らる。大敵に對する彼等の取口、其の態度、操行、一々、批評の種ならざるは無し。此の二人者は、東西に分立せざるが故に、感興特に多し。

◉吾輩は、茲に、此の二人者の將來を精論するの、未だ時機に非るを思ふ。大錦が新大關たるに依つて、孰れが先づ大關たる可き乎の問題は解決せられたるのみ。二人者の活躍、競爭は、未だ其の前幕たるに過ぎず。

◉或は、大錦、横綱となり、栃木、大關を占めて、而して對馬、九州、兩國、宇都、これに次ぎ、以て長く

東軍の主力陣形を維持する爲るべしと豫想する者少からず。吾輩を以て見れば、錦も栃木も横綱となり、對馬も九州も大關となり、東方、二横綱、二大關を有するに至るやも知る可からず。

◉錦を横綱とし、栃木を大關とするの見地は、二人者の體勢、體力を標準とす。また固より一理あり。栃木は體勢、伊勢濱に酷似し、其の術遠く上に出づ。これを横綱とするは望無き事に非ず。

◉吾輩は、二人者の對照に關し、唯だ一事を擧ぐ可し。栃木の角力は堅固、敏捷、輓近、比類を見ず。鳳に對する去夏の勝負、栃木は術に於て鳳を凌ぎ、錦は氣を以て勝ちたるやに見ゆ。然れども栃木は、往々負けまじき敵に負け、不覺を取る事あり。今日までの錦には殆んど不覺の負と稱す可きもの無し。

◉此の一事、錦の精神情態の沈着、充實せるを示す。栃木、尚ほ這般の缺陷を有する間は、栃木が錦を凌駕するは恐らくは容易に非ず。然れども二人者が力士としての天分は、固より別種の議論に屬す。

◉吾輩は、常陸山の分身たり、或は第二世を以て期せん者は、併せて彼の使命を今日に繼承すべき大責任ある事を思ふ。則ち啻に土俵上に強者たるのみならず、土俵外に於ても力士の美質と品位とを發揮せざる可からず。此の事、ひとり錦と栃木とのみに留まらず。常陸門下が、其の師の名を全くせんとするは、努力奮勵を要すべし。

其十三

◉此の場所に於ける錦の成績如何。此の事、頻りに好角家の話題に上る。彼にして鋭を蓄へ、氣弛むこと無くば、新大關の聲價を辱しむること無かるべし。去秋吾輩、彼の舊友と共に、寄書して、彼の壯健を祈りしに、彼、久留米巡業中より答へて曰く、小生、健康にして、日々、稽古を勵み居候間、御安心可被下候。宛然、彼は、當年の中學生の口吻を帶ぶ。

◉太刀山は既に論ぜり。朝汐、強勇といふとも、年齢彼と太甚だ懸隔す。錦と、將來、興味ある對場は、鳳と大蛇潟となるべし。此の三人者は、年齢、實力とも匹似す。唯だ油の乘る者勝つ可し。而して錦は、續けて鳳に勝ち、以て敵の先頭を壓するの覺悟あるを要す。

◉大蛇潟は黑と鈍を以て著聞す。然れども彼や體格力量、優に、西軍の超弩級艦たるを失はず且つ其の人物

些の街氣無く撲訥にして、天眞流露す。西軍の花なり。此の好漢、年も亦た甚だ若し。彼や栃木を恐れ錦に臆せずと聞く。恐らくは、將來に於て、假令勝つこと少きも、尙ほ長く錦の敵國たる者は彼ならん。

◉巧慧、輕捷なる者は、錦の敵手に非ず。錦の勁敵たる可きは、つねに偉大なる鈍重漢たらずんばあらざるべし。此の意味に於て、吾輩、大蛇潟を推す。

◉然りと雖、大蛇は錦の苦手には非ず。既往の成績を以てしては、未だ錦の苦手たる者を見ず。大力士は苦手を有す可らず。苦手の出現は、其の弱點の暴露を意味す。苦手、一たび出現せば、更に二人の苦手を生ずべく、恰も非常の堅城に、裏の間道の發見されたらんが如く、一谷に鵯越の發見されたるが如く、大敵、續々として、此より入り來らん。今後の錦は、唯だ苦手を出現せしめざらん事を、專途と力めずんばある可らず。

◉黑岩出で丶鳳凰衰へ、荒岩出で丶、小錦の全盛去れり。梅ヶ谷には大見崎、兩國、逆鉾、前後、苦手たり。駒ヶ岳には更に苦手多かりき。太刀山は三四年來、苦手無し。吾輩が見たる二十年來の角力に一人の苦手をも有せざりしは唯だ、常陸山あるのみ。錦が土俵上に其の師に學ぶ可きは此の一大事に在り。

其十四

◉吾輩、嘗て、天王寺中學に教鞭を執りしを以て、大錦と因緣を結ぶ。彼が少年時の性行、また一たび武俠世界に紹介せし事あり。今、玆に縷述せず。唯だ大錦會の一事を擧ぐ可し。

◉今の人氣力士、後援會を有せざるは少し、大錦には無し。栃木山にも未だ無し。實は彼等が辭して受けざるなり。大錦會といふは、天中に於ける彼の師友同窓生が國技館の本場所の後、彼を招きて擧行する懇親會をいふ。

◉彼の舊友、大錦の爲に後援會組織の事を言ふ者あれば、彼は辭して、而して常陸山會に入會せよと答ふ。彼と常陸山と、師弟の情誼此の一事を以て、推知するに餘あり。

◉吾輩の所謂大錦會は、純然たる同窓會なり。而して彼の請求に依り、彼よりも會費を受納す。唯だ、彼が橫綱たらん日、始めて彼を主賓として、會費を受納せざるべしといふ、一の契約を爲せるのみ。

◉大錦會は、つねに牛肉屋の樓上に開會す。角帽、栢

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◎在米＝梅本誠一著（定價一圓五十錢 郵稅金十三錢）

金門より

北米の西岸、カリフォルニヤ一帶の地、氣候溫和、風景絶佳、母國より來つてこゝに住する者其數十餘萬、中に一人の熱涙を藏し、詩眼を有し、才筆を携ふる者あり、或時は夕陽に對し或時は落日に照され、遙かに金門灣頭より故國を望んで其觀察を語り、其感慨を訴へ、其情想を述べ其生活を告白す、眞に是れ世界的發展の途上に於ける大和民族の歌謠にして又進軍曲なりと云ふ可し、故國の同胞豈之に對して一掬の同情と一片の敬意と無きを得んや。

一本書挿畫中サーゼエント畫「裸體の研究」、ベスナー畫「眠れる女」の二葉は其筋よりの注意に依り乍遺憾之れを撤去す。

一本書の出版を急ぎたる爲め在外の著者自ら校正の勞を取る能はざりしを遺憾とす。

發賣元 東京市銀座通新橋際 電話新橋一九九一番 （振替東京二〇〇番） 新橋堂

◎肉彈著者櫻井忠溫著

十字路

（定價一圓廿錢 郵稅金十二錢）

彼の日露戰役に於ける世界的大文學として知られたる『肉彈』の著者櫻井忠溫は其日常生活の閲歴と觀察とより得來れる隨筆短篇二十餘種を蒐集して『十字路』一卷を作る。今や文壇以外、別に清高堅實の才筆に成れる、眞情流露の感想說話は、切實に一般社會の要求する所となれり、而して我が櫻井忠溫の此新著の如き正に此社會的要求に合致する雄麗簡素な絶品にして社會人生の十字路、人情運命の十字街を最も鮮明に映寫せる趣味敎訓の一大畫帳と謂ふ可し。思ふに此書は大正五年の新春を飾るべき最大、最美、最善の著作として遍ねく全國社會各階級の愛誦愛翫を博し得可しと確信す。

○大賣捌所 東京市神田區表神保町 （振替東京二七〇番） 東京堂

（中付四の一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

業、三田、早稻田、其の餘、學生、軍人、紳士雜然として集り、高歌放吟、快談、以て歡を盡くす。彼の同級生は、尙ほ概ね學生なり、皆、彼を呼ぶに細川を以てす。師友の外に、來會して氣焰を吐きしは、從來、唯だ呑兵衛一人ありしのみ。呑兵衛は、何處までも、角界の大彌次ならずんばあらず。

◉大錦會の席上に、彼は起立して、若し、前途有望といふを以て、大錦會を開くとせば、某、某諸君等の爲に、何故に、一々、開會せざるやと。彼の言、一理あり、未だ盡せりと爲さず。天中、出身、奇才多し。必ずしも彼をして美名を擅にするを得しめじ。

◉角界の大錦と劇界の伊庭孝とは天中出身の異彩なり。尙ほ學校に在る者は、必ずしも擧げず。シャンガラ哲學を提唱する福井葛城、醫博の緒方友三郎、藥學の緒方章、畫家の西村靑巖、京都文壇の一宮榮、赤門政客を以て自から標榜する大阪の高木友三郎、其の外、學問、教育、官界、財界に於ける有望の壯年、靑年、欝然として盛を稱す。吾輩唯だ其の一斑を擧ぐるのみ。運動界を以てすれば、テニスの岡、曠世の前衛たりしは論莫く、一高の應援隊に指揮者たりし高垣は、吉岡將軍、屢、讃嘆して、應援の才、未曾有の器なりとせり。

◉大錦は、這般の空氣の中より出でたり。彼が學生の氣分を失はざるところに、彼の未來を存すべく、彼の未來を涵養するは、又た彼の同窓、先輩、師友の同情たり、責務たらずんばあらざるべし。

其十五

◉彼が酒を飲まざると、水泳を能くするとは、世人の意外とするところならん。彼の魁軀を以てして、飲んで一合に到らず。能く三合を盡くせし事未だ無しといふ彼の道樂といふは、今に於ては唯だ寫眞なるべし。

◉彼は眞率にして愛嬌あれども、甚だ眞面目なり。分別あり、議論あり、彼の勇は蠻勇に非ず。畢竟、彼は意思の人たり。智の人たらずんばあらず。

◉吾輩、去夏、濱寺の水泳場に往き、彼が水泳の舊師井上に逢へり。井上は、大錦の水泳を語りて、精妙に非るも、頑健にして持久力に富むといへり。蓋し彼の角力といふも、また此の如きのみ。

◉聞く、大阪の本山彥一、彼の新大關を祝して、一口劍を贈る。鍛工は淸麿。銘に、君萬歲、淸麿と刻す。銘の一句、甚だ佳なり、彼をして、之に對して、日本

武士の意氣を感得せしむ可きなり。

◉又た聞く。彼の双親、堂に在り、頗る健在にして、兒の成業を樂しみつゝありと。抑も人間、清福事、何んぞ之に加へん。吾輩の如きは唯だ老母あるのみ。彼に、健美、措く能はざる所以なり。

大正四年、誕生日、稿を起し、七日、颶の夜、稿了。信州、未知の人、吾輩と誕辰を同じくすといふを以て、祝意を寄せ來る。厚意感荷に堪へず。また以て吾が誕辰日の清福と爲すに足らずんばあらず

黑頭巾再記

左脚切斷

厨川白村

一

三月の末であつた、私は遠い西の國への旅に立たうとした。家族を東京に移さうと思つて、色々の準備に忙しかつた時である、ふと左足にほんのかりそめの傷をしたのが原になつて、ひどく腫れ上つて痛み出した、發熱も甚しくなつた。我慢にも歩行などは出來なくなつた。醫者のところへ行つて切開をして貰ふその途中も、駕籠の中に、さながら病める獸の如くに氣息奄々として横たはつてゐると云ふ、至極慘めな有樣となつた。折角おもひ立つて遠い旅へ出掛けやうといふ其矢先にこの次第だ、豫定の船の出る日は日一日と迫つて來る、ぢつと養生などしてゐる氣にはとても成れない、殊に家財などは既う東京へ送り出したあとなので、まるで明家同然の處に病人が轉がつてゐるのである。子供らはもういくつ寢たら東京へ行くのかと云つて、樂しむで待つてゐる。早く發たうと思つて氣ばかりは焦るが、痛む足は思ふやうに行かない。自分の足とは

云ひながら恁うなつては既う自分の仇である、惡魔がそこへ巣をくつてゐるのである、一層一思ひに切り棄てて遣らうかと、床上に呻吟きながら僕は獨りで考へた。むかし大燈國師は、足が不具であつて坐禪をするのにうまく坐れないと云ふので、或時遂に「この足めが」と云つて、無理にそれをへし折つて、その儘結跏して死むで了つたさうである。痛快な坊主もあつたものだと感服して、僕はこの話を何かの本で讀むだ時から、今に面白いと記憶してゐる。之ぐらゐの傷で弱はつては、大燈國師に恥かしいとも僕は考へた。

片足切り棄てて二本の脇杖にすがつたらば、せめて東京までは行けるだらう、乃公の行く手を遮ぎる惡魔の所業におめおめ降參してなるものかと、我慢をして滿身の力をこめて奮起しては見るが、矢張り駄目だ、一歩も動けない、一歩どころか匍ふ事も出來ない。恁うして煩悶してゐると、或る夜どうした拍子か患部から非常に澤山出血した。繃帶は血みどろになつて、夜具の上には一面に血が流れてゐる、恁う云ふ風では何の設備もない自分の家で、とても養生は出來ないと、他人もさう云ひ自分も成程と思つた、成程と思ふのはもう體力が弱はつて我慢が鈍つて來た證據である。熱はこのとき四十度の邊を昇降してゐた。

先輩や友人の親切な勸告もあり、且つ神戸から來て呉れたK醫學士の取計らひで、僕はその翌日遂に京都大學の病院の一室に身を横たへる事になつた。生れてはじめて病院のベッドに圓かならぬ夢を結ぶ身となつたのである。

熱の高い所爲であらう、からだはベッドを離れて何だか中空に浮いてゐるやうな心持ちだ、患部は痛むし食慾などは全く無い。唯ださへ瘦せてゐる身體は憔悴し衰弱し切つて、自分には見えないが、容貌の如きも僅に數日の間に十年二十年ほども老けた老衰者のそれの樣に變つてゐたさうだ。あとで聞くと、この時は既に命旦夕に迫つてゐたので、醫員室では助手の人たちが、まことに氣の毒な事だと云つてゐたさうだ、もうとても助かるまいと云ふ意味なのだ。看護してゐる妻

や友人は、嚴にそれを私には秘してゐた。いよ〳〵切斷しなければならぬと云ふ事も、その手術の前日までは私に告げなかつた。何も知らない私は愚にも、矢張り一週間か十日もすれば退院して、遠い西の國へ出掛けるつもりで、船なども次の便船を心待ちにしてゐた位だ、あとで心やすい醫者の話では、若しあの時入院もせずに、我慢を張り通ほして横濱を出たならば、みごと太平洋上の鬼となつてゐたであらう、もう四五日も手術が後れ、熱が下らなければ、無論生命は助らないのであつたさうだ。

忘れもしない、四月四日の未明である。宿直の醫員が僕の病室へ來て何百グラムとやらの食鹽注射をした。前日から既に絶食を命じられてゐる。いよ〳〵手術をして足を切斷すると云ふのだ。朝になつて助教授のTさんが來て、生命には代えられませんから切斷します、ときつぱり申渡した。足を切つても、幸ひあなたの仕事には差支が無いので、とまで言葉を足した。私は素直に、何分宜しく願ひます、お任せしますからと答へた。頗る平氣であつた、あまりに平氣なので、わきで見てゐる私の友人や妻は甚だ意外に思つたさうだが、私自らも今考へて見て、どうしてさう平氣で返答が出來たのか我ながら不思議に思つてゐる。さうして達者にしてゐる時、若し誰かから――たとひ夫れが自分の十分信頼してゐる醫者であらうとも、――あなたの足を切りますよと云はれたらば、とてもあんな平氣な挨拶は出來ない筈である。少くとも私のやうな人間としては、多少の懊惱と苦痛となくしては、あの申渡を受取る事は出來ない筈である。考へて見ると、もう其時は體力の衰退と共に、我慢もなければ我意もない、唯だ他人の云ふままになると云ふ眞に憐れむべき弱者になつてゐたのである。實際、病勢の甚しく募つてゐた頃は、自分の周圍に動いてゐる人たちの、やさしい美しい方面ばかりが目についた。シニックなミスアンスロピックな心持なぞは微塵もなくつて、他人の心の情とか愛とか云ふ側ばかりを見つけ出しては、それにたよらうとしてゐたのである。肝癪を起さふにも、

その癥なるものがどこに行つて了つたのか、影も形もなく屏息して居る所は、私の生活史の上に於て、特筆大書すべき不可思議な一頁をなしてゐたと思ふと、寧ろ滑稽の感がある。

いよ〳〵死にかけてゐる時に、私の先輩も、友人も妻も、皆心から私のために盡くして呉れた。私が失ひかけた生命を取り止めたのは全く之等の人々のお蔭であることは云ふ迄もないが、夫と共に忘れられないのは、外科教室の人たちの厚意であつた。一體、世間の醫者と云ふ者のうちには、物慾にかられ虚榮にあこがれる言語道斷の俗物が多い。私なぞは、死むでもあんな者の世話にはなりたくないと思ふのがいくらも居るやうだ、ところが此大學の外科教室の人たちに接して、私は未だ曾て一たびもそんな不快な感を抱く機會がなかつた。貧寒な一個の讀書生に過ぎない私に對して、主任教授を始めとして看護婦に至るまでも、實に丁寧懇切を極めたものであつた。主任のIN博士が日本に於ける外科學の泰斗である事は年來耳にしてゐたが、私ははじめて診療を受けて、更にその淸節の士であり、また溫情の人であることをよく知る事を得た。當代稀に觀る高い人格の士であるのに、自分は深く敬服すると共に、恁ういふ人の診療を受ける自分は心から幸福だとも思つた。七旬にあまる入院中の隨分長い間を自分は一度も肝癪も起さず我儘も云はずに、唯だもう喜むで快く治療を受けてゐた。既に主任教授が恁ういふ立派な人であるから、その下にゐる醫員はもとより看護婦の末に至るまでも、實に丁寧で親切で廉潔で、私は之等の人たちから受けた溫い同情を今もなほ涙を以て感謝してゐるのである。

四月の三日と四日とは大祭日と日曜日であつた。しかし今は一日の猶豫もなり難いと云ふので、閉ぢてある手術室をわざ〳〵開かせて、教授助教授その他すべての人々が出て呉れられた。三日には運搬車に載せられて長い廊下を手術室に引出された。教授が一度とくと患部を「ウンタアズッヘン」されるのであつた。その際に手術臺の上に仰臥してゐて、自分は、女々しくも

「痛い」といふ聲を思はず洩らした。忽ちエーテルを嗅がされた。半醒半睡の狀態に入つてから、私は何でも大きな聲で喋舌つてゐたらしい。何を喋舌たかは記憶してゐないが、喋舌つた事實だけは漠然として覺えてゐる。あとで妻の話によると、その聲は手術場の外までも聞こえて、何だか演說のやうであつたさうだ。手術場から病室へ歸へされる時も、運搬車の上でまだ囈語を續けてゐるのを妻が制してゐた。いかになかば知覺を失つて居たとは云へ、自分がさう云ふ不作法な態をしたと云ふ事を後に聞いた時には、我ながらに恥かしくてならなかつた。

四日の午後、私の infernal leg は遂に切り棄てられた。何とかコッケンと云ふくだらぬ黴菌を、門戶を開いて歡迎しやがつた揚句、私の總身を苦め、生命の源をさへ絕たうとした惡むべき咒ふべき私の片脚はみごと切り放たれて手術場の一隅に轉むでゐたであらう。生れてこのかた三十幾年わが身にくつ附いてゐた物ではあらうとも、今では更に懷かしとも惜しとも思はぬ。二度とわが目には觸れぬやう、腐つたる足よ、奈落の底に落ちよ、惡魔の國に失せよ、と私は咒つた。

二　廿

手術の時に、助手から「大きい呼吸をなさい」と云はれる儘に思ひ切つて麻醉劑を吸ひ込むだ、おかげで其時のみならず、手術の後にも、何の苦痛も知らなかつた。仰臥したままで自分の足もとは見えないから、切られた後も、感覺は矢張足があるのと同じであつた。繃帶がしてある所爲か切られて無くなつてゐる足が重かつたり、ありもしない指さきに何か物の觸れるやうな心持もした。足は既うないのだと云ふ事を眞に確かめ得たのは、少し快くなつて自分の眼で足もとを度々見るやうになつてから後の事であつた。

食慾が全くなくなつて、唯だ僅にアイスクリームと少量の粥とで危い命をつないでゐる頃、私は獨りで色々と淋しい果敢ない事ばかりを考へた。天は私に生來弱いこの身體を與へておきながら、このうへまだ左脚

とまで奪ふて、迫害を加へやうとするのであるか。あらゆる不幸になやまされた舊約書の約百の話にあるやうに、何の罪あつて天は恁くまでも此身を苦しめるのだらうかと、うらめしくも思つた。今にして思へば如何にも意氣地のない話ではあるが、氣力の衰へた頃は實際さう云つた女々しい物思ひに耽つたのであつた。生れ落ちてからさま〴〵な不思議の運命に飜弄されてあまり幸福でもなかつた我身の過去を思ひ返へしては眠られぬ夜もいくつか續いた。系統を立てゝ物を考へるだけの精力が無くなり、痩我慢を突張るだけの體力も失せて了ふと、恁うも人はセンチメンタルになるものかと吾ながら愛想が盡きたこともある。

入院したのは三月の二十五日、春とは云ひながらまだ寒い日であつた。それから殆んど十日ばかりといふもの、自分は殆んど瀕死の狀態にあつたから、戸外のことも知らなかつたが、或る日、手術場からの歸途に運搬車に仰臥しながら廊下の窓から外を眺めた。入院した頃の冬景色とは打つて變つた春の美しさに、私は思はず驚嘆の聲を洩らすと、車を曳いてゐた看護婦がしばらく歩をとどめて呉れた。私はこの時ほど鮮かにまた強く、春といふものの印象を受入れた事は未だ曾てなかつた。三春の行樂を瞬時に縮めたとでも云はうか、私はその數十秒の間に春と云ふものの清新の氣を十分に吸ひ込むで、はじめて蘇生したやうに思つたのである。

春も漸く老いて、病院の青々とした芝草の上に櫻の花の散る頃から、青葉のかげ懷かしい初夏の候にかけて、二月あまりの長い間を、私は淋しい病床に日を送つたのである。脇杖に縋つて少し散歩が出來るやうになつてからは、色々な書物を取り寄せて濫讀した。椅子を芝生へ持出して、日なたぼつこをしながら、三四時間も讀書をする日があつた。平生あまり俗用がたて込むで忙しい時なぞは、一月位なら輕い病氣で入院して、思ふまゝに臥轉むで本ばかり讀むでゐたいなぞと馬鹿な事を思ふ事もあつたが、實際かうなつて見るといくら時間に餘裕はあつても、病院では本當の讀書な

ど出來るものでないと思つた。讀書は何と云つても矢張り自分の書齋の机の上に限る。夏の避暑地や溫泉場へ行くときに行李に重たい書物をうんと詰め込むで行つて、その半分も三分の一も役に立たなかつた經驗は今までにいくたびかある。況むや病院などに於てをやである。

病院生活といふものは、どうしても詩にはなりさうもない殺風景ないやなものである。殊に私の受けたやうな外科手術を詩題にしたものは自分の專門にしてゐる英文學のうちで考へて見てもその例は甚だ少い。誰にも第一に思ひ浮ばれる最も有名なものはヰリアム・アァネスト・ヘンレ William Ernest Henley（一八四九年生—一九〇三年歿）が一代の傑作として數へられる「病院にて」すべて二十八篇である。よほど以前に讀むでおほかた忘れかけてゐたこの詩集を、私は自分の病苦と共にまた思ひ出して、それを病院へ取寄せた。毎日手術場に引出されて繃帶を交換される苦しい病院生活の間にこの詩集を再び讀み直して味つて見やうとした。

ヘンレと云ふ人は、詩人としても批評家としても、やはり journalist の肌あひの人であつた。彼の詩集にはロンドォとかギラネルとか云ふ佛蘭西古詩の體を模した名作などもあるが、かれの特色はやはり、在來の因襲に反抗して新傾向を創めた作品、たとへば此病院の歌などに最もよく現はれてゐる。即ち今までは詩歌とさへ云へば、みやびた優美な言葉で詩的な題目をのみ歌ふのが常であつたのを、ヘンレは日常の平易通俗な言葉で、現在の事實や自分の直接經驗を極めて寫實的に描かうと云ふ新しい試みをした、ちやうどキプリングが汽關車のやうなものを詩題に取つたり、平易な俗語を詩に用ひたのと同樣で、二十世紀現代の英吉利の詩歌が、全體に於て甚だしく散文的に寫實的になつたのは、時勢の然らしむる所なりとは云へ、キプリングとヘンレと二人の感化も與つて大に力があつたらうと私は信じてゐる。この病院の歌などは、まさしく新傾向の曉鐘とも云ふべきものであつた。

ヘンレは十八の歳に學校生活をやめたが病氣のため

に遂に在脚を切斷しなければならぬ事になつた。當時エディンバラにリスタアと云ふ名高い外科醫が居て、この人が新療法を發見して、近世の醫界に一新時期を劃した。時は千八百七十三年のこと、當時貧と病とにやつれた、まだ名も無い一青年詩人のヘンレは、はるばるとエディンバラに來て、此國手を訪(たづ)ねて手術を乞ふた。かれは其時二十四歳であつた。ヘンレは二十ヶ月といふ長い間病院に居た。その間に得た自分の經驗を基(もと)として出來た製作が即ちこの『病院にて』二十八篇であつた。

先づ開卷第一章に患者が入院する所を歌つた一編がある。その結句に、

A tragic meanness seems so to environ.
These corridors and stairs of stone and iron,
Cold, naked, clean——half-workhouse and half-jail.

悲痛なる慘めさに包まれたりと見ゆる石と鐵との廊下階段
冷かに、赤裸々に、また潔らなり——半ば工場、なかば牢獄。

この最後の一句の如きは最もよく印象的に、病院といふものの感じを言ひ現はしてゐるやうに思はれる。

その次には待合室(ウエィチング)を詠じた一章があつて、終に下の句がある、

One has a probe——it feels to me a crowbar.
A small boy sniffs and shudders after bluestone.
A poor old tramp explains his poor old ulcers.
Life is (I think) a blunder and a shame.

一人は探針を持てり、吾はそを鐵棒の如くに思へり。
小きわらべは緑礬を嗅ぎて身ぶるひせり。
又みじめなる老漢のおのが壞瘍を説明せるあり。
われ思ふ、生はかくて大なる過にして、また恥辱ならずやと。

毎日手術場に出て繃帶の交換をして貰ふとき、探針——即ち獨逸語でいふゾンデ——といふ奴か私に取つて何よりの苦手(にがて)であつた。醫師が看護婦に、ゾンデを持て來(こ)いと命ずるのを聞いただけで、いつもぞつとした。あの探針を傷口に突込まれる痛さを思ふと、いかにも一本の太くもない針が、鐵棒(かなぼう)のやうに感じられ

る。朝起きても、けふはまたあのゾンデかと思ふと、思ふだけでも痛かつた。またあの手術場の惨澹たる光景を見ると、人は懲くて猶ほ生きなければならぬ者かと、私は時々さう思つた。いかにも此詩の句にあるやうに、生きると云ふことが何だか一つの過誤でありまた恥辱であるかのやうに思はれて、此一句の意が最も痛切に私の胸に響いたのを記憶してゐる。

私は前後三回ほど手術をうけたが、その度(たび)ごとに全身麻酔をされた。數をかぞへて大きい呼吸をしてゐる間に身體(からだ)は何だか眞暗な深い深い穴の底へ沈むで行くやうな心地がした。ヘンレは『手術(オペレイシヨン)』と題した一篇のうちに、この麻酔をかけられた折の心もちを歌つてゐる。醫者は患者の面を布片(ナプキン)で蔽ふ、總身の感覺は段々に失はれて行くその時だ、

And you gasp and reel and shudder
In a rushing, swaying rapture,
While the voices at your elbow
Fade—receding—fainter—farther.

Lights about you shower and tumble,
And your blood seems crystallising—
Edged and vibrant, yet within you
Racked and hurried back and forward.

Then the lights grow fast and furious,
And you hear a noise of waters,
And you wrestle, blind and dizzy,
In an agony of effort.

かくて汝は喘ぎ、よろめき身は慄ふ。
突きくる、動搖の夢中のなかに。
その時そばの物音は
かすれ——退き——かすかにも——遠ざかる
そば近き光は雨と降(ふ)り、轉び落ち、
汝が血は結晶するかとばかり覺ゆ——
微動し發動し、されどまた五體のうちを
責め苛(さいな)まれ、前後に激流す。

やがてまた光は、しかと烈しくも照らす。
耳もとに水聲を聞く。
かくて汝は努力の苦みに、
目盲ひ、目くるめきて悶くなり。

肉體の苦痛を之ぐらゐまで寫實的に描いた詩は、他にあまり多く例はないと思ふ。最後の第二十八篇は『釋放されたる者』と題して、長い間の苦しい、病院生活を免れて、いよ／＼退院した時の心地を寫してゐる。牢獄の幽囚から釋放されたものでも恁うはあるまいと思ふほどの嬉しさ、いつも見なれてゐた街の景色さへ皆新しい美しい別世界のやうに思はれる。あの心持は、自分で病院生活を送つた經驗のある人にしてはじめて知られるのであらう。いま最初の數行を引くと、

Carry me out
Into the wind and the sunshine,
Into the beautiful world.

O, the wonder, the spell of the streets!
The stature and strength of the horses,
The rustle and echo of footfalls,
The flat roar and rattle of wheels!
A swift tram floats huge on us… …
It's a dream?
The smell of the mud in my nostrils
Blows brave—like a breath of the sea!

われを出でしめよ。
外氣と日光とへ。
美しき世界へ。

ああ街の不可思議、魔法！
馬のたけ高く、力つよき、
足音のさゞ／＼と響くも、
低音のどよめき、車の轟きも（みな不思議！）。
速かなる鐵道馬車は、形大きく、こなたへ來る……こは
夢か
泥土の香、鼻をつきて
強くにほふ——さながら一陣の海風の如く。

病院を出て、久し振りで街上の景色を見たとき、耳目に觸れるもの一として不可思議の種ならざるはなく、

すべてが何だか魔法をでもかけられた別天地のやうに感じられる。私のやうに僅に七十日位を病院に送つたものでも退院して電車を見たときは、何だか不思議なものを見るやうに、小供のやうな心もちで物珍らしく思つた。況むやこの詩人のやうに二十ヶ月も病院にゐては退院した折の心もちのこの叙述は決して虚僞でも誇張でもなからうと私は思ふ。馬が無闇に背が高く見えて、重い車などを曳いて行く其力の强さも、すべての市街の噪音も、皆悉くもの珍らしい。殊に長い月日を、病院の藥くさい室にのみ閉ぢこもつて居たものがはじめて戸外に出て、久しく忘れてゐた懐かしい土の香を嗅いだ其强い感じは、さながら一陣の海風に送られてくる潮の音のやうだと云ふ此最後の二行などは、最も巧妙に暗示的に出來た句だと思はれる。

　病院生活の苦痛を細かく私の拙い筆で書き立てては、却つて讀者に迷惑だらうと思つて、恁くはヘンレの詩篇を借用して來た次第である。

三

「もう一月、もう二週間と、氣休めをばかり云つて引つぱつて來たのが、今度はいよ〳〵癒りましたね」

助教授のTさんが笑ひながら恁う云つて、繃帶を取り去つて吳れたのは、八月の初めであつた。それでも切斷部の近所の皮膚が直ぐに爛れたり何かするので、Tさんは夫れに手當をしながら、

「實に弱い皮膚だなあ」

と、さも感に入つたやうに云ふ、僕が、

「面の皮ばかり厚くなつて、他の所が薄いので」

と云ふと、そばにゐる看護婦が、くす〳〵笑つてゐた。

　この頃からして、私の體力はすでに舊に復したのみか、初秋の頃になると、肉つきは發病前よりも更によくなつて、體重もうんと增した。義足を附けて街上を横行濶歩するやうになると、健脚人を驚かすに足るものがある。「えらい勢だなあ」と、褒めるのだか冷かすのだか分らぬ事を云ふものがある。「何だか肥つたやう

だが腫れてるのぢやないか」、などゝ失敬な事をいふ奴もある。「馬鹿を云へ、君などは此義足で蹴り飛ばしてやる」と威張つて見せる。

死にかけたときは何故あんなに腑甲斐ない女々しい人間になつてゐたらうと、今さら妻や友人に對してもうら恥かしい。全快して見ると何だか強い仇敵にでも打ち勝つたやうな、大魔王を征服して凱歌を奏したやうな心持になる。英氣今は十倍して満身にはち切れるやうだ。之からはどんな勉强しても、既う大丈夫だと思ふ。何の本を讀むで見ても實に面白い。ちやんと僕の頭に這入るやうに書いてあるやうな氣がする。天下また恐るべく憂ふべき無しと思ふ。生のよろこびが、しみ／＼と味はれるのは、此時であつた。

世の中にはすべて報償といふ事がある、得るところあれば失ふところあり、失ふ所あれば得るところがある。私は左脚を切斷してから、不思議にも、年來の痼疾であつた胃病といふものを知らなくなつた。消化不良のために生ずる胃の苦痛といふものを忘れて了つたのだ。この頃では既う大抵の病氣は、誰でも足一本切り放てば治るものだと私は信じてゐる。全く前人未發の新療法だ。それでも治らないやうな頑固な病氣は、足を二本とも切つて了へばよからう。またかの愛錢病、虚榮病、怠惰病などいふ下等な痼疾に至つては思ひ切つて首を切斷して了へば治ること疑なきものだと確信してゐる。

私が病院で左脚を切斷した時、いろ／＼の事を云つて慰めて呉れた人があつた。脚を切ると大隈さんのやうに口が達者になる、頭が良くなる。長生をする。恁ういふ事を屢々聞いた。しかし私自身では、明治の初年の名優田の助の事ばかりを考へた。鉛毒のために手も足も皆切つて了つたこの女形は、終には胴體だけを竹籠の上に載せて花道を曳いて行つたさうだ。それで立派に振事を演じて、觀客をやんやと云はせたものだ。妙技神に入つては手足を缺いで、なほ立派に役者が勤まつたのである。大隈さんも偉からうが、僕は田の助に於て、更に大なる不可思議なる人間力の顯現を讃嘆せ

ずには居られなかつた。人はすべて、根本の「生の力」をさへ失はなければ、肉體が受けたる多少の損傷の如きは言ふに足らぬと私は信じてゐる。

友人久野法學士の令妹は、自働車のためにあれ丈けのひどい負傷をされて、しかも今では全く健康を恢復して再び樂壇に立たれると聞いた。また私が入院中に病床で讀むだ二月二十六日の倫敦タイムスには、佛蘭西のサラ・ベルナアルが、私と同じやうに右脚切斷の手術をうけたと云ふ記事を見た。しかも今ではこの老女優も、再び盛に活動してゐるらしい。私なぞもぐづぐづしてゐては、恁ういふ婦人に對しても恥かしいわけだ。之からは今までの二倍三倍も奮勵努力する必要があると思つてゐる。

「はじめは四本の脚、なかごろ二本になつて、遂には三本になる。脚の數の少いほど強いものは何?」

これは讀者の知らるゝ通り、希臘のスフィンクスの謎だ。この謎を解き得ないものは命を失つたのである。王エディパスは、みごとに「人だ」と答へた。赤ん坊のときは四つ足で匍ふ、老年になれば二本足に杖を添へるから三本、中年の時は僅に二本で之が一番强いといふのだ。しかし私のやうな一本脚のことは、少しも云つてない。若し脚の數が少いほど强いといふならば、一本脚は普通の人間以上に更に强いものであらう。それこそスフィンクスの謎にも無い强者である。人間といふものが、更に一段進化すると脚は一本で濟むので、之を名づけて超人と云ふのだ。どうも私のやうな超人の目から見ると、二本脚の普通の平凡な人間なぞは、甚しく不恰好で不體裁極まる弱者に見える。

一本の脚で立つと云ふと、私は直ぐに白鷺のことを思ひ出す。あの長い嘴を前に突き出して、頸をあとへ引いて、哲學者が落着いて物を考へ込むでゐるやうにぢつと目をつぶつた儘、片足で水際に立つたあの姿はいかにも清く、いかにも美しい。穢はしい肉の生活を離れ、塵寰を超脱した仙骨の士とまでは行かなくともあれを見ると何だか孤高清節の人を見るやうで、ゆかしい。動物園なぞで澤山の水鳥が群をなしてゐるとこ

ろでも白鷺だけはいつも獨り離れてゐる。例の片足で立つて、外の鴉や家鴨などががあ／＼云つて餌をあさるのを、さも五月蠅と云はぬばかりに、白眼で見下してゐる。人は何でも一口に禽獸と云うて侮つて了ふがあの白鷺の美しさ淸らかさを見ては、名利をのみ追へる、脂ぎつたる俗惡の人間どもは、自ら顧みて少しく耻づる所あるべきだらう。鷺のやうに瘦せた細いからだを、之からは片脚で支へなければならぬ私などは、先づこの美しい鳥にあやかりたい者だと思つてゐる。

私は世に平凡とか普通とか云ふと位つまらぬものはないと思つてゐる。若し自分が好い方で他人にすぐれて居なければ、わるい方ででも構はないから他人とは變つてゐたいと思ふ。ところがつく／＼考へて見ると自分は頗る平々凡々たる男に出來あがつてゐるのだから仕方がない。外のことは兎に角、容貌からして先づ頗る平凡だ。美男でもなければ、さりとて別に醜男でもない。横目竪鼻の何の奇もない面をさげてゐる。勿論その目たるや、學生時代に或る者が八方睨みの掏摸だと評した位に多少ぎよろついて、異彩を放つてはゐる。鼻なるものも亦た日本人には珍らしいほど高くて氣障な鼻眼鏡が安全にかかる位のものだ。しかし共に未だ以て大に天下に誇るに足る程のものではない。ところが今度脚が一本になつたので、ここにはじめて僕の肉體は流俗の平凡界を超脱し得て、かの二本脚で無ければ歩き得ないなぞと云ふ凡庸の徒を眼下に見くだすに至つたのはみづからの大なる喜びであり、また誇りとする所である。自分がたとひ人間としてのあらゆる點に於て平凡であらうとも、この隻脚であると云ふ一事が俗衆と異つてゐることを感ずるだけでも、禁じがたき一種の愉快を覺えるのである。世の常識萬能の俗輩には到底恁ういふ心もちは解るまいが、この愉快を思ふと多少の不便の如き固より云ふに足りないのである。（了）

第卅七議會劇の花形

鐵拳禪

一

△霜早く日比谷劇場蓋明けり——是れ帝劇を謂ふに非ず、公園一つ隔てたる貴衆兩院を指すなり。而も兩院は娯樂の境場に非ず、儼然たる立法の府なり、敢て之を劇場に比す、其の所以なくんば非ず。

△帝國議會の神聖は、夙に世人の知る所。議員自身も亦、何ぞと云へば直ちに議會の神聖を喋々す。然れども『神聖』は掛額の文字に非ず、彼等の喋々するに依りて其の價値を增さず、議會の神聖は、其の威信を發揚するに由りて始めて保たる。無意義の喋々は、却て之を瀆すものなり。

▽神聖の語を聞かざる以前、議會は森として神聖の氣滿てり。威信從つて行はる。議員又持する所高く、其の言語を謹み、其の態度を正しうし以て自らの品位を發揚するに努めたり。立法府の威嚴、玆に於てか在り。

△貴族院は活氣なきも、肅として紊れざること、今なほ昨に異ならず。議長德川家達の態度、言語、悠揚寛雅なるも、議場の神聖おのづから保たる。衆議院は然らず。議長島田三郎大聲疾呼し、荐々に懲罰を課するも、議場の混亂名狀すべからざるものあり。

△貴族院の靜肅は、公德川の擧止、若くは議場整理の手腕のみに非ず。議員自ら其の一擧一動を愼み、一言一行を苟くもせざるにあり。彼等倘し節制なくんば、如何に貴公子多しと雖も、其の神聖を確保すべからず。衆議院の紛擾は、島田の信望に乏しく、議場整理の能力に缺くる所あるは否む能はざるも、議員自らが黨派心に驅られ、徐々に賛否の野次振を無遠慮に發揮するに由る。

△衆議院に『野次』を輸入せるは何人なるを知らずと雖も、近來此の野次振は露骨となり、單に『ノー』『ヒヤ』の二語に止まらず、或は冷評を浴せ、或は半疊を入れ、甚しきに至ては一齊に標札を叩き、足踏み鳴して、演說の妨害を試みるに至れり。野球の野次、國技館の聲援と雖も、斯の如く喧噪、無秩序のものは非ず。而して彼等意氣揚々、國民の選良面をして叫んで曰く、斯の如きは議院の神聖を瀆し、議會の威信に關する大なりと。

▽人を笑はするも程こそあれ、自ら車夫馬丁の體を學び、自ら騷擾を惹起し、自ら威信を失墜し、恬として耻ぢざるは、其の厚顏寧ろ曾我廼家の喜劇に優れり。素より喜劇以上の喜劇なれば、突發的の胸案に成り、

定れる筋書によりて演ずに非ざるなり。然れども、政治の大活劇に至りては豫め在野黨によりて其の筋書を書き卸さるゝを例とす。

△貴衆兩院——殊に衆議院は、近時芝居の氣分浮べり。傍聽者の數時間前より詰め掛くるは昔の芝居見物の女衆が曉かけて騷げるに似たり。彼等は演說を聽くに非ず、演說者を見んとするなり。而して演說者を見ると役者を見るの氣分を以てす。

▽されば、傍聽席に在るもの、啐に耳を傾くるより、先づ顏を凝視せんとす。終りて更に、其の擧止風丰の微細なる長所短所をも洩さざらんとす、背後のもの、我勝に伸び上り、甚しくは、一に唯演說者の顏を見んが爲めなり。演說者も亦大向の氣受を氣遣ひ、往々脫線して、政府者を鏖殺せんとすることなきに非ず。

▽帝國議會は、政治の舞臺なり。所謂政界の策士、國士、論客等が、其の辯舌手腕を試みる晴の場所なり。活動の壇場なり。不敬に渡らざる限り、言論は自由なり團十郎張に宰相を一喝する位は何でもなき事なり。而して登場する者、立役あり、敵役あり、女形あり、議案を脚本として活動し、波瀾を激成す。

▽斯く觀察し來れは、議會も亦趣味あり。歌舞伎、又は國技館以上の見ものなり。政治に趣味を有するもの、國民の休戚を念とするもの、國家の前途を憂ふるもの、宜しく玆に臨みて帝國の選良を監視するを要す。政治は彼等議員の爲めの政治に非ず、國民の爲めの政治なり。官僚の利器に非ず、議員の玩具に非ず、彼等の專私に委して、閑却する能はざるなり。

二

▽前議會は未曾有の紛擾裡に閉會を告げ、而も一日の出席停止に處せられたる懲罰事犯者三名ありき。今議會も亦其の紛擾の餘波を受け、開會匆々議長島田に食つて掛かるあり。議長に逆捩を喫せられて懲罰事犯に問はるゝあり。衆議院の風雲甚だ穩かならず。例の喜劇以上の喜劇は勿論、一大活劇の演ぜらるゝや必せり。

▽活劇の立役は、今の所何と云うても犬養毅なり。彼れの行動或は非難なきにあらざるも、彼れが甚しく主義主張を曲げず、多年在野黨の領袖として渾身の力を發揮し、勇猛精進するの勞を多とせざるを得ず、其の人矮身痩軀なるも、狼面にして眼に炯々たる底光りあり。一たび論壇に立ち、彼れが滿腔の鬱勃を吐けば、舌鋒霜の如く心膽を寒からしむるものあり。

▽其の技の拙なるもの、其の人物の小なるもの、舞臺に立てば舞臺面を狹うす、然るに彼れは、狹き舞臺面をなほ廣く見するの力量を有す。開口謦咳、興涌き、油乘り來れば、快辯縱横、論斷明確、時に皮肉を縱り交ぜ、時に經綸の色彩を施し、飽くまで聽者を魅了せずんば止まずと雖も、意氣揚らざる時は、痛烈を極むる能はず。

▽白頭總裁原敬は在野の多數を擁するも、容易に論陣を進めず。灰色の城廓に據りて、旗色を明かにせず。後門に妥協の一路を存するを例と

す。之が爲めに彼れは往々戰機を誤り、見惜き敗衂をなすとあり。平時の用意或は必要ならんも、一氣に倒壞せんと欲せば、神算成るの後、驀進すること義經の如くならざる可からず。

▽原は策の人たるに於て犬養に似たるも、其の策を進むるの方法は即ち異なれり。彼れは毎に政權を掘るを本位とし、之が爲めに非立憲の非難を受くるも何の其の、諸有手段を講じて憚らず。黨勢の緊張を圖る、或は斯の如くならざるを得ざるべしと雖も、是れ進歩せる政治家の取るべき良策に非ず。彼れの人氣役者たるべくして、人氣役者たり得ざる所以のもの、全く玆に存す。

△彼れの人氣役者たり得ざる一因、なほ他にあり。彼れは新聞記者の操縱を解せざると、官僚的傲岸を持すると、群小を周圍に吸收して新人を疎外するが故なり。近時漸く官僚的傲岸を脱し、操觚者に接近するの風なきに非ざるも、伯大隈の友人の如く談笑する、犬養の襟懷を披くの狀あるに比すれば、未だ到らざること遠しと云はざるを得ず。

▽法相尾崎行雄は好んで新聞記者を引見し、隨時意見を發表するを吝まず。其の爲めに禍を買ふことなきに非ざるも、政策の秘密を尊び、何事に對しても口を緘して語らざる者に比すれば、『立憲大臣の氣分は即ち在り。今や敵役として舞臺に立つも、何程か觀客の同情を惹き、新聞眼の興味は其の身邊を去らず。

▽尾崎の彈劾演說は、民衆唯一の攻擊の標的なり。彼れが桂内閣を痛擊して、『玉座を胸壁となし、聖旨を砲丸となせり』と論詰せし當時を回想すれば、今昔の感なき能ず。彼れ壇上に立ち現れて、巧に攻擊の矢を防ぐと雖も、云ふ所多く詭辯に失す。往年の氣魄、往年の生彩、今何處にかある。

▽藏相武富時敏、又然り。曾て主張せる廢減稅の主張を一擲し、非募債主義に朱書を加へ、所謂臨機應變の財政策に血路を開きつゝあり。曾て議政壇上の花形たる、其の端正の態度、紅木屋張の辯舌、纔かに其の面影を存すと雖も、意氣甚だ揚らず。大鵬の志漸く銷沈し燕雀の笑殺する所となる。彼れが贏ち得たる藏相の衿りは、其の微笑は、霜枯の紅山茶花よりも何淋しきに非ずや。

三

▽現下論陣を逍め、鬪將を以て目さるゝもの、元田肇あり。關直彦あり。關に次ぐの猛者に、高木益太郎、鈴木梅四郎等あり。政友會の鬪士に、小川平吉、齋藤珪次、小久保喜七、松田源治、三土忠造等あり。委員會戰に、本會議戰に、必死の活動をなすを見る。

▽元田は攻擊に長ぜず。防戰に敏なりと稱さると雖も、一種の奇襲術を[illegible]。彼れの音辯、敵を壓するに足らざるも、其の泣するが如く、訴ふるが如き熱辯は、個々人を動すもの無きに非ず。關は論理明晰、含蓄に乏しと雖も、多少の辛辣はあり。年來攻擊を是れ事とするも、未だ强弩の内甲を貫くが如き痛快味を發揮せず。

▽高木は駄辯、能辯、奇辯怪舌を弄するに於て、魚河岸の贔屓と、質屋

の信頼と民衆の喝采とを博す。前議會以來、殊にメートルを上げ、選擧干渉を剔抉して、人權擁護を絶叫す。『正宗壜一本、辨當一個の選擧違犯を取締るに辛辣にして、巨頭大浦を逸するは何ぞや』と執拗く所、盛んに大向を唸らせずんば非ず。

▽鈴木は樸實の裡に奇辯を竄し、經論家張の辯舌を以て、政府に肉迫す。小川の對支外交の失敗を痛擊する。小久保の志士的慷慨を發揮し、嗄れたる音聲を以て皮肉を行る所、二種二樣の特色はあり。齋藤の突擊に至りては、怪辯辣手並び進み、敵黨を粉韲せずんば已まざるの概あり。

▽松田は功名心に富み、雄を法博花井と競はんとす。其の力量未だ足らずと雖も、花井の政府援護に傾き、其の能辯を節約する今日、彼れの如きも亦憲法論を提げて、政府の非立憲を痛罵するを得ん。三土は教育界の出なるも、策士的手腕と論客的辯舌とを有す。未だ大に用ゐられざるも將來或は發達の見込あり。

▽官界の出身に、床次竹二郎、杉山四五郎あり。杉山は稚氣を脱せざるも、鬪士的元氣あり。床次は夫れ程の大人物に非ざるも、黨人を率ゐんとするの用意はあり。時に吏僚的常識に囚はれ、論戰機鋒辛辣を缺くの憾あるも、粗放の黨人に望む能はざるの綿密を有す。

▽『能』と云ひ、『豪』と云ふも、是れ人物なり。固より一長一短は免れず田川大吉郎の民間にあるや、器用に文を草し、又識見の光を矜れりと雖も、法參たるに至りて多少の束縛を受け縱橫の論議を聽くを得ず。關和知、年壯氣銳を以て稱されたるも、防禦の塹壕に籠りて、又往年の武者振を顯さず。

▽防將片岡直溫、久しく關西の財界に雄視するも、官僚系の策士なり。今や其の黃金時代に遭逢して、得意滿面の體なり。民衆、彼れを以て定九郎視するも、最早椽下の瘦鼠に非ず。論難駁擊の辯舌、侮りがたきものあり。小河源一、野猪の如く突進し來るも、固より議場面の賑やかしに過ぎず。其の技巧に何等かの價値を附せんとするは、彼れが政界の年功に對する幻影のみ。

四、

▽新進人物にして、馬鹿にメートルを上げ來れるもの、長島隆二、林毅陸、廣岡宇一郎、森田小六郎等あり。盲將高木正年の時勢を達觀せしが如き口吻、政界の暗黑面を透視するが如き態度を以て、論戰に火花を散すと、好個の對照ならずんば非ず。

▽長島は猛然に現内閣に殺倒し、之を斃さずんば已まずとする者なり。彼れの論調偏辟偏見の嫌なきに非ざるも、青年の『熱』は即ち在り。岳父の秘庫と元老の寶藏より竊り來れる材料を以て、同志會を罵り政府者の急所を突く手練の早業は、彼れが今日の名聲を贏ち得たる所以。廣岡は未だ顯はれざるも、其の論鋒の銳利なる、他の意表外に出でて奇功を奏する。聊か議會の珍とするに足る。

▽林は慶應義塾教授、何程か其の印象の手傳ひてか、辯舌に講義臭あり、論調に學者の冗長あるやに思はる。然れども、彼れは所謂黨臭に染まず

事情に囚はれず、自家の主張に忠なる、毅然たる態度は稱せざるを得ず。森田は副參政官を爭ふ程の人物なれは、權勢に動かされざるに非ざるも、徒らに票決機械に甘んぜざるは甘んずる者に比すれば、大に勝れり。

▽法博大場茂馬、小林丑三郎は、其の專攻せる智識を以て、議政壇に異彩を放つ。大場の刑事政策を批判する、小林の財政策を攻擊する、冗長に失して剴切に缺くる所あるも、政府者に對する痛棒たるを失はず。議員の居睡を以て、彼等の演說の價値を定むるの標準となすは、少しく酷なり。

▽貴族院に於ける政友派に、毒を以て毒を制するの筆法を用ゐるもの。法博水野錬太郎あり。橋本圭三郎あり。犬塚勝太郎あり。彼等は役人時代に得たる觀察と經驗と手腕とを基礎とし、現內閣の施設に對して手痛き質問を試み或は其の積弊を把羅剔抉せずんば已まず。

▽田中源太郎は多納議員中、稀に見る論客なり。齡漸く傾き、法博桑田熊藏の學殖と將來とを有せざるも、彼れが如くに沈睡せず、頻りに質問の矢を連發す。宛然齋藤別當の白髮を染めて。戰陣に臨むの雄姿を髣髴す。其の馬力の强き、全く愛姿の感化なりと云ふ者あるも、深く之を詮索するに及ばず。

五

▽近時。上院の陶醉を破れるは、男目賀田種太郎、澤柳政太郎、仲小路廉、鎌田榮吉等の不平兒ならずんば、覇氣滿々たるの人物なり。然れども、彼等を以て上院の神聖を瀆すものとなす可からず。何となれば彼等は議場の騷擾を惹起するに非ず、其の沈滯せる空氣の刷新を期するにあればなり。

△男目賀田は、財政に對して一隻眼を有す。往々客氣に驅られて諸種の問題に容喙し、或は脫線することなきに非ずと雖も、論鋒犀利、匕首を肺腑に貫くの概あり。澤柳は社會風敎に立脚し、之を以て凡ての問題を論議するの傾向あるも、奮鬪力戰目ざましきものあり。論旨透徹、其の演說を聽く、恰も彼れの文に接するに異ならず。

▽仲小路は、剃刀の銳利と、正宗の切れ味とを兼ね、細大共に之を料らんとす。一種の才辯なるも、多少の官臭を帶び人に依りては毛嫌すと雖も、空理空論に流れず、實際に觸接し事實を離れざる所に、彼れが觀察の周到と識見の光輝はあり。蓋し官僚最後の策士たるに於て、子平田に亞ぐや、知るへからず。

△鎌田は理論家、舌鋒一たび動けば、其の觸る所の總てを理論し論議せずんば承知せず。澤柳と共に、論壇の双璧なり。其他何種の問題にも出浚婆る男高木兼寛あり。現內閣の財政を攻擊して剩さざる男高橋是淸あり。奇論縱橫、鐵騎突出する底の男後藤新平あり。

▽華胄議員中、異彩あるもの、理窟屋の子前田利定あり。明敏の男吉川重吉あり。奇警の伯奧平昌恭あり。論策の伯林博太郎あり。既成品なるも、男久保田讓の雄姿、又逸すべからず。如上の諸士、各其の能を發揮し、其の才を活用するに於ては、上院も亦下院に劣らざるの壯觀を呈するや必せり。

評論

思潮評論

中澤臨川

生命の凱歌

昨年十一月は我等にとつて永世記念すべき曠古の御大典が行はれた。十日、紫宸殿に於ける御卽位の大禮に續いて、十四日には聖上自ら春興殿に出御、大嘗祭の御儀を採らせ給つた。猶續いて樣々の神事があり、そのあひだ、恩赦令が發布せられ、養老賑恤金が下賜せられ、神社の昇格が行はれ、故人今人に對する贈位、敍位、授勳、授爵が仰せ出だされた。下民は國を擧げてひたすら仰ぎ祝ひ奉るに、日も足らず方法も盡きた有樣であつた。晩秋薄日の景は一轉して陽春暉光の趣と變り、霜枯れの鄙も空ら風の都も、大小の祝灯とイルミネーションと國旗とで埋もれた。かくてさま〲な奉祝の盛儀が月を越えてまで打續いて、その歲も芽出度く暮れた。

かゝる尊き大典の又となきことは言ふまでもない事ながら、恰も世界は爭亂と動搖との渦中にある時期に當り、新しい運命を前途に荷ひつゝある我國に此盛事の行はれたといふことは、偶然とは思へないほどで、そこに深い適切な意義を悟らずにはゐられない。さるにても、我國民には之に對するだけの聰明な用意があつたであらうか。彼等には大典の意義を解して之を奉祝するに就ての誠實な覺悟が充ちてゐたであらうか。儀禮は卽ち足りた、通り一片の祝意は卽ち通じた。奉祝門と花火とイルミネーションと提灯行列との外裝は至て賑やかであつた。然かし唯だそれだけではなかつ

たらうか。國民は心からの祝意を懷きながら、平生の心掛の足りない爲めに、徒らに虛禮に走り過ぎ、覺醒と發奮とに依て深く祝し遠く慮るだけの用意を缺いてはゐなんだらうか。

紀念すべき十一月十日を過ぎて間もなく、祝賀に狂した國民の心は夙く疲れてゐた。彼等は物珍らしさに暫く浮かれ迷つたまでゞ、それも日ならず醒めてみれば、空なる心は却て反對に寂寥の襲ふに任せるほかはなかつた。滿都を埋め鄙里に連る紅白の裝飾も、夜の天地を焦すイルミネーションも、最早彼等の眼を聳てしむるに足りなんだ。

折から、その月の廿日は舊曆十五夜に當つた。淅風の吹き澌めた一碧の暮天には靜々として滿月の昇るのであつた。肅として水の如き月光は空に流れ、地に敷き、枝に映り、霜を照らし、群がる人の子の影を地上に落した。寂しき者は寂しみの惠みを受け、悲む者は悲みの甘さに融かされ、空なる心には新しき泉を與へ、驕れる者を挫き、騷げる者を靜め、かくて昨日までの浮き返つた人心は急にその故郷を見出したかの感があつた。

一片の寒月の輕く中天に懸つた下には、幾萬燭のイルミネーションが何れだけか薄紅く、醜く、喘ぎつゝあつたであらう。人の子の落した影の淡さ、哀れさ。昨日までの空ら騷ぎを顧るにつけ、一種惡性の寂寥と人心の腑甲斐なきに對する憤怒が我等の心に浮ばざるを得なんだ。此寂寥は我等の足らざる所から來たのである。歡樂の後の哀情は、その歡樂の泡に一時の出來心に過ぎなかつたことを示す。曠古の大儀を祝し奉るに當り、我國民に全く永久的の用意の具はつてゐなかつた事は、此の一事が最も好く談つてゐる。かくて歲は暮れた、芽出たく歲は暮れた。

大正四年は世界的に最も由々しき歲であつたと同時に、日本からすれば、御卽位の盛儀以外には、最も醜い歲であつた。口には高遠の理想を稱へながら些の爲すなき虛言政治家を首相に戴ける內閣の施した跡は、

至て拙ないものであつた。しかもその何れもが政略と方便の道具に供せられないものはなかつた。偶ま學制改革案のやうに、其精神に於ては時勢に適切なものがあつても、施政者の誠實が之に伴はない爲め、何れだけか世間から輕く見られてゐることであらう。更に閣員の出處進退に到つては、その劣惡の程度は何物も及ぶものでない。時と處とによつてその說と節とを二三にし、公器を弄して人を欺く者もあれば、學者としての多年の主持を一擲して恥ぢとも思はない者もあるといふ工合で、現代式 Political dilettanti の性質が遺憾なく發揮せられた。

之に對して政黨も意氣地がなければ、國民も意氣地がない。實業の方面でも、藝術思想の方面でもが、新しい顯象一つ、新しい人材一人出さずに、社會一般が重苦しく淀んだ空氣に壓せられて、身動きもできないやうな有樣で推移して來た。

此の如く沈滯した社會に於て、最も失望すべき顯象は、青年の間に反抗の氣勢の甚だ欠けてゐることである。彼等はその本然の特性とする清新な夢想にだに堪へないやうにも見え、華やかな『青春（アドーレッセンス）』の經驗を履まずに早老したのではあるまいかとも思はれる。

誰か玆に若い力を携へた者はないか。『反抗』を使命とする偉人はゐないか。そして今の社會に對して『否な』を宣言し、自分の『然り』を强いうる者は出てこないか。

『社會よ。汝は私を孤立させた。汝は道德的に有害な瓦斯の中で私の若い旺んな心を窒息させようとする。しかし私には聲がある、力がある。その力を以て私は今日の不健全な文明に對し、富と權力との橫暴に對し、似而非（えせ）才人によつて汚された民族の理想に對し挑戰するであらう。私はかう宣戰するであらう「汝は僞る、汝は眞の日本を代表してゐない」と。その爲めには私は私のもつ凡らゆる誠實と聰明とを傾けて悔いないであらう。私の力の盡きた時には、私は聲限り叫ぶであらう。誰かゐないか、私に從ふものは』――と言つて立つ者は無いであらうか。

一方世界の形勢は一刻も我等の油斷を許さないかに見える。怠惰に馴れた人心の安價な豫想に反して歐洲の戰亂は益々その火の手を擴げつゝある。人心は今や血に餓ゑ血に馴れつつ誰憚る所なく、其獸性を發揮して、虐げられた白耳義に一顧をくれる者も無くなつた有樣である。禍亂の手は刻々に波斯から印度まで傳はつて、東洋の天地をも其渦の中へ卷き込まずば已まない形勢にある。幾百年の文明が仕上げ了せた平和も幸福も今は風前の燈火のやうに搖いでゐる。愛と智慧とが幾代か手を携へて忍苦の礎の上に築き上げた宗教、博愛、藝術等の伽藍も、戰爭といふ地震の前には餘りに脆く壞されるのである。之を思ふ時に、人間の努力の誠にはかなく、自然の力の飽くまで冷酷に、生命の未來の賴りなき感じの起らずにゐようか。ゲーテがフアウストの書齋でメフイストフエレスをして囁やかしめた深酷な呪語の、改めて我等に恐怖の念を起させずにゐようか。外なる自然の威力と内なる獸性の魔力とが相携へて共力を揮ふ前には、意識もなく意志もなく、凡ては暗黑であり、凡ては破壞であらねばならぬ。

一九一五年を以て、人類が曾て生存せし以來の最大暗黑時期、最大恐怖時代であるとするに、誰か異議があらう。

さるにても我國民はかやうな非常時代の意義を體得してゐたであらうか。自國の現狀につき、大和民族の未來に就ての覺悟が立派に備はつてゐたであらうか。悔悟と反抗と發奮とが多少なりとも彼等の沈滯した心に波を擧げたであらうか。人心を新たにするに就て絕好な御卽位の大典といふ一大出來事を期として、價値ある永遠性の或物が國民の覺悟に上つたであらうか。

さもあれ、我等は決して失望しない。

生命の道は進步そのものである。それは無限の精神三角形の斜面に沿つて、前方にまた上方に確實な步みを採りつゝある。この事は正に事實であり、また人間の心の奧底から來る堅い信念である。何物もこの信念を犯すことが能きない。宗教も眞理も愛も藝術も皆なこ

の信念を土臺として立てられてゐる。否な、進歩を信じない生命その物は在りえないのである。『進化』は生命の別名である。

人間は自ら墮落して生命の道をふさぐことがあるであらう。或る時代の濁つた空氣によつて青年の若い血の枯らされることがあるであらう。國民は戰爭によつて互に傷けるであらう。自然は無情冷酷な斧を振ふであらう。一時は惡と虛僞とがこの世に蔓こるであらう。死が常に人類を嚇かすであらう。『一九一五年』が幾度か繰返されるであらう――

然かし、前方に向けられた生命の面と足先とは決して向き直らない。進化の大道に於て、惡と死とは決して永久に通行を阻止しえない。何んな悲慘がこの社會を苦しめ、何んな罪惡が人道を瀆がさうとも、我等の完全を慕ふ潜勢力は、あらゆる矛盾と勞苦とを踏破するに充分である。況んや、生命の本性は樂天的である。そは虛僞をも、不幸をも、罪惡をも笑つて凌駕しうる、征服しうる。全體としての生命は死を重大視しない。『生命は笑ひ、踊り、戯れる。そは死の面前に於て築き、貯へ、そして愛する』。されば、我等は決して失望しないでもよい。否な、我等はいかなる場合にも決して失望し得ない。

絶望の汀から希望が湧かなんだか。夜のどん底から朝が生れなんだか。

高い光明の或る時――そこでは世上一切の矛盾が奇蹟的に消えて見えるやうな感激の我等を襲ふ一瞬時――人道の前途は五彩の光輪に卷かれて、遙かに我等の眼前に開ける。そこでは脚下の歐洲戰爭もほんの人の子のかりそめの兒戯としか見えない。生命の曠野を通ずる平行した幾條かの大道には各種の民族を案內する『傳統』の札が掲げられてゐる。勇ましい心靈の行軍歌につれて牽かれる進歩の車の上に、勝ち矜りげに靡いて『生命』の軍旗が立てられた。罪惡、病氣、不秩序がその一歩々々に崩れて行く。生命はミケル・アンゼロのやうに、障害の山を切り開いて、富と健康と、詩

と藝術と、智識と正義との偉大な彫刻を作りつゝある。かうした高い感激のあとの靜平に於て、我等の心は饒かな親みを以て凡らゆる物に對しうる。

自然は冷酷ではあるが、然かしよく與へる。我等の智識は、我等の情緒は、皆な彼女からの賜物である。一たんは人間から取つた物をも彼女は再び正直に之を返す。人間が戰つて流した血をば彼女は丁寧に洗ひ去つたあとで、そこから美しい花を咲かして、少女を喜ばせ、詩人に謠はせる。彼女の胸に藏した黒い石塊の中に必要な火があり、澤山のエネルギイが藏されてゐることを科學者に教えたのも自然である。それがどんなに人間の利欲の爲めに惡用されても、彼女は少しも怨まない。

彼女は既に與へ盡したか。否々、彼女の貯藏は無限であつて、次第により多くを與へる。エネルギイの代價が餘りに高くなつた頃を見計ひ、彼女は微笑みながら、放射能體の存在を教え、原子の壞變の可能を訓して、そこから人間が今まで知らなんだ處の驚くべき力を引出す道を明かしてくれた。

自然の好意的貯藏と之に對する人智の親和——そこから科學が生れた。科學の力は無限である。最近にける電子と放射能體との發見は、今回の歐洲戰爭よりも大事件であらねばならぬ。之が人類の未來に及ぼす幸福には計り知るべからざるものがある。

心靈は偉大なコロンブスである。彼女は常にそれ自らを開發してゐる。物質から離れた高い方面に於ても、彼女は倦まず新しい天地を發見しつゝある。我等の眠つてゐた潜在意識界の研究が進むにつれて、近き未來に眞のユートピアが實現されると考へる希望は決して空ではない。我等が人爲的に原子内のエネルギイを利用しうる時期の近づきつゝあるやうに、我等が人爲的に透感を行ひうる靈の時代の來るのも決して遠くはなからう。

人心の頽廢、戰爭、暗黒な『一九一五年』——さうした一時的顯象を離れて見るときに、人類の歴史に於て、物質的にも靈的にも、今日ほど進歩的なそして光明的な時代はなからう。凡らゆる物はこの二三十年來急激な加速度を以て進みつゝある。文字通りのユートピアは廿一世紀の明けるのを俟たないであらう。實際我等の進化の信念が今日ほど保證されたことはない。

あらゆる矛盾と罪惡とにも拘らず、美しいもの自由な者は唯だ人性である。生命の大道のさても輝くよ。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

舊き文明より新しき文明へ

■■ 中澤臨川先生著

菊半截總布美本
定價金八拾五錢
—(郵税六錢)—

要目

▼現代文明を論じ當來の新文明をトす。
▼新ハムレットと新ドンキホーテ。
▼現下の社會的動搖。▼新文明の道程。
▼生命の傳統。▼思想か實行か。
▼ロマン・ローランの眞勇主義。
▼思想藝術の現在。▼生命の哲學。
▼新理智哲學。▼現代の世界觀其の他

最新刊 ●九版●

思想界を風靡すべき、當代第一流の文藝批評家が提供せる二大雄篇を見よ!!

漱石夏目金之助先生著

袖珍總布美本
定價金壹圓廿錢
—(郵税八錢)—

■■

内容

▼職業と道樂
▼現代日本の開化
▼中味と形式
▼文藝と道徳
▼創作家の態度
▼文藝の哲學的基礎

縮刷 社會と自分

(中付五の一)

東京京橋區南紺屋町
● 實業之日本社出版部
振替口座三二六番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 坪内逍遙譯

沙翁傑作集

新刊

眞夏の夜の夢

四六版天金美本
寫眞版木版密畫
數個入全壹册
金壹圓卅五錢
郵税金八錢

大沙翁が多方面なる天才の**空想側面の代表作**として眞に醇乎として醇なるもの、其姉妹編「テムペスト」に比して更に愉快、更に奇抜、更に微妙、更に飄逸、五幕十幾場、其三分の二は**悉く夢**、其想も幻、其調も幻、妖魔頻に跳梁して恣に人間を翻弄す、**人妖錯綜**して極めて自然に、理窟を全脫して條理却て整然、艶情あり、滑稽あり、葛藤あり、悲喜あり、忽ち喜劇、忽ち笑劇、忽ち歌劇、**絶對無類**の脚色、「オセロー」「マクベス」の作者にして**此作ありとは!!!**

沙翁傑作集第十

近刊

マクベス

逍遙博士が沙翁傑作集第一期の終卷として特に其現代語譯の新工夫に心血を濺げるもの

【既刊】好評重版出來

1	ハムレット
2	ロミオとジユリエット
3	オセロー
4	リヤ王
5	ジユリヤスシーザー
6	ヱニスの商人
7	テムペスト
8	アントニーとクレオパトラ

發兌

東京牛込早稻田 振替一一二三番 **早稻田大學出版部**

東京神田裏神保町 振替五〇一番 **冨山房** (振替)全國共通

(中付五の三)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

文學博士遠藤隆吉先生、文學博士物集高見先生序◎四六倍横帖アート紙印刷共四百頁上等緞子表紙頗美本正價三圓五拾錢

大好評拾版

寫眞五拾年史

見本進呈

明治。大正年間の社會の出來事を一眸の下に蒐む

死せる英傑を地下より喚び起し來り過去りし戰爭の活劇を眼前に展開し、或は憲法發布式或は政黨の大活劇或は吉原の大火或は國民大會等あらゆる過去のタイムに葬り去られたる五十年間の社會の出來事を眼のあたり、展開し一眸の下明治大正の活歴史を知るべし。讀む歴史は其書多からん見る歴史は蓋し本書を以て嚆矢とせん。

増補四十二版　特價金貳圓　送料拾貳錢

英語自由自在

前田文學士著◎本書に依れば如何なる初學者にても僅々五十日間にて、日用英語は讀書、作文、會

發賣元　東京本郷區森川町一番　振替壹九四六七番　文成社　電話下谷三二一〇番

（中付五の四）

中央公論新年號創作



催眠薬を飲むまで

正宗白鳥

（一）

爽かな戸外の朝風に觸れると、夜中惡夢に惱まれ通しだつた彼れの心も稍々すが／＼しくなつた。崖の上の方で頻りに鳴いてゐる百舌の聲に彼れは暫く聞惚れた。澄んだ空の色といひ、物の音や人の聲といひ、見る物聞く物が皆んな秋らしかつた。二ヶ月の旅行から歸つて來たばかりで、田舍の秋景色は飽きるほど見てゐる彼れは、都會の秋を一層面白く思ひながら、近所の商店などを覗きながら暫く散歩した。あたりの樣子が旅行前とは餘程異つてゐるやうだつた。二三軒は貸家札が貼られてゐるし、中には表札の變つてゐる家もあつた。牛乳屋の側の坂を上ると、その途中にあつた淸元の家元の出張所も表札や門燈が取られてゐた。竹垣の壞れ目から覗くと、庭は汚くなつてゐた。

殊に彼れの目を惹いたのは、老婢と二人きりで住んでゐた可愛らしい女が何

處へか移つて、小さな二階家が空家になつてゐることだつた。飯倉あたりのある老人の妾だと近所で噂をしてゐたが、彼れは散歩の次手にをり〳〵女の姿を垣間見ては、胸に深く刻んで樂んでゐたので、最早その姿が見られなくなつたかと思ふと、それだけでも世の中が急に淋しくなつたやうに思はれた。坂を上つて見下すと、崖に沿うた妾宅の庭には、二三本の葉鷄頭が鮮かな色に染出てゐた。

「中井ちか」と、かねて表札で讀覺えて、懷かしい女名前の一つとしてゐるその名と、その女の立つたり蹲んだりしてゐる姿形とを思浮べながら、主のない宿の草木を懷かしさうに見詰めてから、彼れは今來た途を後へ戾つた。そして大きな牛乳屋へ入つて、上等のを一本買つて歸つた。

大きな食卓を圍んで家族は揃つて食事をしてゐた。

「輔二さんは何處へ行つたのかと思つたら牛乳を買ひに行つてゐたのだわね」と、妹は云つた。

「さあ、お上んなさい。久振りだから家の御飯も旨いでせう。茶碗も新しいのを買つて置いたのですよ」と、兄嫁は味噌汁をついだ。

が、彼れは、「僕は後にします」と云つて、牛乳を銅壺につけて、玄關脇の自分の居室へ入つた。そして、何も置いてゐない机の前に坐つて、頰杖ついて目を閉ぢてゐた。田舍の溫泉場などよりは東京の方が結句いゝにはいゝが、自分の家は相變らず居心地がよくなかつた。殊にこの自分の居室にゐると、頭が壓へつけられるやうで息が詰るやうで、一日半日も落着いてはゐられない氣がした。かねての望み通りに早く下宿屋へでも引越したいと、今日にも空室捜しに出掛けたくなつたが、さうするには先づ月々の生活費を父から貰へるやうに話をつけねばならなかつた。幾らでも自分の財産としてはつきり分けて

貰つて、氣儘勝手な日を過したいのに、待つても〳〵そんな機會が廻つて來ないのが牴牾しかつた。

彼れは腦を病んで田舍の高等學校を中途で退學してからは、まだ目的も定めずにぶら〳〵してゐるのだつた。川口に小さな鐵工場を持つてゐる父親は、一週の半ば彼方で送つて、自分の家に寢起きしてゐる間にも稼業の事や蓄財の事にのみ頭を使つて、子供の身の上についてはよかれ惡かれあまり干涉はしなかつた。父とは生れつきの異つてゐる兄は、工場の手傳ひなどすることを厭うて、今は小使錢取りに私立中學の教師をしてゐるが、弟とは反りが合はなくつて、親身な相談相手にはなりさうでなかつた。實際は兎に角、弟の目には頼もしげのない兄として映つてゐた。何かにつけて懷かしく思出される母親は、三年以前に急病で亡くなつて、彼れはその死に目さへ會はなかつたのだ。

「母が生きてゐて呉れたら」と、いろんな事を思續けた揚句に、ふと思詰めてゐるところへ、兄嫁が襖の間から顏を出した。

「輔二さんどうしたのです?。牛乳は疾つくに湧いてゐるんですのに。何もかも冷えてしまうから早く召上つて下さいな」と、棘々した聲で云つた。

「えゝ」輔二郞は直ぐに座を立つたが、茶の間へ行くのが如何にも大儀さうだつた。兄も妹も既に出掛けてゐた。

獨りで氣兼ねなしに牛乳を飲み、生溫かい飯に冷たい味噌汁を掛けて食べてゐると、その間に彼れの居室をざつと掃除して來た兄嫁は、長火鉢の前に戻つて茶を注いでやつて、旅行先のことなど煩く訊き出した。輔二郞は初めは言葉少く懶さうに答へてゐたが、次第に興が湧いて自分から進んで山の景色や

旅で會つた人の噂などし出した。
「よかつたわね。あなたは夏中暑い思ひをしなくつて。私は溫泉と云つては只つた一度箱根の底倉へ行つたきりなんですよ。せめて日歸りで鎌倉へでも行つて見たい〳〵と思つてゐながら、つひに行かず仕舞ひで本當に詰らないわね」と、兄嫁は不平らしく云つた。
「何故行かなかつたんです？　これからでも土曜から日曜にかけて遊びに行つたらいゝぢやありませんか。田舍は眞夏よりもこの頃の方が面白いですよ。稻は色がついて來たし萩や女郎花は咲いてゐるし、日の光にも錆びがついたやうで非常に趣味がありますよ。兄貴はさう云ふ趣味はあまり感じないでせうけど、健康のためにいゝから、姉さんが勸めて時々一緒に遊びに出たらいゝでせう」と、桶二郎は珍らしく親切な口を利いた。
「でもねえ。私達ばかりが出歩いちやいけないから」
「なに構やしないさ。僕は遊んでばかりゐるし、猪乃だつて毎日學校へ通つてるのが遊びに出てゐるやうなものだし、姉さんばかりが家にじつとしてるんだから、偶に旅行でもせねや損ぢやありませんか」
「學校通ひと遊びと一緒に見ちや可愛相だわね。野口さんなぞに負けない氣で一生懸命に勉强してるんですもの」
「無駄なことだな。男でさへ惱々痛めるのに、女が學問なんかに身を入れて身體を壞してどうするんでせう。早く嫁にやつちまつたらいゝでせうに」
「あなたの留守の間に穗村さんの奥さんが緣談を持つて來たのよ。一寸よささうなところなの。兄さん

にも相談して、猪乃さんに話して見たんですけど、顏を顰めて怒つちやつててんで取上げないから、私の方から無理にとは云へないしね。お父さんも縁談など身を入れて聞いて呉れないのに、私ばかりやきもきしたつて馬鹿々々しいと思つてるんですの」

「親爺は子供に對して無責任ですよ。僕だつていろんな考へがあるんだけど、云つたつて親爺にや分らないだらうから」

それが例になく憤慨してゐるらしい口吻だつたので、兄嫁は不思議に思つて、どんな考へかと訊返したが、輔二郎はあから樣には云ひ得なかつた。そして、話を轉じて、

「僕の留守中に外には變つたこともありませんでしたか」と、意味もなしに訊ねて、周圍を見廻して、茶の間の障子のすつかり貼り變へられてゐることや、座敷箒の新しくなつてゐることに目をつけてゐると、兄嫁は食卓を片付けながら、

「あなたはまだ氣がつかないでせうね。昨夕歸つて來たばかりだから。これから氣をつけて見てゐて御覽なさい。お父さんも兄さんも猪乃さんも皆んな變つてるかも知れませんよ。相變らずで家の中でまごまごしてばかりゐるのは私だけでせう」

「へえ」輔二郎は無間な返事をして、鼻の著しく高いぎすぎすした兄嫁の顏を顧みた。こんな顏形の女房に滿足してゐるらしい兄の氣が知れぬと今更のやうに感じながら、長火鉢の側に擴げてあつた新聞を持つて、自分の居間へ歸つた。

「おれが二三ヶ月ゐなかつた間に、さう皆んなが變つたのは可笑しい。しかし、中井ちかも轉居したし

水菓子屋にも貸家札が貼つてあつたし、近所の様子が變つてゐるのだから、家の奴だつてどうだか分りやしない」と、疑ひの目で皆んなを見る氣になつた。

冴えた朝日は机の上まで流れて、稍々もすると彼れが勝手に描いては樂んでゐる幻を掻消し、百舌の鋭い聲はをり〳〵彼れの空想の糸を斷切つた。……この狹い居室に閉籠つてゐる間の彼れは、どうかすると四五人の女の影に取圍まれて、その囁きを聞いて、夢見るやうな時を送つてゐるのである。一人は五六年前の中學時代に可成り親しくしてゐた友達の姉で、今は誰れかの妻になつて子供の二三人も持つてゐる女だが、あの後會つたことはないので、何時も昔ながらのみづ〳〵した若い面影をして現はれた。一人は兄嫁の友達で藝者から妾になつてゐる女で、たつた一度この窓からちらと見たばかりだが、昔兄嫁と一緒に撮つた寫眞を屢々見てゐるので、記憶から鮮かに引出された。中井ちかもその中の重な一人だつた。今一人は高等學校にゐた頃一時室借りをしてゐた家の三十近い女で、影の女の中ではむしろ醜い方で數に加へる價値はなかつたが、いろ〳〵の思出から最も親しく記憶にこびりついて離れなかつた。そして、困ることには、その女の目鼻立がいやに兄嫁に似てゐた。

輔二郎は今茶の間から持つて來た一枚の新聞を飛び〳〵に讀了る間に、あれからもこれからも彼れの好きなことを語らせてゐたが、何時ものやうにふとしては好惡の念が起つた。今日は何故だか兄嫁の友達の藝者上りの女に彼れの愛情が際立つて注がれた。おさよといふその女の名前を彼れは甘たれた口調で呼出して暫く机の上で踊らせてゐた。が、やがて、心を取直して目を見開いて窓の外を見やると、嘗ておさよの横顔をちらと見た門口には斑犬が腹匐ひになつて欠伸をしてゐた。

昨夕持つて歸つたまゝ打やつて置いた鞄を開けて、鹽たれた浴衣や洋書や噴火口で拾つた硫黄の塊などを出して、それ〲に始末をつけてから、勉强に取掛るつもりだつたが、急に心變りがして、散歩がてら日比谷の圖書館へ行つて小説が讀みたくなつた。

（二）

正午過ぎに日比谷から歸つて來ると、二階ではオルガンの音がしてゐた。輔二郎は久振りに自分の家の二階を見やうと思つて、靜かに階子段を上つてそつと襖を開けると、妹の猪乃は吃驚した顔して、

「輔二さんは突如に來るから厭さ。袴なんぞ穿いて何處へ行つてゐたの」と云つてオルガンの側を離れた。

「圖書館へ行つてゐたのさ」

「大變勉强家になつたのね。」

輔二郎は廊下に立つて、小鳥の飛んでゐる空を仰いだり、近所の屋根を見渡したりしてゐたが、妹も側に來て同じやうに周圍を見ながら、

「輔二さんは旅行して來てゞ些とも丈夫さうにならないわね。宿屋で書物ばかり讀んでゐたのでせう。乾度さうだらうつて噂をしてゐたのですよ。」

「なに、那須の山へも登つたし、會津越えもしたし、名所があれば見に行くし、海へ出ると遊泳をやつた。一つ所にぢつてゐることは僕は好かんから。」

「ぢや、隨分面白いことがあつたでせう。話を聞かして下さいな。私だつたら旅へ出れば毎日繪端書を

出すし、いゝ景色を見て來れば皆んなに話したくなるのに、あなたは自分一人の胸の中に何もかも仕舞込んでゐて、よくそれで滿足出來ることだわね」

「今朝姉さんがお前と同じやうなことを云つて訊くから、止むを得ず一寸話したら、非常に羨ましがつてゐたよ。お前も僕の話を聞いたら羨ましがるだらう。」

「輔二さんが憂欝な顏して歩いてるのを想像してゐると、些とも羨ましいことはないわ。氣の毒になるくらゐよ。いくらあなたが默つてゐても私にはちやんとあなたのお腹の中が分つてるんだもの」

何を小間癪れたことをと思ひながら、輔二郎は微笑して、「お前のやうにちよか〳〵してる人間に人の心が見透せるものかい」

「ぢや言當てゝ見ませうか、よくつて？。怒らないことよ、乾度」

紅味の差した艶のいゝ頰に笑ひを溢してゐる妹をぢつと見てゐると、旅行前よりも著しく肢體が發育したやうに輔二郎は思つた。腮の肉はふは〳〵と膨らんでゐた。

「怒りやしないさ」と云つて、彼れはオルガンを後にして腰掛けて、妹の口元に目をつけてゐた。

「家の者が皆んな輔二さんを腦が惡くつてぼんやりしてる人のやうに思つてるのは大間違ひだわね。繁兄さんよりも餘程頭が複雜してるのだわ。だから輔二さんならいゝ加減な結婚なんかしない人だと思つてよ。結婚に限らない、何事にでも自分の量見があつて迷つて苦しんでるんでせう。私初めてそれに氣がついて感心してるのよ。家の中で精神的な人は輔二さん一人よ」

何を呆けたことを云つてゐるのかと、輔二郎は妹の脣の動くのを見てゐたが、さう云はれるのは惡い

氣持はしなかつた。しかし、やがて、妹の口調が變つて、

「輔二さんは失戀したこともあるんだわね」と厭やに生眞面目に云はれると、齒のきしむやうな不快を感じて、眉を曇らせた。

「私、此間大掃除の時に輔二さんの居室の押入を片付けてると、ひよつと日記が目についたから、惡いとは思つたけど、ところ〴〵開けて見たの。……」

「人の日記なんか無斷で見るつてことがあるか」

輔二郎はさう云つて苦笑しながら、思はず顏を赤らめた。日記の中の文句が目の前にちらついて彼れを脅かした。

「私は一寸讀んだばかりなの。惡かつたら堪忍して下さいな。これから決して見ないから。……だけど、私は日記を見てから輔二さんを尊敬するやうになつたんだわ。こんな情愛の冷やかな乾燥無味な家庭にあなたばかりは溫かい心を持つてゐるんですもの。まさかの時に私などに同情して吳れる人は輔二さんだけのやうに思はれてよ」

「僕は家の者に同情なんかしないさ。一日も早く籍を分けて別居したいと思つてらあ」

「それがいゝわ。何故早くさうしないの。さうしたら私も輔二さんの家へ一緒に移つてもいゝわ。小さい家でどもいゝつと氣持のいゝ生活が出來るんだわ」

「ふゝん」と、輔二郎は鼻で笑つて、「僕の事は誰れにも構つて貰はなくつてもいゝさ。それよりは猪乃自身に自分の身體の始末を付けたらいゝぢやないか」

「付けますとも。見てゝ御覽なさい。私皆んなに邪魔にされてるんだからいゝわ」妹は氣取つた哀れを顏に裝つたが、さうすると、目だの鼻だのが妙に色つぽく見え出した。この頃面と向つて若い女の顏をしみ〴〵見たことのない輔二郎の目にはそれが面白可笑く映つた。で、自分の頭の底に宿つてゐる女の魂を妹の身體に乘移らせたつもりで見入つてゐると、

「厭やよ、そんなに私の顏を見てちや。時々氣味の惡い目をするのね、輔二さんは」と云つて、妹は瞳を据ゑて上目蓋を引釣つて、兄の目付を眞似た。が、それは兄のやうに無氣味ではなくつて愛くるしかつた。「姉さんはよくこんな目をするよ」と、小聲で云つて、目尻を皺めて横目を使ひながら、くす〳〵笑つたりした。

「だけどね。輔二さん。繁兄さんはこの夏から少し調子が變なところがあるのよ。だから姉さんと二人で時々ぶつ〳〵言合ひなんかして私困つたことがあつたの。まさか兄さんが道樂者になりやしないわね。姉さんの邪推だらうと思つてゐるんだけど、そんな事を聞くのは不愉快だから、私は學校から歸ると何時も二階へ上つてゐるの」

「夜も此處で寢るのかい」

「うゝん、寢る時は階下へ下りるさ、怖いから。お父さんのゐない間は、この部屋を私が借りることに許可を得てるんだけど、外の者はあまり入らさんやうにしろと云はれてるの。御覽なさい、私の大事な物は大抵此處へ持つて來てるでせう。そして、私の所有物は餘程殖ゑてるのよ。お父さんはお金は吝んで中々呉れないけれど、品物ならさう物吝みはしないの。岡田から借金の形に取つた金時計も、あの机

の上の一輪插しも私が貰つたんですよ」

「今からさう慾張つてどうするのだい。」

「だつて私の財產と極つたものが些ともなくつちや心細いわ。慾張りさんと云はれてもいゝから、貰へるだけは何でも貰つとかなきや損だと思つてよ。輔二さんも今の間にお父さんをせびつて自分の物をどし〳〵拵えてお置きなさいな。いくら精神的だつて素淡貧ぢや趣味のある生活は出來ないことよ」

「男は兎に角女は財產のことを云ふものぢやないよ。金時計を持つてゐたつて、お前がそれをぶら下げて步けやすまいし」

「でも、さあと云ふ急な場合にあれゝ賣れば隨分なお金になるから心强いぢやないの」

「その、さあといふ場合がお前なんかの身の上にあるのかい。食はせて貰つて着せて貰つて、人並に小使錢を貰つて、學校へはやつて貰つてゐるのに」

「そりや分らないわ。人間は萬一の時を考へとかなきやならないと私はこの頃つく〴〵思つてゐるのよ。私達はお母さんが無いのだから尙更だわ」

お父さんか知らんと、妹は階下の物音に耳を留めたが、すると、輔二郞は落着かない態をして廊下へ出た。歸宅後初めて父に會ふのを面羞く感じてきよと〳〵してゐた。が、玄關の聲は父らしくなかつた。只の來客だつたのか、再び入口の鈴が鳴つて、表へ出て行く足音がした。

「私、今度の日曜にはお父さんに隨いて工場へ行つて、次手に浮間の方まで散步しやうかと思つてるの。輔二さんは一緒に行かない？」

「僕は昨日汽車の中から工場の方を見たゞけで、一生あんな所へは寄付かなくつてもいゝと思つた。油煙で空が一面に汚れてゐるんだもの」

輔二郎は父の歸つて來ない間にと、階下へ下りて自分の居室に入つたが、廣々とした二階に比べると穴倉へでも押込められてゐるやうだつた。妹の奴またオルガンを鳴らし出した。と、彼れは耳を澄ましてその音に聞惚れながら、仰向けに寢ころんだ。

(三)

長男の繁太郎が學校から歸ると間もなく、父親の壯輔も川口の工場から歸つて來た。父親は油煙や埃に汚れた洋服を脱ぎながら、不在中の來客のことなど聞いて、湯殿へ入つた。熱い湯に漬るのは彼れの樂みの一つであつて、茹鱆のやうになつて出て來た。褌一つで胡座を掻いて、煙草を一本吸つてから、浴衣を引掛けて、晩飯の仕度の出來る間、二階の自分の居室へ上つて行つた。黒檀の机の上で英語の書取をやつてゐた猪乃を、手眞似で追退けて、留守中に來てゐる手紙を讀んだり、鞄の中の帳簿を出して見たりした。そして、口の中で獨り言を云つてゐたが、差當つて心に懸るものがなくなると、手足を伸して腹匍ひになつて、一本煙草を吸つた。この頃は家へ歸るたびに極つて腰が怠るくつて溜らなかつた。自分で揉んだり叩いたりして紛らせてゐたが、心に歳を取らんつもりでも、五體が次第に衰えて來るのはどうすることも出來なかつた。湯治に行つたらと思はぬでもないが、安心して自分の仕事を任せる者がないので、遠方へ出掛ける譯にも行かなかつた。ちつぽけな工場で千圓の資本で百圓の儲けさへ六ヶ敷しいくらゐではあり、後を子供が引繼いでやるんぢやないし、懐手してゐたつて立派に暮して行ける

身分でありながら、好んでそんな面倒な仕事なぞやらなくつてもと、自分でもをり〳〵思つてはゐるのだが、いざとなると斷行し得なかつた。浮つかり話をして、いゝ買手が現はれても、工場をそつくり讓り渡す氣にはどうしてもなれなかつた。兎に角幾らづゝでも年々確實に利得を見てゐるのに、自分が手を退いて、他人をしてむざ〳〵儲けさすのが忌々しかつた。海鼠のやうな形をした鐵材を火にかけて、鐵瓶や銅壺などいろ〳〵の形をした道具を鑄出すのが、儲け以外に一つの樂みにもなつてゐた。

「同じ鐵瓶でも南部物のやうなのが出來るのなら張合ひがあるが、裏長屋の長火鉢にでも掛けられるやうな安物をつくつたつて詰らないと、繁などがよく云つてゐたが、さう云へばさうだ。しかし、美術品だらうと、安物だらうと、おれの身に取つちや面白いのだから仕方がない。將軍樣のお茶の湯を沸かさうとも、お長屋の澁團扇で煽がれやうとも、鐵瓶なら鐵瓶でちやんとその形をした物が出來上るのを見てゐるのは、おれには惡い氣持はしない。……」

第一彼れには世間の老人のやうに餘生を送るに足る道樂がなかつた。妾宅通ひや物見遊山の味はひを知らぬのみか、子供の生立を樂む氣になつたことさへなかつた。工場の指圖と損得の計算でもやつてゐなければ、まだ耄碌してゐない彼れの頭腦を働かせるところがなかつた。

一しきり腰骨を叩いてゐた彼れは、秋らしい夕風が身に染むのを覺えると、自分で次の室の押入を搜して、浴衣の上に羽織を引掛けた。階子段の口から娘を呼んで、二三日分の新聞を持つて來させて、眼鏡を掛けて講談物の續きや政治記事を讀んで、食事の知らせを待つてゐた。

女房に死別れてからは日々の食物が自分の口に適はなかつたが、彼れは滅多に小言など云はないで、

腹さへ膨れゝばいゝくらゐに手輕く諦めてゐた。今夜も惡く砂糖の利き過ぎた鳥の甘煮や、白い衣をかけた生鮭の西洋料理を、「おれもお前達にかぶれて、バタ臭い食物が旨いやうな氣がし出したよ。日本の揚物なんかよりは腹にいゝかも知れんな」などゝ云ひながら快く食事をした。そして、若い者よりも却つて茶碗の數を重ねた。

輔二郎は一家團欒の食事を厭うて、飯前にわざと散髪に出掛けて、皆んなが茶の間から散つた後でこつそり歸つて來て、獨りで食卓に向つた。

「輔二さんはまだお父さんに會はないのね。挨拶して入つしやい。旅から歸つたきり默つてるつてことがあるものですか」と、兄嫁に注意されると、

「えゝ」と氣のない返事をしてから、輔二郎は考込んだ。早く役目だけ濟まして置きたいと先つきから思つてゐるのだが、父の前へ出るのは厭でならなかつた。手厳しい言葉を浴びせかけられたことは一度もないのだが、父の目でぢつと見られると、腑甲斐のない自分の腹の底まで見破られるやうで恐ろしかつた。その癖、父の目はどんよりして力が鈍さうで、頰の肉の弛んだ前齒の脫けた老顔には、冷淡と痴愚の表情しか讀まれないと、彼れは思つてゐたのに……

「しかし、一寸顔出しゝて來ようか」と、彼れは箸を擱くと、直ぐに二階へ上つて行つた。父親は考へ事をしてゐるのか、空を眺めてゐるのか、端近く出て煙草盆を前に置いて、煙を吹き〳〵目を見据ゑてゐた。

「お父さん」と親しく呼掛ける代りに、輔二郎は廊下を踏む足音で知らせた。

「旅行はどうだつた。少しは腦病もよくなつたゞらう」と、父親は首を捩ぢて相手を見上げ見下した。

輔二郎は型の如く挨拶して、欄干を背にして蹲つで、二三言申譯に曖昧な口を利いてから座を立たうとすると、父親は「まあもつと話して行け」と引留めた。例にないことゝ訝りながら、輔二郎は不承々々に落着いて、父の話をさま〴〵に豫想してゐた。

「お前も隨分旅費を使つたのだから、餘程身體が丈夫にならんと割に合はんぜ」と云つて、父親は相手の顏色や肉付を旅行前のと比較してゐたが、やがて、出し拔けに靑筋の浮いた赭い手を突出して、「これを握つて見い。輔二はどのくらゐな力があるか見てやらう」

「僕なんぞ駄目です」輔二郎は馬鹿らしく思つて笑つてゐたが、强いられるので止むを得ず、力を籠めてぐつと握り締めると、父親は目を瞑つて力量を計つてゐた。

「思つたよりは力がある。お前は見掛けによらん底力が五體にあるんだから、案じることはないぜ」

「以前學校で機械體操をやつたことがありますから」輔二郎は悅しさうに云つた。

「何にしても五體に勢ひがなければ、それだけの力は出て來ないものだ。勢ひがあれば少々の病氣ぐらゐにびく〳〵することはないよ。お前達は折角持つてる力を眠かせてるから不經濟な話だ。何か一つやり出さうつて氣になりさうなものだが、……繁も敎師になつてるにはなつてるが、見たところ大して面白さうでもなさゝうだ。おれやお前のお母さんは、若い時分に隨分貧乏暮しをして來たが、年中元氣な顏をしてたぜ。一つ箒を持つて掃除するにも大儀さうにするつてことはなかつた。皆んなが氣拔けのしたやうな樣をしてるのが、おれには不思議でならない。この頃は猪乃が一人元氣がいゝだけぢやない

か。……おれはお前達のお母さんが亡くなつてからは、二階で隱居してるつもりで、階下は若い者の氣風でどうにでもやりたいやうにやれと、あまり氣にも掛けない方だが、お母さんが生きとつたら、今のやうで打つちやつときやすまいな」

「私も猪乃も早く獨立して極まりがつくといゝんですね」

「それもいゝことだ。しかしお前は獨立が出來るかい」

「……………」

父親の目は光つた。「猪乃も女の癖に學問して獨立すると、この頃よく云つてゐたが、お前は獨立する方法が付いてゐるのか」

「私は文學をやらうかと思ひます」

輔二郎はさう答へて、父がその理由を訊返したら、不斷うか〳〵考へてゐる抱負を述べて、退學後にもその道の修養は怠らなかつたことを說明しやうと息込んだが、父親は只聞流して、

「自分に適した仕事なら、何でも勝手にやりなさい。お前くらゐな歲になつた男に、あれがいゝのこれがいゝのと、老人が指圖するのはよくないことだから、おれは決してお前達の邪魔はしない。必要な金なら旅費でも學資でも相應な程度で出してやりもするが、しかし、お前達の望んでゐるやうな獨立をおれの力でさせてやることは出來ないんだぜ。世間には還曆の祝ひでも濟ますと、子供にそれ〳〵に財產を頒けて、自分は皆んなの後見役ぐらゐで氣儘にやつてる親もあるやうだが、おれにはその眞似は出來ない。おれは貧乏してる時分にも、他人や親類の御厄介になることは大嫌ひだつたが、歲を取つても自分

の子供に養はれることゝ嫌ひな性分だ。それだからおれは自分の財産に傷を付けるのが何よりも恐ろしいよ。今の歳で金を手放すとなると、世の中がどうも淋しくてならんよ。持つてゐる金をばつぱと費はふとは思はないし、死んであの世へ持つて行けるんぢやないし、禁治産とか云ふことにも華族様でなきや法律上出來ないさうだし、つまるところおれが死んだら、お前達兄弟でどうにでもするがいゝ、後の所分を遺言なんかで縛らうといふやうな馬鹿な眞似はしないが、只おれが生きてゐる間はおれの金はおれの金として置いて呉れ。先日繁にもさう云つて置いたが、今日はいゝ折だからお前にも云つて置くよ」

輔二郎はねち〳〵した父の言葉の意味を充分に解し得なかつた。財産を惜むやうな惜まぬやうな口吻が變に思はれた。で、分つたかと云つたやうな目で見られても、ぼんやりして口を噤んでゐたが、父親はそれだけ云へば滿足したらしく、内へ入つて肱枕で横になつて、

「輔二は手紙を書くことは嫌ひだらうな。二三本代筆して呉れんか」と話を變へて、机の上に重ねてある手紙を顎で差示して、「今夜中にあれだけ返事を出さなきやならんだが、夜面倒な字を書くと目に毒だから」

輔二郎は命令に從ふつもりで机の側へ寄つて、手紙の上書を見た。それ〳〵の返事の文言を父から聞かされては巻紙に寫してゐたが、實用の手紙を書馴れない彼れは用語に行詰ることもあつた。そして、返事振りについて父の頭の正確で曖昧な所のないのに驚かされた。父親は一度自分の目を通さなければ手紙を封じさせなかつた。

輔二郎があまり長く父の居室にゐるのを訝つて、猪乃は樣子を窺ひに來たが、親が語り子が書いてゐ

る只それだけのことが、この家庭では滅多に見られない睦さを現はしてゐるやうに思はれた。で、「お茶でも入れて來ませうか」と、懷かしさうに云つて、自分も仲間入りして、父の居間で快く打解けた話をして一夜を送りたかつた。

（四）

彼岸には輔二郎は兄嫁や妹に誘はれて母親の墓へ詣つた。行きかけには氣が進まなかつたが、墓の前に立つと亡き母の面影が偲ばれて涙ぐまれるやうな氣持がした。そしてそれは何時までも耽つてゐたいやうない丶氣持だつた。赤蜻蛉の飛んである墓地で、閼伽桶や草花を持つた男女の姿を左右に眺めながら、生死の境を隔てた自分と母との事を考へてゐる間には、不斷溺れてゐた泥のやうな空想とは違つた尊げな空想が彼れの胸にも浮んだ。

歸りに汁粉を食べて家に歸つたが、兄夫婦が祭日をかけて一晩泊りで箱根あたりへ旅行するといふ話が持出されて、父の許しを得たのはその晩だつた。輔二郎は何時の間に二人がそんな旨い話を極めたのかと訝りながら留守番を引受けた。

その日となると、兄嫁は朝から湯に入つて來たり髮を結つたり、着物の撰擇をしてゐたりしてゐたが、輔二郎は兄嫁の珍らしい旅立の仕度に絕えず目をつけてゐた。正午までに下女を相手に手落ちなくお化粧をして、何といふ織物だか煌びやかな帶を締て出立時間を待つてゐる兄嫁の姿は、見違へるほど美しくつて、差向ひで話をしてゐるのが眩しかつた。

兄は學校から直ぐに停車場へ行く筈になつてゐたので、兄嫁は豫定の時刻が來ると、獨りで俥に乘つ

て出掛けた。輔二郎は送つては出ないで、自分の居室から隙見したゐた。旅中で屢々見たことのある夫婦連れが思出された。

そこへ、慌しく學校から歸つて來た妹は、「姉さんはもう行つちやつたの」と云つて、襖の間から火照つた顔を出した。

「臺所の方はお前の責任だぜ。晩にはうんと御馳走をしろよ」

「それよりも、明日は朝からお鶴さんなんかを呼んで、一日遊ばうと思つてるの。騒々しくつて厭なら輔二さんは何處へでも遊びに行つて來るといゝわ」

「僕を追拂つて勝手なことをして遊ばうと思つてるのかい」輔二郎は口では不平らしく云ひながら、若い女が寄つて來るのを竊かに喜んで、「僕は留守中の監督を賴まれてるのだから外へは出ないつもりだ」

「そんな意地の惡いことを云ふもんぢやないわ。こんな時にでも思切り好きなことして遊ばなければ詰らないんですもの」猪乃は甘つたれた聲で云つて、「ぢや、あなたは家にゐてもいゝけど、此處にぢつとしてゝ私達のすることに干渉しないことよ。お鶴さんなぞは輔二さんを怖がつてるから」

「僕が怖いかね。僕は誰れに對しても干渉したり妨害したりしたことはないぢやないか」さう思はれてゐると思ふだけでも輔二郎の心を憂鬱にした。顔も言葉も憂鬱になつた。

「それはさうね」猪乃は同情したやうに云つて、「繁兄さんは二人連れで温泉へ行つたつて些とも面白かないのよ。姉さんの方では寸法があるんでせうけど」

猪乃の見たところは輔二郎とはまるで違つてゐた。そして、想像に富んでゐることは彼れを驚かすほ

どだつた。……兄嫁は小田原へ病後の保養に行つてゐる從姉を訪ねて來たいとかねて企んでゐたので、今度も一日二日暇を貰ふやうに兄に賴んでゐたのだが、兄はそれを斥けることは出來ないし、さうかと云つて一人で行かせることは少し理由があつて不安心だつたので、箱根行をかねて一緒に行くことになつたのだ。從姉は兄嫁の最も手賴りにしてゐる相談相手で、お菓子だの雜誌だのといろ〳〵の見舞物をたび〳〵送つてやつてゐるし、先方からも頻りに手紙を寄越してゐる。此方の家の事は不斷洗ひ曝し從姉に知らせてゐるので、今度は餘程の用向で智慧を借りに行つたのらしい。思ひ餘ると兄嫁は從姉に手紙で相談をかけてゐたのだが、今度は直かに會はうとしてゐるのだからよく〳〵のことだらう。……

猪乃は兄の机の側に座つて、誠しやかにさう云つて、

「私にや姉さんのお腹の中がよく分つてゐてよ。繁兄さんが意氣地がないからいけないんだわ。何もそんな所まで姉さんに隨いて行かなくつてもいゝだらうにね」

「さう云へばさうだが」輔二郎は妹の言葉を眞に受けて、「しかし、あの女もさう不平らしい樣子をしてゐないぢやないか。家の中を自分一人で支配してゐるんだから、さう苦情のあらう筈はないさ」

「輔二さんのやうな仙人に何が分るものですか。姉さんがどんな恐らしいことを企んでゐるか氣がつかないでせう」

「まさか人殺しを企んでやしまいし……」

輔二郎はさう云つて笑つた。そして、二人とも家の中が厭々としたやうに感じてゐた。猪乃は下女に手傳はせて長い袖をぶら〳〵させながら、部屋々々の大掃除をし出した。輔二郎も妹に唆かされて、庭

まつたやうで氣持がせい〳〵して來た。植木屋に一日剪刀を入れさせたら、鬱陶しいこの庭も瀟洒して來るだらうにと、髮の伸びた頭を見るやうに、不斷手入をしない木立を見上げてゐたが、猪乃も雜巾掛けに疲れた身體を緣側の柱に凭らせてぐつたりしてゐた。

風呂へ入つて、兄妹二人きりで明るい瓦斯の下で食事をしてゐると、生活が新たになつたやうな快さを覺えた。で、輔二郞は茶の間でにや〳〵笑ひながら、妹が下女と戲談など言合つてゐるのを聞いてゐたり、今時分箱根の溫泉に浸つてゐる兄嫁のことなど思出してゐたりして、食後の散步を忘つてゐた。妹は湯上りの艷々した顏して、明日誰れに氣兼ねもしないで、友達を招けることを喜んでゐた。

「輔二さん、これから銀座まで一緖に行つて下さいな。風月で旨しい西洋菓子を買つて來ときたいから」

「僕は今夜は足がだるいから大儀だ。……」

「銀座で旨しいコーヒーでも飮みたくはなくつて?。私、夜の銀座を何日見ないか知れないのよ?」

猪乃は浮かれ心地で兄を誘つてゐたが、そこへ、思ひがけなくも長兄の繁太郞がのつそり歸つて來たので、急に笑ひ聲を潛めて呆氣に取れた。譯を聞くまでもなく、不吉な影が差して家の中が急に陰氣になつたやうに猪乃は感じた。

「そら、これをやらう」と云つて、折詰を投出して、繁太郞は自分の居間へ入つて、洋服のまゝ仰向けに寢ころんだ。

「どうしたのか知ら」と、猪乃は輔二郞に目くばせしたが、相手がむつゝりしてゐて應じないので、詰

らなさうゝうに折詰を開けて見た。栗のきんとんや蒲鉾が入つてゐた。

「あなた食べて？」と、前へ押やると、

「うん、食べてもいゝ」と、楠二郎は氣のない返事をして箸を執つた。

猪乃はます／＼顔を曇らせて、折詰の方は兄が獨りで貪るに任せて目も向けないでゐたが、やがて長兄の居間へ入つて、不斷着のネルの單衣を出して襦袢に重ねて、着替えを勸めた。兄は酒臭い息をしながら目を瞑つてゐた。

「其處へ置いといて呉れ」と、繁太郎は煩さうに云つて、開けた目をまた閉ぢた。

「姉さんはどうしたの」

「どうもしないさ」

「後から歸つて來るの」

「どうだつていゝぢやないか。お前の知つたことぢやない」

「…だつて、歸つて來るのなら、門を締めとく譯に行かないわ」

「ぢや締めとくさ」

突慳貪な兄の言葉が猪乃には口惜しくてならなかつた。で、まだ宵の口なのに表の戸に鍵を掛けて置いて二階へ上つて行つた。そして、廊下に立つて月の澄んだ空を仰いでゐたが、兄の素振や言葉が思出せば思出すほど腹立たしくつて、涙が頬を傳つた。樂みにしてゐた明日の計劃の破れたのも殘惜しかつた。

兩心が詰まつて、妻の前に鬪はれなどしてゐると、兄の不足の理由がいろ〳〵に考へられた。そして、更に何兄嫁の仕打が惡くつて兄の不興を招いたのには違ひないと獨り極めに極めて、兄の突慳貪な言葉を許してやる氣になつた。

輔二郎は滿腹の後の睡氣を覺えて、自分の居室でだらしなく手足を投出してゐたが、電報の聲に驚起きて戸口へ駆けて出た。電報など滅多に來たことがないので、何かの凶事でも起つたかのやうに皆んなの心を惹立てた。妹も慌たゞしく二階から下りて來た。

「今着いた」と、兄嫁のお杉が小田原から夫に宛てゝ打つた何でもない電報だつた。

「それ御覧な、私の云つた通りだわ」と、猪乃は後でこつそり輔二郎に囁いた。「繁兄さんは電報を見て安心してゐるらしいのよ」と云つて冷かすやうな目をした。

やがて、雨戸を締めて皆んな平生よりも早目に睡りに就いたが、繁太郎の居室には電燈が遲くまで點いてゐた。家中で只一人酒の味を解してゐる彼れの居間には、本箱の上に舶來の葡萄酒の罎が置かれてあつた。不斷就眠前に一二杯を傾けるのを例としてゐる彼れは、今夜は矢鱈飲みをして、下女が延べた寢床へ入つたが、時々望んでゐた獨り寢も結句あまりいゝ氣持はしなかつた。

（五）

一家が寢鎭つた後で、自分達の寢室で、葡萄酒とかウヰスキーとかを飲んだり、學校の歸りにわざわざ廻り途などして買つて來た旨い菓子や菓物を妻に食へさせたりして、一時間ばかりひそ〳〵話をするのが、繁太郎の樂みになつてゐた。僅かな月給でも家の生活のために些しも費ふ必要はないのだから、

旅行でも芝居見物でも好きな事して遊べるのだが、一家の主人として主婦として、あまり家を空ける譯には行かないし、妹弟に對する氣兼ねもあるし、殊に繁太郎はさういふ娯樂の趣味を全く缺いでゐた。

學校歸りにたまに小待合へ入つて一二時間遊んで來ることを何時とはなしに覺えたが、どの女にも深入りしたことはなかつた。そして、稀れに夫婦連れで晩食を食べに出た歸りに、調子外れな興を起して二人で待合入りしたことも二三度はあつた。お杉はそれを厭がらないどころか、珍らしい世界へ入つて行つたやうで、自分の家の寢床にゐる時にも、どうかすると、それを思出すこともあつた。

「おれは旅行も大儀になつたよ。この春花見の歸りに寄つた家へでも泊つて、明日一日ぶら〳〵遊んで歸らうぢやないか」と、今日繁太郎は新橋附近の鳥屋で一杯やつてから云つた。まだ午餐を食べてゐなかつたので一汽車遲らせて其處へ寄つたのであつた。

「でも、小田原へは端書を出してるんですもの」と、お杉はこの時は夫の言葉を厭らしく聞いて取合はなかつた。

「それは構はないさ。第一肺病患者のところへ行くのは面白かないね。それに宿屋つてものは堅苦しくつて氣兼ねなものだ。隣の部屋にどんなお客が來てるかも分らないしさ」

「今更そんなことを云つちや困るおやありませんか。私一人なら朝早く立つて日歸りで見舞ひに行つて來るつもりだつたのですもの」

お杉は目に角を立てた。繁太郎は忌々しかつたが、自分も得心して出て來たのに強いて中止しやうとすれば、この頃妙に自烈てゐる女房に逆捩ちを喰はされる恐れがあるので、暫く默つて飲んでゐた。

「ぢや、あなたゞけ先へ箱根へ行つてゐらつしやるといゝわ。私は小田原へ寄つて後から行きますから」

「おれは輔二郎なんかのやうに温泉場でぼんやりしてゐる氣にやなれんよ。それに從姉さんはお前を引留めるに違ひないしね」

繁太郎は相手が時間を氣にして頻りに急立てゝも煮切らない返事のみしてゐた。自分達の結婚の橋渡しをした女房の從姉には自分が會ふのも女房を會はすのも好もしいことではなかつた。

「お前はあんな意地くね惡い出戻りの從姉などに會ひたいのかね」

「だつて一度ぐらゐ見舞ひに行かなきや義理が惡いぢやありませんか」

「それはさうだが……」繁太郎の頭には、二三日つゞけて口を酸ばくして女房に說かれた海の景色も山の眺めも懷しげのないものとなつてしまつて、瘦せつこけた靑い顏してゐるらしい從姉との話の渦に自分が捲込まれる苦しさが想像された。

「一緒に行つておれだけ小田原へ寄らないのも變に思はれるだらう」と、少しの飲過ぎが手傳つて、ますく煮切らなくなつたので、お杉は、

「ぢや私一人で行つて來ます。お父さんにも斷はつてあるんだから」と手剛く云つて身仕度に取掛つた。

「いゝでせう」と、洋傘や信玄袋を手にして立上つて念を押した。

繁太郎は何の氣なしに鷹揚に首付いたが、女房が躊躇しないで直ちに出て行つたのには意外に感じた。煮付いてゐる鳥鍋を見詰めながら、暫く心の中で女房の後を追うてゐた。

「今日に限つて何故あゝだらう」と疑ひく鳥屋を出たが、足は自分の家の方へ向はないで、知らず

知らず行きつけの小待合の方へ引寄せられた。

新しい若い女を呼んだけれど、不斷のやうな樂みは其處で得られなかつた。嘗て感じたことのなかつた不思議な寂しさが彼れの心にも萠した。不思議にも田舍の溫泉場や海岸が頻りに彼れの心に浮んだ。

「おれも行けばよかつた」と、前を通つてゐる電車の音よりも、小田原の浪の音が一層強く彼れの耳に響いた。

（六）

夜明け近くなつてからぐつすり寢入つた繁太郎が目を醒ました時には、猪乃は最早昨日の計畫を斷念して、自分の方から友達の訪問に出掛けてゐた。雨氣を帶びた南風は蒸暑かつた。二日酔ひの氣味で頭が重苦しくつて、口の中は粘つて、朝食の箸を執る氣もしなかつたので、繁太郎は茶だけ飲んでから、相手欲しさに弟の居室へ入つた。

「この頃は何を勉強してるのだ」と云つて、弟の本箱を覗いて見たが、書物の多くは和洋の小說類であつた。二三冊表裝の奇麗なのを取出して、日本物は口の內で、英文のは發音を正しくして聲を出して半ページばかり讀んで、「お前はこんな物が好きなのか」と訊いた。

「面白くないこともないね」輔二郎は凡ての文章を語學の上からのみ見てゐる兄をひそかに卑んでゐた。

「僕も少し小說でも讀んで見やうかな。面白さうなのを一冊貸して吳れないか。新聞の小說は時々讀みかけたこともあつたが、いゝ加減な噓をだら〳〵書いてあるのでどうしても讀通せないよ。僕には正確

な事實を書いた歷史物が性に合つてるよ」

繁太郎は本箱を搜してゐる中、ふと自分が弟に讓つた文典などの古い英書を二三册見つけ出した。手に取つて見ると、自分の書入れた文字と弟の書入れた文字が入交つてゐた。二人の手垢で汚れてゐるところもあつた。

で、思出すまゝ昔の學校時代の話をしたり、弟からも聞いたりしてゐたが、そこへ郵便が投込まれた。お杉が小田原から寄越したのだつた。

こんな機會は滅多に得られないのだから、次手に二三日遊んで歸りたいと思つてゐるなどと氣樂さうなことばかり書いてあつた。そして、あなたが來て下さる譯に行かなければ輔二郎さんでも迎ひに寄越して下さいと書添へてあつた。

「お前は小田原へ姉さんを迎へに行く氣はないか」

例にない親しげな兄の言葉を不思議に感じながら、輔二郎は、「行つてもいゝ」とむつくりした調子で云つた。

「ぢや、今日行つて明日は歸つて來ることにして吳れ」

輔二郎は旅行には飽いてゐたので、さして悅しくは思はなかつたが、兄から餘分の旅費が貰へたり兄嫁からも心付けがあることを小賢しくも胸勘定してゐた。兄はさう極ると、少しも早く立たせたさうにした。

退學後も何時〻被つてゐる緣の取れかゝつた制帽を被つて、袴を着けたゞけで、輔二郎の旅立の仕度

は調つたのだつた。そして、旅費を貰ふと、汽車の時間などには關はずに家を出た。汽車の中の退屈醒ましにビスケットと敷島一つとを買つた。切符を買つて停車場の中をうろ〳〵してゐる間に、この夏の長い一人旅とは異つた興味が彼れの心に湧いた。昨日あんな服裝(なり)をして粉飾(めかし)込んで出て行つた兄嫁を迎へに行くといふことが、玄關脇を日々の天地としてゐる世間の狹い彼れには、艶のある役目のやうに思はれた。兄嫁の從姉の部屋で御馳走になつていろんな話を仕掛けられるのは窮屈だが、默つて女部屋の空氣を嗅いでゐるのは自分の樂しい空想を刺戟する魔藥になるのだつた。兄嫁と妹との外には、女の口から親しい言葉を掛けられたことはこの頃全くなかつたので、肺患者の從姉とでも親しく話をするといふ豫想だけでも、彼れに取つては、胸を躍かすほどの異常の出來事だつた。

野風や汐風は玄關脇へ吹入る都の風よりも腦に快よかつた。二三日惱まされてゐた頭痛を自から忘れるやうになつた。

日暮れ前に着いて早川口の宿を訪ねると、兄嫁などは外出してゐた。輔二郎は譯を云つてその部屋へ案内させた。暫くは片隅に行儀よく座つて待つてゐたが、やがて退屈して來たので、障子を開放して縁側に立つて海を眺めたり、部屋の中の物を手に取つて見たりした。潮の香や香水の匂ひよりも藥の臭ひが強く彼れの鼻に觸れてゐた。衣桁や亂れ箱の衣服は貸浴衣さへ彼れの目には嬌めかしく見えた。鏡臺の側には婦人雜誌や貸本の小說などがあつた。

いゝ氣持で寢そべつて煙草を吸つてゐるところへ、女中が湯を勸めに來た。袴を脫放しにして湯殿へ行つたが、湯槽の中から玻璃越しに海邊を見ると、直ぐ前の小徑を二人が何か語りながら急ぎ足で歸つ

て來るのが目についた。小雨が降出して風も稍强く吹いた。從姉は嘗て會つた時よりは著く老けて、病後らしく痩せてもゐるし、まだ三十をあまり越してはゐないだらうのに、乾涸びて老婆染みてゐた。それに比べると、平常顔立がぎす〳〵してゐると思つてゐた兄嫁の方がどれほど生々してゐて美しいか知れなかつた。

彼れは身體を腭かうとはしないで、湯槽の中から脊伸びして海の方を眺めたり、考へ事をしたりしてゐたが、すると、そこへ兄嫁が不意に顔を出したので、吃驚して湯の中へ腰を沈めた。

「輔二さんよく來て呉れましたね。まさかこんなに早くあなたが來ようとは思はなかつた。家では變つたことはなくつて?」と、兄嫁は戸口に蹲んで訊いた。

「えゝ。……」輔二郎は迷惑して照れ隱しに、ざぶ〳〵音を立てゝ身體を洗ひながら、兄嫁が長い間家を空けた人のやうに、兄や妹の様子を訊ねるのに答へてゐた。

湯から上つて部屋へ戻ると、從姉は歩き疲れたと云つて横になつてゐた。湯殿から見たよりももつと弱々しくつて、顋が尖つて、目付はむしろ凄かつた。自分よりも年上の女は男の心など直きに見破るものと、彼れはかねて敬意を抱いてゐたのだが、この從姉の目は笑ひを含んでゐるに關らず、殊に意地惡く働いてゐるやうで、面と向つて話をしてゐるのが彼れには堪へられなかつた。汽車の中で豫想してゐたやうな樂みは得られなかつた。が、晩餐後兄嫁だけが湯に入つて、從姉は身體に障るからと云つて、一緒に行かなかつたので、暫くの間輔二郎は厭でも差向ひで話に受應へをしてゐなければならなかつた。

父の事兄の事妹の事と、此方では些とも興のないことを訊ねられるのに弱らされてゐたが、從姉は、

「お杉さんが來て下すつたので、昨夕は殆んど徹夜していろ〳〵なお話をしてさんざ泣いたのですよ。そして、急に皆樣にお目に掛りたくなつたから、お杉さんに隨いて東京へ歸らうかと思つてゐますの」

と、云つて、どうせ用がないのだらうから、二三日此處に遊んでゐて三人一緒に歸らうではないかと輔二郎に勸めたが、彼れはこの女を道連れにすることは好まなかつた。で、

「私は明日早く歸るやうにお詫びをして兄貴に約束してるんですから」と無愛想に云つた。

「兄さんには私からお詫びをして上げますよ。どうせ東京へ歸つたら直ぐに兄さんにお目に掛つてお話しなければならないことがあるんですから」と云つて、從姉は例の目を光らせて、「今日あなたが此方へ入らつしやる時に、兄さんはどんなことを云つてらしつて？」と訊いた。

「何も別に云ひはしませんよ。手紙を見て私に行けつて云つたゞけです」

「奇體だわね。……あの手紙は私が無理に勸めて書かせたのですよ。お杉さんが厭がつたのだけれど。……兄さんは怒つてゐなさるでせう」

「いゝえ」

輔二郎が言葉少なに卒氣なく答へるのを、さも隱立てしてゐるらしく從姉は思つてゐるやうな顏して、「兄さんは以前とは人が變つたのですかね。以前は私の家へ入らつしやるたんびに、あゝだからだと隨分苦情が多かつたのですよ。この頃はすつかり穩かになつて、お家で大人しくしてゐらつしやるんですの。結婚前にはよく醉拂つては私共の家へ入らしつて、聞いて呉れ〳〵とさんざお惚氣(のろけ)なんか云つ

て、十二時までも一時までも賑やかに騒いでらつしやつたんですよ。その時分お杉さんも遊びに來てゐて、よく兄さんのお話を聞されては腹を抱へて笑つてましたよ。兄さんのお話は何時も遠慮なしの明けつ放しで、私共は隨分面白いことを聞かされましたつけ。昨夕もその話をしてお杉さんと大笑ひしましたの。……あなたは兄さんのやうぢやないんですつてね。だけど、あなたくらゐのお若い時分にはいろいろの面白いことがいくらもおありなさるでせう」

從姉はこの青年の口から氣の晴れるやうな快活な話を聞かうとしたが、輔二郎は氣のなささうな生返事をしては、仕樣事なさににや／＼笑つてゐた。

風は次第に募つて雨足も繁くなつた。玻璃越しに見ると、眞暗な外には漁火一つ見えないで、とぎれ／＼に唸つてゐる濤の音は今にも宿まで寄つて來さうで薄氣味が惡かつた。

「このくらゐな風は此方では何でもないのですよ。二百十日前の大風には二階が地震のやうに搖れて、氣の弱い人は逃仕度をしたほどなのですよ」

「もつと荒れた方が壯快でいゝと思つてゐますよ」

輔二郎は見え透いた强がりを云つた。此處へ着いた時分には頻りに聞えてゐた隣室の客の咳を吐く音や空咳なども風の音に消されて、この女と只二人離れ小島にゐるやうな心地がした。が、中井ちかでもおさよでもおつるでもおふくでもないこの從姉との島住ひは彼れをして空想を樂ましめるのにあまりに厭らしかつた。

「お杉さん。今ね、輔二郎さんにさう云つてゐたのよ。繁さんはこのくらゐの時分にはお父さんに内所

ではしやいでゐたのだから輔二郎さんだつてどうだか分らないでせうつて」

從姉は湯から上つて來た兄嫁を見上げて笑ひ〳〵さう云つたが、兄嫁は「えゝ」と興もなげに答へただけで鏡臺に向つて、「ひどい風ねえ」と呟いた。

「輔二郎さんも一二年内にお嫁さんを貰ふんでせう。私おひでさんなら屹度いゝだらうと思ふよ」

「ふゝん」と、兄嫁は嘲笑ふやうな聲を出した。そして、眉を顰めて鏡の顏を覘込んで鬢に櫛を入れながら、「輔二さんはそれどころぢやないわよ。これから一生懸命勉强して大學者にならうといふところですよ」

輔二郎は兄嫁と入代りに、從姉の側を離れて片隅へ退いて、貸本を手にしてゐたが、二人の座興に自分が持扱はれるのを不快に感じてゐた。幸ひに兄嫁の方でこんな話にはあまり乘つて來ないので、從姉の方でも話を外へ移した。

手すさびに貸本のページをめくつてゐると、きし子といふ名前を持つた若い女と昇といふ名前を持つた若い男との、悲しげな戀のいきさつなどの書かれてゐるのが、止切れ〳〵に目に觸れた。從姉と兄嫁との世間話には絶えずひそかに耳を澄ましてゐたが、それは多くは知人の夫婦間のことや、若い時分から身持を崩した女の噂であつた。かねて輔二郎の頭に宿つてゐる兄嫁の友達で藝者から人の妾になつてゐる例の女も話題に上つた。

ます〳〵吹荒れる風の音は、幾人もの赤兒が喉を締められて泣いてゐるやうに聞えた。幾百の鴎が死物狂ひに鳴いてゐるやうにも聞えた。宿の主婦は手燭を持つて廊下を見廻つてゐた。が、二人は明るい

電燈の下で小止みなく噂から噂へ移つてゐた。
輔二郎の驚いたのは、兄嫁も從姉に負けず劣らず端たない言葉を喋舌くることであつた。穗村の主人が妻君の病氣中に下女部屋へ忍込んだところ、氣の利かない下女が寢呆け聲で泥棒呼はりしたので、夜中に病氣の妻君と大騷ぎをやつて、下女は直ぐに追出された話が落語めいた口調で語られて、大笑ひになつたりした。
「それは前からちよい〳〵關係してゐたのですよ。彼處の旦那樣は顏付からして女好らしい癖に、經濟家だからお金のかゝる遊びはしないし、自然さういふことになるのだわよ。奧さんだつて彼家へ行つてからは始終病氣してゐるぢやないの」
「でも、その下女といふのが薄馬鹿なのだから、いくら穗村さんにしてもまさかさうぢやあるまいと、私は信じちやゐないの。屹度奧さんの邪推よ」
「相手が薄馬鹿だつて何だつて、隨分喰意地の汚い男が多いのだから分りやしないよ」從姉は毒々しい目付をしてさう言掛けたが、ふと、嵐の間を潛つて階下から聞えた手風琴の音に耳を留めながら、「この階下の部屋に二十二三の色の黑いハイカラの女が養生に來てゐるのよ。今月の半ば頃から箱根へ行つてゐたのに今日歸つて來たのか知らん。……此方にゐると、毎日手風琴なんか鳴らして、其處へまた何時の間に懇意になるのか、隣近所の學生なんぞが遊びに行つて、よく騷いでゐるの。時々は煩さくつて溜らないことがあるのよ」
「さう?。夕方濱邊であなたが挨拶した書生さんも病氣なのですかね。大きな聲で詩吟なんかして丈夫

さうだけれど」

「あの人はハイカラさんの直ぐ右隣にゐるんだよ。今手風琴の音がしてるでせう。あの音が呼出し見たいなものなの」

「でも私には手風琴の音なぞ聞えないわ」

兄嫁に聞えないばかりではない。輔二郎の耳にさへ樂器の音なぞ更に入つて來なかつた。

「奥樣。……えらい風で何だか氣味が惡う御座いますわね」と、障子に影を映して廊下を行過ぎた者があつた。

「あら、お婆さん。まあお入りなさいましなね」從姉は聲を張つて呼んだ。「今夜もあのお婆さんを呼んで、煽てゝ唄はさうぢやないかね。お婆さんは階下のハイカラさんや手風琴の音が大嫌ひなの」

兄嫁はその老婆の眞似だと云つて、眼を丸くして手拍子打ちながら、「こちや濃茶の仲ぢやもの」と唄つたりした。

(七)

從姉の部屋は狹い上にいろんな物が置かれてあつたので、兄嫁は前夜外の客室に寢床を延べさせたのだつた。今夜も其處に寢ることになつたが、輔二郎の寢床はその部屋に附いた次の室に設けさせた。

「この家では此處が一番の上等部屋なのよ」兄嫁はさう云ひながら眠たげに欠伸をしてゐた。話に耽つてゐる間は左程に感じなかつた風雨の音が急に彼女の頭をも亂した。輔二郎の寢床を寢よいやうに直してやりながら明日の天氣を氣遣つてゐたが、

「明日は雨が降つても東京へ歸りますか」と、輔二郎は訊いた。

「歸りますとも。從姉さんが一緒に行くと云ふけれど、さうするには四五日此方で待つてゐなければならないから。……從姉さんは自分では餘程身體がよくなつたと云つてゐるけれど、私さうは思ひませんよ。側で話をしてると時々厭な氣がすることがあつてね」

兄嫁は今まで打解けてゐた從姉の病氣を怖がつたり、少し考へがあつて東京へ歸つても當分實家へは行かないから、あなたの家に泊めて貰へまいかと云はれて當惑してゐることを話したりした。

輔二郎は寢床の中で話を聞いてゐたが、足音はしないで不意に障子が開いて從姉の窶れた顏が現はれた。

「もうお休みなすつて?。私あんまりお喋舌をし過ぎたから、氣が立つて今夜も眠られさうぢやないの」

「ぢや此處で話して入らつしやいな」

「えゝ、私も此方で皆さんと一緒に寢たくなつちやつたよ」

從姉はさう云つたきり障子を締めて行つた。兄嫁は不快な顏して障子の方を見返つて、

「矢張、自分の家で寢るのが一番氣樂だわね」と云つて、寢卷に着替えて電氣を消して寢床へ入つた。

輔二郎は眠づらくて頻りに寢返りして、耳を壓へたりしてゐたが、目はます〳〵冴えて來た。こんなことなら、讀みかけた貸本でも借りて來て置けばよかつたと思ひなどしてゐたが、夜が更けるにつれて風も雨も凄くなるばかりだつた。便所への歸りに見ると、從姉の部屋にはまだ燈火が點いてゐて、目を

覺ましてゐるらしかつた。
洪水が出るか海嘯が來るかして、肺病患者達と一緒に押流されはしないかと恐れて、廊下の雨戸を少し開けて見ると、門燈が一つほのかに光つてゐるばかりで、右も左も闇の淵だつた。寢卷の袖で顏の雫を拭つて部屋へ戻つて横になつたが、何だか不安なので、また起上つて電氣を點けた。兄嫁が目を醒まして話でもして吳れゝばいゝのにと思ひながら、襖の入つてゐない奧の室を見ると、兄嫁は夜具から喰出て、白い齒を少し出して、笑つてゐるやうな顏をして、すや〳〵と寢息を洩らしてゐた。こんな夜よく平氣で眠入つてゐることゝ、正體のない寢樣を輔二郞は物珍しげに暫く見下ろしてゐた。女の寢姿など空想にこそ絕えず描いてゐながら實際ではしみ〴〵見たことのない彼れは、空想を生かす實物を今はじめて發見したやうな氣持で、その睫毛や耳朶や、微動してゐる口元や、枕から垂れた髮の毛などを一々心の底で寫生してゐた。
誰れ憚らぬ氣になつて見詰めてゐると、兄嫁は彼れが平常の空想中の女の一人に化したやうに見做されて、荒れ狂ふ風雨の音も彼の美しい夢に興を添へるものゝやうになつた。絕海の孤島に只二人の世界をつくつて、限り知られぬ悅樂に沈んでゐる氣にもなれゝば、二人手を執つて怒濤の上を永遠に漂つてゐるといふ並の男女には窺ひ知れない悅樂が彼れには夢見られた。
彼れは海目を開いた女を夢の中で見てゐた。
「輔二さんどうしたの？」
驚いて身を起した兄嫁の聲を出し拔けに聞いて、輔二郞は我れに返つて、極りの惡さうに顏を赤くし

た。そして、「今電氣をつけたのです」と、無意味な言譯をして、慌てゝ電氣を消さうとすると、

「電氣は點けてゝ下さいな」と兄嫁は押留めて、周圍を見廻した。

「もう何時ごろか知ら。あなたは今までよく眠つてゐて？……私もうすつかり目が醒めちやつた」

輔二郎は頻りに話しかける兄嫁に滿足な返事を與へないで、背を向けて眠つた振りして夜を明かした。兄嫁の方はやがてまた熟睡してゐるらしかつた。鼾や譫言がをり〳〵耳についた。

あくる朝、彼れは兄嫁の起きるのを待つて起きたが、

「正午過ぎから歸りませう、それまでには風も凪ぐでせうから」と云つた兄嫁の顏は晴々してゐて不穩の影もなかつた。「輔二さんが來て呉れたから大助かりなの。私一人だつたら從姉さんが歸しやしませんよ」

外が稍靜かになつたとは云へ、まだ雨戸を開切ることは出來なかつた。部屋の中は薄暗くて輔二郎の頭はます〳〵陰欝な雲に鎖された。

從姉の部屋が片付いてから、三人揃つて朝餐の膳に向つた。

「せめてもう一晩泊つて行つてお呉れな。急に一人ぼつちになつちや心細いぢやないかね」と、從姉は歎願するやうに行つたが、兄嫁は頻りに口實を設けて頼みを斥けた。「昨夕輔二さんに聞くと、妹の事で今夜は是非私が家にゐなければならないことがあるんですつて」と、いゝ加減な揑造をしたりした。

二人が髮を結合つたりしてゐる間、輔二郎は空部屋へ入つて寢ころんで頭を休めてゐた。宿の人達が垣根や崖の壞れを見廻つて高聲に喋舌つてゐるのが下から聞えて來た。客同士も廊下へ出て昨夕の恐ろ

しさを語合つてゐるらしかつた。濕つぽい汐風は彼れの腦味噌を重つ苦しくして、反吐の出さうな記憶を頻りに喚起させた。

「家から手紙が來ましたよ」と、兄嫁はにこ〳〵して、手紙を擴げながら入つて來て、「いゝ工合に雨も止みさうだから早く歸りませう。猪乃さんが朝出てつたきり夕方まで歸らないから兄さんは心配してるんですつて。どうしたのでせう。私がゐないと直ぐさうだから困つちまう。およしが氣が利かないから、兄さんが自分でお茶拵へして獨りぼつちで食べたんですつて」

それが大變な事件でゞもあるやうに、兄嫁はさう云つて手紙を見せたが、輔二郎は碌々目をつけなかつた。

「猪乃は猪乃で勝手に遊びに行くところがあるんですよ」と冷淡に答へた。

「だからあの女も今の中穗村さんからお話のあつた所へでも結婚するといゝと思ふのだけど。……あなたからもよく云つて聞かせるといゝわ。女は一度間違ひがあると一生の瑕になるんですもの」

「猪乃は傍で何と云つたつて、あんな所へ結婚すりやしませんよ」

「あの女が心掛けてる人があるんぢやないの。どうもさうらしい」

兄嫁は眞顏で知人の名前を云つたりしたが、輔二郎はそんな男に妹を嫁はすのを不快に感じてゐた。そんな男ばかりではない。どの男にでも妹を奪はれるのを恐れるやうな氣持がし出した。每日自分の目に動いてゐて、女としての言葉を話しかけ女としての五體を見せてゐるものを、むざ〳〵他人の手に渡すといふことを思ふと、じり〳〵する妬みが感ぜられた。

「猪乃さんぐらゐの時分には傍で餘程氣をつけなければならないのよ。お母さんがないのだから、どうしても私の責任になるんだわ」

兄嫁は十日も家を空けた人のやうな氣になつて歸りを急いだ。そして、輔二郎を誘つて家の者皆んなへの土産を買ひに出掛けた。夫の寢酒の肴にするつもりで烏賊の鹽辛などを買込んだ。

「いやに急ぎ出したのね」と、從姉はそは〳〵してゐる兄嫁を皮肉らしい目で見て寂しさうに笑つた。

「でも聲の嗄れるほど話したから、私大滿足だわ」

「歸つたら繁さんに、私は小田原では腐ちやしないと云つてゐたつて、さう云つて下さいな」

從姉は電車の乘り場まで見送つて來たが、別れ際には涙をほろ〳〵落してゐた。

「可哀相ね」兄嫁は電車の窓から頭を引込めてから云つた。「何だか一生の會ひ終ひのやうな氣がしますよ」

「本當に私の家へやつて來るんでせうか」

「來られちや困るからね。少々氣に障つてもどうかして斷はらうと思つてるの。あの人には氣の毒だけど、家の丈夫な人達の迷惑になるやうぢや困りますもの」

汽車に乘るころには、ところ〳〵碧い空が見え出した。汚水に浸つた稻の上に薄日が差してゐるのを見てゐると、輔二郎は知らず〳〵睡氣ついて、窓際に肱を當てゝ目を瞑つてゐた。兄嫁は行きかけにはしみ〴〵樂み得なかつた野景色を珍しさうに見て、屢々輔二郎を搖起しては、彼れの目には興もない平凡な山や川を指差した。彼れは相手の指の向いた方を寢呆け眼で見やつては、出鱈目な返事をしてゐた

が、このまゝ麻布の家へ歸つて玄關脇へ押籠められることは飽つ氣なく思はれてゐた。
「早川口の宿屋の四疊半で一人ぽつちで死ぬるのを待つてゐる肺患者の從姉も、玄關脇で妄想で氣を腐らせてゐる腦病患者のおれもつまりは同じことだ」といふやうな考へが起つて、自分の力でどうすることも出來ないやうな牴牾しさを覺えてゐた。
新橋に着くと、兄嫁だけ俥に乘つて先に歸つた。輔二郎は後から電車で歸つたが、家へ入ると、兄嫁は兄や妹を相手に面白可笑しく何か知ら喋舌つてゐた。彼れは其處へは顏出しもしないで、昨日のまゝの自分の居室に閉籠つた。飯時に出て行つても旅中のことは一言も云はなかつた。兄嫁のみが口忙しく、
「猪乃さんも一度田舍へ行つて遊んでいらつしやい。そりやいゝ氣持になりますよ。私大保養しちやつた」
などゝ妹に向つて、海の景色や山の景色を言葉を飾つて話して聞かせたが、妹は兄嫁が途中から一人で行つたことに疑ひを挿んでゐたので素直に聞いてはゐなかつた。工場から遲く歸つて來た父親のみが、
「それはよかつた」と、心に何の蟠まりもなしに、お杉の旅行話を聞いて、從姉の病氣の樣子をも訊ねたりした。繁太郎は昨日から氣遣つてゐて、無事に歸つて來た女房の顏を見た時には、悅しさを色に出したほどだつたが、女房の呑氣らしい話などを聞いてゐると、何となしに不平が萌しかけた。で、留守番さゝれた憤欝晴らしのつもりで、晚餐もそこ〳〵に家を出て、銀座あたりのカフエーを二三軒飮み廻つて、可成りに夜を更した。
いゝ氣持に醉つて家へ歸ると、外の者は皆んな寢鎭まつて、自分達の寢室のみ燈火が耀いてゐた。小

待合入りなどして、さしたる惑溺もしないで、通り一遍の面白づくめで遊んで歸つて來ると、何時も感ずるやうな幸福を、彼れは今夜も、寢室の溫かい燈火を見て感じたのだつた。で、その上飲みたくはないのに、例に習つて二三杯西洋酒を傾けて、小田原土產の蓋を開けた。別に取除けて置いた甘露梅などを抓みながら、彼地の事を話出したお杉の話振りは晩餐の時とはまるで異つてゐた。あれほど信用してゐた從姉についても冷かな批評を加へたりしてゐたが、輔二郎の旅での變人振りをもさまぐに笑話の種にした。

「あの人もう色氣づいてるんぢやないかと思ひますよ」と、お杉は何か思出したやうな目付をして獨笑ひをした。

「それは不思議なことはない。あれは二十二ぢやないか。どうかしたのか」繁太郎は口では事もなげに云つたが、腹の中では自分でも不思議に思はれた。それが當り前のことであつても、弟や妹に自分と同じやうな色氣のあるといふことは今まで彼れの念頭になかつた。

「でも妙だわね、輔二さんは書物ばかり讀んでゐて、女なんか臭ひも厭だつていひさうな風をしてゐるのに」と、お杉は蔑視すんだやうに云つて、「何だか氣味が惡かつたのですよ」

「あんな人間は一度迷ひ込むと一生懸命になるかも知れないね」

繁太郎はさう云つたきり、强いて深入りしては訊かなかつたが、弟に對して嘗て感じたことのなかつた一種異樣な不愉快な思ひがし出した。

(八)

嵐の後の秋日和は幾日も續いた。お杉は腹の中の灰汁抜をして來たやうに、快く日々の仕事をしてゐた。一家族の冬物の仕度も差迫つてゐるので、多少氣忙しかつたが、自分一人の量見で間に合はせに始末をつければいゝので、苦情を云ふものもないのだから、その點は氣樂だつた。

「輔二さんには兄さんのお古ばかり着せてゝ氣の毒だから、今年はお父さんに願つて一揃ひ新しい着物を拵へて上げたいと思つてゐますよ。あなたゞつていゝ物を着たいと思ふこともあるでせう」

ある日兄嫁がさう云つて、好きな着物は何かと訊ねたが、輔二郎はそんな物には用はないと云ふやうな顔して、「僕はこれで澤山です」と云つて、ふと自分の着物の見窄らしいのに氣付いた。氣がついて見ると、袴でも衣服でも帶でも近年は兄の着古したのばかり身に着けてゐるのであつた。そして流石にいい氣持はしなかつた。

「兄さんのは少しお洒落れの人はとても着られやしないの。どれを出して見ても、田舍の老人の着るやうな爺むさい柄ばかりなんですよ。その代り丈夫なことはこの上なしだけれど」

「母は着物に趣味なんか些ともなかつたやうです。遊藝も好きではなかつたやうだし」

「本當にさうらしかつたわね。でも、お母さんにだつて何か樂みがあつたに違ひないと思ひますよ」

「樂みと云へば掃除くらゐなものだつたでせう。母の生きてゐる時分は、庭に埃屑一つ落ちてゐなかつたし、閾でも緣側でもぴか〳〵光つてゐましたよ」

「さう云はれると私何だか耳が痛いわ。輔二さんも意地の惡いこと云ふのね」

「僕は事實を云つたゞけです」

輔二郎は兄嫁に對しては、ます／＼生眞面目な顔して切口上で話掛ける癖がついてゐたが、小田原から歸つて後は、兄嫁の前に平氣で座つてはゐられなかつた。その目や口や言葉が絶えず心の累ひとなつて、自分で退けることの出來ないやうな壓迫を覺えた。自分の居室に閉籠つてゐる間にも、以前左右に侍らせてゐた空想の女の影は次第に薄くなつて、兄嫁の姿形がまざ／＼と其處に現はれた。が、その姿形からは空想の女をぼんやり眺めて日を暮らすやうな樂みは得られなくつて、瀝青の臭でも嗅いでゐるやうな不快が感ぜられた。

「おれは早く下宿屋へでも別居しなければならない」

彼れは兄達の寢室に神經が敏く働き出してから、一層別居の必要に迫まられて、先づ妹にそれを打明けた。二階の父の居間で、妹が雜誌か何か讀んでゐるところへ出掛けて行つて、「お前から親爺に云つて吳れないか。お前が旨く說きつけといて吳れると、僕も非常に話がし易いんだから」と云ふと、猪乃は得意になつて引受けた。

「だけど、輔二さんが私に賴むなんてよく／＼のことだわね。私お父さんが得心するやうに今夜直ぐにでも話をしてよ。輔二さんが別居すれば私も遊びに行ける所が出來て都合がいゝのよ。私には親類はないし詰らないと思つてゐるんだから」と悅しさうに云ひながら相手の顔を見詰めて、「だけど、お父さんに賴み事をするには、目的をはつきり極めて、いくら／＼お金をかけたら、何年目にはいくら／＼お金が取れるといふ風に計算を立てゝ話を持掛けなくちや駄目よ。」

「しかし、僕にはそんな金儲けの見當はつかないよ」

「輔二さんは正直過ぎるからいけないのよ。私だつて學校を卒業したら敎師になつて、自活出來るくらゐの俸給が取れるなんて、そんな事を考へて勉强してるのぢやないけれど、これからは女にも學問が必要だと云つたゞけでは、とてもお父さんが承知しないのですもの。卒業した後は後でその時またどうにかなると思つてるの」

「親爺もお前の云ふことは信用するだらうが、僕は元から實用的の事を云つてゐないから駄目だ」

「文學者だつて結構だわ。小說を書けば一枚これ〱の報酬が貰へるとか、書物を一冊出版すれば幾ら儲かるとか、誰れか有名な人を例にしてお父さんが成程と思ふやうに話して御覽なさい。嘘だつて構はないぢやないの。それに輔二さんが將來文學者として實際に名擧が出るかも知れないしね」

「だけど、勉强するに別居する必要はないと親爺は云ふかも知れないね」

「始終圖書館へ通はなければならないから、その近所にゐる必要があると云つたらいゝでせう。下宿屋を搜す時には私も隨いて行つてよ。輔二さんは部屋のよし惡しなんぞ些とも關はないらしいから」

猪乃はさも新しい家庭でも持つやうな興味に驅られて、下宿屋の位置や部屋の裝飾のことなどを話し出した。自分が學校の行歸りに見たことのある家を思出したりした。ある日ふと見上ると、秋の日の差込んだ二階の部屋には色の濃い油繪が懸つてゐて、その前のテーブルでは頭の大きな男が俯首いて一心不亂にペンを動かしてゐた。「あの下宿屋の二階に空室があつたなら、輔二さんに彼處を借りさせるといい。さうしたら學校の歸り每に道寄りして遊んで行かれる」など、空想しながら、その下宿屋を勸めた。

輔二郎はすべて妹まかせにして、友達の下宿屋生活を實例として思出してゐたが、ふと、何を感じた

のか、

「家の中ぢや、僕等よりも親爺よりも兄貴が一番幸福なのだぜ」と云つた。

「何故？。私は些ともさう思はないわ。繁兄さんはあれつきりの人だけど、私達にはこれからいくらでも幸福なことがあるのぢやないの。私今目の前にどんな樂しいことが湧いて出るかも知れないと思ふことがあつてよ。今のやうに皆んなが冷かな目をしてゐる所で暮してゐたつて詰らないけど。……輔二さんの下宿屋へ遊びに行けるだけでも、私に取つては一つの幸福だわ」

「下宿屋はお前は知らないだらうが、そんないゝところぢやないぜ。喰物は惡いし部屋は汚いし。下等だから下宿屋と云ふのぢやないか」

「ぢや上等なら上宿屋？」猪乃はさも面白さうに笑つて、「でも此方の考へ一つで何處でも住みよく出來ると思ふわ。私毎日でも旨い物を買つて行つて上げてもいゝわ。私ね、時々誰れかに奢りたくつて溜らないことがあるんだけど、家ではそんなことが出來ないから詰らないの。人に御馳走して喜ばせたらいい氣持がするだらうにね。お父さんや繁兄さんはそんな樂みは些とも解しないのだわね。だから何時も家の中が寂しくつて息が詰まるやうな氣がするのだわ。輔二さんは仙人だから別だけれどね」

「人を寄せて飲み食ひして騷ぐのがそんなに幸福なことか知らん。お前は時々北川の娘なんかに物を買つてやりたつしてるやうだね。無駄ぢやないか」

「だつて僅かなお金を使つて人に懷かれゝば損ぢやないわ」猪乃はさう云ひながらも、自分のした事が兄の言葉の通りに無駄なやうな氣がしないではなかつた。「でも、私だつてよく考へてるのよ。本當は姉

さんよりも私の方が慾張りさんかも知れないわね。些つとした買物をしても私の方が直ぐに損得が氣がつくのよ。輔二さんが自分の財産としては只の一圓も持つてゐないのによく安心してゐられると思ふてともあつてよ。私は矢張あなたのやうに精神的にはなれない人間だわね」

「お前だつて女だから、今に命懸けで男に迷つたりすることがあるかも知れないさ」

「輔二さんには私がそんな女に見えて?」

猪乃はさう思つてゐる兄の淺墓さを嘲笑ふやうな顔付をした。輔二郎は兄嫁に比べると、この妹の濡んだ眼や紅い唇や餅のやうな肌がまだ仇し男に汚されてゐないらしいのを喜んだが、この女にでも色戀の慾が白い皮膚の下に燃えてゐるのではないかと思ふと、それを恐れそれを憎む氣がした。今若しも若い女の心を惹くやうな肉體を具へた若い男が、自分のやうに此處でかうして妹と差向ひでゐて、女の氣に入りさうな情愛に富んだ柔しい言葉で切ない戀を打明けるとしても、妹は誘惑に應じないだらうか。今兄としての自分に對してゐるのと同じやうに、「そんな女に見えて?」と淡白に冷笑の目を向けたゞけで見過ごしてしまふだらうか。

輔二郎は心の中でじり〳〵して來た。そして、「お前は用心して男に騙されないやうにしろ。口先で旨いことを云ふやうな男は當てになりやしないぜ。男は皆んな腹の中は陋劣なのだから」と、例になく激しい口を利いた。

すると猪乃は噴出した「輔二さんは何に感じてそんなことを云ふのだらう。私誰れにも騙されたことはなくつてよ」

「僕は將來のことを云つてるんさ。たとへ今は誘惑に掛つてはゐないにしても」

「御親切有難う。私輔二さんからそんな忠告されやうとは夢にも思はなかつたの。姉さんから時々さう云つた風な忌味な忠告は受けることはあるけど、それは時代おくれの姉さんが御自分を標準にして云つてるのだと思つて馬鹿にしてゐたの。輔二さんは小說など讀んで私達は皆んな淺墓な誘惑に掛つて墮落なんかするやうに思つてるんだわね。本當に可笑くつてならないわ。小說や新聞に出てる女のやうな無智な女ばかりぢやないんですよ。私はこれでももつと利口な人間のつもりなの。自分の一生の損得くらゐは知つてゝよ」

まだ安心が出來なくつて？と、猪乃の目付は揶揄つてゐるやうな目付に變つた。しかし黑瞳は潤んで何物にも變へがたい美しい艶を持つてゐた。輔二郞は女の白い皮膚の裂け目に、その美しい黑睛を彫出した造化の意匠の神秘靈妙なのにうつとりした。妹の目尻は切れが長くつて、白目が稍々碧味がゝつてゐた。

この目で泣いて、涙を仇し男の手か胸かへ落すのかと思ふと、彼れは堪へがたかつた。

「私は輔二さんが氣立てのいゝお嫁さんを貰つて新しい家庭をつくつてゐたら、私のためにもどんなに手頼りになるか知れないと思ふことがあるのよ。そして、輔二さんのお嫁さんには誰れがいゝか知らんと、私時々仲人にでもなるつもりで考へて見ることもあるの。あなたが溫かい、情愛のある家庭をつくつて、私にも親切で話の分る姉さんが出來たら、どんなに幸福か知れないと思つてよ」

やがてさう云つた妹の口調にも顏付にも心からそれを望んでゐるらしかつたが、今の輔二郞は冷淡た

る自分の新家庭を夢みるよりも、目の前に立つてゐる妹が自分を離れて行く淋しさが痛切に感ぜられた。

「僕のことよりもお前自身が家庭をつくりたいんぢやないか。僕は自分の結婚も望まないが、お前が陋劣な男と結婚して笑つたり騒いだりするのを見るに忍びない氣がするよ」

「私結婚など望んでやしないわ。この夏姉さんが穂村さんの奥さんのお話を眞に向けて、いゝ加減な結婚を勸めた時に、私一言で斷はつたくらゐよ」

「しかし、僕の旅行前とはお前は餘程人間が違つて來たやうだからね。お前の心の中は濁つて來てるやうに思はれるよ。お前のその目の奥には男の影が動いてるよ。誰れだい、その男は。云つて御覧。僕は毎日同じ家にゐても、お前の心の中がよく分らないのだから」

「私誰れにも知らせないやうな大秘密を持つてゐるのよ」猪乃は戯談らしく云つて笑つたが、兄の目はますます無氣味で、側にゐると頭が暗くなりさうだつた。

「お前も男なんかに引掛つて汚されないやうにして呉れ。そして、身體が萎びない前に若い中に死んだ方が却つて幸福だよ」

輔二郎はこんな幸福を妹に押付けて、無理にもさう信じさせて誓はせたいと思つたが、猪乃は「慘酷な幸福だわね」と云つて、兄から顔を背けて鳥の飛んでゐる澄んだ空を眺めた。

（九）

陰氣な人であつても疑人であつても、家の中では親しみ易い唯一人の人としてゐた兄に對しても、猪

乃はこれからは打解けがたい氣がし出した。むつくりした顔付にも無骨な言葉にも今までのやうな懐かしみが失せて、目は意地くね惡く光つてゐた。腦が惡いのかも知れないと思ふと氣の毒だけれど、あまり近よりたくはなくなつた。

でもその夜、父に向つて兄のために別居の必要を說いてやつて、略々同意を得たので、玄關脇の部屋へ知らせに行つた。輔二郎は家の者には秘密にしてゐる煙草を吸ひながら、洋書を開いて熱心に讀んでゐるらしかつたが、襖が開くと、慌てゝ煙草を書物の蔭へ置いて、机を脊にして向直つた。

「お父さんは承知したのよ。あなたからもよく話して今直ぐにでもはつきり極めるといゝわ」猪乃はさう云つたゞけで、煙草の煙を横目で見ながら出て行つた。

が、輔二郎はその夜父の居室へ行かうとはしなかつた。父の方からも呼びには來なかつた。そして、翌日は朝早く工場の方へ父は出掛けたし、輔二郎は愚圖々々で別居の話を延して、下宿屋搜しにも出掛けないで日を送つた。……兄嫁や妹と別れての下宿生活が以前望んでゐた時分ほど樂しいものとしては最早彼れの空想に浮ばなかつた。

ところが、何時もよりは早目に歸つて來た繁太郎は、衣服を着替えると直ぐに、「輔二郎」と大きな聲で呼付けた。滅多に例のないことなので、輔二郎は驚いたが、直ぐには座は立たなかつた。も一度同じやうな聲で呼付けられて、「一寸話したいことがあるから此方へ來て吳れ」と云はれてから、のそ〳〵出掛けて行つた。面と向つて改つた話をされるのを厭うて緣側の方へ寄つて坐つた。先に兄夫婦の留守に妹と二人で綺麗に掃除した庭には枯葉が散つてゐた。

「お前は何もしないでゐるから考へが不健全になつていけないんだよ。また何處かの學校へ入るなら入るし、働く氣があれば相當の仕事を見付けたらいゝぢやないか」と云つた意見がましい兄の言葉は、輔二郎の耳には異様に響いた。今更何を思出して弟の身の上を案じるのか、何を指して不健全と云ふのかと怪まれた。

「僕はこれからは獨學でやるつもりだから學校へは入らないんだ」と、膠もない返事をすると、

「それは獨學もいゝだらうが、詰らない本ばかり讀んでゐたつて役に立たないぜ。此間中時々お前の本箱に入つてる書物を讀んで見たが、あんな物に耽つてるから頭が不健全になるんだ。おれは驚いて棄て置けないやうな氣がし出したよ。……それについてお前に勸めたいことがあるんだが、學校の風間君がある本屋に頼まれて歐洲戰爭に關した書物の飜譯をやることになつて、一人助手を雇ひたいと云つとつたから、お前を使つて貰へないかと、おれが一寸口を掛けといたのだ。報酬の事は第二として、飜譯をやれば語學の力はつくし、毎日仕事をやつてゐれば、却つてお前の頭のためにもいゝだらうと思ふよ。……厭かい」

「……少し考へてから返事をしよう」輔二郎は多少の興味を起さぬではなかつたが、飜譯の技倆について自信はなかつた。學校の課題とは違つて、世間に公にするために外國の文章を日本の文字に移すといふやうな六ヶ敷仕事に手を着けるのは、自分などには潜越なやうに思はれた。

「考へる必要はないぢやないか。職業といふものは急に捜したつて容易に得られないんだぜ」と、兄は無理にも押付やうとした。

「僕は戰爭の本は好かないから讀んだことがない。だから間違ひだらけの飜譯をして頼んだ人に迷惑を掛けるかも知れないよ。助手になる資格はないと思ふね」

「なに。間違ひは主任者が直して呉れるから構はないよ。どうせ際物だから大體の意味だけ取つていゝ加減にやつとけばいゝんだ」

「しかし印刷した物が間違ひだらけだつたら、永久の耻になるから」

「永久も何もないさ。そんな書物は學者が讀むのぢやあるまいしさ」

「人から非難されなくつても、初めて筆を執つた物が粗末だつたら、自分で何時までも氣持が惡いからね」

「生意氣なことを云ふなよ」兄は輔二郎の頑な態度を一圖に傲慢らしく見做して、取挫きたく感じた。

「お前はそんな威張つた口の利けるほどの人間かい。鐚一文自分の腕で儲けたことがあるのぢやなしさ。獨學すると云ひながら、下等な書物を讀んでは不健全なことばかり考へてるんだらう。呆れた奴だよ。猶乃までもお前のために惡い感化を與へられるのだ」

見當違ひの兄の小言を、輔二郎は奇怪に思ひながら、默つて庭の方を見てゐたが、するとそこへお杉が入つて來て、「どうしたのです」と呆れた顏して二人の顏を見た。繁太郎は今云つたことをぶつ〳〵繰返して、「働かないから不健全な事を考へては腦を惡くするんだ」などゝ忌々しさうに云つてゐた。

喧嘩かと思つてゐたお杉は大したことではなかつたので安心して、「輔二さんだつてもつとしたらお父さんに負けないくらゐは働き手になるかも知れないわね」と笑ひ〳〵云つて、「輔二さんの袷が今縫ひ上

つたところなのだから、一寸着て見て下さいな」と、兄の傍にゐて不快な思ひをさせまいと思つて次の室へ誘ひ出した。輔二郎は誘はれるまゝに隨いて行つた。嬰兒に着物を着せるやうに兄嫁が後から着せて吳れるまゝに新しい柔かい衣服を身に着けたが、身體中の神經が撫でられるやうな快感を覺えた。「これまでのよりも少し丈を長くしといたのよ。……そんなに手を縮めないでずつと伸して御覽なさい」と、兄嫁は指圖しながら見詰めて「いゝでせう。これなら結構だわ」と悅しさうな目をした。

新衣を脫棄てゝ古びた木綿の絣に着替へると、輔二郎は自分の居室へ入つたが、今の快感が暫くは心を刺戟してゐた。そしてそれ以上の刺戟をいろ〳〵に空想させた。……自分を見榮えよくさせるあの銘仙の袷を着て出たいとは思つたが、さて誰れに見せたいといふ當てのないのが淋しかつた。「いゝ柄ね。あなたにはよく似合つてよ」と、猪乃はあの目をしてあの聲をして云つて吳れるかも知れないけれど、猪乃は妹だ。おれの生れた腹から生れ出た女だ。……

彼れに柄のいゝ新衣を縫つて吳れた女が兄嫁であるのが彼れには佗しかつた。……そして長年頭の中で孕んで來た幾人かの空想の女は霧のやうな稀薄なものに今はなつてしまつてゐる。

輔二郎は心を轉ずるために、働けと云つた兄の言葉を思出して、自分の飜譯の力を自分で試すつもりで、本箱の中から盲搜しに二三の英書を取出して、二三行づゝ飜譯して見た。英和辭典と國語辭典とを手賴りにして、さま〳〵に試みたが、讀返すと、どれも〳〵殆んど文章の體をなしてゐなかつた。何氣なく讀んでゐた知名の人の飜譯文の巧妙さが人間業ではないやうに思はれ出した。

「生意氣云ふな。……不健全なことばかり考へやがつて」さう云つて罵つた兄の言葉を借りて、自分で

自分を咒咀しなければならなかつた。

猪乃は最早兄の別居の世話をする氣はなくなつてゐたが、學校の歸りに、例の下宿屋の前を通つて明き間札を見つけると、默つてはゐられなくて、直ぐに輔二郎に知らせて、「寒がらない間に早く見にいらつしやい」と勸めた。

だが、輔二郎は聞流して相手にしなかつた。猪乃は親切を無にした兄の態度を、今までのやうに好意でのみ迎へられなくなつてゐたので、兄嫁に向つて訴へた。

「輔二さんは氣味が惡いわね。姉さん」

「今兄さんに叱られたのよ。輔二さんの方からも何か酷いことを云つたんでせう。兄弟喧嘩なんぞ見つともないから、私が今止めたところなの」と、兄嫁は小聲で大袈裟に話して微笑した。

「言合ひをしたの。珍いわね」

猪乃はその場に居合はせなかつたことを惜んだ。喧嘩でもした方が却つて情愛の燦めきがあるやうで快く思はれたのだつた。

（十）

繁太郎は此間中から弟を目障りにして、一所に食事をしてゐる間にも、をり／＼汚らしい感じを起した。そして、以前よりも頻繁に女房を連れて、物を食べに行つたり、自分には興もない寄席入りをしたり、偶には場末のある怪しげな家へも入つたりした。お杉はいゝ氣になつて粉飾して、そのたびに異つた着物を着などして、うか／＼と出掛けた。で、時々は猪乃や輔二郎に向つて、聞いて來た落語の筋や

藝人の身振りなどを話して笑はせやうとしたが、彼等は身を入れて聞いては呉れないので張合がなかつた。

「私なら、御馳走がなくつても、皆んな揃つて御飯を食べた方がどれほど旨いか知れないと思ふよ」と、猪乃は兄嫁の出た後で、よくそんなことを云つてゐた。

ある日も夫婦が急に思立つて、用事でもありげに出て行つたが、それと入違ひに小田原からお杉の從姉が出し抜けに訪ねて來た。大きな荷物を持込んで、當分此處へ泊るつもりでゐるのだつた。猪乃は客を兄の居室へ通して一寸挨拶したゞけで引込んだが、輔二郎は先日世話になつた關係もあるし、打遣つては置けなかつたので、不承々々に顏出しゝて、先方の問ひに受答へしてゐた。兄夫婦はこの頃はよく一緒に出掛けるかとか、何處へ行くのかとか、くど〳〵しく訊ねられた。

「あの後私の方へは些ともお便りがないから、姉さんはお加減でも惡いんぢやないかと案じてゐましたよ」と、從姉は厭味らしい口を利いた。

「家の者は元から皆んな丈夫で、病氣で床に就くことなんかありません。身體のいけないのは僕一人だけです」と、輔二郎は生眞面目に答へた。

「何處もお惡るさうには見えませんですけど、矢張り腦がお惡いんですかね。あまり御勉强なさるせいでせう」

「さうぢやありません」

「病氣ほど厭なものは御座いませんわね。私どもこの頃はすつかりよくなりましたけど、隨分情けない

思ひや怖い思ひをしつゞけて來たのですよ。お杉さんには私どものやうな經驗がないから、いくらお話しても本當には分りませんのよ」

病氣の苦痛や健康の幸福の間はず語りをし出した從姉の顏を輔二郎は些とも丈夫さうではないと思つて見てゐた。先日よりは際立てゝ衣服もいゝのを着てゐるので、病人らしい醜さは稍蔽はれてゐたが、膝に置かれた手などは骨が出て萎びてゐて、兄嫁や妹に見るやうな軟かな肉は身體の何處にもありさうではなかつた。しかし輔二郎は從姉の話振りが小田原で兄嫁とはしたない話をしてゐた時とはまるで異つてゐるのに心を惹かれた。病氣して氣が欝いだ時に海の浪でも見てゐると、その中へ飛込みたくなるとか、昔の事ばかり思出されて仕方がないとか、丈夫な家の人達からは嘗て口にされたことのない憐れな言葉を聞くと、思ひがけない親しみを覺えた。だが、此方からははき〳〵した返事をしないで、居づらさうに畏まつてゐるので、從姉は氣の毒になつたのか、

「私にはお構ひなく御勉强なさいましな。その中姉さんも歸つて入らつしやるでせうから」と云つて、緣側の方へ出て、何を見るともなく外へ顏を向けた。

「あの人は今に死ぬるのだ」輔二郎は自分の居室へ入つてから、從姉の萎びた身體を空に見詰めてゐたが、兄嫁は容易に歸つて來ないので、待ちあぐんだ從姉は、玄關脇の襖を少し開けて、

「お歸りは夜になるのでせうか」と訊いた。

「えゝ、さうかも知れませんね」

「おや、この近所に一軒訪ねて見たい家がありますから、今の間に其處へ行つて來ませうか知ら」從姉

は相談を掛けるやうに云つてゐた。久振りに汽車などに乘つて疲れてゐるのに、また出歩くのは大儀であつたが、しかし、最早飯時になつてゐるし、お杉夫婦の留守の間に御馳走になるのも變に思はれたのだつた。……退屈のあまり立つたり座つたりして家の樣子を窺つてゐると、夕餐の仕度などしてゐる風はなくつて、外は都會らしいいろんな物音がしてゐるのに、家の中は聲一つ咳嗽一つしなかつた。薄暗くなつた庭の木立に百舌鳥の聲がきゝつと聞えた。

浮つかりすると夕餐にも有りつけないかも知れないと危んで、從姉はやがて輔二郎に一言いひ置いて外へ出た。

「厭な人が來たのね。あんな人に長逗留されちや溜らないわ」猪乃は客の出て行くのを見て二階から下りて來て云つた。「でも輔二さんはよく女のお客樣のお相手をしてゐたわね。私不思議でならないよ」

「お前が引込んでるから困るよ。お前こそお客好きなのだからよく持成したらいゝだらうのに」

「私嫌ひさ、肺病やみなんぞ。それにあの人は私の家の事に出過ぎた差圖がましいことをよくするんですもの。今度だつてあの人が來たゝめに決していゝ事はないと思ふわ」

あの弱々しい女にと思ふと、妹の言葉はあまり冷酷なやうだつたので、輔二郎は可哀相な氣がして、二三言辯護して病氣の苦痛など話して聞かせたが、妹は眞面目には受入れなかつた。「輔二さんがあんな人に同情するのは可笑しいわね」と冷笑して、「私はどう思はれてもいゝから、あの人のゐる間は、二階へばかり上つてゐるわ。輔二さんが一人でお持成しをするといゝわ」

「馬鹿……」輔二郎は口では荒い言葉を吐きながら、揶揄はれてゐるのは惡い氣持はしなかつたが、妹

は揶揄ふ張合ひもなくつて、

「たまにお客が來て呉れたかと思ふとあんな厭な人だし詰らないわね」と、さも詰らなささうに云つた。

そして、二階へ上つてオルガンを彈き出した。

（十一）

その夜繁太郎の居室は遲くまで賑はつた。從姉は蘇生したやうな元氣で、夫婦を相手に喋舌り散らした。輔二郎もその座へ招かれて、兄嫁に葡萄酒を一二杯飲まされたりした。女達がほんのり頰を紅くして、蕩けた目をしてゐるのを見て、馴々しい口調で世間話をしてゐるのを聞いてゐると、彼れは自分の家にゐるやうな氣はしなかつた。

「明日は輔二さんがお伴して、活動へでも芝居へでも行つて入らつしやい」と、兄嫁は云つた。

「私はさうしてはゐられないわ」從姉は昂奮してはしやいでゐる間にもふと自分の身の上が考へられて「極りがついてから皆さん御一緒で帝劇へでも連れてゝつて頂きませうよ。……それよりも明日の朝は是非繁さんに浦上へ寄つて頂かなければなりませんよ。大役でも何でもありやしない。當然私の貰ふべきものを貰はうと云ふんですもの」

「しかし、さう急がなくつてもいゝでせう。僕のやうな他人が行つて出し拔けにそんな話をしちや先方で氣を惡くしますよ」

「でも、私も身體がよくなつて東京で暮らすとなると、一日も早くあの話を極めなければ不安心で仕樣がないぢやありませんか。浦上の方では私の物で利子だけでもこれまでに隨分得をしてゐるんですから

ね」

「へゝえ」

繁太郎が冷かに笑つて熱心に肩を入れて呉れさうでないので、從姉は嶮しい目をして理窟を捏出した。病氣の治療費や轉地の費用などは幾らも貰つてはゐないから、亡父が自分に讓つて呉れる筈になつてゐた財産にさう傷はついてゐない筈だと、慾の深いことを云つてゐた。

輔二郎はよくは解らないながらも、從姉が姉婿から取るべきものを取らうとしてゐる魂膽を面白く聞いてゐたが、話が進んで來ると、兄は弟をその座に加へるのを嫌つて、「お前はもう彼方へ行つといで」と追出した。

やがて、輔二郎は從姉の泣聲が兄の居室から洩れて來るのに耳を留めた。そして、寢床へ入つても、三人の話聲が寂とした周圍に響いてゐるのが氣になつて、眠が妨げられた。が、暫くすると、從姉は兄嫁に案内されて二階へ上つて行つた。父の居室が臨時に客の寢室に當てられたらしかつた。その次の室には猪乃が寢てゐるのに。

輔二郎は小田原に泊つた夜の事を夢のやうに思出してゐたが、寢づらいのか、從姉は夜明けまでに二度も三度も便所へ下りて來た。そして、その靜かな足音がぴん／＼彼れの頭に響いた。

あくる日早くから目を醒ました從姉は、昨日よりもまた窶れたとげ／＼した顏をして下りて來た。澄んだ秋晴れの朝の空氣に觸れても、小田原にゐた時分ほど心持よくはなかつた。顏を洗ふのも挨拶するのも懶いほどに疲れが出てゐた。

「もつと緩くり寢てゐらつしやればいゝのに。お父さんは夕方でなきや歸つて來ないのですから、二階は一日空いてるのよ。寢るなり何なりあなたの好きなやうにして休んでゐらつしやいな」兄嫁は親切で云つたばかりでなく、早くからお客にまご〳〵されても迷惑になるのだつた。

「私ね、お杉さん」と、從姉は皺嗄れた聲で云つた。「此方に御厄介になつてゐてもお氣の毒だし、今朝直ぐにお暇して浦上へ行かうかと思ふのよ。」

「どうして?。おや昨夕のお話はどうなさるの。私の家にゐたつて些とも厄介なことはないんですよ」

「私、昨夕一晩考へてゐたら、浦上にもさう剛いことは云出せないやうな氣がするの」

「それはそれとして、せめて二三日は私の家に泊つて下さいな。これつきりで出て行れちや、何だか私達の仕向けが惡かつたやうでお互ひに厭ぢやないの。……まあ後でお話しするから、階下が片付くまで二階で休んでゐらつしやいよ」

「えゝ」從姉はお杉が寢室を片付けるのをじろ〳〵見てから、大儀さうに二階へ上つて行つた。椅子に身體を投掛けて目を瞑つてゐたが、長い間早川口の宿で企らんでは樂みにしてゐた事も、仕遂げる力は一夜の間に壞されてしまつたやうだつた。たゞの今日の一日でも姉や姉婿の家で、氣兼ねしないでぐつすり眠りたくなつた。仲よしのお杉の家の寢床も肌さはりが惡くて氣持よく落着いてはゐられなかつた。

朝御飯に呼ばれて皆んなと一緒に食卓に着いたが、口の中に熱氣があつて物の味はしなかつた。輔二郎が散歩の次手に取つて來た牛乳を半分頒けて貰つて、それに生卵を一つ入れて、不味いのを我慢して

呑んだ。父親だけはゐないが、此處の一家族が揃つてゐるのを見てゐると、如何にも幸福で手頼りありげに見えて羨ましかつた。……よく不平を洩らしてゐたお杉の手紙などを眞面目に讀んでゐた自分は馬鹿にされてゐたやうな氣がした。小田原へ見舞ひに來て呉れた時には、お互ひに心が融け合つて話も面白かつたが、今朝は自分一人影が薄くつて、お杉の周圍には後光が差してゐるやうで、何を話しても氣乘りがして來なかつた。

「私もうお暇しませうよ」と、兎もすると口に出した。

「ぢや私が學校から歸るまで遊んでゐらつしやい。私かお杉かで送つて行きますから」と云つて、繁太郎が出て行つた後で、從姉はお杉に勸められて、二階で横になつた。久しく用ひなかつた催眠藥を飲んで假睡を呼ばうとした。

「浦上へ行つたつていゝことがあるものかね。姉さんもあゝ迷ひ出しちや駄目」と、お杉は輔二郎を相手に呟いた。「あんな身體をしてゐながら、一軒家を持つて、親類の子を貰つて育てゝ行かうなんて考へてるんだから不思議でせう」

「小田原で一人ぢつとしてゐたら氣樂でいゝだらうにな。もつと惡くなつたら誰れが介抱するのでせう。傳染病は誰れでも厭がるだらうから氣の毒ですね」

「猪乃さんなんかあの人の持つてゐた物には一寸も觸らないやうにしてるの。その癖昨夕は次の間にお客樣が寢てるのに朝まで氣がつかつたらしいんですよ。今朝起きて吃驚してゐましたよ。猪乃さんが無愛相にするから姉さんもゐづらくつて、急に氣が變つて浦上へ行きたがるんでせう。折角手頼りに思つ

て來たのに、それぢや可哀相だから、輔二さんが何處かへ見物に連れてつてお上げなさいな。吃度喜びますよ。あの人はあなたを好いてゐるのだしね」

「僕も病人は嫌ひですよ」

輔二郎の含羞んでゐる樣子をひそかに面白がつてゐたお杉は、一寸揶揄つて見る氣になつた。陰氣なためか一體が年齡よりも老けて見えるその顏にも、よく見ると、何處となく子供々々した可愛らしいところがあつた。顏の事などによく氣のつく從姉が、輔二さんは顏の眞中から下の方がいゝと小田原で云つたことが思出された。

「でも、姉さんはいゝ女でせう。少い時分にはよく肥つてた人だつたのに、苦勞したり病氣したりして、すつかり痩せちやつたけれど、その代り却つて姿がよくなつたの。輔二さんはさうは思はなくつて？」

「僕にはよく分りません」

「あの人は鼻は高いし眉は地藏眉で齒並はよく揃つてゐるし」と、兄嫁は從姉の顏の道具立を一つ〳〵取立てゝ誇張して褒めたので、輔二郎はその言葉によつて實物を思出してゐたが、その言葉によつて組立てられる顏は、從姉の顏でなかつた。從姉などゝは似ても似つかぬ匂ひも色も豐かな女の顏だつた。むしろ兄嫁や妹の顏がその言葉で連想を起さゝれた。

「あのくらゐの容色で氣に入らないとすると、輔二さんは餘程理想が高いんですね。あなたに氣に入るには大變な美人でなければならないのね。知つてる人の中に誰れかそんなのがあつて？　隱さずに云つて御覽なさい。もう二三年もしたら輔二さんもお嫁さんを取らなければならんのだから、私の心覺えに

聞かせといて下さいな。猪乃さんも望みが高いし、輔二さんも望みが高くちや、世話役は困りますよ」

「猪乃に高い理想も何もあるものですか。今に下らない男にでも騙されて直ぐに墮落するに極つてゐますさ」

妹のことゝ云ふと昂奮していらく〳〵した口調で惡しさまに云ふのを兄嫁は何の意味もなく聞流して、

「猪乃さんは考へがえらいから別でせうけれど、女學生には隨分自墮落な人が多いんですつてね。……猪乃さんのお友達なんか皆んな無邪氣な顔してゐながら、英語を使つたりなんかして、一寸聞いてゐても、何だかえらい事を云つてゐますよ。英語がお互ひの符牒見たいなものね。輔二さんにはあの符牒がよく分つて面白いでせう。あなたも六ヶ敷勉强ばかりしてゐないで、猪乃さんのお友達なんかと交際して御覧なさい。乾度話しが合つて面白いんですよ」

「まさかそんな馬鹿な眞似は出來やしませんさ」

「どうしてそれが馬鹿なことなの。輔二さんはあんまり引込み思案だから腦が惡くなつたりするのよ。遠慮しないで思ふことを云つたりしたりして御覧なさい。世の中はどんなにでも面白くなつて來るのよ。あなたは兄さんよりも自由に何でも出來る身分ぢやありませんか。……二階に今寢てゐる姉さんは、あの身體をしてゐながら、あゝもしようかうもしやうと、中々野心を持つてゐるのだから可笑しいでせう。私達のやうな甲斐性なしぢやないから、愚圖々々してる人ぢやないの。丸山の家を飛出したのも、一芝居打つゝもりだつたのですよ。それがあの病氣で皆んな當てが外れることになつたのだけど」

昔風で堅實なばかりを取り得にして、義理づくめで亡父が嫁入らせた丸山の家を、亡父の死際に自分

から苦情をつけて飛出した從姉の過去の來歷は、輔二郎も嘗て薄々聞いたこともあつたが、そんなことは彼れの耳には何の感じも與へなかつた。色の褪せた醜い身體が二階に横はつてゐると思ふに過ぎなかつた。それよりも、兄嫁の言葉のはし〳〵に自分が操られてゐるやうで、心のだらけるやうな快感を覺えてゐた。

　昨夕の眠不足や惡夢で困憊してゐる輔二郎の頭は、障子にかつと照りつけてゐる溫い日に醉はされたが、前にゐる兄嫁も、昨夕の夜更しのために五體が弛んでゐるやうに見えて、不斷よりもその目や鼻に親しみ易かつた。

「僕だつて學生時代には交際してゐた女もあつたのですよ」と、つひぞ人に向つて云つたことのない空想の女を誠しやかに口に出した。

「へえ、そしてその人は今はどうしてゐます？」兄嫁は聞棄てにしなかつた。

「どうしてるか知りません」

「その人は餘程容色のいゝ人なんでせう。だから輔二さんは外の女は誰れを見ても氣に入らないのだわね」兄嫁はその女の名前や住んでゐた土地や年齡などを疊みかけて訊ねた。

　輔二郎はどぎまぎして、次第にいゝ夢から醒めた。浮つかり喋舌つたことが後悔されて耻かしい思ひのみ殘つた。

「交際したつてどうといふことはないんですよ」

「でも輔二さんは好きな女の人にどんな話をしてゐたのでせう。いくらあなただつて私達に話してる時

とはまるで違つてゐるでせうね。末の約束なんかしなかつたのですか。どちらが薄情なのか知ら。私その千代さんといふ人に是非會つて見たいわ。あなたも時々は會つて見たいと思ふでせう。二十歳前だと二三年の間にはすつかり女振りが變つてゐますよ。寫眞があれば見せなさいな。私にはそんなことを隱立てしなくつてもいゝわよ」

輔二さんがまあ柄にもないと云はぬばかりの兄嫁の目付に、輔二郎は激しい侮辱を認めた。そして、それに抗ふ力が出ないどころか、自分は當然それに價ひするもののやうに思はれた。……明るい光に浴してゐる自分の五體の見窄らしさや、その中に潜んでゐて如何ともしがたい穢雜な思ひやが、ふと顧みられた。……兄嫁の目にもさう映つてゐると思ふと座に堪へられなかつた。

「姉さんが目を醒ましてるのぢやないか知らん」兄嫁は二階の物音に耳を留めて、「輔二さん一寸行つて見て下さいな。起きてゐたら呼んで來るといゝわ。私がお茶を入れときますから」

自分の居室へ行きかけた輔二郎は、兄嫁にさう吩咐けられたので、止むを得ず二階へ上つて見た。從姉は寢呆け顏して寢亂れ髮を解付けてゐた。

「もう幾時でせう。眠り藥のお蔭で大變よく眠りましたよ。藥は暫らく飮まないでゐるとよく利くものですわね」と云つて、夜具を片付けて、輔二郎を招いた。

「お茶を入れるから下りて入らつしやいと階下で云つてゐました。

「有難う。……私もいくらか自分の身體のやうな氣がし出しましたよ」

從姉は急いで身仕舞をして階下へ下りたが、輔二郎は二階に留まつてゐた。と、やがて階下から崩れ

るやうな笑聲が起つて、生々した兄嫁の聲がとぎれ〳〵に聞えた。彼れは今自分の事が兄嫁の舌に上つて無慙にさいなまれてゐるやうに思はれて居ても立つてもゐられなかつた。

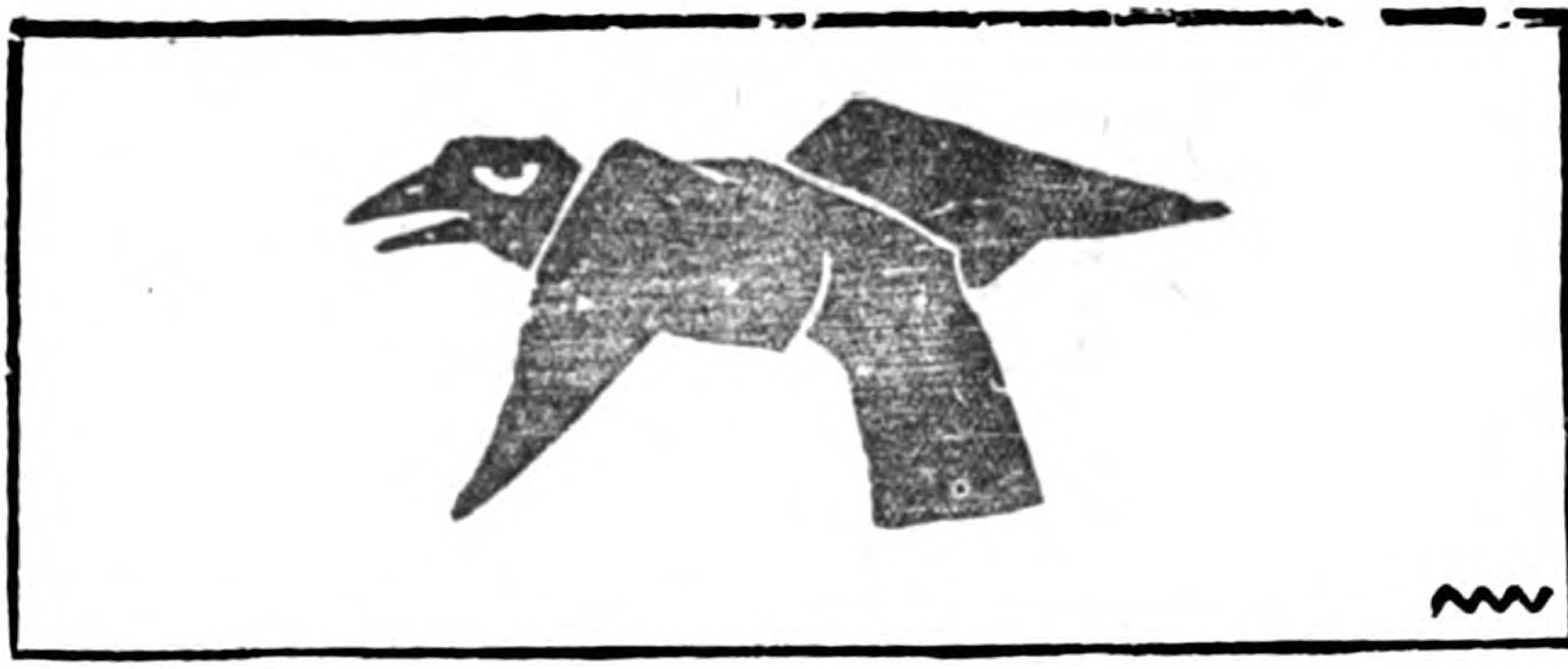
ふと、父の机の上の黄い藥箱が目についた。手に取つて見ると、從姉の用ゐる催眠藥らしかつた。

「大變よく利くと云つてゐたから、これを一服飲んでも自分は何もかも忘れて熟睡されるだらう。二服も三服も一度に飲んだら、こんな身體もこんな思ひも働きを止めてしまうかも知れない」

彼れは咄嗟に箱に殘つてゐた三服の散藥を口に移して、水差しの水で飲み下した。そして、今まで從姉の寢床になつてゐた蒲團を被つて寢ころんだ。

醒めてゐては生きてゐては、とても達せられない慾望を心の中で頻りに動かしながら、目を開けたり閉ぢたりしてゐた。階下(した)では誰れか歸つて來たのか、話聲はます〳〵賑かになつたが、やがてその聲も幽かになつて、彼れは何だか明るい綺麗なところへ導かれて行きかけた。

「もう元の家へ歸るものか」彼れは幽かにさう思つて、藥に利目あれよと願つた。……これを境にそれから先は夢だつた。



神童

谷崎潤一郎

一

春之助の通つて居る小學校では、敎師でも生徒でも、一人として彼の顏を知らない者はないくらゐであつた。上は校長から下は小使に至るまで、自分の學校の高等一年生に春之助と云ふ神童が居ると、口々に評判をして褒めそやした。

彼は一年の時から始終拔群の成績であつたが、最も有名になり出したのは、尋常四年生の頃である。或る日敎師が作文の時間に「天の河」と云ふ題を出した。すると春之助は二十分程考へた末、「先生出來ました。」と叫んで石盤へすら〳〵と二行ばかりの文句を認めた。敎師がそれを讀んで見ると、意外にも立派な五言絕句に作られて居た。「日沒西山外、月出東海邊、星橋彌兩極、爛々耀秋天。」と云ふのである。

授業の濟んだ後で、敎師はその詩が果して韻を踏んで居るかどうかを檢べて

見ると、ちやんと平仄が合つて居た。漢學の造詣のある校長は其れを見せられて、「李白の佛がある。」と讃嘆した。萬一何かの燒き直しではあるまいかと疑つて居た敎師は、それから二三日過ぎて、「お前に此れが解るなら、詩の文句に譯して御覽」と云つて、黑板へ平假名交りの文章を書き示した。

春之助が讀んで見ると、それは一首の和歌であつた。――「はつせのや里のうなゐに宿問へば霞める梅のこずゑをぞさす。」――忽ち彼は眼を光らせて敎師に云つた。

「先生、此の歌は僕にも覺えがあります。此れはたしか釋契沖の歌ですね。」

「よく知つて居る。えらい!」

と云つて敎師は舌を捲いた。その驚きが終らぬうちに、春之助は白墨を取つて同じ黑板へすら〳〵と書き下した。「牧笛聲中春日斜。靑山一半入紅霞。借問兒童歸何處。笑指梅花溪上家。」

それからこんな話もある。ある時校長が彼の敎場で修身の講話を試みた序に、天神樣の例を引いて、菅公の作つた名高い和歌を二つ三つ書き記して說明した。それは大概人口に膾炙した極めて平易な意味のもので、「此の度は幣も取りあへず」とか、「東風吹かばにほひおこせよ」とか云ふのであつた。

「あなた方は此の歌のうちでどれが一番好きですか――」

と、其の時校長に質問されて、一般の生徒は誰も滿足な答をなし得なかつた。最後に質問の矢は春之助に向けられた。

「菅公の歌で僕が好いと思ふのは、その中にありません。」

と、彼は答へた。

「そんなら外にどう云ふのがあります。」

校長は興味の眼を以て反問した。

「僕が一番好きなのは……」と云ひながら、彼は半ば夢見るやうな調子で天井を仰ぎつゝ朗らかに吟味した。「……山わかれ飛びゆく雲のかへりくる影見る時ぞなほ頼まるゝ。」

「どうして其れが好きなのですか。」

「でも此の歌が一番高尚で、意味が深いやうに思はれます。」

「さうですか。」と云つて校長は苦笑ひをしてしまつた。

あまり智能が發達して居る爲め、春之助は一としきり非常に生意氣な、小憎らしい少年となつた。けれども高等二年の頃から、彼の擧動は漸く謹嚴になり沈重になつた。それは彼が漢文學に熱中して、知らず識らず儒教の感化を受けた結果なのである。此の早熟な少年は四書五經を讀み始めてから、詩や歌を作るのが嫌ひになつて、一生懸命に東洋の哲學や倫理學に關する書籍を漁り求めた。彼は學校から歸つて來ると、むさくるしい二階の四疊半に蟄居したきり、夜の更ける迄机に向つて動かなかつた。老子を讀み、莊子を讀み、しまひには佛教の方へ手を伸ばして倶舍論や起信論や大智度論などゝ云ふ物にまで眼を通した。その時分の事である。彼は目黒の眞言宗の寺に遠縁にあたる和尚が居た事を想ひ着いて、其處へ佛書を借りに行つた。

「方丈さん、あなたの所に正法眼藏と云ふ本がありますか。あるなら何卒貸して下さい。」

と、春之助は突然云つた。

和尚は眼を圓くして不思議さうに少年の顏を凝視しながら、「お前にそれが解るのかい。」と云つた。

「えゝ解ります。一と通りの佛書は讀んだつもりです。」

「そんなら私の前で此れを讀んで御覽。此の本の標題は何と讀むのだ。」

かう云つて、和尚は机の傍にあつた一冊の薄つぺらな和本を示した。その表紙には「三教指記」と書いてあつた。

「此れは三教指記でせう。弘法大師が子供の時に書いた物でせう。僕は此の間讀んだばかりです。」

それで和尚はすつかり降參してしまつた。

春之助の名聲が喧傳されるに隨つて、此の奇蹟的な少年を生んだ仕合はせな兩親までが注目されるやうになつた。彼の父は瀨川欽三郎と云つて、堀留の木綿問屋に三十年も通勤して居る一番番頭である。父の年は五十一、母の年は四十六であるが、比較的遲い子持ちで今年十二になる春之助と、七歳になる女の兒があるばかりであつた。いくら一番番頭でも、會社や銀行と違つて、堅儀な卸問屋の店員であるから、父の收入は大凡そ知れたものであらう。兩國の藥研堀の、不動樣の近所に小綺麗な二階家を借りて、親子四人は淋しく睦しく暮らして居る。每朝八時頃になると、父と春之助とは今年尋常一年へ入學した娘のお幸の手を曳いて、久松橋の袂にある小學校まで連れて行つてやる。其處から父は子供等に別れて堀留の店へ獨りで出掛けて行く。

學校では、兄が兄故妹の方も少からず矚目されて居る。春之助程ではないけれど、此れも兎に角一年生の首席を占めて、先づ優等生の部類である。こんな立派な子供を儲けた父母は、親の身としてどんな

に嬉しい事だらう。……と、世間からは非常に羨しく思はれながら、臆病で苦勞性な欽三郎は始終春之助の身を案じて居た。第一氣に懸るのは彼の健康である。十二と云へば腕白盛りの時代であるのに、彼は少しも快活な遊戲や運動を好む樣子がなく、暇さへあれば書物ばかり耽讀する。殊に此の頃は恐ろしく陰鬱で、無口で、血色の青白い、筋骨の瘦せ衰へた、見るから弱々しげな病人じみた少年となつた。

「どうも昨今あの子は變ですよ。三度の食事にいつも御飯を一膳しか喰べませんよ。」

母のお牧がかう云つて欽三郎に耳打ちをした事がある。彼は早速伜を呼びつけて頻りに理由を詰つて見たが、「別段心配な事はありません。たゞ少し心に誓つた事があるものですから。」と、簡單に答へたきり、父が健康の大切な事を說明して、體育を重んじるやうにいくら意見しても承知しなかつた。

「そんならお前が心に誓つたと云ふのはどんな事なんだ。それを私に聞かせておくれ。」

欽三郎は心配で心配で溜らないやうな顏つきをして、再び詰つた。

「お父さん、私は近頃禪宗の本を讀んで非常に感心したんです。人間は此の世の慾を斷たなければとてもえらくはなれませんよ。だから私は出來るだけ食物の慾を制限して、克己心を養ふやうに精神を鍛錬して居るんです。僕は體よりも精神の方がどのくらゐ大切だか解らないと思ふんです。」

春之助は乾然としてかう答へた。彼の克己心修養の手段はそのうちに追ひ追ひ極端になつて、食物ばかりか、睡眠時間を減らしたり、寒中に薄着をしたり、一時間も二時間も坐禪を組んだり、殆んど狂激に走つて行つた。なまじひに干涉すれば、却つて變挺な理屈を云ふので、兩親はおどおどしながら、默つて其れを見守つて居るより仕方がない。父親の心痛はだんだん增して來るばかりである。成る程伜は

俐巧な少年に違ひなからう。將來大學へ入學させて立派に仕込んでやつたら、恐らく非常な大學者になるであらう。……けれども商人の欽三郎は自分の悴をやつぱり商人にさせたいと望んでゐる。望んで居ても居ないでも、欽三郎の境遇として、到底子供を大學までやらせる程の資力がない。せめて高等小學校を卒業したらば、適當な商店へ小僧に住み込ませ、年期奉公を勤めさせるのが、一番出世の捷徑であり、身分相應な教育である。然るに此の頃の春之助は、貧乏な町人の子にあるまじき趣味や傾向に浸潤して、だんだん父親の期待に背いて行きさうに見える。欽三郎は自分が意見をするよりも、此れは一番學校の先生から說いて貰ふのが上策であると考へて、密かに受持ちの敎師を訪ねて懇々と依賴した。

「あれだけのお子さんを、商人にしてしまふのはほんとに惜しいものですなあ。」

かう云つて教師もひどく殘念がつたが、結局父親の希望通りをよく本人に納得させるやうに誓つた。

「瀨川、お前はそんなに勉强をして將來何になるつもりですか。」

或る日學校が退けてから、春之助は先生の前へ呼ばれてこんな質問を受けた。

「僕は聖人になりたいと思ひます。」と、少年は暫く考へた後口を開いた。……さうして、世の中の多くの人の魂を救つてやりたいと思ふんです。」

「お前の望みは實に立派だ。誰に聞かせても耻しくない貴い望みだ。しかし昔の諺にも「孝は百德の基」と云ふ事がある。先づ親孝行が出來なければ到底德の高い聖人にはなれる筈がない。近い話が二宮尊德を見るがいゝ。立派に亡夫の家業を繼いで、自分の家を再興してから世間の人々を救つたのぢやないか。」

少年は默々として項垂れたまゝ耳を澄まして居た。敎師はそれから伊能忠敬の例をも引いた。世の中を救ひたいと思ふなら、兎も角も親の志を繼いで家業を興してから、其れに從事するのが順序である。志さへ强固であつたら、四十五十になつてからでも決して事業をするのに遲くはない。勿論其れは凡人の精力を以て、よく成功す可きではないが、苟くも聖人にならうと迄望むならば、斯程の忍耐と晩成とが必要である。今のうちから功を急いで、年齡に不相應な勉强の結果健康を害するやうでは、とても末の發達が覺束ない。——かう云つた敎師の言葉には可なりの熱と力とがあつた。

「どうだね、解つたかね。それとも私の云つた事が間違つて居ると考へたら、遠慮なく云つて御覽。」

「先生わかりました。僕が惡うございました。僕は全く親不孝でした。」

何と思つたか少年は忽ちはらはらと淚を流した。

「此れからきつと先生のお言葉通りに實行します。必ずえらい聖人になつて見せます。」

かう云つて彼は激しく泣いた。春之助は其の時の自分の胸の中が、最も聖人に近くなつて居る事を感じた。

敎師の訓誡に非常な刺戟を受けて、睫毛の淚を拂ひながら家へ歸つて來る途中、春之助はさま〴〵な事を考へた。自分の今迄の行爲と云ふものは凡べて虛僞である。凡べてが卑しい名譽心に胚胎する虛僞の努力である。自分が果して眞箇の聖賢になる積りなら、もつともつと大奮發をしなければならない。學者になるよりも先づ町人の子にならなければならない。學問よりも先づ道德を實行しなければならない。自分は克己心を涵養すると稱しながら、兩親の爲めに自己を犧牲にする事さへも忘れて居た。——

春之助は矛盾極まる己れの態度を反省して、耻かしいやうな氣持ちがした。

けれども彼が改心の實を示して、兩親や教師を喜ばせたのは其の後僅か半月ばかりで、間もなくもとの學問好きに復つてしまつた。

「先生、僕はいつかの約束通り親孝行をする氣でしたが、どうも實行出來ない理由が起きて來たんです。どうぞ此れを讀んで下さい。」

と云つて、春之助は封筒に入れた書面のやうなものを教師の手元へ差し出した。書面には「師の君に送る。」として下の文章が認めてあつた。

……眞の聖賢たらんと欲せば先づ德を修めせよと師の君は宣へり。孝行の道をだに辨へずしていかで聖賢たるを得べきと師の君は誡め給へり。げにさもこそと吾も其の折は打ちうなづきて、學問よりも實行を重んずべしと誓ひたりき。されど、あゝされどいかにせん、此の頃の疑ひ深き我が心は、實行に方りて抑もいづれが眞の善なるかを解するに苦しむなり。善とは何ぞや、惡とは何ぞや。此の問題を極めざれば凡べての行爲は無意義なるべし。……あゝ師の君よ、かくまで迷ひに迷ひたる吾を憐みて暫の不孝を許し給へ。親への義務を怠るとも人間の道を究むる事こそ、吾人が最初の勤めなるべけれ。……

教師は困つたものだと思つたが、到底理屈を以て此の少年を改めさせる餘地はないとあきらめてしまつた。それから程なく母のお牧は、伜の机の抽き出しから次のやうな文章の書き綴られた日記帳を發見した。

愚かなる父母を持つて此の世に生れし我が身こそ、げにもこよなき不幸なりけれ。氣の毒なる父よ母よ、おん身はやがて春之助より暖き養育を受け、何不自由なく老後の餘生を造らんと望み給はゞそは大いなる誤りなるべし。春之助の望は金銀財寶にあらず、功名榮達にあらず、おん身が現し世の快樂として喜び給ふ萬の事は、一として此の春之助が心をば動かすに足らざるなり。予はおん身等を愛せざるにあらず、しかもおん身等のみを愛する能はず。キリストを生みたる肉、釋迦を生みたる國の運命を見よ。....

それから二三ペエヂ先に、「山家集より」として、西行法師の歌が抜萃されて圏點を施されて居る。

　世の中を夢と見る〳〵はかなくもなほ驚かぬわがこゝろかな。

母親には何の意味やら一向に解らないが、兎に角不穩な思想を抱いて居る事は明瞭であつた。

春之助の兩親に對する態度はだん〳〵横着になり狡猾になつた。彼は父親に詰問されても、以前のやうに正直な理由を告白したり説明したりしなくなつた。説明するのは結局無益だと信じてしまつて、成る可く交渉に一時を糊塗しようと努めて居る。御飯をもつと賜べろと云へば素直に賜べる。着物をもつと着ろと云へば大人しく着る。それで居て肝腎の勉強だけはどうしても止めない。夜中にそつと床を脱け出して、ランプの心を掻きながら机に向つて居たりする。漢學だけでは到底駄目だと悟つたのか、一生懸命に英語の獨學を始めて、高等二年を終へる頃には、カアライルのヒイロオ、ワルシツプを讀破した。つゞいてSartor resartusを讀んだ。もう學校の先生なぞは眼中になかつた。

春之助が十三になつた正月のことである。神田の小川町邊を散歩して居ると、とある古本屋の店先に英譯のプラトオ全集六卷が並べてあるのを見付け出した。Bohn's Classical Library と記した背中の金字が散々に手擦れて垢だらけになつて居た。試みに其の中の一卷を抽き拔いて見ると、到る所に赤インキでアンダアラインを施したり、鉛筆で註釋や批評を書き加へたりしてあつて、此の書の以前の持ち主が、如何ほど熱心にプラトオを熟讀し、玩味し、研究したか、そゞろに其の篤學さが思ひやられる奥床しい物であつた。プラトオの名前ばかりを聞いて居て其の文章に接したことのなかつた春之助は、憧れて居た戀人に出會つたやうな心地がして我知らず胸の躍るのを覺えた。書棚の前に彳んだまゝ彼は偶然自分の眼の前に開けたページの一節を讀み下した。……hence God resolved to form a certain movable image of eternity; and thus, while he was disposing the parts of the universe, he, out of that eternity which rests in unity, formed an eternal image on the principle of numbers;—and to this we give the appellation of *Time*……恰も彼の眼に入つたのは、THE TIMÆUS の中の、ソクラテスが「時間」と「永遠」とを論じて居る此の五六行の文字であつた。彼は平生朧ろげながら自分の心で考へて居たことが、立派に其處に云ひ表はされて居る嬉しさと驚きとに打たれた。喜びのあまり昂奮して、手足がぶる〳〵と顫へるくらゐであつた。「此れだ、此れだ、此の本だ。自分が不斷から憧れて居たのは此の本の思想だ。讀みたいと思つて居たのは此の本の事だ。此の哲人の言葉を知らなければ、己は到底えらい人間にはなれない。」春之助は腹の中で獨語した。彼はもう其の本を自分の手から放すことが出來なかつた。

「此れはいくらですか。」と、彼は帳場の主人を顧みて云つた。

「五圓ですよ。」

先から不思議さうな顔をして少年の擧動を見守つて居た主人は、嘲るやうな微笑を浮べて、氣乘りのしない調子で答へた。春之助は、かう云ふ場合の費用に充てる爲め、平生から無駄遣ひを節して溜めて置いた小遣ひが三圓あつた。それに正月の年玉として、親戚の叔父叔母から貰つた金を加へれば丁度五圓程の額に達して居た。彼は直ぐに藥研堀の家へ走つて、金を持つて引き返して來た。

六冊の書物を風呂敷に包んで宙を飛んで歸つて來た春之助は、是非共正月一杯に讀んでしまはうと云ふ大決心を以て、學校から歸つて來ると毎晩夜中の二時三時迄机の傍を動かなかつた。さうして月の廿日頃には、望み通り既に其の書の三分の二を讀過して、高遠な哲理の大體を會得することが出來た。眼に見ゆる現象の世界が一場の夢幻に過ぎないことや、たゞ觀念のみが永遠の眞の實在であることや、嘗て春之助が佛教の經論を徹して教へられた幽玄な思想が、此の希臘の哲人に依つて更に強く更に明かに説かれて居るのを知つた。彼は自分が今年漸く十三歳の少年でありながら、大人と雖容易に理解し難い書籍の蘊奥を究めて、いかに精神の貴む可く物質の卑む可きかを悟り、古への聖者大德のやうな心境に到達し得た己れの聰明と幸運とを祝福せずには居られなかつた。「自分は全く神童に違ひない。」と彼は思つた。現在の彼の頭は既に古來の有名な哲人の頭と同程度まで進んで居るやうな氣がした。彼等と春之助との距離は殆んど僅かであるらしく考へられた。

或る晩、彼が全集の第五卷目を讀み終つた時、階下の柱時計が微かに午前三時を打つのを聞いた。少

し頭が痛むので窓の雨戸を一尺ばかり明けて、暫く冷やかな戸外の空氣に顔を曝して居た。月のない寒空が眠靜まつた人家の上に高く冴え返つて、北斗七星のきらきらと瞬くのを視詰めて居ると、彼の心は自然と今しがた讀んだ書物の方へ戻つて行つた。丁度微妙な音樂を聞き終つた後のやうに、一種の恍惚とした快感が、ダイアロオグの文章に醉はされた彼の腦髓の何處か知らに、さめようとして未だ醒め切らぬ熱の如くに殘つて居た。「自分は今、たしかに偉大な精神を把握したと信じて居る。古への聖僧哲人に比べても、耻かしからぬ悟道を開いたやうな氣がして居る。しかし、此の悟りは果して本當の悟りであらうか。一時の興奮でそんな風に己惚れて居るのではなからうか。自分は實際、此の心をいつ迄も持續して、將來立派な宗教家、哲學者になれるのであらうか。」……五六分の間、春之助は窓際に頰杖を衝いて、深い meditation に沈んだ。それから再び雨戸を締めて、寢支度をして居ると、

「春之助はまだ起きて居るのかい。今戸を明けたのはお前かい。」

かう云つて、父の欽三郎が下の部屋から聲をかけた。

「えゝ、私です。」と、春之助は直ちに答へた。父はそれきり何とも云はなかつた。

寢間着に着換へてから、床へ這入る前に便所へ行かうとして梯子段を降りかけた彼は、段の中途で、ふと兩親のひそひそ話が聞えるので、そのまゝ息を凝らしつゝ耳を欹てた。

「あれも今年は十三だらう。十三と云へば昔はみんな奉公に出したものだ。それに行く末大學までもやらせると云ふやうな餘裕のある内の子供ならいゝが、なまじ中學で止めさせるくらゐなら、いつそ此處いらで奉公にやつた方が當人の爲めにもなる。」かう云ふのは父の言葉である。春之助の胸は、急に重い

石で壓し付けられるやうな惱みを覺えた。今度は母が其れに答へた。

「ですがあれ程學問をやりたがつて居るのだから、せめて小學校だけでも卒業させたらどうでせうね。今奉公にやると云つたら、なかなか承知をしますまいし、悧巧な子だけにあんまり無慈悲な親たちだなんぞと、恨まれたりしちや氣持ちが惡うござんすから。」

「小學校を卒業しないたつて、あの子はもう其れ以上の學問があるんだから、商人としての教育に不足はないさ。學校へやつて置くとますます學問に凝つてしまつて、氣位ばかりが高くなつて仕樣がない。今夜にしたつて御覽な、もう三時ぢやないか。毎晩々々こんな夜更けまで本を讀み耽つて居るやうぢや、今に體を壞してしまふ。だからまあ此の四月になつて、高等二年を濟ませたら直ぐにも奉公に出した方がいゝ。いづれ其の時になつたら私からよくさう云つてやらう。」

「さうですね。今そんな事を云ひ出すと又何を云ふか分らないから、四月になつて、いよいよと云ふ時に學校の先生からでも意見をして貰ひませう。ほんたうに此の頃では、先生までが馬鹿にされて居るんですからね。――「あのお子さんにはかなひません。全く末恐ろしいお子さんです。あゝ云ふ子供は非常にえらくもなれる代りに、若し慢心するとどんなに墮落するか知れないから、よくよくお氣をつけなさいまし。」ツて、此の間も先生が云つて居ましたよ。」

大方からうであらうとは豫期して居たが、現在まざまざと其の相談を聞き込んで見ると、彼は兩親を恨むよりも憫む方が先へ立つた。學問の貴さを悟らず、人生の意義をも解せぬ、何と云ふ無智な、淺はかな親たちであらう。自分が學校の先生や親たちを輕蔑するのは、決して慢心の結果ではない。自分の道

徳觀が、彼等の道徳觀よりも遙かに進み過ぎて居る爲めなのだ。かりに其れを慢心と名づけるなら名付けてもよい。しかし自分の慢心は、向上の一路を辿る助けとこそなれ、墮落の導線とならう筈はない。釋迦や基督の墮落する事が不可能であると同じく、自分は絕對に墮落の恐れのない人間である。春之助はさう考へた。たとへ學校の敎師や親たちが如何に反對しようとも、自分はどうしても商人などにさせられる人間ではない。自分のやうな天才が、商店の小僧などにならう譯がない。自分は必ず、何とかして學問をやり通さねばならぬ。又やり通すべき運命に立つて居る。天が自分を捨てないならば、いかほど俗人共の妨害が這入らうとも、遂にはきつと自分の値打ちに適しい運命が、自ら廻つて來る。かう云ふ信念が春之助の心の奥に潜んで居て、兩親の密談を氣に懸けながらも彼は格別騷がなかつた。

三月の中旬になつて小學校の學年試驗が始まつた。同級生のうちで、試驗を濟ませてから都下の中學へ入學を志願する者は十人足らずあつた。明日から學年の休暇にならうと云ふ日に先生が敎壇に立つて生徒一同へ訓示を與へた。「あなた方の中には此れきり本校を退學して、來月から中學へ這入る者もあるだらう。又商店の丁稚となつて奉公に行く者も少くはあるまい。いづれにしても皆樣は御兩親のやれと云ふ事をやらなければならない。學問は大切であるから成る可くならば中學へ這入るに越した事はないが、さればと云つて御兩親の許しが出なければ已むを得ない。誰しも他人の家に使はれて丁稚奉公を勤めるのは辛いであらう。しかし、小僧だからえらい人間になれぬと云ふ理窟はないのである。心懸けさへよかつたら、奉公して居ても學問は立派に出來る。」春之助は、先生がかう云ひながら時々ちらりと自分の顏を盜み視るのを感付いた。かねがね兩親から賴みがあつて、それとなく自分に意見をして居るの

だなと、彼はうすうす推量した。さうして、昂然と面を擡げてグッと先生の顔を睨み返した。如何なる抵抗、如何なる無理を犯しても、斷然中學へ這入つて見せると云ふ反逆心が、言はず語らず少年の眉宇の間に溢れて居た。

「お前に少し話があるから、休みのうちに一遍私の所へ遊びにお出で。三月中は忙しいから來月の四五日頃がいゝだらう。」

放課後、春之助は鞄を抱へて敎室を出ようとすると、先生が呼び止めてこんなことを云つた。話と云ふのは無論分つて居る。

「承知しました。」と、彼は徐かに、何事か深い覺悟を極めて居るやうに落ち着いて答へた。此の春之助と云ふ少年の天才の周圍を取り卷いて、凡俗の分らず屋の大人共が盛んに卑しい干渉を加へて居る。全體大人と云ふ者は、どうしてあんな淺薄な考へばかり持つて居るのだらう。世間の大人が、皆あのやうな劣等な人間であるとしたら、世の中に自分ほどえらい人間は居なくなる。自分はあの大人共の意見などを眼中に置く必要はない。自分は彼等に逆つて何をしようとも、自分の行爲を justify する權利を持つて居る。」春之助はさう思つて、敎師を尻目にかけながら學校の門を出た。

家へ歸つても兩親は別段何も云はなかつた。凡べての處置を先生に委せてしまつて、自分達は腫れ物に觸るやうに、默々として我が子の動作を注視して居るらしかつた。すると四月三日の神武天皇祭の朝である。「東京市立第一中學校御用、日本橋區馬喰町一丁目、島田洋服店」と書いた大きな名刺を携へた商人風の男が尋ねて來て、「どうぞお宅の坊ちやんの制服を注文して頂きたい。」と、玄關へ出た母親の

お牧に頼むのであつた。その日は父の欽三郎も店が休みで、玄關の次ぎの間に新聞を讀んで居たが、洋服屋の口上を聞くと同時に障子を明けて、

「手前どもの悴は中學へは參りませんのですが。」と聊か心配さうに云つた。

「まだおきまりにはなりませんけれど、先達て入學試驗をお受けになつたと承りましたから、それでお願ひに上つたのでございます。私の悴も久松學校へ通つて居りまして、度び度びお噂は伺つて居りますが、なあに此方様の坊ちやんなんぞは、成績の發表をお待ちにならないでも、及第なさるにきまつて居るやうなものですから、今から制服の御注文を遊ばしても大丈夫でございます。もしも落第なさるやうな事がございましたら、お取り消しになつても一向差支へはございません。」

至極如才ない辯舌で、洋服屋はお世辭交りにしやべり續けた。

「それは何かのお間違ひではありますまいか。悴は中學校の入學試驗を受けた筈はありませんが。」

欽三郎が斯う云つても洋服屋は承知しなかつた。「そんな譯はない。自分は決して隣り近所から好い加減な話を聞いてお願ひに上つた次第ではない。自分の店は古くから第一中學の御用を務めて居て、あの學校の役員とは懇意になつて居る。今日庶務課へ出頭して、受驗者の名簿住所を見せて貰つた中に、お宅の春之助さんの姓名が載つて居たから確かだと信じて伺つたのである。」から云つて洋服屋は事を分けて辨明した。

「さては」と思つて欽三郎とお牧とは顔を見合はせた。兎も角も其の場を云ひ繕つて洋服屋を返してしまふと、父は春之助の勉强して居る二階座敷へ上つて行つた。

「實にお父さんにもお母さんにも内證で入學試験を受けたのです。隱して居たのは申譯がありませんが、前以てお頼みしたら却つて反對されるだらうと考へて、成績が分るまで默つて居る積りでした。私はどうしても中學をやらなければなりません。若しも許して下さらなければ牛乳配達でも何でもして、獨りで苦學をいたします。」

春之助は惡びれもせずにきつぱりと云ひ切る決心であつたが、正直な、貧乏な、人の好い父親が溜息をつきつゝ萎れ返つて居る様子を見ると、さすがに悲しくなつて遂にほろほろと涙を流した。さうして、「お父さん、どうぞ中學へやつて下さい。奉公に行くのはどうしても嫌です。」と、激しく泣いて掻き口說いた。「此れしきの事に泣く必要はないではないか。」と、一方では自分の行爲を批難しながら、彼はやつぱり好い心持ちでさめざめと涙をこぼした。

父はいつ迄立つても腕を拱いて嘆息するばかりであつた。「わしもお前の心中を察せぬではない。それ程學問がしたいものを、好んで奉公にやりたくはないが、知つての通り、内の經濟が許さないのだから中學だけは斷念して貰ひたい。牛乳配達をすると云つても、お前のやうな脾弱な體質で決して續くものではなし、第一それで學校や生活費を稼ぎ出せる筈はない。何にしても、明日先生のお宅へ伺つて、意見を聞いて見るがよからう。」結局欽三郎はこんな文句を繰り返すより外はなかつた。

春之助の頼りにして居た運命の神は、彼の豫期に反して、だんだん彼を好ましからぬ方向へ拉して行くやうであつた。明日先生の家を尋ねれば、ますます壓迫が加はるにきまつて居る。それでも猶、春之助は自分が眞の天才である以上、そんな境遇に陷る道理はないと信じて、强ひて安心しようとした。

二

欽三郎が勤めて居る木綿問屋は井上商店と云つて、當主の吉兵衛は三十五六歳の機敏で活達な、相當に教育のある好紳士であつた。二十歳(はたち)時分に道樂をして、芳町で一流の名妓と呼ばれた藝者との間に子まで儲けた仲であるが、其の後四日市の鹽物屋から嫁を貰つて、ふつつりと遊びを止めてしまつた代りに、その藝者を密かに落籍して濱町の妾宅へ親子二人ながら圍つて置いた。然るに嫁は結婚すると程なく惣領の子供を生み、今から丁度四五年前の二度目の産に胎兒諸共死んでしまつた。それきり吉兵衛は再び正妻を迎へない。「子供が可哀さうだから。」と云ふのは口實で、恐らく彼は堅氣の女を正妻に持つ事を一遍で懲り懲りしてしまつたらしい。元來が意氣で陽氣で花やかな眞似の大好きな、形式や習慣に囚はれる事の嫌ひな彼は、なくなつた嫁の融通の利かない、律義で陰氣で生眞面目な性質があまり氣に入らぬやうであつた。嫁と彼とは些細な事に屢々意見が衝突した。正直なだけに生一本で怒りつぽい嫁は、「あなたはよつぽど呑氣過ぎる。」とか、「あんまり見さかひのない冗談を云ひ過ぎます。」とか、何かと口やかましい小言を云つた。その度毎に吉兵衛は頭を掻いて素直に降參したけれど、どうかすると「お前は洒落の分らない女さ。」などゝ冷やかして、稷に茶にする事があつた。「しろうとの女はみんな此れだから困る。」と云ふ考へが、すつかり頭に沁みついた結果、やゝともすれば濱町の妾の方を餘計愛するやうに見えた。妾宅の事は疾うから公然の秘密となつて居て、嫁が死亡すると同時にいよ〳〵表向きになり、阿娜つぽい、まだ水々とした年增の姿が、十日に一度は本宅へも出入し始めた。引かされた時が吉兵衛とは二つ違ひの十八で、それから十何年も過ぎては居るものゝ、肉づきなどはむつちり肥えて居て

漸く二十五六としか思はれぬ、髪の毛の多い、背の高い、色白の美女であつた。その女が銀杏返しに結つて、唐桟柄の襟附きのお召しに黒縮緬の羽織を着て、初めて堀留の店へ來た時、店員たちは「まるで若い頃の源之助の舞臺顔にそつくりだ。」と噂し合つて驚いたが、口々利かせると恐ろしく如才のないのに重ねてびつくりした。「さすがに旦那の可愛がるのも尤もだ。」と云ふ評判であつた。源之助に似て居る事は藝者時代から花柳界一般の定評で、半玉の頃には顔つきのませて居る爲めに賣れなかつたのが、一本になつてから俄かにはやり出し、「年増になつたらどんなだらう。」と、朋輩衆に褒めそやされたものださうな。あまり源之助に似て居ると云はれたので、自分も自然と其の氣になり、遂には紀の國屋の聲色までが上手になつた。今でも折々醉拂ふと旦那をつかまへて話の中へ得意のせりふを迸發する事があると云ふ。そんなに彼の女は氣輕であつた。

稼業の繁昌するまゝに在來の店では手狹になつて、増築の工事に取りかゝつた際、ついでに吉兵衛は本店から一二丁隔たつた小舟町の裏通りへ、別邸を普請して自分の住宅に充てた。それから濱町の妾宅を賣り拂つて、妾を其處へ收容した。つまり現在の別邸には主人の吉兵衛と妾のお町と、亡くなつた正妻の子の玄一と妾腹の娘のお鈴とが、一家族を作つて同棲して居る譯である。別邸の女中たちは勿論、本店の店員共も蔭では兎に角前へ出ては以前のやうに「お町さん」とは云はなくなつて、大概「奥さん」と呼んで居る。息子の玄一は今年十二歳で、お鈴の方は其れより二つ年上の十四歳である。玄一は初めてお町に紹介された時、吉兵衛から「今度は此の人がお前のおつ母様になるんだよ。」と云ひ渡されたので、以來お町を「おつ母さん」と呼び馴れてしまつた。お鈴の方も、「此れはお前の姉さんだ。」と父が

云ひ渡したので、二三度「姉さん」と呼んで見たが、「此の子の事は姉さんと云はずに、お鈴ちやんと仰つしやいよ。」と、吉兵衞の居る前で新しい母親のお町が訂正した。

　父は其れを聞いて、別段いゝとも惡いとも云はなかつたから、玄一は「お鈴ちやん」と呼ぶことに改めた。すると其の後、何かにつけてお鈴は彼に意地の惡い態度を示し出した。玄一は學問が頗る不得手で、試驗の下ざらひや宿題の答案などを作らねばならぬ時には、いつも泣く程いやな氣持ちを味つた。さう云ふ場合、先生に叱られたり落第したりするのが恐ろしさに、よんどころなく姉のお鈴に質問すると、「まあいやだ。玄ちやんはこんな字を知らないの。此れから私の事を姉さんて云はなければ敎へて上げなくつてよ。」などゝ云つた、そこで玄一はわざと意趣晴らしに兩親の前へ出て「姉さん、姉さん」と呼んでやつたが、お町は再び訂正しようともしなかつた。吉兵衞は相變らず默つて居た。こんな事が度び重つて、此の頃では玄一も亦「姉さん」と云ふ言葉を平氣で口にするやうになつた。氣のせゐか知らぬが、彼がお鈴を「姉さん」と呼ぶと、母親は機嫌のよい顏を見せた。

　四月八日の誕生會の朝である。吉兵衞が衣類を着換へて例の如く本店へ出向かうとして居ると、其處へ久松小學校の校長が尋ねて來て、三十分程お目に懸つてお話しがしたいと云つた。主人と校長とは、つい先月の月末にも、玄一の修業試驗が不成績で落第の悲運に陷つた爲め、その善後策を相談す可く面會をした事があつて、滿更識らぬ間柄ではないのである。その上吉兵衞は、いつぞや校舍を改築する際に、區內有力者の一人として多額の金を寄附したので、學校とは可なり深い因緣を持つて居た。

「今日伺つたのは外の事でもありませんが、お店の番頭の瀨川欽三郎さんの御子息の身の上に就いて、

少々お願ひがあるのです。あなたも多分御承知のことと存じますが、あの子ばかりは全く當今に珍しい、頭腦の明晰な氣象の勝れた少年で、先づ天下に稀な麒麟兒と、申しても差支へはないでせう。今度高等二年を修業したので、親御さんは何處ぞへ丁稚奉公にやらせたいと云うて居られますが、當人はどうしても學問をやりたい、中學へ這入りたいと云ひ張つて納得しない。親御の思し召しに從ふやうに受け持ちの敎師から懇々と說諭しても、聞き入れない。自分の家が貧しいのは分つて居るから、決して兩親の世話にならうとは云ひませぬ。自分で苦學をして成功して見せるから、何卒許してくれろと云つて、泣いて賴むのださうでございます。實はそれで、受け持ちの敎師があべこべに少年の確乎たる志に動かされて、何とか當人の望みをかなへてやる方法はないものかと、私へ相談があつた譯なのです。……」

校長はこんな風に口を切つた。欽三郞の身になつたら、親子の情として、子供の願ひを聽き屆けてやりたいのは山々であらう。それを無理やりに奉公させようとするのは、家庭の財政が許さぬと云ふやうな、よくよくの事情のあればこそと推量される。校長が吉兵衞への賴みと云ふのは此處のことである。あの可憐な少年へ學費を給して、本人の望むがまゝに學業に從事させる、その面倒を引き請けて頂く譯には行くまいか。此れからあの子が中學へ這入り、高等學校から大學を卒業するまでには十何年の長い日子を要する。其の間の面倒と云ふものはなかなか容易なことではない、餘程の篤志家でなければ出來る業ではないのであるが、しかし、あのやうな俊秀な子供を見殺しにせず、之を敎育して立派な人物に仕上げ、他日天下に有用な材幹を發揮させたならば、啻に春之助自身の幸福ばかりでなく、國家の爲めにも甚だ利益である。殊には自分の使用して居る店員の伜とあらば、吉兵衞に取つて全く緣故のない者

でもない。から申しては失禮であるが、御子息の玄一さんは學校の成績が普通よりも劣つて居るから、寧ろ春之助を御子息さんの家庭教師と云ふやうな意味で、お引き取りになつたら如何であらう。年こそ若けれ、春之助ならば學識の點に於いて、なまじひな大人の教師よりは勝つて居る。玄一さんばかりでなく、お孃さんの鈴子さんも今年から女學校へお這入りになれば、今迄とは違ひ學科も追ひ追ひにむづかしくなるから、春之助の居た方が便利である。兎に角御熟考下すつて、二三日中に御返辭を願はれますまいか。旣に本人は親御に內證で中學校の入學試驗を受け、立派に首席で及第して、もう入學の手續きを踏むばかりになつて居るのですと、校長は云つた。さうして「此の御願ひは全然私の一存から出たので、欽三郎さんは何も御承知のない事ですから、此れはお含みを願ひます。」と附け加へた。

吉兵衞はもと〳〵洒落で恬淡な男であるから、格別多大な同情を寄せる氣にもならなかつたが、話の趣意には勿論異議がないらしかつた。子供一人を引き取つて學校へ通はせるくらゐの費用は、彼として見れば何程でもない。自分の子供等の爲めにも、欽三郎親子の爲めにも、双方に結構な話であるから事に依つたら承諾してもよいと云ふ意向を、彼は其の場で校長に洩らした。

「よろしうございます、ではあなたからお話のあつた事を私が直接欽三郎に打ち明けて、一應彼の考を聽いた上で本人にも會つて見ることにいたしませう。噂は聞いて居りましたが、私はまだ、親しくあの子に會つたことがございませんから。」

「御尤もでございます。何分宜しくお願ひ申します。」

と云つて、校長は辭して歸つた。

春之助は五つ六つの幼い時分、折々母に連れられて主人の家へ御機嫌伺ひに行つた覺えがあるけれど、だんだん成長するに隨ひ、例の商人嫌ひと傲慢で陰鬱な性質とが募つて來て、一切そんな所へは足踏みしないやうに努めた。母親から店へ使ひに行けと云はれたり、盆と正月には顏を出せと云はれたりしても、彼は偏へに逃げ廻つて居た。それ故吉兵衞は春之助が此の頃どんなに成人したか、少しも知らずに居たのである。珍しい神童であると云ふ評判は耳にして居るが、果して校長の豫言する通り、將來偉大なる人物になるかどうかは、疑はしいとさへ思つて居る。正直を云ふと、彼には彼の自負心があつて、たかゞ小學校の敎員などの鑑識はあてにならぬと考へて居た。「成る程現在は俊秀な少年であらう。けれども少年時代のえらさ程信用出來ぬものはないから、行く末其の子の材能が發展するか退歩するか容易に分るものではない。」かう云ふ見解を下したかつた。其れと云ふのは、吉兵衞自身が子供の時分に學問嫌ひの腕白者で、散々親達へ心配をかけたのに、今ではどうやら父の稼業を受け續いで、而も見事に身代を太らせて居る。だから春之助を引き取るにしても、國家の爲めなどゝ云ふ大袈裟な動機からではなく、校長の熱心な奔走に免じて「斷る程のことでもないから承知してやらう。」と云ふ、至極大摑みな腹であつた。

欽三郎は其の晩藥研堀の自宅へ歸ると、早速お牧と春之助を呼んで、今日旦那から斯く斯くの御親切なお話があつたと云ふことを、感謝に充ちた句調で語つた。さうして、いかにも重荷を下ろしたやうにほつと安心の溜息をついた。「いよ〳〵本當の運命が開けて來た。自分は果してえらい人間になれるのだ。」と、春之助は胸の中で無限の滿足を覺えた。けれども亦、自分で自分の運命を思ふがまゝに左右し

得る確信を握つた結果、一種の我が儘な虚榮心が働き出して、平生自分が卑しんで居る商人風情に節を屈し、理解のない低級な金持ちなどから援助を求むる必要はなからう。そんな不愉快な眞似をせずとも、獨立獨行で苦學した方が氣が利いて居ると云ふやうな、負け惜しみさへ湧いて來た。さうかと云つて、「折角の思し召しは有り難うございますが、私は他人の世話になるより獨立で苦學いたします。」と、父に向つて堂々と云ひ切る程の勇氣も出ない。彼にしても心底では苦學生活の到底辛抱し切れさうもないことをうすうす危んで居るのであつた。要するに、いざとなつて見ると明日から急になつかしい慈母の許を去つて、他人の家の飯を喰ふと云ふ境遇が、何となく心細くて恐ろしいのに過ぎなかつた。

「旦那が引き取つて下さればお前も無論否やはあるまい。明日の晩お前を連れて來いと仰つしやるのだから、私と一緒にお伺ひしたらよからう。」

父はさも嬉しさうに云つた。春之助は暫く逡巡した後、結局「それではさう願ひます。」と、初めから分り切つて居た承諾の返辭を漸く與へた。

三

恐らく春之助はあの晩の事を、父の欽三郎に手を曳かれて初めて小舟町の主人の別邸を訪れた四月九日の夕ぐれの事を、少年時代の最も印象の深かつた日の一日として、長く記憶に存して居るであらう。父は午後の五時頃に一旦店から歸宅して、夕飯をしたゝめてから改めて出直すことになつて居た。兩親と春之助と妹のお幸と、家族四人はいつものやうに睦じくちやぶ臺に向つて箸を取つた。その時のお菜がひじきであつたこと迄も、春之助はよく覺えて居る。

「今日はほんのお目見えに行くのだから、いづれお前が彼方へ御厄介になるときまつたら、何か御馳走を拵へて、内中でたべませう。」

と、母親のお牧が云つた。

「兄さんは今度何處かへ行つてしまふの。」

と、お幸が尋ねた。

「小舟町のお宅へ書生に行くのさ。知らない所へ行くのではないから、兄さんに會ひたければいつでも會へますよ。」

お牧が斯う云ふと、欽三郎が聞き咎めて「書生に行くと云つたつて、奉公人になるのだから、いよいよ向うへ引き取られゝばお盆とお正月の外に、ちよいちよい會ふ譯には行きませんよ。さうする方が當人の修業にもなるのだ。餘所の子供と違つて、春之助は私よりもそんな道理はよく心得て居るだらうから、改めて云つて聞かせる必要はないが。」と云つた。

不斷から少食の春之助は、一と入胸が塞つて、御飯がろくろく喉へ通らなかつた。それでも父の言葉を聞くと、自尊心を奮ひ起して從容たる態度を示しつゝ、無理に茶漬けを二膳飲み下した。「奉公人になるのだから。」と父に云はれたのが癪に觸つて、悲しいやうな腹立たしいやうな氣分になつた。「自分は奉公に行くのではない。家庭教師に聘せられて行くのだ。どんな場合にも家庭教師の見識は失はずに居て見せる。主人だからと云つて、妄りに頭を下げはしない。」と、彼は私かに決心の臍を固めた。

花曇りのした夕方で、藥研堀の家を出てから人形町通りへかゝるまでに往來は全く夜になつた。「別邸

別邸」と話には聞いて居ても、まだ其の家を見た事のなかつた春之助は、餘程廣壯な構へのやうに想像して居たのが、門前へ來て見ると思つたよりはさゝやかな、新しい檜の板塀の僅かに二間ばかり續いた、專ら瀟洒とした小意氣な住宅であつた。「井上別邸」と記した陶札を掲げてある門内に這入ると、華奢な格子戸のはまつた玄關先の樣子なども其れ程に尊大ではなく、いくらか春之助に親しみ易い感じを與へた。彼は堂々と玄關から案内を乞ひたかつたのに、父は母屋の後ろへ廻つて勝手口の障子を明けて、

「お辰どん、旦那はおいでになりますかえ。」

と、流し下に居る十八九の女中に聲をかけた。

「あゝ、番頭さんですか。旦那は唯今御飯を召し上つて居らつしやいますが、……ねえお新どん、お前さんちよいと瀨川さんが參りましたつて、旦那へ申し上げて下さいな。」

さう云ひながらお辰は頻りに桶の中の器物を洗つて、ふきんをかけて居た。お新と云ふのは板の間にしやがんで、重さうな蒸籠の蓋を開いて、ぱつと湯氣の舞ひ上る底から、何か知らぬが黄色くふつくらとした、饅頭のやうな形をした暖かさうな食物を取り出して、それを小ひさい器の中へ移すと、今度はその上へ、どろどろとした半流動物の葛湯のやうな液體を、手際よく注いで居る。此の家の臺所は、主人夫婦の舌が奢つて居て一と通りの食物では滿足しないために、晩餐の時刻になるといつも仕出し屋のコック場の如き光景を呈するのが例になつて居た。春之助は、時たま手製のてんぷらを拵へるのでさへ母のお牧が半日がゝりの大騒ぎをする自分の家に引き較べて、まだ見た事もない、こんなに手數のかゝつた料理を、毎夜のやうに胃の腑へ收める當家の主人の贅澤さを思つた。「一體あの柔かさうなふわふわ

した固形物は、何を原料にして拵へた食物であらう。」――彼はこんな好奇心に驅られて、味ふためよりは眺めるために作られたやうな美しい色合を、物珍しげに盜み視た。やがて料理が出來上ると、お新は器を盆の上に載せて、襷を外して立ち上りながら、

「番頭さん、唯今旦那に伺つて參りますからちよいとお待ちなすつて。」

と云つた。

お新はお辰よりも一つか二つ年上の、體つきの均齊な愛らしくて悧巧さうな圓顔を持つ花やかな女である。お辰の方はむく／＼と太つた、おさんどん式の體格で、何處となく意地の惡さうな眼つきをして居る。二人共服裝や態度がわり合ひに上品らしく、言葉づかひも丁寧に聞えるけれど、その丁寧は大家の臺所に適はしい品威を保つ爲めであつて、自分等に對する親切からではあるまいと、春之助には邪推された。お新が今しがた次の間へ出て行つた境の障子が二三尺明け放しになつて、その隙間から此の家の間取りの一部分が窺はれる。次の間の先に長い廊下が奥の方へ一直線に走つて居る。その左側に立派な座敷が二た間ならんで居る。廊下の右側はこんもりとした青葉の庭で、袖垣だの石燈籠だのが室内の電燈にぼんやり照らし出されて居る。臺所にも座敷にも廊下の柱にも、電燈は幾個となく點ぜられ、明るい上にも更に明るく、僅かな隅の陰影をも拭ひ去らうとするやうに、煌々と光つて居る。表門の小いさいのを意外に感じた春之助は、思つたよりも家の中が廣いのを見て再び驚いた。此の家の玄關は恰も扇子の要の如く、見つきのさゝやかな割りに、奥へ行く程ひろがつて居る。

「番頭さんどうぞお上んなすつて下さいまし。旦那は唯今御飯中ですが、構はないから連れておいでと

仰つしやつてゝございます。」

かう云つて、其處の障子から這入つて來たのは又別な女中である。妾のお町がまだ濱町に居た時分、妾宅の小間使ひをして居たお久と云ふ女で、その後一緒に別邸へ引き移り、今では此處の女中頭を勤めて居る。三人のうちでは年も一番ふけて居て二十五六になるであらう。頤のしやくれた、小鼻の紅い、おしやべりらしい顏立ちは、お新に比べると劣つて居るが、すつきりした痩せぎすの、何處となくお茶屋の女中めいた年増で着物なども銘仙の縞物を纏つて居る。奥から下げて來た空の銚子を板の間へ置いて、今度はお鉢にお給仕の盆を抱へて、

「さあどうぞ此方へ。」

と、もう一度欽三郎を促した後、自分が先へ立つて奥の方へ引返して行く。

父は春之助を連れて臺所の板の間を跨いで、次の間から廊下へ出た。すると其處に、勝手口からは見えなかつた疊廊下が左の方へ岐れて居て、觀音開きの前を通ると突きあたりが螺線の梯子段になつて居る。二人はお久の後に從いて二階へ上つた。

二階は八疊と十疊の二た間續きである。

廣い方の座敷に桑の食卓を据ゑて、湯上りの額をてか〳〵と光らせながら、主人はうまさうに例の器の中の物を摘まんでは杯の縁を舐めて居た。父は縁側へ畏まつて、鞠躬如として鴨居際に兩手をついたので、春之助も同じやうにした。

「まあ此方へお這入り。」と吉兵衞が云ふのを、欽三郎はさうやつたまゝ頻りに二三度お辭儀をして、一

二分間遠慮をしてから、漸く室内へ這入つたが、それでも極めて端近の方の、お給仕役のお久から又二三尺下つた所に親子二人は居流れた。

「お前が春ちやんか、大變大きくなつたね。」

主人の聲には冴えた、若々しい、子供のやうな純粋な調子があつた。

「はい」と春之助は明瞭に簡單に答へた。自分は今此の人に試驗をされて居るのだと思ふと、座作進退の間にも自(おのづか)ら非凡の神童たる閃めきを見せてやらねば、氣が濟まぬやうに感ぜられた。彼は出來るだけ言葉數を少くして、出來るだけ發音を明晰に、且出來るだけ落ち着いて居ようと考へた。

「お前さんが非常に學校がよく出來るので、きのふ校長さんがわざ／＼私の所へやつて來て、どうかお前さんを中學へ入れてやりたいと云ふ話なのだ。お父さんはもと／＼奉公に出したい積りだつたさうだが、折角校長さんのお話もあることだから、お前さんが是非中學へ行きたいと思ふなら、私の所から通つたらどうだらう。内にも丁度お前さんぐらゐの子供が二人居るから、その子供たちの家庭敎師になつて、日に一時間ぐらゐづゝ學科の複習をしてくれゝば、外に別段用はない。そりや今迄のやうに、お父さんの内に居るのとは違つて、少しは骨も折れるだらうが、そこは我慢して貰はなければならない。どうだね、辛抱して見るかね。」

「はい、辛抱いたします。」

春之助は面を上げて、主人の顏をまともに見ながらはつきりと云つた。その時始めて、彼は吉兵衛の風采だの、座敷の中の様子だのを精細に觀察することが出來た。主人は年のわりに頭の禿げた。むつく

りと肥えた福々しい男である。大人と云へば學校の先生や自分の親父のやうな血色の惡い連中ばかりを見馴れて居た春之助は、柔和で鷹揚で、而も何處となく活氣があり威嚴のある吉兵衞の容貌に接して、多少の敬意を拂はずには居られなかつた。さすがに大商店の主人だけあつて、自分が今迄に知つて居る大人のうちでは、一番手ごたへがありさうに感ぜられる。次ぎには室内の裝飾である。藥研堀の自分の家などは唯雨露を凌ぐと云ふだけで何等の趣味も風情もなく、物質的の欲望に淡い春之助はそれで充分なやうに思つて居たが、此處の座敷の模樣を見ると立派な住宅には矢張り一種の美感があつて、室内裝飾などゝ云ふものも一概には輕んずべきでない事を敎へられる。先づ何よりも彼の視覺に快く沁み込んで來たものは部屋を取り圍む紅殼色の砂壁の色である。表面にしつとりとした澁味のある艶消し色の砂を湛へて、底の方にきら／＼と紙やすりの如く閃めく粉末を含んだ壁の匂は、恰も優雅にして高尙な此の家の生活の象徵であるかのやうに感ぜられ、今日迄貧窮に慣れて居た少年の心の調子を、知らず識らず一種の全く異つた境界へ誘うて行く力があつた。次ぎに春之助は、其の壁と極めてデリケエトな釣合を保つて居る純白な鳥の子紙の、襖の色の對照を見た。襖なんかはどんな紙を貼り着けようと構はぬやうに考へて居たけれど、此の壁の色を見ればどうしても純白な鳥の子紙でなければならないやうに思はれて來る。さうして天井や柱や長押などに使用されて居る木材の肌が、いかに此れ等の凡べての建具と鹽梅よく調和して居るかを、彼は讃嘆の眼を以て眺めた。その外床の間の掛軸だの違ひ棚の置き物だのと云ふ細かい品に對しては、たゞ恍惚とした心持ちで一と通り見渡したに過ぎない。丁度春光のうらゝかなる草原を眺望した旅人が、ひたすら駘蕩たる薫風に醉つてしまつて、路傍にどんな花が咲いて居た

かも覺えて居ないと同じやうに、彼は一々其れ等の品物が何であつたかに留意する餘裕を持たなかつた。しかし春之助には、最後にもう一つ見なければならないものが殘つて居た。其れは主人の吉兵衛から三四尺離れた所の空間に浮いて居る白い顏であつて、實は此の座敷へ這入つて來た瞬間から、彼には疾くに氣が付いて居たのである。春之助はその顏の持ち主がたしかに女、――恐らくは美人の評判の高い此家の奥さんである事を知つて、成る可く視線を向けないやうにして居たのであるが、それでも眼球の端の方に始終白くちら〳〵と割り込んで來て、片時も彼の意識から去らなかつた。彼の瞳は、その白い顏を視ないまでも感ずる事を餘儀なくされて居た。純潔な彼の心は女に對して何等の興味をも持たなかつたに拘らず、女の顏が所有して居る鮮明な色彩が、自然と彼の官能に影響し續けて居た爲め、彼はどうしても彼の女の存在を忘れる譯には行かなかつた。その意識がだん〳〵强くなればなる程、彼は何となく羞かしくなつていよ〳〵視線を避けるやうに努めて居た。

「此の女の顏を見たつて差支へはないだらう。顧みて疚しい點がなければ、特に見ないで居る必要はないだらう。彼はこんな工合に自問自答して、それから思ひ切つて夫人の方を見守つた。彼の女は先刻から婦女子の口を挿むべき場合でないと考へたのか、主人と同じ食卓に對して、殊勝らしく兩手を膝の上に重ねて、此の時まで默つて居た。髮の名前や着物の地質は分らないが、源之助の芝居を見たことのない春之助にも、こんなのが意氣な女と云ふのであらうと朧ろげながら察せられる。しかし飽くまでも夫人としての品格は備はつて居て、前身が藝者であつたらしい痕跡は、經驗に乏しい彼の鑒識を以て發見することは出來なかつた。それに此の婦人は、彼が此れ迄に知つて居る多くの女とは驚く程違つた、格

段に濃い黒髪と色澤のある皮膚と冴えた大きい瞳と、くつきりした輪廓とを持つて居る。凡べて女は容貌が美しいと賢さうに見えるものだが、今しも此の婦人が謹愼の態度を裝つてうつむき加減に端坐して居る有樣は、いかにも聰明な深慮分別に富んだ、寧ろ非凡な腦髓の所有者らしく想像される。此の人が此の妖艶な容貌の人が、自分たちと同じやうな日本語を語り、同じやうな表情で笑つたり泣いたりするとしたら、何だか其れがひどく不思議な現象の如く感ぜられる。さうしてその現象は、やがて主人と春之助との用語が濟んでしまふと、直ちに彼の眼の前に開展した。

「旦那、瀨川さんはまだ御飯前ぢやないんでせうか。何なら此處で御一緒に上つたら。」

と、お町は急にぱつちりと眼瞼を彈いて、すばしつこく二人の顏を見廻しながら云つた。

「いゝえ、どう仕りまして。手前どもはもう頂いて參つたのでございます。」欽三郎があはてゝ辟込みをする程もなく、

「大方濟まして來たんだらう。内の晩餐は特別に遲いんだから。」と、吉兵衛が無雜作に打ち消して、「己も御膳をよそつて貰はう。」と、飮み殘りの杯を乾して、御飯茶碗をお久から受け取つた。

それから夫婦は飯を喰ひつゝ料理の出來榮えに就いて彼れ此れとやかましい批評を試みた。今夜の食卓に上つたものでは、鰆(さはら)の照り燒が一番上出來だと主人が褒めれば、お町も其れに同意して、「さう云へば暫く鳥のそぼろをたべなかつたから、お新に拵へさせて、明日(あした)の晩たべて見たい。」などゝ云つた。一としきり話は食ひ物の事に移つて、欽三郎迄が參加して、一年中の季節々々の魚貝の味をどうのかうのと語り合つた。春之助の父は、さすがに貧乏して居ても生粋の江戸つ子だけに、此の方面では相當な智

識や感覺を持つて居るらしく、立派に主人の話相手を勤め得た。そのうちにお町が「からすみと云ふものは一體何から作るものだらう。」と云ふ質問を發したのが端緒になつて、うにだのうるかだのこのわただのの製法や產地に關する意見が、大分吉兵衞と欽三郎との間に交換された。それ等の食品の殆んど全部は、春之助の未だ曾て見たことや聞いたことのない物ばかりであつたが、彼は別段興味を以て耳を傾ける氣にならなかつた。しかしお町は頗る熱心に二人の說明を謹聽して、時々「へーえ、へーえ、」とさも感心したやうに息を引いた。どうかすると甚だ突飛な奇問を提出して、いかに彼の女が無教育であるかと云ふ事を曝露した。

「さう云へばねえ旦那、偕樂園の支那料理に龍魚腸と云ふものがあるでせう。あれは龍の卵だつて云ひますが本當でせうか。」

こんな風にお町が尋ねると、主人はおかしさうな顏もせずに至極眞面目で悠然と答へる。

「あれは大方腸詰めだらう。洋食にソオセエヂと云ふのがあるが、あれと同じ物だらう。」

「だつていつだか彼處の旦那に聞いて見たら龍の卵だつて云ひましたよ。やつぱり支那には龍なんてものが居るんですかねえ。」

春之助は思はず微笑を禁じ得なかつたので、うつむいたまゝくすくすと鼻を鳴らした。先から此の夫人の口のきゝやうを靜かに觀察して居ると、彼の女に對して抱いて居た尊敬の念はだんだん彼の頭から消え失せてしまつた。さうしてとうとう「龍の卵」の質疑に至つて、彼は極度の輕蔑と滑稽とを感ぜずには居られなかつた。こんな綺麗な、賢さうな容貌と、こんな無價値な、暗愚な精神とが寄り合つて一

個の人間を作つて居ると云ふ事は、精神の爲めにも容貌の爲めにも、何と云ふ悲しい矛盾であらう。彼はたま／＼その矛盾に想到する時、此の夫人に依つて代表されて居る「女性」と云ふものの全體を卑しむ心が强く萌した。物質の過剩と靈魂の窮乏、――二者の不權衡な寄り集まりを具體化したものが女である。それ故女は一方に傾いた秤のやうに不安定な存在物である。春之助は此の間審美學の本を讀んで、調和と云ふ事が「美」の重大な一要素であると覺えて居たが、さうだとすれば斯くの如く不調和な女性と云ふものが少くも美的でない事は論理的に證明し得る。何故主人の吉兵衞は、多大の犧牲を拂ひ多額の金錢を浪費して、こんな女と同棲し、且――恐らくは――こんな女に戀ひして居るのであらう。どうしてそんな事を樂しんで居られるのであらう。やつぱり彼も理想の低い、物質のみを見て靈魂を見ない商人であるからだ。かう考へると、春之助はお町ばかりか主人に對しても自分の最初の判斷が間違つて居た事を悟つた。「彼等夫婦を多少なりとも畏敬すべき人間のやうに豫想したのは、結局自分の買ひ被りであつた。要するに彼等は風采が上品らしく見らるばかりで、下らなさ加減は外の大人と同樣である。自分は寸毫も彼等を尊重したり遠慮したりする必要はない。一旦此の家の家庭敎師となる以上は、子供は勿論親達をも自分の德行を以て導いてやらう。」彼は胸中にかう云ふ健氣な抱負を蟠んで、その夜は一旦父と一緖に藥研堀の自宅へ戾つた。

それから四五日過ぎて、明くる日からいよいよ中學校の新學年が始まると云ふ宵に、彼は別邸の書生

となるべく小舟町へ引き取られた。二三枚の着換への外に大切な藏書が支那鞄に一杯あるので、それ等の荷物を人力に曳かせつゝ父は再び春之助を送つて行つた。玄關の次ぎの六疊の間が彼の部屋と定められて、いつ住み込んでもよいやうに綺麗に掃除がしてあつた。欽三郎は三人の女中たちに一々子供を引き合はせて、「何分お願ひ申します。」と云つた後、

「それでは私は、此れで今夜は歸るとしよう。旦那にも奥樣にもお目にかゝらないが、お前から宜しく申し上げておくれ。――何もお前に云ふことはないけれど、此の間旦那が『あの子はいかにも血色が惡くてあまり丈夫でなささうだから、體を大事にするやうに。』と仰つしやつて居らしつた。どうかお前もその積りでなるたけ體を壞さぬやうに勉强するがいゝ。」

と、少し改まつた調子で云ひ聽かして、「では左樣なら。」と輕く會釋しながら書生部屋を出て行つた。

春之助は部屋の中にたつたひとり取り殘されて、暫くぼんやり据わつて居た。そのうちに誰か來るだらうと待つて居たけれど、二十分立つても三十分立つても主人は勿論女中の足音さへ聞えなかつた。やる瀨ない、取り付く島のないやうなうら淋しさが少年の小いさな胸の中に充滿した。生れてから十三年の間、一日も缺かさず住み馴れて居た藥研堀の家庭の有樣、父の事、母の事、妹の事などが思ひ浮べるともなく心に浮かんで來て、彼は堪へ難いなつかしさと戀ひしさに驅られた。若しも今此の部屋へ人が這入つて來て、自分に何とか話し掛けたなら、きつと自分は泣き出すに違ひないと危ぶまれた。彼は眼の前に積み重ねられた荷物を整理する勇氣も失せて、一生懸命に淚をこらへた。

一時間あまり過ぎてから漸く廊下に人のけはひがして這入つて來たのは吉兵衛である。「やあよく來

た。それぢやお前さんに今小供たちを紹介するから、どうぞ面倒を見てやつて下さい。」から云ふ言葉の尾について、主人の後から二人の子供が恐る恐る附いて來た。「此れがお前たちの先生だから、此れから瀬川さんの云ふ事を聽いて、分らない事があつたらば何でも敎へて貰ふがいゝ。」と、吉兵衛は二人を顧みて云つた。

子供たちは自分等の小學校の秀才として春之助の顏を熟知して居る筈であつた。彼が自分等の家庭敎師に雇はれると云ふ話も兼ねがね云ひ含められて居た。しかし自分等と同年配の少年が、父から「先生」と云ふ尊稱を受けて嚴然と端坐して居る樣子を見ると、急におかしくなつたものか、互ひに顏を見合はせてこつそり笑ひながら丁寧にお辭儀をした。

春之助は威儀を正して禮を返した。彼の方では、主人の子供が自分と同じ小學校へ通つて居ると云ふ噂は以前から聞いて居たものゝ、此の時始めて二人の顏を見知つたのである。玄一の方は男子部の生徒で僅か自分より一級下の高等一年生であるから、何處かに見覺えがありさうなものだのに、會つて見ると意外にも全く記憶に存しない顏である。こんな子供があの學校に居たか知らんと訝まれるくらゐであつた。尤もその容貌を注意して觀察すると、成る程此れでは人目に付かないのも當り前だと頷かれる。第一、その子供の樣子には少年らしい活氣と云ふものが少しもない。取りわけて不愉快なのは彼の血色である。肌理の細かい顏の皮膚には生き生きとした紅味や黄色味が微塵もなく、全體が靜かに澱んだ濁り水のやうに青黒く澄み返つて、長らく牢獄に幽閉せられた罪人の俤を連想させる。目鼻立ちは整つて居るが、年のわりに小作りで表情が恐ろしく鈍い。兩眼がいつも眠つて居るやうに閉ぢて居て、物を視る

にもぱつちりと瞳を開いた例はなく、剰へ言語が頗る明晰を缺き、一見して頭腦の敏活な子供でない事は誰にも洞察される。「此の子を教育するのはなか〲容易な業ではあるまい。」と、春之助は直覺した。

姉のお鈴は彼より一級上の高等三年を今年修業して、明日から本郷の女學校へ通ふのだと云ふ。春之助はお鈴を見ると、「此の女なら覺えがある。」と即坐に心で合點した。自分は不斷から異性の美に對して冷淡な人間であると信じて居たのに、此の少女の顏がいつの間にやら自分の頭へ印象を留めて居たと云ふ事實は、我ながら意外な發見である。「女色は卑しむべきものだ。淫慾は卑しむべき感情だ。」と云ふ道理を學問の上から教へられ、且自分は絕對にそんな傾向のない男とのみ思ひ込んで居た彼は、聊か自分が裏切られたやうに感じた。無論見覺えがあると云つてもたしかな記憶は殘つて居ないが、今迄學校の往き歸りに、何度となく出合つた事だけはぼんやり胸に浮かんで來る。その容貌は輪廓の整つて居る所と、小作りな所と、女のわりに色の淺黑い所とが弟の玄一に似通つて居るけれど、兩頰が子供らしい薄桃色に彩られて、母讓りの鮮かな瞳が活潑に働く爲め、全く弟とは別種の美貌の如き感を呈して居る。母親のお町程の妖艶さはないとしても、一つ一つの道具立ては母親よりも完全に近く引き締まつて居るから相當の年齡に達して、或る一定の醱酵を經たならば、お町に勝る妖艶な柔かみを持つであらうと期待される。缺點を云へば色の白くない事であるが、それも玄一のやうに青黑いのではなくて、寧ろ淺黃色の、妙に人なつツこい媚であるやうな色合の肌(はだへ)である。

春之助を上坐に据ゑ、それと差し向ひに二人の子供を据わらせて、吉兵衛は極く簡單な訓示を與へた。たとへ年配は同じであつても、知つての通り春之助は學校の先生たちから保證された秀才であるか

ら、決して輕蔑してはならないこと。將來姉弟は春之助を「瀨川さん」と呼ぶこと。「瀨川さん」を敎師に迎へたのは特に玄一の爲であるから、彼は必ず毎日一時間以上規則的に學科の復習を監督して貰ふこと。姉のお鈴も、成績が普通であると云つて油斷をしてはならないし、敎はるに越した事はないから、玄一が勉强する時は成る可く一緒に机を並べて、三十分なり一時間なりお浚ひをした方が、弟の爲めにも勵みになること。此れから勉强する時はいつも「瀨川さん」の部屋、即ち此の書生部屋ですること。此れだけの要旨を云ひ渡された後、二人は再び丁寧にお辭儀をして部屋の外へ去つた。廊下へ出るとお鈴は高くから〳〵と笑つて、板の間をばた〳〵駈けて行く音が春之助に聞えた。

その晩春之助は長い間寢つかれなかつた。電燈を消して、眞暗な書生部屋に獨り蒲團を引き被ぎながら暫く物思ひに耽つて居た。やがて漸く眠りに就いたが、溜らなく悲しい夢を見たので、二時間ばかり立つた時分に又眼をあいた。夢の中で泣いて居たものか、氣が付いて見ると兩眼に涙が溢れて居る。たの夢が何であつたかしつかり覺えて居なかつたが、父母戀ひしさのあまり見た夢であることは明かであつた。「あゝ、自分は今迄聖人の道を學ぶと稱しながら、何と云ふ親不孝な子であつたらう。なぜあのやうに親を馬鹿にして居たのであらう。お父さんもお母さんもどうぞ私を赦して下さい。その御詫びには必ず將來親孝行をして御恩返しをいたします。もう十年か十五年の間です。どうぞ辛抱して下さい。」彼はくらがりに手を合はせて伏し拜みつゝ繰り返した。親へ孝行を盡す爲めにも、自分はえらい人間にな

らねばならないと深く誓つた。

四

明くる日の午前十一時ごろ、藥研堀の家の臺所で母のお牧が洗濯物を搖すいで居ると、突然春之助が表の格子戸を明けて默つてひよつこりと上つて來た。今日は中學の授業始めで二時間程で濟んでしまつたから、歸りにちよいと寄つたのである。實は大切な書物を一冊二階の押し入れへ忘れて置いたから、それを搜しかた〴〵來たのであると、母親の顏を見るなり彼はさあらぬ體で云つた。眼敏い母は、例になく子供の眼の緣に微かな涙がにじんで居るのに心付いて、わざとそ知らぬ風をしながら、「さうだつたかい。そんなら二階を搜して御覽。」と、やさしい聲で云つた。

春之助は二階へ上つたきり暫く降りて來なかつた。「あゝおつ母さん、今迄は私が惡うございました。私はほんとに兩親の有難さを知らぬ罰中りな子供でございました。どうぞ今迄の罪は勘忍して下さいまし。」と、母に會つたら一と言詫びるつもりであつたのに、いよ〳〵となると胸が塞つて何も云へなかつた。せめて妹のお幸が午飯を喰べに小學校から戻つて來るのを待ちたくつて、彼は故ら用ありげに押入れの中を調べて居た。

「ねえおつ母さん、僕はお晝をたべて行きたいが、何か御馳走してくれませんか。」

十二時が鳴ると彼は漸う下へ降りて來て、そんなことを云つた。

「たべるならたべてもいゝが、お前彼方へ斷つて來たのかえ。」

母はわが子を憐むやうな、たしなめるやうな眼つきをして云つた。ついぞ喰ひ物などをねだつた事の

ない子供が、今日はどうした譯であらうと彼の女は不思議に感じたのである。

「えゝ、事に依つたら內へ寄るかも知れませんて、女中に斷つて來たんです。それにお辨當を持つて出たのだけれど、學校の方がわりに早く濟んだものだから。」

かう云ひさして、彼は悲しさうにうなだれながら、携へて來たアルミニウムの辨當箱の蓋を開いた。中には飯が八分通り盛つてあつて、二た切れの澤庵と刻みずるめが入れてあつた。

「さうかい、そんならたべて行くがいゝ。そのお辨當のおまんまは此方へお出し、殘して置いては惡いから私の方へあけて置かう。」

母は何も彼も推量して氣を利かせてくれた。

間もなくお幸が歸つて來て、親子三人は昨日のやうに膳を圍んだ。母がいろ〳〵と尋ねるまゝに、春之助はゆうべ小舟町へ引き取られてからの先方の模樣を手短かに語つた。主人も奧樣も物わかりのよい、親切さうな人である。吉兵衞を始め自分の事を「瀨川さん」と呼んでくれるので、女中たちからも丁寧な待遇を受ける。今夜から子供等を敎へる筈であるが、その外には何の用事もなさゝうだから、自由に勉强が出來るらしい。兎に角自分は滿足であると彼は云つた。

けれども春之助は、口で云ふ程決して滿足を感じて居るのではなかつた。自分も外の奉公人と同じやうに、主人夫婦を「旦那樣」「奧さま」などゝ呼ばなければならない事や、家庭敎師でありながら三度の食事を臺所の板の間で女中共と一緒にたべさせられる事や、故意か偶然か自分の部屋が玄關の次ぎの間である爲めに、來客の取り次ぎをしたり、主人夫婦の出入の度び每に送り迎へをしたりする嫌な役目

が、自然と自分の受け持ちになる傾きがあることや、數へ立てれば氣位の高い彼の神經を惱ます事柄は澤山あつた。中でも一番癪に觸つたのは、今朝春之助が眼をさますと小間使ひのお新がやつて來て、「瀨川さん、まことに憚りさまですが、此の草箒木で表の往來を掃いて下さいまし。門の前だけは、此れから毎朝あなたにお頼み申すやうに、奥様のお云ひつけでございますから。」と、彼に命令したことである。敎師としての尊嚴を傷けられるやうな、煩鎖な役目を負はせたらば斷乎として拒絶してやらうと堅く決心して居たものゝ、主人の云ひ附けだと云はれゝばやつぱり其れ程の意氣地も失せて、彼はおめ〳〵と丁稚小僧のするやうな勞役に服した。その不滿足、その侮辱を母親に訴へたところで、母はどうする譯にも行かぬ。或は「そのくらゐな勤めは當り前だ。」と云ふかも知れぬ。殊に春之助として、そんな侮辱に甘んじて居る眞相を他人に打ち明けるのは、自己の虛榮心が許さなかつた。彼は飽く迄井上家の敎師たる資格を以て、世間の人に對したかつた。

母に別れて小舟町の邸へ戻つたのは二時過ぎであつた。「今日は學校が十時ごろに濟みましたので、歸りに藥研堀へ用足しに廻つて唯今歸つて參りました。母がよろしく申しました。」と、彼はわざ〳〵お町の前へ出て、私は奉公人とは譯がちがひますと云はぬばかりに、昂然たる態度で述べた。

小學校で儕輩を抽んでた春之助の頭腦は、中學へ這入つてから再び忽ち頴脱して、一週間ばかりのうちに全級の評判となつた。少しは手答へがあるか知らんと期待して居た學科の程度も、敎師の學殖も、彼に取つては小學校と變りがない。語學でも數學でも地理でも歷史でも、あらゆる學科に彼の能力は發揮せられて、授業時間の度び毎に敎師を始め生徒たちは悉く驚異の眼を見張つた。或る日修身の時間に、

教師が「諸君は何のために學問を修めますか。」と云ふ質問を提示して、五六人の生徒に答へさせた。「瀨川」と最後に呼ばれた時、春之助は立ち上つて、

「私は將來聖人となつて、世間の人々の靈魂を救ふために學問をするのです。」

と、朗らかな調子で云つた。どつと云ふ嘲笑の聲が滿堂の生徒の間に起つた。教師の顏にも皮肉な微笑が浮かんで見えた。

「君等は何を笑ふのかあ！」

突如として春之助は渾身の聲を搾りつゝ火のやうな息で怒號した。

「何がおかしくて君等は笑ふのだ。僕は嘘を云ふのではないぞ。確乎たる信念を以て立派に宣言して居るのだぞ！」

彼は眦を決し拳を固めて場内を睥睨しながら、仁王立ちに突つ立つたまゝ連呼した。教師も生徒も一度にぴたりと鳴りを靜めて、滿面に朱を注いだ彼の容貌を愕然として仰ぎ視た。

「えらい！」

と、隅の方で微かに叫ぶ者があつた。それは級中の腕力家を以て任ずる、落第生の中村と云ふ不良少年であつたが、春之助に鋭く睨み返されると、卑怯にもにやにや笑つて下を向いてしまつた。

春之助は得意であつた。ウォルムスの會議に於けるマルチン、ルウテルにも匹敵す可き熾烈なる宗教的狂熱が、自分の胸奧に宿つて居ることを感知せずには居られなかつた。

「千萬人と雖吾は往かん矣」と云つた孟子の言葉を、彼はそゞろに想ひ浮べた。幾多古來の英雄の、少

壯時代に於ける奇蹟的行動の先例が、今更のやうに記憶に上つた。見よ、自分が一とたび眉を昂げて叱咤すれば、蠢々たる凡俗の徒輩は、一人として克く之に拮抗し得ないではないか。自分は決して、虚勢を張つて衆愚を威嚇するのではない。若しも自分の獅子吼が虚勢であつたならば、いかに衆愚なりと雖自分のやうな青二才に威嚇されよう筈はない。彼等が一喝に合うて唖然として沈默したのは、全く自分の人格の深い深い所から自然と湧き出た靈妙な精神の作用である。どつと一度に冷笑された時、春之助自身にすら未だ嘗て豫期しなかつた不思議な力が我知らず燃え上つて、刹那に閃々たる電光を放つたのである。

「あゝ、自分はやつぱり非凡な人間だつたのだ。今日の出來事は其れを立派に證據立てゝ居るではないか。有り難い、有り難い。」

と、彼は私かに繰り返した。無限の歡喜と光榮とが彼の心に漲り溢れるのを覺えた。奉公の辛さも藥研堀の家戀ひしさも、その日一日はきれいに忘れ果てた。

斯くて春之助の爲めに、學校生活は前よりも更に一層愉快なものとなつた。朝の八時から午後の二時三時まで、教室の机に向つて居る間は、逆境に對する不平も悲觀も消え失せて、いつも希望と自信とが多幸なる彼の前途を照らして居るかに思はれた。同級生は彼に「聖人」と云ふ綽名を附けた。さうして彼も亦、その綽名を呼ばれる事を、必ずしも不愉快には感じないらしかつた。滿堂の教師や生徒に舌を捲かせ、自己の虚榮心を滿足させるやうな出來事は、其の後殆んど毎日毎時間のやうに起つた。

けれども授業が終つて一とたび學校の門を出ると、彼の心は忽ち憂の雲に鎖され、懊惱の陰を宿すの

が常であつた。「自分は此れから嫌な嫌な主人の邸へ戻らなければならないのか。若しも此のまゝ兩親の許へ歸つて、彼處から通學が出來る身の上であつたなら、どんなにか嬉しいであらう。」さう考へると、足はどうしても小舟町の方角へ向かなかつた。彼は母親や自己の良心にいろいろの言ひ譯を拵へて、三日に擧げず藥研堀の家へ立ち寄つた。

「なあにおつ母さん、晩に一時間か二時間ぐらゐ子供たちのお浚ひをしてやれば、後は私の勝手なんだから別に差支へはないんですよ。旦那にしろ奥樣にしろ、私を奉公人のやうには取り扱つて居ないんだから。」

伜がかう云ふと、母のお牧は半信半疑に思ひながら、親子の情に惹かされて別段咎め立てをしようともしなかつた。たゞ春之助があまりゆつくりして、夕方父の戻つて來さうな刻限まで遊んで居ると、「もう歸つたらいゝだらう。」と氣の毒さうに彼を促した。さうして、春之助が不承無精に立ち去つた後で、「兄さんが來たことをお父つさんにしやべつてはなりませんよ。」と、きつと妹のお幸を警めた。

それ程にしてくれる母の情を、蔭では彼もよく知つて居た。知つて居ながら叱り手のないのを幸ひに、ますます頻々と藥研堀へ廻つては道草を喰ひ、小舟町へ歸るのは大概五時か六時であつた。

「今日はお前が來るだらうと思つて、おしるこを拵へて置いたから賜べておいで。」

母も折々こんな事を云つて、お茶受けの賜べ物を用意して待つて居るやうになつた。そのお茶受けを遠慮會釋なく貪り食ふのが、春之助には此の上もない樂しみであつた。「おつ母さん、明後日來る時には小豆を煮て置いて下さい。」「すゐとんのお露をたべさせて下さい。」などゝ、彼は遊びに來る度每に頑是

ない小兒の本性に復つて母に甘へた。たまたま藥研堀へ廻らずに、學校から眞直ぐ小舟町へ戻つて來たりすると、午後の三時前後には必ず非常な空腹を覺えて、餓鬼のやうな食慾が起つた。主人の家でもお茶受けの時刻となれば、奉公人一同へほんのお印に餅菓子類が行き渡るのであつたが、そんな些細な分量では到底春之助の饑えたる腹と心とを充たす譯には行かなかつた。新杵のカステラや清壽軒の金鍔などを僅か二た切ればかり紙に包んで與へられると、彼はさも殘り惜しさうに端の方から少しづゝ割つて賜べて、さて喰ひ終ると、折角誘ひかけられた食慾が中途半ばで沮止された爲めに、却つて激しい饑じさを感じた。自分の監督して居る子供たちが奥の間へ臥そべつて、自由に菓子や菓物を頰張つて居る有様を、彼は堪へ難い羨望の目を以て時々ちらちらと竊み視た。每朝同じ時刻に女學校へ出かけて行く娘のお鈴と彼との間には、辨當のおかずにまで大變な相違のあることを、春之助は見ぬ振りをして其の實ちやんと氣が付いて居た。何かの都合でお鈴の方の剩り物が自分の辨當箱へ詰められたなと知つた折には、學校へ行つても晝飯の時間が待ち遠でならなかつた。どうかすると、食物に對する貪慾の情が一日彼の頭腦を支配して、仕事も何も手につかない事さへあつた。或る晩、彼は臺所の板の間を通り過ぎようとして、うまさうな燒鳥の肉が西洋皿に盛られてあるのを横眼で見た。女中のお辰が後ろ向きになつて庖丁を使つて居る隙に、彼は素早く肉の一と切れを指に摘まんで口の中へ投げ入れたまゝ、書生部屋へ戻つて行つたが、好い鹽梅に誰も見咎めた者はなかつた。

日を經るまゝに春之助は、だんだん奉公の悲しみを忘れるやうに馴らされて來た。學校へ行けばいつも褒められる。實家へ寄れば母親が歡待してくれる。主人の家へ遲く歸つても叱言を云ふ者は一人もな

い。さもしい根性の見え透くやうな行爲があつても、周圍の人は氣が付かぬらしい。何をしようと自分はぼろを出す筈はない。」と云ふやうな安心が、いつの間にか彼の胸中に築き上げられた。「善にせよ惡にせよ、自分の行爲は凡べて天から許されて居るのだ。少しぐらゐ我が儘な振る舞ひをしたとて、自分は決して墮落するやうな人間ではない。天才は何處へ行つても常に天才に適はしい幸運が付いて廻るのだ。」彼はさう思つて、深く自(みづか)らの宿命を恃んだ。

五

小舟町の一家のうちで、春之助は自分よりも憐れな境遇に居る人間のあることを知つた。それは悴の玄一であつた。

吉兵衛は勿論、繼母のお町にしても、表立つて彼を虐待するやうな樣子は見えないが、何故か玄一は始終八方へ氣兼ねをして、いつも淋しさうにいぢけて居た。春之助と云ふ家庭教師が雇はれてからは、學校が引けても學科の復習に氣を取られて、めつたに戸外へ遊びに出る暇もなかつた。何事にせよ直接母親に訴へることは嘗てなく、必ず女中頭のお久の顏色を窺つて、おづおづと彼の女に申し出た。お久はお町の藝者時代から召し使はれて、主人夫婦の古い關係を熟知して居るだけに、或る場合には主人以上の權力を持つ女であつた。母のお町が自ら面倒を見てやるのは姉のお鈴に限られて居て、玄一の方は着物や小遣ひの世話に至るまで、一切お久が切り廻して居た。彼の女が折々癇癪を起して主人の息子を叱り飛ばす口吻は、朋輩の女中に對する時と殆んど相違がない程であつた。

春之助は玄一を可哀さうだとは思つたが、痛切な同情を寄せて、是非とも彼を立派な人間に敎育してや

らうと云ふ程の、熱烈な義俠心は持つことが出來なかつた。たまたまそんな氣になつても、敎へて見ると何一つ覺えないで、傍から傍から忘れて行く愚鈍さ加減に呆れ返り、同情も熱心も頓に消え失せてしまふのであつた。「こんな人間はとても救ふことが出來ない。此の子は世の中に生れない方が仕合はせであつたのだ。此のやうな子は寧ろ放つて置く方が天理にかなつて居るのだ。」かう云ふ風な考へから、彼は玄一に對して通り一遍の役目を果たす外、積極的に何等の愛憎をも抱かうとしなかつた。

「此の子を憐むのは徒勞である。此の子を叱るのは更に徒勞である。」さう思つて、頗る冷淡な平靜な態度を持して居た。啻に玄一ばかりでなく、彼は殆んど家中の凡べての者に、出來るだけ冷靜な、傍觀的な態度を示さうと努めた。女中頭のお久が玄一を叱りつけて威張り散らして居るのを見ても、小間使ひのお新が底意地惡く自分を書生扱ひにしても、彼等を相手に憤慨するのは、自分の値打ちを傷ける所以であると、高く自らを評價して居た。

或る時春之助は學校の歸りに、例の如く藥研堀へ寄つて六時近くに戾つて來ると、折惡しくも臺所にはもう電燈が點ぜられて、三人の女中たちは夕飯の支度に忙しく、主婦のお町までが勝手口へ出張して料理の指圖をして居る最中であつた。

「瀨川さん、お歸んなさいまし。」

お町は彼の姿を見ると、いやに鄭寧な切り口上で、胡散臭さうにぢろぢろと顏色を窺つた。春之助はぎよつとしたが、直ぐに平氣を裝つて、

「唯今」

と、一と言落ち着いた聲で云つた。其處へばたばたと駈けて來たのはお鈴であつた。ちらりと母親に眼くばせをして、

「瀨川さんの學校は隨分遲いのね。あたしの方なんか每日二時頃に引けるのよ。」

と云つた。

「そりやあさうさ。」と、お町が後を引き請けて、「……お前さんの方は女學校だけれど、中學は又さうも行かないやね。それに瀨川さんはお前のやうな怠け者とは譯が違ふから、大方授業が濟んでしまつても、いろ〳〵研究なさることがあるんだらう。」

春之助は兩頰に微かな冷笑を浮べて、二人の話を默殺したまゝ傲然と書生部屋へ這入つてしまつた。

「親の家へ寄つて來るのが惡いと云ふなら、堂々と攻擊するがいゝ。自分は立派に申し開きをして見せる。下らぬあてこすりを云つたつて、己は相手になりはしないぞ。お前等のやうな人間の取るに足らぬ皮肉などを、一々氣に懸ける己ではないぞ。」から春之助は云つてやりたかつた。お町を始め女中共が、自分に對して遠慮がちな皮肉より外云へないのかと思ふと、彼は非常に滿足であつた。

「どうもあの子は氣心が知れない、成る程しきりなしに勉强して居るから學問は出來るに違ひなからうが、用をさせても氣轉が利かず、話をしても愛嬌はなし、皮肉を云つても更に通じないし、全體悧巧なのか馬鹿なのか、私どもにはさつぱり樣子が分らない。あんな子供がどうして評判になつたのだらう。旦那も隨分醉興な眞似をなさる。」

お町は女中達と一緖になつて、屢々こんな蔭口をきくらしかつた。彼等の眼から觀れば、春之助は神

童どころか寧ろ玄一と擇ぶ所のない、ぼんやり者としか受け取れない。何か滑稽な出來事などがあつて、家中の者が聲を揃へて笑ひ崩れるやうな際にも、春之助と玄一だけは無神經な顔つきをして濟まし込んで居る。嘗て別邸の二三軒先にぼやが起つた。本店から小僧が驅けつけるやら、出入りの職人が飛び込んで來るやら、一同がてんてこ舞ひを演じた大騒動の場合ですら、二人はぽかんとして學科の復習を續けて居た。

「あの二人は特別だよ。ほんとにまあ、よくもあんなに同じやうな大悠人が揃つたものさ。」

その時ばかりは餘程お町も呆れ返つて、わざと甲高い聲を立てゝ、聞えよがしにかう怒鳴つた。

「あのぼんやりが學校へ行くと優等生ださうだから、ほんとに驚くぢやございませんか。うちのお孃さんの方がズッとてきぱきして居らしつて、いくらお悧巧だか知れや致しませんよ。」

かう云つてお久が憎々しげに合槌を打つた。

「なあにお久どん、學校の成績なんぞが何であてになるもんですか。先生に大人しいなんて褒められる子供は、世間へ出ると大概役に立たないもんだから御覧なさい。」

お新が例の物知り顔をして口を挾んだ。

かう云ふ際に下働きのお辰だけは惡口の仲間へ加はらなかつた。春之助は初めて此の家の臺所へ訪ねて來た時、お辰の眼つきを一番意地が惡さうに思つて、内々恐れて居たのであるが、附き合つて見ると、彼の女は三人のうちで最もたちのよい、性質の素直な好人物であつた。體は無恰好に太つて居るし、正直なわりに頭の働きは鈍し、おまけに先々月雇はれたばかりの飯焚き女で、奥向きの用事などに關係の

ないところから、彼の女は自然と外の二人に馬鹿にされがちであつた。何か臺所に失策があると、お久やお新はいつもその罪を彼の女になすり着けるので、お辰は時々くやしがつて陰でめそめそと泣き暮らした。

「ねえ瀬川さん、此處はまあ何と云ふ意地惡な人間ばかりが揃つて居るんでせう。旦那様はどうだか知れないが、奥様始めお久どんにしろお新どんにしろ、一人殘らずみんな根性が曲つて居て、惡知慧ばかりいやに達者で、私やつくづく恐ろしい人たちだと思ひますよ。それにまあどうでせう、あの大人しい坊つちやんをみんなで以て寄つてたかつて馬鹿にしてさ。あれぢやあまるで奉公人だか主人の子だか分りやあしない。私なんぞは明日にもお暇を頂いて出て行く氣だから構はないけれど、ほんとに坊つちやんはお可哀さうぢやありませんか。ねえ瀬川さん、どうぞあなたシッカリと坊つちやんに學問を仕込んで、立派な人間にして上げて下さいよ。」

何かにつけてお辰は春之助にしんみりと愚痴をこぼしたり、忠告したりした。その生眞面目な樣子やら態度やらが、氣の毒と云ふよりも寧ろうるさく感ぜられて、春之助はいつも「ふん、ふん」と面倒臭さうにあしらひながら、好い加減な生返辭を繰り返すのであつた。

「お前も馬鹿な人間だ。己はお前なんぞに同情を寄せるやうな、低級な慈悲心は持つて居ないのだ。己の眼からは、お前もお久も主人のお町も、皆一様に可哀さうな、下らない人間に見えるのだ。」

彼はお辰に泣き付かれる度毎に、何となく自己の品格を傷けられるやうな氣がして、腹立たしく思ひながら心密かにこんな文句を呟くのである。

[illegible]鈍な代りに玄一は春之助の云ひ附けを柔順に遵奉して、毎日二時間でも三時間でも、不承無精に机へ向つて勉强する。

「坊つちやん、せつせとお稽古をなさらないぢやいけませんよ。今度落第なすつたら、小僧にやられてしまひますよ。」

から云つてお久に威嚇されるのが、嫌ひな學問に頭を惱ます辛さよりも、彼には一層辛いらしかつた。

反對に姉のお鈴は最初春之助を輕蔑して居た。弟と一緒に復習に取りかゝつても、甘んじて春之助の敎へを乞うことはめつたになく、獨りでずんずんお浚ひを濟ませて、半時分も立てば勝手に席を立つてしまふ。尤も彼の女は學校以外に長唄と琴の稽古があつて、一日置きに師匠の出敎授を受けて居る。「玄ちやんと違つて、私はなかなか忙しい體なのよ。それでも立派に學校をやつて行けるのだから、何も弟のお附き合ひをしてあなたに監督されるには及ばないわ。」と云ふのが、一面に於いて彼の女の誇りであり、我が儘の種であつた。さうして、たまたまむづかしい宿題などを課せられて、よくよく手に負へぬ場合があると據んどろなく我を折つていやいやながら春之助に相談を持ちかける。どうかすると、故ら彼を困らせてやらうと云ふ目的で、不意に途方もない難問題を擔ぎ出すことがあつた。春之助は此の生意氣な娘に對しても、等しく寛宏な無頓着な態度を以て臨んで居た。彼の女が自分を凹ませてやらうと云ふ惡意のあることは見拔いて居たが、彼は却つて難問の提出される機會を待ち構へ、「神童」の眞價を發揮して即座に明晰な解釋を與へてやるのを、何よりも痛快に感じて居た。實際彼はお鈴からいろいろな質疑の矢を向けられても、それが馬鹿げ切つた非常識な問題でない限り、大概うろたへた例がなかつた。

英語でも數學でも地理でも歷史でも、お鈴の質問がますます多岐に亘り、突飛に流れゝば流れるほど、それ〳〵縱横に說明する彼の豐富な學識の深さは、殆んど測り知られなかつた。「よく己はこんな些細なことを覺えて居たものだ。」と、彼は自ら反みて自分の記憶力の確かさを祝福することさへあつた。やすやすと解釋を與へ終つて、お鈴の顏を見かへす折の彼の表情には、いくら平靜を裝つても包むに餘る得意の色が動いて居た。

「どうだ、お前は今こそ私のえらさが分つたであらう。お前はなかなか悧巧な娘だ。お前は私より一つ歲上だから、自分の方が賢い大人の積りでゐるかも知れないが、しかし私は少しばかり普通の子供と違つて居るのだぞ。生意氣な眞似はやめにして、己に降參するがいゝ。」さうすればお前は、今よりももつと悧巧な人間になれる。」

かう云ふ意味を、彼の眼つきが語つて居るやうであつた。お鈴は計略の狙ひが外れて殘念に思ひながら、内心彼の不可思議な智力に對する驚歎の情が、次第々々に增して來るのを覺えた。彼の女は、春之助が弟よりも自分を敎へる時に餘計熱心で懇切で、張り合ひのありさうな口吻を洩らすのを、早くも心付いてしまつた。遂には玄一の前で、「自分の方が弟よりも話のわかる、怜悧な少女である。」と云ふ事を見せびらかしてやりたい爲めに、故意に頻々と高尙振つた質問を春之助に試みた。二人の間には云はず語らず師弟の情に似通つた、馴れ親しみが生ずるやうになつた。いつであつたかお鈴は春之助から敎はつた事實が、明くる日女學校の先生に聽いて見たら違つて居たと云ひ出して、暫く彼と云ひ爭つたことがあつた。

「それは大方先生の方が間違つて居るのです。明日學校へいらしつたら、もう一遍先生に尋ねて御覽なさい。」

と、春之助はきつく云ひ張つた。お鈴は彼の負け惜しみを小面憎しと感じつゝ、翌日先生に再び念を押して見ると、果して春之助の豫想通りであつた。

「どうです。先生は何と云ひました。」

その晩春之助が斯う云つて詰ると、彼の女はしら〳〵しく澄まし返つて、

「やつぱり先の通りでいゝんだつて仰つしやつたわ。瀨川さんの方が間違つて居るのよ。」

と、噓をついた。しかし其れ以來、彼の女は深く春之助に敬服したらしく、前よりも一層信賴の度を强めた。

やがて其の年の七月になつて、三人の少年はそれ〳〵の學校から、學期試驗の成績表を受け取つた。云ふまでもなく春之助は全級中の首席を占めて、神童の譽れはいよ〳〵高く、今迄の中學校に前例のない破天荒な優等生と持て囃された。既にその頃の彼の頭腦は高等學校くらゐの程度に進步して居て、試驗の準備など殆んど片手間の仕事であつた。あまり學校が樂過ぎるので、四月時分からこつ〳〵と獨逸語の獨學を始めたのが、今ではそろ〳〵レクラム版のクラシック物を、字引きを引きながら辿り行く迄になつてしまつた。英譯のプラトン全集を熟讀して非常に感奮させられた彼は、早く原書でショオペン

ハウエルに親しみたいと焦慮した。彼の性好はます／＼哲學に傾き、彼の思索はだん／＼奥深い唯心論の理路に分け入つた。「生きるよりも先づ疑ふこと、行ふよりも先づ悟ること」が必要だと彼は思つた。小學校時代にぼんやり考へて居たやうな、あやふやな人生觀を根柢から破壞して、善も惡も神も惡魔も一旦悉く否定し去つて、自分は充分に質疑し煩悶し、然る後貴い古への聖者の如く廓然として大悟しなければならぬと、彼は頻りに心を鞭撻つた。「目下のところ、己は善人でも惡人でもない。人に向つて道德を教ふる確信もなければ不道德を斥ける權威もない。此れでも己は聖人になれるだらうか。」さう氣が付くと彼は後ろから追ひ立てられるやうになつて、終夜熱心に讀書したり瞑想したりすることがあつた。

姉のお鈴の成績も、全級中の五番と云ふ割り合ひに優等な出來榮えであつた。

「お鈴や、お前がこんなによく出來たのも瀨川さんにお稽古をして頂いたお蔭だから、そのつもりでお禮を云はなければいけませんよ。」

母親はかう云つて、わざ／＼春之助の前へ娘を呼び出して丁寧なお辭儀をさせた。小いさな家庭教師は、その時始めて有難みを認められて、お町夫人から珍しく機嫌のよい感謝の言葉を受け取つたのである。

お鈴の次ぎに呼び出されたのは玄一である。彼は血の氣の失せた、心配さうな顏を擡げて恐る／＼繼母の面色を窺ひながら畏まつた。

「玄一さん、一體あなたの此の成績はどうした譯なんでせう。」

と云つて、ぐつと横眼で睨み付けた夫人の眸は險しかつたが、玄一は一言の返答もなくうなだれてしまつた。外の二人の好成績には及ばぬけれど、此れ迄彼は級中の末席にばかり据えられて居たのに、今度辛うじて終りから三番目へ漕ぎ付けたのだから、少しは褒められてもよささうなものを、お町はなかなか其の位の出來榮えで容赦しなかつた。

「……何の爲めに瀨川さんと云ふ先生を内へ置いたんです。みんなあなたの爲めを思つて、お父樣がして下すつたことなんですよ。姉さんは學校が一と通り出來るのだから心配はないけれどあなたがあんまり出來な過ぎるからと仰つしやつて、瀨川さんをお賴み申したんぢやありませんか。それたのにせめて奮發して人なみの成績でも取つて來ることか、相變らずびりつこけの方ぢや、あなたは兎に角私たちが世間へ對して極まりが惡くつて仕樣がありません。　かう云ふと何だか瀨川さんの敎へ方が惡いやうに取れるけれど、私は決してさうだとは思ひませんよ。現に姉さんを御覽なさい、瀨川さんの御厄介になつたお蔭で、今度は立派な成績を取つたぢやありませんか。端の者がいくら氣を揉んでも、御本人がその積りでミッシリ勉强しなかつたら、何の足しにもなりやあしない。……いづれお父樣からお話があるでせうから、私は何も云ひませんけれど、あなただつてちつとはお父樣に申し譯がないと思つて下さらなきやあ困りますよ。」

玄一はお久を通して度び〳〵不愉快な皮肉を云はれた覺えはあるが、お町の　から直接嚴しい叱言を聞かされたのは其の日が始めてゞある。夜になると、彼は再び夫婦列坐の席へ呼び出された。子供に對してついぞ聲色を勵ましたことのない父の吉兵衞が、例になく怒氣を含んで「お前はまた落第をするつ

もりか。もつとしつかり勉强しなけりやいかんぞ。」と、極めて激しい句調で云つた。事に依つたら、父は繼母に迫られて據んどころなく怒つた振りをして居るのではあるまいかと、子供心に玄一は邪推した。
「それでね玄一さん、今もお父さんと相談したのですけれど、此れからは夏休みになるのだから、毎日朝の八時から十二時まで、日に四時間づゝ必ず復習をなさるやうにお極めなさいよ。ようござんすか。」
父の言葉の尾に附いて、母親が更にこんな事を云ひ足した。「お父さんと相談した」とは云ふものゝ、此の命令は恐らくお町自身の發案に相違なかつた。いかに玄一の成績が悪いからとて、七八月の暑い最中に毎日四時間の勉强は酷に失して居る。それでは何の爲めに學校が暑中休暇を與へたのか全く無意味になつてしまふ。殊に玄一は決して不勉强な子供ではないのである。小學校の生徒としては、寧ろ過度の時間を割いて復習に精を出すのだが、生れつき頭腦が低能な爲めに効果を齎らさないのである。こんな因循な子供には學問よりも一層運動を奬勵して、快活な戸外遊戲をやらせた方が、却つて精神の修養になるかも知れぬ。さう思つて、同じ席に連なつて居た春之助は心私かにお町の無法を憤つた。第一母親に斯かる暴威を振はせて默過して居る吉兵衛の了見が分らない。なんぼ惚れた女房でも、こんな我儘を許して置くと云ふ法はない。春之助はさう心付きながら、やつぱり自分も自ら進んで玄一の爲めに辯護の勞を取る勇氣は出なかつた。すると又もやお久が其處へ嘴を入れて、
「ほんたうに其のくらゐ御奮發なさらなけりやあ駄目でございますよ。此れからは私も充分に氣を付けて居りますから、若し坊つちやんが瀬川さんの云ひ付けをお守りなさらないやうな事があつたら、すぐお父様に申し上げますよ。……どうぞ瀬川さんも其のお積りで、あなたの手にあまる事があつたら、御

遠慮なく仰つしやつて下さいまし。

「全くですよ瀬川さん。」と、お町が云つた。「ほんたうにもう主人の子供だなぞと思はないで、あんまり物覺えが惡かつたら、ちつと骨身に答へるやうに叱つてやつておくんなさい。あなたは學校の先生も同じ事なんだから、場合に依つたら仕置きをしてやつて下さいまし。」

「はあ、畏まりました。」

と云つて、春之助は笑ひながら兩手をついた。今迄自分を輕蔑して居たお町とお久が、急に自分の實力を認識して、心から家庭教師の地位と權威とを與へようとする樣子が、俄かに彼の虛榮心を滿足させた。平生取るに足らない小人の徒輩の如く侮つて居た此の夫人から、慇懃な言葉で頼まれたことが、學校の教師に褒められたより遙かに嬉しく感ぜられ、彼はさながら身に餘る光榮を負うたやうな心地がして玄一に對する憐愍の情は忽ち何處かへ消え失せてしまつた。

長い長い暑中休暇が到來して、學校の歸りに藥研堀で道草を喰ふ機會のなくなつたことは、春之助に取つて少からざる苦痛であつた。

「少々調べたい物がありますから上野の圖書館へ半日ばかり行つて參ります。」

こんな口實を拵へて、彼は十日に一度位づゝ母親の顏を見に出かけた。喰ひ物に對する意地穢なはますます募るばかりであつた。毎日のやうに羊羹がたべたくなつたり、今川燒きが欲しくなつたり、牛肉

の匂が鼻に附いて溜らなくなつたりした。圖書館行きの電車賃を使はずに置いて、そつと近所の菓店へ驅け付けて買ひ喰ひをする癖が、毎晩止められなくなつてしまつた。

「あゝ、己は何と云ふさもしい人間になつたのだらう。どうしてかう云ふ淺ましい行爲をするのだらう。明日の晩から必ず止めてしまはなければならない。」

時々彼はハッと思つて、自ら堅く警めて見るが、明くる日の宵の口になると不思議に我慢がし切れなくなつて、こつそりと裏口から飛び出して行く。どうかすると菓子の袋を懷へ押し込み、大急ぎで駈けて歸りながら、家へ這入るまでに殘らず平らげて平氣な顏をして居ることがあつた。

けれども彼は夫人から依囑された職務の執行には忠實であつた。毎朝四時間の授業と云へば、敎へる方の身になつても可なり大儀な仕事であつたが、春之助は以前のやうに冷淡な態度を取らず、諄々として敎へ且勵ました。

「玄一さん、このくらゐな事がどうして覺えられないんです。もう此れで五六度び敎へて上げたぢやありませんか。忘れたのなら思ひ出すまで考へて御覽なさい。そんなにぼんやりして居るから、あなたは學校を落第するんだ。」

かう云つて、彼は熱心に卓を叩きつゝ時々奧の間の夫人の耳へ聞えよがしに、わざと冷罵の聲を張り上げた。

「まあ御覽よ、此の頃の瀨川さんの熱心なことッたら！　あんなに迄骨を折らせてそれで手答へがないんだから、端で見て居てもやきもきさすらあね。」

お町はその聲の聞えるたびに、かう云つて春之助の勞をねぎらつた。

「瀨川さん、あなたも全く大抵おやあなからうつて、此の頃は始終奧樣が云ひ暮らして居らつしやるんですよ。ほんとにまあ、蔭で聞いて居るとまるであなたが夢中になつて、一生懸命なんですものね。あれで奮發なさらないやうなら、實際坊ちやんは罰中りさ。――どうでせう、それでもちつとは身に泌みて覺えるやうになりましたか知ら。」

授業の後でこんな具合にお久が尋ねると、春之助はさも疲れたらしく額の汗を拭きながら、

「どうも玄一さんの覺えの惡いには呆れてしまひます。私も奧樣のお言葉がありますから、出來るだけの面倒は見るつもりで、隨分口を酸つぱくして叱言を云ふんだけれど、此方の眞心が半分も向うに通じないんです。」

と、半ばは辯解するやうな、半ばは追從するやうな句調で云つた。氣のせゐか知らぬが、彼に對するお町の仕打ちにはだんだん溫情が加はつて來るやうであつた。お茶受けにくれるお菓子の數にまで懇切な思ひやりが見えて、時に依つては日に二三度もいろいろな茶菓の心づけに與ることがあつた。「この暑いのにあゝものべつに敎へて居ては、瀨川さんも嘸かし咽喉が渴くだらう。」と、まだ晝飯の濟まぬうちからバナゝや水蜜を與へられる。「あんなに遲くまで勉强して居たらさつとお腹が減るだらう。」玄一の爲めに晝間の時間は潰されてしまふのだから無理もない。」と云つて、夜が更けてから天ぷらそばを惠まれたりする。うで小豆や今川燒の類より外にたべたことのない春之助は、いろいろと贅澤でハイカラな食物の味を覺えさせられた。アイスクリイムと云ふものは藥研堀の緣日に賣つて居る一杯五厘の氷水の事だと思

つて居たのに、或る日お久が「此のアイスクリイムは奥様のお餘りだから頂いて御覽なさい。」と云つて、寄越してくれたコップの中のねつとりした流動物を何の氣なしに一と匙すくつて舐めて見ると、さながら舌のとろけるやうな、びつくりする程の甘さであつた。或る時は又「此れも奥様のお餘り」だと云ふ食ひ殘りの茶碗蒸しを夕飯の膳に供せられた。どんな精巧な料理法で拵へたものか分らぬが、茶碗の中には春之助の大好きな鷄卵の濃い汁が、さもおいしさうにこつてりと凝り固まつて、底の方にはあなごだのくわゐだの蒲鉾だのが堆く密閉されて居る。それを一つ一つ箸で堀り出して汁と一緒に口の中へ含んで見ると、あまりの美味に恍惚として、此のまゝ一と息に嚥み下すのが惜しいやうな心地さへする。全く彼は生れてから一遍も、こんなにうまい卵の料理を味はつたことがなかつた。玉子燒やオムレツの味などは此の茶碗蒸しと云ふ物に比べると、到底足もとにも及ばない。こんなに贅澤な細工の込んだ食物を毎晩のやうに賜べて居る主人夫婦は何と云ふ幸福な身の上であらう。何と云ふ羨しい境遇であらう。あんな生活をして居たら、月にどれ程の費用がかゝるであらう。さうして、その莫大な生活費を易々と支辨して行く當家の主人は、一體どのくらゐな收入があるのだらう。そんな事まで春之助は考へずに居られなかつた。彼は「奥様のお餘り」を貰ふことが何より樂しくなつてしまつた。晩飯の時刻になれば心私かにお餘りの下るのを待ち設けて、たま〳〵あてが外れるとひどく物足りない氣持ちになつた。

お鈴は毎朝玄一の叱られるのを見物したさに、自分の復習が濟んでしまつても、二人の傍へ机を据えて勉强の體を裝ひながら、折々春之助と顏を見合はせて嘲るやうな薄笑ひを交換した。

「鈴子さん、あなたは此の字を覺えて居らつしやるでせう。」

玄一が質問に行き詰まると、彼は散々口汚く叱り飛ばした揚句に、必ずかう云つて姉娘を顧みる。

「えゝ私知つてるわ。その字は尋常科の讀本にだつて澤山あるわ。」

姉娘は問ひに應じて直ぐに答へる。

「そら御覽なさい。姉さんはあの通り覺えて居ますよ。」

「覺えて居るのは當り前だわ。私でなくつたつて、尋常科を卒業した人ならこんな字ぐらゐ誰だつて知つてゝよ。知らないのは玄ちやんだけだわ。」

「さうですとも、――私の叱言なんか玄一さんには答へがないんだから、ちつと鈴子さんから仰つしやつて下さらなきやあ困ります。ねえ玄一さん、あなた姉さんにあゝ云はれたら、少しは口惜しいと思ひませんかね。」

二人はこんな調子で面白さうに惡體を云ひ募り、やがて玄一がしくしくと忍び音に泣出したりすれば、

「おやおや、たうとう泣き出したのね。ちよいと玄ちやん、何が悲しくつて泣いてるのよ!」

「鈴子さん、構はずに放つて置いた方がよござんすよ。泣くなら勝手に泣かしてお置きなさい。そんな意氣地なしだからいつ迄立つても學問が出來ないんだ。」

かう罵り合つて、彼等は迭る迭る玄一の顰め面を覗き込んだ。不斷から表情の鈍い、起きて居るのか眠つて居るのか分らないやうな玄一の顏が奇態に歪んで、鼻の穴と唇の周圍が醜い恰好に膨れ上り、兩眼からぼたぼたと涙を流す樣子を眺めると、春之助は何となく一種の快感に唆られるのを覺えた。「天才はあらゆる人間の心理を理解する。古への暴君と云はれた人々は、恐らく斯う云ふ種類の快感を强烈に

要求する人間なのであらう。」と、彼はぼんやり想像した。

いつの間にか彼は玄一に對して、お町よりもお鈴よりも殘忍な迫害者となりつゝあつた。その愚鈍らしい眼つきを眺めると、無闇にむかむか腹が立つて來て、何とか此の子を虐めてやりたいと云ふ猛惡な邪念が、絶ゆる隙なく胸に萠した。ある朝玄一が例の如く胴忘れをして俯向いて居ると、溜らない憎らしさが込み上げて來て、

「馬鹿！」

と一と聲叫ぶや否や、春之助は拳を固めて力まかせに憐れな少年の蟀谷を衝いた。わッと云つて、忽ち玄一の死んだやうな目鼻立ちは活氣を帶びて蠢めき出した。靑褪めた顏色に珍しく血の氣が漲り、始めて生き生きとした聲を放つておいおいと泣き出した。「一度此の子を思ふさま張り飛ばしてやらう。擲つたらどんな顏をして泣くだらう。」と、疾うから密かに企らんで居た春之助は、その時漸う望みを遂してさも不思議さうに少年の表情を見守つた。泣き聲はいつ迄立つても容易に靜まらなかつた。

「坊つちやん、何をそんなにお泣きになるんですねえ！　いゝ加減になさらないとお母樣に叱られます。」

から甲高に怒鳴りながら書生部屋へ駈け込んで來たのはお久である。主人の耳へも聞えたかと思ふと、さすがに春之助はぎくりとした。彼の眼つきには俄かに狼狽の色が仄見えた。

「ううんあのね、玄ちやんがあんまり怠けてばかり居るもんだから、瀨川さんに叱られて打たれたんだよ。自分が惡くつて泣いて居たつて仕樣がないわ。」

お鈴は春之助を辯解するやうに云つた。

「お默んなさいまし坊つちやん！ そんならあなたがお惡いぢやありませんか。お母樣に知れようものなら、猾吏どんなお叱言が出るか分りませんよ。」

お久は威丈高になつて玄一を睨みつけた。

それ以來、春之助の苛酷な行ひは益々增長するばかりであつた。小いさな家庭敎師は玄一の爲めに小いさな暴君と變じてしまつた。あの可哀さうな少年がどう云ふ譯であれ程憎らしいか、春之助は自分でも其の理由を解するに苦しんだ。生意氣で陰險な姉のお鈴と低能で臆病な弟の玄一とを並べて見るに、惡人よりも愚人の方がどうしても腹を立てるに都合よく出來上つて居る。お鈴のこまちやくれた意地の惡い行動に接すると、春之助は寧ろ不思議な共鳴を感じて、一向彼の女を憎む心は起らない。然るに玄一に對する憎惡の情は、日を經るまゝに極端にまで走つて行つた。彼は每日一遍づゝ玄一を虐めたり泣かせたりしないと、何だか樂しみが薄いやうな心地さへした。

「瀨川さん、あなたは此の頃なぜあんなに坊つちやんを虐めるの。お可哀さうぢやありませんか。」

ある晚春之助は臺所でお辰につかまつて、密かにこんな忠告を受けた。

「虐める譯ぢやないけれど、あのくらゐにしなかつたら却つて奮發しないんだ。そりや私だつて可哀さうだとは思つて居るさ。だが行く末の爲めを思つて、わざと嚴しい叱言を云ふんだよ。今に私の親切が玄一さんにも分る時代が來るだらうぜ。私にしたつて隨分辛い立ち場に居るんだから、それはお辰どんも察してくれさうなもんぢやないか。」

「だつて瀨川さん、いくら嚴しくするからつて、御主人の子供を擲るつて法はありますまい。私は馬鹿だからむづかしい理屈は分らないけれど、何ぼ何でも道に外れた事だらうと思ひますがねえ。」

「まあまあ私にも考へがあるんだから、默つて見て居たらいゝだらう。」

春之助は相手の言葉が一々胸にこたへるだけ、餘計お辰が癪に觸つて溜らなかつた。「下女の癖に生意氣な。」と、怒鳴り飛ばしてやりたいところを、强ひてにやにや笑ひながら斯う云ひ捨てた。

「考へがあるもないもんだ。」お辰は急に眼を光らせて嘲るやうな句調で云つた。「ねえ瀨川さん、あなたばかりはそんな曲つた人間ぢやないだらうと思つて居ましたが、ほんとに此の頃ぢやあまるで變つてしまつたわね。奧樣やお久どんの手先になつて、大人しい坊つちやんを意地めたとこで何になるのですよ。……悧巧なやうでもあなたはやつぱり子供だから、廻りに惡い人間が揃つて居ると、いつか知らず其の方へ引き擦り込まれてしまふんだわねえ。」

何處までもにたにた笑ひで誤魔化して居た春之助は、最後の一句にはつと打たれて、思はず憐れみを乞ふやうにお辰の顏を仰ぎ視た。愚かな飯焚きの下女の口からも、時に依つては權威ある言葉が自然に吐き出される。さう考へると春之助には、その晩のお辰の眼つきが學校の先生よりも恐ろしかつた。

四五日過ぎてから、お辰は朋輩のお新の爲めに何事か云附け口をされて、お町に散々叱言を喰つた。

「お久どんは內で一番古いのだから威張るのも仕方がないけれど、お新の奴は一番憎らしい。年の若い癖に生意氣で狡猾で、主人に胡麻を擂るのが上手で、まあ何と云ふ惡黨だらう。あんな奴は行く先どんな恐ろしい事を仕出來すか知れやしない。」

彼の女は此の間の恨みも忘れて春之助に同情を求めながら、例の如くめそめそと口惜し涙をこぼして、泣いた。さうして、その夜のうちにそつと荷物を纒めて置いて、明くる日の朝早く、主人の家を無斷で出奔した。

「ちよツ、お辰どんはまあ、いやな人だよ。あんな山出しに居て貰ひたかあないんだから、出るなら出るで斷つて行くがいゝぢやあないか。」

お新は下女の代りの來るまで、二三日飯焚きの辛い役目を背負はされて頻りと愚痴を並べ立てた。

「お辰どんは大分あなたの惡口を云つて行きましたぜ。何しろあゝ云ふ田舍者は、馬鹿で一國と來て居るんだから全く始末に困るなあ。」

かう云つて、春之助は爽やかに笑つた。

六

久松學校の校長は、自分が將來を保證して井上の家へ周旋した神童の身の上に就いて、始終興味と責任とを感じて居るらしかつた。

「どうですな、あの子は？　相變らず勉强して居りますかな。お蔭樣で中學の方も大分成績がいゝやうですが、……」

彼は折々小舟町の住居を訪れて主人に聞いた。

「いや、大變によく子供たちの面倒を見てくれるやうです。家内も大きに喜んで居りますよ。」

吉兵衛はいつも簡單にかう答へるだけであつた。

「それはまことに結構ですが、どうもあの子は體が弱さうに思はれるのでなあ。私はそればつかり心配して居りますよ。勉强もいゝが、ちつと體を大切にして運動でもするやうに仰つしやいて下さい。體さへ丈夫なら、あの子はきつとえら物になれるのです。」かう云つて、校長は我が子の事を褒めるやうに得意の色を見せるのであつた。

明くる年の正月、父の欽三郎が春之助をつれて御禮旁々校長の家へ年始に行くと、彼は非常によろこんでくれた。「時にお前はますます學校で評判がいゝと云ふ噂だが、何より滿足に思つて居ます。私も實際世間へ對して鼻が高い。どうぞ此れからも脇道へ外れずに立派な成功をして貰ひたい。私はお前の身の上をお父樣に受け合つてしまつたのだから。」と云つて、頻りに春之助を勵ました。間もなく三月の學年試驗に、彼は再び未曾有の成績で首席を以て中學の二年級へ進級した。校長の鼻はいよいよ高くなるばかりであつた。

「今度も亦瀨川が一番でした。平均點が九十八點と云ふ本校始まつて以來の最高點です。綽々として餘裕ありと云ふのは瀨川のことでせう。」

と、成績發表の當日に、主任の敎師が敎壇に立つて讃嘆の聲を擧げた。滿場の生徒は目を圓くして一齊に彼の姿を顧みた。

その時春之助はほつと安堵の胸を撫でゝ、何だか夢を見るやうな嬉しさに襲はれた。彼は去年の秋の頃から、學校の授業を馬鹿にし切つて、敎科書などは殆んど一遍も浚つたことがなかつたのである。敎室に居る時でさへ、敎師の眼を窃んで勝手に哲學の書物を繙いたり、獨逸語の獨學に耽つたりして居た。

いよいよ試驗が始まると云ふ前の晩に、些か氣がゝりになつたので地理と博物の教科書を少しばかり調べにかゝると、大分忘れたところを見付けて非道く狼狽させられた。四則應用の數學の答案も、あまり侮り過ぎた結果、たしかに一題は計算を誤まつたらしかつた。兎に角彼は今度の試驗に對して、今迄のやうな確乎たる自信を持つて光榮ある成績を期待する譯には行かなかつたのである。どう贔負目に考へても、今度ばかりは首席の名譽を維持することが出來なからうと危ぶまれた。「たとへ一番でも下つたら、久松の校長さんはどんな顏をするだらう。親父は何と云ふだらう。」さう思ふと春之助は無闇に氣が揉めて、顏から火の出るやうな耻かしさを覺えた。然るに意外なるかな彼の成績は、前學期にも優るほどの出來榮えなのである。ところどころ忘れて居た地理と博物の採點を見ると、九十七點となつて居る。慥かに間違つて居た筈の數學の點數が、不思議にも百點を與へられて居る。恐らく平生春之助の才氣煥發に眩惑されて居た教師連の頭腦の中に、一種の催眠作用が行はれたことは明かで、彼の答案を始めから完璧なものと過信してしまつたに違ひない。

「かうして見るととんとん柏子と云ふものは實際世間にあることだ。己は何と云ふ幸運な人間だらう。」――と、春之助は腹の中で私語する事を禁じ得なかつた。彼は又もや自分の運命の飽く迄も仕合はせなことを信じたかつた。「久松の校長も、井上の主人も、中學の教師も、世間の奴はみんな迂濶だ。己はどんな眞似をしたつて、あいつ等の信用を失ふ心配はない。己はあらゆる自由と我が儘とを先天的に許されて居るらしい。つまり己のやうなのが天才なのだ。得手勝手な行ひをして、それでも結局えらい人間になつてしまふのだ。」から考へて來た時、春之助は今迄にたつた一人、彼の惡德を觀破して痛烈な攻擊

を加へようとした炯眼な人間が居たことを想ひ出した。それは山出し女の飯焚きのお辰である。世間を擧げて春之助を神童と褒めたゝへて居る中に、無教育な田舍生れの下女の觀察が、たま〳〵彼の假面を剝いだと云ふことは、いかに世の中が矛盾だらけで滅茶苦茶であるかを春之助の心の底に感銘させた。さうして其のお辰の運命を見るがいゝ。生意氣にも偉大な天才たる彼の行動に惡罵を注いだ愚鈍な女の末路を見るがいゝ。彼の女は周圍の人々に虐待されて、主人の家を逃亡してしまつたではないか。「お前に刃向ふものはみんなあの通りになるのだ。」——こんな囁きが、何處からともなく春之助の耳に聞えた。

玄一も今度ばかりは幸ひにして落第の憂き目を免れた。普通の子供ならもう中學へ入學すべき年配であるのを、「そんなに無理をさせない方がいゝだらう。」と云ふ校長の意見があつて、兎に角高等四年を卒業するまで、小學校に蹈み止まることゝなつた。

「瀨川さん、お蔭樣で及第いたしました。有難う存じます。」

と、彼は春之助の前に畏まつて、慇懃な感謝の言葉を述べるやうに母親から命令された。吉兵衞迄が馬鹿に機嫌のよいにこにこ顏で、

「よく瀨川さんにお禮を云ふんだぞ。お前を及第させようと思つて、瀨川さんはどのくらゐ骨を折つてくれたか分りやしない。」

かう云つて、家庭教師の功勞をたゝへた。

しかし春之助は自ら反みて、玄一の爲めに何一つ骨を折つた覺えはなかつた。忘れたと云つては罵り、

間違つたと云つては揶り、空恐ろしい惡虐の限りを盡して、可憐なる恩人の子を泣かせ喚かせて、獨り私かに興がつて居たに過ぎなかつた。その冷酷な鞭撻が偶然にも一時の功を奏して、玄一は比較的好成績を得た譯である。さうして、春之助は熱心なる家庭敎師として主人の感謝を贏ち得たのである。此處でも再び、彼はつくぐ自分の幸運と世の中の出鱈目とを信じたかつた。

「世の中は出鱈目である。自分は天才である。」

彼はもう一度、此の格言を心の底で繰り返した。

春之助は、主人夫婦の自分に對する信用がいよいよ篤くなるのを感じた。令嬢のお鈴とは仲好しになる。お久やお新からは大事にされる。就中夫人のお町は寵愛の度を通り越して、彼を自分の忠僕か何ぞのやうに取り扱ふ。子供たちの前でこそ、彼の女は春之助の名前を「さん」附けにするけれど、やゝともすれば「瀨川々々」と呼び捨てにして、いろぐな細かい用達しまで命令するやうになつた。月の終りに銀行へ驅けつけて、恐らく夫人が秘密に溜めて居るらしい貯金の出し入れをする役目や、夫人の名義になつて居る二三軒の借家の家賃を督促する役目や、其の外彼の女が夫に內證で遣り繰りをする金錢物品の受け渡し、指輪や簪の寶石類を賣り買ひしたり、眼の飛び出る程高價な衣類持ち物をそつと呉服屋へ注文したり、藝者時代の友達らしい待合藝者屋の女將たちと贈答したり、凡べてさう云ふ後ろ暗い用件の走り使ひはいつの間にやら春之助の受け持ちと定められた。小いさい家庭敎師は其れを侮辱と知りながらも、三度に一度は必ず何等かの形式で與へられる報酬の味を忘れかねて、決して不愉快な氣持ちにはなれなかつた。夫人に取つては容易い些細な心づけが、春之助にはどんなに嬉しくも有難くも感

ぜられたことであらう。
「瀬川、此れをお前さんに上げるから取つてお置きよ。」
かう云つて、夫人が象牙のやうな美しい手を伸べて、自ら春之助の掌へ溫情の籠つた惠みの品物を載せて呉れる度毎に、彼は我知らず勿體なさに胸の時めくのを覺えた。或る時は舌のとろけるやうに旨いシユウクリイムを、一度に三つ四つ紙に包んで渡される。「此れは少しばかりだが」と云つて、五十錢銀貨を摑ませる場合もある。そんな時は報酬の少い方で、折々セルの袴を拵へてくれたり、上等のシャツを買つてくれたりする。春之助が未だ忘れられないのは、いつぞや學校から鎌倉へ遠足に行く際に、二圓の小づかひとニッケルの懷中時計を貰つた時の嬉しさである。此の夫人の爲めならばどんな惡事でも働きかねないやうな、淺ましい了見が彼の胸の中にむらむらと萌すことさへあつた。
或る意味に於いて、お久よりも春之助の方が夫人に對して重要な人物となつた。女中たちは彼に一目も二目も置かなければならなかつた。彼の爲めに奉公の悲しみは樂しみに變つた。もう春之助は、以前程藥研堀の兩親の家を戀ひ慕はないやうになつた。たまたま想ひ出して尋ねて見ても、賑かな色彩のある小舟町の家に比べると、お羽打ち枯らした親たちの無味乾燥な生活の慘さが鼻に附いて、とても長くは居たゝまれなかつた。
「何と云ふ淋しい、活氣のない家だらう。こんな殺風景な空氣の中に、自分はよく去年まで何等の不滿足も感ぜずに生きて居られたものだ。」
さう思つて彼は歎くことがあつた。小舟町から藥研堀へ來ると、まるで明るい花園を出てうす暗い穴

藪の底へ這入つたやうな不愉快に襲はれる。お久やお新が始終花やかに笑ひどよめいて居る陽氣な井上家の臺所に引き換へて、そこでは年老いた母親獨りがつまらなさゝうに息を喘がせて働いて居るばかり、父の顏にも母の顏にも生活を享樂しようとする慾求の影などは微塵もない。彼等は井上家の女中達にすら劣つた階級の、たゞ盲目的に生きて行く愚鈍な人種ではなからうかと訝しまれる。此のやうな人種の男と女とが、自分の兩親であるかと思へばそゞろに春之助は悲しかつた。

繼兒の玄一は別物として、井上の家庭には一年中歡樂が充ち溢れて居る。晝間は殆んど毎日のやうに、琴の師匠と三味線の師匠が替る替る訪ねて來て、令孃のお鈴を相手に音曲の響きを立てる。夜は毎晩料理屋を開業したやうな騷ぎをする。近頃は又やゝともすると主人の吉兵衞がお町の絃で常盤津の喉を聞かせたり、お鈴の長唄で夫人が踊りをおどつたり、家の中は俄かに一段と賑かな光景を呈して來た。夫は堀留の道樂息子と呼ばれ、妻は芳町の源之助藝者と歌はれた時代の、うら若い放蕩の血が再び彼等夫婦の間に蘇生(よみがへ)つて來たかのやうに、吉兵衞とお町とは現在の身分を忘れて、奉公人や子供の手前も憚らず酒色に溺れつゝ馬鹿の限りを盡すことが頻繁になつた。二階座敷の空氣は料理屋よりも寧ろ待合に近くなつてしまつた。お久はもとより、此の節まで猫を冠つて取り澄まして居たお新が、さう云ふ席の座興を添へるのに達者な手腕を發揮し出した。或る晩お新は酒を飲まされて醉つた揚句にきやつきやつと笑ひ轉げながら、夢中で立ち上つてお久の三味線で「おいとこさうだ。」を踊り出した。主人もお町も手を打つて喝采したが、

「あの女には今まですつかり欺されて居た。どうもお新はたゞ者ぢやないらしい。おどりの手つきがな

か〳〵巧者だから、田舍藝者か達磨茶屋にでも奉公した事があるのだらう。」

　そんな評判が、後でひそひそ囁かれた。

　半分は商人で半分は幇間のやうな、お出入りの小間物屋、呉服屋、骨董屋などが、飯時を狙つては始終足繁く往來して、馬鹿の相手になつて居た。彼等は商ひの有る無しを其方除けにして、家族の者と一緒になつて飲んだり食つたり唄つたりした。

　そんな騒ぎの最中に、玄一と家庭教師の二人だけはいつも書生部屋に取り殘されて、相變らず學科の復習に從事しなければならなかつた。春之助が威儀を繕つて玄一を叱り飛ばして居る時、遙かな二階座敷からどつとばかりに氣違ひじみた笑ひ聲が上つて、頓興な戯れ言や荒々しい足拍子が三味線の音に連れて洩れて來ることが度び度びあつた。

「あゝ彼奴等はどんなに愉快なんだらう。」

　春之助の心は自と花やかな騒ぎの方へ奪はれがちであつた。俗惡で贅澤で飽く事を知らぬ大人共の、傍若無人な振る舞ひに對する嫌惡と羨望と憤慨の情が、小いさな家庭教師の胸に渦を卷いた。「何と云ふ愚かな人々であらう。」さう考へる直ぐ後から、日頃春之助を愛してくれる夫人や令孃の、斯う云ふ折に限つて彼を全く疎外する不公平な處置が、著しく心外に感ぜられた。子供を酒席へ侍らせるのが惡いと云ふなら、令孃のお鈴にも遠慮させるがよい。「お鈴が何だ。なりが大きくて言葉つきが生意氣だから大人の積りで居るかも知れないが、己よりたつた一つ年上の十五ぢやないか。頭の程度から云へばお鈴よりも己の方がずつと大人だ。あんな小娘に今のうちからあんな眞似をさせるから、ろくな人間になれな

いのだ。」と、彼は腹立たしげに呟きたかつた。

「鈴子さん、この頃あなたはちつとも勉强なさらないやうですね。騷いでばかり居らつしやらないで、たまにはお稽古をなさい。」

家庭敎師は時々こんな忠告を試みて、令孃の顏を恨めしさうに橫眼で睨んだ。

「試驗になつたら勉强するわ。今のうちは優しい所ばつかりだから復習しなくつても大丈夫なのよ。」

「そんな事を云つて、試驗の時にまごついても知りませんよ。」

「よくつてよ。お母樣だつて、不斷からそんなに勉强しないでもいゝつて仰つしやつたわ。」

お鈴はかう云つてまるきり齒牙にかけなかつた。あまり執拗に春之助が心配すると、

「えゝありがと〳〵。分かつてゝよ!」

と、面倒臭さゝうに突慳貪に云ひ放つた。彼の女は小いさい家庭敎師が憐みを乞ひ縋るやうな、寂寞を訴へるやうな、悲しい眼つきをして居るのをありありと讀むことが出來た。さうして嘲るが如き微笑を浮かべて、勝ち誇つた態度を示しつゝ、さつさと二階座敷へ上つて行つた。春之助はお鈴の生意氣を憎むと同時にお久やお新が妬ましかつた。身分の低い女中の分際で、主人と一緖に夜な夜な宴樂に耽つて居るとは何事であらう。主人も主人なら家來も家來である。殊に彼が癇癪に觸つたのは、いつも騷ぎが始まると女中たちまでさながら主人の友達のやうな氣分になつて、彼等自身が勤むべき用事を春之助に云ひつける。

「ねえ奧さま、あんまり大聲を出したので咽喉が乾いちまつたから、水菓子を戴かうぢやございません

か。ちよいと瀨川さんに一とつ走り、買ひに行つて來て貰ひませう。」
こんな風に彼等の一人が提議すると、お町も直ぐに賛成する。家庭教師は授業中にも拘らず早速座敷へ呼びつけられて、何事かと思つて鴨居際に畏まると、
「あのね、ちよいと御苦勞ですがね、横町の水菓子屋へ行つて蜜柑を一と箱買つて來て下さい。お錢(あし)はこゝにありますよ。ほら！」
などゝ云ひながら、お久やお新が後ろ向きに据わつたまゝ、恰も家來に對するやうな横柄な顏つきで、一圓札を放り出したりする。それでも彼は夫人の機嫌を損ねるのが恐ろしくて彼等の頤使に服從した。春之助は夫人の威力がいかに强く吉兵衞の意志を左右し、時に依つては本店の店員共の免黜にまで干涉するかを、うすうす了解して居るのであつた。かりにも井上家の飯を食(は)む以上は、一旦お町に睨まれる事がどれ程の不仕合はせであり、反對に彼の女から愛される事がどれ程の幸福であるかを呑み込んで居なければならなかつた。春之助は此の間まであれ程自分に專らであつた夫人の寵愛が、口惜(くちを)しくも今は二人の女中等の手に奪ひ去られて、お久とお新との競爭になつてしまつた事を、不安の眼を以て眺めずに居られなかつた。いつか一度は自分も夫人の寵愛を取り返して、競爭仲間へ加はつて見たいと云ふ下心(したごゝろ)が、自然と素振りに現れて、彼は何事を命ぜられても卑しい追從笑ひをしながら夫人の顏色を窺つた。
　けれども夫人を始め歡樂に耽る大人どもは、何處迄も家庭教師を話相手にならぬ子供と輕んじて、容易に自分達の仲間へ加へようとはしてくれなかつた。春之助は用件のある時ばかり重寶がられて、使ひ

が濟むといつも書生部屋へ追ひてくられた。彼は腹立ち紛れに玄一を撲りつけて纔かに鬱憤を晴らして居た。どうかすると、二階座敷の亂痴氣騷ぎと火のつくやうな盛んな玄一の泣き聲とが、一軒の內に相呼應して響き渡つた。

七

いつになつたら春之助は大人の數に入れられるのであらう。彼の眼に映る大人と云ふものは、唯彼よりも體格が大きいばかりで、別段優れた能力を持つて居る樣子もないのに、彼等は勝手に美食を食ひ、美衣を纏ひ、奢侈安逸な生活に浸つて、いかゞはしい冗談を語り合ふ特權を所有して居る。墮落の恐れあり、贅澤の嫌ひありとして一般の少年に禁ぜられて居る諸種の行動が、大人にばかり許されて居るのは何故であらう。

　春之助は此の頃になつて特に彼等の服裝に心を惹かされた。苟くも大人と名のつく連中は、身分の低い人間でも、大概一と揃ひか二た揃ひの絹物の衣服を用意して居る。お出入りの商人を始め本店の番頭や手代などが、紬の羽織とか絲織の綿入とか、少くとも絹絲の這入つた餘所行きの晴れ着を所有して居て、何かの機會にぞろりぞろりと着飾つて步く。その一枚の羽織の値段だけでさへ、春之助が持つて居る中學校の制服よりは高價らしい。第一不斷着の衣類からして、彼等の着物と春之助の着物とは趣味の上に大變な相違がある。野暮くさい、久留米絣のぼて〳〵した筒袖を纏つて、眞黑な唐縮緬の兵兒帶をしめて、その上へつんつるてんの小倉の袴を穿かされる學生の服裝に比較すると、大人の其れは遙かに優雅で美的である。先づ鐵無地か澁い立縞の袷羽織に、同じやうな意氣な縞柄の綿入を着て、獻上の角

帶に黒ずんだ荒い格子の前掛けを締める。見たところがいかにもいなせにすつきりとして、きちんと整つて居る。美男子も醜男も同じやうに醜く見える學生の服裝に引きかへて、まことに着榮えのする樣式である。それから帶の間に挿んで居る煙草入れとか、乃至は柾目の通つた下駄の臺とか鼻緒の模樣とか凡べて大人共の身に着けて居る細工物には案外金のかゝつた、意匠を凝らした美術品があつて、その色合が非常にうまく服裝と調和を保ち、春之助の眼に何とも云へぬ快感を起させる。彼がいかほど大人を輕蔑しようとしても、兎に角物質的に恐ろしく優勢な彼等の外見に壓迫されて、自分の方が却つて下らない人間のやうに思はれて來る。

まして主人の吉兵衞だの、お町だの、お鈴だのゝ贅澤に至つては、どのくらゐ彼の欲望を刺戟するか分らない。吉兵衞が毎晩風呂へ這入つてから着物の上へ引掛ける派手な辨慶縞のお召しのどてらがある。藝者時代に着古した夫人の不斷着を拵へ直したものであるが、それにくるまつて酒を飲みながらあぐらを掻いて居る吉兵衞の風情は、馬鹿になまめかしく芝居じみて居た。あのどてらを一遍でもいゝから自分の肩へ着けて見たいと春之助は思つた。電燈の明りに照り映えて、底光りのするやうに品よく輝いて居るお召しと云ふ絹物の地質が、彼には溜らなく高尚に艶麗に見えた。その外やれお花見だの芝居見物だのと云つて外出する度毎に、晴裝を凝らす夫人や令孃の衣裳持ち物には、全くふるへ附くやうに花やかな、精巧を極めた貴重品の數々がある。彼の女等は平生から一枚の浴衣を作るにも、一足の足袋を誂へるにも、自分の容貌姿態にはいかなる線狀色彩の配合が最も適當して居るかを充分に會得して居て、嚴格な吟味を經てから始めて撰擇するらしく、一と度び彼の女等のしなやかな手足に卷き着いた物は、

帶でも半襟でも指輪でも羽織の紐でも、俄かに媚びを競つて不思議な魅力を發揮する。さうして或る時は貴婦人の微行姿のやうに、或る時は藝者か半玉の遊山姿のやうに、時に臨み場合に應じて彼の女等は自分の體へさま〴〵な情味ある變化を行ふべく、巧妙に裝飾品を驅使する事を知つて居る。

「えゝ近頃はかう云つた品が大分はやつて參りましたが、奧様にいかゞでございませう。」

こんな事を云つて、後から後からいろ〳〵な物を賣り付けようとする出入りの商人の口上を、春之助は急に熱心に傾聽するやうになつた。

「おゝいゝ柄だこと！　まあなんて意氣な柄でせう。ねえ奧様、此れはきつとお似合ひになりますよ。」

などゝ、お久やお新が商人の口車に載せられて、反物をいぢくり廻して品評する光景を春之助は遠くの方から窃み視て密かに耳を欹てるやうになつた。緞子の丸帶を一本拵へるのに大凡そどれ程の金がかかるとか、お召しの反物の時價が一反でどのくらゐするとか、さう云ふ事を彼は知らず知らず心に止めて覺えてしまつた。今月はお町が八十圓の指輪を買つた、お鈴が眞珠の短鎖を拵へた、などゝ云ふ風に胸の中で數へ上げる事を忘らなかつた。

商人たちは品物を賣り付ける以外に、大概四方山の世間話を面白おかしく語り聞かせる技量に秀いで居た。彼等が主人夫婦の座敷に伺候して、女中共にまで愛嬌を振り蒔きながら、駄洒落まじりに花柳界の噂だの役者の評判だのを暇にあかしてしやべり續ける呑氣な様子を、蔭で聞いて居ると、春之助もつい釣り込まれて一緒に笑ひ出す事があつた。かう云ふ話術を心得て居て、毎日々々お得意先の金持ちや藝者屋などを歩き廻つて、女子供に持て囃されおかしがられる彼等の境遇は、無味乾燥な、寂寞たる

家庭教師の身の上にくらべるとどれ程愉快なものであらう。彼等は心中に何等の不平も煩悶もなく、而も月々相應に豊かな收入を得て、狂言の變り目には芝居へ行つたり、欲しいと思へばしやれた着物を拵へて見たり、斯くて一生を樂しく穩かに送つて行く。彼等のやうなのが本當に人間らしい、幸福な生涯であるかも知れぬ。春之助は机に向つてコツ〳〵と哲學の書を讀み耽るよりも、彼等の興味ある浮世話に耳を傾けた方が、遙かに暖かい人間の眞諦に觸れて、世の中に對する深い愛着の湧き出づるのを覺えた。彼は今迄、自分があんまり實世間から遠ざかつて、大人と云ふ者を侮り過ぎて居た事を發見した。

十五歳になつた年の正月、水天宮の縁日の晩であつた。春之助は兩親の家へ年始に行つた歸り路に、人形町の夜店をうろついて、とある古道具屋から破れかゝつた懷中鏡の安いのを買つて來た。彼は密かに其の鏡を書生部屋の本箱の抽き出しへ隱して置いて、時々人目を盜みながら日に何回となく自分の容貌を映して見た。幼い折から神童と呼ばれ、天才と歌はれて、仕合はせな運命に感謝して居た春之助も、鏡に對して自分の目鼻立ちを眺める事を覺えてから、急に人知れぬ悲しみを抱くやうになつた。彼は自分の容貌がいかに醜いかと云ふ事を、最近まで氣が付かずに居たのである。また、醜い容貌を持つて生れた人間が、いかに恥づべく憐れむべきかを、此の頃になつて始めて痛切に感じ出したのである。つく〴〵と自分の顏を眞正面から凝視すると、彼は溜らない腹立たしさに驅られて、思はず鏡を叩きつけてしまひたくなつた。恐ろしくきめの粗い、病人のやうに青ざめた皮膚の色、行儀惡く出つ張つた頰骨、若白毛の澤山交つた縮れた髮の毛、鼻の下から猿のやうに飛び出した上顎、おまけに不揃ひな亂杭齒――まあ何と云ふ眞暗な、でこぼこした輪廓であらう。彼は鏡を横にしたり、斜めにしたり、上へ向けた

り、下へ向けたり、いろ〳〵にして映して見たが、どの方面から眺めても自分の姿には何等の美觀をも見出すことが出來なかつた。馬鹿と云はれる玄一ですら、彼に比べれば非常によく整つた、充分に美點のある容貌を具へて居る。中學校の同級生にも彼より劣つた男振りの少年は一人も居ない。堀留の本店の子僧などには、どうかすると女にしても見まほしい水際立つた美少年がある。天は春之助に斯くまで秀れた腦髓を惠みながら、どうしてこんな情ない容貌を賦與したのであらう。

春之助は、母のお牧が嫁入り時代には町内一の小町娘と讃へられた、評判の美人であつたと云ふ話を嘗て人傳に聞いた覺えがある。現在でも彼の女の目鼻立ちは何處やら品のよい所があつて、娘時代の俤を留めて居る。父の欽三郎にしても、貧にやつれて居るとは云へ、若い頃には十人並の男前であつた事を想像するに難くはない。彼は此の兩親の間に生れた息子でありながら、どうしてこんな醜男であらうと訝らずには居られなかつた。ふと、春之助は幼い時分に、

「春ちやんや、お前さんの鼻ッつきはお母さんにそつくりだから、今にいゝ男におなりだらうよ。」

かう云つて、自分を膝の上へ抱き上げながら頭を撫でゝくれた親戚の叔母の言葉を想ひ起した。何でも其れはまだ小學校へ這入らない以前の漸く物心のついた五つか六つ頃のことであつたらう。「今にいゝ男になる」と云ふ占ひが、それ程將來の運命に至大な影響を及ぼさうとは知るよしもなく、彼は好い加減に聞き流してしまつたものゝ、今日になつて考へ合はせれば、叔母の豫言のあまりに甚しく外れてしまつたのが恨めしくも口惜しかつた。遠い過去の追憶を辿つて見ると、彼の美貌を豫言したのは強ち叔母ばかりではないやうである。やつぱり其の頃、母の所へ出入りする馴染の女髮結が、「お宅の坊つちや

んのやうなお綺麗な子供衆は、どちら様へ伺つても全くありやあいたしませんよ。ほんとにまあ、眼つきから鼻つきがお母さんにそつくりで、まるで人形のやうで居らつしやる。」と、口を極めて褒めたゝへたことを、彼は微かな夢の如くに覺えて居る。さうして見るとあの時分には、彼もたしかに美しい容貌を持つて居たに違ひない。少くとも好男子となる可き要素を備へて居たのであらう。天は春之助に優秀な頭腦を惠んだばかりでなく、正しく端正な目鼻立ちをも頒ち與へた譯であるのに、其れ等の「要素」は抑もいつの間に彼の容貌から消え失せて行つたのであらう。

せめては要素の幾部分なりとも、何處か知らに其の痕跡を殘して居さうなものであると思ひ返して、春之助は更に熱心に自分の顏を檢査して見る事があつた。成る程仔細に吟味すると、氣のせゐか知らぬが彼の鼻つきは母親の其れに似て居たゞけあつて、そんなに不恰好な形ではない。肉づきも尋常で高さも普通で、顏中の造作のうちでは一番完全に近い代物である。眼つきも可なりぱつちりして居て、母親のやうに冴えては居ないが、何となく愛嬌のある悧巧さうな輝きを持つて居る。口もとにしたところで齒ならびこそ惡いけれど脣を閉ぢてさへ居れば缺點は少しもない。却つて一種の人を惹きつける特長があるやうにまで思はれる。かうして見ると、眼でも鼻でも脣でも、一つ一つの形狀は滿更醜くもないのである。たしかに美貌の要素だけは備はつて居るらしい。たゞ、それ等の要素が伸び伸びと發達すべき少年時代に、過度の勉強と貧乏な境遇とが不自然な迫害を加へて、芽を吹き出さうとする生長の力を中途で沮んでしまつた爲め、風霜に打たれた花の莟のやうに、無慘にも彼の輪廓は畸形的に押し歪められてしまつたのである。春之助は今でも自分の顏の中に、外界の壓迫から來た打擊の痕を歴々と認める

事が出來るやうに思つた。元來ならばもつと威勢よく、鷹揚に伸びて行く筈のものが、妙にいぢけてせせこましく固まつて、恰も佝僂の背中の如く縮んでしまつたらしい哀れさが、目鼻立ちのあらゆる部分に現れて居る。眼はハッキリと開きながら何となく陰鬱な、世を拗ねたやうな僻んだ色を湛へ、鼻は高く秀いでながら變に貧相な、見すぼらしい感じを與へ、口もとに一種の美點のあつたのがいつの間にやら齒ならびが亂れて飛び出して來た爲に、今では恐ろしく破壞し盡されて居る。さうして、痩せ衰へた兩頰の肉の下から方々へ骨が突き出て、激しい凹凸と陰影を作つて、全く猿のような不均齊な、輪廓と化してしまつて居る。殊に驚かれるのは此頃の活氣のない彼の血色である。路傍に彳んで道行く人に合力を乞うて居る乞食非人の輩でも、彼にくらべればいくらか生き生きとした色つやを持つて居るだらう。

「あゝ、自分はなぜ花やかな少年時代を、世間の子供たちと同じやうに無邪氣に遊び戯れて送らなかつたのであらう。野に出でゝ歌ひ、川に出でゝ漁り、嬉々として春の日の長きを忘れるやうな、天眞爛熳な少年時代を、自分はなぜあのやうに詫びしくひねくれて過してしまつたのであらう。ひたすら神童の名譽が得たさに、机に倚り書を繙いて生意氣がつて居た天罰が、今や自分の肉體に報い來て、醜く萎れた容貌を持つ男となつてしまつたのである。」——さう考へると、春之助の眼には自然と悔恨の涙が湧き出づるのであつた。彼は此れ迄に先輩の人々から、幾度か「體育を重んぜよ。」と云ふ忠告を受けた覺えがあつた。活潑な戸外運動を試みて、身體を練磨するやうに敎へ諭されたことも一再ではなかつた。けれども彼は其れ等の意見を氣にも止めずにたゞ〳〵哲學の研究に沒頭して居たのである。肉體を輕んずると云ふ事が、後來此れ程の恨みを齎し、悔を生ずるであらうとは、彼は夢想だもしなかつたのである。

「己はまだ十五歳の少年だ。何も今から落膽するには及ばない。」

俄かにこんな奮發心を起して、彼は折々學校の運動家の群に投じて見ようとすることがあつた。するといたづら好きな運動家の連中は「聖人がテニスを始めた。」「瀨川がボールをやつて居る。」など丶云つて手を打つて嘲笑した。實際かう云ふ遊戯に對する春之助の智能と技術とは、我ながら呆れ返るほど拙劣であつた。彼が三年級になつた年から、機械體操と擊劍とが新たに必修科目として科せられたが、「聖人の瀨川」は學問に於いて拔群であると同樣に、運動に於いて甚しく低能である事を衆人の前に暴露した。彼は「足かけ」をするにも、二人がゝりで臀だの足だのを下から押し上げて貰はなければ、自分の力で自分の體を鐵棒(かなぼう)の上へ持つて行くことが出來なかつた。機械體操の時間に、いつも瀨川の番になると二人の生徒と教師とが手傳ひをして大汗を搔いた。三人がゝりで首を捉へ手を捉へ、腰を支へつゝ顫へわなゝく春之助を無理やりに棚の上へ突き上げてやることなどもあつた。それでもどうかすると、眞つ倒まに鐵棒や棚の上から轉がり落ちて、銀砂の中へ顏をめり込ませ、鼻血を出すやら脣を切るやら、眼を白黑して起き上つたりした。並み居る生徒一同は此の珍妙なる光景に腹をかゝへて笑ひどよめいた。軍曹上りの意地の惡い體操の教師は、冷やかに彼の樣子を眺めながら、

「何だ意氣地なしめ、お前の體はまるで片輪のやうだな。」

かう云つて口汚く罵つた。學校中の教師のうちで、唯ひとり此の軍曹上りの教師ばかりが、春之助に毒舌を向けることを知つて居た。彼は「聖人の瀨川」を尊敬すべき所以を解さなかつた。未來のキリスト、未來の釋迦を以て自任する神童に對して、彼は常に野蠻なる迫害者であつた。

春之助は此の軍曹上りにいぢめられて、遂には大瑕我を身に負うて死にしはしないかと案ぜられた。或る時彼は階段の頂邊(てつぺん)から跳び下りを命ぜられ、いやと云ふ程背骨を打つて、したゝか銀砂を喰(くら)つたまゝ暫く悶絶したことがあつた。彼がやう／＼我に復つて茫然と眼を見開いた時、運動場中(うんどうばちゆう)の生徒等の一度にわッと笑ひ出した聲が、纔かに意識の恢復しかゝつた彼の耳へさながら鬨の聲のやうに響いた。

「何を貴樣たちは嘲るのだ。こんな輕業(かるわざ)見たいな藝當は出來なくつても、己には偉大な天才があるんだぞ。己のえらい所は貴樣たちのやうな凡人には分らないのだ。」

彼は腹の中で負け惜しみを云ひながら、無理にも自分を慰めねばならなかつた。「天才は凡べて片輪である。諸方面の能力が圓滿に發達して居たら、己は凡人になつてしまふのだ。」かう云ふ自負心がだんだん募つて來るに從ひ、陽に運動家を輕侮しつゝ、陰には彼等を恐れ羨んだ。天氣の好い日、ボールやテニスの選手と呼ばれる連中が校庭のグラウンドに立ち、蕭洒たる運動服を身に纏つて壯快な遊戯に耽つて居る光景を、遠くの方から臆病らしく眺めやる春之助の胸には、淋しく生れ淋しく育つた自己の運命に對する咒咀と絶望の念が、涙を誘ふやうに湧き上つた。

何處までも意地の惡い、いたづら好きな運命の神は春之助の醜い容貌をいやが上にも醜くすべく毒手を振つて居るやうに思はれた。彼の顏にはいつの間にやら炮(とび)と云ふものが出來始めて、日を重ね月を經るまゝに其れが一面に蔓延した。額と云はず頰と云はず頤と云はず、あらゆる空地に豆のやうな大きさの腫物がぎつしりと詰まつて、しまひには頸の方へまで蕃殖した。彼が毎日鏡を見る度數はますます頻繁になつた。朝、蒲團の中で眼をさますと直ぐ春之助は炮の數が氣になつて、早速顏を映して見る。いつ

迄立つても腫物は一向衰へて行きさうな様子がなかつた。却つて、昨日の朝には消えかゝつて居た皰と皰の隙間から、新鮮な眞紅な色をした塊が角の如く凸出して、毒々しく脹れ上つて居たりする。總體に青褪めた、活氣のない面色の中に、新しい皰ばかりが恐ろしく威勢のいゝ血の色を漲らせて、一杯に膿を湛へて、窓からさし込む朝の日光にてらてらと照り映えて居る。

「どうだ、なかなか立派だらう。お前の顔があんまり見すぼらし過ぎるから、己は當分飾りになつてやる爲めに此處へ出たのだ。お前は己を誰だと思ふ。己は惡魔の使だぞ。」

こんなことを云つて、皰がからからと嗤つて居るやうに感ぜられた、實際春之助は、此の忌ま忌ましい皰の勢を眼に見えぬ惡魔の仕業として呪はずには居られなかつた。丁度犬に咬まれた人間が赫怒して其の獸を追ひ廻すやうに、彼はカッとなつて何も鏡を視つめたまゝ皰の頭を力まかせに壓し潰さうとする。皰は壓されゝば壓される程膿を湛へて膨れ上つて來て、四五日の間彼を飜弄する。さうしていよいよてかてかといよゝ毒々しく充分に熟し切つてから、漸く彼の爪の下に潰え、ぷつつりと破裂して、眞白な脂肪の塊を彈き出す。潰れた痕は更に一層醜く爛れて、二た目と見られないやうに皮膚の組織が滅茶滅茶に搔き破された。彼の顔中は全く此れ等の皰の殘骸に埋まつて、恰も實を喰ひ漁つた玉蜀黍の心の如くになつてしまつた。

春之助は夫人の使ひで折々芳町邊の狹斜の巷を訪問する度每に、藝者や半玉と稱する女たちに接近して、彼等と簡單な挨拶を交はす機會を持つて居た。彼は醜い自分の姿に引き換へて、世にも珍しい、淨く貴い容貌と姿態とを具備する人間が、いかに多勢その一廓に集つて居るかを知つた。秘めやかな新

道の兩側にたゞよふ御神燈のうす明り、見るから意氣な、小鳥の籠のやうな細格子の家並――さう云ふ空氣と情調の中に朝夕を送つて居るうら若い婦人共の研きに研いた明眸皓齒をまざまざと見せられる時春之助は自分の身の上を獸の如く卑しみ疎んじた。等しく此の世に人間として生を受けながら、彼等と自分とは何故斯くまで違ふのであらう。彼は恐か一點の汚れのない、瑠璃のやうに滑らかな肌の色と云ひ、水の如く柔かな絹物の衣裳の下から、なよなよと匂ひこぼれる手足の肉の婀娜つぽさと云ひ、彼等の體の到るところに溢れ輝く「美」の表現の豐かさを眺めれば、さながら美しい一篇の詩を讀むやうな夢心地へ引き入れられる。まことに彼等の肉體は生きた詩であり、生きた寶玉であつた。それだのに春之助の姿はまあどうであらう。彼と彼等とは肉體を形成する物質の組織と成分とが根柢から異つて居るらしかつた。神が彼等を造るのに宇宙の面に浮き上る清澄な精氣を以て固めたとすれば、春之助の體は底に澱んだ糞土を以て作られたのではあるまいかと訝しまれた。」

「御免下さい。私は小舟町の井上から參りましたが‥‥」

から云ひながら例の細格子を明けて、彼等の住居を訪れる少年の眼つきには、日頃の誇りも自負心もなく、門前に物乞をする宿無し男のやうであつた。

「まあ何と云ふ薄汚い子供だらう。」

美しい女たちは密かに自分の樣子を窺み視て、蘭たけた眉根を寄せながらこんな事を呟いては居ないだらうかと、春之助は常に我ながら氣が怯えた。疊の上に一匹の毛蟲が這ひ込んでさへ忽ちきやしやな體を顫はせて恐れ戰く女たちである。若しも此の少年が井上の奥さんの使者であると知らなかつたら、

あの女たちは彼に向つてどんな取り扱ひをするだらう。

「一體お前さんは何者だい。此處はお前のやうなぼろ書生の來る所ぢやないんだよ。氣味が惡いから早く彼方へ出て行つておくれ。」

と、彼等は頭から突慳貪に怒鳴りつけはしないであらうか。たとへどれ程口汚く怒鳴られても、春之助は自ら顧みて其れを憤慨するだけの勇氣は出ない筈である。いかにも彼等の忌憚する通り、自分は醜いぼろ書生に違ひない。さう考へると彼は消え入るやうな耻かしさを覺えた。

夕方、燈火のつく頃などに訪問すると、彼等は四五臺の鏡臺の前にずらりと居並んで、湯上りの背すぢへ眼のさめるやうな電燈の明りを浴びながら、惜し氣もなく兩肌を袒いで化粧して居ることがあつた。傍の衣紋竹には、燃えたつばかりな友禪の長襦絆が、魂のある物のやうになまめかしく垂れ下つて居たりした。その縮緬の優婉な地質が、やがてあの女たちの玉の肌へ絡み纒はる刹那を想ふと、春之助はあまりの美しさに戰慄した。

半玉と呼ばれる女たちは、大概彼と同じくらゐの年齢の者が多かつた。小いさな家庭敎師が哀れな筒袖の木綿の着物を着せられて居るにも拘らず、その少女等は大人も及ばぬ贅澤を恣にして、高價な衣裳を自由に着飾る境遇に居るらしかつた。彼等は元來春之助と同じやうに、卑しく貧しい家に生れた子供でありながら、たまたま美しい容貌を持つて居た爲めに花やかな色里の藝者の仲間へ選ばれて、年中あのやうな贅澤と自由とを許されて居るのである。天才の人間に小兒と大人の區別がないとしたら、美貌の婦女にも年齢の差違を設ける理由はない。あの少女等は美しきが故に大人と等しい凡べての享樂を與

へられて居る。さうして、奢侈も生意氣も戀も虚言も、「美しきが故に」彼等は實行の特權を持つて居る。彼等の手管に欺かれるのは欺かれる者の愚かである。彼等の戀に惑溺するのは溺れる者の罪である。「あらゆる惡事が美貌の女に許されなければならない。」――春之助は自然とさう云ふ風な考へに導かれて行つた。

彼は春之助の肉體に祟るばかりでなく、彼が唯一の誇りとして居る鋭敏にして聰明な頭腦の光りをも曇らせて行くやうであつた。あの淺ましい腫れ物が出來始めてから、彼は次第々々に倦怠を感じ疲勞を覺えるやうになつた。以前のやうに夜遲くまで勉强して居ると、直ぐにうとうとと眠げを催して氣根が朦朧と鈍つてしまひ、本を讀んでもさつぱり意味が分らない。どうかすると若問學校の教室に居る時ですらデスクに凭れたまゝ前後不覺に夢を見て居ることさへあつた。

「おい、おい、聖人が居睡りをして居るぜ。」

から云つて、生徒たちは眼ひき袖ひき囁き交した。教師は彼の睡がりを、主人の家で追ひ使はれる結果であらうと同情して、わざと知らぬ體を裝つたが、それでもむづかしい問題などが提出されて、外の生徒等の手に負へぬ時は、

「瀨川、これを答へて御覧なさい。」

と、微笑を含みながら聲をかけて呼びさましました。春之助はハッと驚いて立ち上りつゝ眼を擦り〳〵黑

板の問題を凝視すること一二分、忽ちさしもの難問題を解釋し得て明瞭な答へをするのが常であつた。

「睡つて居ても彼奴はやつぱりよく出來る。」と云つて、人々は更に神童の奇蹟を褒めたゝへた。

「腐つても鯛と云ふ諺がある。生れながらの天才は未だ己の頭の中に閃めいて居ると見える。此の鹽梅だと、世間の凡人どもはいつ迄立つても己を追ひ越す事は出來ない。彼等は永久に己を非凡の神童として讃嘆するばかりなのだ。」

かう思つて春之助は又もや安心の胸を撫でおろした。少しばかり懶惰になり愚鈍になつても、彼と凡人との頭腦の働きには、先天的に踰ゆべからざる巨大な徑庭があるらしかつた。やがて十五の歳の冬が暮れて明くる年の三月の學年試驗にも、彼は依然として首席の月桂冠を占めたのであつた。

彼は既に中學の四年生である。再來年、十八の歳の春には首尾よく五年級を卒業して、かねての望み通り高等學校の文科へ入學する手筈である。彼がまだ小學校に居た時分、幼い胸に明け暮れ描いて居た夢のやうな計劃は、兎にも角にも今日のところ迄は豫想の如く進捗して來た。心配なのは此れから先の實現である。其の計劃に從へば、高等學校を卒業して大學の哲學科へ這入る頃、二十歳前後の年齢に到達する迄に彼は充分修養の功を積み、いよいよ偉大なる宗教家となつて人格の光りを世に耀かす積りであつた。此れが果たして豫期に違はず進捗するであらうか。路は登るに隨つて益々嶮しく益々遠い。春之助は今や方に精根を消磨し切つて漸く困憊を覺え始めたかの感がある。

彼の大好きな哲學書の耽讀は、此の頃になつてだんだん速力が弛んで來た。「今度はあれを讀まなければならぬ。いつ幾日までに是非此の本を讀破してしまふ必要がある。」さう氣が付いて申し譯的に書物を

開き、申し譯的に眼を通しても、常に睡氣を催すばかりで何一つ頭に殘つて居ない。殊に近來記憶力の衰へたことは私かに驚くばかりである。一遍小耳へ挾んだら未だ嘗て忘れた事のないと云はれた自慢の腦髓が、無殘にも空洞のやうに涸れ果てゝしまつたらしく、ペエヂの字面を睨みつけて一生懸命に氣力を集注して居ながら、五六行讀む間に直ぐ前の記事を忘れて居る。それのみならず、最初からしッかりと文章の意味を心の底に刻み付ける能力さへも失つて居る。こんな工合で、此の後到底彼の學識は一歩たりとも進歩しさうに思はれなかつた。彼はせめても幼少の時分から、折角螢雪の苦しみを重ねて今日迄にいやが上にも覺え込んだ博大な知識の量を殖やさぬまでも減らさぬやうに、頭の中へ嚴重に封じ籠めて置きたかつたが、それすら時々覺束なく感ぜられる事があつた。腦の力の弛むにつれて、無理やりに壓搾されて居た細かい智識の數々が、恰も瓦斯の發散する如く、隙を狙つて次第々々に飛び散ッてしまうらしかつた。獨逸語、英語などの短語を失念する度合の激しさは、一と入眼に見えて彼の腦頭の衰頽を證據立てるやうであつた。外國語の書物を讀んで居る最中に、屢々彼は極めて有り觸れた、熟知して居なければならない筈の言葉に出會ッて、どうしても其の意味が想ひ出せなかつた。よんどころなく辭書を引いて、「なんだ馬鹿らしい、こんな文字を忘れるなんて。」と腹立たしげに呟きながら荒々しく再び辭書を閉ぢてしまうと、どうしたものか今引いた字を忽ちけろりと忘れて居る。そんな時には忌ま忌ましいよりも恐ろしくなつて、我知らず竦然とすることがあつた。

「あゝ、自分の天才は斯くの如くにして結局滅茶々々に毀ち破られてしまふのであらうか。」

彼は情なく傷き倒れた自分の末路を、ありありと前途に望むことが出來るやうな心地がした。少くと

も彼が年來の目的であつた聖者哲人の境涯は、遙か彼方へ隔絶してしまつたのである。醜い肉體の中に盛られた淨い精神はいつの間にやら外部の腐蝕に感染して機能を滅却したのではあるまいかと想像された。

「どうして自分は此れ程までに墮落してしまつたのであらう。自分の頭腦は再び以前の活潑な働きに恢復することは出來ないのであらうか。」

から反問して見る時、春之助はいつも微かなる良心の囁きを聞いた。「何をお前は空惚けて居るのだ。お前には墮落した原因も恢復の方法も立派に分かつて居る筈だ。お前が意志を强くして、あの淺ましい慾望を制し、あの忌まはしい惡習慣を捨てさへすれば、いくらでも昔の神童に歸れるではないか。お前は自らを欺いて居るのだ。」――良心の囁きが敎へる文句は常に此の通りであつた。其の度毎に春之助は奮然として己れの意志に鞭韃つたが、彼の心身の奧深く喰ひ込んでしまつた狂はしい惡習慣は、絕えず煩惱の炎を燃やして、直ちに彼を誘惑の底へ突き落した。彼は自分の顏に夥しい皰の出來るのも、始終睡けを催すのも、健忘性に襲はれるのも、その原因は凡べて自分が毎夜のやうに犯して居る耻づべき罪惡の報いである事を、既に疾うから心付いて居つた。あの恐ろしい惡習慣を禁ずることが出來さへすれば、昔のやうな玲瓏透徹な頭腦の作用を取り戻すのは容易であると知つて居た。知つて居ながら殆んど不可抗力を以て押し寄せる情慾の炎に卷き込まれて、彼は自分の運命を如何とも左右することが出來ないやうにあきらめてしまつた。

生れて始めて、ふとした機會から彼が其の罪惡の樂しさを味はつたのは、一年以上も前の事であつた。

程なく彼は其れが道德上の罪惡である事を悟り、淺ましい所行である事をも察した。さうして、其れが生理的にも如何程戰慄すべき害毒を齎すかと感付いた頃には、もはや牢乎として動かし難い習慣となつて居たのであつた。彼は無意識の間にお町夫人の容色を戀ひ慕ひ、令孃鈴子の肉體に憧れた。芳町の新路へ使ひにやられて、藝者や半玉の姿を見て來た晩などは、殊更幻の惡戯に惱まされ、餌を嗅ぎつけた野獸のやうに悶え廻つた。どうかすると彼は晝間でも便所へ這入つて三十分ぐらゐ顏を見せない事さへあつた。

一日一日に骨を殺ぎ肉を虐げて、傷ましく荒んで行く心の痛手は眼に見えるやうに想はれた。慣れゝば慣れる程犯罪の度數は頻繁になつて、殆んど毎日缺かなかつた。

「あゝ、自分はいつになつたら芳町の藝者のやうな美しい女を、實際自分の物として樂しむことが出來るのであらう。事に依つたら淺ましい幻に滿足して、此の儘死んでしまふのではあるまいか。」

そんな悲しみが始終彼の胸中を往來するやうになつた。自分はあのやうな美貌の女に戀ひ慕はれる機會もなく、見すぼらしいぼろ書生として淋しい生涯を送るのではあるまいか。そう考へると彼は何物を犧牲にしても、せめて人並の生き生きした立派な男前になりたかつた。若しも神樣から「天才と美貌と孰れか一つを撰べ。」と云はれたら、彼は猶豫なく後者を取るに違ひなかつた。

その要求の當然の歸結として、春之助には聖人の境地よりも俳優の身の上の方が遙かに羨しく感ぜられて來た。彼は屢々隙を偸んでは芝居の立見をするやうになつた。絢爛な舞臺の上に艶麗な肉體を曝して、榮華と歡樂との錦を織りなす劇場の空氣の中に、夢のやうな月日を過して行く俳優の生活の花やか

さを想ふと彼は生きがひのない自分の命の慘めさを恨んだ。

或る晩、春之助は蒲團の中にもぐりながら、心を落ち着けて下のやうな事を考へた。――「己は子供の時分に己惚れて居たやうな純潔無垢な人間でない。己は決して自分の中に宗教家的、若しくは哲學者的の素質を持つて居る人間ではない。己がそのやうな性格に見えたのは、兎に角一種の天才があつて外の子供よりも凡べての方面に理解が著しく發達して居た結果に過ぎない。己は禪僧のやうな枯淡な禁欲生活を送るにはあんまり意地が弱過ぎる。あんまり感性が鋭過ぎる。恐らく己れは靈魂の不滅を說くよりも、人間美を歌ふために生れて來た男に違ひない。己はいまだに自分を凡人だと思ふ事は出來ぬ。己はどうしても天才を持つて居るやうな氣がする。己が自分の本當の使命を自覺して、人間界の美を讃へ、宴樂を歌へば、己の天才は眞實の光を發揮するのだ。」

さう思つた時、春之助の前途には再び光明が輝き出したやうであつた。彼は明くる日から哲學の書類を我慢して通讀するやうな愚かな眞似をやめにした。彼は十一二歲の小兒の頃の趣味に返つて、詩と藝術とに沒頭すべく決心した。

大正四年　十二月作

高瀬舟

森林太郎

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にゐる同心で、此同心は罪人の親類の中で、主立つた一人を、大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた默許であつた。

當時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盗をするために、人を殺し火を放つたと云ふやうな、獰惡な人物が多數を占めてゐたわけではない。高瀬舟に乘る罪人の過半は、所謂心得違のために、想はぬ科を犯した人であつた。有り觸れた例を擧げて見れば、當時相對死と云つた情死を謀つて、相手の女を殺して、自分だけ活き殘つた男と云

ふやうな類である。

さう云ふ罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕ぎ出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つつ、東へ走つて、加茂川を横ぎつて下るのであつた。此舟の中で、罪人と其親類のものとは夜どほし身の上を語り合ふ。いつもいつも悔やんでも還らぬ繰言である。護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲慘な境遇を細かに知ることが出來た。所詮町奉行所の白洲で、表向の口供を聞いたり、役所の机の上で、口書を讀んだりする役人の夢にも窺ふことの出來ぬ境遇である。

同心を勤める人にも、種々の性質があるから、此時只うるさいと思つて、耳を掩ひたく思ふ冷淡な同心があるかと思へば、又しみじみと人の哀を身に引き受けて、役柄ゆゑ氣色には見せぬながら、無言の中に私かに胸を痛める同心もあつた。場合によつて、非常に悲慘な境遇に陷つた罪人と其親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が宰領して行くことになると、其同心は不覺の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間で、不快な職務として嫌はれてゐた。

いつの頃であつたか。多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃ででもあつただらう。智恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない、珍らしい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と云つて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。固より牢屋敷に呼び出されるやうな親類はないので、舟にも只一人で乗つた。

護送を命ぜられて、一しよに舟に乘り込んだ同心羽田庄兵衞は、只喜助が弟殺しの罪人だと云ふこと

だけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、この痩肉の、色の蒼白い喜助の樣子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆はぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるやうな、溫順を裝つて權勢に媚びる態度ではない。

庄兵衞は不思議に思つた。そして舟に乘つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絕えず喜助の擧動に、細かい注意をしてゐた。

其日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪廓をかすませ、やうやう近寄つて來る夏の溫さが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立ち昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、加茂川を橫ぎつた頃からは、あたりがひつそりとして、只舳に割かれる水のさゝやきを聞くのみである。

夜舟で寢ることは、罪人にも許されてゐるのに、喜助は橫にならうともせず、雲の濃淡に從つて、光の增したり減じたりする月を仰いで、默つてゐる。其額は晴やかで、目には微かなかがやきがある。

庄兵衞はまともには見てゐぬが、始終喜助の顏から目を離さずにゐる。そして不思議だ、不思議だと、心の內で繰り返してゐる。それは喜助の顏が縱から見ても、橫から見ても、いかにも樂しさうで、若し役人に對する氣兼がなかつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衞は心の內に思つた。これまで此高瀨舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。しかし載せて行く

罪人は、いつも殆同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な樣子をしてゐた。それに此男はどうしたのだらう。遊山船にでも乘つたやうな顏をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしや其弟が惡い奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。この色の蒼い痩男が、その人の情と云ふものが全く缺けてゐる程の、世にも稀な惡人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いやいや。それにしては何一つ辻褄の合はぬ言語や擧動がない。此男はどうしたのだらう。庄兵衞がためには喜助の態度が考へれば考へる程わからなくなるのである。

暫くして、庄兵衞はこらへ切れなくなつて呼び掛けた。「喜助。お前何を思つてゐるのか。」

「はい」と云つてあたりを見廻した喜助は、何事をかお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して庄兵衞の氣色を伺つた。

庄兵衞は自分が突然問を發した動機を明して、役目を離れた應對を求める分疏(いひわけ)をしなくてはならぬやうに感じた。そこでかう云つた。「いや。別にわけがあつて聞いたのではない。實はな、己は先刻からお前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。己はこれまで此舟で大勢の人を島へ送つた。それは隨分いろいろな身の上の人だつたが、どれもどれも島へ往くのを悲しがつて、見送りに來て、一しよに舟に乘る親類のものと、夜どほし泣くに極(き)まつてゐた。それにお前の樣子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのだい。」

喜助はにつこり笑つた。「御親切に仰やつて下すつて、難有うございます。なる程島へ往くといふことは、外の人には悲しい事でございませう。其心持はわたくしにも思ひ遣つて見ることが出來ます。しかしそれは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまでわたくしのいたして參つたやうな苦みは、どこへ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしやつらい所でも、鬼の栖む所ではございますまい。わたくしはこれまで、どこと云つて自分のゐて好い所と云ふものがございませんでした。こん度お上で島にゐろと仰やつて下さいます。そのゐろと仰やる所に、落ち着いてゐることが出來ますのが、先づ何よりも難有い事でございます。それにわたくしはこんなにかよわい體ではございますが、つひぞ病氣をいたしたことはございませんから、島へ往つてから、どんなつらい爲事をしたつて、體を痛めるやうなことはあるまいと存じます。」それからこん度島へお遣下さるに付きまして、二百文の鳥目を戴きました。それをここに持つてをります。」かう云ひ掛けて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けられるものには、鳥目二百銅を遣すと云ふのは、當時の掟であつた。

喜助は語を續いだ。「お恥かしい事を申し上げなくてはなりませぬが、わたくしは今日まで二百文と云ふお足を、かうして懷に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで爲事に取り附きたいと思つて、爲事を尋ねて歩きまして、それが見附かり次第、骨を惜まずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりませなんだ。それも現金で物が買つて食べられる時は、わたくしの工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、又跡を借りたのでございます。それがお牢に這入つてからは、

爲事をせずに食べさせて戴きます。わたくしはそればかりでも、お上に對して濟まない事をいたしてゐるやうでなりませぬ。それにお牢を出る時に、此二百文を戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、此二百文はわたくしが使はずに持つてゐることが出來ます。お足を自分の物にして持つてゐると云ふことは、わたくしに取つては、これが始でございます。島へ往つて見ますまでは、どんな爲事が出來るかわかりませんが、わたくしは此二百文を島でする爲事の本手にしようと樂んでをります。」かう云つて、喜助は口を噤んだ。

庄兵衞は「うん、さうかい」とは云つたが、聞く事毎に餘り意表に出たので、これも暫く何も云ふことが出來ずに、考へ込んで默つてゐた。

庄兵衞は彼此初老に手の屆く年になつてゐて、もう女房に子供を四人生ませてゐる。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇と云はれる程の、儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために着るものの外、寢卷しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、裕かな家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が滿足する程手元を引き締めて暮して行くことが出來ない。動もすれば月末になつて勘定が足りなくなる。すると女房が內證で里から金を持つて來て帳尻を合せる。それは夫が借財と云ふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。さう云ふ事は所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衞は五節句だと云つては、里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だと云つては、里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を塡めて貰つたことに氣が附いては、好い

顔はしない。格別平和を破るやうな事のない羽田の家に、折々波風の起るのは、これが原因である。

庄兵衛は今喜助の話を聞いて、喜助の身の上を我が身の上に引き比べて見た。喜助は爲事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡して亡くしてしまふと云つた。いかにもあはれな、氣の毒な境界である。しかし一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば十露盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の難有がる二百文に相當する貯蓄だに、こつちはないのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。其心持はこつちから察して遣ることが出來る。しかしいかに桁を違へて考へて見ても、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で爲事を見附けるのに苦んだ。それを見附けさへすれば、骨を惜まずに働いて、やうやう口を糊することの出來るだけで滿足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、生れてから知らぬ滿足を覺えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違へて考へて見ても、ここに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一ぱいの生活である。然るにそこに滿足を覺えたことは殆ど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。しかし心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役が御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどう

此疑懼が意識の閾の上に頭を擡げて來るのである。

一體此懸隔はどうして生じて來るだらう。只上邊だけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだと云つてしまへばそれまでである。しかしそれは譃である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなられさうにない。この根柢はもつと深い處にあるやうだと、庄兵衞は思つた。

庄兵衞は只漠然と「人の一生」といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、此病がなかつたらと思ふ。其日其日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又其蓄がもつと多かつたらと思ふ。此の如くに先から先へと考て見れば、人はどこまで往つて踏み止まることが出來るものやら分からない。それを今目の前で踏み止まつて見せてくれるのが此喜助だと、庄兵衞は氣が附いた。

庄兵衞は今さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。此時庄兵衞は空を仰いでゐる喜助の頭から毫光がさすやうに思つた。

庄兵衞は喜助の顏をまもりつつ又、「喜助さん」と呼び掛けた。今度は「さん」と云つたが、これは十分の意識を以て稱呼を改めたわけではない。其聲が我口から出て我耳に入るや否や、庄兵衞は此稱呼の不穩當なのに氣が附いたが、今さら既に出た詞を取り返すことも出來なかつた。

「はい」と答へた喜助も、「さん」と呼ばれたのを不審に思ふらしく、おそる〳〵庄兵衞の氣色を覗つた。

庄兵衛は少し間の悪いのをこらへて云つた。「色々の事を聞くやうだが、お前が今度嶋へ遣られるのは、人をあやめたからだと云ふ事だ、己に序にそのわけを話して聞せてくれぬか。」

喜助はひどく恐れ入つた様子で、「かしこまりました」と云つて、小聲で話し出した。「どうも飛んだ心得違で、恐ろしい事をいたしまして、なんとも申し上げやうがございませぬ。跡で思つて見ますと、どうしてあんな事が出來たかと、自分ながら不思議でなりませぬ。全く夢中でいたしたのでございます。わたくしは小さい時に二親が時疫で亡くなりまして、弟と二人跡に殘りました。初は丁度軒下に生れた狗の子にふびんを掛けるやうに町内の人達がお惠下さいますので、近所中の走使などをいたして、飢ゑ凍えもせずに育ちました。次第に大きくなりまして職を捜しますにも、なるたけ二人が離れないやうにいたして、一しよにゐて、助け合つて働きました。去年の秋の事でございます。わたくしは弟と一しよに、西陣の織場に這入りまして、空引と云ふことをいたすことになりました。そのうち弟が病氣で働けなくなつたのでございます。其頃わたくし共は北山の掘立小屋同様の所に寢起をいたして、紙屋川の橋を渡つて織場へ通つてをりましたが、わたくしが暮れてから、食物などを買つて歸ると、弟は待ち受けてゐて、わたくしを一人で稼がせては濟まない〳〵と申してをりました。或る日いつものやうに何心なく歸つて見ますと、弟は布團の上に突つ伏してゐまして、周圍は血だらけなのでございます。わたくしはびつくりいたして、手に持つてゐた竹の皮包や何かを、そこへおつぽり出して、傍へ往つて「どうした〳〵」と申しました。すると弟は眞蒼な顔の、兩方の頰から腮へ掛けて血に染つたのを擧げて、わたくしを見ましたが、物を言ふことが出來ませぬ。息をいたす度に、創口でひゆう〳〵と云ふ音がいたすだけで

ございます。わたくしにはどうも様子がわかりせんので、「どうしたのだい、血を吐いたのかい」と云つて、傍へ寄らうといたすと、弟は右の手を床に衝いて、少し體を起しました。左の手はしつかり腮の下の所を押へてゐますが、其指の間から黒血の固まりがはみ出してゐます。弟は目でわたくしの傍へ寄るのを留めるやうにして口をあきました。やう／＼物が言へるやうになつたのでございます。「濟まない。どうぞ堪忍してくれ。どうせなほりさうにもない病氣だから、早く死んで少しでも兄きに樂がさせたいと思つたのだ。笛を切つたら、すぐ死ねるだらうと思つたが息がそこから漏れるだけで死ねない。深く／＼と思つて、力一ぱい押し込むと、横へすべつてしまつた。刃は飜れはしなかつたやうだ。これを旨く拔いてくれたら己は死ねるだらうと思つてゐる。物を言ふのがせつなくつて可けない。どうぞ手を借して拔いてくれ」と云ふのでございます。弟が左の手を弛めるとそこから又息が漏ります。わたくしはなんと云はうにも、聲が出ませんので、默つて弟の喉の創を覗いて見ますと、なんでも右の手に剃刀を持つて、横に笛を切つたが、それでは死に切れなかつたので、其儘剃刀を、剜るやうに深く突つ込んだものと見えます。柄がやつと二寸ばかり創口から出てゐます。わたくしはそれだけの事を見て、どうしようと云ふ思案も附かずに、弟の顔を見ました。弟はぢつとわたくしを見詰めてゐます。わたくしはやつとの事で、「待つてゐてくれ、お醫者を呼んで來るから」と申しました。弟は怨めしさうな目附をいたしましたが、又左の手で喉をしつかり押へて、「醫者がなんになる、あゝ苦しい、早く拔いてくれ、頼む」と云ふのでございます。わたくしは途方に暮れたやうな心持になつて、只弟の顔ばかり見てをります。こんな時は、不思議なもので、目が物を言ひます。弟の目は「早くしろ、早くしろ」と云つて、さも怨めしさう

にわたくしを見てゐます。わたくしの頭の中では、なんだかから車の輪のやうな物がぐる〳〵廻つてゐるやうでございましたが、弟の目は恐ろしい催促を罷めません。それに其目の怨めしさうなのが段々險しくなつて來て、とう〳〵敵の顔をでも睨むやうな、憎々しい目になつてしまひます。それを見てゐて、わたくしはとう〳〵、これは弟の言つた通にして遣らなくてはならないと思ひました。わたくしは「しかたがない、拔いて遣るぞ」と申しました。すると弟の目の色がからりと變つて、晴やかに、さも嬉しさうになりました。わたくしはなんでも一と思にしなくてはと思つて膝を撞くやうにして體を前へ乘り出しました。弟は衝いてゐた右の手を放して、今まで喉を押へてゐた手の肘を床に衝いて、横になりました。わたくしは剃刀の柄をしつかり握つて、ずつと引きました。此時わたくしの内から締めて置いた表口の戸をあけて、近所の婆あさんが這入つて來ました。留守の間、弟に藥を飲ませたり何かしてくれるやうに、わたくしの頼んで置いた婆あさんなのでございます。もう大ぶ内のなかが暗くなつてゐましたからわたくしには婆あさんがどれだけの事を見たのだかわかりませんでしたが婆あさんはあつと云つた切戸をあけ放しにして置いて駈け出してしまひました。わたくしは剃刀を拔く時、手早く拔かう、眞直に拔かうと云ふだけの用心はいたしましたが、どうも拔いた時の手應は、今まで切れてゐなかつた所を切つたやうに思はれました。刃が外の方へ向いてゐましたから、外の方が切れたのでございませう。わたくしは剃刀を握つた儘、婆あさんの這入つて來て、又駈け出して行つたのを、ぼんやりして見てをりました。婆あさんが行つてしまつてから、氣が附いて弟を見ますと、弟はもう息が切れてをりました。創口からは大そうな血が出てをりました。それから年寄衆がお出になつて、役場へ連れて行かれますまでわ

たくしは剃刀を傍に置いて、目を半分あいた儘死んでゐる弟の顏を見詰めてゐたのでございます。

少し俯向き加減になつて庄兵衞の顏を下から見上げて話してゐた喜助は、かう云つてしまつて視線を膝の上に落した。

喜助の話は好く條理が立つてゐる。殆ど條理が立ち過ぎてゐると云つても好い位である。これは半年程の間、當時の事を幾度も思ひ浮べて見たのと、役場で問はれ、町奉行所で調べられる其度毎に、注意に注意を加へて浚つて見させられたのとのためである。

庄兵衞は其場の樣子を目のあたり見るやうな思ひをして聞いてゐたが、これが果して弟殺しと云ふものだらうか、人殺しと云ふものだらうかと云ふ疑が、話を半分聞いた時から起つて來て、聞いてしまつても、其疑を解くことが出來なかつた。弟は剃刀を拔いてくれたら死なれるだらうから、拔いてくれと云つた。それを拔いて遣つて死なせたのだ、殺したのだとは云はれる。しかし其儘にして置いても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと云つたのは、苦しさに耐へなかつたからである。喜助は其苦を見てゐるに忍びなかつた。苦から救つて遣らうと思つて命を絶つた。それが罪であらうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救ふためであつたと思ふと、そこに疑が生じて、どうしても解けぬのである。

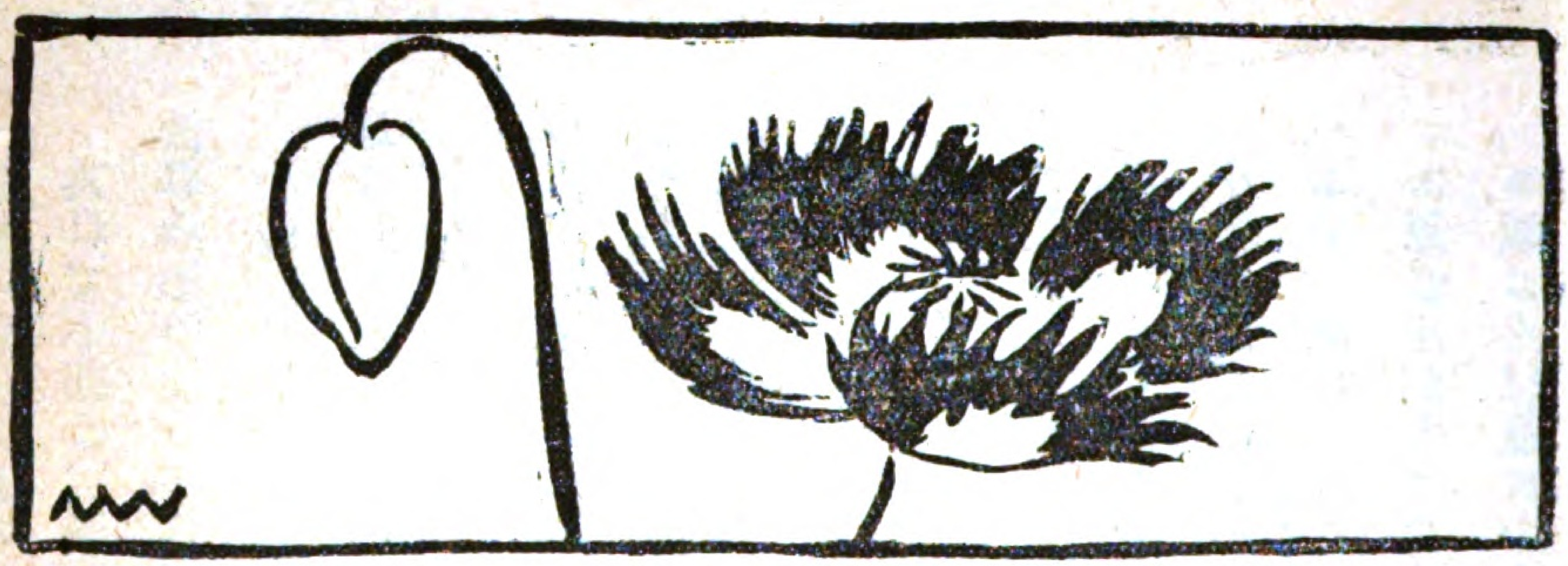
庄兵衞の心の中には、いろ〱に考へて見た末に、自分より上のものの判斷に任す外ないと云ふ念、オオトリテエに從ふ外ないと云ふ念が生じた。庄兵衞はお奉行樣の判斷を、其儘自分の判斷にしようと思つたのである。さうは思つても、庄兵衞はまだどこやらに腑に落ちぬものが殘つてゐるので、なんだか

お奉行様に聞いて見たくてならなかつた。

次第に更けて行く朧夜に、沈默の人二人を載せた高瀬舟は、黑い水の面をすべつて行つた。

小藤

田村俊子



一

小藤は、明るく日の射す方を向いて、うつとりと何か考へ込んでゐた。硝子窓を通して赤い山茶花の花がちらりと見える。其れが水の中に浮いてる花のやうに冷めたくちり〳〵と萎れてゐる。手水鉢の傍に咲いてゐる山茶花であつた。外には青い空を吹き剝がしそうな風が荒ら立つてゐる。冬の氣象が癇癪を起して、まだ樹々に殘つてゐる秋の末のものを一時に滅盡させやうと勢つてるやうであつた。庭の散り紅葉が飛石の上をから〳〵と吹き飛んでゆく微な音が聞こえる。籠桶の中の鶯がかたことと激しく動き廻つてゐるので、小藤は鶯を氣にしてそつと障子を開けて見た。暗い籠の奥の方に鶯は縮まつて、小藤が見詰めてゐる間に其れなりで動かずにゐた。

「寒いのかも知れない。」

其れで小藤は、紫壇の臺ごと鶯の籠桶の障子を窓から射す日の方へ振向けてやつた。揺ら〳〵と水の流れの影のやうに日が籠桶の上を這つた。

小藤は又、窓の方を向いてさつきからの思ひを續けた。眞つ黑な漆のやうな濃い髮を引き詰めて鬢下地にしてゐる。毛が多いので兩方の輪が彈けるやうに兩鬢の上に垂れてゐる。鬢を詰めたので眼と眉が一層きり〳〵と上つて、二重瞼の眼元が凛として張つてゐた。細く長い眉尻もやゝ一字に延びて、鼻筋が眞つ直ぐに通つてゐる。額の線、頰の線、腮い線、鼻の線——何處までもすら〳〵と柔らかに描いたやうな和やかな輪廓を持つたその顏は、少し唇が厚くて重さうにぽつとりとしてゐる。額がせゝこましい程狹いのが少し相を窮屈にしてゐる。色はあんまり白くはなかつた。其れでも何所かに白粉が殘つてゐて、其れがこの眼の仇つぽさを添へてゐた。

「藤こうゝゝ。おい。」

とお爺さんの呼んでる聲がする。

「私を呼んでるよ。」

小藤は直ぐに氣が付いたが知らない振りをしてゐた。

「おい。誰れか藤こうゝゝを知らねえかえ。」

お爺さんが大きな聲で、女弟子の集つてゐる部屋のあたりで聞いてゐる。

「お嬢さんは離れの方にゐらつしやいますでせう。」

大層よく透き徹つた聲で其の一人が返事をしてゐる。小藤はその聲を聞き付けて、

「華江さんだよ。」

と獨り言を云つた。

「ほんとに煩さいお爺さんだよ。誰れが知るもんか。」

小藤は然う云ひながら懐ろ手をして暗い壁の傍にぴつたりと附着いてゐた。平氣でゐやうと思ひながら、お爺さんの足音が椽側にひた〳〵と聞こえてくると、小藤は思はず眞つ赤になつて、其の胸が波を打つた。

「何だえ。こんなところに引つ込んで。」

障子を開けて顔を出したお爺さんの笑つた顔を見ると、小藤はすつかり血の引いた蒼白な顔になつて其の張りの強い大きな眼に爆ぜるやうな冷笑を漂えた儘動かずにゐた。

「おい。」

お爺さんは骸骨のやうに窪んだ眼を上げて、口を四角に開きながら笑つて入つて來た。お爺さんは脱腸を病つてゐるので、始終革帶の先きにピストルのやうな形をした止めの附いてるものを腰の廻りに卷き付けてゐる。其の腰帶の止めに手をやつて、着物の前を引き摺りながら素足で小藤の立つてる方へ歩み寄つた。

「おい。藤こう。」

お爺さんは小藤の立つてゐる身體を片手で抱きよせた時に然う云つて呼んだ。

「なに。お爺さん。」

小藤は抱かれながらお爺さんの顔を上目でぢつと眺めた。お爺さんの乾いた唇が筋肉の緊張で引絞るやうに窄まり、白髪の月代が針のやうに延びた其の頬の肉は、脂肪が浮いて戰えるやうに撓んでゐる。だがその顔が又直ぐに笑ひを浮べた。窪んだ眼が一層深く落ち込むやうに、お爺さんは笑ふと其の小さな瞳が、眼瞼で被ほはれた。お爺さんはその眼瞼の下から小藤の顔を覗くやうに仰向いて、又、

「藤こう。」

と呼んだ。そうして小藤の柔らかな肩の肉を掴んで搖がしながら、

「俺がさつきからお前を呼んでるのに、知らん顔をしてゐると云ふ奴があるかえ。」

とお爺さんは態と怒つたやうに、又口許を窄めて、半纏を着てゐる痩せた肩を自分で振り動かした。

「聞こえないもの。知りませんよ。」

小藤はお爺さんの手からするりと摺り抜けて鶯の籠桶の傍へ來た。

「おい。」

お爺さんの然う云つて小藤を呼ぶ聲は、干枯らびた内臓の血が渦卷くやうに、身體の底の方から苛ら立しく縺れて響いてくる。その度に、お爺さんの下半身は拔けて行くやうにがつくりと動いた。

「おれはお前が可愛いくて仕樣がないんだ。」

お爺さんは呟きながら小藤を追つて籠桶の傍へ來た。小藤はその臺にうつとりと凭れて、傍へ來たお爺さんを見上げながら笑つてゐた。小藤はいつか甘えるやうな媚弄を含んだ眼になつて、其の豐くりと

した丸い腮に掌を支つてゐた。
「然う。お爺さんは鶯の方が可愛いゝんぢやないの。」
「鶯よりはお前の方が可愛いゝんだ。」
お爺さんも其所に坐つて小藤の頬を指の先きで突いた。
「でも鶯はね。うまく行くと百圓にも百五十圓にもなるんでせう。」
「然うよ。たつた二十圓の鳥が千圓になるかも知れない。然うしたら藤こうに指環を買つてやる。」
お爺さんは、其のぬら付いてゐるやうな黒い光りを帯びた指先で、又、執拗く小藤の頬を突いた。
「おゝ痛い。」
小藤は今度仰山にお爺さんの手を拂つた。
「どんな指環を買つてくれるの。」
「然うよ。赤いのがいゝだらう。」
「あれは、ルビーと云ふのさ。」
小藤は自分の指を眼の前で眺めながら云つたが、その手を懐中に入れてしまつてお爺さんに顔を背向けた。
小藤の胸に重い欝陶しさが満ちてきた。このお爺さんの黒い皺んだ手に、自分の身體を縛められてるやうな物憂さに小藤はくさ〳〵として、その美しい顔を袖で掩ひながら籠桶の臺の上に突つ伏すと、
「お爺さん。この鶯に唐琴と云ふ名を付けると好い。」

と云つた。
「洒落たことを云つてる。」
とお爺さんは、さも小藤の云つた事を可愛しむやうに他愛もなく蕩ろけた調子で云つて笑つた。小藤は默つて何時までも突つ伏した儘で、鶯塚の芝居の事を考へ耽つてゐた。可愛らしい梅が枝の見染めの場。梅ヶ枝の古風な戀煩ひ、——
「これ唐琴。ほんにそなたは結ぶの神。」
小藤は臺詞を云ひながら顔を上げて笑ひ出した。
「私が梅ヶ枝でお爺さんを見染めるの。其れから戀ひ煩ひをするんですとさ。」
小藤は胸を打ちながら笑ひ轉げた。目が眞つ赤になつて涙が浮いてゐた。その涙を小藤は緋の襦袢の袖で拭ひながら、まだ口を歪めて笑ひつゞけた。
「うむ。」
お爺さんも、口を四角に開きながら咽喉を痙攣らせて笑つた。
「仕樣のねえ奴だ。」
お爺さんは然う云つて、突然小藤の鼻の先きを摘んだ。

二

夜になると弟子の華江も咲子も歸つてしまつて、家の中は一時陰氣に森となつた。何かしら淀つてゐ

なければ師匠の不二江の機嫌が惡るいので、小藤は三味線を出してきて音をさせてゐたが、やがて倦きくしたので其れも傍へ抛り出して、ぼんやりと火鉢にあたつてゐた。

小藤は取り留めもなくいろくな事を考へてゐた。こんな家に貰はれて來た自分は、この先き何うなるのだらうと云ふ不安を毎日小藤は惱んで、少しも心が安靜かずにゐる。琴をやつても踊りをやつても、何をやつても一々不二江の心に叶はなくて、絶えず其の烈しい小言を聞かされてゐる小藤は、一とつ一とつ自分の藝事にも失望して、然うしてこの頃では却つて捨鉢な氣になつてゐた。

「私はちつとも名人なんかになりたくない。なんにも出來ない平凡で終つたつて構やあしない。」

小藤は斯う思つて、一々自分に嚴ましい小言を云ふ師匠の不二江に反抗をもつ時もあつた。立派な技藝を有つことばかりに苦しんで、今日まで長い年月その藝道の上で鬪ひ續けてきた師匠に對しても、小藤はなんにも其人を別段に敬ふと云ふ意も起らなかつた。狐火の八重垣姫の型に苦心して、月の照る晩に池に自分の姿を映しながら其の形を考へたと云ふ師匠の話も、小藤にはその苦しむ心と云ふものが解らない。

「自分から苦しまなくちやいけない。」

斯う云ふ師匠の言葉は小藤には何の意味もなかつた。

「いまに、自分で舞臺を踏むやうになると、私の云つた事が分るやうになる。聞いておくだけでも藥だよ。」

小藤はそんな時には柔順に不二江の前で首肯いてはゐるけれ共、心ではそんな事は何うでも好いと云

ふ風に考へてゐた。現在、自分の眼の前に見てゐる師匠の生活は、今更それほどに小藤の若い胸に憧れも持たせなかつたし、その人の藝道に對しても、自分がどんな苦しい思ひをしても其人の行つたところまで辿つて行つて見やうと思ふ程の敬虔な心も起らせなかつた。そんな事よりも、小藤は自分一人の上にもつと考へることがあるやうな氣がした。其れは何時までも斯うしては居られないと云ふことであつた。

「何時までも斯うしてはゐられない。何うすればいゝのだらう。」

小藤が斯う云つて師匠の不二江に聞いた時、不二江は、

「其れだから私　云ふ事を聞いて、凝つとしてゐれば好い。私の云ふ通りに勉强さへしてゐれば好い。」

と云つた。だが今の小藤にはこの言葉ほど不安を感じさせるものはなかつた。斯う云はれゝば云はれるほど小藤は一層心がおちつかなかつた。斯う云つて聞かす師匠は、小藤の行く先きを照らしてくれるやうな何の光りも見せてはくれなくつて、何時も氷のやうに冷めたく默つてゐた。その自分に對して冷めたく默つてゐる師匠の眼から、小藤は兎ても自分のいゝ未來なぞをトふことは出來なかつた。小藤は師匠から、まだるこい藝を磨く話を聞かされたり、自分の至らない藝を叱られたりばかり爲てゐるのでは少しも自分の行先が見えないやうな氣がした。さうして一年經つても、まだこの家に閉ぢ籠められたぎりで、弟子の華江や咲子よりも小藤はおもしろい世間を知らなかつた。師匠に隨いて芝居へ行く華江や咲子が此家へ歸つて來ては折々派出な世間を話してくれるばかりで、小藤は嬰兒のやうに何にも知らなかつた。お爺さんも不二江も、小藤を決して外へ出さなかつた。稽古の師匠もこの家へ出て來て小藤に

物を數へた。小藤は稀に自宅に湯が出來ないで近所の洗湯へ行く日があると、其れを樂しみにして喜ぶほど、格子の外へも勝手には出られなかつた。

「其れはお師匠さんやお爺さんがあなたを大切にするからですよ。」

とみんなは小藤に云ふけれ共、小藤には其れが自分を大切にされることだとは思へなかつた。そうして華江や咲子が、氣儘に若い男たちとも戯談を云ひ合つて面白い日を暮らしてゐるのを羨しく思つた。

「この頃何所へ行つてもあなたの容貌の美いのが評判で、みんながお孃さんと話をしたがつて騒ぎですよ。」

と云ふやうな華江の話を小藤は胸を騒がしながら聞いてゐた。自分の眼の周圍にはすつかり金網が張つてあつて、どこの隙からも然うした世間を覗くことの出來ない自分を忌々しく考へたり、自分を一切外へは出すまいと壓へ付けてゐるお爺さんや師匠を疎ましく考へたりした。何時も氷のやうに冷めたく默つて何かを見詰めてゐるやうな師匠と、猥らな愛撫に目を失くしてゐる執拗なお爺さんと、この老夫婦の手に圍まれてゐる自分は、何時になつたら自分の思ふ儘な世間へ出る事が出來るのかと、小藤は今の境遇に若い心を猶更苛らつかせた。

小藤は幼少い時に兩親が失くなつて、祖父と二人で暮らしてゐた。そうして小藤が此家へ貰はれてきてからは、其の手切れの金で、祖父は千住の方の知邊に身を寄せて靜に過ごしてゐた。小藤は何彼につけてこの祖父を思ひ出した。そうして祖父と二人で百姓でもしながら一生を終つてしまひたいやうな無邪氣ない心に祖父を慕つて、涙をこぼす時があつた。小藤は、

「お祖父さんは何をしてゐるだらう。」

と今も其の人を思ひやりながら、火箸で灰を弄つてゐたが、煙草がのみたくなつたので彼方此方と煙草入れを探したが見當らなかつた。

「あつちへ置いて來たんだね。」

小藤は自分を叱るやうに云つて、舌打ちをした。師匠とお爺さんと、紫壇の長火鉢を間にして默然と向ひ合つてゐる茶の間の方へ、其の煙草入れを取りに行く氣にはなれなかつた。

「仕様がないね。」

小藤はまた自分を叱つて舌打ちをした。こんな時に女中を呼んで煙草入れを取りにやれば直ぐに自分が小言を云はれるのが知れてゐるので、何うしやうかと迷つた。あの陰氣な茶の間へ出て行くことは厭だし、煙草は頻りに飮みたかつた。其れでも暫らく我慢をしたがとう〱堪へられないで煙草入れを取りに出て行つた。

椽側を踏んで障子を開けると、煙草掃除をしてゐたお爺さんが此方を向いて、

「やつて來たな。」

と云つて笑つた。例のやうに不二江とお爺さんは小さな火鉢の前に向ひ合つてゐた。白髮を染めて、其れを半下地にして毛の先きを切つて前の方にばらつかせてゐる師匠は、その頭髮を横に傾げて、手を膝の上においてお爺さんの煙管掃除の手許を見守つてゐたが、小藤が入つてくると其方を見返つて、そうして珍らしいものでも見るやうに暫らく小藤の顏を眺めた。室の中は丁度幻のやうに、なんの陰翳もな

く、ぼうと一と色の薄暗さが漂つてゐた。黒地の縮緬にいつぱいに縫ひのある裲襠を引つかけてゐる不二江の姿は其の中に錦繪のやうに浮んでゐた。瞼は皺んでも大きく張つてゐる水晶のやうな眼、少し痘痕のあとの見える削つたやうな高い鼻、名人不二江と唄はれたこの面影は、老齢の皺の底にすつかり萎びてはゐるけれ共、舞臺で洗練された美しさは、僅な笑ひの表情にも強い印象の一點が何所かに刻まれた。不二江はお爺さんの掃除のできた煙管を取り上げて、鼻をすうと云はせながら煙草を詰めた。

小藤は火鉢の傍に寄つて自分の煙草入れを取り上げたけれ共、直ぐに出て行くことも出來なくて不二江の傍に坐つた。

「おい。お前を名古屋へ連れて行くとよ。」

とお爺さんが小藤の顔を見ながら云つた。小藤は其れを聞くと下を向いて「うん。」と首肯いたぎりで默つてゐた。

師匠がこの霜月に名古屋へ興行に行くと云ふ話は前から小藤は聞いてゐた。小藤はまだ一度も舞臺へは出た事はないけれ共、何か所作事を一とつ出しものにしてその時に連れて行かうと云ふ相談を師匠とお爺さんがしてゐた事があつた。其れで小藤は、其の話を聞くと自分は何を演るのだらうと心の中で考へてゐた。

「少し、確りしてやつて呉れなくちや可けないよ。おつかさんに恥を掻かせないやうに。好いかい。」

お爺さんは師匠の顔を見ながら笑つて云つたが、不二江は娘形になつた時のやうな仇氣ない態をその撫で肩のところに作つて、兎角う見すると云ふやうに首を左右に動かしながらぢつと火鉢の中の火を見

守つた儘で口を利かなかつた。お爺さんも其れぎりで默つたので小藤が立つて來やうとすると、不二江が、

「あの――」

と呼びとめた。

「あーた。お兼さんが來たら、鷺娘の地をよくやつて置いてお貰ひよ。」

不二江はまた銀の延べを取り上げながら小藤の方を見ないで云つたが、自分は其の儘立上つて煙草入れを下げながら寢床の敷いてある次ぎの室へ行つた。

「おい。これを持つて行きな。」

お爺さんは煙草盆を取つて其れを小藤の方へ差出した。小藤は其れを持つて不二江の枕許へ置いてくると、お爺さんは自分の傍へ小藤を手招ぎした。

「お前は、鷺娘をやるんだから確りしなくちやいけないよ。」

小藤はお爺さんの其の力の入つた聲に脅かされたやうに心配そうに眉を顰めた。お爺さんはそんな事を云ひながら、もう舞臺の上に立つた小藤の豐麗の姿をその頭に描いて嬉しそうな顏をしてゐた。そうして干涸らびきつた不二江のあの身體と、若やいだ血の生き〱と滿ちてゐる小藤の身體とを、お爺さんは例のやうに密かに心の中で比べながら、小藤の手を取つた。その掌を擦ると柔らかな皮膚の接觸が、お爺さんの頭の上から足の爪先までを戰はせてお爺さんはほんのりと醉つたやうな氣持になつた。小藤の若い命、――其れがお爺さんの枯れた命にも青春の響きを打つて、お爺さんは自分の身體がころ

〳〵と彈かれるやうであつた。

「おつかさんよりも奇麗だと云はれるんだぜ。おい。」

お爺さんは小藤の脊中を叩いて云つた。舞臺の上に立つても、その衣裳を透して、小藤のふつくりとした肉の白く柔らかい魅力をお爺さんは想像しながら、すつかり肉の衰へてしまつた不二江がその木彫りの面のやうな顔に鉛ばかりを白く塗る舞臺顔や、骨ばかりで組み立てられたやうな枯れきつた身體の型などを思ひ描くと、壓されるやうな潑溂とした肉の感覺を持つた小藤の方にお爺さんはずつと美しさを思はずにはゐられなかつた。

「若い奇麗なところをすつかり見物に見せるんだ。」

とお爺さんは云つて笑つた。お爺さんはふと、不二江の昔の艶麗な姿を思ひ忍んで何とも云へぬ果敢ない氣になつたが、其れは、小藤の手を再び取つてゐる内に消えてしまつた。お爺さんは不二江の爲に大きな身代も潰してしまひ、女房も子供も捨てゝ不二江と三十年近くも一所に暮らして來たのであつた。お爺さんの昔の粋な戀には、かうして女の手を取ると云ふやうな戯れた事もなかつた。

小藤はお爺さんの今の言葉が自分の情を唆つてくれるやうで嬉しかつた。それで口を窄めて微笑むと、小藤の眼の下には皺が出來て一層可愛らしい顔付になつた。小藤はお爺さんの肩に自分の頬をつけて甘えるやうにお爺さんの痩せた身體を押し動かした。

「こんだの芝居は大勢若い男がゐるから氣を付けなくつちやいけないよ。大事な藤、、こうに指でも差されるといけないからおれは附いて行くんだよ。」とお爺さんは小藤に身體を動かされながら云つた。

「指を差すつて何うするの。」
「斯うするのよ。」
お爺さんは小藤の頬を指で突いた。
「若い男がそんな事をしちやいけなくつても、おとつさんは構はないの。」
小藤が眼に笑ひを隱しながらお爺さんの横顔に自分の顔を付けるやうにして聞いた。
「あんな事を云やあがる。」
お爺さんは小藤を轉ばすやうにして長火鉢の傍へ押し付けた。小藤はその下になつて潰されるやうな息の中からくすくすと笑つてゐた。亂れた裾の下から赤い色がこぼれて、お爺さんの黒八丈の前垂れの上にもその色が縺れた。

三

その土地へ初めて行くのだからと云つて、お爺さんは不二江に說き付けて小藤の服裝を拵へさせた。近所の小間物屋に注文して、お爺さんの好きな赤い玉の指環も小藤の細い指に箝めさせるやうにした。不二江が然う云ふ數を面白くない顏をすると、
「これが今度貰つた娘で御座いますと云つて、紹介せなくつちやならない所もあるんだから、少しは當世らしい風もさせなくつちや可けねえやな。」
とお爺さんは師匠を制した。師匠はそれよりも自分の思ふ半分にも小藤が踊れないのが心にかゝつてゐ

た。不二江の娘の小藤の出し物と云つて、特に先方へも書き出してある其の養娘が、いくら難かしいものとは云つてもあんな拙い踊りやうでは呼び物にもならないと思つて屈托してゐた。それは全く自分の身にも拘はることであつた。何を苦しんで、あんな藝の育ちの惡るいものを養女にしたかと思はれるのも恥辱であつた。不二江はもう出立つ日が迫つて來た間際まで、火の出るやうに小藤に稽古を付けさせたが、それもこの頃ではすつかり抛つてしまつた。

小藤はよく泣きながら不二江の小言の前で稽古をしてゐた。自分の身體は鉛でも入つたやうに重く、足は吸ひ付いたやうに上らなくなつて、自分でも何う形を付けてゐるのか無感覺になるほど、小藤は苦しく立ちつゞけてゐた。

「おい。確りしなくちやいけないよ。」

お爺さんは小藤が一人で泣いてゐると、その後に來て大きな聲で云つた。

「何うせおつかさんの氣に入るやうには出來ねえに極つてゐるが、それを上手にやらせやうと思ふから、おつかさんも一生懸命なんだ。おつかさんの機嫌に逆らつちや可けない。何でもはい／＼と云つて置きなよ。」

お爺さんは又、その後では師匠を執り成した。

「どうせ然うお師匠さんの思ふ様には行くもんぢやないから、好い加減なところで固めて置きなさい。まあ綺麗なところで賣れゝば結構だ。」

お爺さんは、今更若いものを苛責めるやうに藝を强ひやうとする師匠の考へが、無意味でたまらなか

つた。

「少しは今の世間の事も考へなくちや可けねえ。お師匠さんはあんまり今の世間を知らなさ過ぎる。今の世間は綺麗に淺く渡つて行けばいゝんだ。何もそんなに實直で行くことはないよ。小藤だつて然うだ。今更ほんとうに仕込んで見たつて追ひ付くもんぢやねえ。器用に世間へ流して置けばそれでいゝんだ。それが俺らの手加減と云ふもんだ。考へてごらんなさい。何うせお師匠さんの本當の後繼ぎが出來るものぢやないんだから。」

お爺さんは少しでも激してくるとその顏をふら〳〵と左右に動かすのが癖だつた。そうして其の肩が四角に堅くなつて、其點にも興奮のあとの戰へを見せてゐた。今の若い女の心持が、少しも師匠の心に解めないと云ふことが、お爺さんには小癪なほどに腹立しかつた。

師匠にはお爺さんの其の言葉が一とつも氣に入らなかつた。今の世間は綺麗に淺く渡つて行けば好い世間かも知れなかつたが、師匠はそんな小利口でこの世間を渡つて來た人ではなかつた。自分だけではもつと眞劍にこの表面的な世間と戰つて、そうして浮いたり沈んだりして四五十年の生涯を苦しみ續けて送つて來た人であつた。他人は淺く器用に渡つて行く世間でも、師匠はどこまでも眞劍にこの世間を渡つて行かなくてはならないと考へてゐる人であつた。それと同時に養女の小藤も自分と同じやうに眞劍にこの世間を渡らせて行かなくてはならないのであつた。其れが一生藝によつて立つて行かうとする者の世間へ對する一とつの務めだと不二江は堅く信じてゐた。

だが不二江は、お爺さんから度々然う云ふ氣に入らない言葉を聞くと、默つて、たゞ口を閉ぢて小藤

への稽古も好い加減にしておいた。お爺さんの其の言葉が師匠のすべてを傷づけるやうに響いてくる時、師匠は唯寂しい心持でみんなの前へ默り果てた。今の若いものが、直きに僅な苦患にも涙をこぼす意氣地なさを、自分の昔に比べて冷嘲りながらも、師匠はもうそんな事も口にはしなかつた。然うして少しでも稽古が弛むと、直ぐと怠り勝ちになつて弟子の華江たちと他の話に心を騷がしてゐる小藤の樣子を師匠は遠くから冷めたく打守りながら、其れへの小言も云はなかつた。長い間苦しみぬいて自己を鍛へ上げて來た師匠の鐵のやうな意志は、一度一切を抛り出して堅く自分を閉ざして終ふと、その頑なゝ心は中々舊へは戻らなかつた。

お爺さんは斯うして不二江が默つてしまつたのを、小藤の爲に結句喜んでゐた。稽古の嚴しさが輕くなつてから、小藤は又元氣が出て、お爺さんの愛撫の手の中に自分から弄ばれるやうにして喧噪いでゐた。

「ねえ。華江さん。お爺さんは私に生命でもやると云つたの。あんなお爺さんの生命なんか貰つたつて仕樣がないねえ。」

鹽下地に元祿袖の上つ張りを着た華江が、師匠の化粧箱を掃除してゐる傍に立つて、小藤は後に居るお爺さんの方を見返りながら、わざと大きな聲で巫山戲るやうに云つた。然う云ふ時、お爺さんは着物の下前を引き摺りながら、片手で下腹を押へ〳〵、

「こいつめ。」

と云つて小藤を家中追ひ廻した。

四

名古屋の興行先きへ來てからは、お爺さんはまるで小藤の傍へも寄る事が出來なかつた。小藤は毎日師匠と一所に小屋へ行き、宿にゐれば始終師匠と同じ室に師匠に附添つてゐるので、お爺さんは師匠の目をぬすんで小藤を可愛がつてやる暇がなかつた。その頰を突いてやる機も見付け出す事が出來なくてお爺さんは夜も淋しい思ひをした。

お爺さんは晝はみんなと一所に樂屋へ行つて、小藤の鷺娘を舞臺裏から見物するのを樂しみにしてゐた。小藤は師匠の前で稽古をした時よりも、舞臺の方がずつと餘裕があつて立勝つて見えた。

「あれだけ大きく踊れりや結構だ。何うして、おつかさんそつくりと云ふところがあるぜ。藝と云ふものは不思議なもんだ。」

お爺さんは不二江がぶつつりとも其の舞臺に就いて口を利かないのを不平にしてゐた。不二江は好いとも惡るいとも云はなかつた。衣裳や鬘に目を通してやつたばかりで、その技藝の上では師匠は全く知らない顏をして過ごしてゐた。その默つてゐるのがお爺さんにはおもしろくなかつた。

「おい。賞めてやんねえよ。」

お爺さんが斯う勸めても不二江はやはり默つてゐた。不二江は賞めるどころではない。もつと小言を云ひ度い點ばかりが目に付いてゐるので、其れで何時も默つてゐるのであつた。其れでも小藤の鷺娘は評判が好くて、誰れもその美しいのを賞めそやしてゐた。

小藤は樂屋にゐても宿にゐても、不二江が相變らず苦い顔をして、唯ぢつと一とつ所に座つた儘で物も云はずにゐるのが切なかつた。華江はいつも一人で面白そうにしてゐた。樂屋にゐる時は黒衣を着たその裾の下から、一と筋赤い色がちらついてる姿で、きゆつと鬘下地に引き詰めて、甲斐々しく働いてゐた。華江はもう十年もこの師匠に附いてゐた。その十年の經驗で萬事を呑み込んで華江は一人で師匠の周りを切つて廻してゐた。

「お嬢さん。さあ參りませう。」

華江は朝も大層早くから小藤を誘ひ出して小屋へ行つた。鼻のすんなりとした赤い口許の締まつた、落した眉毛の痕から眼瞼の邊りのこんもりと高くなつた派出な顔立で、皮膚が綺麗にすべ〳〵と柔らかかつた。

「いつまでも恐い顔をしたお師匠さんの傍にゐるよりはさ、此邊でも見物がてら遊んで歩く方が氣が晴れまつさ。」

二人は長い袂を搖らつかせながら、みんなが珍らしそうに二人を見る賑やかな街を歩いて行つた。小藤は上品に、初心なお嬢樣氣質を見せた風で華江の後に隨いて歩いた。

「花雀さんのお宿はこゝらだなも。」

華江はこの頃覺えた名古屋辯を使つて、淋しい裏町へ小藤を引張つて行つた。薄黒い鳥居の見える、石の玉垣の前あたりまで來てから小藤は足をとめて、そんな所へ行くのは厭だと云ひ張つた。

「何故に？　あんたも花雀さんが好きだとお云ひあしたになも。」

「でも、こんな所を歩いてゐて、もし誰れかに見付かつて云ひ告けられたら叱られるから。いや〳〵。」

小藤は袖を掻き合はして急いで引つ返そうとした。

「まあ、そんな事恐がつて――苦界が片時ならかいなあ――だ。ほんとにお嬢さん、こわいんですか。」

「えゝ、こわいの。」

「そんなお嬢さんだから旦那に可愛がられるんでせう。およしなさいましよ。あんなお爺さん。花雀さんにでも可愛がられた方が餘つぽど増しぢやありませんか。」

「知らん〳〵。」

小藤は顔を眞つ赤にして、兩袖で耳を押へながら驅け出した。

「お嬢はん。もしえ、お嬢はん。」

華江はわざと大きな聲で呼びながら、自分もはた〳〵と驅けた。

「まあ華江さんたら。およしよ。」

小藤は足を止めると、息を切つた下から怒りながら云つた。

「人が見るのに。見つともない。厭になつてしまふね。」

「あなたが驅けるから私も驅けたんですわね。どろぼう〳〵と云つて追つかけやしまいし、人が見ても平氣ぢやありませんか。」

「早く樂屋へ行きませう。」

「今から行つたつて、まだ花雀さんは來てゐませんから。」

「別にあの人が當てぢやないさ。好いから早く行から。」

二人は又並んで、おとなしく歩いた。

小藤は花雀の事を思ひながら暫らく默つてゐた。昨日の晝間、舞臺裏から師匠の時姫を見てゐた時に、後から來て自分の眼を押へた人があつた。

「誰れ？　華江さん？　銀公かい。」

銀公なら厭だと思つて、引き斷るやうにその手を取つて放すと、其れが花雀だつた。

「誰れ？　華江さん？　銀公かい。」

花雀は小藤の云つた通りの口眞似をして、笑ひながら小藤の顏を見てゐた。二番目の狂言に出る若い手代の顏の扮へをして、羽二重で釣つてゐた。痩せた肩に、黑つぽい柔らかな褞袍の襟がするりと落ちかゝつてゐた。

小藤はそれを思ひ出した。その時の溫い指の感じが眼の周圍にぽつと射して來たやうであつた。小藤は思はずその美しい眼を瞬つた。

「何を考へ込んでゐらつしやる？　花雀さんのことでせう。」

「まあ、ほんまに好かん人だわ。華江さんは。」

「然う云へばね。」

華江が何を云ひ出したかと思つて小藤が聞いてると、男衆の銀公の事だつた。銀公はこの頃若い女房を貰つたばかりだのに、その女房を一人おいて別れて來た。銀公は此方に斯うしてゐても始終その女房

の事ばかりが氣になつて、毎日々々華江に端書を書いて貰ふと云ふことを華江は話してゐた。
「まるで正氣とは思はれないほど、女房さんのことばかり云つてますよ。涙をこぼすの、おどろくわねえ。」
「銀公が泣くの。」
「女房さんが戀ひしくなつて泣くんですよ。あなたにも一遍、銀さんの泣くところを見せて上げたい。だから宿の女中なんかにも始終調戯はれてゐるんですよ。毎晩遊びに出るんですつてね。」
「いやな銀公ね。」
二人はこんな事を云ひ合つて、やがて小屋の樂屋口を潜つた。

「おい華江さん。藤こうにあんまり惡るい智惠をつけたりしちや可けないよ。」
お爺さんは小藤と華江が一所に、何か笑ひ話でもしてゐる時には、直ぐに神經的にそれを咎めて華江に注意した。お爺さんは小藤を華江と一所にして置くのをよくないと考へた。こんな時を機に、華江が小藤にも自分の見て來たおもしろい世間を敎へて、その何にも知らない小藤の初心な眼を惡るい方に開かさせるだらうと想像すると、お爺さんは氣が氣でなかつた。
「藤こう。華江と一所にそこいらを歩いたりしちや可けないよ。お前はあんなものとは一所になれない身分なんだから、あんなものゝお調子に乘つちや可けない。いゝかい。」

そんな時にはお爺さんは態と師匠の前で小藤を窘めた。

「華江はどうして、いろんなものを食つてる奴だから、迂濶りして預けちや置かれねえ。こつちはまだ眞のお孃さんなんだから。」

お爺さんがそんな事を云つても、不二江は何時も默つて聞いてゐた。お爺さんの言葉に相槌も打たなかつた。宿にゐれば火鉢の傍に坐つて、不二江は靜に煙草をのみながら、皆のわさ〳〵と出たり入つたりしてゐるのを眺めてゐるばかりであつた。

「おい。お前たち。」

お爺さんは小藤と華江が一所にゐる時には、直ぐ聲をかけて二人の仲に割り込んできた。

五

花雀の話を華江から聞くのが小藤には樂しまれた。樂屋にゐても小藤はお爺さんの嚴しい監視で一と足も部屋から外へは出られなかつたから、花雀の部屋の樣子は華江からでも聞かなければ、小藤には思ひ察しる事も出來なかつた。

「花雀さんは本當にお孃さんがお氣に入つたんですと。」

華江が斯う云つても、小藤は其れを眞實に受けて聞くほどの心の熱も持たなかつたが、唯、その人の噂を華江から聞いてゐれば、小藤は胸が明るくなるやうな氣がした。花雀がつまらない役者だと聞きながら、其れでも小藤は、一座の中で何となくこの男に惹かされた。

今迄の芝居は五日の日限りで明日からは新奇に二の代りが出るので師匠は今日は一日宿にゐた。朝から曇つて午後からは時雨が時々ぱらついた。小藤は華江が花雀の宿へ行つて見やうと云つて勧めるけれ共、それも心が咎めて、つい一日宿にぐづ〳〵と暮らした。

「晩にでも、そつと。」

華江がこんな事を未練らしく小藤に囁くと、小藤は其れは聞かない振りをして、そうしてやがて二人で宿の湯に入りに行つた。

庭下駄で飛石を踏みながら、宿の番傘を翳して池を渡つて行くと、紅葉の赤い蔭から湯殿の煙りが濃く立ち騰つてゐた。痩せた華江が裾を上げて俯向きながら小藤よりも先きに硝子戸を開けて中に入つた。今日はおばこに結んでゐるので額際が意氣に見える。小藤は自分だけは暫らく外にゐて、霜に素枯れた僅に咲いてゐる足許の黄色い小菊の花を眺めてゐた。女中が手拭を髪の上にのせて風呂場の横で水を汲んでゐたが、小藤を見ると愛想笑ひをした。

中では華江がもう湯に浸かつてゐた。

「おゝ寒――」

斯う云つた聲が湯氣に包まれてゐた。

「あの人は大層いゝ家の息子さんだつたのが、道樂で弟子になつて、あんな碌でもない役者をするやうになつたんですと。」

誰れの噂をしてゐるのかと思つたら、其れは花雀の弟子の操の話であつた。

小藤は默つて湯を流してゐたが、花雀があんまり好い役者ではないと云ふのが今も寂しかつた。お爺さんが何時も花雀のことを大根だと云つて嘲笑つてゐる言葉を思ひ出すと、小藤はその人と口を利くのも自分が安つぽい氣がしてくる。其れにもつと花雀を厭に思はせるのは、お爺さんが花雀のことを「銀張りの縁起物」見たいな奴だと云つた事であつた。

「いやに生つ白くつて、ぶつきらぼうで、藝に味も素つ氣も無えや。」

其れで小藤の戀は三文の價打もなくなつて、情が一層彈まなくなつた。

小藤は藝のない男の事を考へてゐると、今日の時雨日のやうに無暗と寂しくなつてきた。もう其樣人の事は思ひ捨てやうと考へて、わざと、不二江と同じやうに東京から加はつた×××と云ふ一流の役者や、その弟子たちの事を一人々々思ひ浮べて見ても、藝の立派な、好い役者の中には小藤の思ひの誘はれるやうな好いた人はやつぱり一人も見當らなかつた。

「華江さんは花雀さんが好きね。何うしたと云ふの。」

小藤は華江がひどく花雀に夢中になつてゐる事を思ふと、ふと自分の胸が艶つぽくなつた。

「ちよいと遊んで見たい樣な人だからでさね。お孃さんのやうな初心な方にはそんな味は分らないんでせう。」

華江が冷かしながら笑つた。

「あゝ、分らない。」

急に小藤は嬉しくなつた。自分の身體が誰れかの掌に載つかつて、その儘ころ〳〵と弄ばれるやうな

心地の快い面白さと嬉しさとが漲つてきた。小藤は湯を出る時に華江の裸の脊中を平手でぴしやりと打つて笑つた。
「まあ、好かないお嬢さん。」
　華江が云つてると、
「又、花雀さんの話をしてますね。誰れが岡ぼなんです。」
と窓の外から銀公が平つたい顔を出しながら聲をかけた。
「銀さん。いけないよ。覗いちや。」
「華江さん。又、端書を書いてくれませんかね。」
「おかみさんの所へかい。」
「えゝ。」
　銀公は硝子戸へぴたりと顔を押し付けながら云つた。
「内職をして稼いで待つてゐておくれよ。心變りをしては厭だよ――端書の文句は定まつてるぢやないか。幾枚書くのさ。」
「然うぢやありませんよ。今度は歸る日を然う云つてやるんですから。」
「まだ、何時歸るんだか定まつてもしないのに。」
　小藤も湯の中で笑つた。
「おかみさん孝行だねえ。」

二人が賑やかに笑つて、聲の響きの消えない内に、硝子戸の外でお爺さんの聲が聞こえた。

「おい。なんだ。そんな所に立つてるもんぢやねえ。おい。銀公。」

お爺さんは甚く怒つてゐるやうに戰える聲に力を入れて、獸でも逐ふやうにどん、どん、と下駄で土を蹴つてゐた。

「おい。お前たち。呆れて物が云へないな。」

やがて硝子戸を開けて入つて來たお爺さんは二人を見ると直ぐに怒鳴つた。

「あんなものを相手にして、お前たちは何にも知らねえのかい。あれは色氣狂ひだ。好い氣になつてあんなものを相手にしてゐると何を爲るか分らねえ。圖に乘つて何をするか分らねえんだ。あれは馬鹿なんだから。」

湯氣が白粉の匂ひを含んでお爺さんの顏に纏つてくる中で、お爺さんは癇を起しながら怒鳴りつゞけた。

「何を云つてるの。銀さんは華江さんのところへ端書を頼みに來たんですよ。」

「それなら宜いがね。今聞いて來たことがあるから、俺が嚴しく云ふんだ。もう一切、小屋の歸りなんぞにあんなものと一所に歸つて來たりしちや可けないよ。いゝかい。」

お爺さんは、風呂の中から此方を覗いてゐる目の大きな小藤の例の顏を見ると、心が安まつてきた。

「彼奴が何をするか分らねえ。みんなに彼奴は調戲つたやうな事はなかつたかい。」

「えゝ、別に。」

華江が低い聲で返事をした。

「藤こう、お前にもなんにも惡るい事はしなかつたかい。」

「何にも爲やしませんよ。銀さんが何うしたつて云ふの。銀さんこそ好い面の皮だわね。可哀想に。」

「其れなら好いんだよ。お前は何にも知らねえんだから。」

お爺さんはさつき宿の主婦から銀公の話を聞いた時、直ぐに若い女たちの上を思つた。貰ひ立ての女房が戀しくつて晝も夜も其ればかりを云ひ續けて涙をこぼしたりしてゐると云ふ銀公の甲斐性なしを怒るよりも、然う云ふ色に氣狂い染みた男が、若い女に何を爲るか分らないと云ふ心配の方が先きに立つた。銀公は東京へ逃げて歸るやうな事があるかも知れないと云つて、主婦はお爺さんに注意したけれ共、お爺さんは此方から今夜にも銀公を東京へ歸して了はうと考へた。

「若い女が二人もゐるんだから、どんな馬鹿をされても仕方がない。彼れ等にもよく云つて置かなきや。」

お爺さんは斯う思つて急に二人を探したが、二人は離れにも見えなかつた。

「彼奴が何をするか分らねえ。」

お爺さんは、小藤がもうすつかり銀公に唆かされてるやうな氣がして、むら〳〵とした。小藤の眼の猥らな笑ひは、誰れに向けても漏らすやうに思はれた。お爺さんの記憶の中から、淫奔な小藤のさまざまな媚びた姿態が絶えず現はれてきて、お爺さんの胸は燃かれたやうにちりつとした。みんなが夜る遲く小屋から歸つてくる時、可愛らしい艶麗な小藤の後ろから、平つたい口の大きな鈍な顏をした銀公が黑衣の兩袖を突つ張つて隨いてくる馬鹿氣た樣子が、お爺さんの目にあり〳〵と映つた。お爺さんは少

つとの間も猶豫をしてはゐられないやうに焦燥つて小藤を探し歩いた。――

「銀公はもう歸して了ふんだ。」

お爺さんはそろ〳〵と外に出て行きながら呟いてゐた。

「旦那のあの怒りやうと云つたら、あれも正氣ぢやありませんね。たしかに。」

華江は「色氣狂ひはそこにも一人居る。」と云はうと思つたが、お爺さんが外に居て二人の様子を聞いてるかも知れないと考へて口を噤んだ。

だが小藤は、お爺さんが可哀想に思はれたので華江の言葉の後には付かなかつた。血走つたやうな今のお爺さんの窪んだ眼を考へると、小藤は悲しくなつた。華江は、銀さんは女房さんが戀しいばかりで色氣狂ひでも何でもないと、外へ聞こえよがしに大きな聲で繰り返してゐた。

「でも、何でも、あなたは旦那が好いんだから不思議ですね。」

華江は暫らく默つてゐた後で、斯う云つた。小藤は其れに返事をするのが厭になつたので、白粉もつけずに、髪をきゆつと掻き上げながら上にあがつた。

「もうおあがり。」

「お先き。」

小藤は湯上りを引つ掛けて外に出ると、番傘をさしたお爺さんが井戸端のところに立つてゐた。右の手を懷中に差し入れて、革の止め帶を内から押へながら、庭下駄から引き摺るやうに着物の上前を下げた儘で、小藤の出て來た方へ寄つてきた。

「待つてゐたの。」
「好いから早く來ねえ。」
お爺さんは小藤の湯熱りのしてゐる手を取つて自分の傘の中へ入れてやつた。
「お前はなんだつて華江なんぞと花雀の話をしてゐるんだ。外聞ねえ。」
「私がしたんぢやないけれど、華江さんの方で爲りや仕方がない。」
「だから可けねえと云ふんだ。もつと氣の利いた男の噂でもしねえ。なんだ。あんな下らない男の噂をしやがつて。」
お爺さんは肱を張つて小藤の手を引つ張つて行つた。せか〱と、足許の危ない後に隨いて、小藤は温和しく靜に歩いた。池の彼方の燈籠の灯がぽつと紅に浮いてゐる程、暗い夕暮れになつた。

六

二の代りが三日間で濟んで、一座は今日が打ち止めの日であつた。樂屋では忙しそうに部屋々々の男衆たちが荷を纏めたり、廊下を往つたり來たりしてゐた。その晩直ぐに大阪へ立つ人や、美濃へ廻る人などがあつた。
「えらい失禮をいたしました。何れ東京へ行つた節にはお立寄りいたします。」
暗い廊下で、小藤のよく見覺えてない人に斯う云つて挨拶されて、小藤は急に寂しい心持になつた。
小藤は窓の障子を開けて、この一週間ほど目に馴染んだ稲荷の祠を眺めた。赤く塗つた小さな玉垣に

はいろ〳〵な役者の名が記してあつた。小藤はこの部屋にゐる間に退屈をすると、障子を開けてはその名を讀んだ――雨は寒く風に荒れながら祠の廻りに降つてゐた。雪にでもなりさうに、氷つた暗い空を仰ぐと、白い鳥が一羽雨に濡れながら飛んで行つた。

部屋の中は華江がもう大方片付けて終つて、師匠の鏡臺の上もがらんと淋しい風情をしてゐた。小藤が洒落に着た黑衣も綺麗に疊んで、荷の上に乘つてゐた。窓の敷居が朽ちて、壁の暗い煤けた部屋を小藤の名殘りに照らすやうに、灯が今日は早く點いてゐた。小藤は胸の底から輕く涙を絞られるやうに、その部屋をなつかしく眺めた。華江がちよいと居なかつた間の、さつきのお爺さんの執拗い愛撫が、今も堪らない苦しさを小藤の感覺の上に殘してゐて、小藤は一層陰欝になつてゐた。もう沈み切つた暗い心持――小藤は涙が落ちて來たので其れを袂で拭いたが、其れは人に見られるのも極りが惡るいと思つて、あわてゝ煙管を取り上げた。

「東京へも歸りたくない。」

小藤はもつと、旅から旅へ歩いて行つて見たかつた。師匠にもお爺さんにも離れて、たつた一人で皆の行く方へ隨いて行つて見たかつた。一週間の旅の間に、小藤が遠くから眺めた一座の人たちの生活は、みんな華やかに面白さうで、自分よりはもつと好き自由に見えた。其の人たちの歩いて行く先きは非常に明るく、澤山に派出な事があるやうに思はれて、小藤は誰れと云ふ事もなく、今別れて行く人たちの明日の日に憧れた。師匠夫婦に隨いて暗いところへ引つ返して行く自分を思ふと、小藤は陰氣になつた

「お藤さん。ちよいと。」

入り口で華江の呼ぶ聲がしたので立つて行くと、戸の傍に花雀の弟子の操と二人で華江が話しながら立つてゐた。

「もうこれでお別れでござんすね。」

操が膝のところに手を置いて脊の高い小腰を屈めながら小藤に云つた。

「えゝ。」

小藤は目元に可愛らしいしほを作つて、唯微笑した儘で手を束ねながら其所に暫らく立つてゐた。

「然う。私も行きたいわね。」

華江が今の話の續きから、何か考へながら操に云ふと、

「構はないから入らつしやいな。師匠の手だけで行くんですから、私が師匠に話して上げますわ。女形がなくつて困つてゐるんですから、丁度好いでせう。新派をやるんですつてね。田舍だから面白いでせう。」

「そうして何日からなの。」

「明後日初日が出るんですつてね。此所から近いんですつてね。新派だからあなたなんかはきつと好いでせう。何方にしたつて一人ぐらゐは構はないんですから。」

操が優しい表情をその眼に保たせながら、一々身體を振つて話してゐた。小藤は何の事なのだらうと思つて、その話に聞き入つてゐた。

「何うせ私はもうお師匠さんの方の身體が明くんですからね。お師匠さんの方は構はないわ。私、行き

たいわねえ。一寸儲かるでせう。お小使が出來るわねえ。」
「えゝ其れはね。眞逆、只使ひつて事はありませんわね。ほんとに一寸儲けに入らつしやいな。」
「出し物はなんなの。」
「乳兄弟ですつてね。其れで妹を演る人がゐないんでね、困つてゐるやうですよ。だから丁度好いんですわね。あなたが行ければね。」
「君江を花雀さんがやるんでせう。」
「えゝ。まあ、然うでせうね。」
操は誰れか來たやうに思つて、振返ると師匠の花雀が半七の扮裝の儘で此方へ來た。
「へん。お邪魔を申します。」
花雀は紅のついた小さな口から、太い聲で斯う云つて通り過ぎて行つた。少し奥のところに小藤の立つてゐる姿を見付けると、行き過ぎてから足を止めて暗ひ中から小藤をぢつと見て笑いながら會釋をした。
「さあ。さあ。」
操は急いで師匠の湯呑を取りに部屋へ引つ返して行つた。
「ほんとに嬉し。」
華江は小藤に云ひながら、溢れてくる笑ひが我慢ができなかつた。
「私、行かして貰ふ。歸りがけの一と仕事でね。大しやれだわ。其れにね、花雀さんとなら只だつて構

はない。」

華江は胸を叩いて云つた。

「芝居をやるの。」

「えゝ、此所から近いんですつて、在ですつてさ。五日やるんだつて。何かお祭りがあるんでね。其所から買ひに來たんですつて。新派のやれる安手なところと云ふんでせう。」

「おつかさんが宜いつて云ふかしら。」

「可けないつたつて構やしない。此所が濟めば此方の身體ですもの。斯うしてゐりや給金を貰ふから、眞逆そんな不義理も出來ないけれども、身體が明けば私の勝手ですさ。お孃さんもおいでなさいな。」

小藤は華江が羨しくてならなかつた。操が湯呑みを持つて、急いで通つて行つた。

「おつかさんのお闘を見ておかうと思つて忘れちやつた。」

小藤は上草履を突つかけながら廊下に出た。華江を連れて舞臺裏まで行かうとすると、華江は花雀のゐる花道の揚幕の方へ行つて見やうと云つて小藤を奈落の方へ引つ張つた。

「お爺さんに見られると大變だから。」

小藤は云ひながら華江に片手を押へられて、自分も其の儘奈落へ下りて行つた。身體を屈めながら眞つ暗な底を通つて、又梯子を上ると、急に明るい電氣の光りが頭の上から射して來た。そこに花雀が煙草を吸ひながら腰をかけてゐた。

「誰れかと思ふたら。」

花雀が後にゐる操を見ながら云つて笑つた。

「おゝ。しんど。」

三勝の扮裝をした吉之助が、衣裳の裾を高々と引き上げながら直ぐに二人の後から上つて來た。小藤の前を、

「ごめん。」

と云つて通つてから、紅を射した眼を流し目にして、

「不二江さんのお娘子さん。」

と云つて小藤の顔を凝つと眺めた。

「容貌が美うて、おとなしうて、藝か好うて。」

ほんとに好い娘さんだと吉之助は花雀に云つてゐた。花雀は其れを聞くと、默つて小藤の方を見返りながら微笑した。

「行きませうよ。」

小藤は華江を促しながら「左樣なら。」と云つて梯子を下りた。華江は後から隨いて來ないので、小藤は一人で暗い奈落の底を通つて舊へ戻つて來た。もう酒屋の舞臺を見るのも厭になつて、小藤はぼんやりと部屋へ歸つてくると、

「おい。何所へ行つてるんだい。」

とお爺さんが部屋の中から怒鳴つた。

「何故然う、そわ〳〵してるんだよ。少し落着いてゐないかい。」

お爺さんの其の言葉が小藤は何時になく腹が立つて、物も云はずに窓の障子をがらりと開けて雨の降る外を眺めてゐた。雨に交ぢつて木の葉が祠の上に吹き付けてきた。ぞつと戰えるやうに雨の風が小藤の身體に染みた。

「おい。寒いぢやねえか。」

小藤は然う云はれて又ぴしやりと障子を閉めた。

「何を不機嫌な顔をしてるんだ。ひとの氣も知らねえで。」

お爺さんは小聲で云ひながら、かち〳〵と戰える手の先きで火鉢の火を弄つてゐた。

「華江につまらない智恵なんぞを付けられちや可けねえぜ。」

「なんにも知りやしないのに。」

小藤は樂屋の風呂で顔でも洗つて來やうと思つて鏡の上に掛つてゐた手拭を取つた。

「華江さんは自分の勝手で芝居を打ちに行くんだから。」

「何を。」

お爺さんが聞き咎めて顔を差し出した。

「華江さんがね。」

小藤は斯う云つて聲を張り上げると、涙が突つかけてきたので、其れを呑みこんでから

「花雀さんの一座へ入つて田舎へ行くんですとさ。新派をやるんだつて。」

「へえ。自分で定めたのかい。」
「何うだか、そんな事は知らないけれど、華江さんは氣儘が出來て好いと思つた。何所へでも芝居をしに行かれて。」
「其れが羨しいのかい。」
「私なんか何時になつたら然うなれるんだか分りやしない。」
「然う云ふ分らない事を云ふ――だからお前は可けねえと云ふんだ。」
　お爺さんは氣が昂ぶつて來たので、聲ばかり戰えて口が利けなくなつた。少しも自分の身分を考へることの出來ない小藤を、お爺さんは打ちのめして遣り度い程に腹が立つた。
「能く考へて見ねえ。お前と華江と同じになるのか――おい。お前は兎に角痩せても枯れても不二江の娘だぜ。あんな花雀見たいなものと田舍の在を安芝居を打つて歩かれるものぢやねえ。お前には立派な株があるんだ。其りよ、無暗に安い給金でお前の身體が曝されるもんぢやねえ。芝居が演たけりや食傷するほど遣りねえ。お前が厭だと云つても遊んで置かせやしねえから。それももう少しの辛抱さ。いまに泣き度い程芝居を演らなくちやならない様になるんだ。」
「そんな事を考へてるんぢやない。」
　小藤は斯う思つたけれ共、言葉には出さなかつた。
　お爺さんの云ふやうに、「不二江の娘だ」と云はれる事が小藤には窮屈でたまらなかつた。小藤は何所までも自分は自分で立つて行きたかつた。然う云ふ卑小な名目に縛られて、壓し付けられてゐるよりは、

小藤も華江と同じやうに、自分の意志の儘に爲たい事を爲て過ごして行きたいと思つた。

「何所にも廣い世間がある。」

小藤は今度の旅で、一層それがよく解つたと思つた。

「何を考へてゐるんだよ。」

お爺さんは小藤が默つてゐるので然う云つて聞いた。

無邪氣な初心な性質だと思つて「形ばかり大きくつても小供のやうな氣でゐやがる。」と云つて可愛がつてゐたお爺さんは、小藤が其の小供つぽさをだん／＼に失くして、そうして兎角自分の事ばかりを考へやうとしてゐる其の他人らしい心持を見せるのが味氣なく思はれた。其れも華江が惡るい智惠を付けて、小藤を唆かすからだとお爺さんは華江を憎んだ。

「華江と云ふ女は、何か彼にか他人を掻き廻してゐる女だ。」

とお爺さんは大きな聲で云つた。

「なにも華江さんの知つた事ぢやありませんから。」

「其れぢや何うしたと云ふんだい。花雀と一所に芝居が演りてえのか。」

小藤の眼から涙がぼろ／＼と落ちた。お爺さんは小藤のその涙を見ると、感情が柔らかになつて、胸がすつとした。

「お前は世間見ずだから、何でも俺たちの云ふ事を聞いてゐれば好いんだ。おれもお師匠さんも年を老つてるんだからお前一人が頼りだ。お師匠さんは氣むづかしい事は云つても、矢つ張りお前ばかりを當

てにしてゐるんだ。お前も其れを考へたら、輕忽な事は出來ねえんだよ。」

小藤はお爺さんのその言葉が、嘘のやうな氣がして心では嘲けつてゐた。殊に自分ばかりを見詰めてゐる師匠の冷めたい心は、此方でこそ頼りも少なかつた。小藤はお爺さんの猥らな愛撫を心に浮べると、一途に厭はしくなつて部屋を出た。

「何時までこの人の玩弄になつてゐるものか。――」

ふと振返るとお爺さんは淋しそうな顔をして俯向いてゐた。

七

明日の一番で東京に歸ることに定めて、師匠は一二軒別れの挨拶に一人で出て行つた。お爺さんは小藤を連れて熱田の社へ參詣に行かうと勸めたけれ共、小藤は頭が痛いと云つて斷つた。お爺さんが心を殘しながら出て行つてしまつてから、小藤は嘘ではなく頭痛のする身體を横にして、靜に日の射す離れに寐てゐると、華江が歸つて來た。

華江は一人花雀の一座の中に交ぢつてその興行に加はる事に師匠から許しが出たので、今朝も早くから花雀の宿へ稽古に行つた。眉毛を黛で薄く描いて、髮も束髮に結んで奇麗に化粧をしてゐる華江は、今初めて其の姿を見た小藤の目にひどく美しく上品に映つた。小藤は華江に起されながら其の姿をぢつと眺めた。

「何を寐てなんかゐらつしやるの。この忙しいのに。」

「華江さんとは違ふさ。私は明日東京へ歸るんだもの。」

華江は鏡臺の前に行つて顏を映して見てから、そこで顏を直して又小藤の傍へ戻つて來た。

「ほんとに奇麗な顏をして。誰れだつて見染めさうね。」

「ありがたう。」

華江は嬉しさうに、一人で微笑んでゐた。小藤は「花雀さんの話ならしないでくれ。」と斷つてゐながら、華江を見ると宿での稽古の話が聞きたかつた。

「もう餘つ程稽古をしたの。」

「えゝ。乳女の家のところだけね。造作はないの。花雀さんはこんな物の方が好いんですよ。ずつと仕舞ひまで臺詞の受け渡しだけしてきたんですよ。」

華江は云ひながら、自分の荷物を纏めてゐた。鞄が一とつに小さな袋が一とつと、洋傘もそこに揃へておいた。

「晩に出立つんですつて。ですから私は兎に角荷物だけ置いて來ませう。お師匠さんには又夕方でも御挨拶に來ることにして。」

華江がそわついてもう出て行かうとして居るのが小藤には物足りなかつた。花雀の宿が頻りになつかしくなつて、小藤は華江と一所に行つて見たくもあつた。

「華江さん。送つて行つて上げやうか。」

「ほんとですか。其れなら入らつしやいな。實は花雀さんにあなたを連れて來るやうに賴まれて來たん

ですよ。でもあなたは行かないだらうと思つて默つてゐたんです。お出でになりますか。」

「然うね。」

小藤は然う聞くと躊躇はれた。其れに髮もこわれて居た。二人の留守に無斷で外に出ることも思ひ切り兼ねて小藤はぐづ〳〵としてゐた。

「さあ。早くさ。どつちともお決めなさらんか。」

小藤は花雀の宿へ行くのに、昨日まで通つてゐた芝居小屋の前を通ることを考へた時に、ふと氣が進んで急いで仕度をした。

「私も今日はこの土地にお別れだから、少しは外を歩いて見たい。ねえ華江さん。」

「ほんとに然うですとも。」

華江は鞄の傍に坐り直して小藤の髮を結ふのを待つてゐた。

「お藤さんも行かれると好いんですのにねえ。割合にお給金が好くつて私もびつくりしたんですよ。東京へ歸つて苦勞するのも詰らないから、ずつと花雀さんに隨いて京都の方でお正月でもしやうか知ら。」

華江が考へながら云つた。小藤は自分も髮を束髮にして着物を代へて華江と一所に出た。華江に浮かされたやうな捨鉢な氣持になつて、小藤は暖な冬の日を眩しく仰ぎながら華江と歩いた。華江は鞄を持ち、小藤は袋を持つてやつた。

「私もこの儘何所かへ行つてしまひ度い。」

「何所へ？」

「そんな事は自分にも分らない。」

二人が默つてから、

「ほんとにお師匠さんは嚴ましいから、若いものは居付きませんね。今までだつて隨分養女を世話した人もあつたし、二三人も彼家に貰はれて來たんだけれど、みんな出て行きましたよ。私も最初はそんな話があつたけれ共、旦那が癖が惡るいと云ふ事を聞いて恐身を震つてしまつたんですよ。」

小藤は華江の言葉が氣に觸つたので何とも云はなかつた。

「この人は何時でも餘計な事を云ふ。そうしてはおつかさんに何でも能くべら〳〵と云ひつける人だ。」

小藤は華江の端無い心を卑しみながら斯う思つた。小藤とお爺さんとの間を華江が事々しく師匠に告げた事があつたが、師匠は其れを取り合はなかつた事を小藤は思ひ出してゐた。華江はまだ一人で師匠が年を老るほど一層小言ばかり嚴ましくなつて煩さい事などを話し續けてゐた。

「お師匠さんも豪いかも知れないけれ共、もう時勢後れでね。今の世の中はもつと新らしくなくつちや駄目だわ。時代が全で違ふんですもの。お師匠さんに附いてばかり居ると私も後に殘されるから。迂濶りしちやゐられない。」

「華江さんはこんな事を考へてゐる。」

と小藤は思つた。師匠を裏切つて行く華江の心を、小藤は憎まないではゐられない樣な氣がした。

小藤は其れで自分のこの間からの考へを、もう一度自分で繰り返して考へて見た。そうして自分は華江さんのやうな襟元に付く根性で師匠やお爺さんと離れて行かうと思つてゐるのではないと云ふ事が、

自分の心にはつきりと解つて小藤は心を安めた。小藤の心には自分だけを好くしやうと考へてゐる樣な然うした利己的な片影は少しもなかつた。だが小藤は師匠の藝にも服してゐたし、師匠の大きな心も信んでゐたし、其れからお爺さんの愛にも喜びを持つてゐるのに、其れにも拘はらず、師匠やお爺さんの手を離れたいと考へるのは、やつぱり華江のやうに卑しい心があるからではないかと思ひ繰り返したが、小藤は自分で、何うしても自分の考へは正しいやうに思はれた。自分が、今直ぐに師匠の傍から離れて行く事があつても、其れは華江さんの輕薄な考へと同じではないと、小藤は堅く思つた。形式は離れて行つても、自分の心は何時までも師匠やお爺さんを思ひ慕ふに違ひないと、藤には考へられた。

「それ。もう來ましたわ。」

華江が云つて宿へ入つて行つた。小藤は此所まで來ると、内へ入る氣もしなかつたが、無理に華江に引き上げられて花雀の部屋へ通された。

金縁の眼鏡をかけた花雀が、何にも爲ずに火鉢のところに坐つてゐた。膝の前には長い手紙が長々と散らばつてゐた。隣りの室には三四人集つてゐるやうに賑やかな男の聲がした。

「おや。何う云ふ譯で。」

花雀が懷手をした儘で小藤を見ながら笑つた。荒い紫の棒縞のお召の褞袍を花雀は引つかけてゐた。

「無理に引つ張つて來ましたよ。」

華江は花雀の傍に坐つて、花雀の卷煙草入れから煙草を一本拔き出して云つた。

「お入りなさいまし。藤さん。」

花雀が手を叩くと隣室から眞つ赤な笑い顔をした操が出て來た。花雀は其れに茶を取りにやつて、
「碌におつかさんにも御挨拶もしませんで、えらい失禮をいたしました。東京へは何時お立ちです。」
「えゝ。明日の朝。」
小藤は赤くなつて云つた。
「これは大阪から來た手紙ね。藝者でせう。」
華江は手紙を取り上げて、片手で卷煙草の灰を落しながら、片手で手紙をたぐり〳〵讀んでゐると、花雀は其れを突然に引つ奪つた。
「まだそれほどの仲ぢやおまへん。お返し。――」
華江は其れが聞くとついと立つて隣りの室へ行つた。
「仕樣のない阿婆摺れで態き入りますわ。あの女は。」
花雀が小藤を見て冷笑した。
「あんた、もつと此方へお寄り。御悠くりお遊びなさいな。」
「でも、遲くなると叱られますから。」
「初心らしい事を云ひなはるな。あんたお幾歲。」
「えゝ？」
小藤は默つて微笑した。
「その初心らしいところが價打ですわ。私はさつきあんたを好いてますよつて、何卒御遠慮なう此方へ。」

花雀が眞つ白な腕を延ばして、小藤の手を取つてぐいと引き寄せたが、小藤は其れを振り拂つて、强情に傍へ行かなかつた。

「きつい情無しさんや。」

花雀が、花片のやうな口許に笑ひを含んで云つた。

「左樣なら、又。」

小藤は急に立上つて廊下に出た。階下へおりて薄暗い宿の帳場まで來ると、後から華江が追つて來た。

「お歸んなさるの。お師匠さんに宜しく。」

小藤は其れを見返りもしないで急いで其家を出た。

宿へ歸ると、先刻戻つて來た師匠の不二江が一人で明日の荷を拵へてゐた。小藤を見ても、師匠は何所へ行つたとも聞かなかつた。

「華江さんが自分の荷物を持つて行きました。」

「然うかい。」

不二江は默つて、小さな包みを袋の中に入れてゐた。

夕方華江が來た時に、小藤が一所に花雀の宿へ行つた事を、つい其の話の間に出したので、小藤は後になつてお爺さんにひどく怒られた。

「仕樣のねえ奴だ。何うしたと云ふんだい。」

お爺さんは、其れを不二江に知らせまいとする樣に、深い注意をしながら小藤に怒つたが、不二江は其の話を聞き知つて、默つて小藤の顏を見ながら笑つてゐた。

「花雀の何所がいゝんだい。馬鹿め。」

小藤はいくらでもお爺さんの怒りに對して耐える事が出來た。小藤は執念く物を云になかつた。

「花雀も又、仕樣のない女つたらしだからなあ。華江の奴が好い氣になりやあがつて。彼女はもう首にしちまはなくつちや可けねえ。何を仕出來すか知れたもんぢやねえ。をい。お前も確りしなくちや駄目だぜ。」

小藤は何時までも首を垂れて默つてゐた。

八

停車場の待合室から、霜の深い朝の町を眺めて小藤が寒さうに襟卷に首を埋めてゐると、華江がふつと入つて來た。

「一所になりましたわね。私たちも今朝彼方へ行くんですの。花雀さんと二人ぎりですけれどね。」

小藤は立ちもしずに、華江の樣子を眺めてゐると、華江は傍にゐる師匠の不二江を見付けて、其の方へ挨拶に行つた。

「又お目にかゝれて、ほんとに宜う御坐いました。」

華江が大きな聲で云つてるのが聞こえた。其所へお爺さんが外から入つて來たが、お爺さんは華江には挨拶もしないでゐた。華江は又、小藤の傍に來て、其所に腰をかけた。

「昨夜はあなたのお蔭で叱られた。」

小藤は笑ひながら華江に云ふと、

「然う。彼所へ來た事で？　其れは惡るいことをしましたわね。あなたも父叱られて默つてゐるから、始終叱られるんですわ。少しは此方からも云つてやらなきや。」

華江は、毛のショールに括まつて、其の上に大きなマントで身體を包んでゐる師匠の方を暫と見て小聲で云つた。

「花雀さんも然う云つてましたよ。あんなにして居て何うなるんだらうつて。あなたの事を然う云つてましたよ。」

華江はふと待合室の外に花雀の姿を見付けて、其方へ出て行つたが何時までも二人はこの室へ入つて來なかつた。

「何所にだつて廣い世間はある。何時だつて廣い世間へ出て行かれる。私はもつと大きな世間へ出て行くさ。」

小藤は花雀や華江を侮蔑しながら心で繰り返してゐた。お爺さんや師匠と一所に東京へ歸つて行くことが小藤にはもう鬱陶しくもなかつた。

「おい。もう行くんだぜ。」

お爺さんが聲をかけたので小藤は不二江の後から隨いて出た。花雀や華江の姿はそこいらに見えなかつた。



巫女殺し

上司小劍

一

其の年は、陽氣が後れてゐたと見えて、十月になつても、まだ帷子の欲しい日があつた。土用前後の曇り日のやうに蒸し暑くて、頭が重く焦と氣の狂ひさうな日もあつた。

『いつもなら、もう松茸がそろ〳〵出る時分やのになア。』と、社司の桑原眞弓は朝の供儀に來た序に、社務所を兼ねた神樂師の溜へ入つて、一服やりながら言つた。

『さいや、また松茸の時節になる。』と、神樂師の和三郎は、よれ〳〵になつた萌黄の直垂の襟を合はして、紐を結び直しつゝ言つた。くた〳〵になつた烏帽子は脱いで、傍の八足の上に載せてある。

巫女の春榮は、何を思ひ出してか、下を向いてくす〳〵笑つてゐる。鼠色に

かゝつた白衣のところ〳〵紋のやうに汚點のあるのを着て、緋の袴の色の褪せたのを穿いてゐる。
『春さん、何んぞ面白い話でも聽かしてんか。』と、眞弓は和三郎の鉈豆の煙管でまた一服吸ひ付けた。菖蒲の濃い烟が、禿頭を銜へた風折烏帽子のぐるりへ舞ひ騰るので、丁ど頭から烟が出てゐるやうにも見える。この人の白い狩衣も皺くちやで、羔貫には夥しく泥が撥ねあがつてゐる。煙管を下へ置くと、咽喉佛の突き出てゐる萎びた頸を折れさうに曲げて、二つ三つ咳をした。
『面白い話て、何んにもあれしまへんがな。』と春榮は突ッ立つたまゝ眞弓に答へて、坐つてゐる和三郎の、色の黑いながらに何處となく品のある瓜實顏を見い〳〵した。上り口に腰をかけてゐる眞弓は、暫くヂッと身動きをしないで、皮の弛んだ瞼を閉ぢて俯伏いてゐた。何も深い考へに沈むのではなくて、時々かうするのが、この人の癖である。
『來しなに浪花座の前通つて來ましたが、河内屋の延若になる披露で、えらい人氣や。』と、春榮は誰れにともなく言つた。
『役者て、えゝ商賣やなア。錢が仰山に貰へて、女子には惚れられて、……わいも今度は役者に生れ代はつて來るかなア。』と、和三郎は眞弓がドへ置いた鉈豆のまだ熱いのを取り上げ、袋ごとの菖蒲を摘んで詰めた。
『あんたが役者に生れるんなら、わたへは藝妓に生れて來る。……えゝ着物が着られて、芝居が觀られて、……』と、春榮は大きな聲で言つた。眞弓は俯伏いたまゝ坐睡でもしてゐるのか、鬢の白髮一本動かさうとはしない。

『やゝ、あんたは藝妓に生れ代らいでも、今かて役者やないか。女役者や、女優や。神さんの女優や。』

『ほゝゝゝ。わたへが女優なら、あんたは囃し方や。……浪花座なら、竹村政次郎ちうとこや。』と、春榮は其の色白の圓い顏を白衣の袖で半分蔽ふて言つた。耳の後なぞ、白粉が斑に溜つて、何かに舐められた痕のやうに見える。

『役者でも囃し方でも、神さん相手では始まらん。活きた人間相手でないとなア。』と、和三郎は、七分ほどに伸びた其の縮れ毛の頭を左の手で撫で廻はした。

『時候が溫過ぎるよつて、朝から眠たうなる。』と、眞弓は不意に立ち上つて、朴の木齒のちびた利休を引き摺り〳〵、一丁餘り距つた本務の社へ引き揚げた。此處の社は兼務で、朝の供饌と夕の撤饌とだけに來るのである。

『もつと勿體付けて、社司なら社司らしいやうにしたらよさゝうなもんや。』と、春榮は、門の方へ敷石を踏んで行く眞弓の、狩衣の裾の風にひら〳〵するのを見送りつゝ言つた。

『あないにしてゝ、五千圓は持つてるちうさかいな。月給は尠うても、賽錢の部割りや上りもんで實入りが大けい。……わいも今度役者に生れ代らなんだら、神主に生れて來うかなア。月給九圓の神樂師はもう御免や。……こいでも神樂師ちうと、長袖の部類やがなア。』……と、和三郎の溜息とゝもに言ひ出すのを、春榮は押し留める風にして、

『昔のこと言ふたかてあけへん。……昔の神樂師はえらいもんで、お父つあんは金持ちやつたが、自分は十二の年から苦勞して、繼母に虐められ、散財一つ覺えん中に火事で丸燒になつて、……やろ、ちや

ゐと知つてる。」と、げた／＼笑つた。

「金山の坑夫までして來たのも殘念やが、一番殘念なのは、錢が無うて、三十越えるまで女知らなんだこッちや。……もうこれ四十に間のない年になつては、何をしたかて、頓と面白うない。」と、和三郎は額に深い／＼皺を寄せて言つた。

「朝、むッくり起きからお神樂に引き出されて、風呂へ入つたりしたんで、今日は身體の工合がわるい。」と、春榮は引き摺るほど長く穿いた緋の袴の裾をからげて、赤い鼻緒の雪駄をちやら／＼と拜殿の方へ行つた。和三郎も手早く直垂を脫ぎ棄て、白木綿の單衣に淺黃の袴の平服姿になつた。

拜殿の前へは、若い商人風の男が參詣して、鈴の緒を引き、賽錢箱へ一錢銅貨を一つ投げ込むと、兩手を合はして、稍暫く祈念を凝らしてゐた。

二

今日は珍らしく早朝から御神樂を上げに來た人があつて、春榮も和三郎も出勤早々忙しい思ひをしたが、午前十時頃になると、朝のと同じほどの年輩で、ズット澁い身形をした堂島へでも行きさうな人が、それ者の果てとも思はるゝ垢拔けのした大年增を連れて來て、御神樂と獻湯とを申し込んだ。

「春さん、も一遍霓詰や。」と、和三郎は參詣人夫婦を割り拜殿の西側に待たして置いて、春榮を促し立てた。春榮は大儀さうに身を起して、拜殿の前の敷石の上に雪駄の音を一際高くさして、橫門から西の方へ出た。微風に陽炎のやうな輕い砂埃りを揚げてゐる往來には、紙片の散らばつたのや、馬の糞の乾いて碎けたのが、いら／＼と照り付ける日光に煌めいて、ごた混ぜになつた物のにほひが、ぷんと鼻を

衝いた。門を出ると春榮は小走りに埃りを蹴立てゝ、白衣の長い袂を袖屏風に、顏の日に燒けるのを防ぎつゝ、燒芋屋の前から北の方へ行つた。其の燒芋屋では二三日前に引き込ました氷屋の商賣道具をまた持ち出して、燒芋の傍に氷水も賣つてゐた。近在の百姓が曳いて來る肥料桶を載せた車や、靑物を積んだ八百屋の車の間を縫ふやうにして、赤い根掛けを結んだ春榮の新蝶々の頭は、北へ北へと行つた。緞帳芝居の花道にでも見る風な白衣に緋の袴の姿は、このごた〳〵と貧乏臭い町筋に、一種異樣の色彩を添へた。道行く人は大抵振り返つて見送つた。

「おもろい女やなア。」

「荒魂はんの巫女や。」

「一寸澁皮の剝けたげんさいやないか。」

屋根葺きの足みたいなと、村の娘たちによく言はれるほど、思ひ切つて眞ッ黑く日に燒けた顏に、下ろし立ての新らしい手拭で揃へに鉢卷をして、同じやうな肥料車を曳きつゝ、この町から和泉の國へと歸つて行く三人の若い衆は、春榮の紅白染め分けの姿が、西側の砂糖屋の店に消えて行くまで、見返へり〳〵、こんなことを言つた。

例によつて砂糖屋で電話を借りた春榮は、丁ど出た交換手が、自分の暫く電話局に勤めてゐた時、一番親しくしてゐた同じ年頃の娘であつたので、懷かしがつて三分間ほども互ひに近況を語り合つた末、

「わたしだといふことが、よく分つて。」

「あなただつて、よく分つて。」などと、電話だけでは、東京風の言葉を上手に使つてから、

「何うぞ南の△千△百△十番へ。」と、本家のやうにしてゐる四五丁距つた和魂神社の社務所へ繋いで貰つて、横笛の左司馬はんと、ちやんぽんの徳さんとを呼んだ。

春榮が電話を濟まして拜殿へ歸つて來ると、間もなく横笛の函を持つた左司馬爺さんと、ちやんぽんを風呂敷に包んだ徳さんとが、萠黄の直垂姿で、

「今日はなか／＼忙しいなア。」と言ひ／＼やつて來た。其の間に和三郎もまた直垂を着け、三人並んで拜殿の東側の圓座の上へ坐り込んだ。

緋の袴を稍新らしいのに着け更へて、白の水干を纏ひ、五色の絹の垂れた神樂鈴を手にした春榮は、ガラ／＼鳴る鈴の音とゝもに、割り拜殿の中央の土間の荒薦の上へ下り立ち、神前に向つて一禮すると左司馬の横笛が先づピイと高調子で鳴り響き、次ぎに和三郎は、鰒の腹のやうに頬を膨らまして、篳篥を吹いた。笙と太鼓とは略して、徳さんの打ち鳴らす鐃鈸のちやんぽんで調子を取つて、春榮は鈴を振りつゝ舞ふた。

舞ひながら時々篳篥の方を偸み見する春榮の右の頬には、片靨が深く刻まれてゐた。徳さんはちやんぽんをやりながら、隣りから膝で和三郎の腰のあたりを小突いた。

「何時かのお祝ひの時、御所車に赤い綱を附けて曳き出した宗右衛門の藝妓たちの仕丁姿の中には、この春榮よりも醜いのがあつた。春榮があの中に混ると、屹と中から上の部や。」なぞと思つて、和三郎は篳篥を吹きながら、身の毛をぞく／＼さした。けれども、月が重るに連れて膨れて來るお腹が、水干を着けた外へまで少しは目立つて來はせぬかと考へ出すと、唇が硬張つて篳篥の音も氷り着くやうな氣が

もした。自分の罪を犯した孕み女を神前に舞はしてゐるのが、急に空怖ろしくもなつて來た。斜に神前を見やると、階段の上に高く海老錠をおろした本殿の扉は、への字なりに閉ぢた巨人の口元の如くに思はれ、其の上に懸かつた八寸の神鏡は、自分の罪を寫し出す淨玻璃とも見られた。

篳篥の音律が亂れて來たので、左司馬も德さんも不思議がつて和三郎の方を見た。和三郎は何糞ッと元氣を出して、十分の息で篳篥の音を、ラロラレラーラと調へて來た。さうして、

「昨日まで電話交換手をしてゐた素人にも直き出來るこんな尿臭い舞を、神さんは喜んで見給ふのかなア。」と、毎ものやうに考へる餘裕すら出て來た。參詣人の男女二人は、拜殿の西側に畏まつて、この清淨な舞をば神の如何に納受ましますかを窺つてゐるらしかつた。

鈴の舞が終ると、今度は劍の舞に移る段取りとなつた。左司馬爺さんは更に別の函から細い横笛を取り出して、急調に吹き始めた。和三郎は篳篥の舌を取り代へて、横笛を追つかけた。八足の上へ鈴を置いた春榮は、神前に向つて再び一禮すると、別の八足の上から白鞘の短い太刀を取り上げ、それを捧げてまた恭しく拜禮した後、樂の音に合はせつゝ舞ひ、舞つては太刀を頂き、頂いてはまた舞ひ、到頭すらりと拔いて、蜘蛛の巣を拂ふやうな身振りをした。水干の袖も白衣の袖も共に捲れ上つて、白い腕が奧の方まで見えた。男女二人の參詣人は、いよ〳〵ひれ伏して頭を上げなかつた。

劍の舞を舞ひ納めた春榮は、水干を脱ぎ棄て、元の古びた緋の袴に穿き更へ、素足へ鼻緒に白紙を卷き付けた藁草履を突ッかけ、拜殿の前の砂の上へ下り立つた。東手に並んだ獻湯釜には先刻から湯がたぎつて、青い笹の枝も二束置いてあつた。春榮は更に神前に向つて拜禮した上、其の笹の枝を兩手に持

ち、釜の湯に浸して目八分に押し戴くと、拜殿からはまた樂の音が緩く起つた。玉と沸きたつ熱湯の笹の葉を傳はるのを春榮は兩手に持つて、交る〳〵振り立てた。湯の玉は白衣の肩から胸へ、雨のやうに撥ね飛んだ。

湯立てが濟むと、春榮はぐたりと疲れた風で、術無氣に社務所へ入つて、崩れるやうに腰をおろした。參詣人の男女二人は、漸く拜殿から下り、賽錢箱の前に跪いてまた暫く祈念を凝らしてゐた。和三郎は箪葉を函へ入れると、神前の瓶子を下げ、用意の土器を白木の三寶の煤けたのに載せ、二人の前へ持つて行つて、神酒を戴かした。大島の袷に金紗縮緬へ小松のしぼの入つた蔦の三つ紋の羽織を、陽氣に比べて暑苦しさうに着流した大年增は、神酒を戴くと直ぐ献湯の釜の前へ來て、落ち散つてゐた笹の葉を拾ひ上げ、大事さうに櫻紙へ包んで懷中に納めながら、

『頭痛持ちですよつて、これを頂いといて、蟀谷へ貼りますと妙に癒りますんでござります。』と、和三郎を見てにツこりしつゝ言つた。

『そんなことを申しますな。お入用なら、何んぼでも持つておいでやす。』と、和三郎は神社の金紋の光る釜の上へ春榮の載せて置いた笹の枝を其のまゝ取つて、大年增の前へ差し出した。

『もうたんと頂きましたんだすけど、折角ですよつて、もう四五枚貰はかして頂きまへう。』と、大年增は直垂姿の和三郎に寄り添ふて、笹の葉を四五枚挘り取り、また櫻紙へ柔かく包んで懷中に入れた。

左司馬爺さんと德さんとは、二人の參詣人に默禮して、忙しさうに和魂の方へ歸つて行つた。先刻から他の參詣人は一人も來ないで、境内に並んだ石燈籠の上へは、怖ろしい町中から暫し翼を休めに來た

らしい三四羽の雀が止まつて、黒い苔をつゝいてゐた。

結城お召の上へ鐵無地の單羽織を着て、綴れ織の帶へ白金の鎖を細く絡ました、濃い眉に眼の凛々しく苦み走つた四十男は、社務所へ行つて、春榮に何か言ひながら、神樂錢と献湯料とを紙に包んで納め、別に若干の心付けを春榮の白い手に握らせた。

やがて、男と女との連れ立つて表門から歸つて行くのを、和三郎は直垂を脱ぐのも忘れた風で伸べ首をしつゝ見送つてゐたが、ぼんやりとして、社務所へ入つて來ると、矢張り直垂のまゝで、鉈豆の煙管を取り上げ、煙草は詰めずに、くる／＼と小器用に廻はしながら、

『年増もわるうないなア。あいだけの衣裳を着ると、…………』と、嘆息する風に言つた。

『ほんなら、年増の後追ひかけていたらえゝやろ。……遠慮は要らんし。』と、春榮は心持ち蒼ざめた顏に、凄く眼を光らしてツンとした。

『年増一人やと追ひかけて行くんやが、あの男が居よるので、あかんわい。』と、和三郎は調弄ひ氣味ににや／＼して言つた。

『わたへをこんな身體にしといて、ようそんなことが言へたもんや。』と、春榮はぶる／＼と身を慄はして、兩の眼に涙を一杯溜めた。

『お前かてあの男に氣がありさうにしてたやないか。』と、和三郎はまだ調弄ふ積りであらうが、顏だけは眞面目腐つて言つた。

『知らん。』と、春榮は手にしてゐた銀貨の紙包みを、カチンと敷居に投げ付け、兩手で顏を蔽ふて、裏

手の方へ駈けて行つた。

三

しく／＼泣いてゐる春榮の白衣の肩に手をかけて、和三郎は、祭禮の提燈立てなぞを入れた物置の側で、稍暫く宥め賺してゐたが、春榮はビク／＼と身體を震はして、急に泣き止まなかつた。

『嘘や、嘘や。わいがわるかつた。あやまる。あやまる。』と、和三郎は四邊に氣を兼ねる風で、春榮の耳の側へ口を寄せつゝ、直垂の袖を翳して小聲に言つてゐた。

『あんたは薄情や。わたへを手遊品にして、こんな身體にしてしもて、自分が甲斐性なしやよつて、わたへを棄てゝ逃げようおもてる。そんな無茶なことさせへん。……もう何もかも社司さんに言ふてしもて、どッちが惡いか、聽いて貰らう。』と、春榮は肩に纏はる和三郎の手を振り退けて、啜り泣きつゝ血を吐くやうな聲をした。

『今になつて、そんなことしたら、どんならんがな。……そやよつてわいが墮胎して了ひて、あれほど言ふたやないか。能う考へて見い、早いほどえゝのや、今かてまだおそいことあれへん。……能う考へて見い。』と、和三郎はいよ／＼聲を密めて、三十八の中爺がこの十六の小娘に泣き縋るやうな風をした。

『そんな怖いこと出けえへん。……和アやんは鬼みたいな心や。……坑夫をしてたちうよつて氣が荒いのや。……お母んもさういふてる、そんな男に長いこと係り合ふてると、仕舞には殺されるかも知れんて。……』

『お母んに言ふたのかいな。』と、和三郎は凄い眼付きをして、春榮の後腦部の邊を睨み詰めたが、直ぐ

に氣味のわるい笑みを漏らして、

『子供やなア、お母んに言ふちうことがあるか。何んで隱しとかんのや、あれほど言ふたるのに。……桑原はんや、氏子總代に知れて見い、二人とも此處に居られへんで。……何んぼ坑夫までして來たかて篳篥七年の修業を積んだ、こいでも長袖の生れや。……時節を待つてとくれ、惡いようにはしえへんよつて。』と、急に猫撫で聲の慰め顏になつた。

『だん／＼お腹が膨れて來ると、何うしても此處に居られへん。』と、春榮は白粉の斑らな首を振つた。

『そやよつて、思ひ切つて、あれして了ひ言ふてるんやないか。そないに痛いことも術無いこともあれへんさうや。……わいの知つてる難波のお婆アはんに賴んだる。』と、和三郎は熱心に說きかけたけれど春榮はもう何も言はずに、身を悶へてゐるやうであつた。

折柄表門の敷石に下駄の音がしたので、和三郎は直垂姿を遽へして、社務所の方へ走つたが、參詣人は今時珍らしい丁髷に結ふた、胡麻鹽頭の老人で、鈴の緒を引いて一寸拜んだきり賽錢も入れずに西の横門から出て行つた。

直垂を脫いで、淺黃の袴に穿き更へた和三郎は、暫く社務所の窮屈な机の脇に坐つて、拜殿の前の石燈籠から、橫側の痩せた樹木などを眺め込んでゐた。此處の大きな工業や商業の都市は一個の有機體の如く、遠く近くからわアと唸るやうな生活の音響を立てゝ、犇々と迫つて來るので、この猫の額ほどの社地は、本殿の千木や鰹木や、拜殿の破風をば、機械といふ人喰ひ鬼の火の車を廻はす石炭の煤に穢され、痩せた神木をば塵埃に汚されて、今にも滅びて了ひさうに見えながら、危くも別に閑寂な小天地を作り

つゝ、古代の服裝をした男女が、坐眠をしてゐても大事ない場所になつてゐる。けれども其の坐眠の男女の古風な衣服の廣い袖にも、相應の情話や悲劇が包まれて、いづれは人間の住む浮世であることを思はしめる。

和三郎は春榮のことが氣にかゝるので、また藁草履を突ッかけて裏手の物置の前へ行つて見ると、春榮は物置に並んだ形ばかりの浴室で、朝沸かした浄めの風呂のまだ冷めてゐないのを幸ひ、透き通るやうな湯に、すべ／＼と白い肌の乳房の上までを沈めて、ケロリとした顔で、ぢやぶ／＼やつてゐた。白粉も涙も皆流し落されて、今鳴いた烏が何處へ行つたといふ容子をしてゐた。白衣や緋の袴や湯もじなぞだらしなく物置の家根の上に引ッかけてある。

『お加減は何うだす。』と、和三郎は笑ひ顔をして言つた。春榮は笑ひかけた顔を無理に引き締めつゝ耐へて、クルリと向ふをむき、頸筋のあたりまでを湯に沈めて、石膏像の如く動かなかつた。

『焚きまへうか、ぬるけれや。』と、和三郎が前へ廻はると、春榮はまたくるりと首を向け變へて、兩腕を窄めつゝ湯の中に縮かまつた。

『そないに嫌はんかてえゝやないか。』と、和三郎は執ッこくまた前へ廻つた。

『嫌ひ。……男て、こんなとこへ來るもんやあれへん。』と、春榮は左の手を振つて、和三郎の兎のやうな圓い眼をした淺黑い顔に、湯の飛沫を引ッかけた。

『あッ。』と、仰山さうに顔を掌で押へて和三郎は、

『手水かけてると、手こないが生れるちうで。……何うやもう餘ッぽと大けなつたか。……四月ちうと

どれぐらゐや。』と、小聲で言ひ〳〵、顏を突き出して風呂の中を覗き込まうとした。

『嫌ひ。……』と、春榮はまた手を振つて湯の飛沫で和三郎の顏から胸の邊りをしたゝかに濡らしたが和三郎の男としては華奢な手が春榮の白い手の細い指を摑むと、何うした拍子か篏めてゐた銀の指輪がぬらりと拔けたので、和三郎はそれを手早く自分の小指に篏めて、また湯を引ッかけられない中に、物置の横まで逃げ退いた。

『返へしとう。』と、春榮は腮をあげつゝ風呂の中から幾度か言つた。

四

アルミニユームの凸凹になつた辨當箱を開いて、二人は社務所の小さい机を眞中にお取り膳のやうにして喰べた。喰べてゐる中に丁ど午砲が聞こえた。箸を上げ下ろしする和三郎の左ぎッちよの手に今しかたの銀の指輪の白く光るのが、小指だけに殊更目立つた。春榮はそれを見ても、別に何も言はなかつた。

『この春、あんたが此處へ口入屋に連れ來て貰うた時は、恥かしがつて辨當をよう喰はなんだなア。』と、和三郎は古い昔のことでも思ひ出すやうに、感慨の深い眼をして言つた。春榮は片靨を見せて、たゞ微笑んでゐた。

『其のあしたからは、漸う此處で喰べ出したけど、隅の方を向いて惡いことでもするやうに、小ッこうなつて俯伏いて喰べてた。……それがこんな圖太い女になつたんやさかいなア。』と、和三郎は辨當の飯の一粒をも拾つて、綺麗に喰べ終つた。

『誰れが[redacted]太うしたんや。』と、春榮も微笑みながら、和三郎の茶碗に口の缺けた土瓶の茶を注いでやつた。

二人とも喰べ終つた同じ大きさの辨當箱は、同じ海老茶色の毛絲で編んだ袋に入れられて、机の下に押し込まれた。春榮は襟元を少し開けて、其處にあつた神符を拵へる大阪の美濃紙の一折で肌に風を入れてゐた。

『今年は何んでこないに長う暑いんやろ。』と、和三郎も有り合はした中啓を開いて、粗末な紅色の模様をひら〳〵させて煽いでゐた。

『また喧嘩しやうか。』と、春榮は笑ひながら言つた。和三郎も笑つて、つく〴〵と春榮の顔に見とれてゐた。

午後になつても參詣人は一人だつてなかつた。雲の一片さへ見せなかつた朝からの晴れた空は、午後になつて少しづゝ白雲を浮べて來た。南風が吹いて、時候は暑いながらも、雲の色は流石に秋であることを思はせた。何處の工場の烟突からともなく飛んで來る煤の粉は、風向きによつて、二人の白衣や、衣桁にかけた水干に、胡麻でも振つた如く散りかゝる。

『何んぞ欲しいなア。』と、煙草も吸ひ飽きた和三郎は、口淋しさうにして間食を望みつゝ、口を尖らしては頻りに自分と春榮との白衣にかゝる煤の粉を吹き飛ばした。

『あゝ忘れてた。』と、春榮は先刻電話を借りに行つた時買つた燒芋を、背後の雲脚臺の下から、黄色い汚點のある手巾に包んだまゝ取り出して、和三郎の前へ擴げ、二人とも稍暫し無言で、口をもぐ〳〵動

かしてゐた。

「二錢がんやろ、もうちッと欲しいなア。……どれ一つ探して來う。」と、和三郎は一度襟へ差した爪楊枝をまた拔いて齒を穿りつゝ、拜殿へ行つたが、賽錢箱の後や圓座の下や、雲脚机、八足臺の横までも犬の這ふやうにして探し廻はつた末、拜殿を拔けて、本殿の階段を昂り 正面の扉の前から兩側の簀の子にまで廻はつて見た。

「三錢六厘あつた。……賽錢箱が出したるのに投げ錢する人があるんや。」と言つて、和三郎が拾ひ集めた五厘銅貨五つと一錢銅貨一つと、穴の明いた昔の一厘錢一つとを、大事さうに握つて來て、机の上へぢやらッと置いた時、春榮はさげしむ風の顏で和三郎を見詰めた。

「お宮はんちうもんは、このせち辛い世の中でも、言はゞ金の生る木や。何んぞ欲しい時に探して來ると、二錢や三錢は屹と落ちてる。……今時五厘た一つかて只呉れるとこあれへん。……慾の深い奴が五厘た一つで、家内安全息災延命を買うて行きよるんやもん、考へて見ると、賽錢ほど安いもんはないなア。電車賃も安いが賽錢には敵はん。」と、和三郎が諂けた風をして、拾つて來た錢を幾度も〱勘定するので、春榮もつい釣り込まれて笑ひながら、

「一厘錢もあつたのやなア。」と、自分たちよりはズッと〱幾百年も前から浮世に現はれて來て、多くの人の手に荒い波風を潜り、世は全くの貨幣經濟となつても、まだ時代おくれの穴の明いた姿を、神社の賽錢箱なぞに晒してゐる、其の醜い狀をば、何も知らぬ乙女心のたゞ珍らしいものとして見てゐた。

「乞食でも今こんな錢貰ひよらん。」と、和三郎は其の一厘錢を摘んで、獨樂のやうにくる〱と、机の

上で縱に廻はしてゐたが、やがて五厘、一錢の銅貨をも一つ〳〵取り上げて年號を調べて見た。

『情ないなア。一厘錢を退けると、あとは皆わいより若い錢や。……この一錢だらが明治十二年生れで一番古いが、そいでもわいより一つ下や。この五厘たが明治十九年で、丁ど三十か。春さんは明治三十三年生れやなア、そらこの五厘たと同い年や。……錢はかうなつて見ると、十年や二十年違ふても見たとこは同なしやなア、これ見いこの方が却つて黑うなつてよる。』と、和三郞は一つの五厘錢を春榮の前に投げ出した。春榮は自分と同年の小さな銅貨を取り上げて、今までまだこんなに丁寧に錢の姿を見たことがないと思ふほどに、ぢッと眺め入つた。さうして自分の懷中から毛絲の小巾着を引き出し、入れてあつた眞新らしい一錢銅貨を摘んで、自分と同い年の五厘銅貨と比べて見た。其の一錢には大正何年と時代違ひの年號が讀まれて、模樣も違つてゐた。

銅貨を前に置いて、春榮は自分の年と和三郞の年とを、うら寂しく考へつゝ、何んとはなしに淚を催して來た。

『關東だき買はうやないか今度は。……其の一錢も足して。』と、和三郞は一厘錢だけを机の上に殘して有りッたけの銅貨を握ると、急いで關東煮を買ひに、西の横門から出て行つた。

五

夜はそれでも餘程冷氣を催ふした。

『今夜また此處へ來とくれ。……嘘吐くんやないで。』

『乾ゝ來る。嘘吐けへん。』

『ほんまに來とくれ……今夜こそ相談を決めて了はんならんよつてなア。』なぞと、晝間關東煮を喰べながらの約束で、近所のルナパークに、花やかな電燈がパッと一時に點いてから間もなく、離れ小島のやうに寂しいこの拜殿の前へ、和三郎が先づ紺飛白の度々水を潜つたのに黒金巾の兵兒帶を腰でチョキンと結んで、白い鳥打帽を被り、竹の根節の細くしな〳〵する洋杖を振りつゝ、南の門からやつて來た。暫くして、春榮も晝間穿いてゐた赤い鼻緒の雪駄の音を忍び〳〵、瓦斯紡績の袷に赤の勝つたメリンス友禪の帶を行儀よく締めて、西の横門から入つて來た。四邊は森閑として、月の無い夜は、二人の影法師さへ映らなかつた。黒く並んだ石燈籠が人の姿のやうに見えて、蟋蟀の鳴くのが微かに聞こえた。

『お園ぢやないか、……六三さんか。』と、和三郎はたまらぬほど下手な節で小さく唸つて、にこ〳〵と春榮に近づいて來た。さうして二人は定つた軌道を進む星のやうに、すうツと無言のまゝ、和三郎を先きに春榮は斜めにそれと引き添ふて、拜殿の西側へ呑まれる如く入つて行つた。

何處となく塵埃臭くて、二人とも足袋を穿かぬ足元のざら〳〵する中を、暗黒の手探りにもよく勝手を知つて、圓座を二つ座蒲團代りに持ち出し、祭典の折玉串案に使ふ小さな八足臺を眞中に、卓袱臺みたいにして向ひ合つた。

『これ痛うていかんなア。座蒲團が欲しい。』と、和三郎は足を撫でながら、胡座をかき直した。

『錢さへあつたら、宿屋へでも、ぼん屋へでも行けるがな。』と、春榮は蚊の鳴くやうな聲より出せなかつた。

『錢のことゝ言ふとくれな、水くさい。……氣が詰まるがな。』

「さうかて、そやないか。こんなとこで人が來えへんかおもて、心配しい〳〵、灯も點さずに話してるのも厭やになつた。」

「わいの甲斐性無しが厭やになつたんやろ。……さうかそんならよい。」と、和三郎は屹となつた。

「そやないけど、こんなとこでこんなことしてると、神さんの罰當れへんかおもて、わたへ怖い。」と、春榮はおど〳〵する風で言つた。

二人の眼はだん〳〵暗黑に馴れて來て、互ひに顏だけは見合はせることが出來るやうになつた。

「噓や。神さんは怖うないけど、わいの甲斐性無しが怖いのやろ。分つたるがな。そやろ、さうならさうと、はツきり言ふとくれ。こないだも言ふた通り、何うあつてもわいの女房になるのは厭やか、何うや。」と、和三郎は疊みかける調子で言つた。聲も知らず〳〵高くなるのに我れから氣が付いて、ハッと口を押へようとした。

「……あんまり年が違うよつてなア……て、お母んが言ふてはる。……」と、春榮は有るか無いか分らぬほどの聲を出した。

「……お母んが言ふてはる……んやないやろ。春さんがおもてはるんやろ。……そんならそれでよい。わいにも了簡がある。」と、和三郎はチッと腕組みをした。

「……そやあれへん。」と、僅かに言つて、春榮はだん〳〵俯伏いたが、また上目を使つて窃と和三郎の樣子を見ようとした。

「わいもなア、神樂師の家に生れて、一時は生野で坑夫までして來たけど、錢が無いのと臆病で、毎も

言ふてる通り今まで女に手を出したことがないのや。……正直な話は女はお前が初めや。……初めの終やろ。……年はいてても之れが後妻と言ふやなし、お前とわいが夫婦になつたかて、一寸も可笑しいことあれへん。……わいかて何時までもあんな一膳飯屋の二階に居やへんさかいなア、春さんよう考へてわいんとこへ嫁とくれ。お前もそんな身體になつたんやもん。ぐづ〳〵してると桑原はんや氏子に知れて、大騒動が起るといかん。今の中にお前さへ承知して呉れたら、お母んやお父つあんの方は、わいが話するがな。』と噛んで含めるやうに言ふ和三郎のひそ〳〵聲を、春榮はたゞぼんやりと、そんなに切迫したことでもないと言つた風で聽いてゐた。さうして、和三郎が晝間社務所などでは『あんた』といふのに、この拜殿で密會する時に限つて、『お前』といふのが際立つて耳に立つた。

『そんなら晝間も言ふたやうに、墮胎して了ひ。それが一ッちよい。……難波のお婆アはん上手やよつて、一寸も術無いことあれへん。樂なもんや。』と和三郎はまた手を變へて說き出したけれど、これには春榮が卽座に首を振つた。

『そんならお前何うすちうんや。……わいが知らん顏してると薄情やて言ふやろ、それ見ると、まッさらわいが嫌ひになつたんでもなさゝうやが、そんなら夫婦になろちうと厭やゝ言ふし、墮胎すのも承知せんし、土臺ごくお前の了簡は解らん。……わいはそら甲斐性無しやろが、お前とこかて見い、髙が職人やないか、何んぼ容貌がよかつたかて、そないにえゝとこへ嫁かれへんで、よう考へて見いや。』と、和三郎は男らしくもない泣き出しさうな物哀はれな聲になつて來た。

『貧乏かて構へへん、……年のつろくした人と夫婦になりたい。……』と、春榮は晝間なら耳朶まで赧く

なつてゐるのが見えさうな、初めて男に口說かれた時と同じ風をして、聞こえるか聞こえぬかの聲で言つた。

『分つた。矢ッ張りわいが年いてるさかい、厭やになつたんやな。もうえゝ。何んにも言はいでもえゝ。』と、急に恐ろしい劍幕で言つた途端に、和三郎の左ぎッちよの手が前の八足臺へ强く觸れて、先刻春榮から取つて小指に嵌めてゐた銀の指輪がカチンと音を立てた。春榮はぎよッとしながら、晝間取られた指輪のことを思ひ出して、指輪の無くなつた自分の左の紅さし指を見た。

『そやけどなア、まア能う考へて見い。』と、和三郎はまた言葉を柔かくして、八足臺の下へ膝を突ッ込みつゝ、春榮の膝の方へ摺り寄つた。

『今日献湯に來た人見い、年は大分違ふてるが、能う似合ふた夫婦やないか。』

『あんなえゝ服裝して歩けるんなら年が違ふてゝもえゝ。』

『そんなら、お前何うあつても、わいと今夫婦になるん厭やゝいふんやなア。』と、和三郎が最後の宣言をするやうに言ふと、春榮は、うんと直ぐ點頭いた。

『墮胎すのも厭やゝんやなア。』と、和三郎は續けさまに言つた。

春榮は、うんとまた點頭いて見せた。

『二人で何處ぞへ駈け落ちしやうか。ばんくするのは何うや。』と、和三郎は一寸考へてから睨み付ける風をして言つた。

春榮は驚いた顏をしたが、首を振つていや〱をした。

『そんなら、お前何うあつても、わいが厭やになつたんやなア。さうか。』と、和三郎は絶望の色を漲らせつゝ言つた。

春榮は、直ぐに強く首を振つて、さうではないといふことを熱心に確實に見せようとした。

『お前は子供やなア。』と、和三郎は投げ出した風で言つて、苦笑ひをした。春榮は何んとも言はず、兩手をキチンと膝の上に置いてゐた。

六

稍暫く、暗黑の中の沈默が續いた。外の繪馬堂の脇あたりで、がさ〳〵と物の音がしたので、二人は驚いて振り向いたが、門に扉はなくとも人の入つて來た樣子はなかつた。おほかた犬であらうと二人はさう思つた。死におくれた蚊が何處からか、人間の匂ひを嗅ぎ付けて來て、耳の側でぶんと唸つた。

『お前、ほんまに何うしたらえゝといふんや。……今夜こそ何うあつてもそれ決めて了はんならん。……一體何うしたらえゝのや。』と、和三郎はまたやり出した。

『こんなり、かうして居たいのや。』と、春榮は眼を細くして、可愛らしい口元をしながら、にツこりと和三郎の顏に見入つた。

『こんなりで居られるもんなら、誰れも心配しえへんがな。……お前も十六で、もう子供やないやないか。ちツと確乎しとくれ。これから半年ほどするとお母んになるんやで。』

『お母ん。……と呆れた顏をした春榮は力無さゝうに俯伏いて、自分の腹部を赤い帶の上から見詰めた。

『何うや、もう少しは動くか。……ビク〳〵となア、動くちうこツちや。……知らんけど。』と、和三郎

はまた柔かな言葉つきになつて、首を突き出した。

『ちいと動きよる。』と、春榮は寂しさうな顏をして點頭いた。

『それ見い、もう動くんやもん、來月再來月……とだん／＼お腹が大きうなつて來るやないか。……ぐづ／＼して居られへん。ちッと確乎しいんかいな。』と、和三郎は勵ます調子で力强く言つた。

『わたへ、ほんまに子を生まんならんのやなア。……何うしたらえゝやろ。』と、春榮は今更らしく涙ぐんで、腹の方ばかり見詰めてゐた。

『一所になると子が出けるのが當り前やないか。……何んにも心配することあれへん、わいが附いてるがな。』と、和三郎は慰め顏に一層優しく言つた。

『お父つあんやお母んに知れたら、わたへ何ないに言ふたらえゝやろ。』と。春榮は俄に恥かしさうな風をして、袖口を口元に押し當てた。

『何言ふてるんや、お前お母んに打ち明けたといふてたやないか、先刻に、二遍も。……』と、和三郎は不思議さうに眉を顰めた。

『あれは嘘や。』

『嘘か。たよりないなアお前の言ふてることは。……ほんまに確乎しとくれ、二人の一生の身の上に係るこッちやないか。お前一體何んとおもつてるんや。』と、和三郎は焦々した風で立ち上つたが、何をするともなく暗黑の拜殿をぐる／＼廻はると、場所が場所だけに、今更の如く自分の罪が怖ろしく思はれ今にも何處からか、「不義者見付けた、其處動くな」とでも大喝されさうな氣がして來て、立つても居て

も、ゐたゝまらぬやうになつた。

暗を透かして本殿の方を仰ぐと、閉された扉は大きな海老錠とゝもに、しツとりと夜露に霑ふたらしく、扉の上に懸つた神鏡は星の影を映して、夜目に微かながらも、神居ますが如く拜まれた。

「もう去なうか。」と、春榮は大きな欠伸をしたが、和三郎が何んとも言はぬので、また八足臺に凭れて座睡でも始める風であつた。

「あッ、こんなものを出しといて、春さんが納すのを忘れたんやなア。」と、和三郎は稍大きな聲で言つて、足音を忍び〳〵、晝間春榮が劍の舞に用ゐた白鞘の短い太刀を雲脚臺の上から取りあげ、

「危ないなア。」と、獨り言をして、右の手に太刀を握つたまゝ春榮の側に寄つて來た。春榮は一寸それを見上げたが、氣にも留めぬ樣子でまた俯伏いて了つた。

「もう去なう。」と、春榮はまた言つて、圓座の下へ座り直した。

「あッ、何んや踏んだ、氣味が惡い。」と、和三郎は太刀を持つたまゝで、瓜先き立てつゝ春榮の前へ廻はつた。

「わたへの糠袋や。」と春榮は笑ひ〳〵、和三郎の足元から糠袋を片寄せ、脇に置いた小さな金盥や石鹼と一所にした。

「何んやお前、そんなもん持つて來てたんか。」

「今夜は縫ひ物屋が休みやよつて、風呂へ行く言はな家出られへん。」と、春榮はまた大きな欠伸をした。

「お前はそいで、眞ん氣になつてるのかいな。」と、和三郎は太刀を持ち直して詰め寄つた。

「眞ん氣も嘘氣もあれへんがな。……もう去なう。」と、立ち上りかけた。
「……春さん、寧そ一思ひにわいと心中してんか。……賴む。」と、和三郎は身體を押し付けるやうにして、春榮の立つのを引き留めた。
「心中。……阿呆らしいこと言ひなはるな。……芝居みたいなこと、阿呆らしい。……」、
「何んで阿呆らしいのや。」
「阿呆らしいやないか。芝居やあろまいし。……三十八にもなつた人と心中したら、損が行く。……わたへが三十八になるのには、……」と、春榮は指折り數へて、
「まだ二十年からあるがな。」と、冷やかすやうな調子で言つた。和三郎は顔色を變へたらしく、目付きも凄くなつたが、暫くしてから、
「そんならなア春さん、心中の眞似だけしとくれ。そいでわいも氣が濟むよつて、何うや出けんか。」と打つて變つた物優さしい聲をした。
「心中の眞似て、何んなことするんやろ、可笑しいな。」
「わいがこの刀拔いて、かうやつて、南無阿彌陀佛ちうて、腹切る眞似するよつてな。お前も兩手を合はして、南無阿彌陀佛ちうて、咽喉突く眞似するんや。」と、和三郎は鞘のまゝの太刀で、切腹する形や咽喉を突く風をして見せた。
「厭やゝ、そんなこと、ほんまに芝居みたいなこと。……和アやんとわたへと心中したらお半長右衛門やなア。」と、春榮はくすくす笑つた。

『まアえゝさかい一寸してみい、かうやつて兩手を合はして、南無阿彌陀佛といふて見い。……一寸でえゝのや、賴む。』

「かうするのん、……可笑しいな。」と、春榮は男の促すまゝに、少し仰向いて、白い咽喉を和三郎の眞正面に見せ、兩眼を閉ぢて、

『こいでえゝのんか。』と、可笑しさを耐へる風で言つた。

「うん、そいでえゝのや。まアちいとさうしてゝ見い。えゝ恰好や。するとわいがかうやつて。」と、和三郎は左ぎッちよで、太刀をすらりと拔き、春榮の咽喉に當てる眞似をしたが、我れながら冷りとして白刃を引ッ込ませた。

『げんがわるい、もう置かうやないか。』と、春榮は眼を閉ぢたなりで言つた。其の柔かさうな、ふくふくとした腮から咽喉、些かはだけた胸元を見ると、和三郎はふら〳〵と夢中になつて、いきなり右の手を春榮の胸に突ッ込み、堅く襟元を握んだ。……遠くで三味線の音がするやうであつた。

『嫌ひ、こそばい。(擽ぐッたいといふ事)何するのん。』と、春榮は戯れだと思つてゐるらしかつたが、ふら〳〵して正氣を失つた和三郎は、白刃を取り直し、春榮の眞白い咽喉を狙つて、ぐさとばかりに突き刺さうとした。

『あ、ア怖い。お母ん。……』と、春榮は叫んだ。この瞬間に眼を開いて危險の身に迫つてゐることを知つた彼女は、魂ぎる聲で母を呼んで、身を遁れようとするらしかつたが、そんな餘裕はなくて、白刃は忽ちふくよかな咽喉に突き立てられた。

「ぎゆう。……」と鳴るやうな音とゝもに、生暖かい、ぬら〳〵したものが和三郎の左の手に注ぎかゝつた。

春榮はもう物も言はなければ、動きもしなかつた。彼女は自分が毎日手馴れて、舞に使つてゐるのでこの白刄をば、最後の瞬間まで恐ろしい兇器とは思ひ得なかつたのであらう。

和三郎は、かうなるともう案外の落ちつきが出來て、其の白刄とゝもに、春榮のまだ暖かい死骸をば神饌用具を入れる戸棚の中に押し隱し、流石に劇しく動悸のする自分の身體は、慄ふ兩足を踏み締め〳〵運び出すやうにして、拜殿の外に下り立つた。……下駄は間違へずに、自分のを穿いた。

七

西の横門を出た和三郎は、通りを北へ北へと急ぎ足に歩いた。向ふから來る人々が皆自分の顔を見詰めて行くやうな氣がするので、成るだけ暗い軒下を選つて歩いた。

自分は春榮を殺したのだなァとは思ふけれど、何故殺したのだらうとは考へもしなかつた。……何うしやうと思つてゐるのか、今一度春榮に念を押してみたいと考へては、さうだもう春榮は此の世に居ないのだと氣が付いて、ハッと惡い夢から覺めた如く、我れに返へつた。けれどもまた直ぐに、春榮とはまだ何時でも話が出來るやうな氣がして、其の死骸が、自分の毎日篳篥を吹いた拜殿で押入れの中にだん〳〵冷たくなつて行くとは、何うしても思はれなかつた。

しかしまた自分はもう大びらに世の中を歩ける身體ではない。つい先刻までは交番の前でも何の憚るところなく歩いたのが、今は巡査に逢ふと直ぐ立ち竦んで了ふであらうとは、明かに意識してゐた。あ

ゝァ情けないことをして退けたとも思つた。
幸ひに交番の前へも出ず、巡査にも行き逢はずに、夜の花の一時に咲いた如く賑やかな道頓堀へ出ると、自分はこんな晴れがましいところに居られる身體ではない。世間が頓に狹くなつた自分には、ぞろぞろと行くこの多くの人たちが、皆探偵ではないかとまで考へられて、眞晝の如く明るい電燈の下は、眩しく怖ろしくて、和三郎の足は自然に暗い方へと運ばれた。
いろ〳〵の食物が電燈に映つて美しく見えるので、平生ならば口にいつぱい唾液の溜るところを、今夜はそれらの店頭を、胸がむか〳〵するやうな思ひで通り過ぎた。自分では暗い方へ暗い方へと志してゐる積りであるのに、足は矢ッ張り明るい方を辿つた。これが一切夢で、ハッと眼が覺めると、一膳飯屋の二階に寐てゐて、下の狹い往來を通る車の響を耳にしながら起き出でゝ、窮屈な流し元で手水を使ひ、店の一膳飯を喰べて、算藥の函を片手に、春榮の顏を見るのを何よりの樂みとして、神社へ出勤するのであつたならば、などと、今朝までの自分の平和を頻りに懷かしがつてもみた。
子供の折、父に頭を擲られつゝ、算藥を敎へ込まれたことも思ひ出された。癇性病みの母が障子の破れを氣にして、小さな穴でも直ぐ貼りかへてゐたことや、酉年の梅干を喰べると出世をすると母は言つて、十年前の梅干をば小さな壺に入れて大事にしてゐたことや、其の母は自分が十二の年に死んで、それからは繼母に三人までかゝつたことや、北の大きな神社で先祖代々神樂師をして來た算藥の家を脫け出し、生野の銀山の飯場へ流れ着いて、長いこと暗い〳〵坑夫の働きをしたことや、そんな自分の過去のことどもが、芝居の繪看板のやうになつて、眼の前に現はれて來ると思はれた。

何時しか、花やかに賑やかな芝居の前に立つてゐた。繪看板が美しく花電燈の光を受けて、人氣役者の改名披露の興行に、内も外もいつぱいに景氣立つてゐた。肥後米や魚の蒸籠の積物が高く家根よりも上に聳え立ち、數限りもない旗幟は、ひら〳〵と夜風に舞ふてゐた。群集に揉まれ〳〵、仰向いて繪看板に見とれてゐる小娘の中に、春榮ではないかと思はれるのが居たので、またもやハッとしながら、あゝ春榮はもう此の世に居ぬのぢやと、頭から何か浴びせられたやうな氣持ちになつた。

左の小指を見ると、つい今日の午前まで春榮の篏めてゐた銀の指輪が、懷かしい手摺れに磨かれて、白く光つてゐる。和三郎は窃とそれを拔き取り、程近い橋の上まで行つて、恐る〳〵風で後前を見い〳〵自分が入水するやうな心になつて、其の指輪を道頓堀川に投げ込んだ。欄干から首差し伸べて窺いて見ると、河の水は黑く流れて、波紋も見えずに、懷かしの指輪は呑まれて了つた。この河の底に、自分の死んだ後々までも、指輪は泥に塗れてゐるであらうと、和三郎は往來の人におど〳〵しながら、急には立ち去り兼ねた。

また芝居の前へ出て、それから少し行くと、暗い横町が見付かつたので、南へ南へと急ぎ足に歩いた。圓い軒燈の怪しく光つた家から、婀娜かしい聲で呼び立てられたのも、耳へは入らなかつた。

行き行くと、小高い堤があつたので、それへ這ひ登つた。何時しか町は盡きて、郊外の畑の中へ出てゐたのである。振り返へると、大きな市街の空は一面に赤く染まつて、夥しい人いきれが天へも屆きさうに思はれた。近まはりの家々からは、燈火の私語が漏れさうであつた。

考へて見ると、春榮の死骸の橫はつてゐる神社の橫を通らなければ、此處へは來られぬらしいのであ

るが、今までそれと氣が付かなかつた。
星影に透かすと、自分の這ひ登つた堤は鐵道の線路であつた。冷たい四條の鐵が長く／＼帶の如くに引いてゐるのを、つい知らずにゐたのである。和三郎の心は矢張り亂れに亂れてゐる。
「この上に何時までもかうしてゐたら、今に火の車が迎ひに來て、十萬億土へ連れて行くであらう。」
と、彼れは思つて、線路の上へ腹這ひになつたけれど、稍暫くすると、轟と雷のやうな響が遠くから聞こえて來たので、怖ろしくなつて、俄かに堤を滑り下りた。
明るい電車が疎らに客を載せて馳せ去るのを見送りながら、和三郎は堤の下にしよんぼりと佇んでゐた。
「あの電車に乘つたかて、行く先きは知れたもんやが、下敷きに轢かれたら、遠い／＼ところへ行かれるのやなア。……」とも彼れは思つて、また堤へ這ひ登つた。(完)



ある相談

武者小路實篤

（昔、ある國で人の生命に就て次ぎのやうな相談會があつた。三人とも絶えず烟草をのむ）

甲。それでAは死刑にきまつた。今度はBだ。

乙。Aが死刑になればBも死刑にするより仕方がないでせう。罪が同一ですから。

丙。しかしBはA程の勢力家ではない。今度のことだつてBはA程の自覺があつてしたことではないでせう。獨立、自由、祖國の復興などと云ふ美名に浮かされた形がないとは云へないでせう。

乙。それはさうかも知れない。しかしそんなことを云つてゐたら皆ゆるさなければならなくなる。誰だつて浮かされてゐるのだ。Aだつてさうだ。それにBをゆるすとなるとCもDもEも皆ゆるさなければならなくなる。そんなこと

をしたら法律の尊嚴がなくなる。皆法律を見くびることになる。ついでは我が國の威嚴にかゝはることになる。

甲。まあさう云ふむづかしい話は別として、Bを許すとなるとCやDも許さなければならくなる。一人きり殺さないと云ふことは出來ない。動機はともかくとして罪は同一だ。Bは勿論死刑にすべきだらう。

丙。それなら矢張り殺すとしませうか。

乙。誰だつて謀反してつかまれば殺される位いなことは知つてゐる。この事實に疑問を入れさすのはよくない。何かゆるすいゝ口實でもあれば別だが。生かしたつて別に恐ろしい奴でもないでせうが、殺しても惜しい奴でもありますまい。Aの御相伴で謀反をしたにしろ、謀反した以上は殺すより仕方がありますまい。

甲。それならBも死刑にしやう。何しろ一ケ月の間に千人以上かたをつけなければならないのだからぐずぐずしてはゐられない。

丙。殺される奴はたまりませんね。

乙。それも運さ。自業自得でもある。

甲。逢へばいゝ奴かも知れないがそんなことはかまつてゐられない。今度はCとDだ。Bが死刑なら勿論じ、Dも死刑だらう。

乙。僕は異議なしだ。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新春思想界の新權威

文學博士 服部宇之吉先生序

文學士 手塚宏壽先生
文學士 手塚良道
文學士 柴田安正 共著

東洋思潮講話

（新刊）

四六版上製
箱入頗優美
定價壹圓
送料 內地金八錢
其他 十二錢

思潮界の羅針盤たり通史である其内容は乞ふ各新聞の批評是れを盡せり

（時事新聞曰く）孔老の二大思潮諸子百家の哲理より中古の程朱學、近代の王陽明學等に至る迄を最新哲學の光明を透して祖述せる者篇を通じて頗る主觀的統一に富み文辭簡潔にして克く要領を得たり。

（やまと新聞曰く）現代の日本に於て最も動搖せる者は思想問題である舊思想は動もすれば棄られて最下は暗中摸索の狀態になつて居る依て吾人は自ら進んで此根本問題を解決するの要ありとなし先づ東洋に於ける思潮の由來と變遷とを研究し加ふるに剴切なる解釋を加へたり。

（大阪毎日に曰く）支那を中心とせる思想の由來並に發達に對し主觀的統一のある簡明な解說を與へた著述であつて斬新な見解と說明とに富み支那思想に對する概括的智識を得るに頗る便利に出來て居る。

重版 又々重版

アカギ叢書

○定價金拾錢送料各二錢
内容解說總目錄進呈
第一編より既刊全部缺本なし

（中付六の一）

發兌 東京麹町區三番町五〇 赤城書店 振替東京一〇四三二 電話番町二八〇番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(中付六の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

辭書界の霸王

森鷗外博士序　落合直文著

日本大辭典　ことはの泉

落合直文著　○洋裝四六判全二冊　正價金五圓

文學博士芳賀矢一著

語數二十萬餘言○紙數三千百餘頁○挿畫一千餘個○索引(アイウエオ索引、いろは索引、畫引索引)二百頁

○體裁背皮美製　▲補遺共全二冊▼

正價金拾壹圓　送料　內地十二錢　臺樺各四十五錢　支朝各一圓卅錢

縮刷日本大辭典　ことはの泉

文學博士芳賀矢一著

正價金五圓　背革五拾錢增　送料金廿四錢

新式辭典

文學博士芳賀矢一著

▲四六判美製金一圓▼

正價金貳圓五拾錢　送料十六錢

日本人名辭典

收集人物……約五萬餘名

洋裝四六判背革美製箱入金一冊

正價金參圓　送料內地金十六錢

新式獨和大辭典

文學士登張信一郎著

▲語數十萬餘語▼

洋裝新形全一冊　▲紙數二千一百餘頁

正價金參圓　送料十二錢

增訂新佛和辭典

野村泰亨著

▲語數六萬五千餘　洋裝全一冊

▲特價金一圓八十錢　送料內地八錢

正價金二圓二十錢

新譯獨和辭典

洋裝新形美製全一冊　紙數一千三百三十頁

特價金壹圓三拾錢　送料內地八錢

(正價金一圓六十錢)

發行所　東京日本橋　大倉書店　振替東京二三八

(中付六の三)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(中付六の四)

丙。どうもすぐ異議なしと云ふのも氣がひけますが。別に異議があるわけではありません。

甲。それならC、Dも死刑にきめる。一たい今度の事件はことがらが明白だから、それに皆もいさぎよく自白してゐるから、裁くのには裁きいゝ。そのかはり手加減をしてやるのはむづかしい。之が同國人だと厄介だが、土人相手だから簡單だ。今度はE、Fだ。Eは强迫されたので謀反したやうなことを云つたさうだが、あの面つきではゆるすのは考へものと思ふ。それに人望家の一人だから今度のことをいゝ幸にして死刑にする方が安心だと思ふ。

乙。さうです。あいつは中々土人にしては頭があるさうです。

丙。しかしEは終身懲役位いでいゝかも知れませんね。

甲。處がその終身懲役と云ふ奴は餘り面白いものではないよ。かう云ふ時に殺してしまへばEも一山百文の人間になつてしまつて、人望家と云ふことがわりに邪魔にならずに殺せると思ふのだ。

乙。それは殺さなければいけないよ。あいつは特に殺してくれと内々僕にまで云つた奴もある。あれが生きてゐると始末によわるさうだ。

甲。それなら死刑にしやう。

丙。それならFも死刑にしますか。

甲。よし、Fも死刑と。かうやつて一人々々の生命を消してゆくと思ふとあまりいゝ氣持もしないが、之も國家の爲には仕方がない。一家の事情なんかくわしく知らないからやりいゝのだね。今度はGだ。

乙。Gも死刑だらう。

甲。こゝいらへんを一人助けてもいゝと思ふのだ。
丙。Gを助けるのならFも助けてもいゝと思ひますね。
乙。さうするとBもCも助けなければならなくなる。
甲。一たい、死刑と終身懲役の區別はさうはつきりしてゐるものではない。GとFとの罪のちがいは大したちがいではない。しかしGはFよりも人がいゝ奴ださうだ。それに罪を後悔してゐるさうだ。こゝらで一人助けておく方がいゝとも思ふのだ。
丙。Hはどうする。
甲。Hか。Hは死刑だね。Gをゆるせばは死刑にしなければならない。さうたすけるわけにはゆかないからね。
乙。それならGは終身懲役、Hは死刑ときめますか。何しろまだ千人以上のこつてゐるのだからぐずぐずはしてゐられませんね。罪名の同じものは一たばにきめてしまう方がいゝでしやう。どうせ土人だから誰もやかましくは云はないでせう。
甲。×國人を手をおろして殺したもの、家に火をつけたものは自白によつて百三人はゐる。之はのこらず死刑にしていゝと思ふのだ。
乙。それは勿論許すわけにはゆかないでせう。尤も同情の出來ないこともないが、以後の見せしめに殺した方がいゝでせう。
甲。どうせもう我々を信用してやしない。時さへあれば謀反しやうとする奴ばかりだからね。無理もな

い處もある。何しろ亡國の民になつてはたまらない。

丙。殺しだしたら切りがありませんね。

甲。しかし許し出したら又切りがないよ。一たい今迄の方針がよくなかつたのだ。しかし過去のことは過去のことだ。もうこうなつてはなまやさしい同情は反つて相手をつけあがらす許りだ。

丙。少し慘酷は慘酷ですね。

甲。どうせ少しは慘酷なこともしなければ、土人をおさめてはゆけないよ。何處の國だつて屬國をおさめてゆくのは武力によるより仕方がないよ。しかしそんな話をしてゐては切りがない。百三人のこらず死刑にきめるか。

乙。きめていゝだらう。その內一人を助けて一人を殺すと云ふわけにもゆかないでせう。罪は同じですからね。

丙。しかし心のなかは皆別々ですからね。隨分善良な奴が他の奴に强迫されてやむを得ず家に火をつけた奴もあるでせう。無自覺に面白半分火をつけた奴もあるでせう。人を殺した奴にだつて、殺さなくつていゝ人間を殺した奴と、殺さなければ自分が助からない場合にたち至つたので殺した奴と。

甲。そんなことを言つてゐたら切りがないよ。我々は神ぢやない。ある點以上はわかるわけはない。そんなことを云つてゐたら土人は一人のこらず殺していゝか許していゝかわからなくなる。一生考へたつてわかりつこはない。

丙。そんなことを思ふこともありますね。

甲。しかしそんなことを云つてゐたら事務がはかどらない。それにその爲にちやんと法律があるのだからね。法律をまげることは出來ない。

乙。さうですとも、自然にも法則があつてそれによつて死ぬものは死ぬ。過失だつたと云つてもおいつきませんからね。

丙。しかしゆるさうと思へば又理由をつくることは出來ますからね。

甲。君はGをゆるすことに不服なのか。

丙。Gをゆるすことに不服はないのですが、Hもついでにゆるしたらどうかと思ふのです。

甲。それは出來ないよ。Gだつて許せる人間ぢやないのだがEを殺すとするとどこゝらで一人は生かさないと都合がわるい。それにはGが一番適當だと思ふのだ。齡もとつてゐるし、無口だし。人を煽動するやうな質ではないやうだ。それにEとはちがう意味で人望家でもある。政略上Gは生かすがいゝと思ふのだ。

乙。さうきめたらいゝでしやう。それから百三人も死刑にきめましやう。Hも死刑にきまつたのですから、つまり百十一人だけは刑罰がきまつたことになるわけです。

甲。あと九百二十六人ある。之が中々厄介だ。

乙。それからIはどうしましやう。

甲。Iも死刑だね。どうも。あいつは裁判の時に、いやに惡度胸を示して得意になつてゐた。それにまだ二十一のくせに煽動家の素質をそなへてゐる。

乙。腕力も強いさうですね。

甲。(丙に)君はどう思ふ。

丙。御考への通りでいゝと思ひます。

甲。君は僕が云つたことをわるくとつたやうだね。君が皆を助けたがる位置に立つてくれ、乙君が皆を殺す位置に立つてくれるので裁判が公平にゆくわけなのだ。僕は決して君の言葉をわるくはとらない今度のことが落着したら君の手柄は勿論上申する心算だ。乙君の手柄と一緒に。何しろ心を一つにしてくれないと困る。

丙。勿論、私は別に不服に思つてゐることはありません。あなたのおつしやることを無理とは思つてゐないのです。私は何も十人の生命を大事に思つてゐるわけではないのです。どうせ彼等は亡びるものだと云ふことを認めてゐます。しかし恩恵をほどこすべきものにはほどこされた方があなたの名譽の爲にもよからうと存じたのです。

甲。ありがたう。何しろ人の生命の問題だから私だつておろそかには決して思つてはゐない。百三人の内でももう一度順番が來た時助けるべき奴が出て來たら助ける心算でゐる。處でIまできまつた。今度はJだ。JはIとまるで同じ罪だから死刑にきめるのに異存はないと思ふが、君達はどう思ふ。

乙。勿論。異存はありません。

甲。君はどう思ふ。

丙。私も賛成します。

甲。かう事務がはかどると私も嬉しい。死ぬ奴は少し可哀さうだが罪名がはつ切りしてゐるのだから助けやうもない。(乙に)今迄に都合何人きめましたかね。

乙。十人だけきまりました。

甲。あと二人きめたら少し休みませう。KとLですね。生かしても殺してもいゝやうな奴だけれど、罪は罪だから死刑にするとしましやう。一體に土人は頭が簡單で、噓を云ふことを知らないから助けやうがありませんよ。

乙。本當です。云ひやうによれば助けてやらうと思ふ時にもいやに敵愾心を起して殺されても恨みをはらさないではおかないと云ふ勢を示すのですからね。

丙。窮鼠ですから死もの狂ひで來ますからね。

甲。之で一ダースきまつたわけですね。その内死刑が十一人。終身懲役が一人ですね。このわりでゆくと皆で九百人あまり死刑になるわけですね。何かあると助けられるから都合がよろしいが今度はさう云ふわけにはゆかないでしやうから、九百人殺すとなるといくら土人でも少し厄介ですね。せめて死刑になる奴を三四百にとめておきたいものですね。それで少し手加減を加へる必要があると思ふのですが、君達どう思ひます。

乙。至極贊成です。

甲。(丙に)君の考へは。

丙。異存はありません。

甲。さうするとGを十五年懲役にしますかね。

乙。それがいゝでしやう。

甲。それで今度は丙君の言葉もあつたからHとそれからKかLの內どつちかを終身懲役にする方がいゝと思ひますがどうです。

丙。二人とも終身懲役にしてもかまわないでしやう。

甲。それならさうしますか、運のいゝ奴ですね。それなら十五分間休憩するとしましやう。(一五、一二、七、)

を抱へてゐた妻も今はもう六人の子持ちである。もう皮膚にも光澤が無くなり髮の毛も薄くなつた中婆さんである。其頃緒につきかけて有望なるもの丶如く思はれてゐた事業はどうであつたか、幾多の波瀾を經た後ち格別目ざましい事も無しに現在ある通りの狀態である。今になつて見るとあの當時若い心を躍らした程のものでは無く、元來事業其ものが平々凡々たる詰まら無い事業であつたことが判るのである。其でゐて私は毎々日々其仕事に逐れて、其積り〳〵滯り〳〵した仕事を此の鞄の中に詰め込んで此溫泉に落延びて來た始末である。溫泉に這入るのも餘り運動を缺いて腹が空かぬので仕方無しに、運動代りに這入るのである。出て來るとすぐ日受のい丶座敷に陣取つて仕事に取りか丶る。流石に山間であるから朝晩は冷えるけれども晝中は暖か過ぎる程暖い。

私の部屋の前には大きな欅の木がある。其が盛に落葉してをるのが明け暮れ眼に入る。風の吹く時などは目覺しい勢で大空から降つて來る。私の部屋の疊の上にもいつもから〳〵になつた奴が轉げて居る。

私の部屋は川に臨んでゐて、部屋と川との間に狹い往來があるので、其處を通る人が私の部屋から見下ろされる。——私の部屋は往來より少し高くなつてゐる——或時見るとも無しに見て居ると別に變つた風體といふでは無いけれども、何となく一目見て忘れることの出來ぬやうな四十四五の神經質らしい男がふと目に留まつた。其日浴場に行つて見るとちやんと此宿の湯風呂の中に首だけ出して漬つてゐた。別に人の顏を見るでも無く、同じ方を見詰めて靜にぢつと漬つてゐた。が、忽ち非常な勢ではね上るやうに湯壺から出て、石鹸を頭の先から足の尖迄一度に塗つて、手桶に酌んだ湯を腦天からぶつか

ける容子などが餘程せつかちのやうに見えた。かと思ふと又湯壺の中に漬つて極めて悠長に手足を延ばしてゐた。稍瘠せ地の皮膚のかさ〳〵してゐるのが目に立つて見えた。

其日は其ぎりで物も言はなかつたが二三日して又同じ浴場で出逢つた。少し湯がぬるかつたので熱い元湯を出さうと思つて私は其人に一寸斷つた。

「少し熱い湯を出しますがよろしいでせうか。」

「よろしうございます。」

其男は早口であつた。其から大分熱くなつた湯に漬つた時其男は其かさ〳〵した皮膚を眞赤にしてゐた。

「少し熱くし過ぎましたか知ら?」

「いえ、結構です。」

其男は矢張り口數が少なかつた。其日は其限りで物も言はなかつた。

(二)

仕事が運びかけたので少し落着きが出來て來た。其處で仕事の合間〳〵に私は此文章を書いて見る氣になつたのである。私は何を書くか判らぬが、唯考へ出した事、見聞した事などを順序も無く書いて見ようと思ふ。

私は十八の年に父を亡くしたのであつたが、其時醫師は何故に此父を殺したのかと唯醫師を怨めしく

思つた。父は胃癌であつたのだから如何なる名醫が出て來ても助かる筈は無かつたのであるが、其當時の私は父は死ぬべき人で無かつたのを醫師の不行屆から殺したのだと考へた。理屈では人は死ぬるものだといふ事位百も承知してゐたのであるが、感情上どうしても自分の父が死ぬるものだとは考へられなかつた。其時醫師が私の顏色を見て其座を外したのも尤であつた。私は其醫師を撲り殺して遣り度い位に考へたのだもの。血相の變つた青年の顏を見て醫師が恐れを爲したのも尤な次第であつた。其から後ち私は隨分親戚のものや友人の死ぬるのを見た。母が死んだ時には仕事の都合で歸省することが出來なかつて、其死目に逢はなかつた。神田の牛肉屋で友人と一緒に酒を飲んだあと飯を食つてゐる所へ死去の電報が來たので私は飯を吐き出して泣いた。長病であつたので、いつ死ぬるかといふ事は固より豫期されなかつた。しかし折も折、牛肉で酒を飲んだ揚句飯を食つてゐるところへ此報知を得たので私は自分の淺ましさを振り返つて口惜しかつた。私は友人に禮を失することなど忘れてしまつて、自分が主人であり乍ら、自分と一緒に牛肉を食つて酒を飲んだ友人が腹立たしくなつて、碌に友人には物も言はずに自分の家へ歸つて來て獨りで足りるだけ泣いた。其程ではあつたけれどももう此時は醫師を恨むやうな心持は無くつて、母は早いか遲いか死なゝければならなかつたもの、其が死んだのだとすぐあきらめてしまつた。澤山自分に親しいものが死んだ揚句、もう感情上にも自分の骨肉の死も世間の人の死と同樣抗むことが出來ぬものと觀念したのであつた。ところが其考が、自分の子供の上には又一應後戻りがして、私は殆ど最近に至るまで自分の子供は死ぬるもので無いやうな心持がしてゐた。私の第二女は壯健に生れついたのが、生れて間も無く百日咳に取つゝかれ其揚句が肺炎にな

つたので、一時はもう助からぬものゝやうに醫師は言つてゐた。親戚のものなども、もう私にあきらめた方がよからうなどゝ言つたが私はどうしても自分の子は死ぬるものでは無いと思つた。僅かに死なゝいといふ自信があつた。其で私は自分一人が其子を引受けて夜の目も寢ずに介抱した。醫者は私の氣違ひ染みたのに少しあきれてゐた。けれども其結果其子は助かつた。其から隨分長い間病弱の兒であつたが、もう尋常を卒業するのも間も無い昨今の年になつて餘程强健になつた。其から後に生れた兒も、强健に生れて置きながら兎角風邪がもとで肺炎などになつて、又か〳〵と思ふ位であつたが、矢張り、自分の子供は死ぬるものか、といふ自信は强烈であつた。さうして又實際皆助かつた。皆相當に强健な兒に育ち行いた。ところが此自信も最近に至つて崩れてしまつた。といふのは私の六番目の子、其は女にすると四番目に當るのであるが、其第四女が、これは他の子供と違つて少し月が足らずに生れたらしく、生れ乍ら弱かつた上に又例の肺炎にかゝつて、其結果腦も少し惡くしたらしく、三つになつてまだ足も立たず首も据はらぬ位であつたが、其が到頭梨の花の咲いてゐる時分に死んでしまつた。其前から私は此子供はもう到底助からぬものだと觀念してしまつた。其でも初めて肺炎になつた時は、矢張り前の多くの子供と同じやうに是非助ける積りで火鉢を入れて一室をぬくめたり、濕布をしたり、吸入をしたり、あらゆる手段を盡くしたが、其結果腦を惡くしたらしく、肺炎はなほつても低能兒みたやうな風になつてしまつた。其後醫者に聞いて見ると、もう斯る肺炎の療法は舊式になつてゐるので、矢張り換氣法をよくして、なるべく自然に則る方が、あとの結果がよいやうだと言つた。骨肉も尙ほ死ぬるものだといふ事は父母の死以來一應合點されてゐ乍ら、其が自分の子供の上になると、何の理屈無

しに決して死なぬといふ堅い自信を持つてゐたものが此時以來がらりと崩れてしまつたのである。春になつてから肺炎が再發して、呼吸の數が四十になり六十になり八十になり、脈の數が百になり百二十になり百五六十になり、まだ齒も十分に生えてゐなかつた齒ぐきで苦痛の餘り母の手に食ひついた、といふやうな事を聞いた時、私はもう其子の顏を見るに忍びなかつた。其子の介抱は妻に任せつきりにして表から歸つた儘すぐ座敷の机の前に座つてしまつた。

「相變らず苦しさうです。少し見てやつて下さい。」と妻は言つた。其には私の冷淡を怨むやうな語氣が見えた。私は机の前を立上つて奥の間に行つて見た。其子は睡つてゐるのであらう、呼吸の度に頭の動くのが見えて、見るからに苦しさうである。斯る時小鼻を出來るだけ膨らませて、腫れ塞がつた肺臟に一生懸命に空氣を吸込まうとする努力は私の幾度となく他の子供の肺炎の時に實見したところで、其は見てゐる方が一層苦痛を覺えるのであつた。が、此時は正面に廻つて最早其を見るに忍びなかつた。私は其儘又座敷の机の前に座つてしまつた。

此態度が妻には不平であつた。其も尤もの事であつた。今迄の子供の病氣の時には殆ど妻には關係させない位にして私一人で介抱に當つて來たものであつた。其が此子供に限つて、妻に一任して振り返らうともしないといふ事は隨分慘酷な事のやうに解せられたであらう。又慘酷なことかも知れなかつたのである。けれども此時分からの私には、もう死ぬるものを強いて抱き止めやうといふやうなそんな熱は無くなりかけてゐたのである。

「凡てのものゝ亡びて行く姿を見やう。」

私はそんな事を考へてぢつと我慢して其子供の死を待受けてゐたのである。呼吸を引取る朝は大分咳が樂さうで肺部の腫が減じかけて痰が分解しかけたのだらうと思つた。けれども脈がだん〳〵と微弱になつて來て賴み少く思はれた。醫者はヂキタリスを用ゐてゐたので、もう其が今日位から利くだらうと言つた。其が責めてもの賴みであつた。子供は此日から私の机の置いてある座敷の方に移された。暫くの間非常に靜かに眠つてゐるので私は妻に勸めて二人で表の空氣を吸ひに出た。豆の花の咲いてゐる田圃路を一町許り歩いて歸つて見ると、病兒の傍には長女が坐つてゐた。「時々妙な聲を出しますよ。」と長女は氣味が惡さうに言つた。成程丁度風が空洞に當つて鳴るやうな不思議な聲を時々出した。呼吸を引取つたのは其から間も無い事であつた。抱き上げると一層苦しげに體を藻搔くので此の一兩日は抱かなかつた。其爲め呼吸を引取る時も別に抱き上げやうといふ心持が妻にも起らぬらしかつた。私も抱き上げてやれと妻に言はなかつた。三歲の少女は父母にも抱かれずに、風の空洞を吹くやうな聲を殘して其儘瞑目してしまつたのである。

葬儀萬端は私一人でした。人に賴んでやつて貰はねばならぬといふ程私の心は取亂してゐなかつたのである。

私は其後度々墓參をした。凡てのもの丶亡び行く姿、中にも自分の亡び行く姿が鏡に映るやうに此墓表に映つて見えた。「これから自分を中心として自分の世界が徐々として亡びて行く其有樣を見て行かう。」私はぢつと墓表の前に立つていつもそんな事を考へた。

「何が善か何が惡か。」

「善惡不二」と言つたり「不思善不思惡」と言つたりする佛家の言を自分勝手に解釋して其頃の自分の心持にぴつたりとはまるやうに思つたのも其頃であつた。「善人すら成佛す、況や惡人をや」と言つた親鸞上人の言葉が流石に達者の言として染々と受取れたのも其頃であつた。

ぢつと考へて見ると私の頭の中には種々の葛藤があつた。之を明るみに出して見たら自分乍ら鼻持ちのならぬやうなものが澤山ありさうに思へた。「さながら成佛の姿なり」と言つた佛家の言をこゝでも思ひ出して、即ち此の善惡混淆、薫蕕同居の現狀其まゝが成佛の姿だと解釋した。頭の中許りで無く、私の世間で遣つてゐる仕事が善か惡か正か邪か。凡て其等も疑問とせなければならなかつた。私は其をも同じやうな考の下に正とも邪とも善とも惡とも考へやうとはしなかつた。諸法實相といふのはこの事だ、唯ありの儘をありの儘として考へるより外は無いと思つた。

月給を貰つて會社の社員になつてゐる以上其會社の規則に背いたら免職されるのは當然の事である。其と同じく社會、國家の一員である以上、其社會、國家の種々の規則に背いた時其制裁を受けるのは是亦當然の事といはねばならぬ。けれども私は私の考へてゐる事遣つてゐる事をすぐ其世の中の規則で律し度いとは思はなかつた。世の中の規則で律しられるのは固より當然の事として恨まないが、自分て其を律して見る氣にはなれなかつたのである。自分は自由に考へやう、自由に遣らう、さうして善ければ社會的、國家的に榮へるであらう。惡ければ社會的、國家的に亡びるであらう、さながら山の起伏、水の流れ、其を眺めるのと同じやうに自分の事を眺めて見やう。私はそんな事を考へてゐた。

子供が死んでからもう一年半にもなる。自然私がそんな考に住してからもう一年半になる譯である。さうしてどちらかといふと、私の事業は其一年半の間にいくらか歩を進めた。一向榮えない仕事も此一年半の間には比較的成功をした。が、たとひ幾ら成功しやうともいくら繁昌しやうとも、私は一人の子供の死によつて初めて亡び行く自分の姿を鏡の裏に認めたことはどうすることも出來無い。榮えるのも結構である。亡びるのも結構である。私は唯ありの儘の自分の姿をぢつと眺めてゐるのである。

(三)

仕事は相當に運んで行つた。

或夕方私は窓に肱を凭せてぢつと其邊の景色を眺めてゐた。部屋の前の欅の落葉は此二三日最も盛に降り注いでゐたと思つたが、もう梢に殘つてゐる葉は餘程少くなつてゐた。其でも風が吹く度に其殘り少なの葉を尙ほ見事に振り落すのであつた。其から此欅の隣に今迄は殆ど常磐木かと思はれる程な青い色をしてゐた榎の葉が此頃少し黄色を帶びて來た事が明に看取された。欅や榎は殆ど同時に落葉するものかと考へてゐたが、之で見ると大分遲速があるといふ事が判つた。

欅の殘りの落葉が川面におつかぶさるやうに降り込む。其川を隔てた向ふ岸の一軒の板葺屋には壁に「おもちや御土産いろ〳〵」などゝ書いた板が打つけてあつた、其はおもちや屋の裏手になるのであるが私の泊つてゐる此宿の客に見えるやうに其處に板が打つけてあるのであつた。其隣りは藝者屋で、これも裏側だけが見えるのであるが、時々三味や太鼓が鳴るといふ外、一見してどうしても藝者屋とは思

へなかつた。庭には霜枯れのした菊のあるのが破れた垣の間からちらついて、其上には洗濯物が干してあつた。其三味や太鼓も滅多には鳴らなかつた。少し川上の方には水車があつて、其は休む時無しに絶えず回轉してゐた。霜の澤山降る朝などは其邊の板葺屋も庭も畑も橋も石も、凡て天地一面に眞白になるのであるが、其中で此水車だけはいつも水に濡れて黒い色をして廻つてゐた。私は草臥れた仕事の手を休めてぼんやり其等の景色を眺めてゐると、其水車の手前の板橋の上を足早に歩いて來る一人の男が目に入つた。其男は彼の湯風呂の中で逢つた男であつた。

丁度私のゐる部屋の前に來た時一寸帽子を取つて辭儀をした。

「私の座敷はこゝです。お立寄り下さいませんか。」と私から聲をかけた。

「有難う。」と言つて其男は其處に立どまつた儘私の方に背を向けて矢張り私の見て居つた方向を見た。

「貴方は何處にお泊りですか。」と私は其男の宿をたづねた。

「私は一軒家を借りて家族と一緒に住まつてゐます。」

「今橋を渡つてお出のやうでしたが、川向ふにお住居ですか。」

「さうです。あの水車の向ふ側の家を借りてゐます。」

日がだん〳〵と落るに從つて南の山の上の雲は眞赤に夕やけがし始めて、毎日續く此頃の天氣が、明日も又好晴であることを堅實に保證するやうに見えた。其夕燒けを見上げた其男の顏はいつもよりは赤く彩られてゐた。

「一寸溫泉に這入つて來ます。左樣なら。」と言つて其男はさつさと足早に行つた。宿の溫泉に來るのかと思つたら、川中に在る外湯に這入つて行つた。

「兎に角變つてゐる。」と私は思つた。職業は何だらう。官吏の非職とか、會社を辭職して慰勞金を貰つたとか、そんな風の人かも知れぬが、どうもさうらしく無いところもある。何だらう。と一寸判斷がつかなかつた。

其から數日經つて私は夕飯後山腹の梅林のところを散歩した序に一つの徑を尙ほ辿つて登つて行くと、其處に怪しげな或場所のあるのが眼にとまつた。遠方からでも其臭氣で其がすぐ火葬場だといふ事が判つた。私はどういふものだか火葬場には非常に緣が多い。流行病で亡くなつた私の兄を初めとして親戚のものや友人などを大分火葬場に連れて行つた。現に去年亡くした私の子も矢張り火葬場に連れて行つたのである。いくら設備がよく出來てゐるにしてもあの一種の臭氣だけは遠方から鼻につく。况して此處の火葬場は全く野天で、松林の蔭になつてゐる或空地に溝が掘つてあつて、其邊は灰ともつかず人の脂ともつかぬやうなものが黑ずんだ色をして一面に土地を染めてゐる許りであるので、其の臭氣は大分遠い處から私の鼻に傳つて來たのである。

「こんな所に火葬場があるのか。」と私は東京近傍の設備の十分に出來て居る火葬場許りを見て居つたので、此の荒蓼たる光景を見て悽愴の感に打たれた。其時ふと眼にとまつたのは其溝のやうに掘つた穴の一方に小さい棺の置かれてあることであつた。

「おや棺が置いてある。」と私は其を凝視した。人も何もゐない此火葬場に唯棺が裸の儘で一つ置かれて

あるといふ事は少なからず私の心をおびやかしたのであつた。

「どうしたのであらう。」さう思ひ乍ら私は近づいて見た。其は小さい棺であつた。まだ生後一二ケ月しか經たない位の赤ん坊を入れたものと受取れた。其にしても此棺を此處に持つて來た人はゐないのだらうか。隱坊はゐないのであらうか。私は再び其邊を見廻して見たが、其らしい人はゐなかつた。

私は心を落附けて四邊の容子を見た。其處に小さい一つの建物があつた。建物といふよりは盆の聖靈棚のやうな簡單なものに屋根だけはついてゐた。さうして其棚の上に一つの位牌のやうなものが置いてあつた。夕暮の光にすかして見ると「釋迦牟尼佛」と書いてあつた。其邊は埃だらけであつたが、其でも其前には線香立てがあつて、其に一束の線香が燻つてゐた。これで見ると今は人がゐないけれども、此處に此線香を供へた人が最近迄居たことだけはたしかに想像された。線香は硬い濕つた灰の中に亂雜に立てられたので、おもひ〳〵の方向に向いて、其中には消えたのもあつた。

私はぢつと其「釋迦牟尼佛」といふ字に見入つた。其は誰が書いたのか下手な粗末な字であつたが、此場合いかにも權威ある貴い字に見られた。此棺の中に這入つてゐる子供は誰の子供か、どういふわけで斯く淋しく此處に棄てられてあるのか、其はどうであらうとも、兎に角此處に居る釋迦牟尼佛は其の絶對の權威で此のあはれな子供の亡骸を護つて居るやうな心持がした。萬卷の經文の中に出て來る釋迦牟尼佛よりも、此場合此の位碑の上に現はれて來てゐる釋迦牟尼佛は絶大の力があるもののやうに私には受取れた。

暮れやすい日はもう大分其邊を薄暗くして來たのであつたが、其時片方の手に提灯をさげ片方の手に

一束の薪を持つてひよつこり其處に現はれた一人の人があつた。提灯はまだ灯がともつてゐないので近よる迄其がどんな人であるか判らなかつたが、近よつて見て初めて五十餘りの男であることが判つた。

「今晩は。」と男は私の顏をしげ〳〵見乍ら挨拶した。一體私が何物かといふ事を餘程不審に思つてゐるらしい容子であつた。

「こゝは火葬場だね。」と私は態とそんな事を言つて見た。其が此憐れな男の不安を打消すことにならうかと考へたからであつた。

「さうです。燒場ですよ。」

果たして男は、私が散歩の序に偶然斯んな處に來會はせた浴客であるといふ事を合點したらしく、落着いてさう答へた。

私は何處迄も散歩客のやうな風を見せやうとして當ても無く其邊をぶら〳〵してゐた。さうして見るとも無く其男のすることを見てゐた。

男は先づ片方の手に提げてゐた薪を地上に下ろして、提灯を松の木にぶら下げた。其から其薪をほどきかけたが大分手許が暗くなつて來てゐるのに氣が附いたらしく立上つて其松の枝にかけた提灯を取へ下ろして其に火をつけ始めた。マッチをする時其大きな鼻と巖丈な手とが明に照らし出された。

火のともつた提灯は置場所に困つて又もとの松の枝にかけられた。其は大分距離があるので其男の手許を照らすには十分で無かつた。

其でも其覺束無い光の下に其男は萬事を取運ぶのであつた。先づ懷から二三本の蠟燭を取り出して

地上に置いた。其は此の提灯の蠟燭が盡きた時の準備と思はれた。其から先にほどきかけた薪の處にぢり寄つて其の中から蓆の切を四五枚選り出して傍に置いた。薪許りかと思つたら其蓆の切も一緒に縛られてあつたのである。

男は其から溝の所に置いてあつた棺を抱くやうにして片側によせて、其溝の底に先づ蓆の切を三枚許り置き、其上に薪を交叉するやうに積重ね、其上に又彼の棺を抱くやうにして載せ、更に其上に殘つた薪を積重ね、其上に最後に蓆の切れの殘りをかぶせた。

併し男は一向火をつける容子が無かつた。さうして尙ほ其近處を立去らずにゐる私を又不審さうに眺め始めた。

「お前は頼まれて燒くのかね。」と私は又近よつて行つてたづねた。

「いゝえお前さん、これは私の孫の佛樣です。」と其男は不興さうに言つた。

「さうか、お前の孫さんなのか。可哀さうに。何病で死んだのかね。」

「矢張り腦の病氣だね。僅か三日許りの患で取られました。」と聲を曇らせた。

私は線香がもう燃え切つてしまつてゐる彼の建物の方を見た。提灯の光りは其處迄屆かぬので、唯黑い小さな建物がぼんやりと見える許りであつたが、其暗闇の中にも彼の釋迦牟尼佛と書かれた文字が明に目に映るやうに思はれた。

私は此哀れなる男が其の棺の下の蓆の切れに火をつける前に其松林の蔭を出て歸路についた。山を下りながら後をふりかへつて見ると淋しい提灯の火影がものゝ陰になつたり現はれたりした。

(四)

彼の湯壺で逢つた男には其後逢はなかつた。或時又散歩の序に彼の水車小家の處へ出て其らしい家を心當てに探して見た。門や柱は大破の儘になつてゐる一軒の家に萱原といふ門標が出てゐた。門内には彼の藝者屋の裏庭に在るやうな霜枯れの菊が五六株あつた。私は大方此内であらうと思ひ乍ら通り過ぎた。

其日部屋へ話しに來た番頭に彼の萱原の事を聞いて見た。何事をも早呑込する番頭は、私が彼の湯壺の中で逢つた男が萱原其人であるかどうかを慥かめる前に、滔々と萱原の事に就いて話した。

「あの萱原さんは何です。奥さんに關係したことか、其とも何か金錢上の事か、どうもあの方には何か秘密があるのだらう、といふ評判です。退役軍人だとかいふ噂がありますが、どう見てもさういふ柄には見えません。初め御夫婦連れで手前方へお見えになりまして半月位御逗留でしたが、一先御歸京になつて、其から又お見えになつて、今度はあの家を借りてお住居になつたのです。もう半年もゐらつしやいますでせう。奥様はよほどお美くしい方です。……」

そんな事を立てつゞけに諜つたが、つい彼の湯壺の中の男が萱原であるかどうかは聞くことが出來なかつた。けれども何か秘密のある男のやうだといふことが、ふと彼の男の神經質らしい顏に一層暗い影を投げた。

其晩の事であつた。警鐘が鳴つて「火事だ〳〵」と騒ぐ聲が聞こえた。雨戸を開けて見ると水車場の

すぐ向側と覺ゆるところに火が燃え上つてゐた。

「萱原の家に相違無い。」と私は直覺的に思つた。「秘密のある男」と言つた番頭の言葉がすぐ其火事と結びついて、其處に何か變事が無けりやならぬやうに思はれたのである。萱原夫婦の屍が火中から出る事をも想像して見た。夫婦は己に逃走して此地にゐない事をも想像して見た。

が、翌朝になつて聞いて見ると、其は萱原の家では無かつたさうである。水車場の向ふのやうに見えた火は夜だから近く見えたので半町も離れてゐたのださうである。

私はふと萱原の上にこちらから強いて異變を待設けつゝあつたのだといふ事に氣がついてをかしくなつた。其上彼の湯壺の中で出逢つた男が果して萱原かどうか、其さへ確定したわけでは無いのだと思ふと噴き出しさうにをかしくなつて來た。

其後又萱原の門を通つたが、菊が一層霜枯れてゐる許りで門標にも其他にも何の異變も無かつた。又彼の男の無事な後ろ姿をも二三度見かけた。

却つて一つの變事ともいふべきは、いつも私の部屋の前を手拭をさげて通つて居た三十七八の正直さうな少し足の惡い一人の男が或日巡査に腰繩を打たれて引張られて行つた。聞けば近處の百姓で、彼の水車場の向ふにあつた火事の放火犯人といふ嫌疑でつかまつたのださうである。其も何か遺恨の放火であるらしいといふ事であつた。

(五)

欅はもう夙くに枯木になつてしまつて僅に茶殼のやうな葉が二三枚死枝の尖にへばりついてゐる許りであるが、彼の遲れて黄葉した榎が、もう二三日前から落葉しはじめて、今日あたりは少しの風にも持ちこたへられ無いで、網を投げるやうに降りそゝぐ。

前の山の櫟林ももう赤つ茶けた色になつて、半分許り落葉した木の間には汚い山の地膚を見せてゐる。山脈は其から左へも右へも延びてゐて、其右に延びた、中腹迄畑になつてゐる邊の梅林の向ふに彼の火葬場の松林は見える。

すぐ川向ふには例のおもちや屋、藝者屋の裏側が並んで、其隣の空地には四五匹の雄犬が一匹の雌犬を取り圍んで今朝から喧しく吠え立てゝゐる。よく見ると其中にも雌の歡心を得てゐる犬とゐない犬とがあつて、怪しげな遠吼のやうな聲を出して吠え立てゝゐるのは其のゐない方の犬であることが判る。

川上の水車は相變らず廻つてをる。其水車小屋の陰に彼の萱原の家はある。

午前七時頃に漸く山を離れた太陽はだん〳〵と中天に昇りつゝある。

私は是等の景色を眺めながら近頃妻の私に言つた言葉を思ひ出してゐた。

「私は其も不平なのです。」

私は其時、

「僕は此頃子供が病氣した場合に以前程一生懸命に介抱する氣にはなれない。」と言つたのであつた。

眼の前の山川は其上に藝者屋やおもちや屋や水車小屋や萱原の家や、あの湯壺の中に居た男や、拘引された男や、火葬場や、其火葬場にゐた男や、赤つ茶けた櫟林や、坊主になつた欅や、落葉を降らす

榎や、其等のものを静に載せて、凡て時の移り行くのに任してをる。

「何が善か何が悪か。」

山川が静にありの儘を其掌の上に載せて居れば時は唯静に其等のもの、亡び行く姿を見せるのみである。其處に善も無ければ悪も無い。私はたゆまうとする心を振ひ起こして鞄の中の用事を片づけるより外に道はなかつた。



江島生島

小山内薰

（一）

徳川家の治世、延寶七己未年の事であつた。

江戸牛込築土邊に白井兵助といふ小祿の御家人があつた。年はもう六十に近かつたが、生れつき活達無賴な事が好きで、或は遊所に立ち入り、或は博徒と交誼を結び、稍もすれば喧嘩口論に腕立てをして、白刃の中へ飛び入り、わざと我が身に傷を受けて、巷説に名を賣らうとするおろか者であつた。

妻のお久も夫に劣らぬ不行跡な女であつた。かの女は半太夫が節を巧みに語り、楓江が三絃を上手に彈いた。その交友知己には芝居者が多かつた。元より蓮葉育ちの娃婦であつたから、二人の子供はありながらも、夫がよそに寢泊りする留守には、近所の放蕩者や浮氣娘を招き寄せて、夜の更けるまで彈いたり唄つたりの高調子を上げた。そして、彈き疲れ唄ひ疲れると、賭博に黄白の一夜勝負を快とした。それにも疲れると、男女入り亂れて、居汚なく雜り寢た。

夫の兵助はこれを知らぬではなかつたが、それに對して一言一句の異議をも挾む事は出來なかつた。第一かれは養子の身の上であつた。第二にかれは自身が大の放蕩者であつた。かれが牛込の家に眠るのは、月の內に僅か三晩か四晩であつた。

その頃、八官町の御堀通りに「比丘尼」と稱する隱し賣女が巢を食つてゐた。昔、地獄極樂六道の繪卷を衆人に指し示し、繪解きして佛法を敎へ勸めた熊野比丘尼が、いつの間にか自ら墮落して、眉を作り、白齒を磨き、紅をつけ、白粉を粧ひ、忌中の男を見るやうに月代を中がりにして、紗綾縮緬縞八丈などに紅裏をふかせ、黑き帶に裾を引き上げ、黑縮緬の投頭巾に色めかしく頭を包んで、異樣に媚めかしい情慾の誘惑者となつたのがそれである。兵助は桔梗長屋にお職を張る比丘尼妙訥、渾名をくされのお安といふのに思ひ思はれて、夜毎に抹香臭い膝を枕にしながら、女が籐に載せて唄ふ丹前柴垣の淫らな曲節に、家をも妻をも忘れて、心を現にするのであつた。

お久が夫の留守に招き寄せる男達の中に、達磨三郎兵衞といふ博奕の友があつた。かれは元大阪の生れで、七八つの頃江戸へ出府したものであつたが、小才の利く生れつきで、隆達節の小唄などを巧みに唄ふところから、その頃は葺屋町の狂言座市村宇左衞門の芝居に使はれるともなく使はれて、或は樂屋を働き、或は看板を叩いて客の呼び込みをしてゐた。かれは巧みに役者の聲色を眞似た。風俗も派手でどこやら役者らしい匂があつた。

お久は一目見たその時から、三郎兵衞の容色に深くも心を動かされたのであつたが、假にも不義などをしかけたら、日頃から氣の荒い喧嘩好きな夫に如何なる酷い目を見せられるか分からないと思つて逸

りに逸る意馬の手綱を、力の限り引き締めてゐた。

併し、兵助の耽溺は日毎に深くなるばかりであつた。かれが草深い山の手の家へ歸るのは十日に一度が、二十日に一度になつた。二十日に一度が、一月に一度になつた。お久は夫の留守を、日毎夜毎の逸樂に忘れながらも、さすがに瞋恚の炎を禁ずる事が出來なかつた。お久は不貞腐れになつた。

『命を取るなら取るが好い。靑比丘尼の手管に腰の拔けた男が、この私をどうする事が出來るものか。第一私は家附きの娘だ。離緣をするなら、こつちからして遣る。』

お久はかう思つて、一度に意馬の手綱を切つて放つた。逵磨三郎兵衞は或晚突然物狂ほしい人妻の抱擁に會つて驚いたが、元より一人身の身輕者とて、決してこの思ひもかけぬ幸福を辭さうとはしなかつた。

二人は忽ち賭博よりも危い歡樂の暗い淵に身を沈めた。二人は子供逹の現ない寢言にも、天井を走る鼠の音にも胸を轟かせながら、夜毎に秘密の世界を樂しむのであつた。今まで博徒と蕩兒の賑かな集會所であつた白井の家も、今は姦夫姦婦が寂しく暗い二人ぎりの中宿となつた。三郎兵衞は夜おそく來ては朝早く歸つて行つた。

或朝、お久が寢亂れた臥所をまだ片づけ切らないでゐる所へ、何の用があつてか、隣りに住む井上といふ家の老母が突然案內もなしに這入つて來た。老母はそこに列んだ二つの枕を見ると、恐ろしいものでも見たやうに顏を背けた。

お久が月の物を見ぬやうになつたのは、それから間もなくの事であつた。お久はその胤が夫のである

か三郎兵衞のであるかを知るに苦しんだ。併し、一旦井上の老母にも現在秘密の場所を見られた後の事故、とても世間の口に戸は立てられぬと思つた。

或晩、お久は三郎兵衞の膝に凭れて、總ての愛を打ち明けた。そして、最後にかう言つた――

「あたしやいつそこゝを逃げようかと思ふよ。」

三郎兵衞は待ち構へてゐた事がやつと來たといふやうな顏をした――

「やつとさういふ量見になつて吳れたか。俺はもうこないだ中からそれが言ひたくて言ひたくて堪らないでゐたのだ。有りやうはそつちからしかけた戀とは言ひながら、實を言やあ一目見たその時から、身内の寒くなる程、こつちもお前に打ち込んでゐたのだ。今ぢやあ兵助殿と命の遣り取りをしても、お前を俺のものにしなけりやあ置かねえ量見だ。お前がさういふ量見なら、今夜にも一緖に逃げよう。幸、俺の故鄕は大阪だから、兎も角も西へ向つて旅立たう。」

「まあ、さうかい。そんなら早くお言ひなら好いに。お前も飛んだ苦勞性だよ。」

「時に、二人のがきはどうするのだ。」

「どうもするものかね。男の子は男に附くのが御常法さ。折角好い心持で寢てゐるものを、無理に起して「子別れ」の愁嘆場を勤めさせるでもなからうぢやないか。」

「飛んだ思ひ遣りのあるお袋樣だの。」

「あれ又それをお言ひかい。年寄じみて、あたしやいつそ氣が引けるによ。」

「だが、冗談は冗談だ。愚圖々々してゐて、又井上のおきさ婆にでも見つけられたら一大事だ。直ぐに

仕度にかゝるとしよう。」

かう言ひながら三郎兵衞は直ぐと南部籠に手をかけた。併し、その中にある筈の衣類は大方兵助が八官町へ運んで行つて了つてゐた。三郎兵衞は、それでも無いよりは增しと、籠の底をはたくやうにしてある限りの物を風呂敷に引き包んだ。お久はお久で用簞笥の引出しから貯への限りを懷へ捩ち込んだ。

「そんなら、三さん。」

「好いかい、お久。」

二人は雨戸を一枚そつと明けると、足音を忍んで暗い庭へ降りた。

夜が明けて驚いたのは長男の平吉と二男の慶之助である。母の姿が見えない。「いつも來るをぢさん」の影も見えない。母の寢間は盜賊でも這入つた跡のやうに取り散らしてある。まだ頑是ない二人にも、一寸の留守と長く捨てられた寂しさとの區別は自然と感ぜられた。二人は思はず顏を見合せると、同時に烈しく泣き出した。

常ならぬ泣き聲に驚いた隣りの老母は、齒を染めてゐた筆を投げ捨てゝ、駈けつけて來た。老母は座敷の樣子を一目見ると、直ぐにゆうべの出來事を悟つた。

氣丈な老母は泣き叫ぶ二人の子を賺しながら、遠い八官町の桔梗長屋を志した。そして兵助に會ふと一部始終の物語をして——

「併し、表立てゝはあなたの御損。この不始末が近所の噂になれば、如何に小祿でも御直參のあなた、家事不取締の罪でどんなお咎めを受けようも知れませぬ。唯この上はけふにも家を移り、歌比丘尼殿と

手を切つて、お子達の成人をお祈りなさるが何よりの罪滅ぼしでござります。」

と言つた。

兵助は話を聞くと歯嚙みをして口惜しがつたが、家を外なる自分の不身持にも罪の過半はある事にな、怒るにも怒られず、泣くにも泣かれないで、唯冷汗にびつしより脊を濡らしてゐた。

白井の家が麴町へ移つたのは、それから間もなくの事である。兵助は別人のやうに柔和になつて、妙訥とも手を切り、お表へも忠勤を勵んで、ひたすら二人の子を愛撫した。

姦夫姦婦は無事に平塚あたりまで落ち延びたが、少しは貯へのあると思つてゐた三郎兵衛の懐に實は一文の用意もなかつたので、二人は忽ち路銀に窮して來た。

「三(さよ)さん、お前少しや持つてゐると思つたに、それぢやあどうもしやうがないの。」

「おりやあ又お前がもうちつとは膨くつてゐると思つてゐたのさ。この儘かうしてもゐられまいから、そんなら又江戸へ引つ返すかの。」

「さうさなう。私もこの頃は毎朝の惡阻(つはり)で、大抵苦しむ事ぢやないから、とてもこの先きの長旅は覺束ないによ。」

「そんなら山雀のあと歸りとしやうかの。」

「もうほとぼりのさめた時分だから、どつか邊部へ隠れりやあ、お江戸は廣いから、大抵知れる事ぢやあないよ。

二人はこんな相談をすると、直ぐその晩、逆に又江戸へ向けて發足した。

お久は草鞋がけで長い道を歩くのが、もう餘程困難になつてゐた。四五日かゝつて、やつと江戸へ這入ると、二人は本所の松倉町にささやかな住居をきめた。

そこで、その明くる年の五月に、お久は安々と女の子を產み落とした。七夜の晩、姦夫の三郎兵衛は臍の緒書に自ら筆をとつて、「白井兵助之長女はつ」と記した。三郎兵衛にもこの子が自分のものか兵助のものかが分からなかつたのである。

二人は手内職などして、この場末のあばら家に辛くも世を忍びながら、内々牛込邊の噂を聞いて廻つたが、左程世間の物議をも醸してゐない様子なので、お初が二歳の春、芝居町に近い葭町へ引き移つて三郎兵衛は又葺屋町の狂言座へ通ふやうになつた。

立つる烟は細くとも、過ぐる命に變りはなくて、お初は早くも六つの春を迎へた。元より器量も美しく、生れつきも悧發なので、夫婦はお初を手の内の珠、揷頭の花ともいつくしんだが、年にはませた生れつきなので、その年の夏から手習物讀みの師匠をとつて、これに通はせ、つひ近所に住む振附の師匠若竹佐平次が元へも弟子入りさせて、末は一かどの舞上手ともなれと祈り、やがては杵屋善太郎が稽古所へも通はせて、三絃の道にも秀でさせようとした。

悧發なお初は一を聞いて十を知つた。かの女は僅か一二年の内に、指折りの踊り手となり、師匠の佐平次に連れられて、富豪の家にも出入りをするやうになつた。お初は三日にあげず貰つた「花」を十歳にして、貧苦に惱む兩親を喜ばせた。

お初が三郎兵衛の胤でなかつた事は、この一二年の間に明らかになつて來た。お初は五つから六つ、

六つから七つと成人するに連れて、その目つき口元鼻の形に、恐ろしきまで實父兵助に相似の點を現はして來たのである。三郎兵衞は、その兵助に似たお初が、無心で自分に孝行を盡して呉れるのを、どんなにか心苦しく思つたらう。三郎兵衞も今は四十幾つの分別ざかりであつた。

嘗ては放蕩無頼に世をのさばつて歩いた「達磨」も、今は悔悟と懺悔に身を小さくして、狂言の座へも碌々通はずに、暗く寂しい家にのみ閉ぢ籠つてゐた。樂屋働きに身を粉にしたところで、ささやかな日當しか得られない身が、かうして家にばかり引つ込んでゐるので、生活の困苦は愈々激しかつた。三郎兵衞は夜も眠られぬ程に、苦しみ悶えた。右を見れば兵助に似たお初の寢顏が過去の罪を責める。左を見れば生活に勞れたお久の寢顏が現在の境遇を訴へる。目をつぶれば石町の鐘の音が腸に食ひ入るやうに響いて來る。三郎兵衞は終に氣病みの床に就いた。

貞享四丁卯年の春が來た。門松、注連飾り、凧、遣羽子に賑ふ大江戶八百八町の中心に住みながら、「罪の家」なる達磨一家のみは暗く寂しい正月を迎へた。利口なお初は、近所の子達が匹田鹿子に摺箔した流行の衣裳を着飾つて遊ぶのを、心ではどんなにか羨みながらも、飽くまで兩親の氣をかねて、不足しい顏一つせず、靜かに父が病床の側で、一人雙六などして遊んでゐた。三郎兵衞はそのいぢらしい有樣を見るにつけても、鉄燒一つ買つてやる事の出來ぬ今の境涯を、悉く昔の罪の報ひにして、身を切らるるやうに感ずるのであつた。

踊り初めの日が來た。併し、お初の兩親は、お初に着せてやる物を一枚も持つてゐなかつた。夫婦が顏を見合せて困惑してゐる所へ若竹佐平次の所から迎ひが來た。

「よくはございませんが、御祝儀の着物はこちらで用意致しましたから、どうぞふだん着の儘でお出で下さい。」

といふ口上である。三郎兵衞夫婦は愁眉を開いた。お初もいそ〳〵と使の者に連れられて出て行つた。

その夕方、目出たく式を勤め終へたお初は、師匠佐平次に着せて貰つた新らしい衣裳を、一刻も早く兩親に見せたさ、暇乞もそこ〳〵に若竹の門を駈け出で、遠くもあらぬ我が家の路次口へ走り入らうとする所へ、不意に小蔭から一人の年を取つた侍が飛び出して來て、慌ただしくお初に聲をかけた。

「これ、これ、孃や、爺がちとそなたに聞きたい事がある。よい物を取らす程に、つひそこまで一緒に來やれ。」

お初は數へ年で八つの、流石にまだ頑是がなかつた。

「おぢいさん、何處へ行くのだえ。」

「來て呉れるか。それは辱けない。つひそこの横町までぢや。」

お初は惡びれもせず、老武士に手を引かれて、新道の小料理屋まで來た。

「おぢいさん、ここへ上がるのかえ。」

「さうぢや。何ぞおいしさうな物でも食べながら話をしよう。」

侍はお初を連れて、奥まつた小座敷へ通ると、一々お初に相談して食べ物を誂へた。誂へた物が來ると、お初は遠慮をせずに直ぐ箸をとつた。

侍はお初が嬉しさうに物を食べる樣子を、暫くぢつと見詰めてゐたが、やがて涙をはら〳〵と零して

獨り言のやうにかう言つた。

「可愛い奴ぢや、そちが母の不所存ばかりに、そちは今のやうな裏屋住居をしてゐなければならぬのぢや。この頃では三郎兵衛も、先非を悔いて、殊の外身を愼んでゐるといふ事ぢや。今更昔の事は言ふまい。爺は唯そちに會ひたかつた。御本丸よりの勤め歸りに、この近邊をうろついたも、けふでもう一月(ひとつき)あまりぢや。それといふも、そちが二つの折、ふと往來で見かけた所、何處となく似た父のおもざし、俄に戀しく懷しく、漸う思をけふ遂したのぢやが、かく親しく見れば見る程そちは父の子ぢや。可愛い奴ぢや、よう顔見せよ。」

侍はかう言ひ終るかと思ふと、俄に手を延ばしてお初を膝に抱き上げた。そして、又はら／＼と涙を零した。

お初は何が何やら一向に分からなかつたが、馳走をされた嬉しさに、さして根問ひもせずに、侍のするが儘に身を委せてゐた。侍は暫くお初を抱きしめながら泣いてゐたが、やがて手を解いて、お初を疊の上へおろした。

「ええ、われながら不覺であつた。嘸兩親も案じてをらうに。」

侍はかう言ひながら、自分の懷を探つて、かねて用意をして來たらしい一封の手紙と袱紗に包んだ金子とを出した。そしてそれをお初の懷に押し込んだ。

「この二品を落さぬやうに持ち歸つて、父には知らせず、そつと母に手渡ししたがよいぞ。」

「あい。そつと母さんに渡しませう。」

「利口者ぢや。早う成人して、母の恥辱を雪がねばならぬぞ。」
「そんなら、おぢいさん。もう歸つても好いのかえ。」
「おう好いとも。父や母も案じてゐように、早う歸りや。」
お初は小さい下駄を蹈み鳴らして、いそいそと元來た道へ駈けて行つた。侍はお初の姿の遠く見えなくなるまで、延び上がり延び上がり見送つてゐた。
お初は家へ歸ると、侍に會つた事などは噯にも出さずに、唯師匠佐平次に貰つた春着の美しさを兩親に誇るのであつた。
お初が着て歸つた一枚の小さな春着は、陰欝な三郎兵衛の一家に始めて正月らしい光を齎らした。お久と三郎兵衛は爭ふやうにして代る代るお初を膝に抱き上げた。
お初は久しぶりで父の晴れやかな顏を見たので、何か父に對しては秘密があるらしいかの二品を母親に渡す事が、何となく氣を咎めた。それで、その晩はその儘寢て了つた。
明くる日もお初は母と二人きりになる機を得る事が出來なかつた。三郎兵衛は相變らず、朝早くから夜遲くまで、まんじりともせずに苦しげな目を明いてゐるのであつた。
三日目の夕方、お初が常々贔屓になる或綿問屋の隱居から、年玉代りとして僅かばかりの金が屆いた。三郎兵衛は大層喜んで、直ぐお初に餅でも買つてやれと、包みの儘でその金をお久に渡した。
お久はあたりの暗くなるのを待つて、お初の手を引いて町へ出た。お初は好い時が來たと思つた。今夜渡さなければ、もう渡す時があるまい。さう思つて、その途中で、默つてかの二品を母の手の内に押

は實を告げる事も出來なければ、拂ひを拒絕する事も出來なかつた。
お久は冷たい汗を額にかきながら、袱紗包の結び目を解いた。そして、四兩の金を商人達の前に列べると、息を詰めながら言つた。
「このお金はさるお方よりの預り物なれど、今宵につづまる切迫に、暫く借り受けてお拂致します程にどうぞもう手荒な事はせずと置いて下さりませ。」
「金さへ下さりやあ、なんで手荒な事を致しませう。」
商人達はかう言ひながら、てんでに金の分け前を取ると、こそ〳〵と逃げるやうに三郎兵衞の家を引き取つた。
病人は掛乞達の足音が路次を出切つて了ふのを聞き澄ますと、いきなりお久の片手を摑んだ。
「これ女房、その金の出どころ言や。俺ゃ昔はならず者で、人の妻まで盜んだ奴たが、この二年越しの煩ひに、今では一念發起して、臨終を待つ三郎兵衞ぢや。如何に貧苦に迫ればとて、人様の物塵一つ盜まうなどと淺ましい心は持たぬぞ。今掛乞にそなたの拂つた金の出どころ、どうも俺は氣にかかる。どこぞで借りたか。盜んだか。早う言うて安心させぬか。」
お久は返事が出來なかつた。
「返事の出來ぬ所を見れば、さてはそなたは盜んだな。人の物を奪うて來たな。」
「いえ、いえ、そのやうな事ではござりませぬ。」
「それなら、早う出どころを言や。」

「さ、それは。」
「ええ、大それた事してくれた。たとへこの儘親子三人飢死になるとも、人様の物を盗む心はないに女の狹い量見違ひから、あすはお上のお手にあひ、重きお咎めを受けねばならぬか。」
三郎兵衞はくやし泣きに泣きながら、お久の側へ這ひ寄つて、いきなりその襟髪を摑むかと思ふと、足下に踏まへて、散々に打擲した。
「さあ、出どころを言へ。さあ、拔かさぬか。」
三郎兵衞はお久の髮の毛を手に卷きつけ、泣きながら留めに這入るお初を突きのけて、猶も妻を問責するのであつたが、そのはづみに、お久の帶の間から、手帋らしいがはらりと落ちた。
三郎兵衞は手早くそれを取り上げて、行燈の灯に透かして見ると、顏色を變へた。
「むむ、さてはそなたは我が病中に、とうより先夫へ心を通じ、この三郎兵衞を捨てる心か。さうとは知らずに、この年月、ようも親切にして吳れると思つてゐたが口惜しい。他人の妻を盗んだ罪で、こんな憂目を見るにもせよ。人情知らずの腐つた根性。病みほうけた目を掠め、よくも白井と通じたな。もうこの上は生かして置かれぬ。覺悟しや。」
三郎兵衞は狂氣のやうになり臺所へ這ひづつて行つたが、直ぐと庖丁を手にして取つて返すと、いきなりお久の咽喉を目がけて、それを突き立てようとした。
併し、病人は先程からの烈しい興奮でもう大分勞れてゐた。お久は三郎兵衞に捕へられた左手を逆に拂つて、臺所から表へ逃げようとした。三郎兵衞は逃がすまいとお久の帶にしがみついた。お久は力に

任かせて腰を拂つた。三郎兵衞は思はず手を放したが、はづみで揚板を刎ね返すと、もんどり打つて脾腹を下流しの角へ打ちつけた。

「うむ。」

と、一聲苦しげに叫んだぎり、病人は目を白くして了つた。

家主が來た。兩隣りの誰彼も來た。お久とお初は手を盡したが、三郎兵衞はもう蘇生しなかつた。

十年の惡夢は覺めた。お久は三郎兵衞の葬ひ、そこ〳〵に、お初の手を引いて、白井家へ駈けつけた。

白井の家はその頃飯田町にあつた。お初の二兄慶之助はもう死んでゐなかつた。長兄平吉は平右衞門と稱して、もう前髮立の十六歳になつてゐた。兵助ももう昔の剽悍な面影はなくて、後生願ひの好いお爺さんになつてゐた。

兵助は唯お初が可愛くてならなかつた。それ故、お久の罪もさして咎めず、その儘親子を我が家に留めて置かうとした。併し、さういふ異法は「侍の家」にとつて許される事ではなかつた。

「たとへ小祿でも、幕府の御直參ぢや。一旦不義せしものをのめ〳〵歸宅させしとあつては、お表への聞こえも如何ぢや。早う他家へ再緣おさせなさい。」

同僚は口を揃へて、兵助にかう忠告をした。兵助も一旦お久の悔悟を見た後は、そのいまだに水々した美しさを、自分のやうな老ひぼれの側で萎縮させるのが氣の毒でならなかつた。そこで、お久にも事情を打ち明け、木梨道齋といふ世話好きな町醫を媒にして、同じ御家人の豐島平太夫方へ再緣をさせる事になつた。

お久はお初を連れ子にして、豊島の家へ這入つた。間もなくお久は本八郎といふ男子を擧げた。

お初は僅か一月の間に三人の父親を持つた。さうして、一年立たぬ内に、姓の違つた兄と弟とを持つた。

(二)

段々大きくなるに連れて、自分の家族關係の如何に複雜であるかがお初に分つて來た。お初は折々、ゆうべ見た夢のやうに、幼時の記憶を呼び返すのであつた。段町の貧しい生活。第一の父の大病。第二の父との邂逅。恐ろしい正月晦日の夜の出來事。お初は段々これらの事の意味が分かつて來るやうに思つた。

お初は子供心にも、「夫婦」といふ者を呪はずにはゐられなかつた。お初は「決して自分は嫁には行くまい」と思つた。「自分は話に聞いた御殿奉公をして、一生獨り身で暮らさう」と思つた。

お初はさう思つて、御殿女中の資格になりさうな事をのみ學んだ。歌道、書道、諸禮式は勿論、今まで習ひ覺えた遊藝の道をも捨てなかつた。

お初は夜となく晝となく父親をせがんで、どうか諸侯方の奥御殿へお勤めがしたいと言つた。平太夫も妻の連れ子とは言ひながら、同僚白井の胤ではあり、人並優れての悧發者故、どうぞして奥向へ勤めさせたいと思つたが、小身者の悲しさとて、便宜のないのを嘆じてゐると、ふと日頃懇意にする同僚諸星藤兵衛の伯母が紀州家の奥向に勤めてゐるといふ事をちらりと聞いたので、早速諸星の家へ出向いて行つた。

「時に貴殿の伯母御が紀伊樣に勤めてござるさうなが、それは誠か。」

平太夫は寒暑一通りの挨拶が濟むと、早速から尋ねた。
「如何にも誠ぢや。松野と言うて鶴姫様附の老女株ぢや。」
「それなら、ちと折り入つて願ひがある。」
「何ぢや。」
「手前、當年十四歳になる娘を一人持つてをる。名を初と云ふが、中々の悧口者ぢや。これを伯母御の部屋子に使うて貰ひたい。」
「造作もない事ぢや。頼んで見よう。」
話はこんな事で、意外に早く道が開けた。二三日すると諸星から、早速お召抱へになるといふ返事が來た。
お初は名をみきと改めて、土橋御門外なる紀伊中納言綱教の御簾中鶴姫君附の老女松野の許へ部屋子として住み込む事になつた。元祿六年の事である。
おみきは元より才智に優れてゐた。かの女は立居振舞、一言二言の物の言ひやうにも、決して卑しい素性を裏切るやうな事はなかつた。かの女は直ぐと主人松野の氣性を呑み込んで、何事にもその氣に入るやうに氣に入るやうにと勤めた。元より、絲竹の道には優れてゐたので、折々は松野の取持で、大守が內君の御前へ內々で召し出だされ、はやりの小唄、舞の一手に御徒然の興を添へる事もあつた。
おみきは自然出世が早かつた。間もなくお末といふ役に召し出されて、それから廿二の年まで無事に勤めたが、その年の春主人と賴む松野にも死なれ、續いて鶴姫君にも御逝去あられたので、終に永のお

暇を賜はる事になつた。

おみきが實家の豊島へ歸ると間もなく、母のお久と元の父兵助が、相續いて世を去つた。今は思ひ殘く所もなしと、諸方からの緣談を斷つて、明くる年の三月、再び櫻田甲府樣の奥向へ勤める事になつた。元祿十五年の事である。

當時は五代將軍綱吉の治世であつたが、綱吉に正統の男子がない所から、世繼についての樣々な爭論があつた。お傳の方は愛女の婿紀伊中納言綱教を世に立てようとする。柳澤吉保は自分の妻にお手が附いて出來たと稱する松平吉里を未來の大將軍にしようとする。水戸の藤井紋太夫は私慾から義公の養子綱條を西丸へ直さうとする。議論百出の中で、飽くまで公平無私な正義の論を吐いたのは水戸光圀であつた。

「將軍の兄君甲府綱重殿御在世ならば、當然五代の將軍と仰がるべきであつた。然るに、兄君御逝去遊ばされ、閣下大統を繼がせられたる上は、綱重殿の御子綱豊殿を御養君として西丸へ直し給ふが當然の御事である。」と言ふのである。

綱吉は兄の綱重と仲が好くなかつたから、その子の綱豊をも可愛いとは思はなかつた。併し、東照宮の御孫、一門の長者として天下に人望ある義公の說を無下に斥ける事は出來なかつた。その內に、紋太夫は陰謀を知られて、水戸義公に斬られ、紀伊中納言は病死して了つた。そこで、綱吉は好まぬながら甲府宰相綱豊を世子に立てて、寶永元年十二月に、これを西丸へ迎へる事になつた。即ちおみきの御主人櫻田の殿樣が將軍の御世繼となつたわけである。

甲府綱豐は好色であつた。近衞家から輿入された御臺所熙子の方の外に、右近の局、新典侍の局、齋宮の局、左京の方などといふお妾がゐた。おみきは左京の方に仕へて、名を初音と賜はつてゐたのである。寶永六年の正月に五代將軍綱吉が薨去されると、甲府綱豐は六代の將軍となられた。名を家宣と改めて、直ちに本丸へ移り住はれた。

同時に左京の方も山里の御殿へ住む事になつた。從つて、おみきの初音もそこへお供をした。

左京の方は西丸の大奥にゐる頃から、家宣の胤を宿してゐたのであるが、その年七月三日に、その山里の御殿で鍋松君を生んだ。家宣はそれまでにも、御臺所熙子の方には女子を儲け、右近の局には家千代君を儲け、新典侍の局には大五郎君虎吉君を儲けたのであつたが、いづれも早世であつたところへ、將軍宣下のその年に、計らずもこの世子を得たので、上下の喜びは非常なものであつた。左京の方は直ぐに中老の名を捨てて、「お部屋樣」と仰がれ、身分の取扱ひが「お上通り」となつた。勿論、將軍の寵愛は總ての侍妾を壓して、左京の方一人に集まつた。

おみきの初音は主人の出世に連れて出世をした。かの女は幕府の親藩紀州家に長く勤めた經驗もあるし、本丸へ這入つてからも決して奉公にそつのあるやうな事はなかつた。素性が卑しくて聰明に育つた左京の方とも意氣相投じた。殊に鍋松君御分娩の際は表使として殊功を立てたので、左京の方が本丸へ移られると間もなく、大奥總女中の筆頭たる「お年寄」役に取り立てられ、名も江島と改める事になつた。

「お年寄」は男で言へば老中にも比すべき大奥第一の重役である。かの女は日々詰所に端座して、煙草

盆を前に置き、御用の外には少しも身を動かす事がない。かの女は諸向きより申し來る大奥一切の政務を一々裁決して命令する。御配膳を司る。到來のお文を披露する。紅葉山、芝、上野などへの御代參を勤める。御臺所に代つて、命令、新任、賞罰などの申し渡しをする。それ故、威權他に秀でて高く、一言口を離るれば、よく詞返しをする者がない。幕府親藩の御簾中などが參內された場合でも、決して頭を疊に附ける事がない。

その住居と言へば、長局の一部屋で、間口三間奥行七間の二階作りである。部屋は六間に仕切られてゐる。南の縁に接した所が幅一間の入側になつてゐて、天井に金網を張つた引窓がある。女中はここで化粧をしたり、鐵漿をつけたりする。その次は八疊で、南北に襖が締めてある。西に床がある。間口一間奥行三尺の板疊で、黑塗の框がある。床柱は檜の糸柾で、違ひ棚は槻の溜塗である。それから東に間口一間奥行三尺の佛間がある。座敷から三尺上がつた所に中敷居があつて、これに黑塗本骨の障子が箝めてある。中には一段の壇が設けてあつて、女中親族の位牌並びに將軍御先祖代々の過去帳が備へてある。四方の貼付から天井まで金泥で、蓮華の模樣が莊嚴である。佛壇の外には大抵机などを置いて、書齋にあてたり、他の女中との應接所にしたりする。次は六疊で、南北が襖、西が押入になつてゐる。ここは女中の飮食座臥の間で、多く衣裳などが納つてある。その次に二疊敷の入側があつて、又その隣りに八疊の部屋がある。ここは部屋子のゐる所で、左右は貼付、南は襖、北は障子である。その部屋の西に梯子があつて、ここから二階へ上がるやうになつてゐる。二階の間取りも略下と同じで、北に窓がある。この外、部屋子の間の北に更に一間があつて、北の縁に接してゐる。これが臺所及び玄關である。

長局一體の襖は地白に銀で花唐草が押してある。天井小壁の貼付は地白に銀泥で鐵線唐草の模樣が現してある。部屋の北には三十坪程の庭もあつて、泉水、築山、石燈籠などが風情を盡してゐる。

當年のお初は齡三十にして、この要職に就き、この美屋に住む事になつたのである。かの女はかくて左京の方附の家老小林杢之助、御本靭負と同格の扱ひを受け、祿高六百石を賜はり、大奥の總女中二百八十九人の總支配者となつたのである。

江島の立身に連れて、かの女の近親知己が取り立てられた。實兄白井平右衛門は今まで僅に三十俵二人扶持の同心席であつたのが、お目見え席に進んで、三百俵を賜はり、大阪勤めを承る事になつた。義弟豐島平八郎も新御番に取り立てられた。嘗て江島を紀州家へ周旋した諸星藤兵衛は關東の代官に任ぜられた。その外、知人平田伊右衛門は御留守居番に拔んでられ、西與一右衛門は御勘定方を命ぜられた。實母お久が豐島家へ再緣する時媒をした木梨蓮齋の甥なる表醫師奥山交竹院も、鍋松君に御異例のあつた時、江島の詞一つで奥醫師に取り立てられ、二百俵の御加增があつて、五百石十人扶持を賜はる事になつた。

正德二年十月十四日に將軍家宣が五十七歲で死ぬと、鍋松君が五歲で征夷大將軍左近衛大將となつた。七代家繼これである。御臺所熙子の方は髮を切つて、天英院と稱した。左京の方も、同じく薙髮して、月光院と稱へた。右近の局は本丸を出て、虎の門の屋敷に住んだ。新典侍の局は故鄉の京都へ歸つた。翌年將軍宣下の時、月光院は從三位に叙せられ、吹上御殿に移り住んだ。

月光院が將軍の「御母公」として、權勢天下に比びなき者となると同時に、これに附き添ふお年寄江島

も、愈々大奥に上なき者となつた。

(三)

江島は十四の年にお目見え以下の部屋方として、紀州邸へ這入つてから、三十歳の今日、大奥總支配のお年寄に進むまで、一刻として心に油斷をした事はなかつた。かの女は父母の轍を踏むまいとしたよりは、父母の社會的恥辱を雪がうとしたのである。かの女は先づ何よりも出來得る限り自分の身分を高いものにしようとした。利口なかの女は策略に依つて得る位置の極めて危い事を知つてゐた。かの女は陰日向なく身心を努めて、一歩一歩に基礎の强固な階梯を登らうとした。その結果は「無比の忠勤」となつて現れた。かの女は如何なる人から見ても、極めて正しい進み方をしたのである。

一方に於いてかの女は、自分の卑しい素性を決して人に知られまいとした。かの女は飽くまで言語座臥を愼んで、苟も人に批を打たれまいとした。幼時命をかけて習ひ覺えた遊藝で、たま／＼御前の興を添へるやうな場合があつても、かの女は飽くまでそれを餘技に過ぎぬとやうに見せかけた。かの女は意志の力で、「過去」と緣を絕たうとしたのである。かの女は「自然兒」としての自分に、手械足械をかけて了つたのである。かの女はあらゆる人慾に對して耳目に膠した。かの女は渾身の慾望を對人的の「立身」にのみ集めた。

併し、かの女は今努力に依つて得られる婦女子最高の地位を得た。御本丸大奥の總女中、お半下、お犬、部屋子に至るまでを併せて千餘人の者が、かの女の口の動かし方一つで、生殺いづれにもなるやうになつた。お表の老中若年寄と雖、かの女に對しては一目を置いた。將軍の生母月光院尼公でさへ、私

にはかの女と膝を交へて物語つた。

かの女の上には、もう登るべき峯がなかつた。かの女は今目に遮るものもない、晴れ晴れとした山の頂きに立つた。そこで、かの女はほつと息をついた。十六七年張り詰めてゐた心に針程の隙を生じた。その小さな隙に乘じて、俄に頭を擡げて來たのは、長くかの女の體内に息を窒してゐた姦婦お久の血である、無頼漢兵助の肉である、蕩兒達磨三郎兵衞の靈魂である。

五歳の幼兒を將軍として頂く七代の內閣は、男子に權威のある者が少なかつた。大老井伊掃部頭直該は平凡人で、勢力がなかつた。老中も五人はゐたが、土屋相模守政直は七十餘の老人で、身心悉く衰へてゐた。大久保加賀守忠增、井上河内守正岑、阿部豐後守正喬は、所謂「伴食宰相」で、何事をも獨自に裁決する事は出來なかつた。ひとり秋元但馬守喬朝だけは、多少の才幹を備へてゐたが、これとても一身に責を負ふ勇氣のある人ではなかつた。それ故、天下の大政は將軍のお守役たり後見たる間部越前守詮房一人の手で裁決せられた。詮房は櫻田以來六代家宣に仕へて、幕府內外の萬機を取り裁き、百石の小身から五萬石の大名まで經登つて來た才人である。家宣の寵儒新井君美白石の如きも、かれの庇護を蒙る事が多かつた。

詮房は能役者の子であつた。かれは容色の美を以て、先づ家宣に愛されたのである。かれは嘗て妻を迎へなかつた。又、妾をも畜へなかつた。將軍家宣の侍妾は悉く又かれにも許されたのであつた。

詮房と月光院とは櫻田御殿以來の馴染であつた。家繼が將軍となるに及んで、かれは侍從として、これは母公として、日夜幼ない將軍の側を離れなかつたのは、この二人のみであつた。月光院は髮をこそ

切つてゐたが、まだ二十五歳の若後家であつた。かの女の艶めかしさは、市井の「物づくし」にも役者と對にせられて、「後家方のよい物——山下金作と月光院様」と唄はれた程であつた。詮房も年こそ五十を越してゐたが、天成の麗質いまだ容易に衰へなかつた。二人は近づくまいとしても、近づかずにはゐられなかつた。

或冬の夕であつた。詮房は上下を脱いで、頭巾を冠つて、月光院と二人で炬燵へあたりながら酒を飲んでゐた。そこへ可愛い將軍が不遠慮に這入つて來た。そして、「越前は上様のやうぢや」と言つた。「上様」とは先將軍家宣の事である。

前將軍の時代に、大奥で度々行はれた芝居狂言の催しも、七代になつてから愈々盛であつた。「お狂言師」と稱へて、役者も囃し方ゝ振付も總て女子から成り立つ百七八十人程の一座が、悉く部籠の儘、庭先から大奥へ入り込むのである。一座中には常に幾人かの女裝した男役者が交つてゐた。かれらは馴染の老女や中老の部屋に、五日も六日も泊つてゐた。どこの長局へいつ行つても、役者狂言芝居の噂の聞かれぬ時はなかつた。勿論、近臣侍醫などと女中達の仲もみだらであつた。

大奥御用達の商人達は、競つて女中達の歡心を得ようとして、或は宿下がりの折を伺つて芝居見物を馳走し、或は宿元へ酒肴菓子の美々しきを盡して進め、或は御機嫌伺ひと稱して時好の反物を贈り、甚しきは御代參の歸途を要して、料理茶屋へかれらを招じた。かういふ賄賂の結果は大奥に幾多の新しい御用達を生じた。終には醬油御用達、酢御用達、桶御用達、箱御用達といふやうなものさへ出來るやうになつた。六代の內閣は一時これを嚴禁したのであつたが、女中達が直接將軍に向つてする壁訴訟は、

さういふ正しい御沙汰をも忽ち反古にして了ふのであつた。

江島の耳目は急にかういふ世界に向つて開いた。かの女は今まで夢にも知らなかつた威勢を以て、城内幾多の情事に耳を傾けた。かの女は今まで嘗て覺えなかつた欲望を以て、御用達の進物に目を輝かした。かの女は夢のやうに幼時の生活を思ひ出した。最初の父が日夜出入した戯場歌舞の歡樂世界は、まざ／＼とかの女の腦裡に蘇返つて來た。

江島の血は始めて自由に流れた。江島の靈魂は始めて自由に躍つた。

（四）

その頃、淺草の諏訪町に津賀屋善六といふ諸家御用達の商人がゐた。かれは武家諸侯に手廣く出入して、何不足なく富有に暮らしてゐたが、唯本丸へだけは出入りの便がなくて、始終それを遺憾に思つてゐた。

津賀屋の同町内に、出羽屋源七といふ藏所の米宿が住んでゐた。かれは元懷月堂安支と號して、大和繪を業としてゐた者であるが、書畫骨董の周旋をも副業としてゐたところから、絶えず津賀屋へ出入をする内に、主人の庇護を得て、終に今日の地位を得る事が出來たのである。かれは屋敷方に極めて顏の廣い男であつた。

或日、津賀屋と出羽屋の間に、かういふ會話が交された。

「時に出羽屋、俺は御本丸の炭薪の御用を達したいと思つてゐるがどうだらう。御城内八ヶ所の御用を一手に引き受ければ、内端につもつて一年四五萬兩の儲けにはなると思ふが、表向き御用人へ願ひ出た

ものだらうか。それとも町奉行へ願書を出したものだらうか。」

「成程、御本丸へお出入りをなさらうといふのは好いお考へです。併し、當今は御政道が厳しうございますから、表向き願つたところで、中々お聞き入れはございますまい。わたくしの考へでは、一應町奉行へ願書を出して置いた上で、裏道から這入り込んで行くのですな。」

「裏道といふと。」

「月光院様附のお年寄へ取り入つて、それから詞を添へて貰ふのです。」

「月光院様と言へば、當將軍様のお腹様ではないか。」

「それだから都合が好いのです。當時の御本丸は從三位様次第でどうにでもなるのですから。」

「だが、さういふ貴いお方のお附では中々手蔓が得られまい。」

「ところが、大層都合の好い事があるのでございます。わたくしの以前御贔負を受けてゐましたお奥のお醫者様に奥山交竹院といふ方がございます。」

「俺もお名前は聞いてゐる。飯田町にゐらつしやる方だらう。」

「左様でございます。あのお方と從三位様附のお年寄とは、なんでも御親類だとかいふ事で、大層お取り用ひになつてゐるといふ話ですから、先づあの方から手に入れてかかるのですな。」

「進物でもするのか。」

「それに限ります。」

「併し、受けて下さらうか。」

「以前骨董のお取引をしたので覺えがありますが、中々慾の張つた方ですから、お受けになる段ぢやございません。」

「成程、それなら裏道がありさうだの。」

この話があつた明くる日、津賀屋は出羽屋を案内にして、早速奥山交竹院を訪ねた。

津賀屋は初お目見えの手土産として、交竹院へ唐織の羽織二卷に裏地を添へて贈り、その妻へ紅縮緬金糸小縫の小袖四つに裏綿を添へて贈り、その子へ進物代として金百兩を贈つた。

「御丁寧な土産で恐れ入つたが、何ぞお頼みの筋でもあつて參られたかな。」

交竹院は狡猾らしい大きな目を光らして、直ぐとかう言つた。その物越態度がかういふ事にはもう馴れ切つてゐるといふ風である。津賀屋は先づ安心した。

「實は外でもございませぬが、御母公樣お年寄へあなたから願つて頂いて御城内八ヶ所の炭薪の御用をわたくしが足したいと存じますのでございますが。」

「それはわけもない事だ。江島樣さへ御承知になれば、直ぐにも出來る事だ。一つ愚老からお話をして見る事にしよう。併し、お城は中々嚴しいから、表向き進物を持つて參るわけにも行かぬが、それには丁度よい事がある。近頃お年寄は大層芝居を見たがつてをられるから、芝居見物へお誘ひ申すのだ。」

「併し、わたくし風情がお誘ひ申し上げたところで、お出でにはなりますまい。」

「それは勿論愚老の催しといふ事にするのだ。」

「成程、さう願へれば、大丈夫でござりませう。」

「芝居一切のお取持は竹之丞座の狂言作者中村淸五郎に賴むがよい。あの男は先將軍樣時分から、お狂言のお催しなどで、度々お城へもお出入りをしてゐるから、お女中方の事にはよく馴れてをる。あれの女房のお梅といふものも、以前紀伊樣でお奧勤めをしてゐた時分から江島樣とお馴染であるし、亭主と一緒にお城へも度々伺つてゐるから、これにもよく相談するがよい。」

「それは好い事を承りました。すべて仰せの通りに致しませう。」

「それから、お年寄の御實兄で白井平右衞門といふ方が、つひこの近所にをられるから、そこへも一度顏を出して置くがよい。この方はつひこなひだまで大阪表へ出向いてをられたのだが、かの地の商人達との間にちと宜しからぬ事があつて、江戶へ歸られたのが、いづれにもせよ江島樣には御實家の事であるから、御機嫌を取り結んで置くに如くはない。それに、さういふお方の事であるから、黃白の利き目は確にある。それから、お年寄の弟君に新御番の豐島平八郎といふ方がをられる。これも是非味方につけて置かなければならぬ一人だ。それから、その豐島樣に地所を貸してをられる御勘定の西與一右衞門樣、櫻田御殿以來のお氣に入りである御書院番の平田伊右衞門樣、小譜請奉行の金井六右衞門樣、越後御代官の金丸四郞兵衞樣、これらは何れもお年寄の恩顧を受けてゐる者だから、それ〴〵附け屆けをするがよい。それからお城の女中方では、新御中老の宮路樣、御同役の木曾路樣、表御使番の梅山樣などがお氣に入りであるから、これらにもそれ〴〵お取りなしを賴まなければならぬが、この方は芝居見物の折にお誘ひ申し上げる事にするから、それでよい。」

「どうも色々御親切にお敎へ下さいまして有難うございます。早速出羽屋とも相談を致しまして、それそれ

〳〵その手配に致しませうから、お芝居の方の事は何分宜しくお願ひ申し上げます。」
「それは承知致した。併し津賀屋、中々の物入りだの。」
「いゑ、それはもう、この儀さへ叶ひますれば、暖簾の礎でございますから、如何程かかりましても厭ひは致しませぬ。」
津賀屋と出羽屋は、交竹院の貪欲らしい笑顔に見送られて、いそ〳〵と飯田町の奥山邸を辭した。

（五）

或日、交竹院は江島にこの事を話した。
「日夜のお勤めで、さぞ御心勞にござりませう。たまにはお氣晴らしも御肝心かと存じます。ついては近日狂言の座へお招きが致したいと存じますが、如何でございませう。」
交竹院は元より江島の素性を知つてゐる。江島も交竹院が自分の素性を知つてゐる事は知つて居る。併し、二人は飽くまで互に「不知」を裝つてゐなければならなかつた。
「宜しい。芝居見物承知致しました。」
「芝居はどこがお望みでございます。」
「山村の芝居が大層評判のやうだから、あすこへ行つて見たいと思ひます。」
「木挽町でございまするな。宜しうございます。してお出ましはいつになさいまする。」
「この廿五日に亡父の年回でお宿下りを願ふから、その折にして貰ひませう。」
「畏りました。つきましては、宮路様木曾路様梅山様などをもお召し連れが願ひたいのでございますが

この儀は如何なものでございませう。」

「少しも差支はありませぬ。それ〴〵内々に申し聞かす事にしませう。」

「恐れ入りました。その外どなたなりともお相手になりさうなお方をお供にお加へ下さいまし。」

「宜しい。承知しました。」

芝居見物はかういふ冷たい會話の間に、忽ち約束されて了つたのである。交竹院は直ぐとその旨を津賀屋へ申し傳へた。

交竹院が宮路梅山などを誘つたのは、決してかれらが唯江島の氣に入りであつたが爲のみではなかつた。交竹院は日夜大奥に出入して、かれらの淫がはしい素性をよく知つてゐたので、かかる場合の一味として、かれらに如くものはないと思つたのである。

宮路の父は糀町一丁目の呉服商松屋金右衛門といふものであつた。宮路は幼名をさだと呼んだ。生來悧發の質で、殊に容色が美しかつた。十六七の頃、堺町の芝居で、飯田町の同業者近江屋五郎右衛門といふ者に見染められて、そこへ嫁に行つた。然るに、おさだは緣づくと直ぐ懐胎して、忽ち臨月近い體になつた。夫の五郎右衛門は大に驚いて、早速醫者にかけたところが、果して姙娠といふ見立てであつた。五郎右衛門はひどく腹を立てた。そんな不埒な娘とは知らずに緣組したのがくやしいと言つて、直ぐにおさだを實父の許へ返した。そして、あとから直ぐ離緣狀を送つた。おさだの父は娘の不埒に甚しく面皮をかいて、一時は勘當をするとまで怒つたが、涙を零しての母のとりなしで、おさだは一先づ赤坂の叔父の家へ預けられる事となつた。おさだはそこで產をしたが、生れた子は果して近江屋へ緣づか

ぬ前に關係のあつた者の胤であつた。それでも、おさだの親達はもう一度娘を近江屋へ再緣させたいと思つて媒人の口から頻に詫びを入れさせたが、近江屋では終にそれを聞き入れなかつた。そこで、それでは御殿奉公でもさせて、惡名を雪ぐより外はないといふので、十八の冬月光院がまだお小姓を勤めてをられた頃、お髮結といふ輕い役目で御本丸大奥へ住み込ませる事にした。宮路は江島と同じやうに、月光院の立身に連れて、自分も出世をして來たのであつた。併し、かの女が新中老の重役に出世をした時分には、もう苦勞をかけた兩親もこの世を去つてゐて、生家もいつか退轉してゐた。

宮路が兄と稱する者に、本石町一丁目に住む町醫師山田宗見といふものがあつた。嘗ては松平右衛門督から出入扶持をも賜はつて、可なりな暮らしをしてゐる者であつた。宮路は宿下りの時といふと、きつとこの家に寐泊りしたものであるが、いつの頃よりかこの宗見と道ならぬ枕を交すやうになつた。その後は毎年春の宿下りは勿論、お使の途中などでも度々逢引が重なつたので、宗見の妻も今は默してゐられず、「假にもきやうだいの緣を結んだ中で、犬畜生にも等しい振舞」と熱涙をこめて夫を諫めたが、宗見は少しもそれに耳を貸さず、却つて妻を離緣して了つた。さうして、愈々宮路と密會を重ねた。

梅山の父も美濃屋新藏といふ町人であつた。十七歳の時、御本丸お廣敷のお年寄で清田といふのが茶の間に使ふ女を抱へたいと言つてをられると聞いて、或人の世話でお目見えに上がつたところが、大層氣に入られて、直ぐ茶の間へ雇はれる事になつた。併し、所謂「又者」なので、どうぞして御直參の御奉公が勤めたいと思つた。そこで、梅山は清田の部屋を出で、その時分大年寄だつた左京の方の許へお髮結として召し抱へられる事になつた。梅山も江島宮路などと等しく左京の方の立身に連れて、出世をし

て來た一人であつたのである。かの女は宮路より四つ程年上であつたので、宮路の秘事については何かと世話を燒いた。

間もなく芝居見物の當日が來た。正徳三年四月二十五日である。津賀屋善六と出羽屋源七とは羽織袴で朝暗い内から、木挽町六町目の山村長太夫座へ詰めかけ、狂言作者中村清五郎を宰領として、江島招待の準備に心を盡した。

棧敷は八間借り切つて、上の四間には御簾をおろして、後へ幕を打ち廻し、下の四間には幕のみを打つて、金屛風を引き廻した。仕出し一切は前々日あたりから藤屋又五郎といふ茶屋に命じて置いた。菓子は飯田町の御用達虎屋から取り寄せた。

そこへ當日の主人役たる奥山交竹院が水戸家へ仕へてゐる弟の喜内を連れて來た。交竹院から招きを受けた江島の兄白井平右衛門、弟豐島平八郎もやがて來た。御書院番の平田、小普請奉行の金井、御勘定の西、御代官の金丸なども追々と馳せ參じた。いづれも前以て津賀屋から莫大な附け屆けがしてあるので、暫くは善六と源七が阿諛の挨拶に取り卷かれた。

やがて、女中達が忍び〱に鋲打駕籠を釣らせて來た。かれらは一人一人用をかこつけて、離れ〱に本丸を出て來たのである。江島の顏が見えると、津賀屋と源七は直ぐ蔭へ隱れた。そして、蔭で江島の取持に心を碎いた。

その時の狂言名題は『花館泰平愛護』で、その二番目が「助六」の初演であつた。役々は大道寺田畑之介後に花川戸助六が幼名を九藏といつた二代目市川團十郎、傾城揚卷が玉澤林彌、髯の意休が山中平

九郎、助六母が袖岡政之助、傾城喜瀬川が藤村半太夫、白酒賣新兵衞實は荒木左衞門が前名を野田藏之亟といつた生島新五郎であつた。

團十郎と新五郎とは山村座の二明星であると共に、劇壇の二明星であつた。團十郎はまだ二十六歳の壯年であつたが、技藝にも體質にも父才牛の血を傳へて、武道荒事に妙を得てゐたと同時に、父のよくしなかつた和事にも長じて、剛柔二つながら兼ね備へてゐた。新五郎は團十郎より十七も年上であつたが、中村七三郎の藝風を傳へたやつし上手の器量よしで、好色第一の丹前役者であつた。かれは濡れになると、屢々「さしあひ過ぎた臺詞」を言つた。かれはいつも色めかしく肩をゆすり、物言ふ度に唇を嘗めた。

助六の狂言が始まつた。花やかな廓の景色。傾城の道中。江戸節の淨瑠璃で美々しい羽織衣裳の客意休が、白毛の髯に香をたきながら、供大勢連れての出。やがて揚卷の生醉の道中。舞臺一面花やかなところへ、黒紬に三升と牡丹のふせ繡をした着附で、巾廣の帶に長い刀を一本さし、紺子色の鉢卷をして、紺足袋をはいた助六の出。傘さしての風情。爽かな惡たいの辨舌。かんてら門兵衞の可笑しみ。白酒賣の和事。母が異見の紙子に友切丸詮義の爲と實情を明かす助六。揚卷助六があつさりとした濡れ事。意休の殺しから屋根の上の仕合ひまで、一同歡を盡して見物した。

併し、江島は樂しまなかつた。かの女は御簾内に膝も崩さず座つてゐて、遠くからおぼろげに役者の顏を見たり聲を聞いたりしたところで、それが何で面白からうと思つた。かの女は二十年ぶりで芝居櫓の下を潛ると、急に子供の時が戀しくなつたのである。子供の時は千秋樂の日にきつと母に連れられて

葺屋町の芝居へ見物に行つた。併し、決して客として行つたのではない。内裏の者として、何處でも好きな所で見物する事が出來た。勿論、樂屋へも出入りした。振袖を着た眉のない「子供」の役者達とも仲よく遊んだ。「達磨の娘か。鳶が鷹だの。大きうなつて轉ばぬやうにしろよ」などとざれ口を利きながら、立者の役者が菓子を呉れた事もあつた。併し、さういふ自由は今何處にもない。かの女は大奥の詰所から狂言座の棧敷へ唯座を移したに過ぎなかつた。かの女はお年寄の威厳を失つてはならなかつた。かの女は身動き一つ出來なかつた、ざれ口一つ利けなかつた。かの女は、助六の狂言の途中まで來ると、口に手を當てて、二つ三つ續け樣に欠をした。

幇間半分の狂言作者清五郎は、敏くもそれを見て取ると、直ぐ出羽屋の側へ行つて、かう言つた。

「お客樣の内に御退屈の方があるやうだ。まだお肴が足りないぞ。」

源七には清五郎の言ふ事が分からなかつた。

「これ程心を盡しておもてなしをしてゐるに、まだ何ぞ足りぬものがあるかの。」

清五郎は聲を上げて笑つた。

「召し上がるお肴に不足はない。お酒のお相手の事だ。」

源七は思はず横手を打つたが、直ぐに交竹院を呼んで、かう囁いた。

「御遠慮なくば、役者どもを棧敷へ呼んで、お酒のお相手を致させませうか。」

「それはよい所に氣が附いた。一應伺つて見よう。」

交竹院は直ぐと江島の背後へ來て、その趣を傳へた。江島はこれを聞くとやつと胸の開くやうな氣が

した。

『宜しからう。それは一しほの樂しみぢや。』

江島はいつものやうに、冷たい儀式的な詞で返事をしたが、その微笑んだ目の色には隱し切れぬ嬉しさがあつた。

清五郎は交竹院の返事を聞くと、急いで樂屋へ駈けて行つて、「子供」の役者を殘らず連れて來た。清五郎は直ぐと役者どもを女中達の棧敷へ割り込ませて、酒の相手をさせた。そして、盃一つ毎に祝儀を與へた。三十五六人の「子供」は代る〳〵女中達の間へ膝を交へて、座を取り持つた。

併し、江島はやはり樂しまなかつた。こんなじやら〳〵した者どもを相手にして、何が面白からうと思つた。「はじめて芝居へ足を踏み入れた者とでも思つてゐるのか。清五郎も芝居者に似合はぬ鈍な男だ」かの女はさう思つて、蔑むやうに清五郎の顏を見た。

今度は金井六左衞門が江島の不快な顏色を見て取つた。

「淸五郎、子供ばかりでは興がない。立役をも呼んだらどうぢや。」

金井はかう言ひながら江島の顏色を窺つた。「子供」達の宰領にうつかりしてゐた淸五郎も、これを見ると直ぐに氣がついた。

淸五郎は又急いで樂屋へ行つたが、やがて市川團十郎、生島新五郎、座主の山村長太夫などを連れて來た。もう助六の狂言が濟んで餘程幕合の立つた時であつた。

三人はいづれも黑の紋附に袴を着けて來た。團十郎の紋は牡丹丸、新五郎の紋は須濱、長太夫の紋は

丸に實の一字である。かれらはまだ客を誰とも知らなかつたが、唯お城の重い女中とのみ聞いて、威儀を正して來たのである。

「當座座元山村長太夫めにございます。」

「生島新五郎めにございます。」

「市川團十郎めにございます。」

三人が同じやうに、自分の名を自分で言ふと、江島は始めてにつこり笑つた。

「助六の芝居面白う見ましたぞ。」

三人は恐懼して頭を床に摺りつけた。

「そのやうにされては氣詰まりで興がない。盃を取らす程にこれへ來や。」

三人は愈々恐れ入つた。

江島は一人一人に盃をさしながら、一人一人の姿形をつく〴〵と見た。長太夫はまだ二十六七の若者で、その若衆めいた髷の結びやうにも、その色子めいた襟の着こなしにも、何處か芝居者めいた艶めかしさがあつたが、その迫つた眉宇の間には、流石に劇場の經營者らしい打算的な野心のひらめきが見られた。新五郎はやせ肉の艶めいた男で、年よりは十も若く見えたが、强ひて人に媚びるやうな態とらしい取りなりが河原者らしい卑しさを現してゐた。團十郎は口が一文字に締まつてゐた、鼻が高く、額が廣く、頬が豐に張つてゐて、士分にしても恥づかしからぬ容貌を備へてゐた。その目は何人も容易に近づくべからざる威嚴を持ちながら、如何なる人をも引きつけずには置かぬ溫情を持つてゐた。その態度

には武ばつた内に優しみがあつた、謹嚴の中に寛濶があつた。かれは弱年であつたが、既に老匠の貫祿を備へてゐた。

「秋の菊の冷たさでもない。春の櫻の浮かれ心地でもない。夏の牡丹の氣高い花やかさだ」江島はさう思ひながら、團十郎の紋から顏へと惚れ〳〵とした目を移した。卑賤に生れて高貴に育つた江島には、艶容に氣品を兼ね備へた團十郎が誰よりも先づ氣に入つたのである。かの女は生れて始めて、「男」を戀しいと思つた。

併し、「男」の方で女ざかりの江島が美しさに心を動かしたのは、團十郎でなくて新五郎であつた。新五郎は寶永三年に尾州家の未亡人天龍院に通じて仕置を受けた弟の生島大吉から、屋敷方の女中の下々の浮かれ女などとは又變つた味のある事を、幾度となく聞かされてゐた。かれはその時分から弟のしたやうな「冒險」を自分も一度はして見たいと願つてゐた。かれは藝人らしい好奇心から、どうかして一度高貴の婦人に近づきたいものだと思つてゐた。「お女中もずつと高い所なら、露顯をしたところで、たいしたお咎めは受けまい。現に大吉などは、相手がお上の御親類だつたせいか、たつた五貫文の科料で濟んだではないか。出牢してから氣の狂つたのは、あいつの膽つ玉が小さいからだ」新五郎は極めて手輕にかう考へてゐた。

新五郎は計らず日頃念ずる貴婦人の前に出る事が出來たので、稍々恐れ入りながらも、窃に看察を怠らなかつた。鼻筋の通つた、嚴めしく口元の締まつた、利口らしい目の絶えず鋭く働く美しい婦人である。年は確に三十を越してゐるが、濃化粧の白粉の下にも、まだ初心らしい皮膚の清さが隱されないで

ゐる。片はづしに取り上げた綠の髮の艶々しさ。笄の花飾り。白綸子に金糸色糸で濱邊の貝盡しを總縫入にした袷に白羽二重を重ねて、段織の付帶をした品の好さ。白天鵞絨に紫の藤の花を縫ひつぶしにした五すぐらゐ幅のあるはこせこを稍長目に引き出された懷の大様さ。はこせこの間から同じ藤の花の彫のある銀平打が覗いてゐて、房にたとへた長い銀の飾りが帶の中程まで垂れてゐる風情。玉蟲色になるまで紅を濃くつけた唇から、時々洩れる漆のやうな鐵漿の色めかしさ。袖口からも懷からも鼻をついて來る得ならぬ薫り。新五郎は唯もう醉心地になつて、「どうかかういふ方の御贔負に預りたいものだ」と思つた。

併し、團十郎の方は全く別の事を考へてゐた。かれは一刻も早くかういふ席が去りたいと思つた。かれは十年前に父の横死を目のあたり舞臺の上に見てから、深く自ら決する所があつた。かれは苟も情事らしい事には決して關ふまいと思つた。決して若衆歌舞伎の亞流を汲まずに、飽くまで技藝で身を立てようと思つた。敬愛する母の榮光尼からも、常々御殿女中などには近づくなと戒められてゐた。

二人は挨拶に來たばかりで直ぐ又樂屋へ歸らなければならなかつた。三番目の出端が迫つて來てゐたのである。江島は又不快に思つたが、始めての事ではあり、大勢の見物をも待たしてある事なので、これぱかりは自由にならなかつた。

團十郎はさつさと樂屋へ歸つて了つた。新五郎は殘り惜しげに座を立つて、見返り勝ちに廊下を樂屋の方へ向つて行くと、ふと奥山交竹院に會つた。

「三浦屋、久しいの。」

「これはお兄い樣でございましたか。いつも御不沙汰ばかり申し上げてをります。」

新五郎の妻お竹は交竹院と一腹一生の兄妹なのである。お竹は元或小さな屋敷の奥向きに奉公してゐたのであつたが、新五郎の容色に溺れて、その屋敷を抜け出した爲に、交竹院からも喜内からも勘當されてゐたのを、その頃三味線淨瑠璃の師匠をしてゐた中村清五郎の取りなしで許され、今では新五郎の妻になつて、粂太郎とい男の子まで儲けてゐるのである。

「よう御見物にお出でなされました。」

「けふは愚老主人役でな。お城の女中方をお招き申したのだ。」

「では、只今わたくしの御挨拶に出ました……」

「さうだ。あれは江島樣といふ御母公附のお年寄で、當時お城では筆頭第一のお女中だ。」

「では、餘程貴いお方なので。」

「先づ御老中若年寄と雖も、頭の上がらぬお方だ。」

新五郎は今見た女中が、思ひも及ばぬ高貴な婦人であるのを知つて、愈々好奇心を挑發されると同時に、それが義兄の交竹院と入魂であるらしいのを見て、愈々野心を刺戟された。

「どうか山村座御贔負に相成るやう、お兄い樣からもお詞添へを願ひます。」

「宜しい。承知致した。時に、けふは喜内も參つてをるぞ。」

「左樣でございますか。存じませぬ事とてつひまだ御挨拶にも上がりませんでございましたが、どちらにお出でてございます。」

「下棧敷だ。」

新五郎はこの際喜内の歡心をも得て置きたかつたので、急いで喜内のところへ挨拶に行つて、それから樂屋へ歸つた。

間もなく三番目の狂言は始まつた。山中平九郎が愛護の若の師匠野村安右衞門、團十郎が大道寺田畑之介である。安右衞門が硯の水をつがせようとすると、田畑之介は大に怒つて、手水石をさし上げて水をつぐ。やがて、安右衞門が夢に蛇になつて鶏を食ふと、田畑之介はその頭を抑へつけて石で叩き殺す。安右衞門が惡夢から目を覺まして、『頭ぶつた夢を見た。』と言ふので、田畑之介はふと氣がついて、これを睨みつける。

宮路や梅山は頻に興に入つて、やれ平九郎の憎態な所が好いとか、やれ團十郎のりきみやうが好いとか言つてゐたが、江島はひとり樂しまなかつた。

江島は舞臺の上の團十郎を群集と一緒に見るよりは、生地の儘の團十郎を自分一人で見たかつた。併し、その團十郎はさつき一寸挨拶に來たばかりで、もう今は總ての見物の所有物になつてゐる。

江島は交竹院を呼んだ。

「はじめてのせいか大層勞れました。皆の者はここへ置いてよい程に、わたし一人茶屋へでも行つて休みたいと思ふが。」

「それは御大儀でございませう。では直ぐ御案内を。」

江島は交竹院、清五郎、平右衞門などを連れて、狂言なかばに茶屋へ引き上げた。來た時も一寸寄つ

た山屋といふ茶屋である。
「交竹院どの、わたしは成田屋が大層氣に入りました。もう一度これへ呼ぶわけには參るまいか。」
「なんの造作もない事でございます。なあ淸五郎。」
淸五郎は頷いた。
「參る段ではございませぬ。家の譽でございます。では私が直ぐ呼んで參りませう。」
さう言ひながら、淸五郎が二階を駈け降りると、下には津賀屋と出羽屋が心配さうな顏をして待つてゐた。
「御上客樣はどうなさいました。」
「もう一度成田屋に會はうと仰しやるのだ。」
津賀屋はほつと息をついた。
「それで安心した。わしは又何かお氣に召さぬかと思つて、大抵心配した事ぢやありませぬ。では師匠何分宜しく賴みます。骨折はいくらでも出さうから。」
そこで、淸五郎は直ぐに樂屋へ行つたが、勿論團十郎は舞臺へ出てゐて、部屋にはゐなかつた。暫く待つてゐると、役をしまつて歸つて來たので、直ぐその事を賴んで見たが、團十郎は聞かなかつた。
「さつき一度御挨拶に上がつたのだから、あれでもう御免が蒙りたいな。一體おれは女中方の所へ御挨拶に出た事はないのだが、お城の重いお役だと聞いたので、あれでもおれは大張り込みで出かけたのだ。」

「でも、大層親方〻御贔負になすつて、是非もう一度連れて來いと仰しやるんですから。」
「それは駄目だ。もう直ぐあとの顏にも掛からなけりやならねえから、どうとか巧く斷つて呉れ。」
團十郎は何と言つても聞かなかつた。淸五郞は困つた事になつたと思つたが、相手が位のある役者だけに、どうする事も出來ないで、すご〳〵茶屋へ引つ返すと、冷汗を拭き拭き、その趣を江島に傳へた。
「左樣か。舞臺がいそがしいといふのでは仕方がない。」
江島は色も動かさずにかう答へたが、心の內は未練で未練でならなかつた。
交竹院は茶屋に命じて、又ここでも酒宴に座を取り持つのであつたが、江島はもう樂しまなかつた。
「勞れてゐますから、もう芝居へは行きますまい。これから直ぐにお城へ歸ります。」
暫くすると、江島は如何にも惱ましげな顏をして、かう言つた。江島が歸るといふのに、外の者が見物してもゐられないので、それでは一同に「お立ち」といふ事になつた。
江島はその日終に樂しまずに大奥へ歸つたのである。

（六）

津賀屋と出羽屋は折角の思ひで芝居へ招いた江島が面白からぬ樣子で歸つたので、ひどく氣を落した。
「困つたなあ、出羽屋。どうしたものだらう。」
「この分ぢやあとてもお望みは叶ひません。もう一度芝居見物を催すのでございますな。」
「だが、さう幾度も芝居へお招きをしたところで、又こないだのやうな事になつて了つては水の泡だか

らな。」

「でも、こなひだは三浦屋や成田屋が碌々お相手を申し上げなかつたのがお氣に召さなかつたのですから、今度は一つ清五郎さんにでも骨を折つて貰つて、是非ゆつくりお相手をさせる事にするのです。」

「成程、さうすれば好いかも知れないな。」

「そこで、さう度々奥山様のお催しといふのも異なものですから、今度は一つ金井様へお願ひして、小普請奉行様のお振舞といふ事にするのですな。」

「成程、お前は中々味な所に氣がつくな。それでは早速御進物を調へるから、お前は金井様お屋敷へ行つて吳れ。おれは奥山様へ御相談に上がるから。」

から相談がきまると、即日二人は津賀屋の店を左右へ別れて出た。

津賀屋は再び夥しい進物を携へて、飯田町の屋敷に交竹院をおとづれた。

「いつも鄭重で痛み入るの。」

「どう仕りまして。」

「時に、過日は首尾ようお年寄のお取持が出來て祝着だつた。」

「どう致しまして。大しくじりを致しました。」

「なぜの。」

「お歸りの御様子では、お腹立のやうだつたではございませぬか。」

「なに、さしたる事もない様子だ。一體お城女中などといふものは、世間知らずの我儘者が多いから、や

たらと疳癖を起すが、あれで御心中は餘程お嬉しいのだ。』

「左樣でございますかな。時に、もう一度催さうと存じますが如何なものでございませう。」

「宜しからう。」

「今度は金井樣のお振舞といふ事に致しまして。」

「成程。併し、今度はもつと立つた役者にゆつくりお酒のお相手を勤めさせなければいかぬな。」

「その儀でございます。江島樣は大層成田屋が御贔負のやうでございまするな。」

「なに、成田屋一人に限つた事はない。誰でも立役なら御氣に召すのだ。」

交竹院がかう答へたのには隱れた意味があつた。かれは江島が團十郎に氣のあるのを知つて、それを不快に思つてゐるのである。かれは自分が江島に思を寄せてゐるのであつた。

「一體、成田屋といふ奴は、河原者の癖に氣位が高くて、愚老などは嫌ひだ。藝人はやはり藝人らしい方がよい。緣引きのある愚老の口から申すと可笑しいが、そこへ行くと、あの生島新五郎だ。名物男と言はれた七三郎を眞似てゐるだけあつて、如何にも柔かで、附きがよくて、どんな物堅い女中でも一度に崩れて了ひさうではないか。』

「三浦屋の親方が御親類だといふ事はあの時承りました。今度は三浦屋の親方にも一つ腕に縒りをかけて貰ひたいと思ひますから、先生からも宜しくお賴みなすつて下さいまし。」

「精々骨を折つて貰ふ事にしやう。それから今度はお供の女中方にも、それ〳〵お相手になりさうな役者を出さなければいかぬが、それらの事はやはり淸五郎に相談をするがよい。」

「畏りました。色々と御親切に有難う存じます。今度は一つお氣に召すやうにして、お流れ位は頂戴致したいものでございますな。」

「その方は、萬事愚老の方寸にあるから。」

「はい。有難う存じます。」

津賀屋は例によつて、進物に相當するだけの智慧を貰つて歸つた。

一方、出羽屋源七は津賀屋から預かつた樽代金百兩を持つて、金井六右衞門を桃町の住居に訪ねた。六右衞門は出羽屋の賴みを聞くと、直ぐに引き受けた。

「宜しい。承知致した。併し、知つてもゐようが、同じ御本丸とは言つても、お表と大奧とは御錠口といふ嚴重な仕切りがあつて、常は容易にお目通りが出來ぬ。何かの折を見て申し上げる事にしようから急いではいかぬぞ。」

「いえ、もうそれは御都合でいつでも宜しいのでございます。何しろ城内八ヶ所の御用を足さうと申すのでございますから、大仕事でございます。決して、いついつなどといふ事は申し上げませんから、何分宜しくお願ひ申し上げます。」

源七が諏訪町の店へ歸ると、善六はもう先きへ歸つて待つてゐた。そこで、今度は二人揃つて、作者の清五郎を訪ねた。清五郎は手土産として三十兩の金を津賀屋から貰ふと、恭しくそれを頂いて、神棚の上へのせた。

「こなひだはちと「とちり」でしたが、こんだは狂言をうまく書いて御覽に入れます。成田屋はあんな人

で、とても話になりませんから、こんだは三浦屋にうんと骨を折つて貰ひます。それから、山村だけではとても好い所が揃ひませんから、こんだは森田や中村や市村からも色つぽい所を引つこ拔いて來て、外のお女中方のお相手をさせませう。幸、手前は葺屋町の「部屋」に名前がありますから、さういふ事には萬事都合が宜しうございます。それから、今度は山村の太夫元を味方に入れなけりやあいけません。何といつても金方(きんかた)ですから、役者はやつぱりあの人の言ふ事を聞きます。それから、手前家内のお梅でございますが、あれは紀州樣へ御奉公をしてゐた時分に、江島樣を存じ上げてゐたと申しますから、今度はあれに女中方のお取持をさせようかと思ひます。』

津賀屋と出羽屋は、淸五郎のこの用意周到な畫策を聞くと、やつと安心して、家へ歸つた。

小普請奉行の金井六右衛門は、どうかして江島に一度會ひたいと思つたが、中々その折が來なかつた。兎角する内に、五月も過ぎ、六月も過ぎた。

七月十一日の事である。幼年の將軍は濱御殿へ成られて、「殺生のお慰み」を遊ばされた。その時、小普請奉行はやつと江島と詞を交す機會を得た。

『先達て芝居御見物の折は、何かお心に叶はぬ節がござりましたさうで、御同道申し上げたそれがしまで、何か物足りぬ心地で歸邸致しました。就いては近日それがし催主となつて、今一度見物致さうと存じまするが、思召もござらば御出での程願はしう存じます。』

江島は金井にかう言はれると、處女のやうに顏を染めた。江島は四月以來、一日も團十郎の事を思はぬ日はないのである。

「芝居はどこへ參るのぢや。」

「やはり山村座が宜しからうと存じまする。」

山村座は丁度この時盆の芝居をあけてゐた。狂言の名題は『善光難波池』である。併し、團十郎は太夫元との間に面白からぬ事があつて、芝居を休んでゐた。春の「助六」が大當りだつたので、給金の値上げを迫つたところが、それが聞かれなかつたのである。非業の死に父を失つてから、殆ど十年近くも劇場の冷遇を受けて來たかれは、一刻も早く親團十郎と同じ地位まで進みたいと思つてゐたのである。

江島は團十郎の缺勤を知つてゐた。

「併し、今度は成田屋が出ぬといふ事ではないか。」

六右衞門は少し狼狽したが、さりげない態でかう言つた。

「芝居は休んでをりますが、お取持には參る事になつてをりますする。」

「それなら、參つても宜しい。丁度十六日には魂祭のお宿下りがあるから、飯田町の方は早く濟ませて、その方へ參る事にしませう。」

金井はその晩直ぐその趣を淺草の津賀屋へ傳へた。津賀屋は直ぐ清五郎の所へ駈けつけた。清五郎は直ぐ山村長太夫の所へ駈けつけた。

長太夫は若い野心家であつた。かれの妹は町奉行丹波遠江守の奥向きへ勤めてゐた。かれの一家はその緣故で町奉行の恩顧を蒙る事が多かつた。長太夫は常々丹波樣の威光を借りて、何か一山當てたいものだと思つてゐた。ところへ清五郎の話を聞いたので、直ぐと乘氣になつた。江島に滿足を與へて置け

ば、月光院へも取り入る事が出來よう。若しさうなれば、表向には町奉行といふ後見もある事だし、どんな大望でも叶はぬ事はあるまいと思つたのである。かれは直ぐ清五郎に相談をして、芝居から自分の家の二階へ直ぐに通れるやうな忍びの道を作る事にした。京橋五丁目で中田屋といふ湯屋をしてゐる隠居の父友碩の許へも、早速巨細の相談をしに行く事にした。

清五郎は直ぐその足で生島新五郎を訪ねた。新五郎は話を聞くと、躍り上がつて喜んだ。

「そいつあ有難い。今度はからだぁ樂な事だしするから、精々骨を折つて見よう。如何にお城女中だとつて、女はやつぱり女だ。俺もその道へかけちやあ、なあ清五郎さん。」

『左樣でございますとも。なんしろ、お金になつて、あんな豪勢な女を酒の相手にして、その上うまく行きやあ、ねえ親方。』

「考へて見りやあ、弟の大吉なざあ馬鹿だつたよ。呉服物の長持へなぞ隠れて行つて、あんな苦しい思をして屋敷へ這入つてよ。その揚句がお仕置といふのだからな。俺なざあ默つてゐても、こんな運が向いて來るのだ。」

「左樣でございますとも。なんしろ、相手がお年寄といふお城女中でもずつと重い所なのですから、ちつとやそつとの事があつたつて、お咎めになぞなる氣遣ひはございませんし、こんなうまい話はありやあしません。」

清五郎は散々に水を向けて置いて、さて急に欝いだ顔をした。

「時に親方、一つ困つた事があるのですが、實は成田屋さんでございますね。この前親方と御一緒だつ

たので、こんだも是非お取持に出て貰はないと困るのですが、芝居の方があんな工合になつてゐますし、どうしたものだらうと實は心配をしてゐるのでございます。なんとか親方のお力で、引張り出す工夫はないものでございませうか。」

「なあに、直ぐ出て來るだらうよ。どうせ發句でもひねつて遊んでゐるんだらうし、太夫元へは氣まづくつても、これはこれで又場合が違ふからね。第一家門の譽だな。あしたにも訪ねて行つて、話して見よう。」

新五郎は何の造作もないといふ顔をした。そこで、清五郎も心では危みながらも、幾分の望みを繋いで、牛島の家を辭した。

明くる日、新五郎は芝居を濟ますと、團十郎を訪ねて、早速その話をした。併し、團十郎はやつぱり首を横に振つた。

「どうか親方、その事だけは勘辨して下さい。あつしも親方のお引き立て一つで、やつと今日になつたやうなわけで、言はばまだひよつ子も同然、ちつとでも油斷の出來る年ぢやあございません。親方の前で言ふのも異なものですが、あの半六めに親父がやられた時のくやしさは未だに忘れは致しません。それといふのも、元の起りは女からでございます。あつしも家業の事でございますから、唯厭だたあ申しませんが、お屋敷方のお女中なぞには決して近づくなと常々お袋にも言ひつけられてゐますし、芝居もあんな事で休んでる時ですから、どうかこんだの所は親方から宜しくお詫びをなすつて置いて下さいまし。」

團十郎はかう言つたぎりで、もう新五郎がどう詞を代へて賴んでも聞かなかつた。

新五郎は團十郎の來る來ないを心配したのではなかつたが、かれ一人が來ない爲にこの催しが取やめにでもなつたら大變だと思つたのである。そこで、清五郎の方へは成田屋も來る事になつたといふ返事をした。當日になつて、何とかごまかせば、それで濟むと思つたのである。

山村長太夫が芝居の二階棧敷の突當りと自分の住居の二階との間に、每晩秘密で特別工事を加へてゐる內に、早くも七月の十六日は來た。

例に依つて、朝暗い內から、津賀屋と出羽屋が出向いて來る。やがて、當日の主人役たる金井六右衛門が駕籠で乘りつける。清五郎が女房のお梅を連れて來る。交竹院が喜內と同道で來る。白井平右衛門と豊島平八郎と西與一右衛門が袖を連ねて來る。その內に、江島を初めとして、いつもの女中達が、靑や赤の鋲打駕籠を急がせて來た。

女中達は棧敷へ這入ると、みんな釣御簾へ背を向けて座つた。この日はもう初めから芝居は見ないで、いきなり酒宴にかゝる積りなのである。やがて杯盤の用意が整ふと、かねて清五郎が賴んで置いた他座の役者が、追々と艶めかしい姿を運んで來た。葺屋町の市村竹之丞座からは瀧井半四郎を筆頭として、山中刈藻、坂田采女之丞、竹中吉三郎などが來た。堺町の中村勘三郎座からは袖岡庄五郎、岸田妻菊、藤田小吉三、同じく花之丞などが來た。木挽町の森田勘彌座からは筒井歌之助が一人で來た。いづれも振袖に紫帽子の若女形ばかりである。酒宴は直ぐと始まつた。朱塗の盃は女の唇から男の唇を移つて歩いた。

清五郎はお梅を江島に引き合せた。

「手前女房お梅と申しまする不束者でござりまする。以前、櫻田御殿に上がつてをりました頃、度々お見上げ申したさうにござりまする。」

「左様か。それはよい話相手ぢや。」

江島はお梅に見覺えがあつたが、わざと忘れたやうな顔をした。

好い頃を計つて、交竹院が津賀屋を連れて來た。

「これは淺草諏訪町に住居致す諸家御用達津賀屋善六と申す者でございます。先だつては愚老が亭主分となり、今日は又六右衞門を賴んで催主と致しましたが、實はいづれもこの善六が振舞なのでございまする。」

江島はさして驚かなかつた。慧眼なかの女は初めからそんな事であらうと推測してゐたのである。

「さては左様であつたか。度々の馳走、過分に思ひますぞ。」

江島はかう言ひながら、善六に盃をさした。津賀屋が有難さに震へながら盃を受けるのを見ると、江島は懐から沈香の服紗包を取り出して「これは當座の引出ぢや。」と言つて善六に與へた。

津賀屋が面目を施して退くと、入れ違ひにこの座の「野郎」藤村半太夫、薬山源次郎、三條勘太郎、市川富三郎などが挨拶に來た。五間を打ち抜いた廣い桟敷も、多數の男女で身動きも出來ぬ程になつた。盃を廻らす毎に、女の肩は男の肩に觸れた。銚子を取り次ぐ毎に、男の膝は女の膝を突いた。酒の香と脂粉の香は御簾を溢れて、下にゐる見物までを醉心地にした。

江島は盃の數を重ねたが、少しも醉はなかつた。かの女は寧に團十郎の來るのを待つてゐるのである。團十郎の來るまでは、醉つてはならぬと心を引き締めてゐるのである。かの女は初心らしく胸を轟かせながら、階子口の方ばかり見詰めてゐた。

暫くすると、新五郎がそこから姿を現はした。相變らず艶めかしい柔かな取りなりである。殊にけふは樂屋銀杏の毛筋一つ亂さず、ほんのりと薄化粧した顏の美しさが、一しほ女中達の目を引いた。

江島は自分の前にひれ伏した新五郎に盃をさすと、直ぐにかう聞いた。

『成田屋はどうしました。』

『芝居を休んでをりまする。』

江島は新五郎にかう言はれると、もうあとを聞く勇氣がなかつた。六右衞門を呼んで、問いて見ようかと思つたが、それもはしたないと思つた。千人餘の女子を頤使するかの女も、男女の情にかけては、まだそれ程羞恥を帶びてゐたのである。

かの女は唯默つて盃を重ねた。新五郎は取持上手に四方山の話をしながら、又つく〲と江島の姿に見惚れた。白の越後縮に鐵砲百合の總縫をした帷子が、丈のある體に似合つて、春の時よりは又一しほ艶である。心持上氣をした頰には、河原撫子の淸淨な美しさがあつた。

暫くすると、江島は又新五郎に聞いた。

『成田屋は挨拶にも來やらぬか。』

一度は言ひ紛らした新五郎も、今度は何とか斷りを言はなければならなかつた。

「さればでございます。昨日までは伺ふと申してゐたのでございますが、昨夜から急に母親のからだが悪くなつたさうにございまして。何しろ、御存じの通りの親孝行者でございますから。」

江島は新五郎がまだ何か言はうとするのを、もう澤山だといふ顔をした。かの女は新五郎の目の色に直ぐと「嘘」を見破つて了つたのである。

「それではどうも致しやうがない。」

江島は捨てるやうにかう答へたが、心は未練で煮えくり返るやうであつた。「團十郎は確に自分を避けてゐるのだ。」さう思ふと、ぢりぢりと癇が立つて來た。かの女は新五郎の手から、いきなり盃を奪ふと立て續けに二三杯酌をさせた。

新五郎は「やつと機會が來たな」と思つた。江島の團十郎に氣のある事は、かれも薄々悟つてゐたのである。それ故、女が急にかうした捨鉢らしい態度に出たわけも、かれにはよく分かつてゐた。分かつてゐながら、分からぬやうな振りをした。分らぬやうな振りをしながら、その虚に附け入らうとした。女を扱ふに馴れた新五郎は、「どつちにしても女の心がぐらついて來れば、もうこつちの者だ」と思つたのである。

かれは舞臺でする通りな艶めかしい笑ひやうをしながら、段々親しげな口を利き始めた。

「お見事。お見事。お見事ついでにもう一つ。」

「もうさうはたべられぬ。」

「たべられずば、お呑み込みなされませ。」

「呑み込まうにも、胸が苦しい。」

「思ふ心の通らねば、姫はお胸の苦しさに。でござりますか。は、は、は、は。」

江島は團十郎が來ないと聞くと、張り詰めてゐた氣を一度に緩めたので、抑へ抑へてゐた酔が一時にかつと發して來た。そこへ二三杯、立て續けにやけで飲んだのが、身に泌み入る程利いたところへ、又新五郎の勸め上手に手を持ち添へられて、三四杯盃を重ねたので、もう居ずまひが崩れる程酔つて來た。

宮路、梅山、木曾路などの酔ひやうは更に激しかつた。かれらが「野郎」と笑ひさゞめく聲は、屡々舞臺にゐる役者の臺詞を妨げた。「東西。東西。」といふ罵るやうな聲が、時々下の見物から起つた。

折よしと見た新五郎は江島に向つてから言つた。

「大層お勞れの御様子でございますが、如何でございませう。實はこの棧敷から直ぐに太夫元の二階へ參れる忍びの道があるのでございます。これはかねて太夫元が、貴いお方のお忍びでお出での折、御休息の爲に拵へて置いたものでございます。御退屈なら、暫くそこへお越し遊ばして、御休息遊ばしたら如何でございます。」

江島はそれがけふ新しく出來たものだとは夢にも知らなかつた。

「それは一段の事ぢや。そなた案内してたもるか。」

「直ぐに御案内申し上げます。」

「併し、一人立つも何とやら心苦しい。宮路殿を連れて行きませう。」

「御中老様お一人なれば宜しうございませう。あまり御人數だと座敷が手狹でございますから。」

新五郎はかう釘をさして置くと、さつきから宮路と睦ましく盃を交してゐた瀧井半四郎を小手招きした。

江島が宮路に目配せをしながら座を立つと、宮路は直ぐその側へ來て、手を取つた。

棧敷の突き當りまで行くと、三尺の忍びの戸口があつた。新五郎がその戸をこつ〳〵と叩くと、中に待ち受けてゐた長太夫の父友碩が戸を開いた。這入つて見ると、七間の部屋を三つに仕切つた綺麗な座敷である。まん中の座敷には、既に杯盤の用意が出來てゐた。左右の座敷には、金屛風が立て廻らしてあつた。

江島達がまん中の座敷へ座ると、下から長太夫が上がつて來た。

「當座毎々の御贔負有難う存じまする。お勞れとは存じまするが、當座一同に代りまして、粗酒一獻差し上げたう存じ上げまする。」

江島はここへ來ても、又盃を取らなければならなかつた。

暫くすると、江島は堪らなくなつて、宮路の膝に突つ伏して了つた。

「大層お苦しさうな御様子ですが、どこぞにお休みになる所はありますまいか。」

宮路が内々悟つてゐながらかう聞くと、新五郎は直ぐと立ち上がつた。

「わたくしが御案内申し上げませう。」

江島は宮路に抱いて起されると、よろ〳〵として、思はず新五郎の手を摑んだ。新五郎はその手を堅く握つて放さなかつた。

二人が右の金屏風の蔭へ、吸ひ込まれるやうに姿を隠したのを見ると、宮路も額へ手を當てゝ、惱ましげに眉を顰めた。

「あなた樣もお休み遊ばしますか。」

半四郎がから聞くと、宮路はいきなりかれの肩に縋つた。

二人が左の金屏風の蔭へ隠れると、長太夫は眞面目に安心したやうな顔をして、階子段を下へ降りた。

江島と宮路が棧敷を消えると、淸五郎夫婦の案内で、一同は山屋の二階へ引き上げた。そこには既に又新しい酒宴の用意が出來てゐた。

白井平右エ門や豊島平八郎などは、近所の「子供屋」から「かげま」を呼んだ。染色の振袖を着て巾廣の帶をしめた女裝の美少年逹は、黑い塗下駄を鳴らし連れて來た。

中老の木曾路は役者の袖岡庄五郎に戯れた。御表御使番の梅山は中村源太郎を愛した。御内證御使番の吉川は筒井歌之助を放さなかつた。交竹院は誰彼を問はず、美しい女中逹の間を戯れて歩いた。

一人の女を二人の男が爭つた。一人の男を二人の女が爭つた。更に一人の男を一人の女と一人の男が爭つた。この淫らに物騒がしい酒宴を、更に亂りがはしくするものは、淸五郎夫婦の淫靡を極めた歌三味線であつた。

（七）

江島は計らず新五郎の情を受けて、思ひもかけぬ嬉しさに身を悶えたが、心は依然として團十郎を思ふのであつた。

山村座の七月狂言は、團十郎が出ないばかりに、氣の引ける程客足が薄かつた。狼狽した長太夫は、日に幾度となく成田屋を訪ねるのであつたが、團十郎は容易に出勤を肯じなかつた。

「霜月の親見世狂言からは、きつとお望み通りの御給金を出しますから。」

この條件で、やつと興行の途中からかれが出る事になつたのは、もう七月の廿四日だつた。團十郎は初め自分の役だつたのを今まで新五郎が間に合せに勤めてゐて吳れた本多善光に扮して、山中平九郎の藤平と外記節に合せて紅葉狩の所作をするのである。

團十郎が出ると聞くと、江島は急に又山村座が戀しくなつて來た。そこで、宮路と相談して、今度は自分達の催しにする事にした。

「いつもお芝居ばかりでも興がございませんから、今度はお歸りに舟遊びを遊ばしたら如何でございます。」

宮路のこの案は一層江島を喜ばせた。

江島は直ぐと飯田町の兄の所へ手紙を書いて、來る廿七日には自分達で山村座の見物を催すから、何かの用意を頼む。歸りには船遊びをも催す筈だから、その方の事も宜しく取り計らつて置いて貰ひたいと言つてやつた。

白井平右衛門はこの手紙を見ると、義弟の豐島平八郎を誘つて、早速二人で津賀屋を訪ねた。善六は話を聞くと、可笑しい程二人に禮を言つた。

「よく知らして下さいました。これを知らずにゐた日にやあ、諏訪町の津賀屋も飛んだどぢを踏むとこ

ろでございました。皆様のお蔭様で、城内二ヶ所はもうこつちの物になりかかりました。今が肝心の所でございますから、そのお催しは是非わたくし共にお任せが願ひたうございます。きつとお氣に召すやうにして御覧に入れますから。」

二人は元よりその積りで來たので、萬事を津賀屋に任せて歸つた。

二人が歸ると、善六は直ぐ源七を呼び寄せて、二人で山村長太夫を訪ねた。そして、芝居を特に明六つから始めて、八つ前にはかぶるなうにする事だの、客の船は二艘にして、別に一般役者ばかりを載せる船を誂へる事だの、今度は是が非でも團十郎を引つ張つて行く事にする事だのを、夜の更けるまで相談した。

當日はぢきに來た。見物の一行も、見物の様子も、いつもに少しも變りはなかつたが、唯著しく變つたのは、酒の相手に來る役者達の女中に對する態度であつた。かれらは最早かの女達を、恭々しくのみは崇めてゐなかつた。或役者は或女中を情婦か何ぞのやうに扱つた。或役者は或女中を遊び女か何ぞのやうに扱つた。役者の使ふ傳法な詞を、女中も學んで使ふのがあつた。

江島も始めて食べた禁制の木の實の味を忘れる事は出來なかつた。かの女は新五郎の顏を見ると、今までにない誘惑の力を感じ、今までにない服從の念が起つた。併し、かの女はまだ「心」の總てを新五郎に與へる事は出來なかつた。かの女は舞臺に出て來る團十郎を見る度に、遣る瀬ない胸を悶えた。それ故、新五郎が幾度かの女の側へ來て、目まぜで忍びの戸口をさしても、かの女は決して應じなかつた。

新五郎は江島の心をよく知つてゐた。この日の見物の意味をも十分悟つてゐた。併し、かれは決して

悲しまなかつた。かれは一旦江島の年に似合はず初心なのを確めてからは、悉く心を安んじて了つたのである。「既に男を知つてゐる女は、手に入れるのはやさしいが、手に入れてから後がむつかしい。まだ男を知らぬ女は、手に入れるまでがむつかしいが、一旦手に入れたら、もう安心なものだ」女に經驗の多い新五郎はこんな風に考へてゐた。かれは女の心が外の男で亂れゝば亂れる程、女に味が出て來て好いと思つた。かれは團十郎の決して江島に靡かぬのを知つてゐた。

芝居は幕を急いで、豫定通り八つ前には濟んで了つた。一行は淸五郎夫婦の案内で、三十間堀から本材木町の川岸を、江戸橋までぞろ〳〵と歩いて行つた。

そこには二艘の華美な遊山船が用意されてゐた。一艘を川一丸といひ、一艘を若松丸といふ、いづれも屋形船である。川一丸には紺赤幅交りの幕が張つてあつて、船頭は紅樺に腰は敷瓦、背中に浮線綾の紋のついた一重を着てゐた。若松丸には紫赤白幅交りの幕が張つてあつて、船頭は薄柿に三階松の紋、腰は石疊の一重を着てゐた。女達と男達が、二つの船へ分かれて乘り込むと、これに二艘の臺所船がついて、賑かに棧橋を離れた。

鎧の渡しを通り過ぎて、靈岸橋を右に見ながら、くづれ橋を潜つて、箱崎町の川岸へ出ると、そこに又一艘屋形船が待つてゐた。木挽町、葺屋町、堺町四座の役者をすぐつて載せた船であ〃。この船には淺黃赤幅交りの幕が引き廻してあつて、船頭は淺黃に左巴の紋、裾は薄柿に紺の格子を染め出した一重を着てゐた。

新五郎がゐる。半四郎がゐる。袖岡庄五郎がゐる。中村源太郎がゐる。殊に珍らしいのはこの艶めか

しい男達の間に、黒つぽい地味な一重を着た團十郎が、眞面目な顔をして扣へてゐる事であつた。

『あまり素氣なくしてお家業に障らうぜ。けふは役者ばかりが一つ船に乗つて行くといふのだから、是非とも附き合つておくんなさい。若し挨拶がしたくなきやあ、挨拶をしねえだつても濟むんだから。』

團十郎は先踏の新五郎にかう言はれて、どうにもこの日は斷り切れなかつたのである。

役者達は二艘の船の姿を認めると、手拍子面白くこれを迎へた。三艘の屋形船が、花やかな幔幕に涼しい川風をふくませながら、舳艫相銜んで大川筋へ出ると、船頭達は聲を合せて船歌を唄つた。

新大橋の下を潜る頃、最後の一艘から俄に太鼓三味の賑かな騒ぎが起つて來た。立つて舞ふものがある。坐つて唄ふものがある。女中達もこの趣向に興を促されて、思はず前の船から囃し立てた。日はまだ高かつた。金色な日の光と花やかな船の飾りと艶めいた女中役者の裝ひとが、川の水に亂れ映つて、目も眩めくばかりであつた。

お舟藏を右に見ながら、船はしづ〳〵と上へ登つた。兩國橋を越えて了ふと、行く手は漫々たる角田川で、もう目を遮る橋もなかつた。三艘の屋形船はいつか横に列んで進んでゐたが、暫くすると、誰の命令でか、一緒にぴたりと船足を留めて了つた。忽ち船から船へ舫がつけられた。男の船から女の船へ行くものがある。女の船から男の船へ行くものがある。男女入り亂れて酒宴を催す内に、船は舫をつけた儘で、又川上へ動き出すのであつた。

團十郎は今更逃げもならず、自分達の船へ侵入して來た女中達の間に挾まれながら、迷惑さうに盃を嘗んでゐた。江島は隣の船から、その様子を見て、はしたなく身の抜へる日下の女中達を羨んだ。かの

女は唯早く何かの機會が來ればと、心に念ずるばかりであつた。

淺草御藏を左に見る頃、不意に役者達の船から罵るやうな聲が聞こえ出した。何が事の起りであつたか、交竹院と團十郎が口論を始めたのである。

「かりにも御本丸のお女中樣方だ。河原者の分際で、御贔負になるのが嬉しくないとは何事だ。」

「なんの勿體ない。決して嬉しくないなどとは申し上げません。唯あまりお女中達の御贔負が過ぎますると、芝居道の爲に宜しくないと申し上げたのでございます。」

「芝居道の爲に宜しくないとはどういふ事だ。」

「さればでございます。總じてお女中方の御贔負は役者の藝にあるよりは、役者の顏かたち、色めいた取りなりなどにあるやうでございます。同じ芝居を御見物下されますにしても、お女中方は「役者」の内に「役」を見てやらうとはなさらずに、「役」の内に「役者」を見ようとなされまする。へつらひ者の役者は又それをよい事にして、舞臺へ出ても役の性根などはなく、唯棧敷のお女中方へ色目流し目をする事ばかり考へてをりまする。これでは芝居のよくなる道理がござりませぬ。」

「芝居道の講釋、えらいものぢや。併し、芝居道がどうならうと、それをお女中方が構ふものか。」

「それだから、御贔負も大抵にして頂きたいと思ふのでございます。」

「まあ河原者は河原者らしう、理屈なしに可愛がられてゐたら、それでよいではないか。」

「それが違ふのでございます。お侍にお刀がお命なら、わたくし共には芝居が命なのでございます。舞臺は戰場、樂屋は陣屋、衣裳は鎧、鬘は兜なのでございます。お女中方の御贔負はなくとも、いくさは

立派にやつて行けまする。」
この一言を聞くと、江島は顔色を變へた。
「淸五郞、成田屋を船からおろせ。もう目通りは叶はぬ。」
江島は一言かう言つたきり、靑い顏をして、震へてゐた。團十郞の正しい議論は、交竹院に分からなかつたやうに、江島にも分からなかつたのである。かの女は唯自分の威嚴の公衆の前で傷つけられたのが口惜しかつた。かの女は前後を忘れて怒つた。戀をも男をも忘れて怒つた。かの女は足をあげて「不禮者」の顏が蹴りたかつた。江島は團十郞の嚴めしい顏を愛する事は知つても、團十郞の嚴めしい心を愛する事は知らなかつたのである。
團十郞は駒形堂の川岸で、唯一人船をおろされた。おろす者もおろされる者も無言である。與は悉くさめた。今まで太皷三味に唄ひ騷いでゐた遊山船も、今は死骸をのせた船のやうな靜かさになつた。
この不安な沈默を急に破つたのは、江島の上釣つた高笑ひであつた。
「あれしきの男の事で、座が白けるといふ事があるものか。不禮者故目通りを遠ざけたまでの事ぢや。心痛無用ぢや。飮みや。唄や。踊りや。」
かの女は肝高な聲でかう叫ぶかと思ふと、急に新五郞の手をとつて自分の側へ引き寄せた。そして、物狂ほしく盃を重ね始めた。
江島の機嫌が直つたと思ふと、交竹院は先づ笑ひ出した。やがて新五郞も笑ひ出した。宮路も笑ひ出した。半四郞も笑ひ出した。平右衞門も笑ひ出した。一行は忽ち又もとの亂醉と騷擾とに歸つた。

放蕩な白井平右衛門は更に一同で吉原を襲はうではないかと言ひ出した。江島は直ぐとそれに同意した。

船は聖天下の堀へ繋がれた。女官と俳優と醫師と武士と商人との、醉歩危く入り亂れた一隊は、夕暮の田町をぞろ〳〵と、人目も恥ぢずに吉原へ向つた。

江島の亂行はこの日から始まつた。

團十郎に望みを裏切られた江島は、急に新五郎へ情を傾けた。かの女は淸五郎の娘を喜内の娘に仕立てゝ、これを大奥の部屋方に置いた。そして、新五郎への文使ひをさせた。

御書院番平田伊右衛門の家を中宿にして、こゝで度々新五郎とも會つた。芝居も四座を悉く見て歩いた。

御代參の折懇意になつた增上寺の寺家德水院とも通じた。宮路の馴染瀧井半四郎にも手をつけた。終には交竹院に挑まれて、その情をも退けなかつた。

その內、江島は遊樂の費用に窮して來たので、雜司ヶ谷鬼子母神の別當から三百兩の金を借りた。併し、その金を返す事が出來ないので、かれを芝居だの吉原だのへ連れて歩いた。

二十年の禁欲は一時に破れたのである。熟し切つた木の實は地の上に墮ちたのである。蕩兒と姦婦との間に生れて、姦夫と姦婦との間に育つた「子供」が無拘束に我意を振ひ始めたのである。

月光院に心からの忠勤を勵んだ江島は今どこにも見られなかつた。かの女は巧みな辯舌で上を僞り、苛刻の命令で下を虐げた。かの女は淫奔と亂酒と貪欲と驕慢との限りを盡した。

（八）

正德四甲午年の春が來た。

江島や宮路は山村座の初春狂言「東海道大名曾我」の噂を聞いて、大奧樣々の御祝儀も手につかぬ程浮足になつた。丁度そこへ月光院から御代參の命令が下つて、江島は正月十六日に芝三緣山の六代將軍文昭院殿御靈屋へ、宮路は正月十二日に上野東叡山の四代將軍嚴有院殿御靈屋へ、いづれも御命日より三日おくれに參詣をする事となつた。

好い折が來たと思つた江島は、直ぐと月光院を言ひくるめて、芝御代參の當日を、宮路と同じ十二日にして了つた。

「御代參が一つ日になりました。さて、見物の催しは誰に申しつけませう。」

宮路は突然江島にかう言はれて、直ぐには返事が出來なかつた。宮路は江島がもう遊樂の金子に窮してゐるのを知つてゐる。宮路は江島が如何なる催しをもう自分でする事の出來ないのを知つてゐる。江島は既にあらゆる御用達を苦しめてゐる。津賀屋も今日では城内六ヶ所までの御用を足すやうになつてゐるので、さう〳〵は江島の言ふ事を聞かなくなつた。殘る所は吳服御用達の後藤位なものであるが、これは嚴ましい御廣敷御用人が間に立つてゐるので、うつかり手はつけられぬと思つた。

「さあ、誰が宜しうございませう。」

「わたしは增上寺の別當へ申しつけようと思ひます。」

この不敵な提議には、さすが同腹中の宮路も驚いた。

「併し、お寺向きへさやうな義を。」

「惡いと言ひますか。」

宮路はもう詞を返す事が出來なかつた。

「あなたの御威光なら、芝でも否やは申すまい。」

「さうですとも。」

江島は直ぐと增上寺の役僧へ手紙を書いた。「十二日從三位月光院樣御代參の義仰せつけられ候間參詣仕候。それにつき、餘り自由がましき事には思召し候はむと察し入り候へ共、外の御馳走は御無用に遊ばされ、何卒木挽町芝居御振舞被下度候」といつたやうな文面である。

增上寺からは直ぐと返事が來た。「十二日御代參の由仰せ遣はされ委細承知致候。然るところ、木挽町芝居御振舞申候やう仰せ遣はされ候へ共、只今まで左樣なる事話傳へにも無之候に付、芝居の義決して相成り申すまじく候」といふ文面である。

江島がこの當然な返事を讀んで、身を震はして怒つて居るところへ、偶然來合せたのは、呉服所後藤縫殿之助の手代淸助であつた。

「どう遊ばしました。大層お顏の色が惡うございます。」

淸助はまだ二十三の美しい無分別者であつた。たとひ同じ御本丸にゐはゐても、呉服所の手代づれが、苟にも大奧筆頭のお年寄に向つて、親しい口などの利ける筈はないのを、江島が平氣で淸助を贔負にす

るところから、淸助の方でも江島の長局へ、御用人の目を掠めては、構はず出入りをするのであつた。

「淸助、これを見やれ。增上寺へ芝居見物を申しつけたら、こんな不禮な事を申して參つた。口惜しいではないか。」

淸助は三緣山からの返事を見た。

「お腹立ち御尤もでございます。併し、かやうな事なら、なぜ手前主人へはお申しつけになりませぬ。」

「でも、あの御用人づらめが煩さうてならぬ。」

「それはわたくしから直に主人へ申しますれば、分かる事ではございませぬ。」

淸助は主人後藤がお年寄饗應の機會を求めてゐるのを知つてゐた。後藤は茶屋一家と共に、幕府代々の吳服御用達を勤めて來てゐたが、前將軍の御臺所天英院が近衞家の出である爲に、追々京都の吳服商に大奧を蠶食されて來る樣子があるので、少しでも多く老女達の歡心を得て置きたいと思つてゐるのである。淸助はよくそれを知つてゐた。

「それではそちに任す程に、主人とも相談して萬事手落ちのないやうに。」

「畏りました。」

「芝へ參る一同と上野へ參る一同とが打揃つて行く故、人數は百人を越しますぞ。」

「畏りました。」

淸助は直ぐに吳服の間へ駈けつけて、同じ手代治郞兵衞や主人後藤と相談を濟ますと、早速木挽町の山屋へ出向いて、十二日の棧敷五十間に辨當百人前を誂へ、手附として卽金二十兩を渡した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

正月十二日が來た。

江島は朝の五つ半時に、式通りの行列を作つて、「鶴」「龜」に駕籠の兩側を守られながら、平河口の御門を出たが、もう四つ半時には増上寺の參詣を濟まして、宇田川町の大通りを、同じ行列で歩いてゐた。鈍色七條の袈裟を着た二百人の僧侶が、聲を合せて五百部の讀經をする美しい法會も、この日の江島には唯倦怠であつた。いつもは別當所の饗應に、取持の若衆を物色する江島も、この日は茶一杯に席を立つて了つた。月光院から別當初め法會列席の僧へ下される筈の金七十兩銀二貫五十目をも少しで濟まして、殘りは悉く着服して了つた。勿論、お土産の呉服物などは殆どその儘乘物をおろさなかつた。お城裝束は別當所で、手早く風流小袖に着換へて了つたのである。

柴井町、露月町、源助町を通つて、汐留橋まで來ると、江島は駕籠を降りた。ここから行列を崩して三十間堀を、歩いて木挽町へ行かうとするのである。

江島の一行が山屋へ着くと、呉服所の手代淸助と次郎兵衞は、太夫元山村長太夫と共々に、羽織袴で待ち受けてゐた。間もなく上野へ行つた宮路の一行も乘り込んで來た。宮路は和泉殿橋で行列を崩して、船で木挽町の河岸へ着いたのである。例によつて、直ぐ淸五郎夫婦が呼ばれた。交竹院が呼ばれた。白井、豐島の兄弟も招かれた。

前代未聞の豪奢な芝居見物は始まつた。山村座の東棧敷は悉く仕切りを除かれて、そこには毛氈が敷かれ、金屏風が廻らされ、釣御簾がおろされた。見物は江島、宮路、木曾路、梅山を初めとして、御內證お使番の吉川、沖津　御用人のおよの、およし、お小姓衆のおげん、おせんなどの外、末々の女中、

供廻りの諸士を併せて、百三十餘人の大一座である。

この日は特に長太夫の趣向で、早くから東西の窓蓋をおろし、日のある内から燈火をつけた。わざと夜の態にもてなしたのである。間もなく四座の役者達が、いつもの通り艶めかしく集まつて來た。一人として眞面目に芝居を見る者はなかつた。女中達の目的は舞臺を見る事ではなくて、役者に會ふ事であつた。江島と新五郎との間に艶めかしい盃の取り遣りが始まる時分には、一座に一人として酒氣を帶びぬ女はなかつた。醉ひしれた艶姿のしどけなさ。媚びを賣る野郎帽子の艶めかしさ。笑ひさゞめく高聲は、場内總ての見物に眉を顰めさせた。

醉に前後を忘れた江島は、新五郎と戯れるはずみに、思はず盃の酒を下へこぼした。その酒を頭から浴びたのは、丁度その下棧敷にゐた松平薩摩守の家中で名を谷口新平といふ侍であつた。かれは妻子の外に仲間一人を供に連れて、忍んで見物に來てゐたのである。

薩州生れの氣早な新平は、先程から上棧敷の騒がしさに腹を立ててゐたところへ、この不禮な仕打を受けたので、一圖にかつとして、思はず刀の柄へ手をかけたが、妻子の手前もあり、遊山の場所でもあるしと思つて、穩かに仲間を遣はして上棧敷へ注意を促した。

江島の供をして來てゐた御徒目附の岡本五郎右衞門は、それを聞くと大に驚いて、様々に詫びの詞を盡して仲間を返すと、直ぐこの事を江島に傳へて、「あまり騒がしくては外見物の邪魔にも成る事故、少し御遠慮あつて然るべきかと存じます」と言つた。

江島はこれを聞くと却つて腹を立てた。「何者かは知らぬが、當方の身分をも存ぜずに使を寄越すなど

とは不禮な奴ぢや。左程われらが邪魔なら、こなたより向うを追ひ返してやるまでぢや」かう言つて江島は態と燗銅壺を覆した。二三本の銚子の酒は、根太板の隙を洩れて、一度にざつと下へこぼれた。

再び總身を酒にひたされた新平は、もう我慢をしなかつた。かれは引き留める妻子を振り切つて、足音荒く上棧敷へ駈け上がつた。

五郎右衞門はこれを見ると青くなつた。場所がらもある。御法事御代參のお歸りでもある。若し珍事でも出來たら大變だと思つた。五郎右衞門はいきなり新平の前に身をひれ伏すと、先づ自分の身分と名を告げた。それから女中達の重い身分である事を告げた。そして、「唯何事も秘密の遊山故、お互に事を荒立てなば身分にも係る大事、何卒御勘辨の程、役儀を捨ててお詫び申す」と言つた。

新平は食祿八十五石の小身であつた。相手が御本丸の重い女中だと聞いては、如何に理があつても手の下しやうがなかつた。かれは公儀の役人に手をおろさせたのを、せめてもの心遣りにして、おとなしくその場を退いた。併し、かれはもう芝居を見てゐる氣がしなかつた。そこで、九つ半頃に妻子を連れて小屋を出て了つた。

江島は八つ時になると、例の忍びの戸口から、太夫元の二階へ座を移して、そこで又淫樂を盡すのであつたが、やがて七つ時にもなると、更に又山屋の二階へ移つて、供廻り總一座の饗宴を催すのであつた。

御徒目附の岡本五右工門は、始めての供ではあり、江島が餘りの大酒と亂行とに驚いて、お小人目附などとも相談の上、一刻も早く歸城を勸めようと決心したが、言ひ出す折がなくてゐる内に、もう七つ

時も大分過ぎたので、思ひ切つて其の事を言ふと、江島は忽ち腹を立てた。かの女は兎角の挨拶もしないで、猶も役者子供を呼び寄せるのであつた。

増上寺への土産だつた羽二重五疋、紅拾疋、八丈縞十二反は、役者の間に分けられた。法會の料の賄ひ殘りも、役者殘らずへの花となつた。

江島がやつと本丸へ歸つたのは、夜ももう五つ時であつた。嚴ましい平河口の御門も無事に過ぎた。月光院での遲刻の詫びも詞巧みに濟ませて了つた。

その夜は何の事もなく過ぎた。

（九）

御徒目附の岡本五郎右衛門は、明くる日になると心配で堪らなくなつた。

「俺は少くともお年寄の不興を受けてゐる。谷口新平の場合にもさうであつたし、歸城を勸めた場合にもそうであつた。若しきのふの事が表沙汰にでもなつたら、江島はどんなに俺の事を惡しざまに言ふか分からない。若しそんな事にでもなれば、俺の身は忽ち破滅だ。第一、俺は既に俺の名を薩摩の家中に知られてゐる。若し何かの事でこの事が露顯に及んだら、俺が一番に責任を負はなければならぬ。」

五郎右衛門はかう考へると、早速きのふ同列で供をしたお小人目附や供廻りの諸士を集めて寄合評議をした。きのふ供をした者には、始めて件のやうな場合に臨んだ者が多かつた。それ故、いづれも自分の身に難義のかかるのを恐れて、「これはどうしても密々に屆けて置いた方が好いといふ決議をした。

そこで、岡本五郎右衛門はお小人目附などと連名で、お目附支配頭までこの事を屆けて出た。お目附支配頭は書面を一通り見ると、「これは容易ならぬ大事になるかも知れぬ」と言つた。

お目附支配頭は更にこの事を御留守居まで屆け出た。御留守居へは「江島殿の例になき早きお歸り」について、既に增上寺からの內訴も來てゐたので、割符を合はすやうな女中達の噂に、捨て置いては公儀御條目にも背かうと、お留守居松平主計頭、松前伊豆守、大島肥前守、大久保淡路守、一位樣の用人堀丹後守、品川佐渡守、三位樣の用人安藤志摩守、阪部飛驒守などが寄り合つて合議をした上、「遂一御吟味然るべし」と老中若年寄まで訴へて出た。

老中秋元但馬守は專月光院のお附人に關する事なので、自分等の一存にもなるまいと、一應侍從の間部詮房まで屆け出た。詮房が月光院にこの事を傳へると、月光院は心中大に悲しんだが、先將軍の御臺所天英院への手前もあるので、「嚴重にお取調べ然るべし」といふ返事をした。

御徒目附の告發はやつとここまで來て受理されたのである。

老中若年寄の詮議が一通り濟んだのは二月二日であつた。その日の夕方關係の女中は悉く城を追はれた。末々の女までを合せて上下三百人である。いづれもその跡は闕所になつた。

それでも御目見江以上の重い女中には、歎願によつて町駕籠が許されたが、江島一人にはそれさへ許されなかつた。かの女は裲襠を剝ぎ取られ、白無垢の小袖一枚に徒跣足で、平河口から兩手を取つて突き出された。飯田町の兄白井方へ親類預けとなるのである。

江島は悲憤に氣も狂ふばかりであつた。かの女は髮を振り亂して、同心二人に手を取られながら、見

物の群集を罵り喚き散らしつつ、足の破れるのも知らぬやうに、薄暗い堀端をあばれて歩いた。兄の家へ到着すると、江島は直ぐに座敷牢に入れられた。

間も無く町奉行の取調べが始まつた。主任は町奉行坪内能登守、お目付衆丸茂五郎兵衛、同じく鈴木理兵衛などである。

木挽町の山村座では、初狂言の『東海道大名曾我』の評判が餘り優れないので、二月朔日から狂言をつき直して、『姬鑑薄雪櫻』といふ由井正雪丸橋忠彌の事を「薄雪」の名で仕組んだものを出してゐた。その丁度七日目の事である。生島新五郎、中村源太郎、太夫元山村長太夫の三人が、芝居から直ぐ奉行所へ引かれた。丁度狂言半ばであつたので、見物へは斷りを言つて、芝居は途中で止めて了つた。同時に中村淸五郎、茶屋海老屋も召し出された。そして、御詮議の上、新五郎、源太郎は手錠で座元長太夫へ、淸五郎は手錠で大屋五人組へ、長太夫は大屋組へ、海老屋はその町へお預けになつた。

二月十一日には山村座が興行を止めた。丁度その日に、市村座の瀧井半四郎が奉行所へ引かれて、手錠をかけられた。

二月十三日には、江島が兄の家から揚り屋へ移された。交竹院喜内淸五郎の對決があり、淸五郎新五郎の對決があつた。その結果、新五郎は評定所で繩がかりをして、牢へ入れられた。淸五郎の女房も入牢した。後藤の手代淸助、次郎兵衛も入牢した。

二月十五日には長太夫、源太郎などが入牢した。

二月十九日には團十郎が召し出されて、御詮議の上、大屋へお預けになつた。團十郎は去年山村座の

霜月顏見世狂言『磊那須兩杜』へ途中まで出たきり、長太夫と公事を仕出して、この頃はもう芝居を休んでゐた。

二月廿二日には團十郎淸五郎の對決があつたが、團十郎は又大屋へお預けにあつた。この日、淸五郎の女房は責め殺されて命をおとした。

二月廿一日にはお目付衆お係りで、江島の御詮議があつた。森田座の抱へ役者筒井歌之助、中村座の抱へ役者袖岡庄五郎、峯田妻菊、藤田小吉三、市村座の抱へ役者山下刈藻、茶屋橋屋、大黑屋などが呼び出された。そして、御詮議の上、役者は總て座へ、茶屋は町へ預けられた。團十郎も亦召し出されて、再三御詮議の上、終に「申譯相立お構無之」といふ事になつた。長太夫の父友碩も、證人として召喚された。

新五郎は木綿物に手錠で、乞食頭善七のもつかうへ載せられて、每日本町通を評定所へ通つてゐたが、終に病に冒されて、この日養生の爲出牢を許された。

この日七つ時に、堺町、葺屋町、兩座の芝居が御停止になつた。八ヶ所の宮芝居も興行を禁ぜられた。江戶中の歌舞の巷は悉く暗闇(くらやみ)となつた。

二月廿四日には、堺町の茶屋八郎兵衞、葺屋町の茶屋大黑屋が呼び出された。

二月廿五日には、喜內淸五郞の對決があつた。

二月廿六日には金井六右衞門、金丸四郎兵衞、西與一右衞門、奧山交竹院、同じく喜內などが召し出されて、御詮議の上、口書を取られた。津賀屋善六、出羽屋源七も召喚されて、御詮議の上、お預けに

なつた。

二月廿九日には封印のしてあつた江島の手道具が調べられた。その中には新五郎、半四郎などの艶めいた手帋が澤山あつた。同日、山村長太夫の家宅並に芝居とも闕所申し渡された。その時、棧敷からの忍びの道も顯れた。新五郎の宅も闕所になつた。津賀屋善六、出羽屋源七の居宅も、檢分の上、闕所となつた。

沒收された新五郎の財產の中に、葵御紋附の縮緬小袖と、三位樣御手許の御道具とがあつた事が、愈々事件を重大にした。これらはいづれも江島が新五郎へ贈り與へたものであつた。

江島は食事を一飯一合より給與されなかつた上に、夜は眠る事を許されなかつた。覺えずとろ〳〵とすれば、引き起されて、白狀を促されるのである。

併し、江島は三日目までは心が確で、一言半句も口を開かなかつた。五日六日となる內に、かの女は身心悉く疲勞して、夢うつゝの內に思はず譫言を言つた。「たとへ命は捨てゝも、生島の爲なら惜いとは思はぬ。この事は如何に責められても申すまい」といふやうな意味の事である。番をしてゐた老年の徒目附がこれを披露に及ぶと、「この上は責むるに及ばず、一兩日その儘寢かせ置くべし」といふ命令があつた。

三月四日には、白井平右衞門、豐島平八郎、原田伊右衞門、奧山交竹院、金丸四郎兵衞、西與一右門津賀屋善六、出羽屋源七などが、評定所へ呼ばれて、詮議の上、繩がかり入牢となつた。四座見物、船遊びの事なとが悉く明白したのである。

やがて、吉原の茶屋が檢分されると、葵御紋附のお長持が發見された。茶屋に聞くと、これは雜司ヶ谷鬼子母神の別當に貰つたものだと言つた。江島が金を借りた借である。長持の中には芝居役者の衣裳ばかり這入つてゐた。茶屋に聞くと、江島は常に役者を吉原へ連れて來て、芝居狂言をさせたものだと言つた。

雜司ヶ谷の別當は噂を聞いて駈落したが、直ぐ目黒邊で捕へられて了つた。江島と關係のあつた增上寺の德水院は、終に踪跡を晦まして了つた。

三月五日の朝四つ時に一同へ刑の宣告があつた。江島の受けた宣告書は次の如くである。

一、俵島流罪　　　　　お年寄　江　島

江島事段々御取立にて重き御奉公相勤多くの女中の上に立候身分にて内々其行跡正しからず使に出候折節又は宿下りいたし候度々貴賤を選ばずあしき人に近付さしたるゆかりもなき家に寢泊りいたし候中にも狂言座のものどもと念頃に馴染をかさね其身の行跡正しからず傍輩の女中をすゝめ出し御殿をみだりに相勤め候段其罪重く候といへども御慈悲を以て命をお助け被遊永く遠流に行ふもの也

江島は初め死罪にきまつてゐたのである。ところが、三月三日に諸大名上巳の登城があつたので、その晩方老中達が御機嫌伺ひとして二の丸へ伺候すると、家繼公が御對面になられた。その時幼年の將軍が老中達に向つて、「この程絕えて江島を見ぬが、かれは如何致したのぢや」と仰せられた。老中は直ぐ答へて、「かれは不調法の義ありし故、押し籠め置きました」と言つた。すると將軍が、「大抵の事なら赦して取らせい」と仰せられた。そこで老中が、「上意畏りました」と言つて退いた。これは勿論、月光院

の指嗾であつた。江島はかくして死一等を減ぜられたのである。

宮路、木曾路、梅山の三人は奉公繰組お構になつた。吉川、沖津、およの、およし、おげん、おせんなどは、御扶持方召し放され、奉公お構となつた。併し、末々の下女達の闕所になつた物品は下げられた。

白井平右衛門は死罪、平田伊右衛門は利島へ流罪、奥山交竹院は御藏島へ流罪、金井六右衛門は八丈島へ流罪、金丸四郎兵衛も同じ島へ流罪、西與一右衛門は改易、奥山喜内は死罪水戸家へお預け、後藤縫殿之助は閉門、豊島平八郎は追放重科、後藤手代清助は新島へ流罪、同じく次郎兵衛は追放、平田養子彦四郎は大島へ流罪、山村長太夫は大島へ流罪、生島新五郎は三宅島へ流罪、中村清五郎は神津島へ流罪、瀧井半四郎は十四ヶ所江戸十里四方追放、津賀屋善六出羽屋源七は三宅島へ流罪を申し渡された。

罪人の子供達は、いづれも父と同じ罪名を負うて、親類預けとなつたが、ひとり豊島平八郎の實子疋田吉才郎だけは、父へも伯母江島へも度々諫言をせし段奇特とあつて、例式の通りの遠慮で事が濟んだ。

奥山喜内はその晩直ぐ、水戸殿巣鴨下屋敷で打首になつた。

月光院は江島の遠流を悲しんで、更に一等の減刑を老中に迫つた。間もなく江島は、「其方儀先達永く遠流仰付けられ候處今度月光院様御詫に依て遠流御免被遊内藤駿河守領地へ永くお預け仰付らるゝ者也」といふ申し渡しを受けた。内藤駿河守の領地は雪の深い信州高遠である。

三月十二日の事であつた。老中から突然内藤駿河守へ使があつて、用人一人差し出せと言ふ事である。そこで家臣の城戸十兵衛を遣はすと、「江島事駿河守殿在所へ差遣はさるゝ旨」の達しがあつた。そして

猶、「同人事御預けにてはなく遠流同様の儀なれば諸事手輕く手當あるべし」といふ注意があつた。

內藤駿河守が受け取つた書附にはかう書いてあつた。

江島事永々遠流たる筈に候間在所高遠へ遣し番人附可被差置候

覺

一、かろき下女一人附置可申候

一、食物の儀一汁一菜に仕朝夕兩度の外無用に候

附湯茶は格別其外酒菓子何れにても給させ申間敷候

一、衣類木綿着物布帷子の外堅く無用に候

翌日、內藤駿河守の家來が揚り屋へ出向いて行くと、囚獄奉行石出帶刀が組同心に下知をして、腰繩の儘江島を引き渡した。その時同心が江島の懷中を改めると、珠數一連、鼻紙一折、守袋の內に法華經一卷、揶子の葉一枚、笄一本、掛香、血脈、厨子入不動の木像一體などがあつた。江島は直ぐと網のかかつた乘物へのせられて、外から錠をおろされた。

江島は駿河守の屋敷へ着くと、今まで着てゐた黃八丈の小袖を木綿中形の綿入に着換へさせられた。黑繻子の帶は茶帶に代へられた。淺黃縮緬の蒲團も奪はれた。緋紗綾の乘物蒲團も取り上げられた。そして、板圍ひに錠口をつけた長屋へ入れられた。手水鉢の柄杓には柄がなかつた。

この日八つ時に、白井平右衞門が千壽で打首になつた。

三月十五日には山村座が入札に附せられた。寬永十九年五月に山村小兵衞が始めてから七十三年の演

劇史を閉した。江戸四座の一つは、こゝに斷滅の運命を見たのである。

三月廿六日には、江島が江戸を發足した。錠をおろされた乘物で、甲州路を信州高遠へ向ふのである。護送の人數は給人一人、醫師一人、足輕五人、下女二人である。

浮世にはまたかへらめやむさしのの
　月の光のかげもはつかし

これが江島の去る時詠んだ歌であつた。

流罪の船は出發が遲れた。初め三月十八日に出る筈だつたのが、三月廿五日に延び、又それが四月二日に延び、更に又それが四月十二日に延びた。船は深川萬年橋から出るのもあり、靈岸島鐵砲洲から出るのもあつた。見物の群集は岸に溢れた。

奥山交竹院は弟子を一人連れ、衣類一荷、藥種莚包一荷の外に、金三十兩に米二十俵を携へて船に乘つた。平田伊右衛門は金三十兩に米二十俵、津賀屋善六は金三十兩に米十俵、長太夫は金三十兩に米八俵、生島新五郎は同じく金三十兩に米八俵、中村淸五郎は金壹兩に米一俵を携へて船に乘つた。

流人の船は品川沖で一晝夜逗留した。賄賂を受けた船役人が、罪人の親戚知己に暇乞を惜しませる爲である。團十郎は新五郎の病みほうけた手を取つて泣いた。友硯は一晩氣違ひのやうに長太夫を抱きしめて放さなかつた。

十二日の晩、金川沖まで來ると、船は又そこで一日一夜逗留した。新五郎は又船の中で病氣になつた。江島は四月朔日に信州高遠へ着いた。そして、領分内の非村へ置かれた。

流罪の船は四月十七日にそれ〳〵指定の島へ着いた。

四月十九日から、やつと江戸三座の興行が許された。併し、棧敷に二階三階を置く事はもう許されなかつた。役者の棧敷茶屋などへ挨拶に來る事も禁ぜられた。舞臺の衣裳も絹紬木綿に限られた。狂言も七つ半時分には是非しまはなければならなかつた。

寺社地芝居は悉く取り潰された。芝神明の二座、湯島天神の二座、神田明神の二座、市ヶ谷八幡の二座、牛込赤城の一座、淺草の三座、西久保土器町觀音の一座、同町八幡の一座、併せて十三座である。

長太夫の父友碩は、日夜山村座の復興を願つて、頻に老體を奔走したが、さうかうする內賴みにする町奉行丹波遠江守にも「お役上がり」になられて了つたので、京橋の湯屋もしまひ、雇人にも悉く暇を出して、一人寂しく麻布の奥へ隱れて了つた。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區尾張町	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　北區東梅田町	宮内立盛堂
京都市七條停車場前	三共社
仝	藤村梅松堂

〇定價　金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	内國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號其他一切附錄號臨時號に拘らず[illegible]の代金を申請く[illegible]し、即ち一ヶ年通計十七冊分の割合なれば[illegible]分御拂[illegible]の方は[illegible]海外國は金五圓九拾五錢の割となる

送金注意

一誌代郵税　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替　にて御送金の場合は指定を本郷區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし

一振替貯金　口座は東京三十四番なり

一郵券代用　必ず一割増の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

　一金一圓迄　金六錢（集金委託料）
　一金五圓迄　金七錢（及送料共）

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正四年十二月廿四日印刷納本
大正五年一月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高本[illegible]三

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地
中央公論社
電話小石川一九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン